

京都府遺跡調査概報

第108冊

1. 木橋北遺跡
2. 新堂池古墳群第2次
3. 池上遺跡第12次
4. 国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡
 - (1) 案察使遺跡第4次
 - (2) 大淵遺跡第4次

2 0 0 3

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



(1) S D526遺物出土状況(西から)



(2) S D526出土遺物



(1)案察使遺跡第 4 次調査 土坑群(北から)



(2)大淵遺跡第 4 次調査 竪穴式住居跡 S H04(北東から)

序

京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、発掘調査については、その内容を出来るだけ早く公表する必要がありますが、当センターでは、それに対応するために3種の刊行物を刊行しております。すなわち、発掘調査の速報と職員の論考等を『京都府埋蔵文化財情報』によって、発掘調査成果の概要報告を『京都府遺跡調査概報』によって公表しております。そして、特に著しい成果のあったものについては、『京都府遺跡調査報告書』を刊行しております。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成13・14年度に実施した発掘調査のうち、京都府土木建築部、緑資源公団西部支社、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて行った木橋北城跡、新堂池古墳群第2次、池上遺跡第12次、国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、弥栄町教育委員会、園部町教育委員会、八木町教育委員会、亀岡市教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成15年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 樋 口 隆 康

凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

- | | |
|-------------|-------------------------|
| 1. 木橋北城跡 | 2. 新堂池古墳群第2次 |
| 3. 池上遺跡第12次 | 4. 国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡 |

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および概要の執筆者は下表のとおりである。

	遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1.	木橋北遺跡	竹野郡弥栄町大字 木橋小字千原崎	平14.9.12～11.21	京都府土木建築部	石尾政信
2.	新堂池古墳群第2次	船井郡園部町大字 新堂小字天野	平14.8.19～平15.1.30	緑資源公団西部支社	竹原一彦 小池 寛
3.	池上遺跡第12次	船井郡八木町池上	平13.10.24～平14.2.27	緑資源公団西部支社	中川和哉
4.	国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡			農林水産省近畿農政局	
	案察使遺跡第4次	亀岡市保津町山田	平13.11.26～平14.3.7		福島孝行 石尾政信
	大淵遺跡第4次	亀岡市保津町ホク ソ田・堂ノ前	平14.7.2～平15.3.7		戸原和人

3. 本書で使用している座標は、国土座標第6座標系によっており、方位は座標の北をさす。
また、国土地理院発行地形図の方位は経度の真北をさす。
4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当った。なお、遺物の写真撮影は、同資料係主任調査員田中彰が行った。

本文目次

1. 木橋北城跡-----	1
2. 新堂池古墳群第2次-----	11
3. 池上遺跡第12次-----	31
4. 国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡-----	135

付表目次

3. 池上遺跡第12次	
付表1 池上遺跡調査一覧表-----	35
付表2 亀岡盆地内の弥生時代遺跡の動態-----	128
4. 国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡	
(1)案察使遺跡第4次	
付表3 第1トレンチ土坑観察表-----	167

挿図目次

1. 木橋北城跡	
第1図 調査地および周辺遺跡分布図-----	2
第2図 調査地地形測量図-----	3
第3図 遺構平面図-----	4
第4図 土層断面図-----	5
第5図 竪穴式住居跡SH01実測図-----	6
第6図 掘立柱建物跡SB02実測図-----	7
第7図 出土遺物実測図-----	8
第8図 出土古銭拓影-----	9
2. 新堂池古墳群第2次	
第9図 調査地および周辺遺跡分布図-----	12

第10図	調査対象古墳位置図-----	13
第11図	1号墳実測図-----	14
第12図	1号墳墳丘横断面図-----	15
第13図	1号墳石室実測図-----	16
第14図	1号墳玄室内遺物出土状況図-----	17
第15図	1号墳玄室内出土土器実測図-----	18
第16図	2号墳実測図-----	20
第17図	2号墳墳丘横断面図-----	21
第18図	2号墳石室実測図-----	22
第19図	2号墳玄室内遺物出土状況図-----	23
第20図	2号墳玄室内・3号墳出土遺物実測図-----	24
第21図	3号墳実測図-----	25
第22図	3号墳第1主体部・第2主体部実測図-----	26
第23図	6号墳墳丘および埋葬主体部実測図-----	28
第24図	6号墳主体部出土遺物実測図-----	29

3. 池上遺跡第12次

第25図	調査地および周辺遺跡分布図-----	32
第26図	調査トレンチ配置図-----	34
第27図	第12次調査および周辺調査区遺構平面図-----	36
第28図	第12次調査遺構平面図-----	37
第29図	竪穴式住居跡 S H721平面図-----	38
第30図	溝断面図(1)-----	40
第31図	溝断面図(2)-----	41
第32図	溝断面図(3)-----	42
第33図	溝断面図(4)-----	43
第34図	方形周溝墓主体部実測図(1)-----	44
第35図	方形周溝墓主体部実測図(2)-----	45
第36図	方形周溝墓主体部実測図(3)-----	47
第37図	方形周溝墓主体部実測図(4)-----	48
第38図	方形周溝墓主体部実測図(5)-----	50
第39図	方形周溝墓主体部実測図(6)-----	51
第40図	方形周溝墓主体部実測図(7)-----	53
第41図	方形周溝墓主体部実測図(8)-----	54
第42図	方形周溝墓主体部実測図(9)-----	56
第43図	方形周溝墓主体部実測図(10)-----	57

第44図	方形周溝墓主体部実測図(11)-----	59
第45図	方形周溝墓主体部実測図(12)-----	61
第46図	方形周溝墓主体部実測図(13)-----	62
第47図	方形周溝墓溝内遺物出土状況図-----	63
第48図	古墳時代掘立柱建物跡実測図(1)-----	65
第49図	古墳時代掘立柱建物跡実測図(2)-----	66
第50図	古墳時代竪穴式住居跡実測図(1)-----	67
第51図	古墳時代竪穴式住居跡実測図(2)-----	68
第52図	古墳時代竪穴式住居跡実測図(3)-----	69
第53図	古墳時代竪穴式住居跡実測図(4)-----	70
第54図	古墳時代竪穴式住居跡実測図(5)-----	71
第55図	古墳時代竪穴式住居跡実測図(6)-----	72
第56図	古墳時代土坑実測図-----	74
第57図	奈良時代掘立柱建物跡 S B 505 実測図-----	75
第58図	平安時代土坑実測図-----	76
第59図	弥生時代土器実測図(1)-----	78
第60図	弥生時代土器実測図(2)-----	80
第61図	弥生時代土器実測図(3)-----	81
第62図	弥生時代土器実測図(4)-----	82
第63図	弥生時代土器実測図(5)-----	83
第64図	弥生時代土器実測図(6)-----	84
第65図	弥生時代土器実測図(7)-----	85
第66図	弥生時代土器実測図(8)-----	87
第67図	弥生時代土器実測図(9)-----	88
第68図	弥生時代土器実測図(10)-----	89
第69図	弥生時代土器実測図(11)-----	90
第70図	弥生時代土器実測図(12)-----	91
第71図	弥生時代土器実測図(13)-----	92
第72図	弥生時代土器実測図(14)-----	94
第73図	弥生時代土器実測図(15)-----	95
第74図	弥生時代土器実測図(16)-----	96
第75図	弥生時代土器実測図(17)-----	97
第76図	弥生時代土器実測図(18)-----	99
第77図	弥生時代土器実測図(19)-----	100
第78図	弥生時代土器実測図(20)-----	101

第79図	弥生時代土器実測図(21)-----	102
第80図	弥生時代土器実測図(22)-----	104
第81図	弥生時代土器実測図(23)-----	105
第82図	出土石器実測図(1)-----	107
第83図	出土石器実測図(2)-----	109
第84図	出土石器実測図(3)-----	110
第85図	出土石器実測図(4)-----	111
第86図	出土石器実測図(5)-----	113
第87図	出土石器実測図(6)-----	114
第88図	出土石器実測図(7)-----	115
第89図	玉作り関連遺物および滑石製品実測図-----	116
第90図	古墳時代土器実測図(1)-----	118
第91図	古墳時代土器実測図(2)-----	119
第92図	古墳時代土器実測図(3)-----	120
第93図	古墳時代土器実測図(4)-----	121
第94図	古墳時代土器実測図(5)-----	122
第95図	出土鉄器・土製品実測図-----	123
第96図	奈良時代土器実測図(1)-----	124
第97図	奈良時代土器実測図(2)-----	125
第98図	平安時代土器実測図-----	126
第99図	亀岡盆地内の弥生時代遺跡分布図-----	127
第100図	吉富荘絵図トレース図-----	131

4. 国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡

第101図	調査地および周辺弥生遺跡分布図-----	136
-------	----------------------	-----

(1) 案察使遺跡第4次

第102図	トレンチ配置図-----	138
第103図	第1トレンチ土層断面図(1)-----	139
第104図	第1トレンチ土層断面置(2)-----	140
第105図	第1トレンチ遺構配置図-----	141
第106図	第1トレンチ各遺構平・断面図(1)-----	142
第107図	第1トレンチ各遺構平・断面図(2)-----	144
第108図	第1トレンチ各遺構平・断面図(3)-----	146
第109図	第1トレンチ各遺構平・断面図(4)-----	148
第110図	第1トレンチ各遺構平・断面図(5)-----	150
第111図	第1トレンチ各遺構平・断面図(6)-----	151

第112図	第1トレンチ各遺構平・断面図(7)-----	152
第113図	第1トレンチ出土遺物実測図(1)-----	155
第114図	第1トレンチ出土遺物実測図(2)-----	156
第115図	第1トレンチ出土遺物実測図(3)-----	157
第116図	第1トレンチ出土遺物実測図(4)-----	158
第117図	第1トレンチ出土遺物実測図(5)-----	159
第118図	第1トレンチ出土遺物実測図(6)-----	160
第119図	第1トレンチ包含層出土遺物実測図(1)-----	160
第120図	第2トレンチ南壁土層断面図-----	161
第121図	第2トレンチ遺構配置図-----	161
第122図	第2トレンチ出土遺物実測図-----	161
(2)大淵遺跡第4次		
第123図	トレンチ配置図-----	192
第124図	C・D地区検出遺構実測図-----	193
第125図	竪穴式住居跡S H50・04実測図-----	195
第126図	甕棺墓S X01実測図-----	197
第127図	出土遺物実測図-----	198

図 版 目 次

1. 木橋北城跡

図版第1	(1)調査前風景(南から)	(2)調査地遠景(南西から)
	(3)3トレンチ全景(西から)	
図版第2	(1)1トレンチ調査前(北西から)	(2)1トレンチ全景(北西から)
	(3)掘立柱建物跡S B02(南から)	
図版第3	(1)2トレンチ調査前(北西から)	
	(2)2トレンチ南北断ち割り西壁断面(北東から)	
	(3)2トレンチ南北断ち割り西壁断面(東から)	
図版第4	(1)2トレンチ全景(北西から)	(2)竪穴式住居跡S H01(北から)
	(3)竪穴式住居跡S H01(東から)	
図版第5	(1)竪穴式住居跡S H01西側周壁溝断面(南から)	
	(2)竪穴式住居跡S H01東側周壁溝断面(南から)	
	(3)竪穴式住居跡S H01柱穴1半割状況(南から)	

図版第6 出土遺物

2. 新堂池古墳群第2次

- 図版第7 (1)新堂池古墳群所在丘陵(東から) (2)1号墳全景(右下が北)
(3)1号墳墳丘全景(北東から)
- 図版第8 (1)1号墳石室全景(右下が北) (2)1号墳玄室追葬面全景(北西から)
(3)1号墳玄室追葬面土器群(南西から)
- 図版第9 (1)1号墳初葬面全景(北西から) (2)1号墳玄門右片袖部(北東から)
(3)1号墳墳丘北東部断面(北から)
- 図版第10 (1)1号墳玄室左袖部初葬面土器群(北西から)
(2)1号墳玄室西隅初葬面鉄鏃群(南東から)
(3)1号墳玄室初葬面練り玉
- 図版第11 (1)2号墳全景(右下が北) (2)2号墳玄室追葬面全景(南西から)
(3)2号墳玄室追葬面土器転用枕(南西から)
- 図版第12 (1)2号墳石室初葬面全景(右下が北) (2)2号墳玄室初葬面全景(南西から)
(3)2号墳玄室右袖土器群(南西から)
- 図版第13 (1)3号墳全景(左上が北) (2)3号墳全景(北西から)
(3)3号墳第1主体部(左)・第2主体部(南西から)
- 図版第14 (1)3号墳第1主体部(北西から) (2)3号墳第1主体部(北東から)
(3)3号墳第1主体部棺掘形断面(北東から)
- 図版第15 (1)3号墳第2主体部(北西から)
(2)3号墳第2主体部北東小口部鉄鏃群(南東から)
(3)3号墳第2主体部南西小口部鉄器群(南東から)
- 図版第16 (1)6号墳全景(右下が北) (2)6号墳主体部(北西から)
(3)6号墳主体部東部鉄製品出土状況(北西から)
- 図版第17 1・2・6号墳出土須恵器
- 図版第18 6号墳主体部出土鉄製品

3. 池上遺跡第12次

- 図版第19 (1)調査地遠景(東から) (2)調査地全景(上が西)
- 図版第20 (1)調査区全景(西から) (2)調査区全景(東から)
- 図版第21 (1)方形周溝墓S T 704(南から) (2)方形周溝墓S T 704(北から)
- 図版第22 (1)溝S D 647(西から) (2)方形周溝墓S T 705(南西から)
- 図版第23 (1)方形周溝墓S T 705(南から) (2)方形周溝墓S T 705(南西から)
- 図版第24 (1)土壙S K 587(南から) (2)土壙S K 662・663(南西から)
- 図版第25 (1)溝S D 640、土壙S K 642・656・657(南西から)
(2)方形周溝墓S T 707(南西から)

図版第26	(1) 方形周溝墓 S T 707 (南東から)	(2) 方形周溝墓 S T 707・708 (南東から)
図版第27	(1) 土壙 S K 551・552・624・625 (南東から)	
	(2) 土壙 S K 625 (北東から)	
図版第28	(1) 方形周溝墓 S T 709 調査風景 (南東から)	
	(2) 方形周溝墓 S T 709 (南東から)	
図版第29	(1) 土壙 S K 547 (北東から)	(2) 土壙 S K 547 完掘状況 (北東から)
図版第30	(1) 土壙 S K 617 (北西から)	(2) 土壙 S K 584 (北から)
図版第31	(1) 土壙 S K 548 (北西から)	(2) 土壙 S K 576 (北東から)
図版第32	(1) 土壙 S K 544・616 (北西から)	(2) 土壙 S K 544・621・616 (南東から)
図版第33	(1) 土壙 S K 615 (北東から)	(2) 土壙 S K 414 (東から)
図版第34	(1) 土壙 S K 413 (東から)	(2) 土壙 S K 599・600・608 (北西から)
図版第35	(1) 方形周溝墓 S T 713 (西から)	(2) 土壙 S K 599 (北西から)
図版第36	(1) 土壙 S K 607 (北東から)	(2) 土壙 S K 698 (西から)
図版第37	(1) 土壙 S K 595 (西から)	(2) 土壙 S K 597 (南西から)
図版第38	(1) 土壙 S K 603 (北から)	(2) 土壙 S K 604 (西から)
図版第39	(1) 方形周溝墓 S T 715 (南西から)	(2) 土壙 S K 531 (東から)
図版第40	(1) 土壙 S K 560 (南東から)	(2) 土壙 S K 559 (北東から)
図版第41	(1) 土壙 S K 639 断面 (南から)	(2) 土壙 S K 589 (東から)
図版第42	(1) 溝 S D 01・526 (南西から)	(2) 溝 S D 526 遺物出土状況 (南から)
図版第43	(1) 溝 S D 526 遺物出土状況 (西から)	(2) 土壙 S K 665 (南東から)
	(3) 溝 S D 567 遺物出土状況 (南東から)	
図版第44	(1) 溝 S D 553 遺物出土状況 (西から)	(2) 溝 S D 553 遺物出土状況 (北東から)
	(3) 溝 S D 549 遺物出土状況 (北西から)	
図版第45	(1) 溝 S D 525 遺物出土状況 (東から)	(2) 溝 S D 543 遺物出土状況 (南東から)
	(3) 溝 S D 525 上面遺物出土状況 (北から)	
図版第46	(1) 溝 S D 635 断面 (南から)	(2) 溝 S D 649 断面 (西から)
	(3) 溝 S D 640 断面 (北から)	
図版第47	(1) 溝 S D 640 断面 (北から)	(2) 溝 S D 564 断面 (北東から)
	(3) 溝 S D 564 断面 (南西から)	
図版第48	(1) 溝 S D 553 断面 (北西から)	(2) 溝 S D 543 断面 (北東から)
	(3) 溝 S D 553 断面 (北西から)	
図版第49	(1) 溝 S D 579 断面 (南西から)	(2) 溝 S D 545 断面 (南東から)
	(3) 溝 S D 545 断面 (北西から)	
図版第50	(1) 溝 S D 01 (東から)	(2) 溝 S D 01・541 断面 (北東から)
	(3) 溝 S D 526 A・B 断面 (北西から)	

- | | | |
|-------|--|--------------------------|
| 図版第51 | (1)掘立柱建物跡 S B 508(南から) | (2)掘立柱建物跡 S B 512(南東から) |
| 図版第52 | (1)掘立柱建物跡 S B 511(北西から) | (2)掘立柱建物跡 S B 509(東から) |
| 図版第53 | (1)竪穴式住居跡 S H 522(北東から) | |
| | (2)竪穴式住居跡 S H 522遺物出土状況(南から) | |
| 図版第54 | (1)竪穴式住居跡 S H 522遺物出土状況(南から) | |
| | (2)竪穴式住居跡 S H 521(北東から) | |
| 図版第55 | (1)竪穴式住居跡 S H 517(北西から) | (2)竪穴式住居跡 S H 516(北から) |
| 図版第56 | (1)竪穴式住居跡 S H 506・512・529(南から) | |
| | (2)竪穴式住居跡 S H 501(南から) | |
| 図版第57 | (1)竪穴式住居跡 S H 502・518(南西から) | |
| | (2)竪穴式住居跡 S H 502・518(北東から) | |
| 図版第58 | (1)竪穴式住居跡 S H 507・513・539・540・562(東から) | |
| | (2)竪穴式住居跡 S H 513(南西から) | |
| 図版第59 | (1)拡張区検出遺構竪穴式住居跡 S H 540(西から) | |
| | (2)竪穴式住居跡 S H 504(東から) | |
| 図版第60 | (1)竪穴式住居跡 S H 504内土坑遺物出土状況(南から) | |
| | (2)調査区北東部(南東から) | |
| 図版第61 | (1)竪穴式住居跡 S H 503(南西から) | (2)竪穴式住居跡 S H 503竈(南東から) |
| 図版第62 | (1)土坑 S K 563(西から) | (2)土坑 S K 527(西から) |
| | (3)土坑 S K 515(西から) | |
| 図版第63 | (1)土坑 S K 515断面(東から) | (2)土坑 S K 590(西から) |
| | (3)土坑 S K 726(北西から) | |
| 図版第64 | (1)土坑 S K 535(西から) | (2)掘立柱建物跡 S B 505(西から) |
| 図版第65 | (1)土坑 S K 572・585(東から) | (2)土坑 S K 151(東から) |
| | (3)調査風景(西から) | |
| 図版第66 | 出土遺物(1) | |
| 図版第67 | 出土遺物(2) | |
| 図版第68 | 出土遺物(3) | |
| 図版第69 | 出土遺物(4) | |
| 図版第70 | 出土遺物(5) | |
| 図版第71 | 出土遺物(6) | |
| 図版第72 | 出土遺物(7) | |
| 図版第73 | 出土遺物(8) | |
| 図版第74 | 出土遺物(9) | |
| 図版第75 | 出土遺物(10) | |

図版第76	(1)出土石器(1)	(2)出土石器(2)
図版第77	(1)出土石器(3)	(2)出土石器(4)
図版第78	(1)出土石器(5)	(2)出土石器(6)

4. 国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡

(1) 案察使遺跡第4次

図版第79	(1)調査地全景(西から) (3)第1トレンチ全景(上が北)	(2)調査地全景(北から)
図版第80	(1)第1トレンチ北半遺構検出状況(東から) (2)土坑S K33(南から)	(3)土坑S K38-1(東から)
図版第81	(1)土坑S K38-2(東から) (3)土坑S K46-2(北東から)	(2)土坑S K46-1(北東から)
図版第82	(1)土坑S K56(北東から) (3)土坑S K76-1(東から)	(2)土坑S K72(西から)
図版第83	(1)土坑S K76-2(西から) (3)土坑S K79(南から)	(2)土坑S K76下層(南から)
図版第84	(1)土坑S K82(北西から) (3)土坑S K83-2(北西から)	(2)土坑S K83-1(北西から)
図版第85	(1)土坑S K88-1(西から) (3)土坑S K92(南西から)	(2)土坑S K88-2(西から)
図版第86	(1)土坑S K98-1(上が西) (3)土坑S K99-1(南から)	(2)土坑S K98-2(東から)
図版第87	(1)土坑S K99-2(南から) (3)土坑S K100-2(南西から)	(2)土坑S K100-1(南西から)
図版第88	(1)土坑S K100(上)・92(下)(南から) (3)土坑S K108(東から)	(2)土坑S K101(南から)
図版第89	(1)土坑S K115(北東から) (3)土坑S K129(東から)	(2)土坑S K127(北東から)
図版第90	(1)土坑S K136-1(南から) (3)土坑S K137(南から)	(2)土坑S K136-2(西から)
図版第91	(1)土坑S K143(東から) (3)土坑S K150-1(南西から)	(2)土坑S K143編み籠出土状況(東から)
図版第92	(1)土坑S K150-2(北東から) (3)土坑S K158(上)・169(下)(西から)	(2)土坑S K158(上)・169(下)(西から)
図版第93	(1)土坑S K167(南西から) (3)土坑S K176-2(北東から)	(2)土坑S K176-1(南西から)

- 図版第94 (1)土坑 S K176-3(北西から) (2)土坑 S K273(南から)
(3)土坑 S K395(南東から)
- 図版第95 (1)土坑 S K805(西から) (2)土坑 S K806(西から)
(3)土坑 S K835(東から)
- 図版第96 (1)第2トレンチ全景(北から) (2)第2トレンチ全景(西から)
(3)第2トレンチ石列(西から)
- 図版第97 出土遺物(1)
- 図版第98 出土遺物(2)
- 図版第99 出土遺物(3)
- 図版第100 出土遺物(4)
- 図版第101 出土遺物(5)

(2)大淵遺跡第4次

- 図版第102 (1)調査地全景(東から) (2)C地区全景(南から)
(3)C地区 竪穴式住居跡 S H50(西から)
- 図版第103 (1)竪穴式住居跡 S H50北西部(東から)
(2)竪穴式住居跡 S H50南西部(北から)
(3)竪穴式住居跡 S H50鉄器出土状況(上が北)
- 図版第104 (1)D地区全景(上が北) (2)溝 S D02断面(北東から)
(3)溝 S D02土器出土状況(1)(南東から)
- 図版第105 (1)溝 S D02土器出土状況(2)(南東から)
(2)溝 S D02土器出土状況(3)(東から)
(3)溝 S D02土器出土状況(4)(北東から)
- 図版第106 (1)橋状遺構 S X09(南東から) (2)橋状遺構 S X10(南東から)
(3)橋状遺構 S X11(南東から)
- 図版第107 (1)橋状遺構 S X12(南東から) (2)橋状遺構 S X13(南東から)
(3)橋状遺構 S X14(南東から)
- 図版第108 (1)橋状遺構 S X15(南東から) (2)橋状遺構 S X16(南東から)
(3)橋状遺構 S X17(南東から)
- 図版第109 (1)橋状遺構 S X18(南東から) (2)橋状遺構 S X19(南東から)
(3)橋状遺構 S X20(南東から)
- 図版第110 (1)橋状遺構 S X21(南東から) (2)橋状遺構 S X22(南東から)
(3)橋状遺構 S X23(南東から)
- 図版第111 (1)橋状遺構 S X24(南東から) (2)橋状遺構 S X25(南東から)
(3)掘立柱建物跡 S B05(上が北)
- 図版第112 (1)竪穴式住居跡 S H04(1)(上が北西) (2)竪穴式住居跡 S H04(2)(北東から)

- (3) 竪穴式住居跡 S H04 (3) (北東から)
- 図版第113 (1) 溝 S D03 (北西から) (2) 甕棺墓 S X01 (1) (南から)
 (3) 甕棺墓 S X01 (2) (南から)
- 図版第114 出土遺物 (1)
- 図版第115 出土遺物 (2)
- 図版第116 (1) 出土遺物 (3) (2) 出土遺物 (4)

1. 木橋北城跡発掘調査概要

1. はじめに

今回の調査は、府道網野岩滝線道路改良2事業に伴うもので、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。

調査対象地は、京都府竹野郡弥栄町大字木橋小字千原崎730ほかで、木橋北城跡の南端部分が道路予定地内に含まれるため、その部分を対象として発掘調査を実施した。

現地調査は、調査第2課調査第1係長石井清司、同第1係専門調査員石尾政信が担当した。調査期間は、平成14年9月12日から11月21日で、調査面積は約400㎡である。なお、発掘調査に係る経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。

調査にあたっては、京都府教育委員会・京都府立丹後郷土資料館・京都府峰山土木事務所・弥栄町教育委員会のほか、木橋地区・鳥取地区自治会などの援助・協力があった。また、現地調査・整理作業には、弥栄町の方々の協力があった。記して感謝したい。

2. 位置と環境

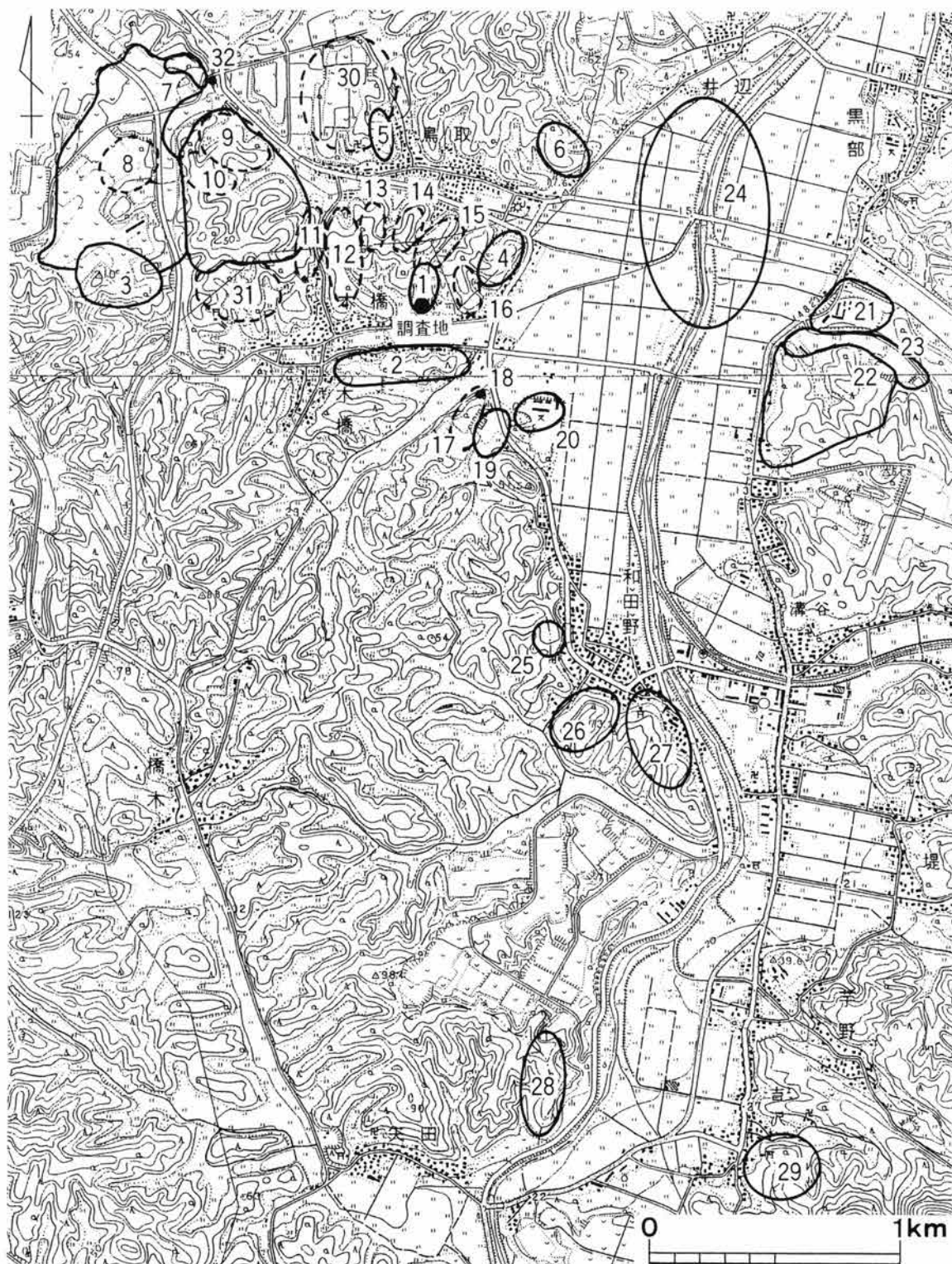
木橋北城跡の所在する木橋地区は、弥栄町の水田地帯に隣接する、丘陵と谷地形が錯綜した地域に形成された集落である。ふたつの谷に挟まれた丘陵に木橋城跡があり、北側の谷を挟んで向かい合った丘陵に木橋北城跡がある。木橋城跡の西方の丘陵上には、木橋西城跡がある。木橋北城跡の所在する丘陵の先端(東端)には、鳥取城跡がある。

木橋北城跡の周辺には、北西約1.2kmに、舟形埴輪や三角板革綴短甲が出土したニゴレ古墳、製鉄遺跡として著名な遠所遺跡(府史跡)・遠所遺跡群・遠所古墳群があり、木橋北城跡の所在する丘陵には、製鉄遺跡のニゴレ遺跡や鳥取古墳群、鳥取峠古墳群、谷奥古墳群、行者山古墳群など多数の古墳群が集中している。

平野部(水田地帯)の対岸には、弥生～古墳時代の集落遺跡である奈具遺跡、弥生時代の玉造り遺跡として著名な奈具岡遺跡・奈具谷遺跡が、南の丘陵には、弥生時代中期の竪穴式住居跡が検出されたオテジ谷遺跡や坂野遺跡・坂野丘遺跡などがあり、木橋北城跡の周辺は、遺跡の密集する地域である。

3. 調査の概要

木橋北城跡が立地する丘陵先端部には、南北方向に広い2か所の平坦地が並び、南側平坦地は標高34～35mで、その規模は約20×40m、前後が隅丸形状を呈している。その南側には約12×15mの規模で台形状を呈した平坦地があり、これより下位に狭い削平地が数段みられる。調査は

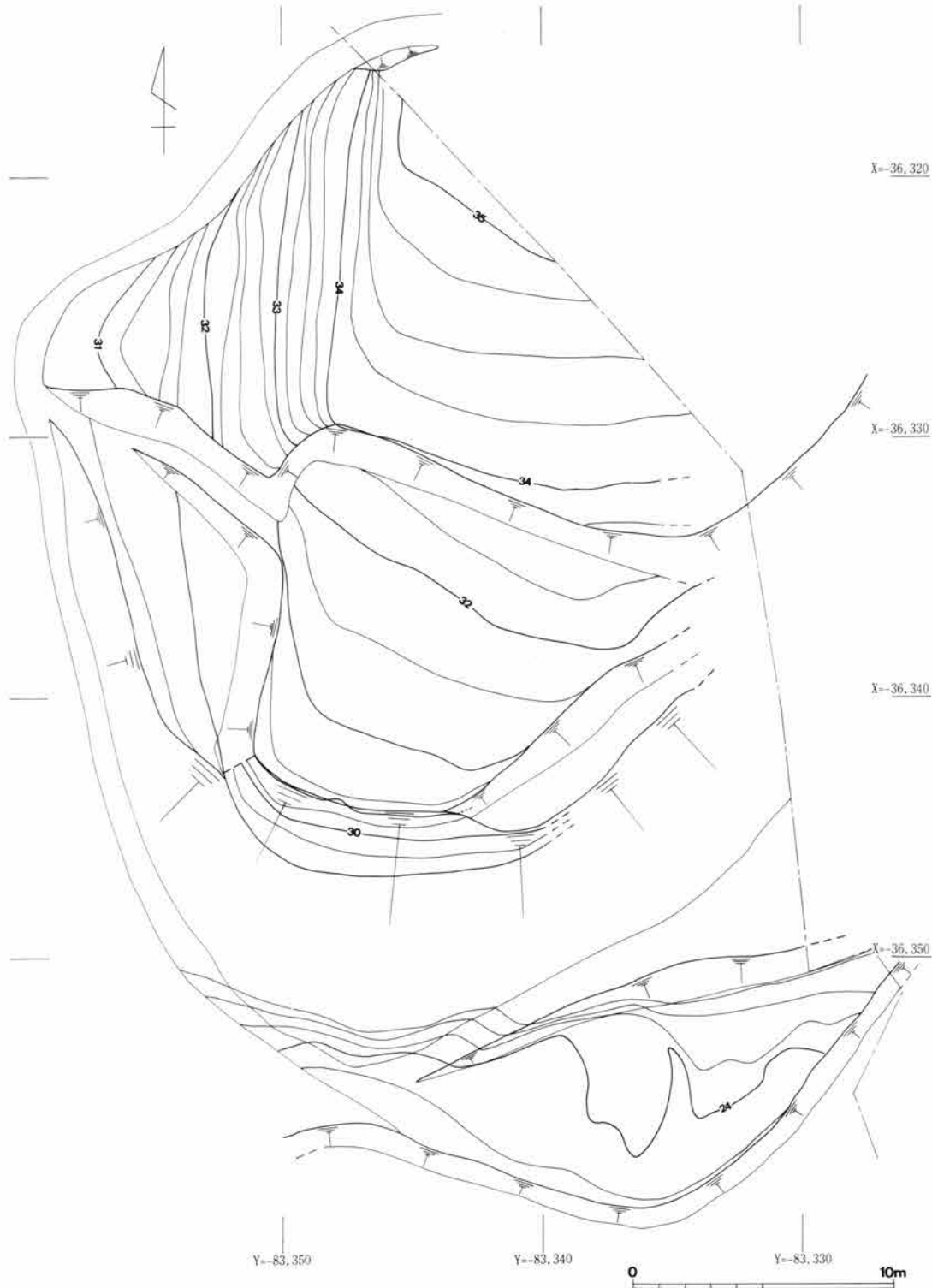


第1図 調査地および周辺遺跡分布図(国土地理院 1/25,000網野・峰山)

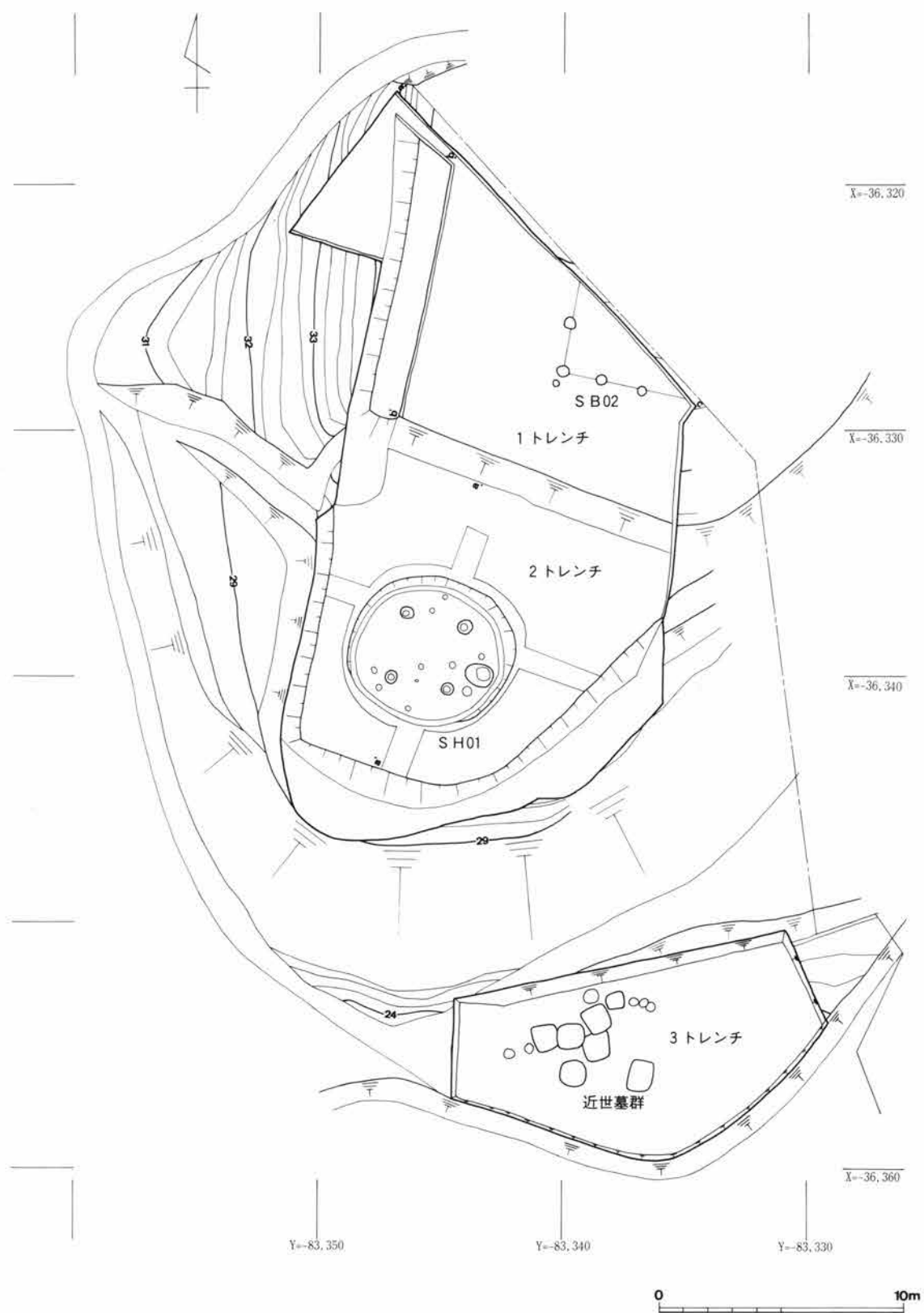
- | | | | | |
|------------|-------------|------------|-----------|------------|
| 1. 木橋北城跡 | 2. 木橋城跡 | 3. 木橋西城跡 | 4. 鳥取城跡 | 5. 宮ノ森城跡 |
| 6. ユリカ山城跡 | 7. 遠所遺跡 | 8. 遠所古墳群 | 9. 鳥取古墳群 | 10. 桐谷古墳群 |
| 11. 鳥取峠古墳群 | 12. 谷奥古墳群 | 13. 黒国古墳群 | 14. 柳谷古墳群 | 15. 留主田古墳群 |
| 16. 堤谷古墳群 | 17. オテジ谷古墳群 | 18. オテジ谷遺跡 | 19. 坂野遺跡 | 20. 坂野丘遺跡 |
| 21. 奈具遺跡 | 22. 奈具岡遺跡 | 23. 奈具谷遺跡 | 24. 鳥取橋遺跡 | 25. 和田野城跡 |
| 26. 和田野別城跡 | 27. 和田野東城跡 | 28. 矢田城跡 | 29. 吉沢城跡 | 30. 宮ノ森古墳群 |
| 31. 行者山古墳群 | 32. ニゴレ古墳 | | | |

上位平坦地の南端(1トレンチ)と台形状平坦地(2トレンチ)、それらより下位の削平地(3トレンチ)で各トレンチを設定し、調査を実施した。いずれのトレンチにも調査前の形状では耕作に伴う畝・溝が観察できた。調査は、表土以下を順次、人力で掘削し、遺構の検出作業を行った。

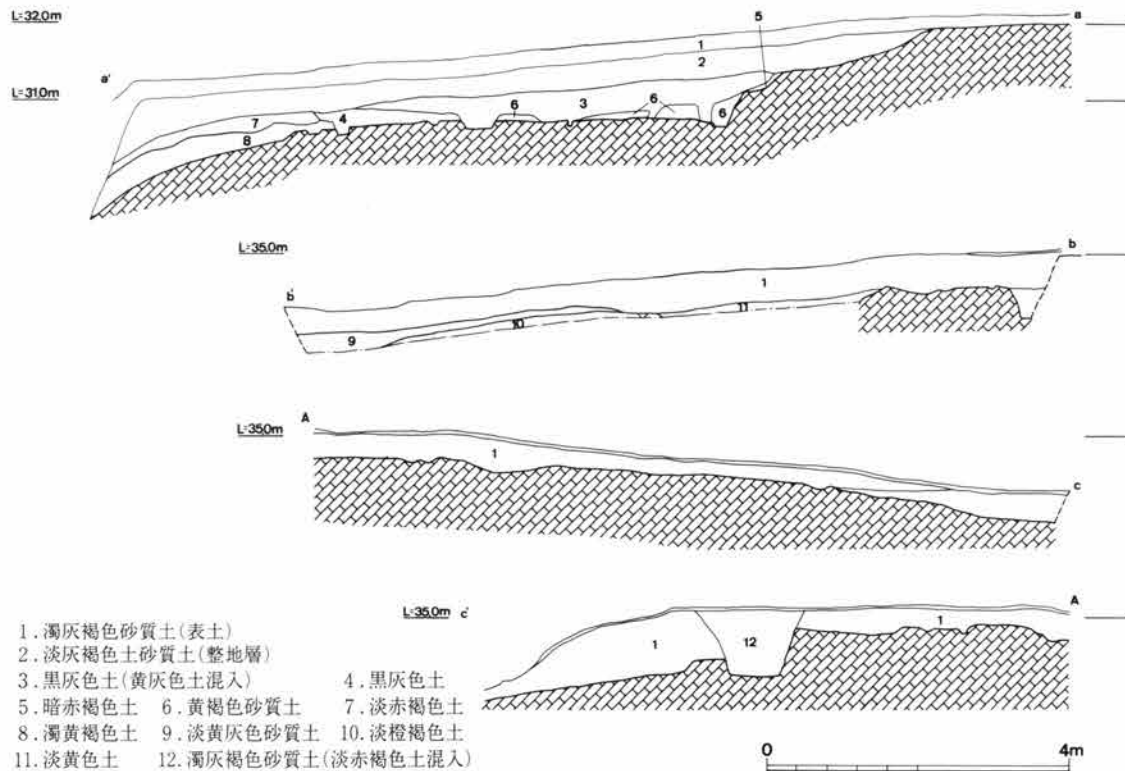
1トレンチは、表土下20cm前後で黄褐色系の花崗岩風化土(地山)となる。地山面で掘立柱建物跡(S B 02)と推定される柱穴跡を4か所検出した。掘立柱建物跡S B 02は、調査地外に広がる可



第2図 調査地地形測量図



第3図 遺構平面図



第4図 土層断面図

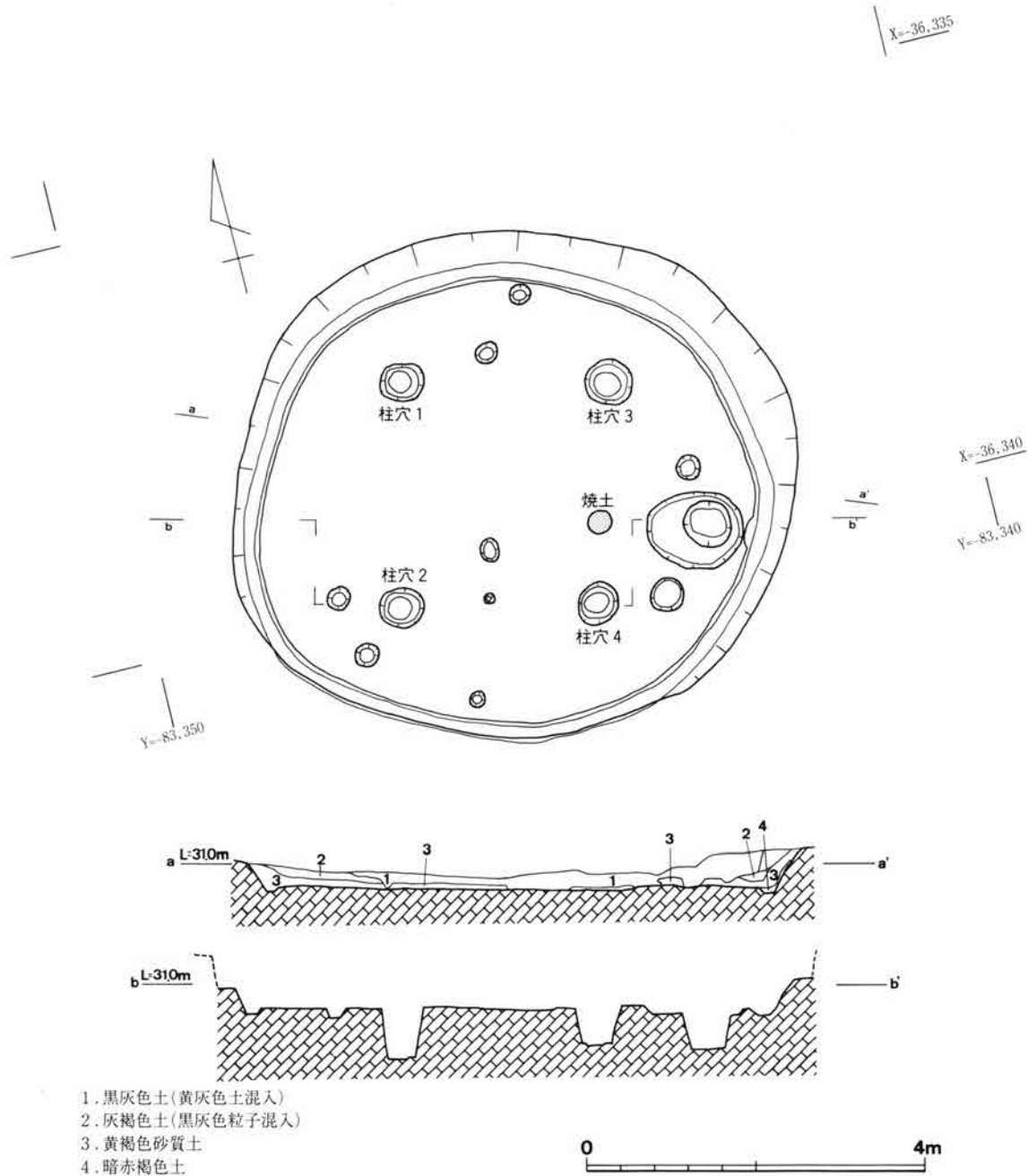
能性があり、建物規模は不明であるが、検出状況からみて建物の東南隅を検出したことになる。

2 トレンチでは、北側が表土下約15cmで地山面、中央から南は表土下約20cmで整地土層となる。表土掘削中に寛永通寶3枚と近世以降の陶磁器などが出土しているが、整地層面では顕著な遺構は検出されなかった。整地層面での精査の終了後、整地層の断ち割りを実施したところ、整地層の下層から弥生時代後期後半の竪穴式住居跡(S H01)を検出した。竪穴式住居跡S H01は、直径約6mの円形で、遺構検出面から床面までの深さは、最も残りが良い地点で約0.6mを測る。主柱穴・焼土(炉跡)・周壁溝などがあり、床面から少量の弥生土器が出土した。また、竪穴式住居跡の上面に黒灰色土が堆積し、古墳時代の土器などが散在して出土した。

3 トレンチでは、一辺約1mの方形土坑5か所と円形土坑1か所などを検出した。これらの土坑は、かつて、墓地であったとの伝承があり、表土掘削中に陶磁器、簀などが出土していることから、破壊が進んだ近世以降の墓と判断されたため、上面での精査のみを行った。なお、表土掘削中に弥生土器・須恵器の碎片なども出土している。

4. 検出遺構

竪穴式住居跡S H01(第5図) 竪穴式住居跡S H01は、周壁溝の外側で東西約6.0m、南北約5.5mを測る円形の住居跡である。周壁溝は幅15~20cm、深さ5cm前後を測る。壁面の南端は流失しているが、北側の残りが良い場所で深さ約60cmを測る。主柱穴跡は4か所あり、直径50cm前後の円形で、深さ50~60cmを測り、直径約20cmの柱痕跡を確認できた。柱穴間隔は、南北約2.7



第5図 竪穴式住居跡SH01実測図

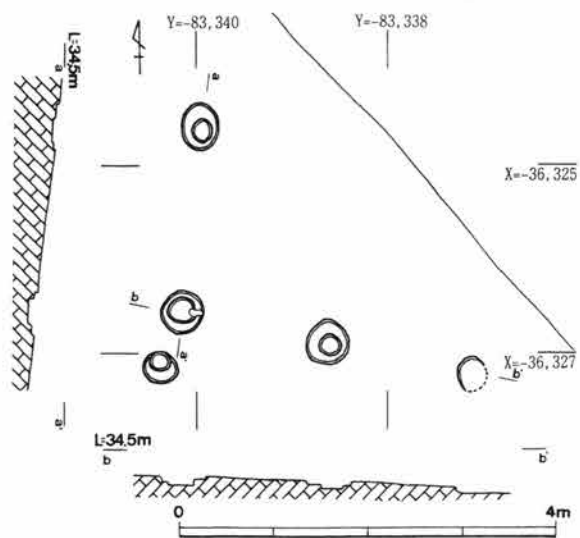
m、東西約2.5mを測る。東側柱穴の間で、わずかに焼土面を検出した。その東側で東西約1.2m、南北約0.9m、深さ5cm前後の浅い土坑を検出した。この土坑の中央部に上層から掘られた、柱穴状の黒灰色土がみられた。また、住居床面で、黒灰色を埋土とする大小の柱穴状のものがみられたが、間隔が不規則で建物跡に伴うものとは考えられない。床面付近で、少量の弥生土器が出土した。

掘立柱建物跡SB02(第6図) 地山面で、東西方向に3か所と、西端の北方向に1か所で、直径約45cmの掘形を検出した。いずれも後世に削られ、深さ2～5cm程度が遺存するのみで、その残存状況は良くない。掘形のうち、3か所で中央部に柱痕跡を確認できた。西側柱列の延長上ト

レンチ端で、地山面が窪んだ場所を確認したので、東西3間以上、南北3間以上の建物跡と推定される。柱間隔は、東西約1.5m、南北約1.8mを測る。北側柱列は北から東に約10°振れる。出土遺物が無く、時期は不明であるが、木橋北城跡に関連した遺構と思われる。

5. 出土遺物

出土遺物には、竪穴式住居跡SH01とその上層埋土から出土した土器類、各トレンチ掘削中に出土した土器、古銭、簪などがある。以下に主なものを記述する。

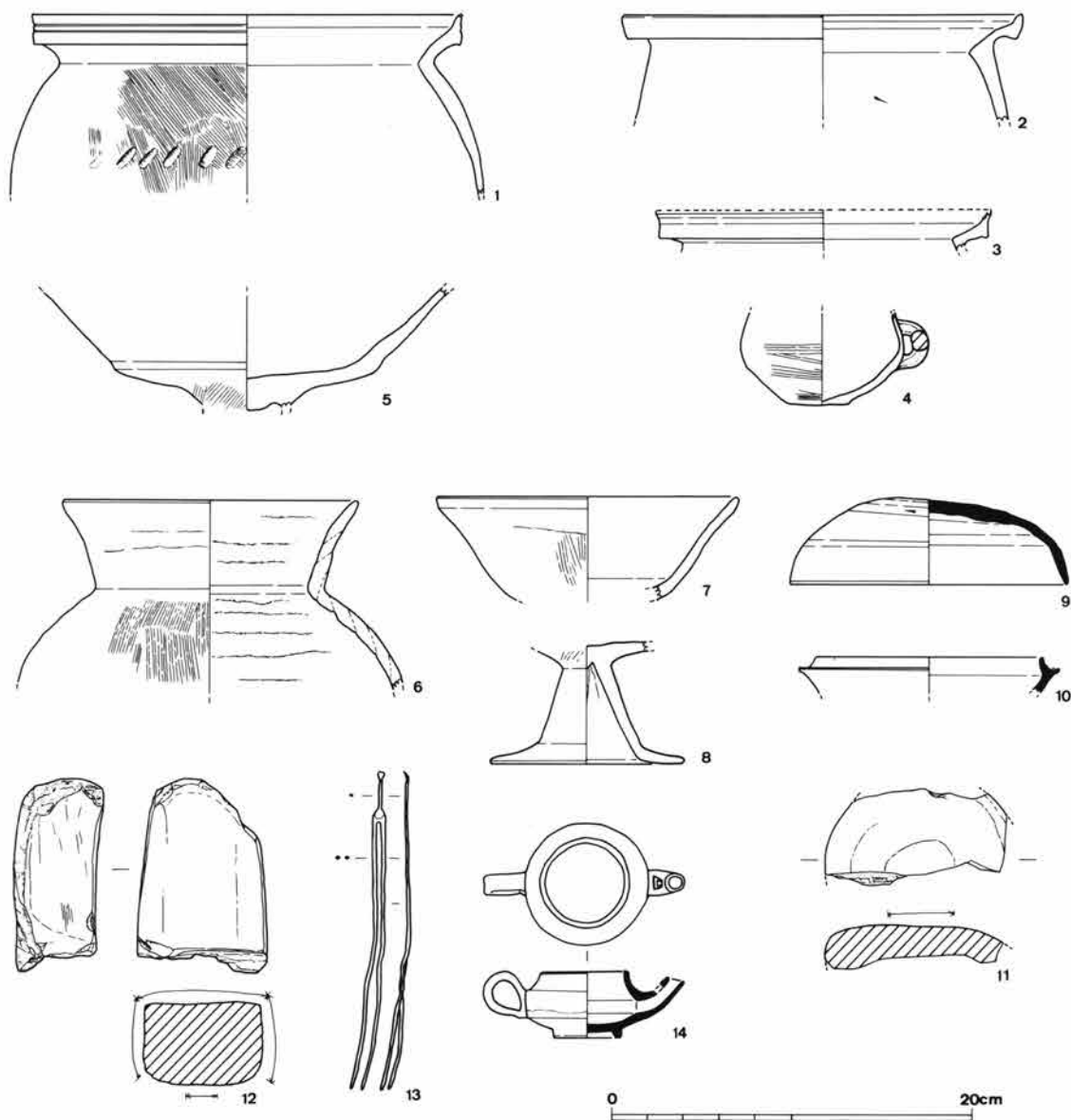


第6図 掘立柱建物跡SB02実測図

弥生土器(第7図1～4) 1は屈曲した頸部から短く立ち上がる口縁部へ続き、口縁部外面に、2条の擬凹線を施した甕である。体部外面を細かいハケで調整し、体部最大径付近に、ハケ状工具を刺突して加飾する。内面は磨滅のため調整不明である。口径23.8cm、残存高10.0cmを測る。胎土はやや粗く、4mm以下の白粒子を含む。焼成は良く、淡褐色を呈す。2・3も屈曲した頸部から短く立ち上がる口縁部をもつ甕である。磨滅が著しく調整は不明である。2は胎土がやや粗く、3mm以下の白粒子を含む。焼成があまく、明淡褐色を呈す。口径22.2cmを測る。3は胎土がやや粗く、1mm前後の白粒子、2mm以下の半透明・褐色粒子を含む。焼成は良く、淡灰褐色を呈す。外面全体にススが付着する。口径18.8cmを測る。4はコーヒークップ形の把手付き鉢で、下膨れの体部を特徴とする。磨滅が著しいが体部外面に横方向のハケメがみられる。胎土は密で、焼成は良く、淡灰褐色を呈す。外面に淡橙褐色の土を塗り付けた痕跡がうかがえる。口縁端部を欠くが、復原口径8.0cm、残存高5.1cmを測る。これらは、弥生時代後期後葉に位置付けられるもので、竪穴式住居跡SH01から出土した。

土師器(第7図5～8) 5は屈曲して口縁部上半が開く大型高杯の杯部である。磨滅が著しく調整は不明である。胎土がやや粗く、2mm以下の白粒子を含む。焼成は良く淡褐色を呈す。6は斜め上方に立ち上がる口縁部をもつ壺である。体部外面をハケ調整し、内面に粘土継ぎ痕が明瞭に残る。胎土がやや粗く、4mm以下の白粒子、2mm以下の半透明粒子を含む。焼成は良く、外面が暗橙褐色、断面が明灰褐色を呈す。口径16.5cm、残存高10.1cmを測る。7は高杯の杯部である。磨滅して調整が不明であるが、外面に縦方向のハケメが残る。焼成は良く、暗橙褐色を呈す。口径16.7cm、残存高5.7cmを測る。胎土はやや粗く、1mm以下の白粒子、1.5mm以下の半透明粒子を含む。8は高杯の脚部である。杯部外面にハケメが残り、脚部に横ナデ痕跡をとどめる。脚部底径10.6cm、残存高5.7cmを測る。胎土はやや粗く、2mm以下の白粒子を含む。焼成は良く、淡褐色を呈す。

須恵器(第7図9・10) 9は屈曲部にわずかな稜をとどめる杯蓋である。天井部を回転ケズリ、



第7図 出土遺物実測図

それ以外を回転ナデ調整する。胎土はやや粗く、1mm以下の白・半透明粒子を含む。焼成は良く、暗青灰色を呈す。口径15.5cm、器高4.9cmを測る。陶邑古窯址編年のTK209型式にあたる。10は杯身片である。胎土はやや粗く、1mm以下の白・灰色粒子を含む。焼成は良く、暗青灰色を呈す。復原口径12.6cmを測る。5～10は竪穴式住居跡SH01上面の黒灰色土層などから出土した。

石器(第7図11・12) 11は円礫の中央部が窪んだ、破碎された擦り石と推定されるものである。竪穴式住居跡SH01上面の黒灰色土層から出土した。12は砥石である。4面に使用痕跡をとどめ、1面が特によく使用され窪んでいる。残存長10.7cm、最大幅7.3cmを測る。3トレンチでの表採品である。

金属器(第7図13) 銅製の簪で頭部に耳搔きが付き、髪に差す部分が二股になっている。長さ16.8cmを測る。江戸時代中期以降の所産であろう。3トレンチ表土掘削中に出土した。

陶器(第7図14) 14はヒョウソク形の外口付き型灯火具である。従来、カンテラなどの名称で

呼ばれていたものである。小林克氏の分類では、Ⅳ類にあたる。^(注2) 把手が胴部に付き、その逆側の胴部から口が伸びる。口の上側に方形の透かしを穿ち、口の先端にスグが付着する。高台が付く。胎土はやや密で、焼成が良く、内面は淡灰色を呈す。低部は露胎で、それ以外の外面に淡黄灰色の釉薬がかかる。口径4.5cm、器高3.7cmを測る。江戸時代後期から明治時代初期の所産であろう。3トレンチ表土掘削中に出土した

古銭(第8図) 1は寛永通寶(古寛永)、2・3は寛永通寶(新寛永)である。いずれも2トレンチで表土掘削中に出土した。

6. ま と め

今回の調査で木橋北城跡に関連する遺構は、1トレンチで検出した掘立柱建物跡S B01が1棟ある。遺構に伴う遺物がなく、明確な時期は不明であるが、建物の方位が平坦地(郭)の方位にほぼ平行することから、木橋北城跡の遺構と推定した。1トレンチの調査範囲は城跡の一部のみで、開発の対象とされていない未調査部分が広く、未調査部分には、今回検出した建物跡のほかにも建物跡などがあると推測される。

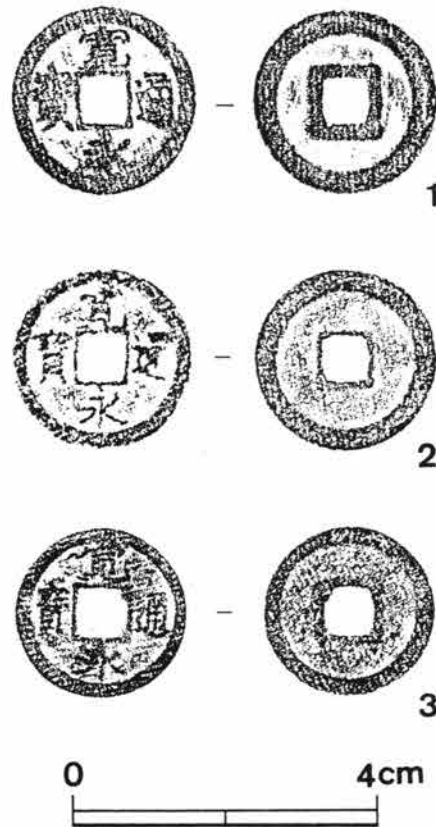
2トレンチ(台形状平坦地)で確認した整地層では、時期のわかる遺物は出土しなかった。1トレンチと2トレンチの境界で、切り落とした斜面(崖面)を検出したが、ここでも出土遺物がなく時期は不明である。しかし、現況の地形からみて、これらの崖面と台形状平坦地が、一体のもので木橋北城跡の遺構と推定しておきたい。

木橋北城跡推定範囲には、後世の地形改変がうかがわれる明瞭な堀切や土塁などの痕跡は見られない。城には、東西の狭い谷筋から出入りしたものと推定される。

木橋城跡(城主吉岡伊豫守)と向かい合う位置にある木橋北城跡は、本城(木橋城跡)の支城(砦)として設置され、不信者や侵入者を見張るためのものである。木橋北城跡がある丘陵の先端(東端)には、鳥取城跡があり、現集落の西端の丘陵上には、木橋西城跡がある。これらは、強い防禦ネットワークを形成していたと思われる。

竪穴式住居跡の上層で、古墳時代後期を中心とした土器などが出土したが、調査地内で関連する遺構は検出していない。木橋北城の造成時に削られて消滅したものと推定される。かつて、上位平坦地(1トレンチ)、台形状平坦地(2トレンチ)に、古墳などが存在したものと推測される。

下層から弥生時代後期の竪穴式住居跡が検出され、予想外の調査成果となった。弥栄町内で竪穴式住居跡が単独で検出された例として、オテジ谷遺跡がある。オテジ谷遺跡では、オテジ谷古



第8図 出土古銭拓影

墳から南東に延びる狭い丘陵先端部で、弥生時代中期の円形竪穴式住居跡が検出されている^(注3)。その住居跡は、標高約40m付近にあり、眼下の水田面との比高差は約25mを測る。今回、住居跡が検出された地点は、両側に3mも行けば急激に落ち込む地形で、敷地が狭く危険でさえある。すなわち、住居を営む選地としては、特異な立地条件が指摘される。こうした高所で、生活に適さない所に立地するのは、一時待避の村、あるいは「見張り所」的な機能を有する分村が想定される場合が多い。

今回検出した竪穴式住居跡SH01も、標高約30m付近にあり、水田面との比高差が約16mを測り、両側3mも行けば急激に落ちていく地形で、酷似した立地条件である。機能も同様のものと推定される。今後、このような狭い平坦部でも、住居跡が発見される可能性がより高くなった。こうした住居の立地条件や分布状況を判断し、今後の調査に活用したい。

なお、下層から検出された遺構は、弥栄町教育委員会との協議で小字名から千原崎^{ちばらさき}遺跡と呼称することにした。

(石尾政信)

注1 調査参加者 尾崎二三代・黒川洋治・後藤義夫・長砂勇・松田富美子・味田忠志・山副茂・吉岡敬子・山本多美子・藤井矢壽子・藤村文美

注2 小林克「近世照明具研究へのアプローチ」(『特集江戸時代の発掘と文化 季刊考古学』第53号 雄山閣) 1995

注3 藤原敏晃・高野陽子「オテジ谷遺跡・オテジ谷古墳発掘調査報告書」(『京都府弥栄町文化財調査報告 第6集』 弥栄町教育委員会) 1991

2. 新堂池^{しんどういけ}古墳群第2次発掘調査概要

1. はじめに

今回の調査は、南丹区域農用地総合整備事業の農用道路設置に伴うもので、緑資源公団西部支社の依頼を受けて実施したものである。新堂池古墳群は、園部町市街地から北に約2.7km離れた、京都府船井郡園部町大字新堂と大字熊崎のほぼ中間の丘陵上に所在する。新堂池古墳群は、これまでに22基の古墳の存在が確認されている。事業地内に1～3・6号墳の4基の古墳が存在したことから、当センターは平成13年度に4基の古墳に対して、規模・形状・遺存状況の把握を目的に試掘調査を行った(第1次調査)。今回の調査は、試掘調査の成果をもとに、4基の古墳の面的調査を実施した。現地調査は、平成14年8月19日から開始し、人力による掘削・精査を行った。調査期間の半ば、9月21日～11月5日の間、地元の要請で調査地周辺丘陵は入山禁止となり、調査の一時中断をみた。11月6日には調査を再開し、平成15年1月30日に終了した。調査面積は、約1,000㎡である。なお、調査に係る経費は、全額、緑資源公団西部支社が負担した。

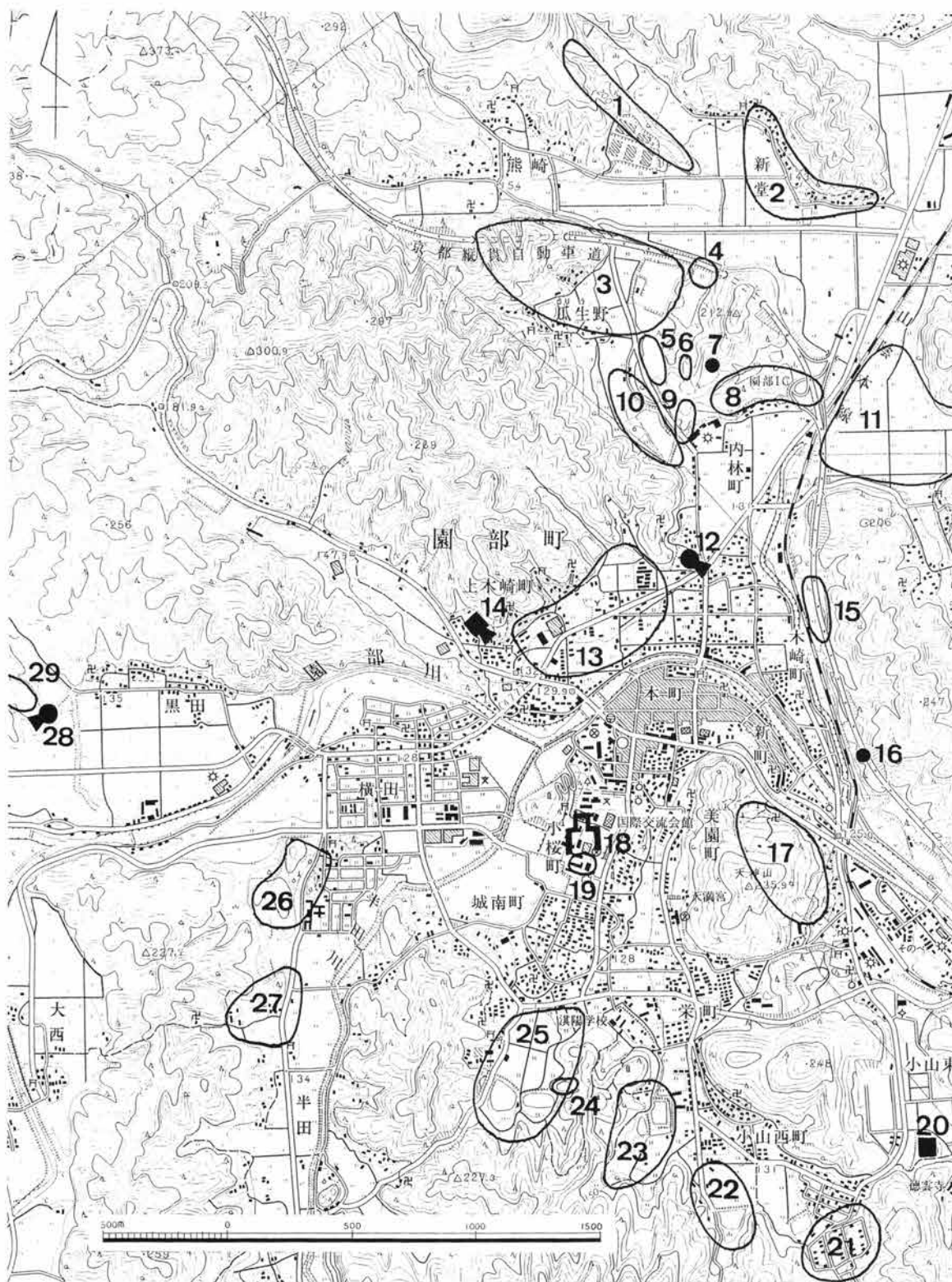
今回の調査を実施したのは、当調査研究センター調査第2課調査第2係長伊野近富、同主任調査員竹原一彦、調査第3係調査員中村周平である。調査を実施するに当たっては、京都府教育委員会・園部町教育委員会・園部町商工農林課・地元自治会からご協力をいただいた。現地調査には、酷暑・酷寒の中、地元有志の方々をはじめ、各大学生諸氏^(注1)に参加していただいた。あわせて謝意を表したい。

2. 位置と環境

園部町は、南北に細長い京都府のほぼ中央に位置する。京都府には、府の中央部に広がる丹波山地を分水嶺として、北流して日本海に注ぐ由良川水系と、南流して大阪湾に至る大堰川水系がある。園部町は、大堰川水系の最北端に位置し、園部盆地と呼ばれる小盆地が広がる。調査を行った新堂池古墳群は、園部盆地の北端にあり、園部町と日吉町の境となる山地の麓に位置する。

周辺の歴史環境をみると、縄文時代は園部垣内古墳の下層から土器片の出土をみている。また、曾我谷遺跡では尖頭器や石鏃の出土が知られる。弥生時代では、今林遺跡で後期の集落跡が確認された。また、狭間墳墓群は後期の墳丘墓であり、同一丘陵上の今林遺跡との関連が注目される。曾我谷遺跡・半田遺跡・善願寺遺跡でも後期～庄内並行期の集落が確認されている。今林古墳群の今林8号墓は庄内式並行期の墳丘墓とみられ、銅鏡などの出土をみている。

古墳時代では、出現期から前期にかけて豊富な出土遺物を誇る大形の前方後円墳が築かれる。黒田古墳(全長52m)は、前方部がバチ形に開く古式の形態を持ち、双頭龍文鏡・二重口縁壺などが出土している。前期後半から中期初頭に位置づけられる古墳として、園部垣内古墳と中畷古墳

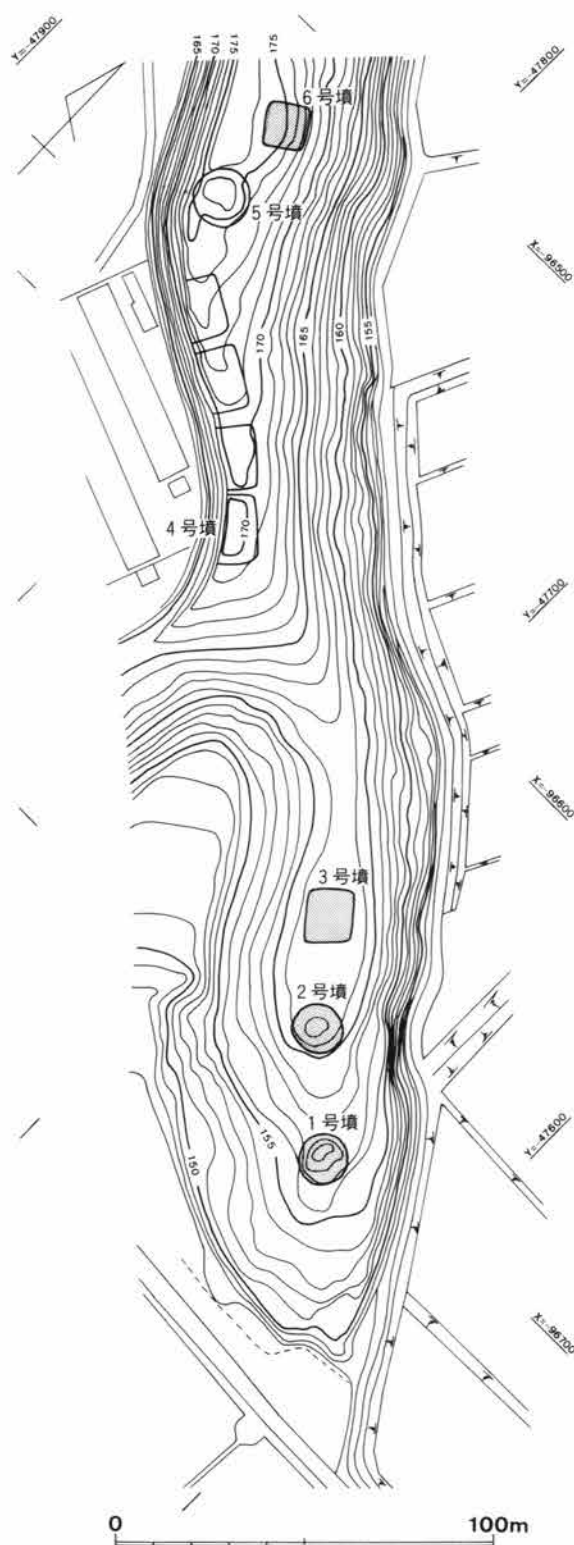


第9図 調査地および周辺遺跡分布図(国土地理院1/25,000図部)

- | | | | | |
|------------|------------|-------------|------------|------------|
| 1. 新堂池古墳群 | 2. 岡田遺跡 | 3. 瓜生野古墳群 | 4. 八田遺跡 | 5. 狭間墳墓群 |
| 6. カチ山北古墳群 | 7. 平山古墳群 | 8. 今林古墳群・遺跡 | 9. カチ山古墳群 | 10. 金沢遺跡 |
| 11. 曾我谷遺跡 | 12. 園部垣内古墳 | 13. 宮ノ口遺跡 | 14. 中畷古墳 | 15. 善願寺遺跡 |
| 16. 川向古墳 | 17. 天神山古墳 | 18. 園部城跡 | 19. 小桜古墳群 | 20. 徳雲寺北古墳 |
| 21. 大向窯跡群 | 22. 高杭窯跡群 | 23. 桑ノ内窯跡群 | 24. 岸ヶ前古墳群 | 25. 壺ノ内窯跡群 |
| 26. 温井古墳群 | 27. 半田遺跡 | 28. 園部黒田古墳 | 29. 黒田北古墳群 | |

がある。園部垣内古墳(推定全長82m)は、粘土槨を主体とする前方後円墳で、三角縁神獣鏡などの銅鏡や方形板革綴短甲などの鉄製品、車輪石・石釧など多量の副葬品が出土している。中畷古墳(全長77m)は前方後方墳である。未調査のため、その詳細については不明であるが、筒形銅器などの出土が伝えられている。平山古墳は前期とみられる20m規模の円墳であり、四獣鏡の出土をみている。中期古墳では、今林古墳群・カチ山古墳群・徳雲寺古墳群など小規模な円墳や方墳で構成された古墳群が、盆地周辺の丘陵部に築かれる。今林6号墳は20m規模の方墳であるが、長方板革綴短甲や内行花文鏡など多量の副葬品の出土をみている。後期では、天神山古墳群・川向北古墳群が知られる。天神山1号墳は、南丹波地域でも古い段階の横穴式石室(両袖式)を持つ古墳である。周辺地域(南丹波)で同様な古い段階の横穴式石室の状況は、亀岡市拝田16号墳、医王谷3号墳、北ノ庄13・14号墳、八木町小谷16号墳が知られている。

園部盆地南側の山麓では早くから須恵器の焼成が行われている。園部盆地では、5世紀末頃と位置づけられる京都府下でも最も古い形式の須恵器が知られ、高杯脚端部を内側に折り返す特徴的な形態から、在地生産が予想されているところである。窯業遺跡としては、6世紀後半から奈良時代にかけての操業である壺の谷窯跡群・大向窯跡群などが知られているが、これまでのところ5世紀末頃の窯跡は発見されていない。



第10図 調査対象古墳位置図

3. 調査概要

今回の調査対象となった古墳は、丘陵先端部の1号墳から3号墳と、丘陵中程の6号墳である。

(1) 1号墳

山塊から南東に張り出す尾根の先端部付近に位置する。墳丘裾は標高156m付近にあり、平地部との比高差はおよそ9m前後を測る。古墳は、直径約15mの円墳であり、残存高は約2mを測る。墳頂部から南東方向にかけて大規模な盗掘坑が存在し、墳丘が大きく崩れている。内部主体は横穴式石室で、羨道部は南東に開口する。調査の結果、玄室床面と副葬遺物の出土状況から、数度の再埋葬が行われたことが明らかとなった。埋葬は最低2時期(3時期か)、4回の埋葬が考えられる。盗掘は、石材の抜き取りが目的とみられ、石室上半部の石材が持ち去られていた。盗掘の埋土中から瓦器碗片の出土をみたことから、盗掘は中世頃と判断する。

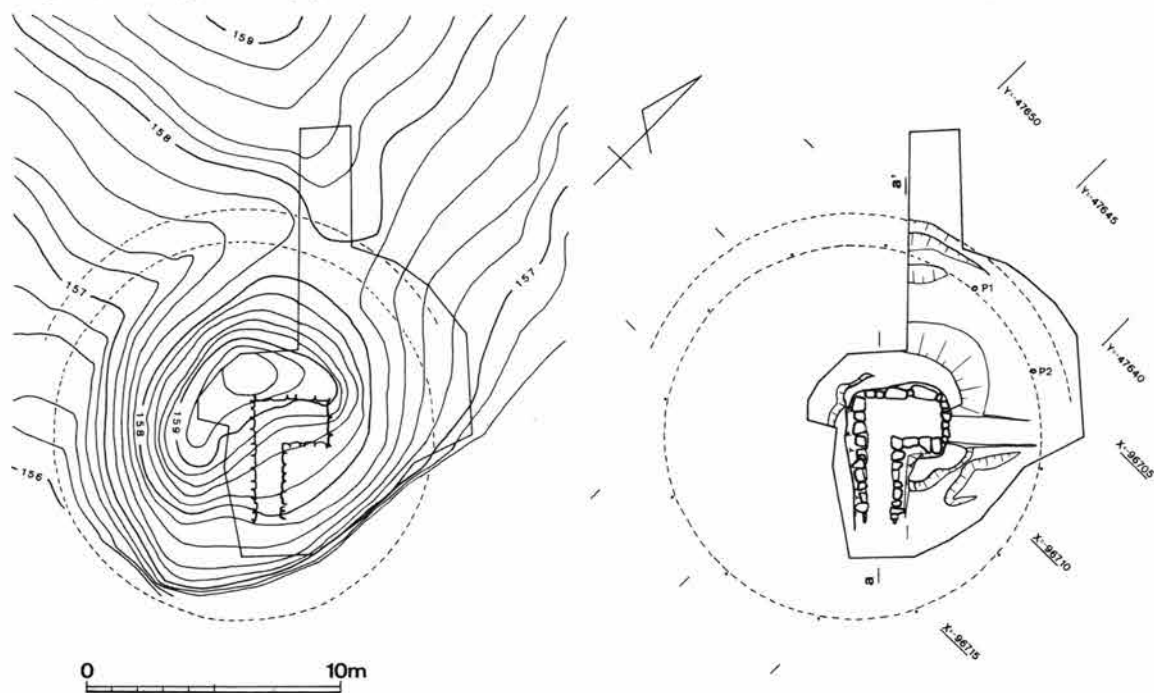
①墳丘(第11・12図)

古墳の墳丘は、北西から南東方向にゆるやかに下る旧地形上に盛土を行い、墳形を整えている。地形上の高所側となる北西側は、幅約2.4m、深さ約0.4mの溝を墳形に合わせて弧状にめぐらせ、溝の端は中程で終わり、低位側には認められない。墳丘は、断面観察の結果、表層部と下層部で盛土の状況に大きな変化が認められた。地山掘削坑の石室裏込め土を含む石室基底部から約2.2mの間は、3~10cmの厚さで、ていねいな版築様の盛土を行っている。一方、墳丘上部の表層部は、約0.6mの厚さで暗茶灰色土が墳丘全体を覆っている。この盛土層の変化は、墳丘の構築途中での作業の中断か、石室完成前後の作業工程の変化に起因するものとみている。

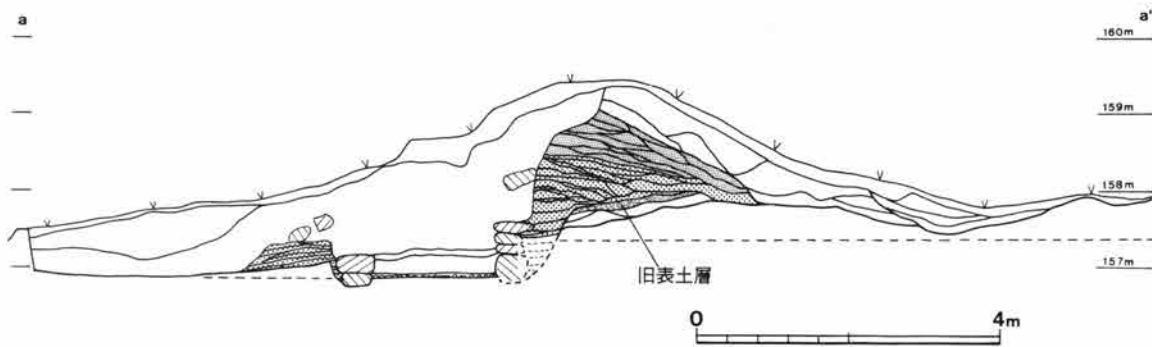
②外部施設

墳丘裾の溝内から2個の小規模な柱穴(P1・2)を検出した。柱穴は直径約0.2m、深さ0.1mを測り、墳丘中心と各柱穴間を結んだ線の内角は約30°の角度を測る。柱穴間隔は約4mを測る。古墳築造に伴う割付基準柱の可能性はある。復原では、推定12本の柱が墳丘の周囲をめぐらる。

③埋葬施設(第13・14図)



第11図 1号墳実測図



第12図 1号墳墳丘横断面図

1号墳の埋葬施設は横穴式石室であり、その平面形状から両袖式石室の一形態であるT字形石室に含まれる。しかし多くのT字形石室とは形状が異なり、一方の袖部を極端に延ばし、あたかも「L」字に近い平面形を呈する特異なものである。

石室は、旧表土面から石室の形状に合わせて、最大0.9mの深さで坑を掘削し、地山面を水平に近い状態に整え、基底石を据えている。羨道および玄室の基底石は、掘形底面をやや掘り下げて据えられる。石室の石材はすべてチャートであり、比較的小形の石材を使用している。石材は一边が0.5m前後、厚さ0.2～0.4m程度で、方形もしくは板状に整った石材が多くを占める傾向が強い。石材はやや角の丸い自然石を使用するが、一部は人為的な加工を認めるものも存在する。奥壁の中段では、一部に1mを越える大形の石材も使用されている。石室下端部の裏込め土は上下の石材間にも縞模様状にいていねいな土の充填が観察された。また、石室中位においても細かい盛土層が、石材間から墳丘盛土にかけて均質に広がる。このような状況から、石室を構築するにあたっては、石材を積み上げるごとに背後に盛土し、そのつど墳丘を高めていく工程が窺える。特に、石材の背後の0.2～0.3mの範囲は、堅く叩き締めた状況である。石室の壁体は整った石材の側面を表に横積みし、壁体上部に向かうほど壁面をせり出させた、いわゆる持ち送りを行う。玄室隅部は、ほぼ直角のまま上方に立ち上がる。玄門部は段積みである。

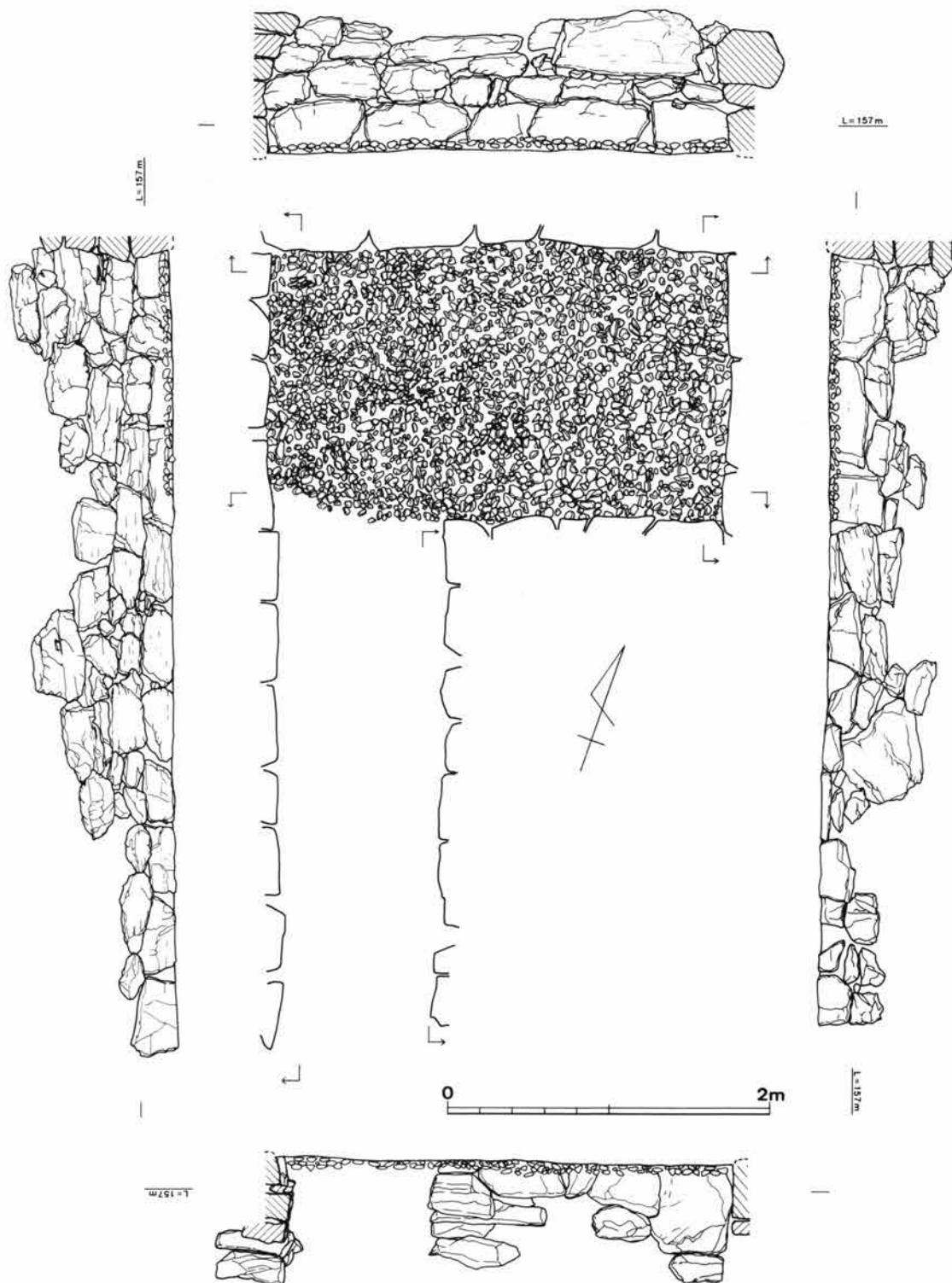
玄室の主軸は、北から西に約45°振り、尾根筋と同一軸線をとる。玄室は、玄門と奥壁の間隔が1.7mと短く、逆に側壁の間隔は約2.8mを測り、平面形は長方形を呈する。玄室南東側の右袖部は、壁体の基底石から第2石目の石材の一端が0.1m玄室側に突出する。このわずかな突出部は、左袖ラインの延長上に対応することから、突出部を右袖と認識した。左袖部は長さ約1.7mを測る。初葬面の玄室床面には、地山上に4～8cm大の川原石を敷き詰めた礫床が存在した。

玄室中央部から右奥側部分の礫床上に、棺台が存在する。棺台は、一边が0.3～0.4mで、高さ0.15m前後の比較的平らな石を使用している。玄室内の棺台の位置関係から、棺は玄室西側に偏って2棺並列して納められたものと判断する。奥壁側の棺台(D1・2)の間隔は1.3mを測る。玄門側の棺台(D3・4)は玄室中央部にあり、この台石間は0.5mを測る。

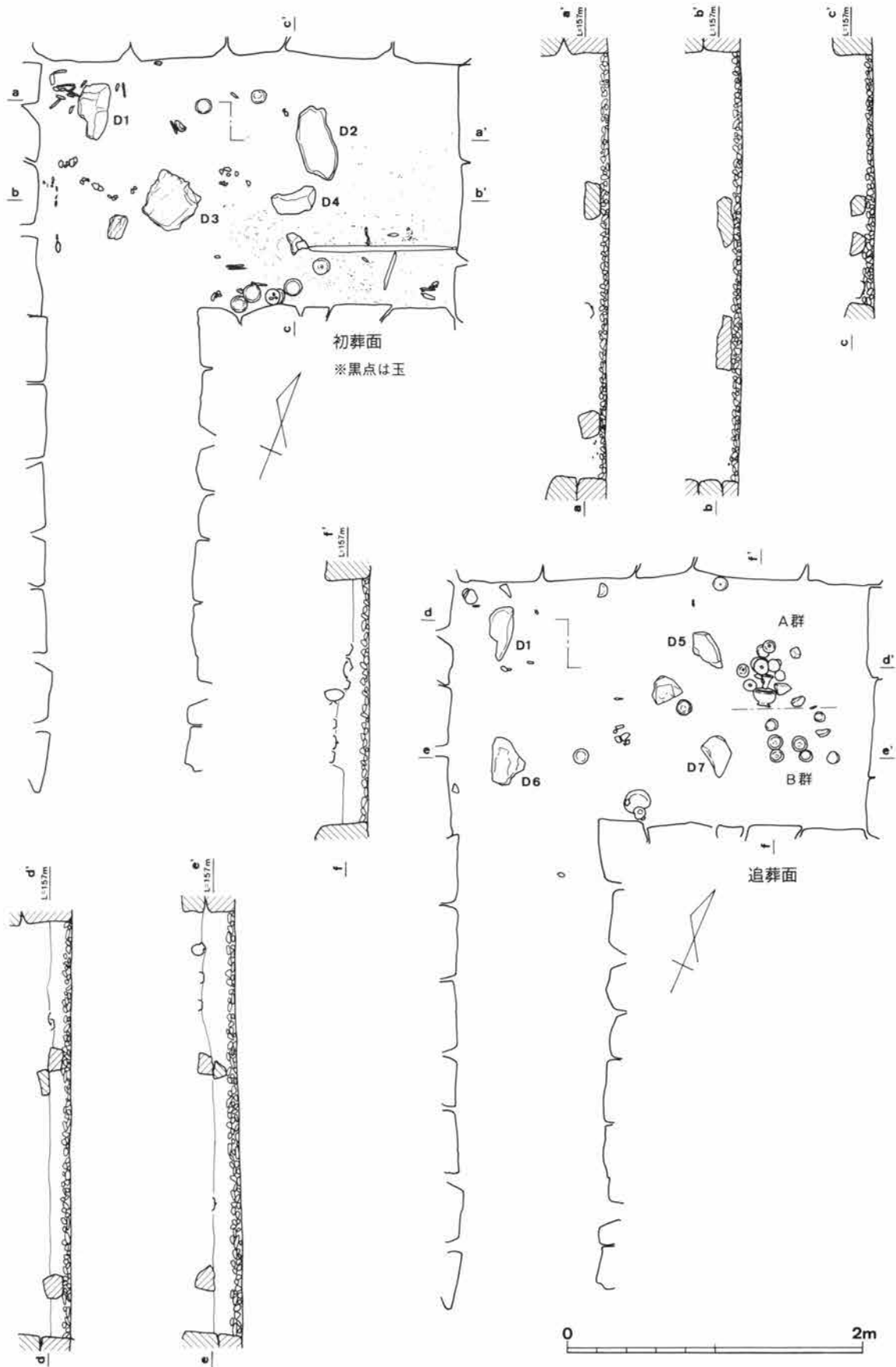
副葬品は、再埋葬段階で整理・移動された状況にあった。その多くは左袖壁付近と玄室西隅付近に集中している。初葬段階の副葬品として鉄製品、土器、装飾品が認められる。鉄製品は刀、刀子、鏃などがあり、鏃は玄室西隅付近に集中する傾向が強い。土器には須恵器蓋、高杯がある。

装飾品の土玉(練り玉)は470数点が出土した。土玉は8mm前後の大きさで、球形や円筒形などの形状がみられる。色は黒色である。土玉は、玄室の中央から東側にかけて広範囲に出土するが、特に刀付近での分布密度が高い。

礫床面から5～8cm上位に追葬面が認められた。再埋葬に伴って玄室内には土砂を入れ、整地を行っている。追葬面には再び棺台が設置されている。追葬面においても2棺を並列して納めた



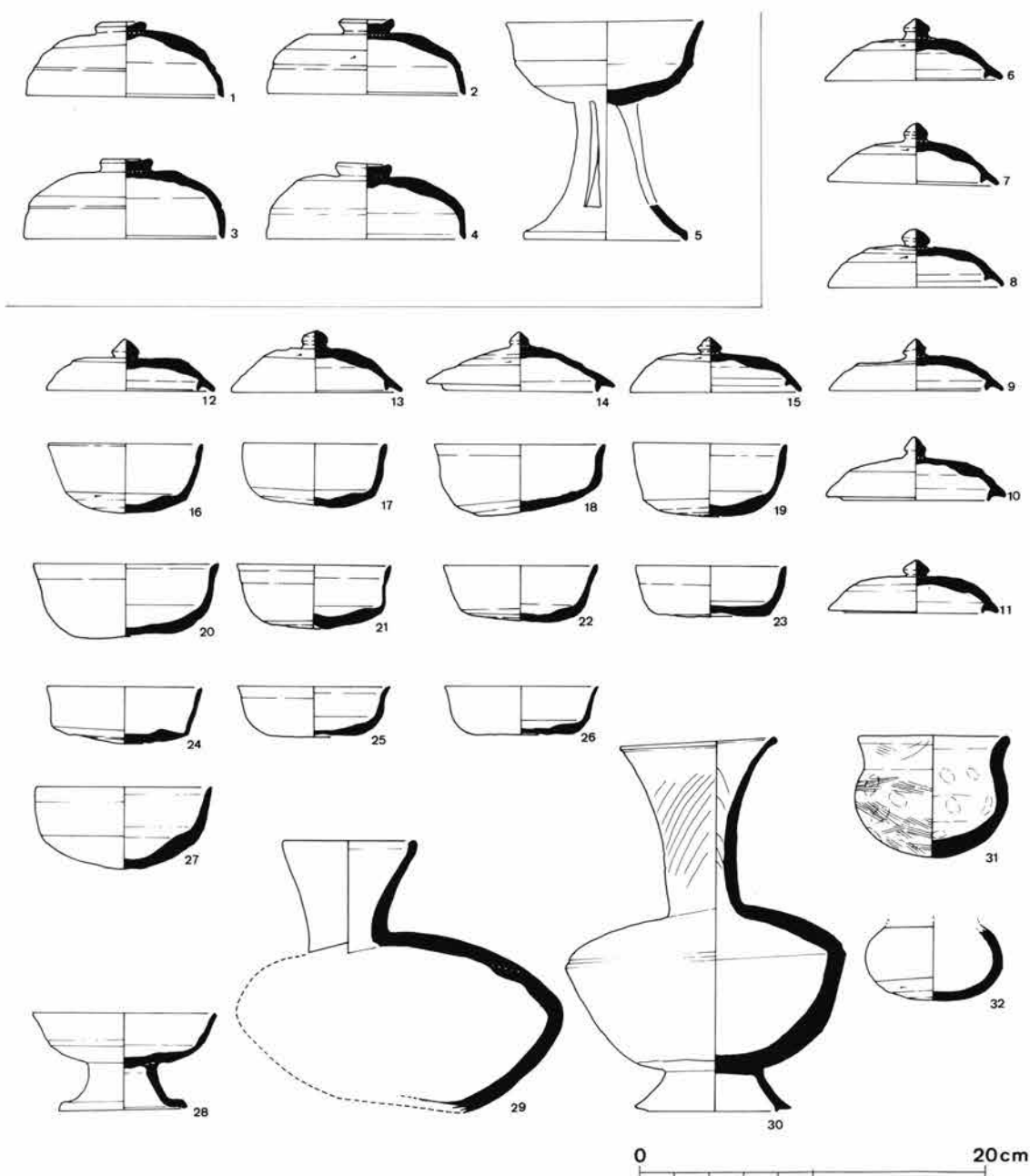
第13図 1号墳石室実測図



第14図 1号墳玄室内遺物出土状況図

と判断する。棺台の位置関係から、棺は奥壁に平行して置かれている。奥壁側の棺台は、東側の1石(D5)のみが確認された。この棺台は、初葬時の棺台(D2)とほぼ同一地点に設置されている。西側の棺台は、盗掘時に持ち去られたか、初葬時の棺台(D1)を利用していた可能性が高い。棺台の間隔は約1.1mを測る。南東側の棺台(D6・7)は、奥壁側棺台から約0.45m離れる。棺台の間隔は1.2mを測る。棺は、初葬時と同様、玄室西側に偏る。

副葬品として多くの須恵器が認められた。奥壁に沿って杯身と杯蓋が点在し、玄門付近の袖壁周辺に横瓶がある。多くの須恵器は、棺台(D5・7)と玄室東壁との間に集中し、棺に対応する状況で2群に分かれる。奥壁側のA群は杯身6点・杯蓋5点・台付長頸壺1点で構成され、杯身と杯蓋はセットで閉じて置かれている。袖壁側のB群は、杯身5点・杯蓋2点・土師器壺1点・



第15図 1号墳玄室内出土土器実測図
1～5. 初葬面 6～32. 追葬面

瓦質焼成の壺1点で構成される。蓋は反転した状態で杯身の横に置かれていた。

④羨道

玄室南東の西端に偏って羨道が設けられている。玄室の閉塞については不明である。羨道の長さは3.3m、幅は約1mの規模を測る。羨道幅は、玄門部から先端にかけて大きな変化はないが、先端部の石材のみ外方にやや開く設置状況にある。羨道の石材は玄室の石材に比べ、やや小形の石材が使用される傾向が強い。

(竹原一彦)

⑤出土遺物

1号墳初葬面出土遺物(第15図1～5) 1～4は有蓋高杯の蓋である。口径は概ね11.2cm前後を測り、扁平なつまみとわずかに内傾する口縁端部を有する。5は口径11.2cm、器高12.8cmを測る無蓋高杯である。口縁部はわずかに外反し、脚部には3方向の透かし孔を有する。これらの須恵器群は、陶邑編年TK10型式に比定できる。

1号墳追葬面出土遺物(第15図6～32) 6～15は口径が概ね10.5cmを測り、宝珠形のつまみと口縁部内面にかえりを有する杯蓋である。16～27は口径が概ね9.0cmを測る杯である。28は口径10.8cmを測る短脚の無蓋高杯である。29は口径7.6cmを測る平瓶である。30は器高21.8cmを測る長頸壺である。頸部にしぼり目が観察できる。この須恵器群は、陶邑編年TK217型式に比定できる。31は器高7.0cmを測る土師器の壺である。32は最大径8.0cmを測る瓦質焼成の壺である。

(小池 寛)

(2) 2号墳

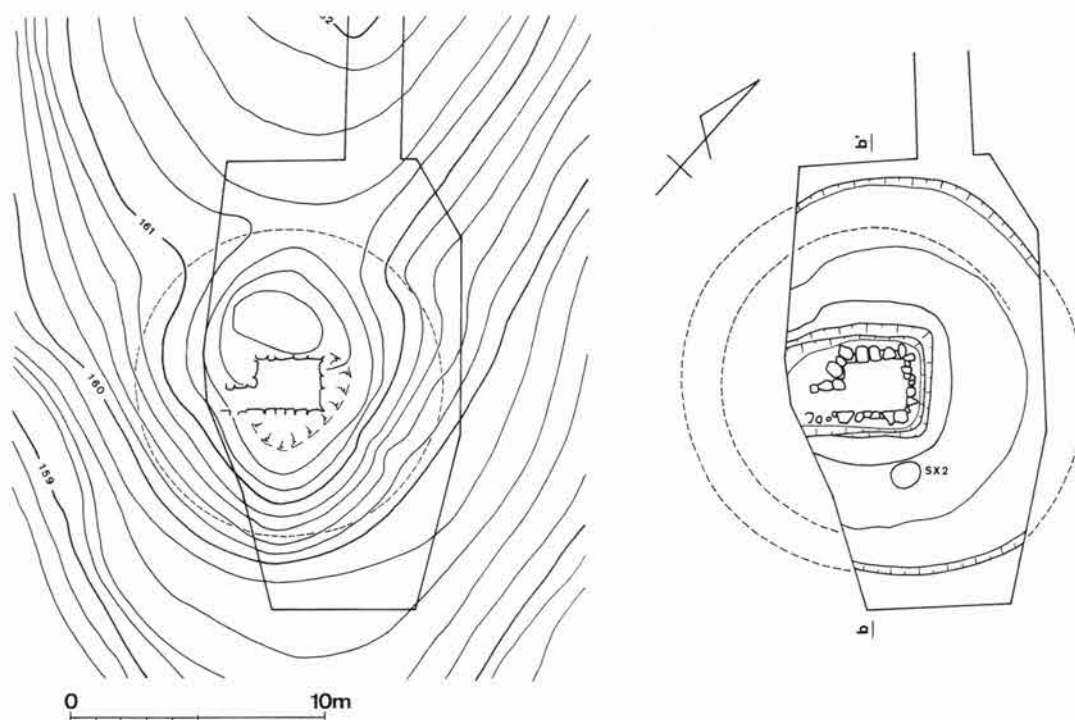
1号墳の北西側、約20m離れた尾根筋上に存在する円墳である。1号墳より一回り小さく、直径約12m、残存高は約2mを測る。墳丘裾は標高160m付近にある。埋葬主体は右片袖の横穴式石室であり、羨道は南西側に設けられる。羨道部先端は調査地外に延び、羨道の全容に関しては明らかでない。墳頂部には、大きく陥没した盗掘坑が存在したが、玄室内の遺構面は荒らされていない。調査の結果、玄室床面と副葬遺物の出土状況から、おおよそ2時期、4回の埋葬が行われたことが明らかとなった。

①墳丘(第16・17図)

古墳の墳丘は、北西側と南東側尾根筋部分に弧状の区画溝を設け、北西から南東方向にゆるやかに下る旧地形上に盛土を行い墳形を整えている。区画溝は、高所の北西側は幅約3m、深さ約0.2mを測る。墳丘南東の低位側の溝は、幅約2m、深さ0.2mを測る。尾根斜面側は浅い溝痕跡が地山面に残ることから、溝は全周をめぐる判断する。地山掘削坑の石室基底部裏込め土は、1号墳に比べややていねいさに欠くが、版築様の盛土が行われる。表層部は、約0.3mの厚さで暗黄灰色土が墳丘全体を覆う。

②埋葬施設(第18・19図)

2号墳の埋葬施設は右肩袖の横穴式石室である。玄室の平面形は方形に近い。石室は、旧表土面を石室より一回り大きく掘削し、地山面を水平に近い状態に整えて基底石を設置している。地



第16図 2号墳実測図

山掘削坑の深さは、西の高所側では約1.2mを測る。玄室壁体の石材と掘形下端との間は約0.2～0.3mの間隔をあける。羨道部の片袖側では、掘形下端との間隔は1.5mを測る。石室の石材はすべてチャートで、比較的小形の石材が使用されている。一辺が0.5m前後、厚さは0.2～0.4mで、方形に整えた石材が多くを占める傾向が強い。一部では、角や表面が磨耗した川原石も使用している。石室の壁体は、整った石材を横積みし、壁体上部は強く持ち送りする。

玄室の主軸は、北から東に約46°振り、尾根筋に対して直交する。玄室規模は、玄門と奥壁の間隔が2.4m、両側壁間隔は2.0m、右袖部は1.1mの規模を測る。初葬面と判断する玄室床面には、ほぼ平坦な地山上に、4～8cm大の川原石を敷き詰めた礫床が存在する。初葬段階の副葬品は右袖壁付近に集中し、追葬時に整理されて置かれた状況を示す。初葬時の副葬品として、杯身・杯蓋・提瓶などの須恵器、鏃・刀・刀子などの鉄製品、ガラス小玉と土玉の装飾品がある。このうち、玉類は玄室の南東壁側の礫床上を中心に散乱していた。出土したガラス小玉は1点であり、淡緑色を呈する。土玉は226点を数えた。土玉は黒色で、直径が5mm前後、ていねいに丸く仕上げたものが多数を占める。

初葬の礫床面から5cmほど上位に追葬面が存在した。礫床上には土砂を入れ、整地している。玄室内には棺台が多数存在し、棺台の配置状況から3棺が並列する状況が認められた。棺は奥壁に直交して置かれ、玄室内を最大限に利用している。玄室の右側壁側棺の棺台は、比較的小形の石を2個一対(D9・10とD11・12)で構成している。袖壁側の棺台(D11・12)は、整理された初葬時の土器群の上に置かれる。棺台の間隔は1.5mを測る。玄室の中央と左側壁側の棺に伴う棺台のうち、奥壁側の棺台(D2・3・6)は、大形の自然石3個を配している。中央の台石(D3)は横に長く、2棺で共有していた可能性がある。この棺台内側に接して、枕に転用された須恵器

の杯身がそれぞれ2点ずつ、計4点が逆転状態で置かれていた。左側壁側と玄室中央の棺にみる袖壁と玄門側の棺台(D4・5とD7・8)は、小形の石が使用される。対応する棺台の間隔は、右側壁側棺台が1.4m、中央部の棺台で1.4mを測る。副葬品は、刀・鍔などの鉄製品が玄室北隅近くの棺台付近から出土した。高杯・杯身・杯蓋などの須恵器類は、玄門部羨道右側壁付近にみられた。

③羨道

玄室南西側の南東端に羨道が設けられている。玄室の閉塞は割石の積み上げとみられる。検出した羨道の長さは1.5m、幅は0.85mの規模を測る。羨道幅は、玄門部から先端にかけて大きな変化は認められない。羨道の石材は玄室の石材に比べ、やや小形の石材が使用される傾向が強い。多くの石材は持ち去られ、基底石が失われた個所も一部に認められる。

(竹原一彦)

④出土遺物(第20図1～8)

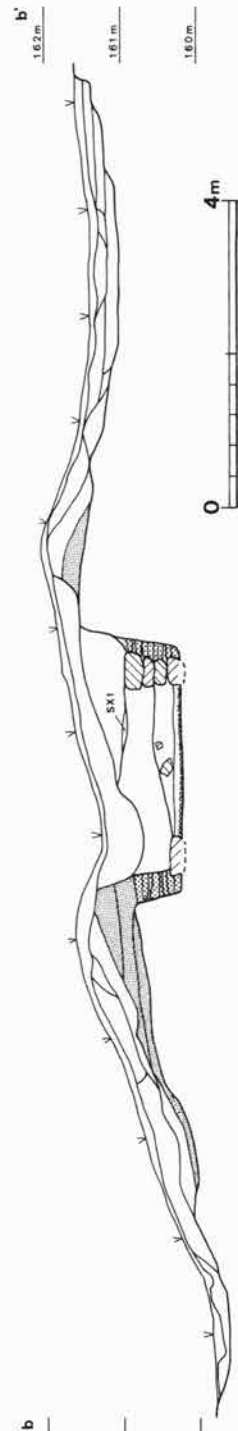
2号墳下層出土遺物 1は口径8.5cmを測る土師器の壺である。胎土に0.1～0.3cmの砂粒を多く含み、焼成は不良である。2～8は須恵器である。2は口径11.0cm、器高8.6cmを測る有蓋高杯である。脚部外面には透かし孔はなく、カキメによる調整を施す。3は口径6.4cmを測り、環状の耳を有する提瓶である。出土須恵器から陶邑編年TK10型式に比定できる。

2号墳上層出土遺物 4は口径11.4cmを測る短頸壺の蓋である。5と6は口径が概ね14.0cmを測る杯蓋である。7と8は口径が概ね12.5cm前後を測る杯である。これらの須恵器は、陶邑古窯址群谷山池7号窯から出土した須恵器群に共通する特徴をもつことから、陶邑編年TK43型式に比定できる。

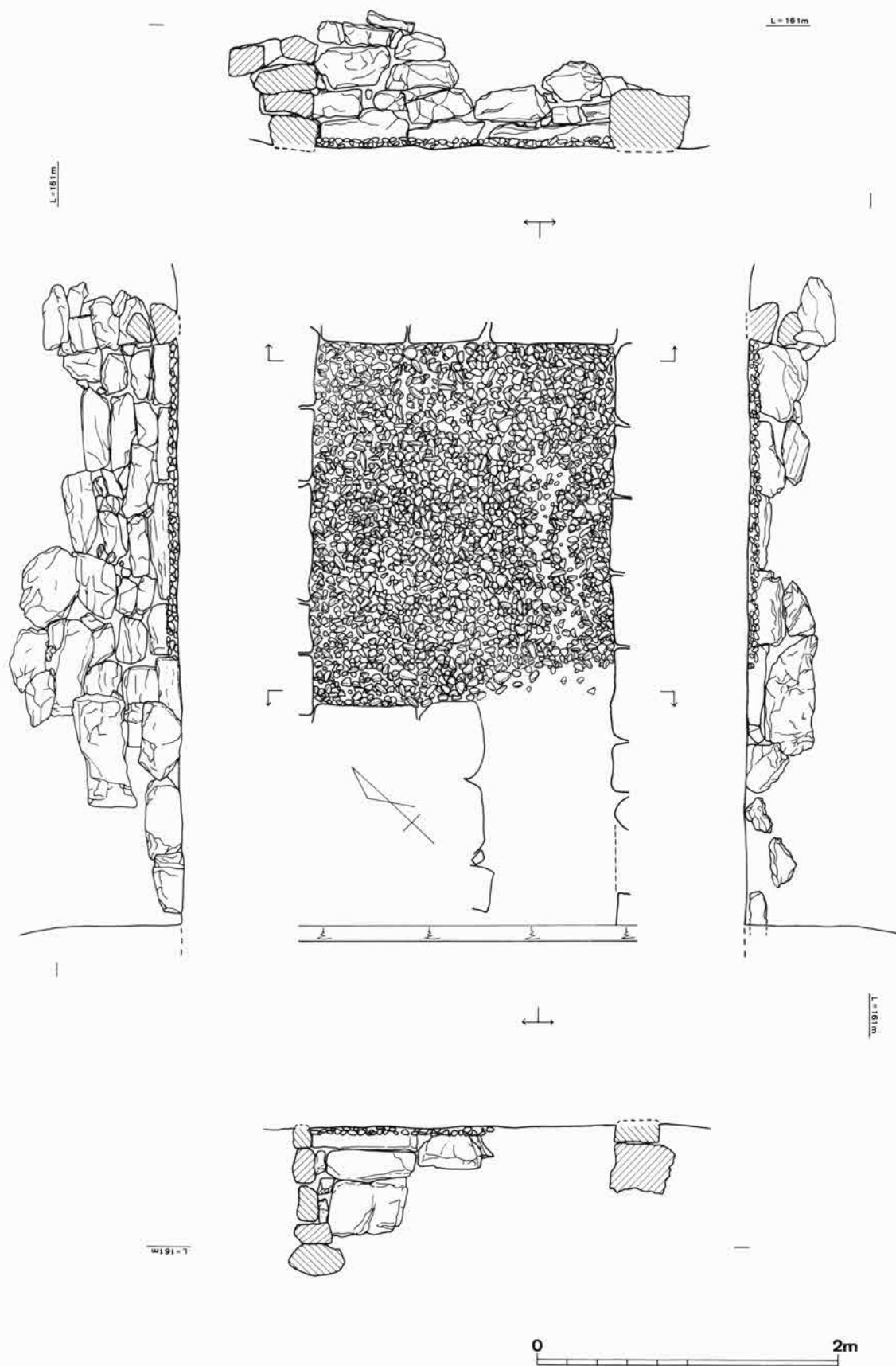
(小池 寛)

⑤中世遺構

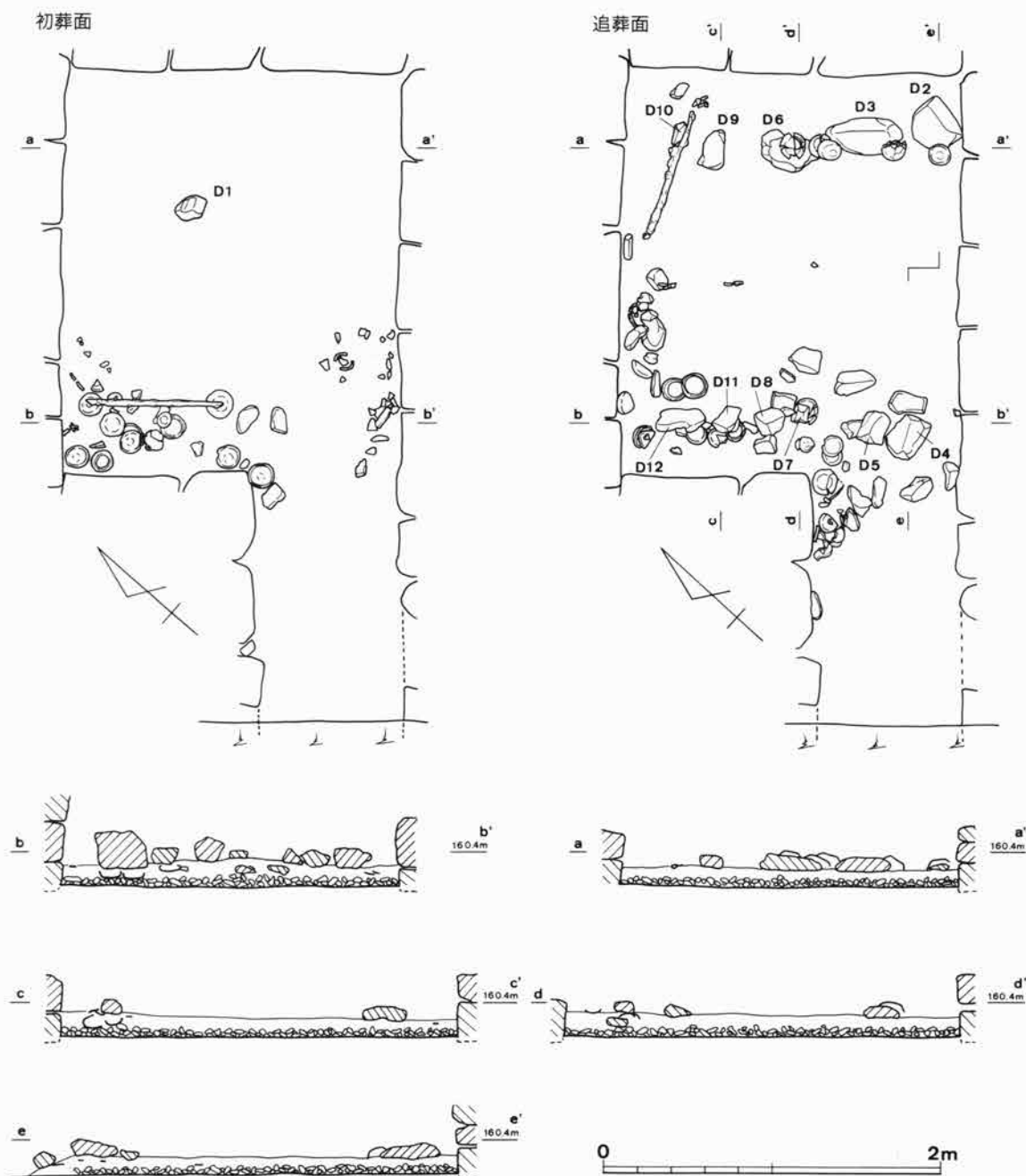
盗掘坑中間付近で皿状に窪む土層を確認した。人為的な掘削状況にはないが、焼土塊と灰層の堆積(SX1)が存在した。この灰層上面から瓦器碗破片が出土した。また、墳丘東斜面で強く焼けた壁面をもつ土坑(SX2)1基を検出した。土坑は楕円形を呈し、長軸は約1m、深さ0.5mを測る。土坑壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、特に東側壁面は良く焼けた状況にある。底面付近には炭混じりの灰層が存在し、埋土中には大小の石が含まれている。この2か所の焼成遺構は墓の可能性が高いが、ともに人骨の存在は確認できなかった。



第17図 2号墳墳丘横断面図



第18図 2号墳石室実測図



第19図 2号墳玄室内遺物出土状況図

(3) 3号墳(第21図)

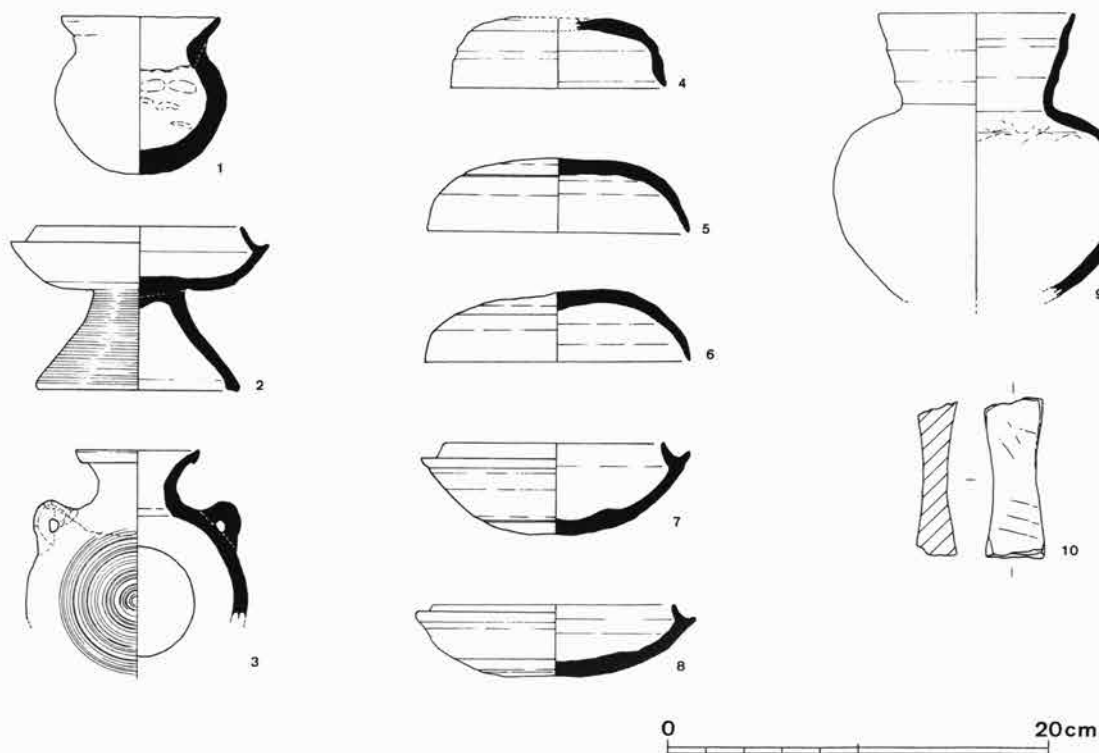
2号墳の北西15m離れた尾根筋上に位置する方墳である。墳丘は、尾根筋を横断する2条の溝で北東側と南西側を区画し、墳丘の大部分は盛土で整形している。墳丘規模は、一辺10×12mである。墳丘高は、南西および北東の両溝とも、底から1mを測る。墳丘上の中央付近から、並列する2基の埋葬主体部を検出した。2基の主体部は約1.5mの間隔をあけている。墳丘の中心をはずした主体部の状況から、当初から2基の埋葬を予定していたと考える。埋葬主体部は木棺直葬であり、2基とも墓壇掘形の形状は2段墓壇である。3号墳に伴う土器の出土は少なく、墳丘北西溝の埋土中から須恵器の丸底壺1個体分が砥石1点をまじえて出土した。

①第1主体部(第22図)

墳頂部の北西側埋葬主体を第1主体部とした。2段墓墳の掘形のうち1段目は、全長が3.8m、幅は1.3～1.5m、深さ0.15mを測る。墓墳底中央に存在する木棺掘形は、全長3.3m、幅0.45～0.65m、深さ0.15mを測る。木棺掘形の横断面が丸く、両小口もゆるやかに上方に立ち上がる堆積土の存在から、木棺は舟底形木棺が使用されたと判断する。木棺掘形の北東側小口は南西側小口に対し幅が広く、被葬者の頭位は北東側と判断する。木棺内部と棺外には、鉄器を主体とする副葬品が多数存在した。

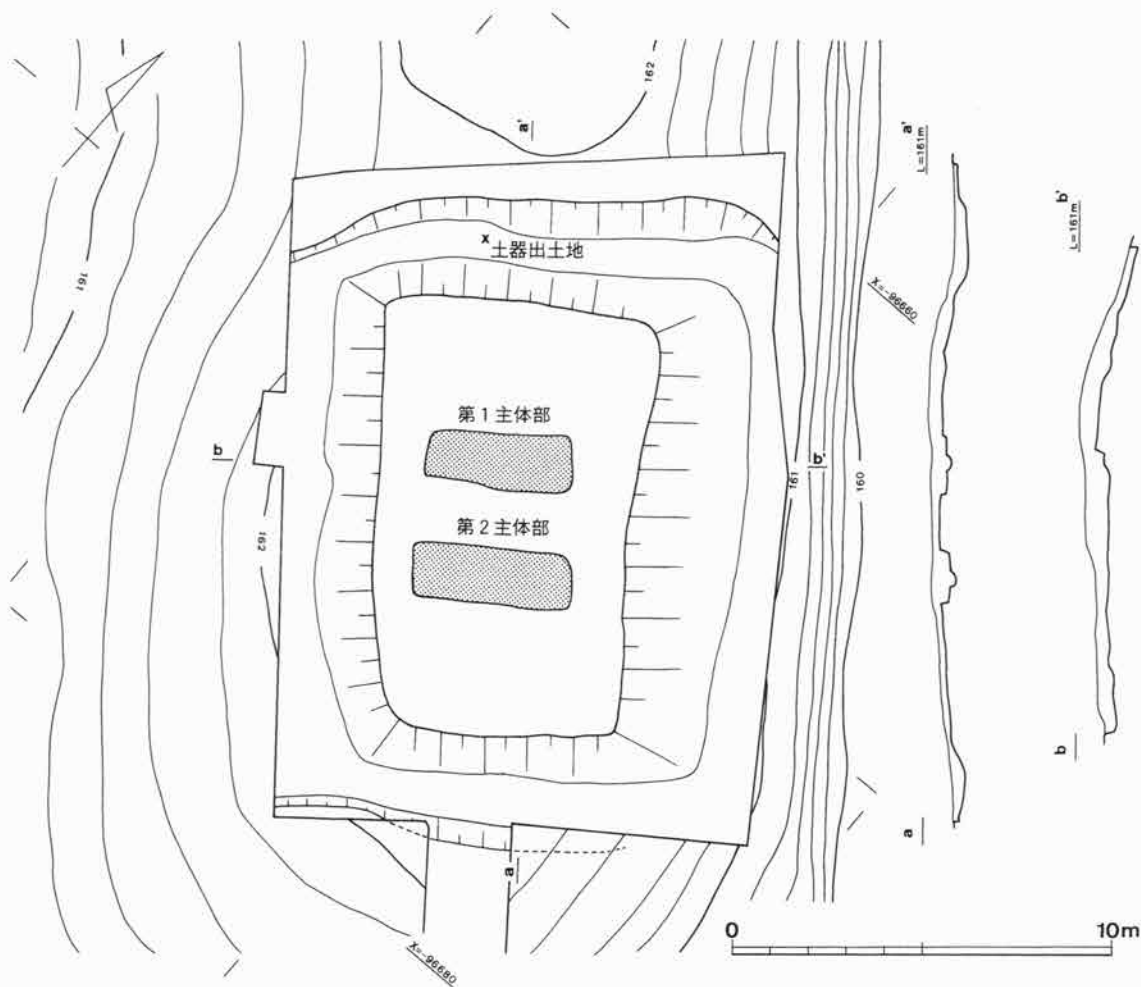
棺内の副葬品として、北東小口付近に鉈5点、曲刃鎌2点のほか、小形の砥石1点が存在した。この一群の鉄製品は墓墳底上にあつて、整然とまとまった状況にある。棺内中央部では、右側棺側に沿って刀1点、左側棺側部から剣1点が出土した。刀と剣はともに切先を南西の足下側に向け、ともに柄尻位置をほぼ揃えている。

棺内相当地点から出土した鉄製品の一部に、棺上に置かれていた可能性が高いものが認められた。いずれも墓墳底からの遊離や、木棺の主軸に斜行した乱雑な印象が強いものである。南西小口部では袋状鉄斧1点と平根式鉄鍬5点が出土している。鉄鍬は墳底から2～7cm遊離した状況にあり鍬の先端は南西に向けるものが多いが、一部の鍬は垂直に先端を上に向けている。鉄斧は墓墳底に接しているが、長軸が墓墳主軸に斜行する。この一群の鉄鍬と鉄斧には相対する小口側の鉈群と異なり整然さが伴わない。また、刀の切先から10数cm離れて一塊りの鉄鍬が出土したが、墓墳底から1cm程度遊離している。鍬の先端は北東に向ける。2群に分かれた鉄鍬は、各先端を逆方向に揃える状況にある。木棺上に置かれた矢は、2群間で鍬身と矢羽を交互に揃えていた可



第20図 2号墳玄室内・3号墳出土遺物実測図

1～3. 2号墳初葬面 4～8. 2号墳追葬面 9. 3号墳北西溝 10. 3号墳第1主体部



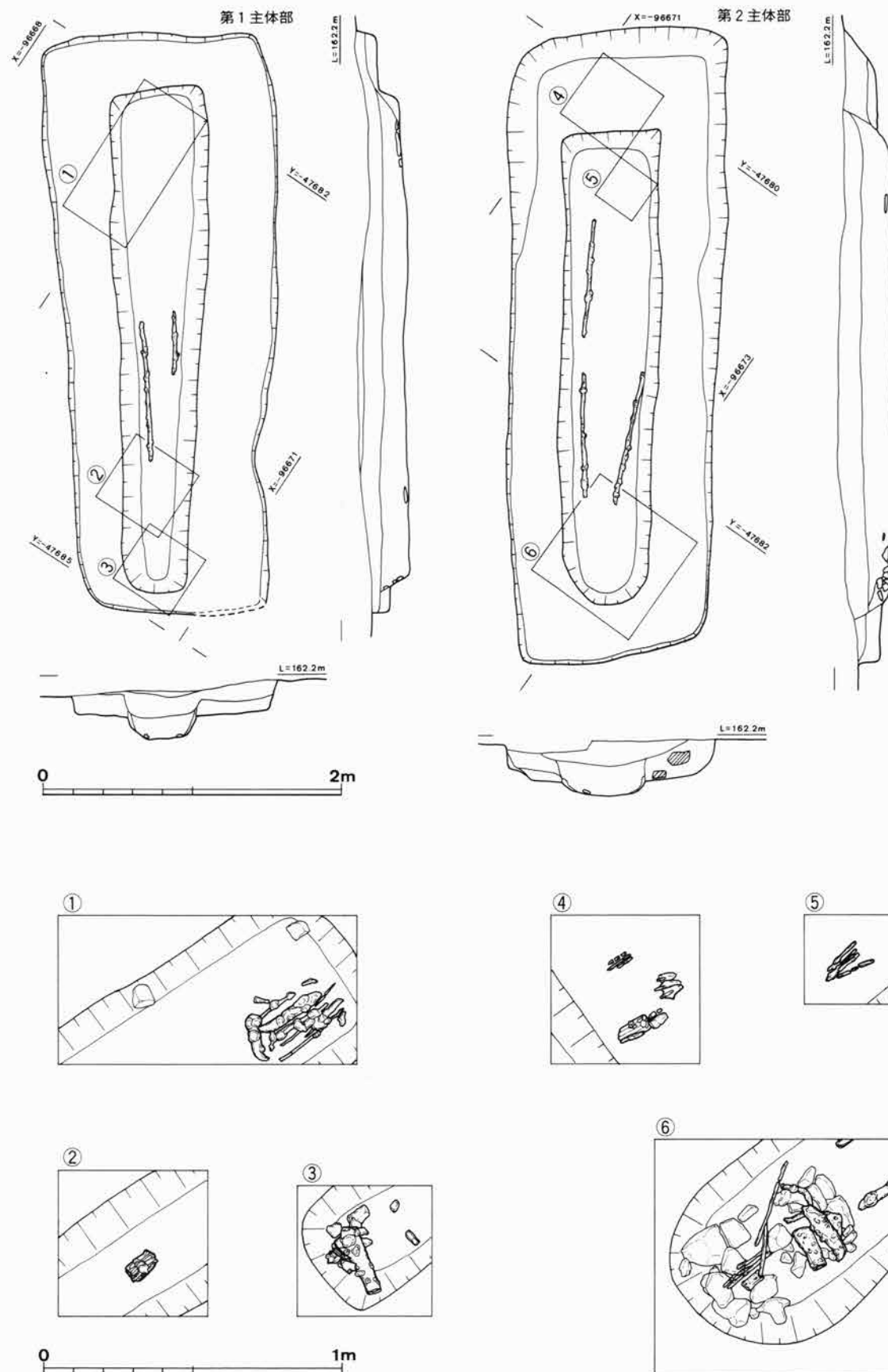
第21図 3号墳実測図

能性が高い。

②第2主体部(第22図)

2段墓壇掘形のうち1段目は全長が4.2m、幅は1.3～1.5m、深さ0.15mを測る。墓壇底中央の木棺掘形は全長が3.15m、幅は0.45～0.65m、深さ0.1mを測る。木棺掘形の横断面が丸く、両小口もゆるやかに上方に立ち上がる堆積土の存在から、木棺には舟底形木棺が使用されたと判断する。木棺掘形の南西小口部には、幅約0.35m、長さ0.55mの範囲に、5～7cm大の角礫が集石されていた。集石は、木棺掘形の地山面の直上にあり、集石の表は乱雑で、平坦な面を揃える状況にはない。集石下には、ほかの遺構もなく、集石の性格は不明な点が多い。集石は、木棺内とは考えにくく、検出位置から棺底外の木棺裏込めとみられる。木棺掘形の北東側小口は幅が広いことから、被葬者の頭位は北東側と判断する。

棺内と棺外の1段目掘形部分には、鉄器を主体とする副葬品が多数存在した。棺内には、右棺側から鉄刀2点、左棺側に鉄刀1点が認められる。いずれも切先を足元側に向けている。木棺掘形南西小口の集石上面では、鑄造鉄斧2点・曲刃鎌1点・「U」字形鋤先2点の一群と、やや離れて鉋群が認められた。このうち前者は整然とした列びがみられるが、後者の鉋群は乱雑な状況にある。鉄斧などの一群は棺内遺物、鉋群は棺上遺物とみることができる。棺外では、木棺掘形



第22図 3号墳第1主体部・第2主体部実測図

北東小口外の1段目墓壙底上から、先端を北東に向ける鉄鏃群が出土した。また、木棺掘形内の南東小口付近では、墓壙底からやや遊離して長茎鏃の一群が存在した。この長茎鏃も木棺上に置かれたものとみている。

(竹原一彦)

③3号墳出土遺物(第20図9・10)

9は口径10.5cmを測る須恵器直口壺である。口縁部外面には波状文はみられず、形骸化した2条の凸帯がわずかに観察できることから、陶邑編年MT15型式前後の時期幅のなかで捉え得る直口壺である。10は、残存長8.7cmを測る方形柱状体を呈する砥石である。上下端は欠損している。第1主体部鈍群とともに出土した。

(小池 寛)

(4)6号墳(第23図)

6号墳は、3号墳から尾根の基部側に約200m離れた、標高173m付近の尾根筋東側斜面に位置する。墳形は方墳である。斜面下方側の北東を除く3方に墳丘を区画する溝をめぐるせる。溝幅は尾根筋側の南西部は幅約2m、深さ0.3mの規模を測る。墳丘の北西と南東側では、溝幅が広がる状況にある。墳丘は丘陵斜面の低所側と北東斜面部に厚く盛土を行い方形の墳丘を整えている。裾周りでは一辺が11×10m、高さは北東部で1.6m、南西側では0.5mを測る。

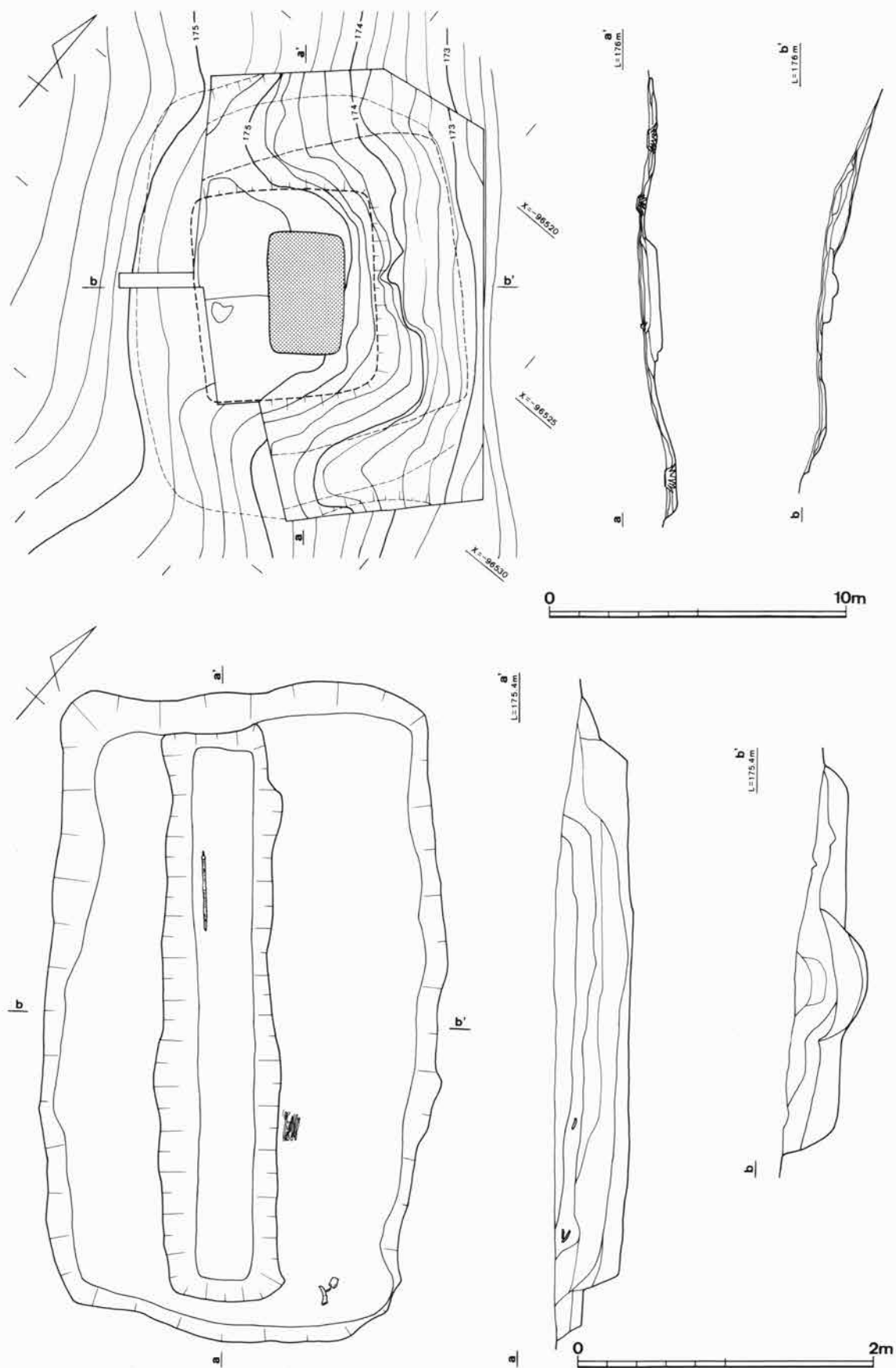
墳頂部の中央部から1基の埋葬主体部を検出した。主体部は木棺直葬で、墓壙掘形は2段墓壙である。1段目墓壙底の中央に木棺掘形が存在する。1段目の墓壙の規模は全長4.4m、幅2.0m、深さ0.2mを測る。2段目墓壙の規模は、全長が3.7m、幅は0.7m、深さ0.25mを測る。木棺掘形は、横断面の形状が丸く、小口の壁面が直線的に上方に立ち上がる。この掘形の形状から、割竹形木棺が使用されたと判断する。

埋葬主体に伴う出土遺物として、墓上付近から須恵器の1群、棺内と掘形内から鉄製品の出土をみている。須恵器は、試掘調査時に地表の腐植土層直下から出土したもので、高杯と蓋が各2点、甕1点で構成され、かためて置かれた状態で検出した。出土位置が主体部の中央部付近であり、墓上祭祀に伴う遺物と判断する。主体部では、棺内の北西側から鉄剣1点が出土した。切先は南東に向けている。棺外では、1段目墓壙の中央付近、北東側棺側部から鉄鏃16点、1段目墓壙掘形の南東端から曲刃鎌1点・用途不明品2点、木棺上の旧表土下から、釘状の鉄製品1点が出土した。この釘状の鉄製品は、後世の遺物の混入品と思われる。

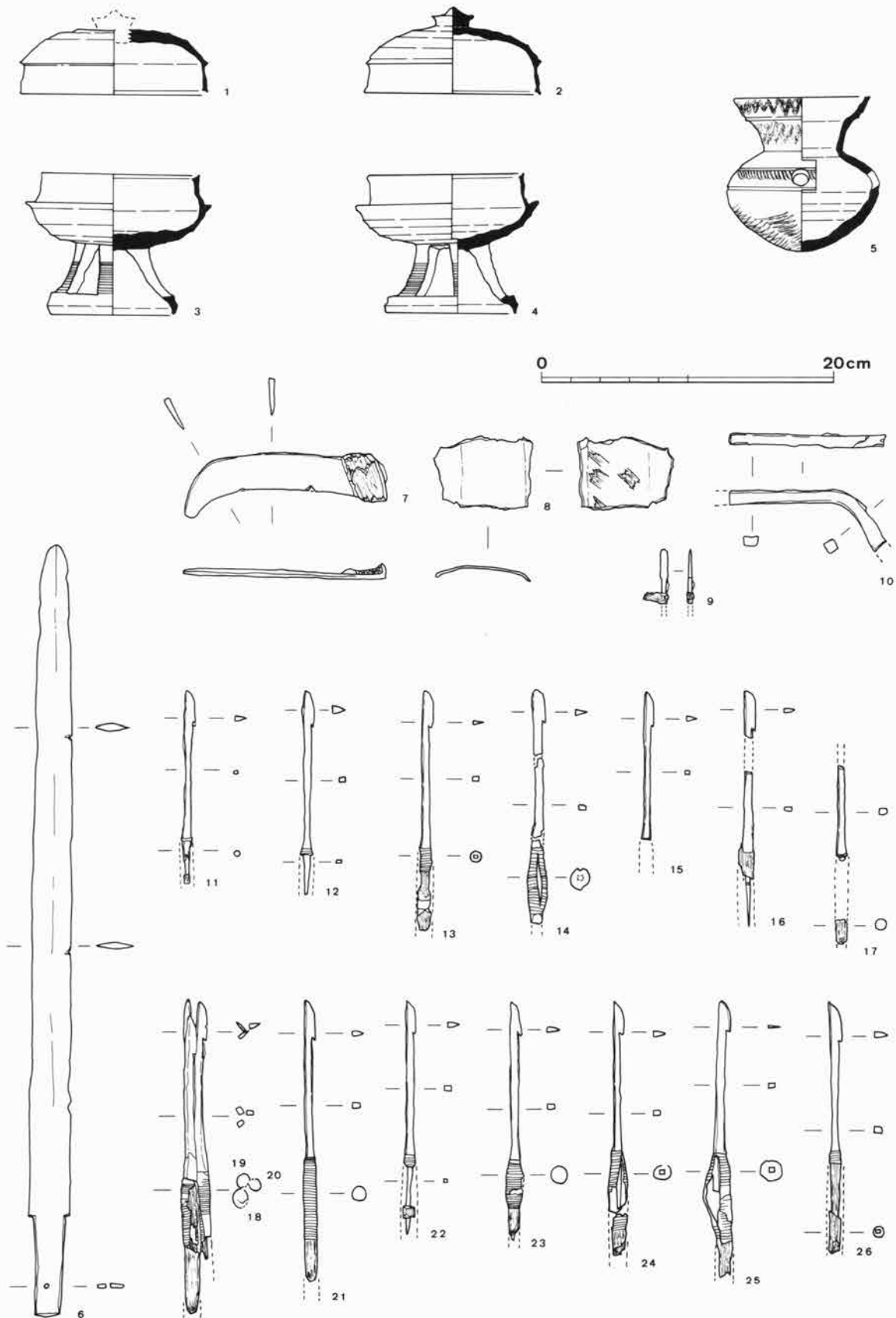
墳丘部分の調査で、古墳時代初頭の古式土師器(庄内並行期)の破片が出土した。調査範囲内には、同時期の遺構は存在しない。出土土器には甕底部が4点含まれ、体部破片も多いことからみて、調査地周辺部に同時期の遺構が存在する可能性が高い。

6号墳出土遺物(第24図)

1～5は須恵器である。1・2は3・4の有蓋高杯とセットとなる蓋である。概ね口径は12～13cmで、器高6cmを測り、大きな宝珠つまみを有する。3・4は有蓋高杯である。概ね口径は11cm、器高9.5cmを測る。口縁部はわずかに外反し、脚部には3方向の透かし孔を有する。脚部



第23図 6号墳墳丘および埋葬主体部実測図



第24図 6号墳主体部出土遺物実測図

1～5・10. 墓上 6. 棺内 7～9・11～26. 棺外

外面はカキメ調整を行う。5は甕である。口径は9.5cm、器高は10.5cmを測る。体部外面はタタキによる整形を行う。これらの須恵器群は、陶邑編年TK47型式に比定できる。

6～27は鉄製品である。6は剣であり、全長は52.5cm、剣身の長さは45.5cmを測る。7は曲刃鎌である。全長は14cmを測る。8は器種不明の板状品である。厚さが1mmと薄く、周縁部を欠損している。横幅の両端は内側に巻き込む状況にあり、手鎌かミニチュア鍬先の可能性がある。9は器種不明品である。小さなヘラ状の先端部はやや丸みを持ち、基部側から先端にかけて尖り気味に終わる。柄部は方柱状の断面形で、木質が残る。10は釘とみている。11～27は片刃の長茎鎌である。概ね全長は16cm、先端から関までは11cmを測る。鎌身部は2.5cm前後で、逆刺がある。

4. ま と め

新堂池古墳群は方墳と円墳によって構成され、埋葬施設は方墳では木棺直葬、円墳では横穴式石室であることが判明した。調査を実施した3号墳と6号墳が方墳であり、古墳時代中期後半から後期初頭にかけて築造される。なお、両古墳の前後関係は6号墳が3号墳に先行して築かれている。1号墳と2号墳は円墳であり、ともに古墳時代後期中葉に築造されている。両古墳の前後関係は、1号墳の玄室奥壁に大形石材を使用する新式の要素が認められ、2号墳の築造が1号墳に先行すると判断する。

調査を実施した4基の古墳は、いずれも墳丘規模が12～15mの小規模古墳である。副葬品も鉄器が比較的多量に出土するが、特に突出するものではない。このような内容から、各古墳の被葬者は、首長に属する系列とは異なり、新堂周辺の小地域を治めた有力者層と想定される。

新堂池1号墳はT字形石室を有し、府内では京都市本山神明1号墳(北区上賀茂)に次いで2例目となる。T字形石室は、西は長崎県、東は福島県まで広範囲に存在し、近江(滋賀里)・紀伊(岩橋)・出雲(松江)・北部九州に多くみられる。1号墳同様、特に片袖傾向が強く意識された「L」字形に近い石室としては、石川県蝦夷穴古墳(雌穴)に唯一類例がある。

南丹波地域の最古の横穴式石室は、亀岡市北ノ庄13・14号墳であり、6世紀前葉(MT15型式並行期)に位置づけられる。新堂池1・2号墳は6世紀中葉のTK10型式並行期であり、先の北ノ庄13・14号墳に次ぐものである。ほかの同時期古墳としては、亀岡市拝田16号墳・医王谷3号墳、八木町小谷17号墳が知られる。北ノ庄13・14号墳の石室は九州系の特徴をもち、拝田16号墳は紀伊の岩橋型といわれている。新堂池1号墳のT字形石室も、岩橋との関連性を窺えるものである。今回の新堂池1・2号墳の調査は、南丹波地域での横穴式石室導入について考える貴重な資料となった。

(竹原一彦)

注1 矢野ふさゑ・上西ため子・三浦悦子・大下陽子・内藤亨・内藤久江・前田準一・藤本善弘・高屋朋江・前田武雄・村上勉・内藤愛子・森弘子・山内実・鈴木達也・村上計太・三浦貴弘・前川敬子・竹中ひろみ・小林佳世・西喜多真実・井上聡・安田裕貴子・清水友佳子・寺尾貴美子・中島恵美子

3. ^{いけがみ}池上遺跡第12次発掘調査概報

はじめに

今回の発掘調査は、緑資源公団西部支社の依頼によって南丹地域農用地総合整備事業に先立って実施された。池上遺跡は平成8年度の八木町教育委員会による分布調査によって発見された遺跡である。池上遺跡ではこれまで11回(別表)の発掘調査が行われてきた。その結果、旧石器時代から近世までの複合遺跡であることが明らかになった。現地の発掘調査は、当調査研究センターが平成13年10月24日～同14年2月末まで実施した(調査参加者)。調査面積は約1,300㎡である。現地の発掘調査は、当センター調査第2課調査第2係専門調査員岡崎研一、同調査員中川和哉が担当した。なお、調査に係る経費については、全額、緑資源公団西部支社が負担した。

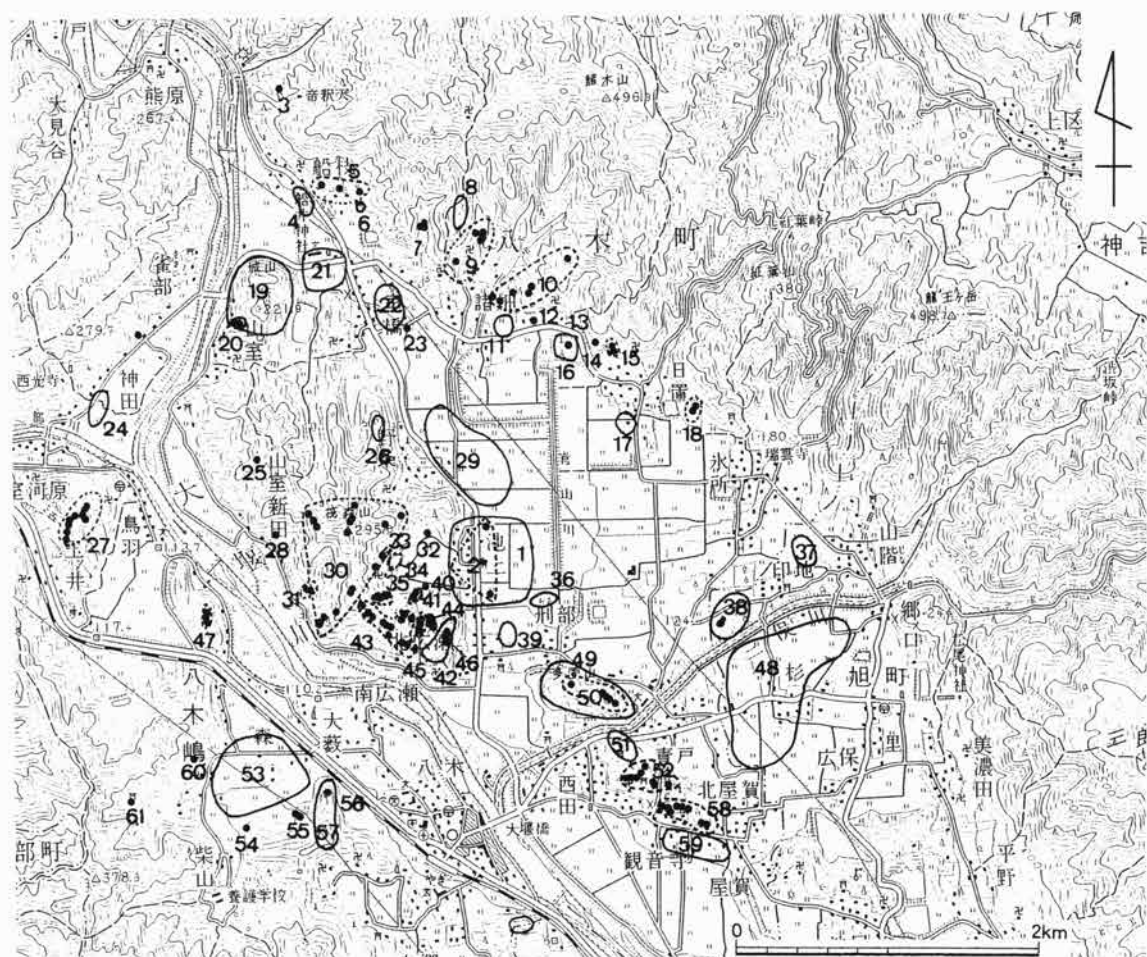
整理作業は平成13・14年度に行った。本概報作成、編集は中川が担当した。調査期間中は八木町教育委員会、京都府教育委員会、京都府立丹後郷土資料館、地元各自治会、池上地区の方々に多くの御配慮をいただいた。遺跡調査や遺物について、谷口悌、都出比呂志、松藤和人、山中一郎、深澤芳樹、菅栄太郎、若林邦彦、石井清司、田代弘、小池寛、森島康雄、野島永、藤井整諸氏の御助言をいただいた。

1. 位置と環境

池上遺跡の所在する八木町は、亀岡盆地の北端に位置する。亀岡盆地は鮮新・更新世の後半から褶曲や段層運動が起こった結果、丹波山地に生まれた南北方向の大小の盆地のひとつである。亀岡盆地は京都市の所在する京都盆地に隣接する盆地で、北西から南東に桂川が貫いて流れる。盆地周辺の山地からは桂川に向かって小河川が流れ込み、それらの河川によって浸食され段丘地形が形成されている。池上遺跡の所在する地域は、亀岡盆地においても小山に囲まれさらに小盆地状を呈する。この小盆地の南北方向に官山川、東西に三俣川が流れる。遺跡は菅谷川あるいは先行河川によって形成された埋没した段丘上に立地していると考えられる。遺跡の西側には亀岡盆地の中にある山ではもっとも高い標高295mの筏森山がある。筏森山は大国主命と請田神社、鉾山神社、持籠神社の3人の神様が集まり、協力して水の溜まった亀岡盆地の水を抜き水田を開いたとの伝承(京都新聞社編1977)のある山である。

池上の地名は筏森山の東麓にある天台宗の寺院、池上院に由来する。池上地区は、水田耕作の水を地域内で十分調達できないため、桂川上流域の園部からの用水によって水を得ている。そのため用水ができるまでは、水田の面積は現在より少なかったと考えられる。

亀岡盆地はかつて淡水の湖であったものが離水して陸化したものと考えられている。亀岡盆地ではじめて人類の足跡が認められるのは、池上遺跡である。後期旧石器時代のナイフ形石器が出



第25図 調査地および周辺遺跡分布図(国土地理院1/50,000京都西北部)

- | | | | | |
|------------|-------------|---------------|-------------|------------|
| 1. 池上遺跡 | 2. 狐塚古墳群 | 3. 杓ヶ谷古墳 | 4. 船枝遺跡 | 5. 清谷古墳群 |
| 6. 船枝館跡 | 7. 美津谷古墳群 | 8. 畑中城跡 | 9. 大谷口古墳群 | 10. 松本古墳群 |
| 11. 諸畑遺跡 | 12. 福本古墳群 | 13. 鎧塚古墳 | 14. 西山古墳 | 15. 西上里古墳群 |
| 16. 八木田遺跡 | 17. 日置遺跡 | 18. 東山古墳群 | 19. 新庄城遺跡 | 20. 山室古墳群 |
| 21. 室橋遺跡 | 22. 新庄遺跡 | 23. 天王古墳 | 24. 美里遺跡 | 25. 草福古墳 |
| 26. 野条城跡 | 27. 鳥羽古墳群 | 28. 新田古墳 | 29. 野条遺跡 | 30. 筏森山古墳群 |
| 31. 城谷口古墳群 | 32. 八幡宮古墳 | 33. 丈六谷古墳 | 34. 池上院北古墳群 | |
| 35. 寺内西古墳群 | 36. 池上古里遺跡 | 37. 山階遺跡 | 38. 梗塚古墳 | 39. 西里遺跡 |
| 40. 寺内経塚 | 41. 寺内古墳群 | 42. 北広瀬城跡 | 43. 南尾西古墳群 | 44. 南尾東古墳群 |
| 45. 南尾古墳群 | 46. 北広瀬城古墳群 | 47. 八幡山古墳群 | 48. 杉北遺跡 | 49. 刑部城跡 |
| 50. 多国山古墳群 | 51. 西田城跡 | 52. 住吉神社裏山古墳群 | 53. 八木嶋遺跡 | |
| 54. 柴山古墳 | 55. 森古墳群 | 56. 鶴首山古墳 | 57. 鶴首山城跡 | 58. 池内古墳群 |
| 59. 観音寺遺跡 | 60. 大岩古墳 | 61. 神田古墳 | | |

土している。縄文時代草創期の黒曜石製の槍先形尖頭器が亀岡市鹿谷遺跡(野島・河野1993)、有舌尖頭器が亀岡市千代川遺跡で出土している。

縄文時代は千代川遺跡で押型文土器片がみられるのがもっとも古い事例で、中期は千代川遺跡、後期は三日市遺跡・千代川遺跡・太田遺跡・八木嶋遺跡、晩期は北金岐遺跡・千代川遺跡でそれぞれ発見されている。

弥生時代に入ると太田遺跡で前期の環濠集落が営まれる。千代川遺跡でもまた土器が出土している。桂川の対岸にある蔵垣内遺跡、河原尻遺跡、川尻遺跡、大淵遺跡でも前期の土器が発見さ

れている。八木町ではまだ前期の集落は発見されていない。中期の集落には千代川遺跡、天川遺跡、余部遺跡などの桂川西岸の集落がよく知られている。近年、桂川西岸の亀岡市里遺跡、池上遺跡で中期集落が発見されておりこれまでの遺跡分布の再考が必要とされる。後期には北金岐遺跡、南金岐遺跡、東方遺跡、太田遺跡で土器が出土している。東方遺跡は行者山(標高432m)の尾根線上(標高340m)にある板状巨石2枚と小さな石からなる岩陰に壺がほぼ完形で埋納されていた。八木町では野条遺跡(田代2003)で焼失家屋が検出されており、日本海側の地域の影響を受けた土器が出土している。

古墳時代には大形の古墳は、桂川東岸地域に多く分布する。八木町との市町境の亀岡市側に古墳時代の初頭と考えられている糠塚古墳がある。前期末葉には亀岡盆地の山城地域からの入り口部にあたる亀岡市篠町に向山古墳が築かれる。この古墳からは銅鏡、石釧、車輪石などが出土している。中期には亀岡盆地では方墳が造られ、盆地内の平野部にあたる3つの地域に2基ずつ作られる傾向が見てとれる。八木町池上遺跡に近い桂川東岸(川東)に坊主塚・天神塚古墳がある。このうち坊主塚は1辺が40～50mあったと考えられている。後期に入ると川東地域に亀岡盆地最大の前方後円墳、千歳車塚(全長約80m)が造られる。この古墳は3段築成で、左くびれ部には造り出しがあるとされている。この古墳の東側には丹波一宮出雲神社が鎮座する。同じく川東地域において、平成13年度の発掘調査によって前方後円墳である保津車塚古墳(全長約52m)が発掘された。周溝部からは盾形の木製品、いわゆる木の埴輪が多く出土した。川西の地域では、八木町との境にある亀岡市の拝田16号墳(全長約44m)が前方後円墳として知られている。主体部は石棚付横穴式石室で、和歌山市岩橋千塚古墳群の石室との類似点から、紀氏との関連が指摘されている。また後期には丘陵部を中心に多くの群集墳が造られるようになる。池上遺跡の周辺にも筏森山古墳群、八幡宮古墳、丈六谷古墳、城谷口古墳群、池上院古墳群、寺内西古墳群、寺内古墳群、南尾西古墳群、南尾東古墳群、南尾古墳群、北広瀬城古墳群が点在し、池上遺跡の指定範囲内にも、狐塚古墳群があったとされている。

古墳時代の集落の中でも注目されるのが、古墳時代末葉とされる桂川西岸の八木町八木嶋遺跡である。この遺跡からは6世紀末～7世紀初頭の庇付の大型掘立柱建物跡が多く発見されている。いわゆる豪族居館として位置付けられる。池上遺跡では6世紀代の独立棟持柱建物跡が2棟発見されており遺跡の性格が注目される。

白鳳期には桑寺廃寺、観音芝廃寺、與能廃寺、池尻廃寺が造られる。池尻廃寺は八木町に近接し近くには天神塚・坊主塚古墳がある。この寺の近くには秦氏と関係がある式内社亀岡市松尾神社、八木町幡日佐神社があり、この地域では秦河勝を祖先とする伝承を持つ川勝姓が多い。

奈良時代には川東地区の亀岡市千歳町と隣接する河原林町に国分寺、国分尼寺がそれぞれ建立される。丹波国府の位置は、諸説がありまだ確定していない。これまで千代川説が有力とされていたが、その論拠は寛和元(985)年に藤原為頼が詠んだ歌から、国府が桂川の西岸であるとし、その地として千代川がふさわしいというものである。しかし、近年上島亨氏は、歌は必ずしも目の前に広がる景色を詠んだものでないとし、千代川説の根拠は薄いとした(上島2000)。承安4

(1174)年の後白河院の法華堂領の吉富荘が成立したときに画かれた絵の写しとされる「吉富荘絵図」には八木町屋賀、亀岡市池尻にかけての地域に「国八庁」とある大型建物が描かれている。この当時川東地区に国府があったことを示している。屋賀地区には国府と言う小字名があり、国府姓の人が多く住んでいる。国府が千代川から屋賀に移ったという説もあるが、11世紀以降の国府の機能が形骸化した中、新たな国府造営の契機を見出すことは困難である。この地域の調査が



第26図 調査トレンチ配置図

進むことによって論争の決着がつくものと考えられる。

「吉富荘絵図」には八木町池上地域に、池上寺、池上寺在家として数棟の家屋が描かれている。池上遺跡は池上寺在家のあった地域と考えられる。池上寺(現大日寺池上院)は天台密教の法流谷流の祖皇慶(977～1049)が住んだ池上坊に始まる。かつては六院を有していたとの伝承がある。万寿年間(1024～1028)には池上坊に居住していたことが文献で明らかになっている。

2. これまでの調査(第26・27図)

池上遺跡は今回の調査地から北に向かうに従い徐々に遺構検出面が高くなっていく。また柱穴などの残りも悪くなっていることから、上面が削平されていることがわかる。遺構の密度は見かけ上北に行くほどまばらになるが、削平により喪失したと考えられる。

弥生時代以前 第8次調査ではチャート製のナイフ形石器が出土している。第5次調査では縄文土器片が出土している。包含層中からではあるが弥生時代には用いられないチャート製の剥片が検出できる。本来の帰属層の特定が必要とされる。

弥生時代 第4・5・8次調査地において方形周溝墓、竪穴式住居跡、溝が多く検出されている。第4次調査地では磨製石剣が出土した墓墳が1か所認められた。

第8次調査では碧玉製の管玉やその未製品などの玉造関連遺物が多数発見されている。これまでの調査では検出遺構および遺物は、弥生時代中期後半の時期に限定できる。

古墳時代 竪穴式住居跡、掘立柱建物跡、土坑多数などが検出されている。竪穴式住居跡は四角い平面形をしたもので、古墳時代中～後期のものである。第4・5次調査では独立棟持柱建物跡がそれぞれ1棟ずつ検出されている。第4次のものは棟柱が外へ出っ張るタイプで、第5次のものは総柱の建物跡である。これまでのところ布留式土器の終末期から遺構がみられるがそれ以前の遺物遺構は検出されていない。

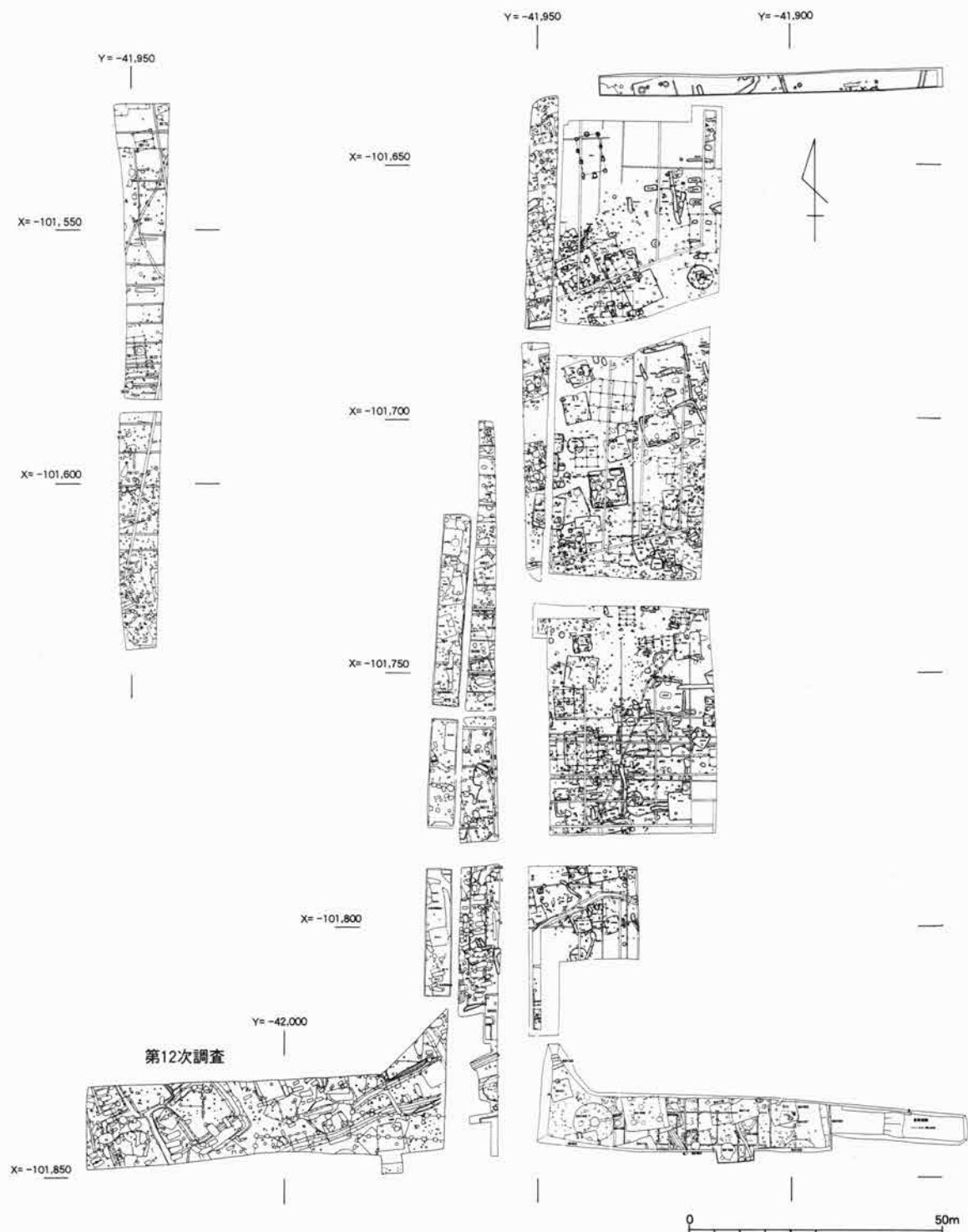
平安時代 第4次調査で12世紀の総柱の掘立柱建物跡、墓墳が検出されている。第5次調査では10世紀と考えられる井戸が検出され、内部からこの地域の基準資料となる土器群が出土している。

付表1 池上遺跡調査一覧

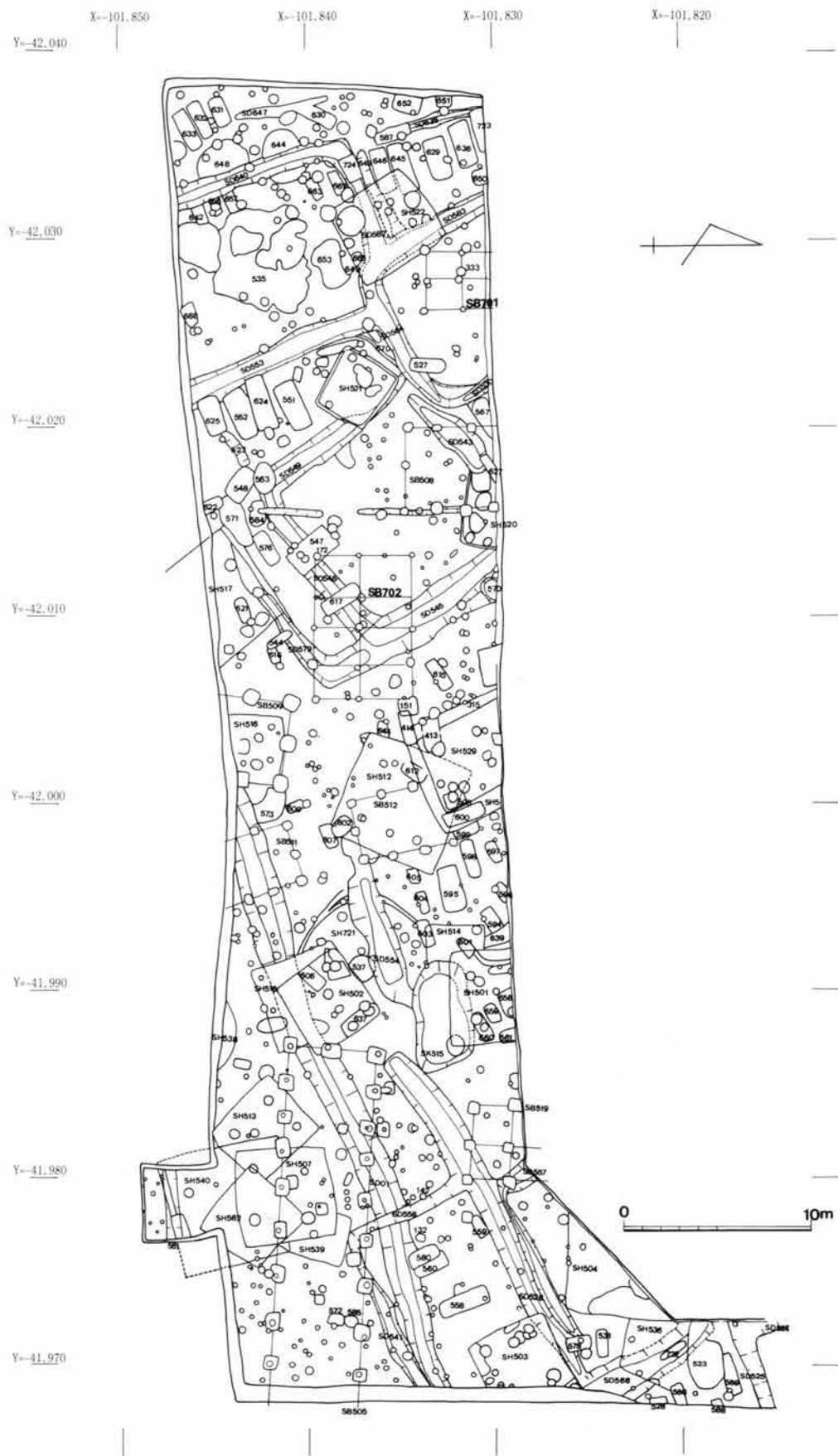
次数	調査主体	調査担当者	対象面積	調査年月日
1	八木町教育委員会	谷口悌	約24 m ²	H7年2月27日～3月9日
2	八木町教育委員会	谷口悌	約200 m ²	H9年11月27日～H10年1月27日
3	八木町教育委員会	谷口悌	約720 m ²	H10年1月19日～3月18日
4	八木町教育委員会	谷口悌	約4600 m ²	H10年5月7日～H11年2月6日
5	当調査研究センター	中川和哉・高野陽子・筒井崇史	約2000 m ²	H10年10月22日～H11年3月5日
6	京都府教育委員会	奈良康正	約400 m ²	H11年10月20日～12月3日
7	当調査研究センター	村田和弘	約2000 m ²	H12年6月21日～11月8日
8	当調査研究センター	田代弘・岡崎研一・野島永	約720 m ²	H12年11月1日～H13年2月27日
9	八木町教育委員会	谷口悌	約180 m ²	H13年10月15日～11月19日
10	京都府教育委員会	岸岡貴英	約400 m ²	H13年11月19～12月14日
11	当調査研究センター	田代弘	約650 m ²	H13年10月18～H14年2月8日
12	当調査研究センター	岡崎研一・中川和哉	約1200 m ²	H13年10月18～H14年2月8日

3. 調査の概要

池上遺跡の基本層序は、上から耕作土、床土、締まりの悪い黒褐色粘砂質土、黄褐色粘砂質土、礫層である。遺構は黄褐色粘砂質土上面で検出したが、遺構は黒褐色粘砂質土中に切り込み面が存在する。黒褐色土中で奈良時代の遺構は検出可能であるが、それ以前の遺構は肉眼的に抽出することは困難である。弥生時代の遺構では黒褐色粘砂質土中に土器がまとまって出土することが



第27図 第12次調査および周辺調査区遺構平面図



第28図 第12次調査遺構平面図

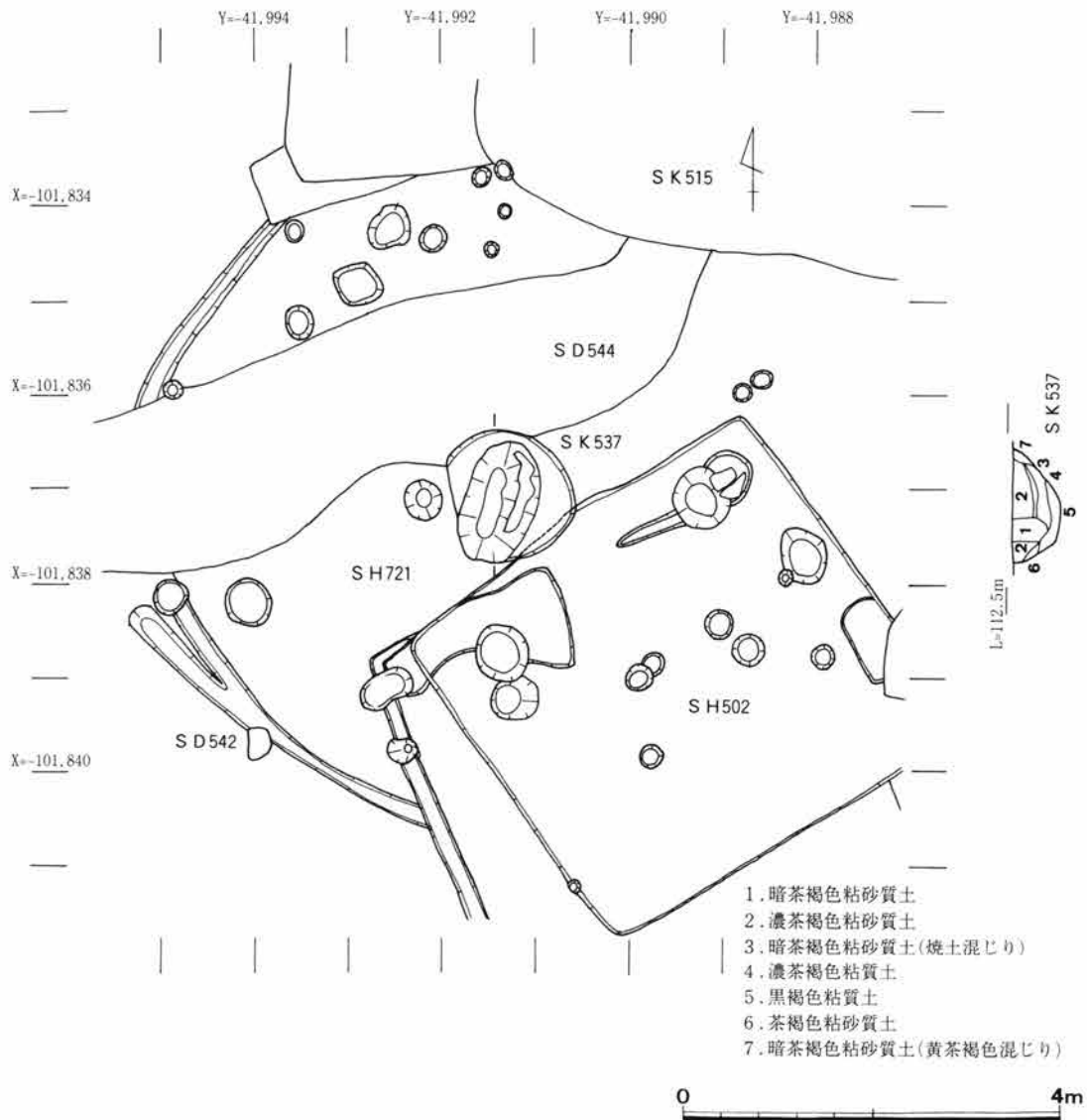
あり、その下層の黄褐色粘砂質土で同じ位置から遺構を検出することができる。遺構検出面の標高は112.5m前後である。

遺跡は筏森山裾から官山川に向かって西から東に地形が下がっていく。遺跡の基底にある礫層は、段丘礫と考えられる。締まりの悪い黒褐色粘砂質土は「クロボク」と呼ばれる層と類似し、黒と黄色の層は丹波地域では一般的にみられる層相である。北桑田郡京北町の東山遺跡(中川2000)の土壌分析では、「クロボク」層からはその下半部からアカホヤ火山灰、黄褐色土上方から始良火山灰が検出されている。

(1) 弥生時代

弥生時代の遺構には竪穴式住居跡、溝、方形周溝墓、埋葬主体部がある。竪穴式住居跡は2基が検出されている。S H 538は調査区の南辺で検出した遺構である。大半が平成14年度の調査地にあるため次年度の概報で、合わせて報告したい。

竪穴式住居跡 S H 721(第29図) 中央に長楕円形の土坑(S K 537)を持つ円形住居と考えられ



第29図 竪穴式住居跡 S H 721平面図

る。竪穴部の立ち上がりは削平のため検出できなかったが、周壁溝と考えられる溝(S D542)が検出されている。溝は部分的に2条みられる部分があることから、建替えが同位置で行われたものと考えられる。

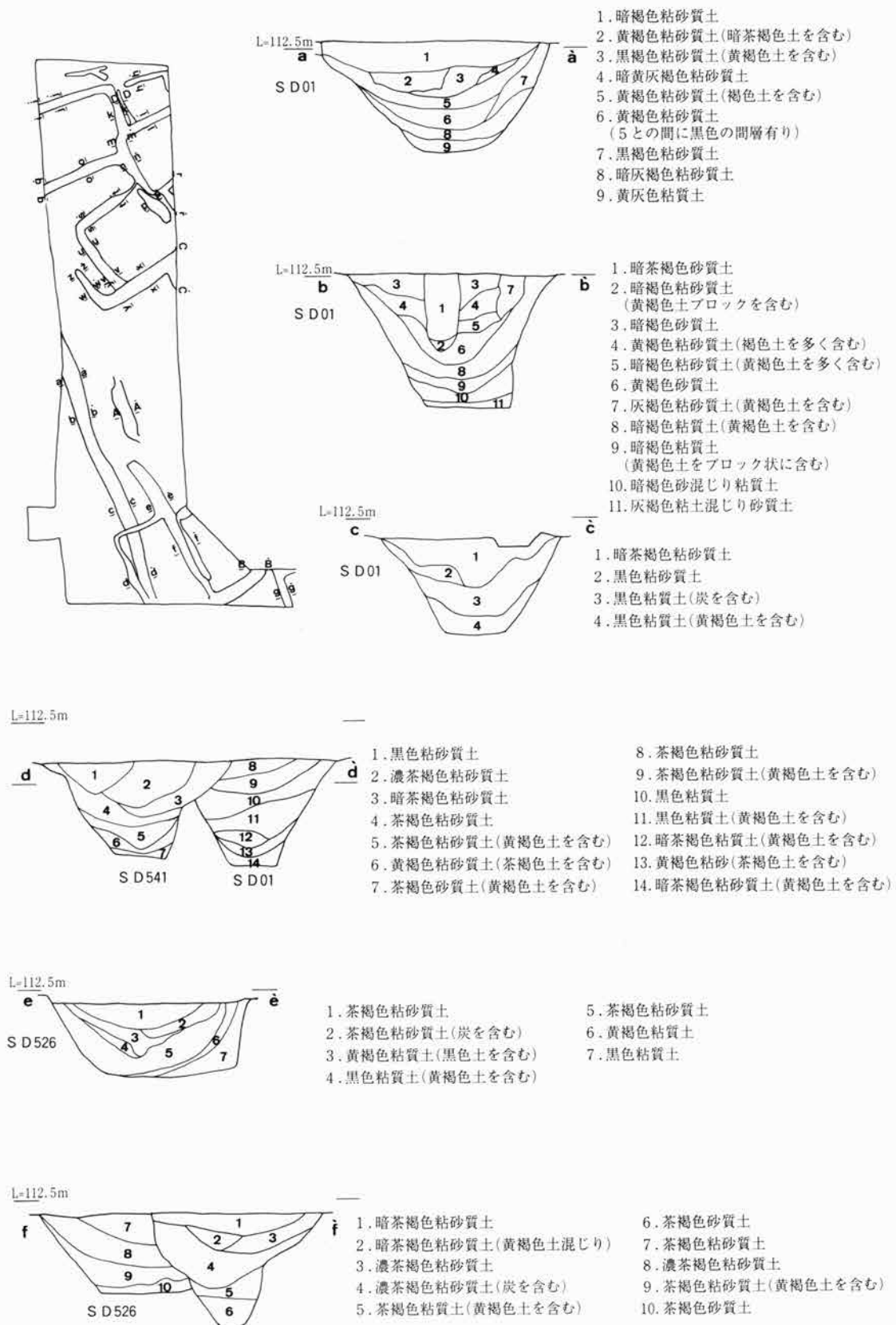
溝S D01(第30図) 調査地を南西から北東に貫く、断面逆台形状の溝である。この溝は第5次調査第7トレンチ、第8調査地でも検出されている。第5次調査地の事例では竪穴式住居跡に切られていた。また、方形周溝墓の溝にも切られていたこれらの事例から、調査区内の遺構の中ではもっとも先行する遺構と位置付けられる。出土遺物は、遺構掘削中の黒褐色土中で検出できるものと、溝中位で検出できるものが認められる。検出できた溝の全長は約34m、最大幅約2m、検出面からの深さ約1.1mである。

方形周溝墓(第34図) 方形周溝墓は溝(第30～33図)によって区画された墓であるが、削平により溝が喪失していることも考えられる。残された溝を手がかりにS T704～720の17基に分け説明したい。方形周溝墓の溝は、周溝の屈曲部間ごとに1つの遺構番号を与え遺物の取り上げを行った。S D526Aに関しては、方形周溝墓の溝と認識できていなかったため、S T615・717の南辺の溝を一括して呼んでいるが、層相の違いはなく同一時に埋没したものと考えられる。

方形周溝墓S T703(第34図) 東辺の溝(S D635;第31図)のみが検出できている。検出長約5m、幅約0.5m、検出面からの深さ約0.45mである。埋葬主体部と考えられる土壌は3か所検出されている。S K501(第34図)はS D635南端を切る隅丸長方形の主体部であるが、木棺などは検出できなかった。長さ約1.7m、幅約0.8m、深さ約0.25mを測る。S K652・651(第34図)は土壌の西部が調査区外に伸びるため主体部かどうかは不明である。S K651の断面観察からは、木棺の痕跡と考えられる立ち上がりが認められたが、平面的には検出することはできなかった。S K651の検出長約0.6m、幅約1m、深さ約0.3mを測る。S K652の検出長約0.4m、幅約0.6m、深さ約0.05mを測る。

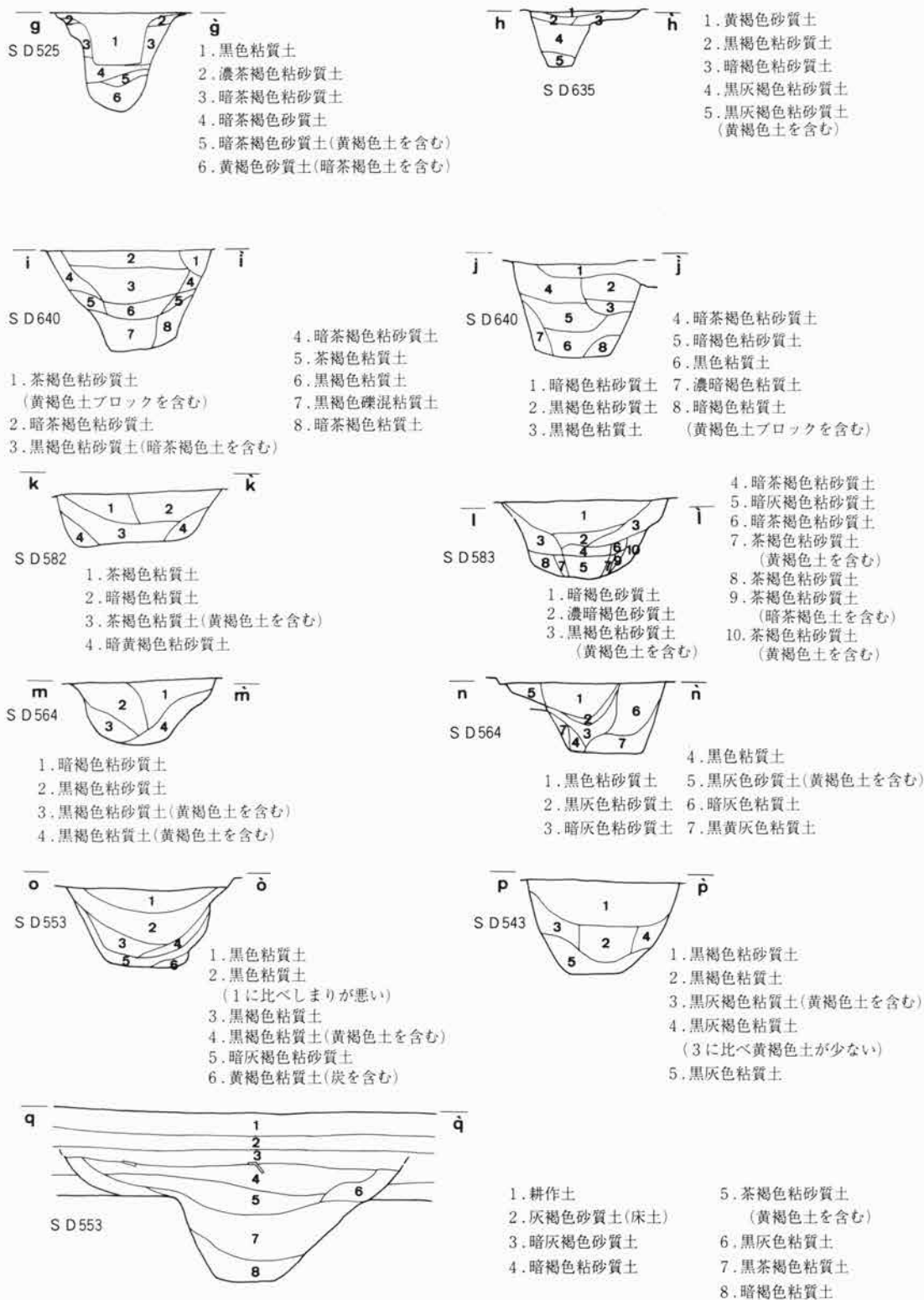
方形周溝墓S T704(第34図) 東辺が溝S D640(第31図)によって区切られた方形周溝墓である。S D647が周溝墓内にみられるが、時期は不明である。埋葬主体部は4か所検出されている。S K630(第34図)はS D647と重複する埋葬主体部であるが、検出面において切り合い関係は判断できなかった。また、木棺痕跡も認められなかった。推定長約2m、幅約0.7m、深さ約0.2mを測る。S T631・632・633(第34図)の3つの主体部は、並列して検出されており切り合い関係はみられない。S K631は墓壙の両端が2段になる。木棺は長側板で小口板を挟み込むもの(H形木棺)で南側の長側板が東側に長い形状を示していた。墓壙の長さ2.15m、幅0.85m、深さ0.25m、棺内の長さ1.05m、幅0.35mを測る。S K622はH形木棺を持つ土壌である。東端の小口板と長側板との境が明確でなかったため線を入れては分離しなかった(以下木棺に関しては境が明確でなかった場合同様に図化する)。墓壙の長さ2.3m、幅0.9m、深さ0.15m、棺内の長さ1.7m、幅0.35mを測る。S K623はH形木棺を持つ土壌である。墓壙の長さ2.4m、幅0.95m、深さ0.2m、棺内の長さ1.5m、幅0.35mを測る。

方形周溝墓S T705(第34図) S D635・582・583(第31・33図)によって区切られた方形周溝墓



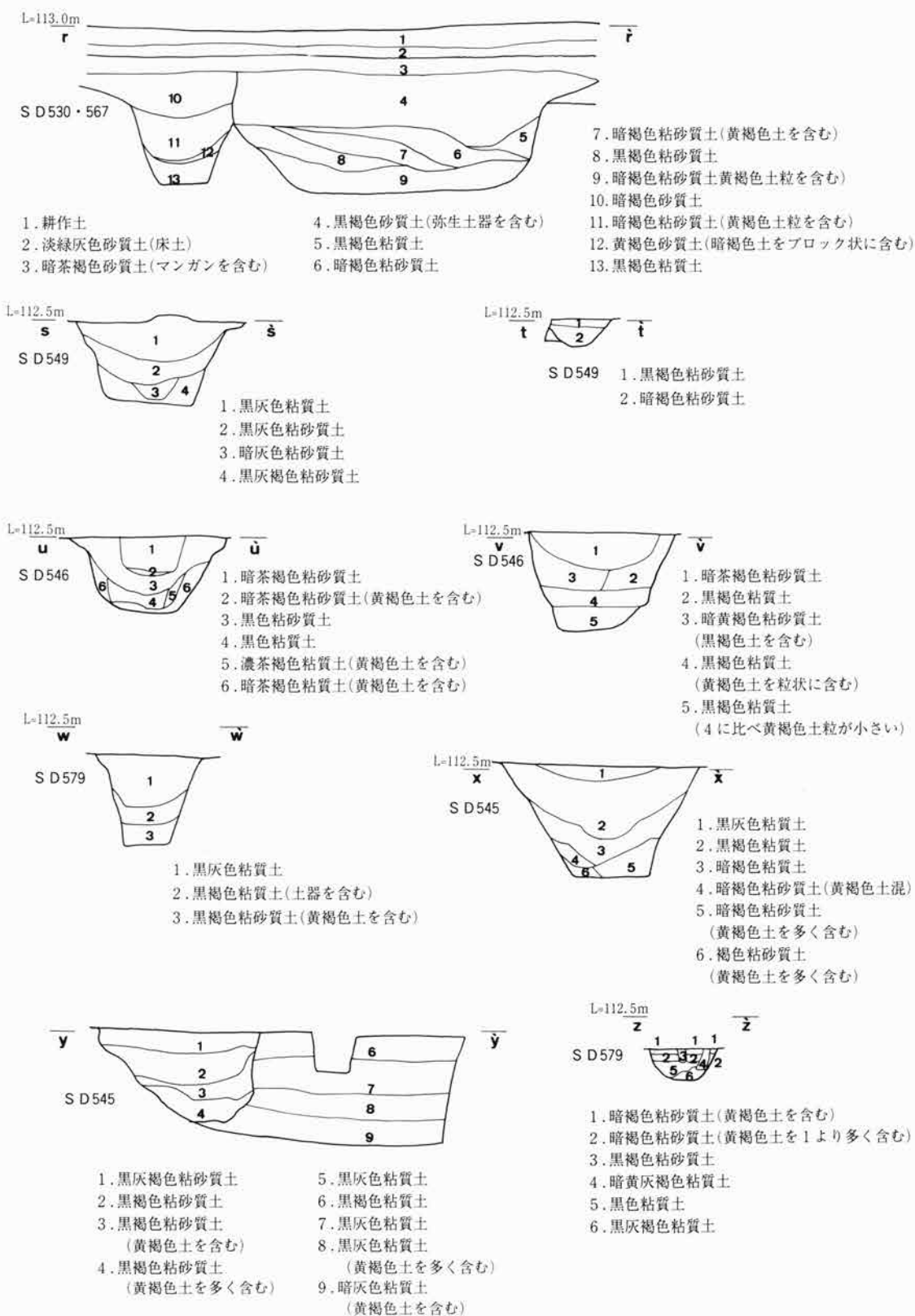
0 2m

第30図 溝断面図(1)



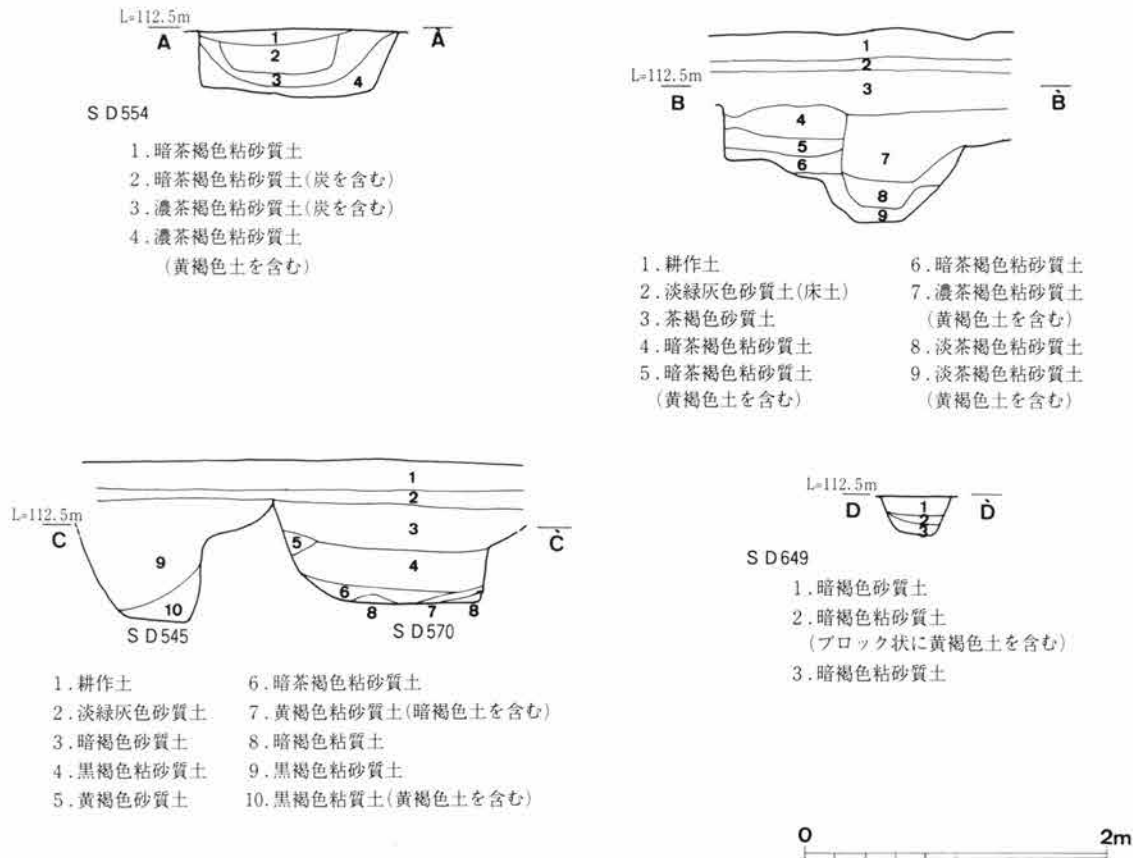
0 2m

第31図 溝断面図(2)



0 2m

第32図 溝断面図(3)



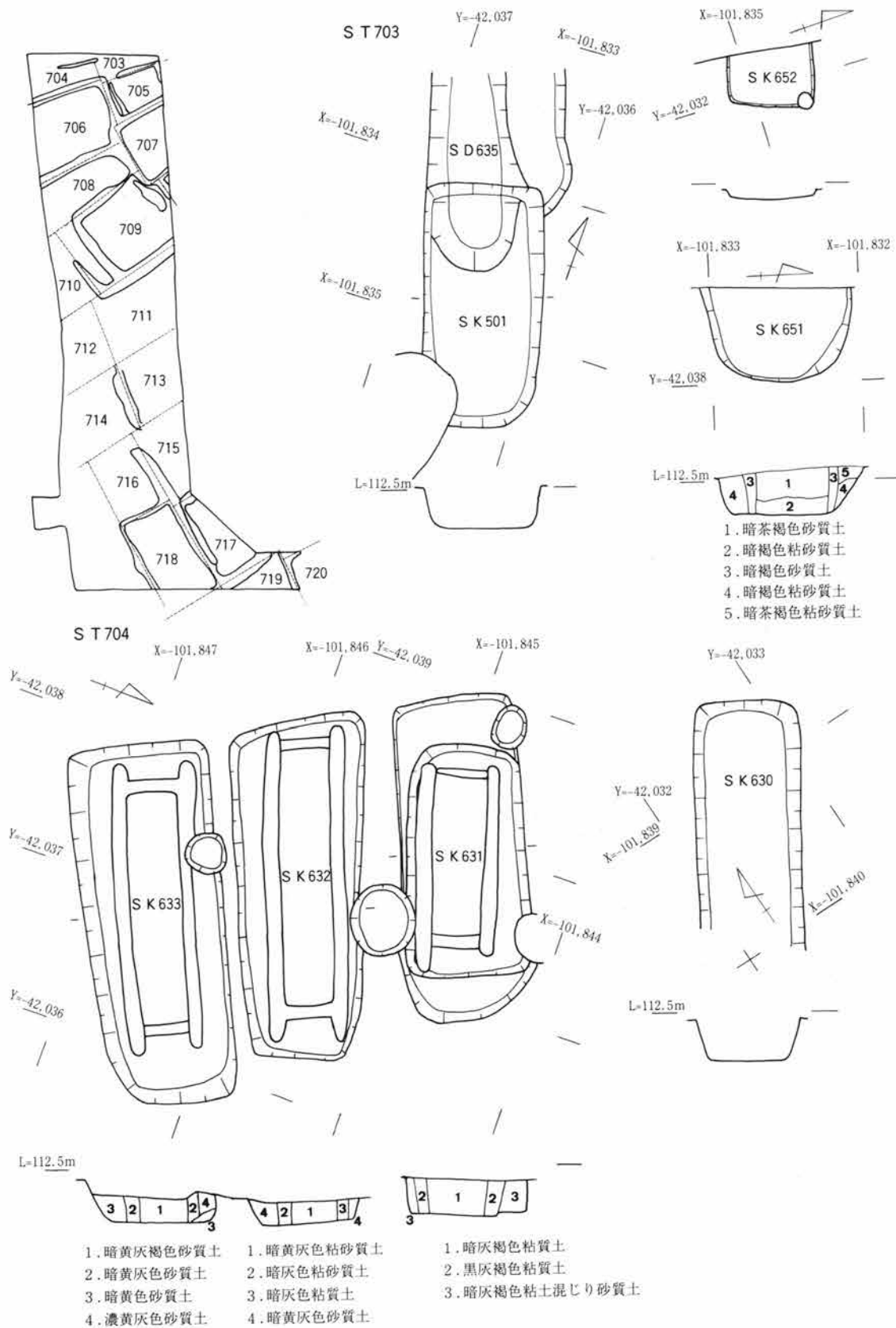
第33図 溝断面図(4)

である。平面形は長方形を呈する。短辺の溝心々間距離は約7m、長辺は10m以上である。S D 649がS D 582に並行して検出されている。S D 583に切られることから先行することがわかる。周溝墓が再掘削された痕跡の可能性も指摘できる。

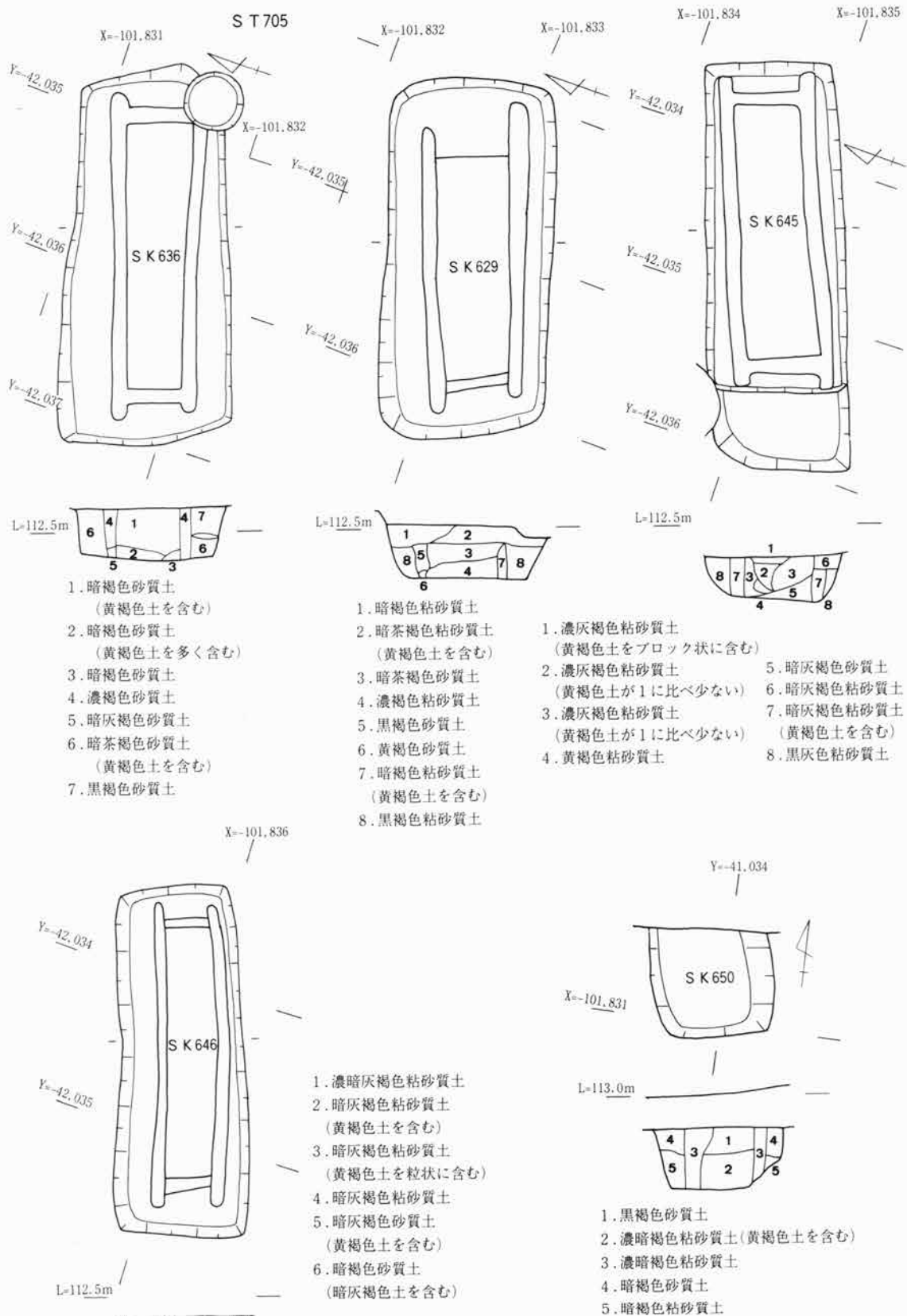
墳丘部からはS K 629・636・645・646・650・723(第35図)の6か所の主体部が検出された。S K 723は検出時には北側の周溝と認識して掘っていたが、墓壙の隅部が検出でき墓壙と確認できた。木棺の痕跡は検出できなかった。S K 723の底部から溝の残欠が検出されている。溝に主軸を合わせているが溝よりはるかに墓壙幅が大きいため、溝中埋葬というよりも溝が確認できなくなったか、埋め戻された後に埋葬されたと考えられる。前述したようにS D 649が先行して掘られたことから考えると、周溝墓が改修されたことがうかがえる。

S K 629・636は並行し墓壙規模も同規模に穿たれた墓壙である。S K 629はH形木棺を持つ土壙である。東小口板自体の痕跡は検出できなかったが、棺の内外は土層の変化が認められた。墓壙の長さ2.4m、幅1.2m、深さ0.35m、棺内の長さ1.5m、幅0.45mを測る。S K 636はH形木棺を持つ土壙である。墓壙の長さ2.5m、幅0.95m、深さ0.2m、棺内の長さ1.75m、幅0.4mを測る。

S K 645・646もまた並行して穿たれた墓壙である。S K 645は墓壙西側が1段高い構造をしているが、深い部分の規模はS K 646とほぼ一致し両端も揃う。S K 645はH形木棺を持つ土壙である。墓壙の長さ2.7m、深い部分の長さ2.2m、幅0.95m、深さ0.3m、棺内の長さ1.7m、幅0.45mを測る。S K 646はH形木棺を持つ土壙である。墓壙の長さ2.3m、幅0.9m、深さ0.25m、棺



第34図 方形周溝墓主体部実測図(1)



第35図 方形周溝墓主体部実測図(2)

内の長さ1.65m、幅0.3mを測る。

S K 650は調査区外に北側に延びる主体部で、他の4基の主体部とは90°主軸方向が異なる。木棺は平面的には検出できなかったが、断面では長側板の立ち上がりが認められた。墓壙の検出長0.7m、幅0.8m、深さ0.4mを測る。

S K 723は墓壙の検出長2.5m、幅0.8m、深さ0.3mを測る。

S K 704は平面的には確認できずS D 582の掘削中に墓壙隅部を検出することができた溝中埋葬の主体部である。埋葬主体の形態は不明である。墓壙の長さ約1.5m、幅約0.9mと復原することができる。棺の東側の溝内からは溝の底部から完形の土器(甕)が出土している。

方形周溝墓 S T 706(第34図) S D 640・582・553(第31図)によって3方を区切られた平面形が長方形の周溝墓である。短辺の溝心々間距離は約6.5m、長辺は8m以上である。S D 553では完形の土器が2か所で検出できた(第47図)。土器棺または供献土器と考えられる。墳丘部からはS K 642・643・656・657・662・663・668(第36図)の7か所の主体部が検出された。墳丘中心部は古墳時代の大型土坑S K 535によって削平されたと考えられる。

S K 642・656・657は3基並列して検出できた。周溝のS D 640とは切り合い関係を検出できなかった。主体部を溝が切るとは考えにくいことから、主体部が新しいと考えられる。小口部分が揃うことから同規模のものが存在したと想定できる。3基とも平面的には埋葬施設は検出できなかったが、断面では長側板の立ち上がりが認められた。S K 642の検出長1.1m、幅0.6m、深さ0.25m、S K 656の検出長1.1m、幅0.6m、深さ0.2m、S K 657の検出長1.1m、幅0.65m、深さ0.1mを測る。

S K 662・663は並行するほぼ同規模の埋葬主体部である。両者ともH形木棺を埋葬施設とする。S K 662の検出長1.6m、幅0.6m、深さ0.25m、棺内の長さ0.8m、幅0.3mを測る。S K 663の長さ1.25m、幅0.7m、深さ0.15m、棺内の長さ0.75m、幅0.35mを測る。

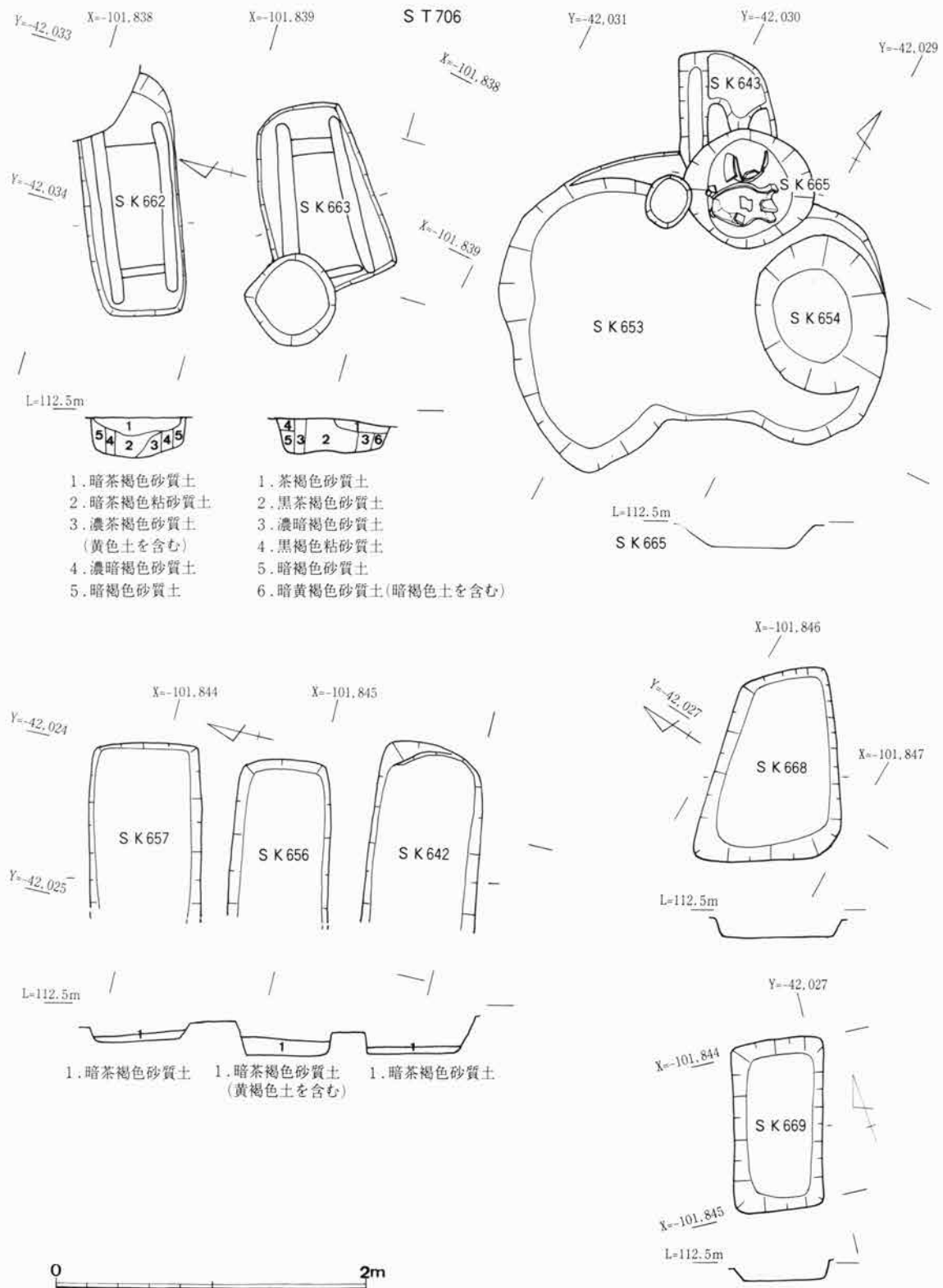
S K 665は平面形が円形を呈する土壙で、完形の土器が出土することから土器棺を埋葬主体とする墓壙と考えられる。直径約0.8m、深さ約0.2mを測る。

方形周溝墓 S T 707(第34図) S D 583・564・530(第31・32図)によって3方を区切られた周溝墓である。1辺が約東西の溝心々間距離は約6m、南北は5m以上である。溝のコーナー部が他の周溝墓の隅と共有せず、周溝墓の1辺に食い込むことからこの周溝墓に隣接する周溝墓が取り付いたとも考えられる。墳丘部には埋葬主体部は1か所も検出できなかった。他の周溝墓の主体部が検出できることから考えるとより高い位置に墓壙が穿たれていたものと考えられる。柱穴と同規模の土坑S K 333から弥生土器が出土している。

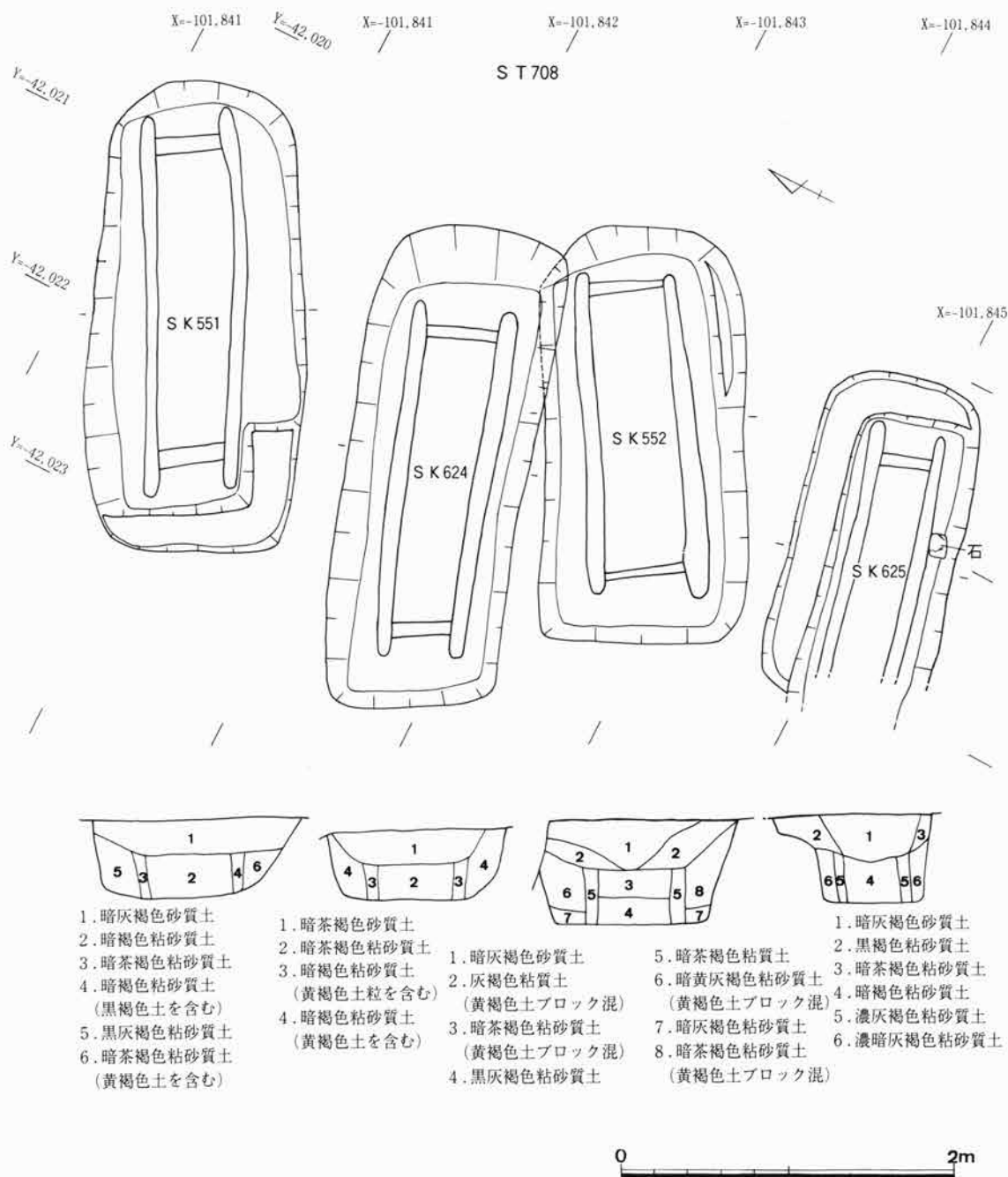
方形周溝墓 S T 708(第34図) S D 553・564・549(第31・32図)によって3方を区切られた長方形の周溝墓である。S D 564とS D 553のコーナー部分は2段になっていることから溝の再掘削があったものと考えられる。溝肩部に主体部S K 670があることから、急角度に立ち上がる内側部分が後から掘削されたと考えられる。S D 549の検出面から10cmの深さで大型の受け口口縁を持つ壺の上半部が検出できた(第23図)。墳丘部の規模はS D 579の延長線に南側の溝が存在したと

仮定すれば、短辺の溝心々間距離は約4m、長辺は9mである。

墳丘上の埋葬主体部はS K 551・552・624・625・548・670(第37・39図)の6か所が検出されている。S K 551・552・624・625は4基並んだ状態で検出されているが、S K 552・624・625は溝を切っている。S K 551が墳丘の中央部に位置していることからもっとも古い主体部と考えられ



第36図 方形周溝墓主体部実測図(3)



第37図 方形周溝墓主体部実測図(4)

る。S K 552・624は墓壇に切り合い関係が認められ、S K 552が先に築かれたことがわかる。木棺どうしは切り合い関係を持たない。

S K 551は平面形が長方形のプランの墓壇を持つ主体部であるが、南辺の西側が掘り残され「L」字形に曲がる。埋葬施設はH形木棺である。墓壇の長さ2.8m、幅1.1m、深さ0.45m、棺内の長さ1.7m、幅0.45mを測る。

S K 624は平面形が長方形のプランの墓壇を持つ主体部である。遺構の切り合い関係からみて、S K 552に後出する。埋葬施設はH形木棺である。墓壇の長さ2.9m、幅1.3m、深さ0.45m、棺内の長さ1.7m、幅0.4mを測る。

S K 552は平面形が長方形のプランの墓壇を持つ主体部である。埋葬施設はH形木棺である。

墓壇の長さ2.5m、幅1.5m、深さ0.65m、棺内の長さ1.65m、幅0.5mを測る。

S K 625は西側が周溝 S D 553と重なる墓壇で、西辺溝の埋土と土層を分けて発掘するのが困難であったが、平面の切り合いでは墓壇が後出することが確認できた。墓壇北側がテラス状に掘り残されている。南側板に沿うように平らな面を持つ礫が検出できた。埋葬施設はH形木棺である。墓壇の長さ2m、幅1m、深さ0.45m、棺内の長さ1.2m以上、幅0.35mを測る。

S K 548は溝状の土坑 S K 623が周溝の残欠とすれば、他の周溝墓の主体部となる。前述の4つの主体部が S D 553に直交するのに対し、どの周溝とも傾きが異なる。木棺痕跡は検出できなかった。墓壇の長さ1.4m、幅0.9m、深さ0.1mを測る。

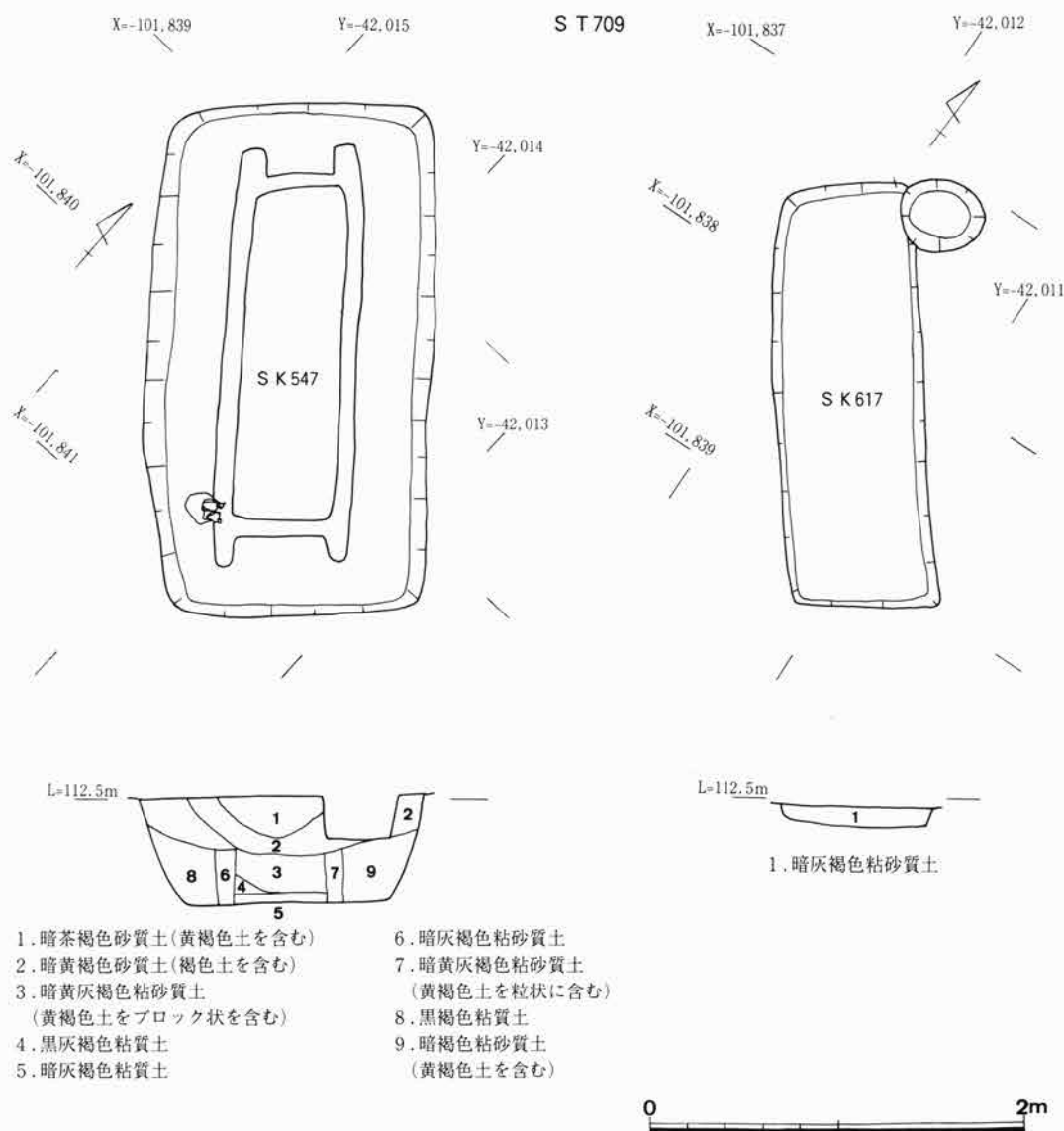
S K 670は周溝のコーナー部分の溝肩に作られた長方形プランの土壇である。木棺などは検出できなかった。墓壇の長さ0.75m、幅0.4m、深さ0.1mを測る。

方形周溝墓 S T 709(第34図) S D 549・545・546・579・543・567・564(第31～33図)で区切られた周溝墓である。S D 549は北側で細くなり S D 564の取り付け部ではほとんど残っていなかった。このことから墳丘が大きく削平されていることがわかる。S D 546を S D 545が切っており、溝の切り合い関係(第32図)から周溝墓の南側の S D 579と S D 546、S D 545で囲まれた部分が拡張されたと考えられる。北西側の辺もまた S D 543・567の2つの溝が近接してみられることから、拡張が為されたと想定できる。両方の溝から完形の土器群(第47図)が出土している。S D 545・546・549・543で区切られた部分を S T 709の第1次墳丘、S D 545・579・549・567で区切られた部分を第2次墳丘と名づけた。第1次墳丘の周溝心から規模は東西10.5m、南北10.5m、第2次墳丘は東西10.5m、南北15mである。第1次墳丘時には S T 707と溝を共有していなかった。墳丘上の主体部は1か所も検出できなかった。このことは主体部が高い位置にあったことを示しており、同時に拡張部よりも墳丘部が高かったことを示しているとも考えられる。第2次墳丘部には S K 547・617・584・576(第38・39図)の4か所の埋葬主体部を検出した。S K 547・617は並列して検出できた墓壇であるが、墓壇底の高さは異なる。両主体部とも S D 546に直交するように横切って築かれている。

S K 547は今回の調査区ではもっとも大規模な埋葬主体部である。主体部の中からは長側板の南側に接するように、完形の小型の無頸壺が出土している。棺外遺物と考えられる。また、棺内底部付近の土壌を篩にかけたところ、石鏃と考えられる薄手で両面調整の石器の破損品片が出土している。この地域は住居域が後に墓域となったため、埋土中の微細遺物の帰属には注意を要する。埋葬施設はH形木棺で、長側板と小口板とは平面的に分離できなかったが、断面観察で底板と考えられる暗灰褐色の土層が認められた。断面観察によれば底板は長側板によって挟まれている。墓壇の長さ2.8m、幅1.5m、深さ0.6m、棺内の長さ1.8m、幅0.5mを測る。

S K 617は長方形プランを持つ土壇であるが、木棺痕跡は確認できなかった。墓壇の長さ2.3m、幅0.8m、深さ0.1mを測る。

S K 584は S D 546に近接する土壇であるが切り合い関係は上面では確認できなかった。周溝墓の拡張を考えると溝に先行するものと考えられる。上面では弥生土器の甕1個体が墓壇の長軸方



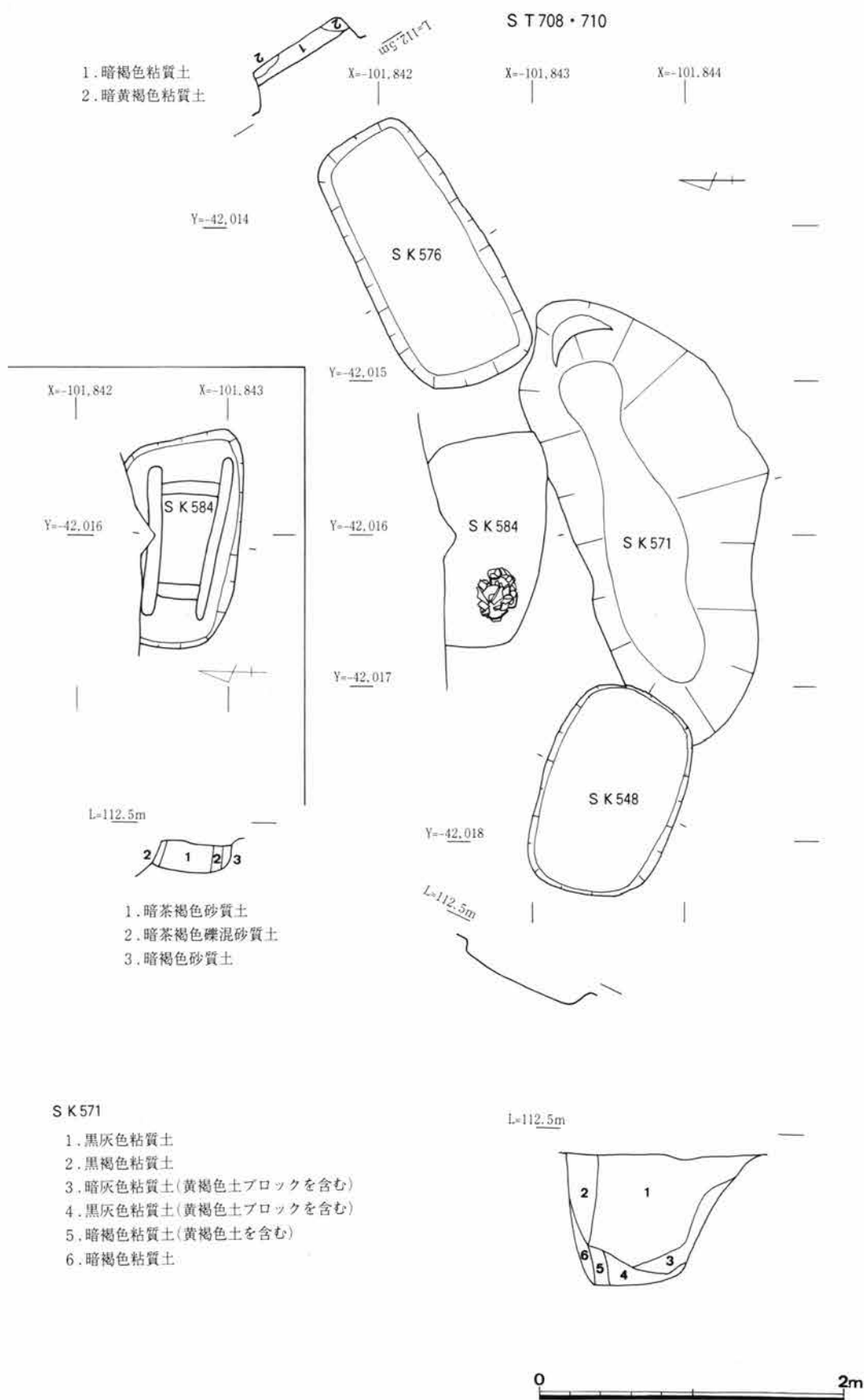
第38図 方形周溝墓主体部実測図(5)

向にあわせて口縁部を東にした状態で、墓壙西側において検出できた。棺上遺物と考えられる。このような事例は第5次調査第7トレンチの主体部でも認められた。土器を取り除くとH形の木棺が検出できた。東側の小口が西に比べやや広い構造を持つ。墓壙の長さ1.4m、推定幅0.8m、深さ0.25m、棺内の長さ0.6m、幅0.35mを測る。

S K 576拡張部の長軸と方向をあわせた長方形プランを持つ土壙である。木棺痕跡は検出できなかった。墓壙の長さ1.8m、幅0.9m、深さ0.3mを測る。

方形周溝墓 S T 710(第34図) S D 579と S D 545・549の推定延長線上で区切った方形周溝墓である。周溝墓かどうかは確定できないが、埋葬主体部があるため作業仮説として周溝墓を設定しておきたい。中央部に竪穴式住居跡 S H 517があるため墓壙底が高い主体部は、削平されている可能性がある。墳丘には S K 621・544・616(第40図)の3つの主体部が確認できた。

S K 621は S H 517床面で検出した長方形プランの墓壙である。墓壙内いっばいにH形木棺が納められている。平面精査では東小口部では小口板と長側板を別々に認識できたが、西側では分離



第39図 方形周溝墓主体部実測図(6)

できなかった。棺の東部分は小口に対して長側板がほとんど出ない。墓壙の長さ1.4m、推定幅0.7m、深さ0.25m、棺内の長さ1.05m、幅0.3mを測る。

S K 544・616は切り合い関係を持ちS K 544に対しS K 616が先行する。S K 616は墓壙だけではなく、木棺部分も上層が壊されている。このような事例は調査区内では認められない。

S K 544は長方形プランを持つ土壙で、木棺などの埋葬施設は検出できなかった。墓壙の長さ1.5m、推定幅0.75m、深さ0.2mを測る。

S K 616は長方形プランの墓壙内いっばいにH形木棺が納められている。平面精査では東小口部では小口板と長側板を別々に認識できたが、西側では分離できなかった。棺の東部分は小口に対して長側板がほとんど出ない。墓壙の長さ1.3m、幅0.7m、深さ0.35m、棺内の長さ0.75m、幅0.4mを測る。

方形周溝墓S T 711(第34図) 西はS D 545、南はS D 554とS D 579の延長線を結んだ部分、東はS D 554が西側で細くなりなくなる部分からS D 545に並行するように北に延ばした線、北は調査区外であるがS D 567の延長部によって区切られた部分を方形周溝墓とした。これもまた作業仮説である。墳丘東半に残りの良い竪穴式住居跡S H 529・512があるため削平された主体部がある可能性が指摘できる。墳丘上には埋葬主体部がS K 615・413・414・644・612(第40・41図)の5基の埋葬主体部が認められた。

S K 615は単独で存在し、主軸を同じくする主体部は検出できていない。埋葬施設はH形木棺と考えられるが、北東小口部の材の痕跡は検出できなかった。棺の内外は土色の変化が認められた。墓壙の長さ1.8m、幅0.8m、深さ0.2m、棺内の長さ1.4m、幅0.4mを測る。

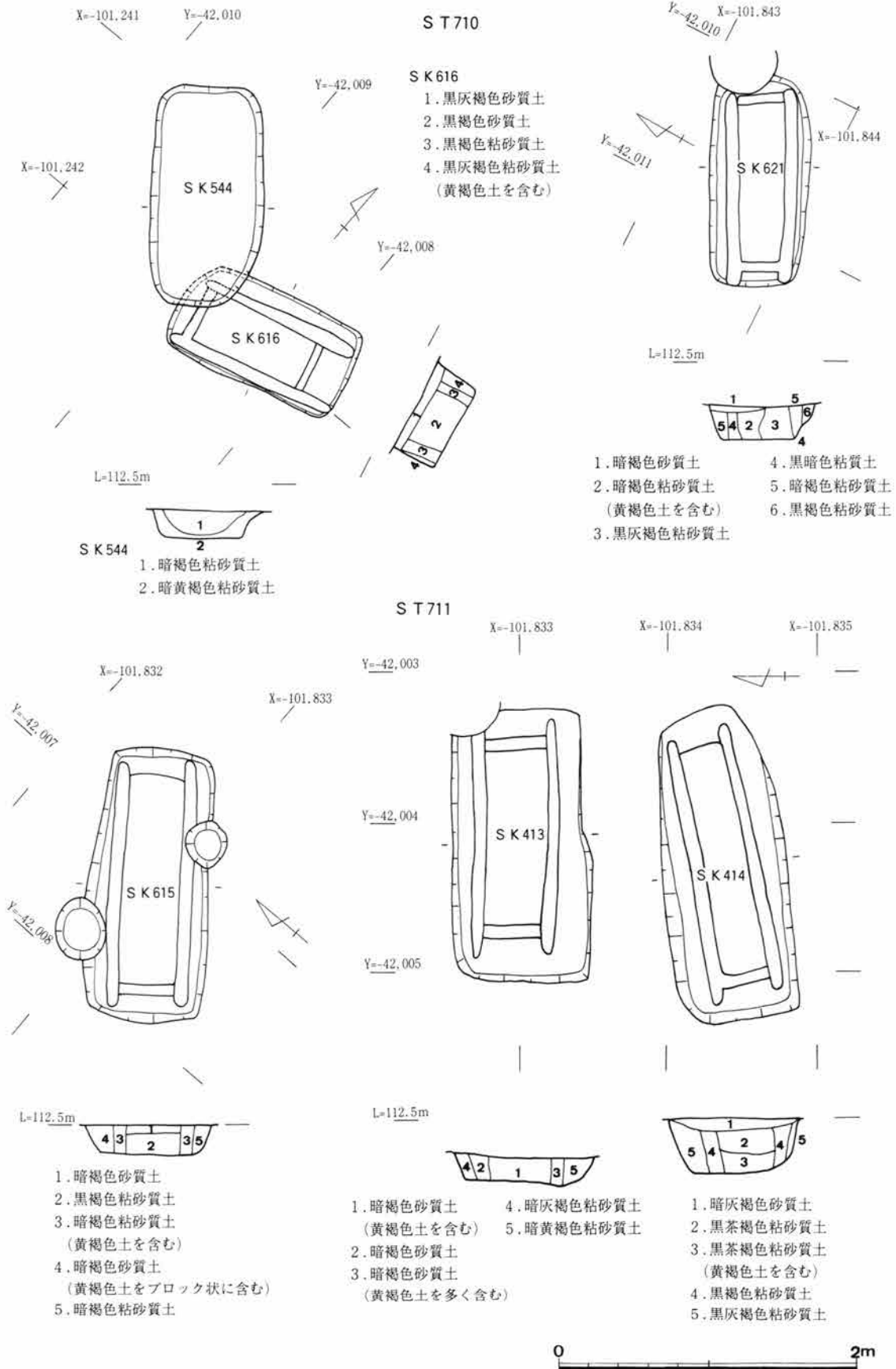
S K 413・414・644は主軸をほぼ同じくする埋葬主体部である。東側がいずれも竪穴式住居跡によって大きく削平されている。

S K 513は東半部がS H 529とS H 506によって削平されているが、住居跡床面でかろうじて検出することができた。そのため墓壙東側の立ち上がりがかほとんどなく、同一検出面で検出される墓壙に比べ若干長さが短いと考えられる。埋葬施設はH形木棺と考えられるが、東小口部の材の痕跡は検出できなかった。棺の内外は土色の変化が認められた。墓壙の長さ2.2m、幅0.9m、深さ0.4m、棺内の長さ1.55m、幅0.3mを測る。

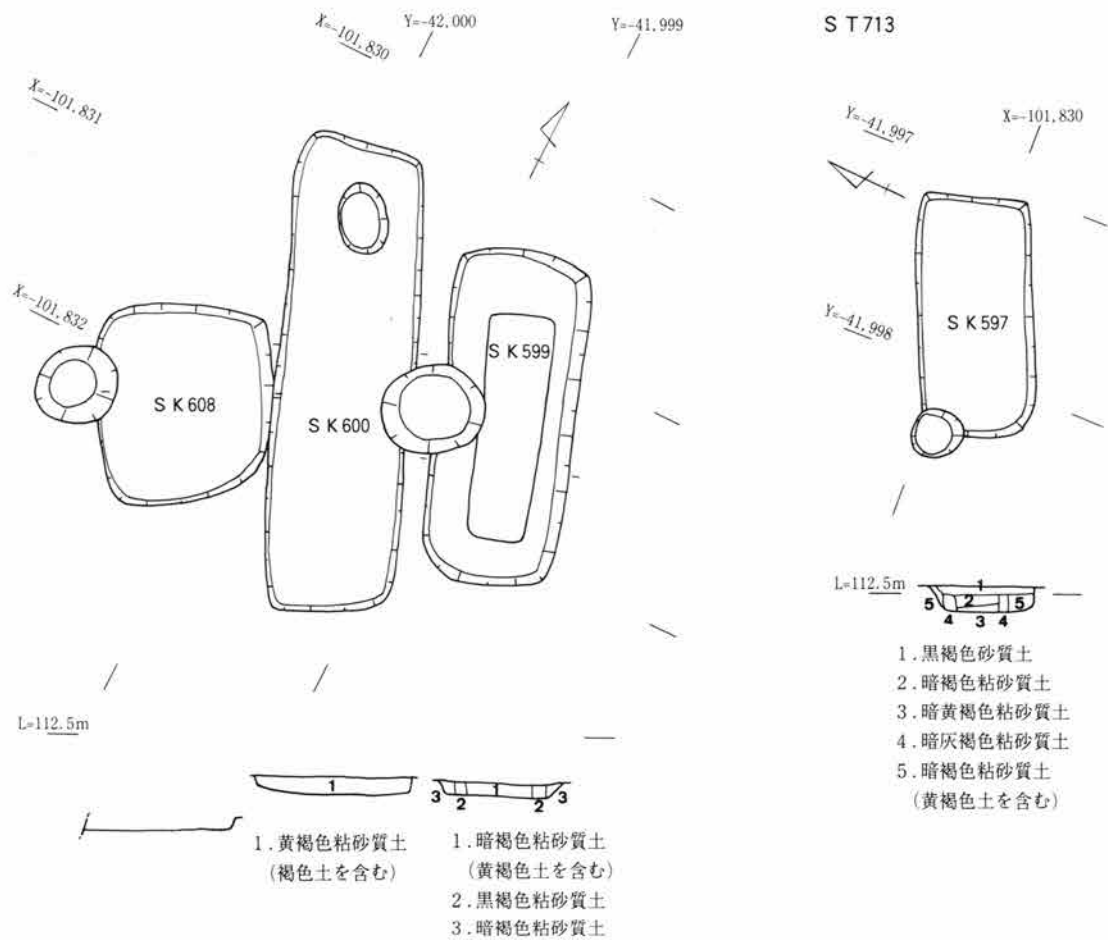
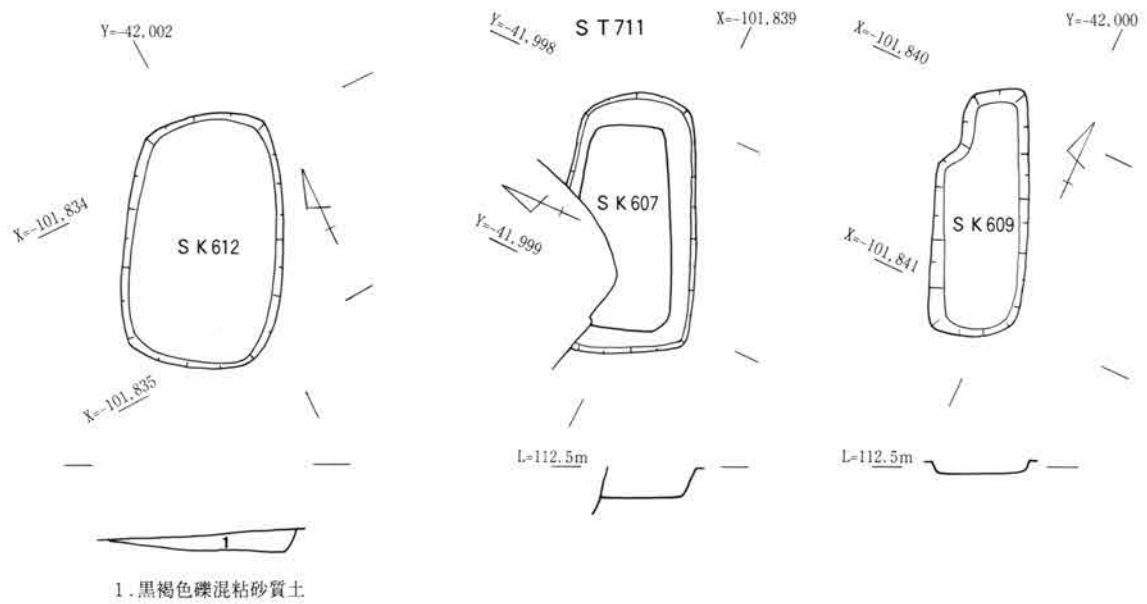
S K 513は東半部がS H 506によって削平されているが、住居跡床面でかろうじて検出することができた。埋葬施設はH形木棺と考えられる。墓壙の長さ1.8m、幅0.9m、深さ0.5m、棺内の長さ1.2m、幅0.4mを測る。

S K 644は東半部がS H 512によって削平されて、痕跡すら残されていなかった。木棺は検出できなかった。墓壙の残存長0.75m、幅0.8m、深さ0.3mを測る。南の近接するコーナー部だけが検出できた土坑もまた墓壙の可能性が指摘できるが、他の部分が喪失しているため確定できなかった。

S K 612はS H 512の床面で検出できた土坑であるが、木棺などの埋葬施設は検出できなかった。墓壙の長さ1.25m、幅0.85m、深さ0.15mを測る。



第40図 方形周溝墓主体部実測図(7)



0 2m

第41図 方形周溝墓主体部実測図(8)

方形周溝墓 S T 712(第34図) S D 545の延長部、S D 554の延長部、S D 554の西端部から S D 545に平行するように南に延ばした線からなる地域を周溝墓として仮定した。主体部と考えられる土壌は S T 607・609(第41図)の2か所検出できた。

S K 607は S H 512のコーナー部分によって一部が喪失している。また、住居跡床面で検出できた S K 602と切り合いを持ち、先行することがわかった。木棺の痕跡自体は検出できなかったが、棺内と考えられる土色の変化を墓壙内で検出した。墓壙の長さ1.4m、幅0.7m、深さ0.2m、棺内の長さ1.05m、幅0.45mを測る。

S K 609は長方形の北東隅部が内側に若干入る平面形を呈する土壌である。土壌規模が小さく木棺も検出できなかったため墓壙かどうか判断が分かれるが、S D 545に平行し、S D 554に直交することから墓壙と判断した。墓壙の長さ1.3m、幅0.5m、深さ0.1mを測る。

方形周溝墓 S T 713(第34図) S D 554と S D 554の西端部から S D 545に平行に北に延長した線と、S D 554の東端が北側に曲がる部分を北に延長した線によって囲まれた範囲を指す。推定墳丘上の主体部数は今回の調査区中ではもっとも多く、14か所を数える。S K 595(第42図)を中心に S K 597・598・596・594・603・604・605(第41～43図)が主軸を揃えて点在する。推定墳丘部西側には、前述した東西方向に主軸を持つ土壌群と直交する土壌 S K 599・600・608(第41図)の3基からなる土壌群がある。

S K 608は S H 529の床面で検出できた正方形に近いプランを持つ土壌である。近接する土壌と主軸が同じであることから主体部としたが、S H 529の軸とも一致する。木棺などの痕跡は検出できなかった。墓壙の長さ1m、幅0.9m、深さ0.05mを測る。

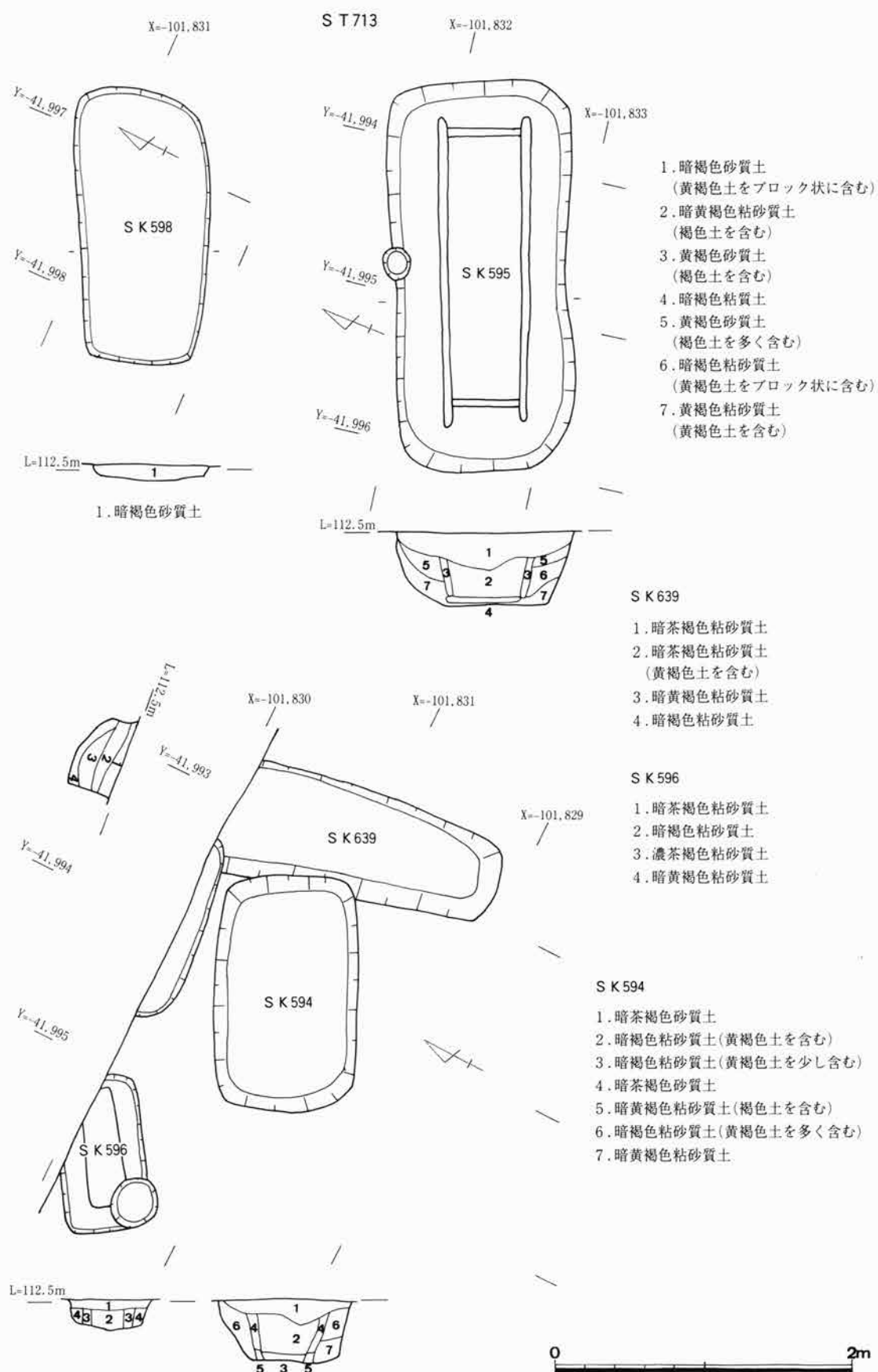
S K 600は S H 506の床面で検出できた長方形プランの土壌である。土壌北側底部で径30cmの土坑が検出できた。埋土は遺構検出面の黄褐色粘砂質土を主体とし、褐色土を含むことから、掘削された埋土がすぐに埋め戻されたことを示している。木棺などの痕跡は検出できなかった。墓壙の長さ2.5m、幅0.7m、深さ0.1mを測る。

S K 599は長方形プランをもつ土壌で、内部にさらに長方形の土色変化がみられた。平面的には木棺を検出できなかったが、土壌中央部の断面観察によって長側板の痕跡が確認でき、土色の変化した部分は棺の範囲であることがわかった。墓壙の長さ1.8m、幅0.7m、深さ0.1m、棺内の長さ1.2m、幅0.35mを測る。

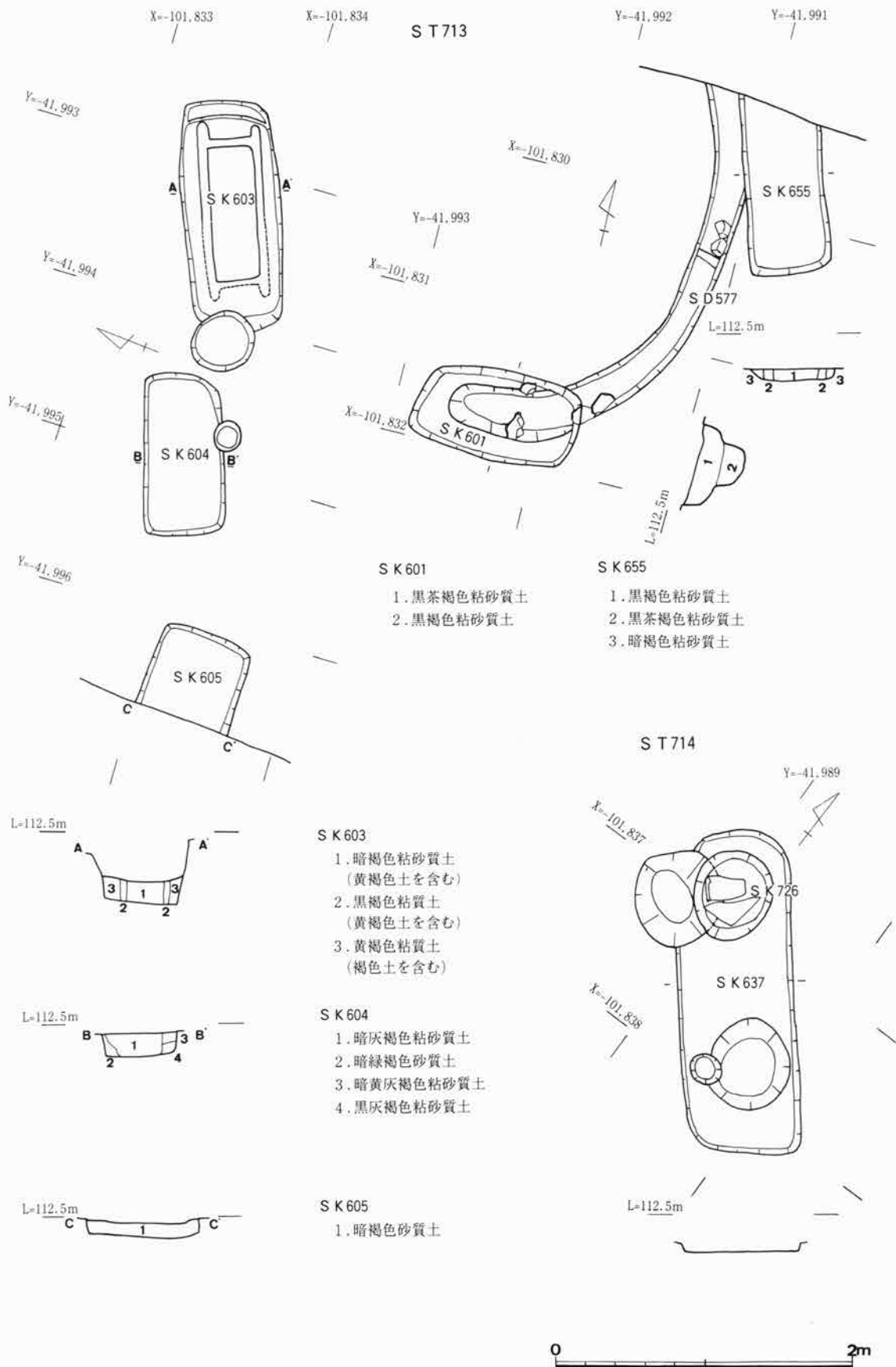
S K 598は長方形プランをもつ土壌で、木棺などの痕跡は検出できなかった。墓壙の長さ1.9m、幅0.9m、深さ0.1mを測る。

S K 595は S T 713の中でもっとも規模が大きく、中央部に位置する主体部である。平面形は長方形を呈し、埋葬主体はH形木棺である。断面観察によって底板が確認できた。北側の長側板は底板の上に、南側は角で接する状況を示していた。墓壙の長さ2.6m、幅1.2m、深さ0.5m、棺内の長さ1.7m、幅0.5mを測る。

S K 596は長方形プランをもつ土壌で、内部にさらに長方形の土色変化がみられた。平面的には木棺を検出できなかったが、土壌中央部の断面観察によって長側板の痕跡が確認でき、土色の



第42図 方形周溝墓主体部実測図(9)



第43図 方形周溝墓主体部実測図(10)

変化した部分は棺の範囲であることがわかった。墓壙の長さ1.1m、幅0.6m、深さ0.2m、棺内の長さ0.75m、幅0.25mを測る。

S K 594は長方形プランをもつ土壙で、平面的には木棺を検出できなかったが、土壙中央部の断面観察によって長側板の痕跡が確認できた。断面図の土層3の存在から底板があった可能性があるが、土層5の存在から底板が長側板の下にあるのか、挟み込まれていたのかは判然としなかった。墓壙の長さ1.5m、幅0.95m、深さ0.45m、棺内の幅0.4mを測る。

S K 639はS K 594に切られる土壙であるが、埋土の状況から埋葬主体部でない可能性も指摘できる。木棺は検出できなかった。墓壙の検出長1.9m、幅0.8m、深さ0.3mを測る。

S K 603～605はほぼ直列に並んだ長方形プランをもつと考えられる主体部である。

S K 603は墓壙の東小口部分が2段になる土壙で、H形木棺が平面で検出できたが、西側は棺の内外しか確認することができなかった。棺の東部は長側板と小口板の接続部は分離ができなかった。墓壙の長さ1.6m、幅0.65m、深さ0.45m、棺内の長さ0.9m、幅0.3mを測る。

S K 604は木棺が検出できなかった。断面観察によると中央部に何らかの埋葬施設があったものと考えられるが側版などの痕跡は確認できなかった。墓壙の長さ1.1m、幅0.5m、深さ0.15mを測る。

S K 605はS H 512によって西側が欠損した土壙で、長方形プランであったと考えられる。墓壙の残存長0.6m、幅0.7m、深さ0.1mを測る。

S K 601はS D 577を切る土壙で長方形プランをもつ。S D 577は湾曲する溝で内部から弥生土器片が出土している。木棺の痕跡は検出できなかった。墓壙の長さ1.1m、幅0.6m、深さ0.15mを測る。

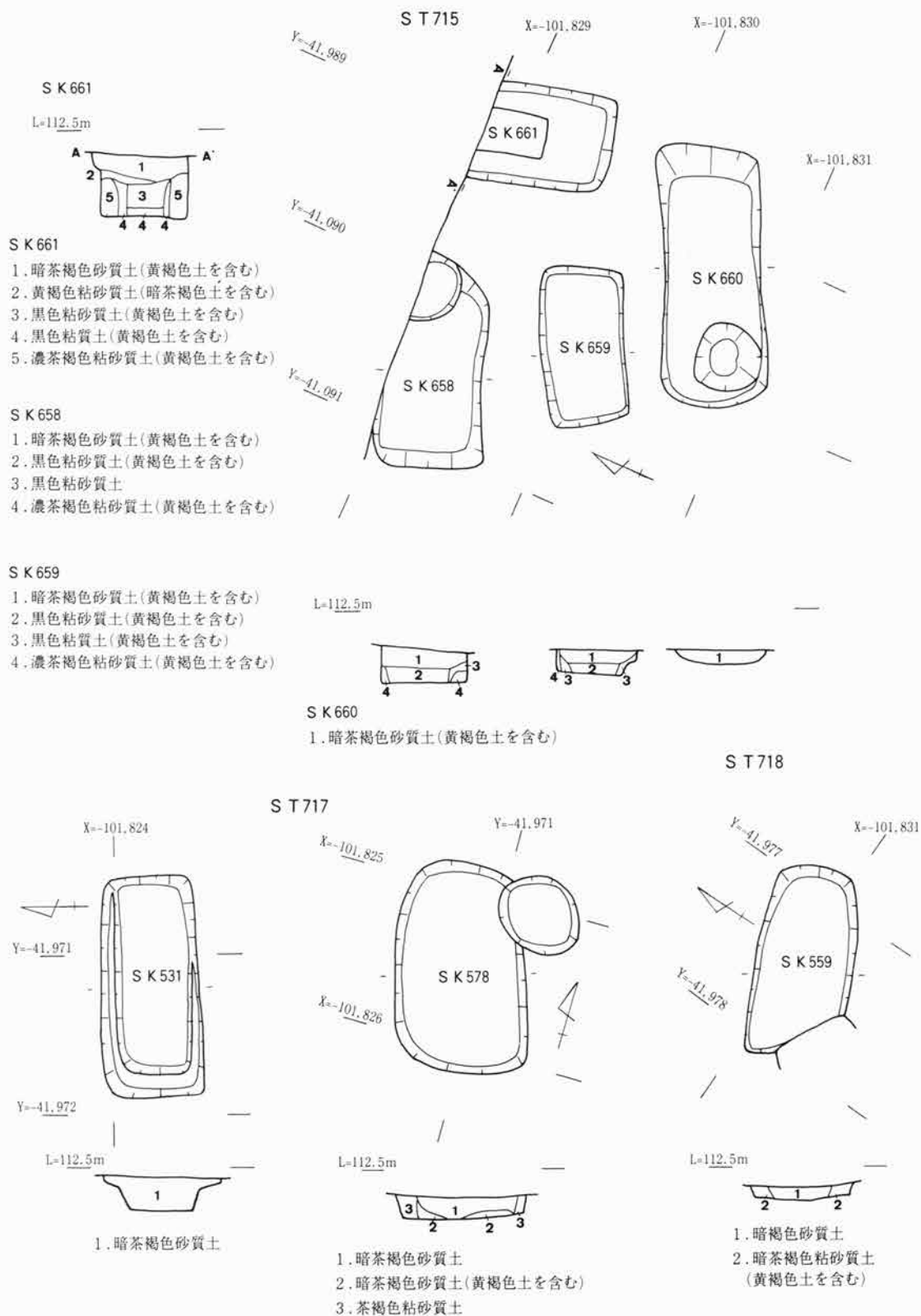
S K 655はS D 577を切る土壙で長方形プランをもつと考えられる。平面では木棺の痕跡は検出できなかったが、断面で長側板が検出できた。墓壙の検出長1.25m、幅0.55m、深さ0.1m、棺内の幅0.3mを測る。

方形周溝墓 S T 714(第34図) S D 554、S D 554の東端、南端をそれぞれS D 556に平行するように延長した線と、S D 541を西側に延長した線によって囲まれる部分をさす。S H 502の床面から長方形プランの土壙S K 606・637の2か所を検出した。

S K 606は墓壙の長さ1.4m、幅0.6m、深さ0.2mを測る。

S K 637は平面形が長方形の土壙で、木棺などは検出できなかった。平面図で図示した土坑、柱穴はこの土坑を切る。墓壙の長さ2.2m、幅0.8m、深さ0.05mを測る。S K 637を切る土坑S K 726は上面に板状の粘板岩が蓋状に検出できた。3つに分かれて検出したが、接合関係が認められる。粘板岩素材の貯蔵、墓壙の被いとも考えることもできる。

方形周溝墓 S T 715(第34図) S D 526とS D 557、S D 554の東端をS D 557と平行するように北に延ばした線で囲まれた部分をさす。S D 526はその直線性と規模からS D 01と同じく集落を区切る溝の一部として認識していたためS T 717とS T 718を隔てる溝の部分と遺構名としては分離していないが、地区を小さく分けていたことから遺物は分離することができる。



第44図 方形周溝墓主体部実測図(11)

推定墳丘部からはS K 658～661(第44図)の4か所が検出できた。S K 658～660は主軸方向が一致し、S K 661はそれらと直交する。

S K 658は北側が調査区外に延びる長方形プランをもつ土壙である。木棺痕跡は検出できなかったが、断面観察では何らかの埋葬施設があったこと示す土層2が認められた。墓壙の推定長1.35m、幅0.7m、深さ0.25mを測る。

S K 659は長方形プランをもつ土壙であるが、木棺痕跡は検出できなかったが、断面観察では何らかの埋葬施設があったこと示す土層2が認められた。墓壙の長さ1.1m、幅0.55m、深さ0.15mを測る。

S K 660は長方形プランをもつ土壙であるが、木棺痕跡は検出できなかった。墓壙の長さ1.65m、幅0.7m、深さ0.1mを測る。

S K 661は調査区外に北半部が延びる土壙で、平面では棺内部分の土色の違いしか確認できなかったが、断面では両側板と底板が検出できた。底板は長側板によって挟まれているように見えた。墓壙の検出長0.9m、幅0.65m、深さ0.4m、棺内の検出長0.4m、幅0.3mを測る。

方形周溝墓S T 716(第34図) S D 526とS D 556、S D 541を西に延長した線、S D 554の東端をS D 556に平行するよう南に延ばした線で囲まれた部分を作業仮説として設定した。墳丘部と考えられる部分からは主体部は検出できなかった。

方形周溝墓S T 717(第34図) S D 526とS D 557とS D 568によって囲まれた部分で、北側はS D 525の延長線上と仮定した。墳丘部の半分は調査区外になり残った部分の多くもS H 504によって削平を受けている。S D 526は平面的には分離できなかったが、溝の底部の形状や断面(第30図)の観察によって2本の溝に分かれることがわかった。先行する溝をS D 526A、後から掘られた溝をBとした。S D 526Bは東側で浅くなってなくなり、西側はS D 557に取り付く。掘削中両者を分離できなかったことから、遺物が混在している可能性が指摘できる。前述したようにS T 715とS T 716の周溝部出土遺物とは地区分けが完全に為されているため混在はない。東西の溝心々間は13m、南北の推定長は8mを測る。

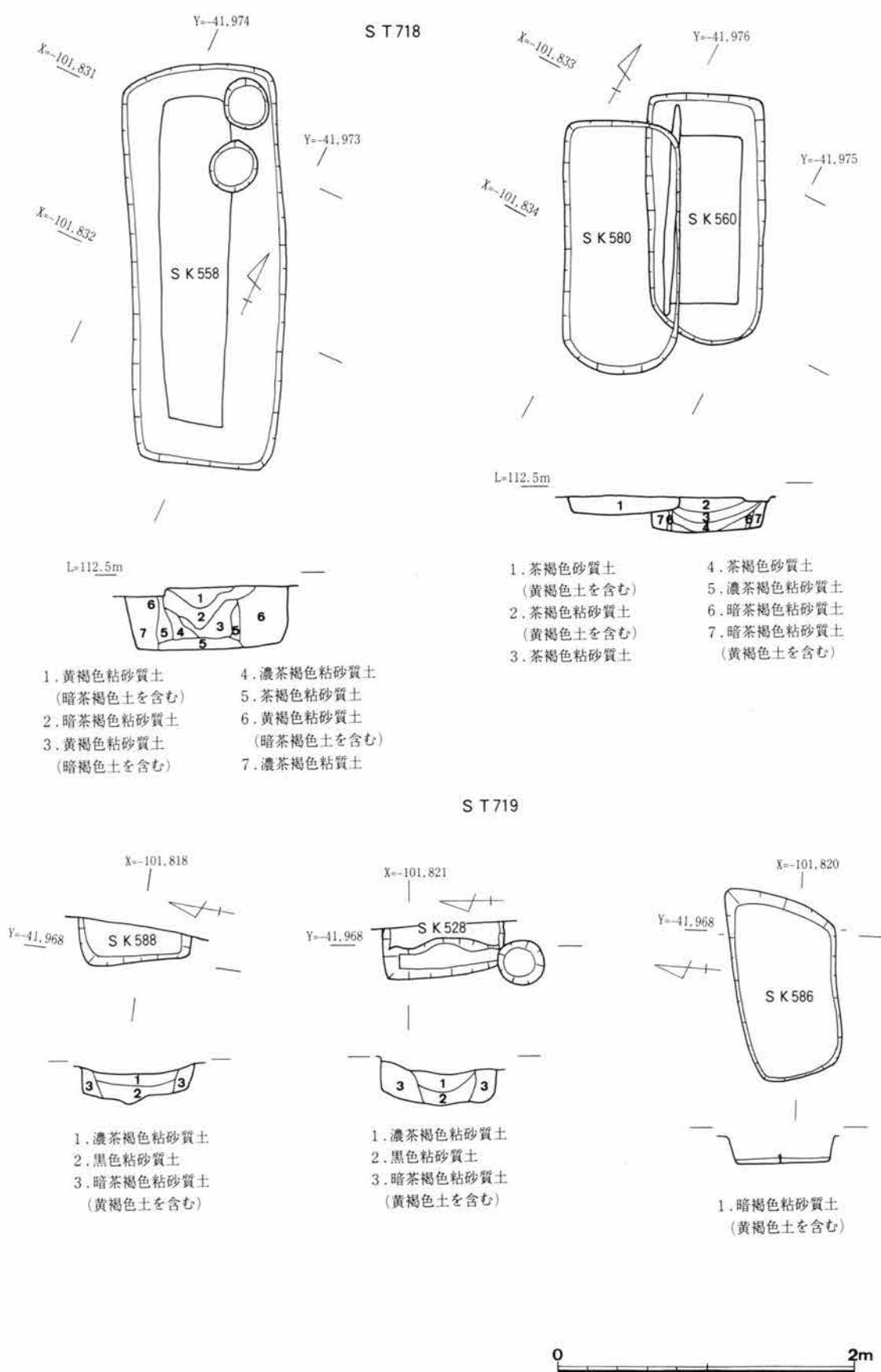
墳丘部の埋葬主体部は削平が及んでいない地域でS K 578・531の2基が確認できた。

S K 578はS D 526Bが検出面でなくなる場所にあり、S D 526Aに後出する。木棺などの埋葬施設は検出できなかったが、土層の1・2にみられるような中央部に立ち上がりが認められた。墓壙の長さ1.3m、幅0.85m、深さ0.15mを測る。

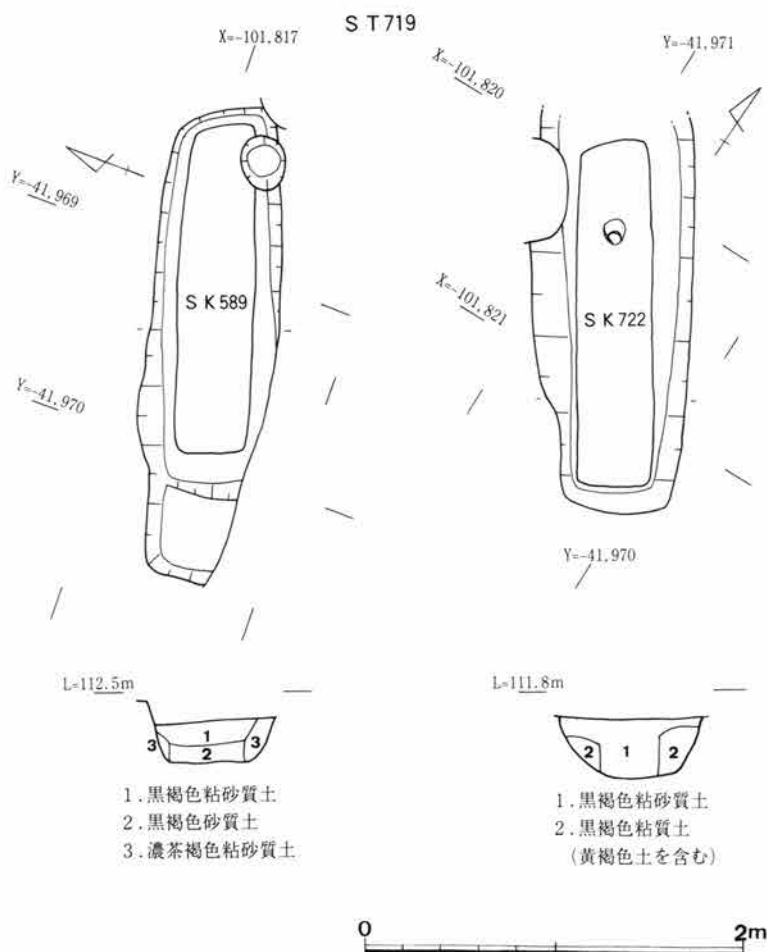
S K 531は墓壙の東部分が2段になるように穿たれた長方形プランを持つ埋葬主体部である。木棺などは発見できなかった。墓壙の長さ1.4m、幅0.65m、深さ0.2mを測る。

方形周溝墓S T 718(第34図) S D 556・541・526とS D 568の延長部によって囲まれた部分を指す。S D 541は断面図(第30図)が示すようにS D 01に後出する。S D 556とS D 526は平面的には切り合い関係が認められなかった。東西の溝心々間は13m、南北の推定長は8mを測る。墳丘部分からS K 558～560・580(第44・45図)の4か所の埋葬主体部が検出できた。

S K 580・560は切り合い関係を持つ墓壙で写真撮影時には、切り合い関係を誤認していたが、



第45図 方形周溝墓主体部実測図(12)



第46図 方形周溝墓主体部実測図(13)

長側板が確認できた。墓壙の長さ1.7m、幅0.8m、深さ0.15m、棺内の長さ1.15m、幅0.4mを測る。

SK558は墳丘上でもっとも大きく、中央部に位置しているためこの周溝墓の初葬時の埋葬主体部であると考えられる。長方形プランをもつ埋葬主体部であるが木棺などの痕跡は検出面では確認できなかったが棺内の土色変化は確認できた。断面の観察の結果、底板に長側板が載る形態の棺であることがわかる。墓壙の長さ2.7m、幅1.05m、深さ0.4m、棺内の長さ2.2m、幅0.5mを測る。

方形周溝墓 ST719(第34図) SD568・525と第5次調査7トレンチSD604に囲まれた地域である。東の周溝は同トレンチを南側に延長した線とも考えられるが、周辺の周溝墓が長方形プランを持つことから、第5次SD389の延長部とSD568の間に溝がある、もしくは、あったものと考えられる。南北の長さは13mを測る。墳丘上の埋葬主体部は4基、SD568内から溝中に主軸を溝と合わせた埋葬主体部が検出できた。

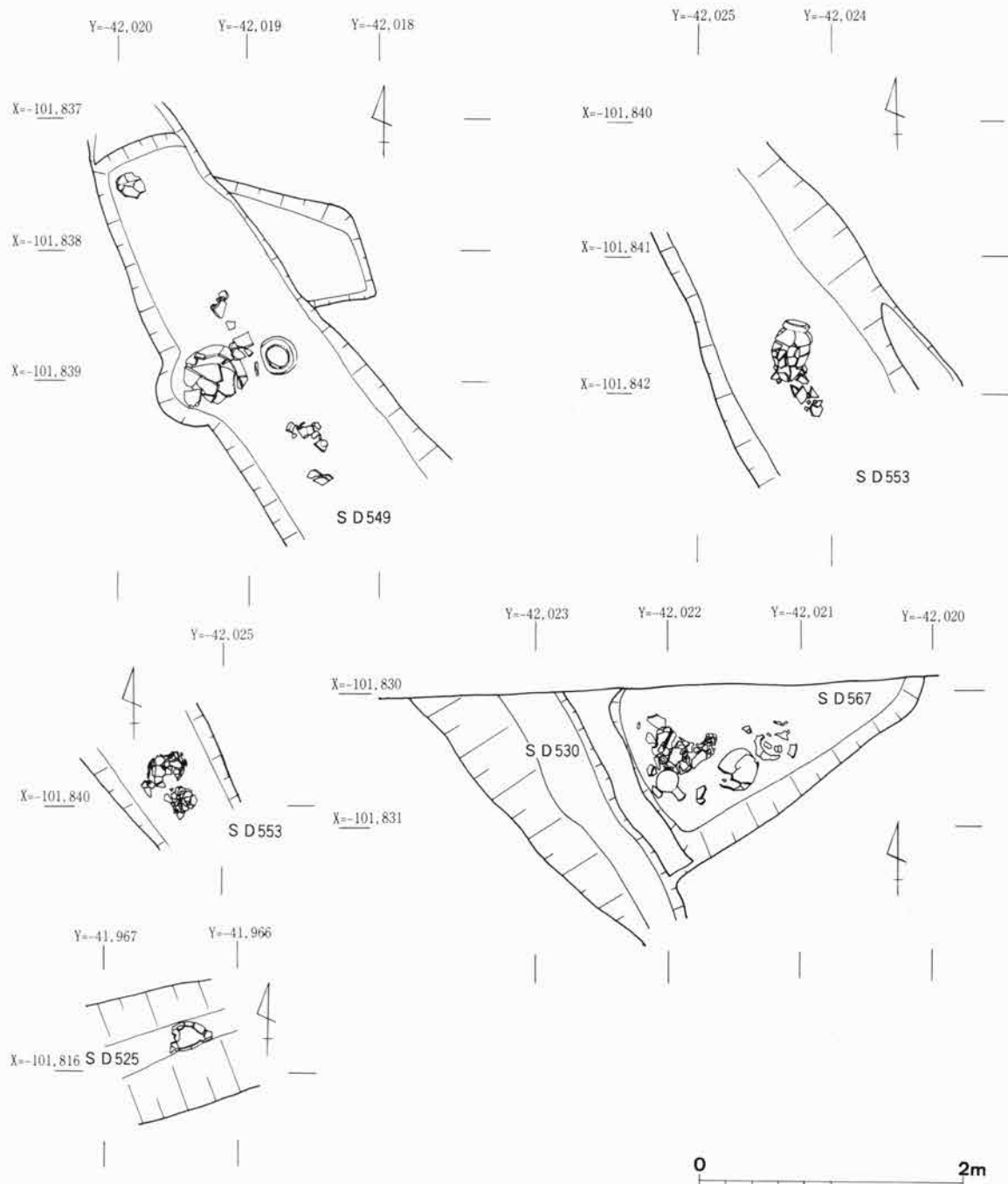
SK582・586・588・589(第45・46図)の4基は主軸を同じくし、長方形プランを持つと考えられる埋葬主体部である。

SK582は墓壙の西側の一部が検出されている。墓壙の小口部分には墓壙底に溝状の落ち込みが認められた。断面から埋葬施設と埋め土と考えられる土層の違いが認められたが、側板は検出

断面観察の結果、SK560がSK580に切られることがわかった。墓壙底の標高が高い墓壙が切る傾向は、第5次調査7トレンチの周溝墓でもみられた。周溝墓が改修され墳丘が高くなったことに伴うとも考えられる。

SK560は長方形プランをもつ埋葬主体部であるが木棺などの痕跡は確認できなかった。墓壙の長さ1.7m、幅0.8m、深さ0.15mを測る。

SK560は長方形プランをもつ埋葬主体部で、H形木棺と考えられる。平面では片側の長側板と木棺内の土色の違いしか認められなかったが、断面観察によってもう片方の



第47図 方形周溝墓溝内遺物出土状況図

できなかった。墓壙の検出長0.35m、幅0.8m、深さ0.25mを測る。

S K 588は墓壙の西側の一部が検出されている。断面から埋葬施設と埋め土と考えられる土層の違いが認められたが、側板は検出できなかった。墓壙の検出長0.3m、幅0.75m、深さ0.25mを測る。

S K 586は北東隅部が張り出した形状の埋葬主体部であるが、木棺痕跡は検出できなかった。墓壙の長さ1.3m、幅0.7m、深さ0.2mを測る。

S K 589は墓壙の一部がS K 523によって欠損している。墓壙は西側小口部分が2段に掘り込まれている。墓壙内は図示したように木棺内と考えられる長方形の土色変化が認められた。平面・

断面の観察からは側板などの埋葬施設は検出できなかった。墓壙の長さ2.5m、幅0.7m、深さ0.3m、棺内の長さ1.7m、幅0.35mを測る。

S K722は溝中埋葬の主体部である。S D568検出面では墓壙の存在を確認できなかったが、切り込みはあったものと考えられる。墓壙は溝の底近くで検出した。墓壙内は図示したように木棺内と考えられる長方形の土色変化が認められた。平面・断面の観察からは側板などの埋葬施設は検出できなかった。墓壙の長さ2.2m以上、幅0.85m、深さ0.35m、棺内の長さ1.8m、幅0.4mを測る。

方形周溝墓 S T720(第34図) S D524・525と第5次調査と第11次調査で確認できた溝に囲まれた部分にあたる。調査区外となるため説明は割愛する。

(2) 古墳時代

古墳時代の遺構には、掘立柱建物跡4棟、竪穴式住居跡19基、土坑3基がある。掘立柱建物跡は、柱穴内からの出土遺物が少ないことから、確証を欠く。調査区周辺は条里地割が残されていることから、古墳時代の土器が出土し条里方向と主軸が合わないもの、柱間が不等間隔なものなどは古墳時代の遺構と位置付けた。

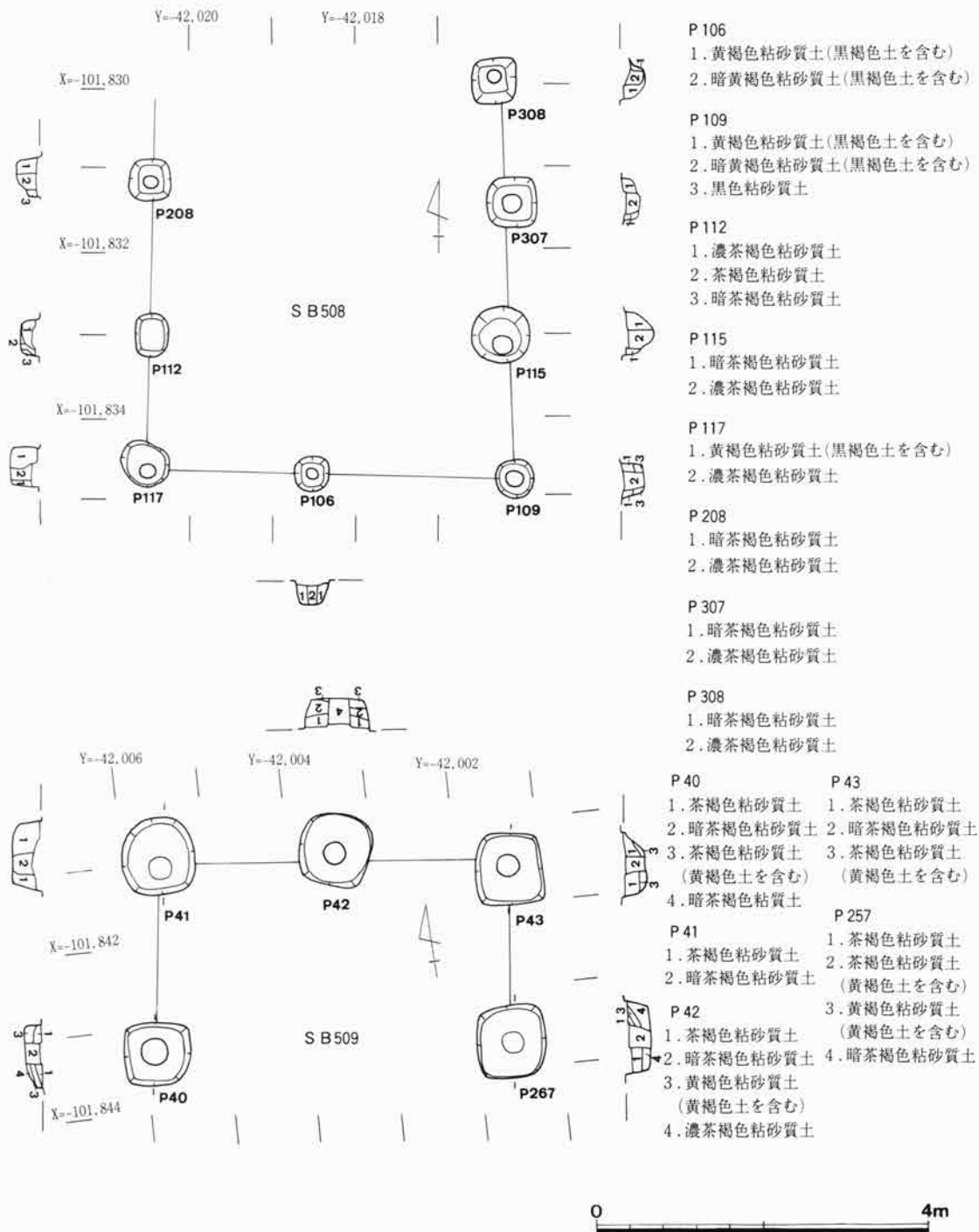
掘立柱建物跡 S B508(第48図) 東西2間×南北3間以上で、北で約1°西に振る建物である。柱穴の掘形は法量や平面形態が不揃いで、柱間も不揃いで1.5～2.4mとばらつきがみられる。柱穴内からは須恵器・土師器が検出されている。遺物は図化し得ないが、6世紀代の年代が与えられる。

掘立柱建物跡 S B509(第48図) 東西2間×南北2間以上で、北で約7°東に振る建物である。柱掘形は隅丸方形を呈し、1辺が約0.8mと今回の調査区内の古墳時代建物としては規模が大きい。柱間は東西2.1m、南北2.2mである。S H516を切っていることから、古墳時代後期以降の建物であることがわかる。柱穴内からは須恵器、土師器が検出されている。遺物は図化し得ないが、6世紀代の年代が与えられる。

掘立柱建物跡 S B511(第49図) 東西2間×南北3間以上の南北棟で、北で約10～15°西に振る建物である。柱掘形は約1辺0.5mの規模を持ち、柱間は東西1.6m、南北1.6mである。S B512と同規模で直列することから、同時期の建物と考えられるが出土遺物と切り合い関係から見ると齟齬が生じる。柱穴内からは須恵器・土師器が検出されている。遺物は図化し得ないが、6世紀後半の年代が与えられる。

掘立柱建物跡 S B512(第49図) 東西2間×南北4間以上の南北棟で、北で約10°西に振る建物である。柱掘形は約1辺0.4mの規模を持ち、柱間は東西1.5m、南北1.6mである。西辺柱列の北の柱穴が調査区内で検出されるはずであるが、S H529に切られ検出できなかった。一方、S H512を柱列が切っていることから、古墳時代後期の遺構であることがわかった。

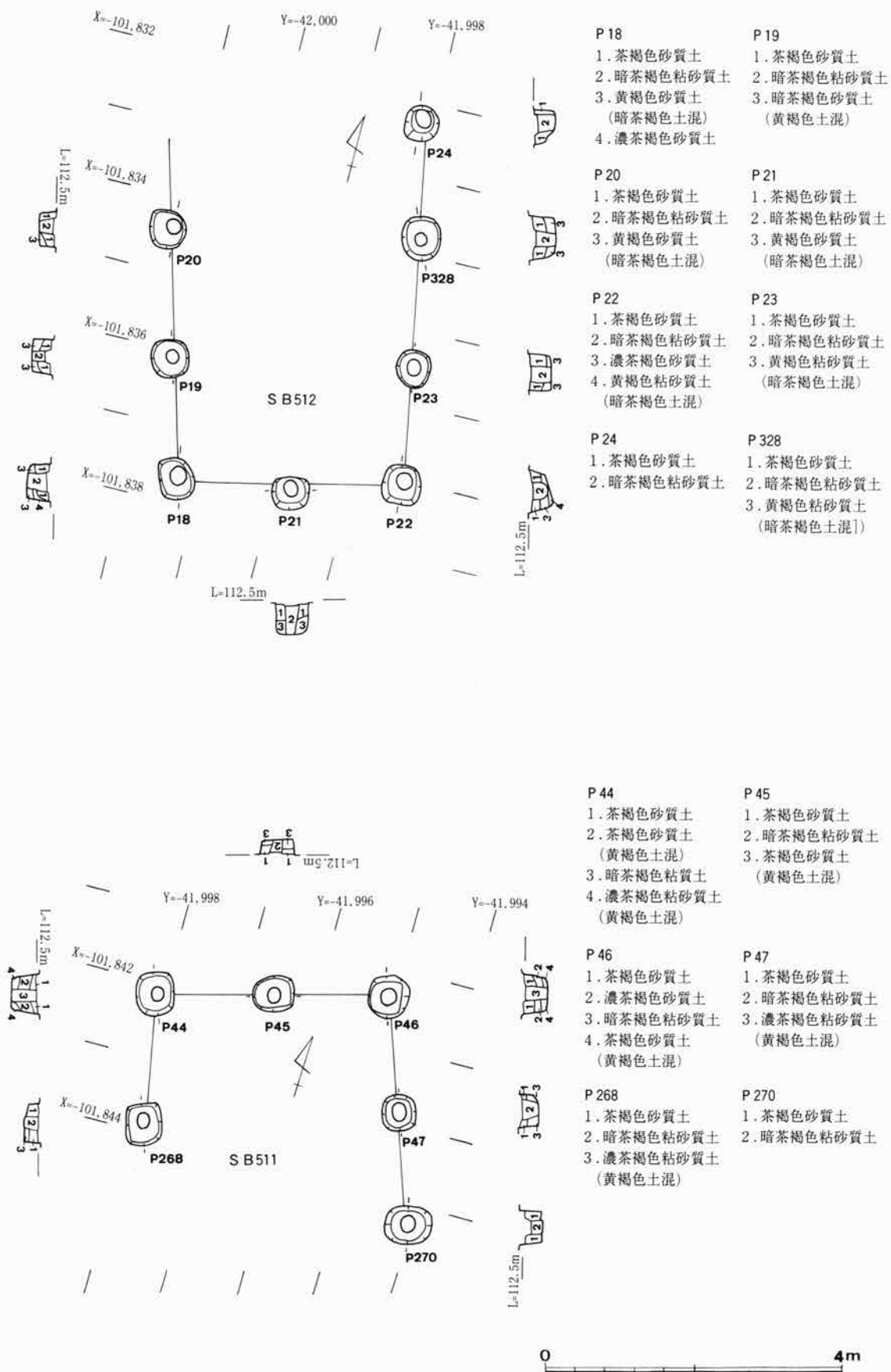
竪穴式住居跡 S H501(第50図) 周壁溝を持つ方形の竪穴式住居跡である。住居跡の北側は調査区外である。支柱穴は4か所あるが、竈跡は検出できていない。おそらく北側の辺に取り付くものと考えられる。南北の検出長3.4m、東西5.2m、検出面からの深さ0.05mを測る。



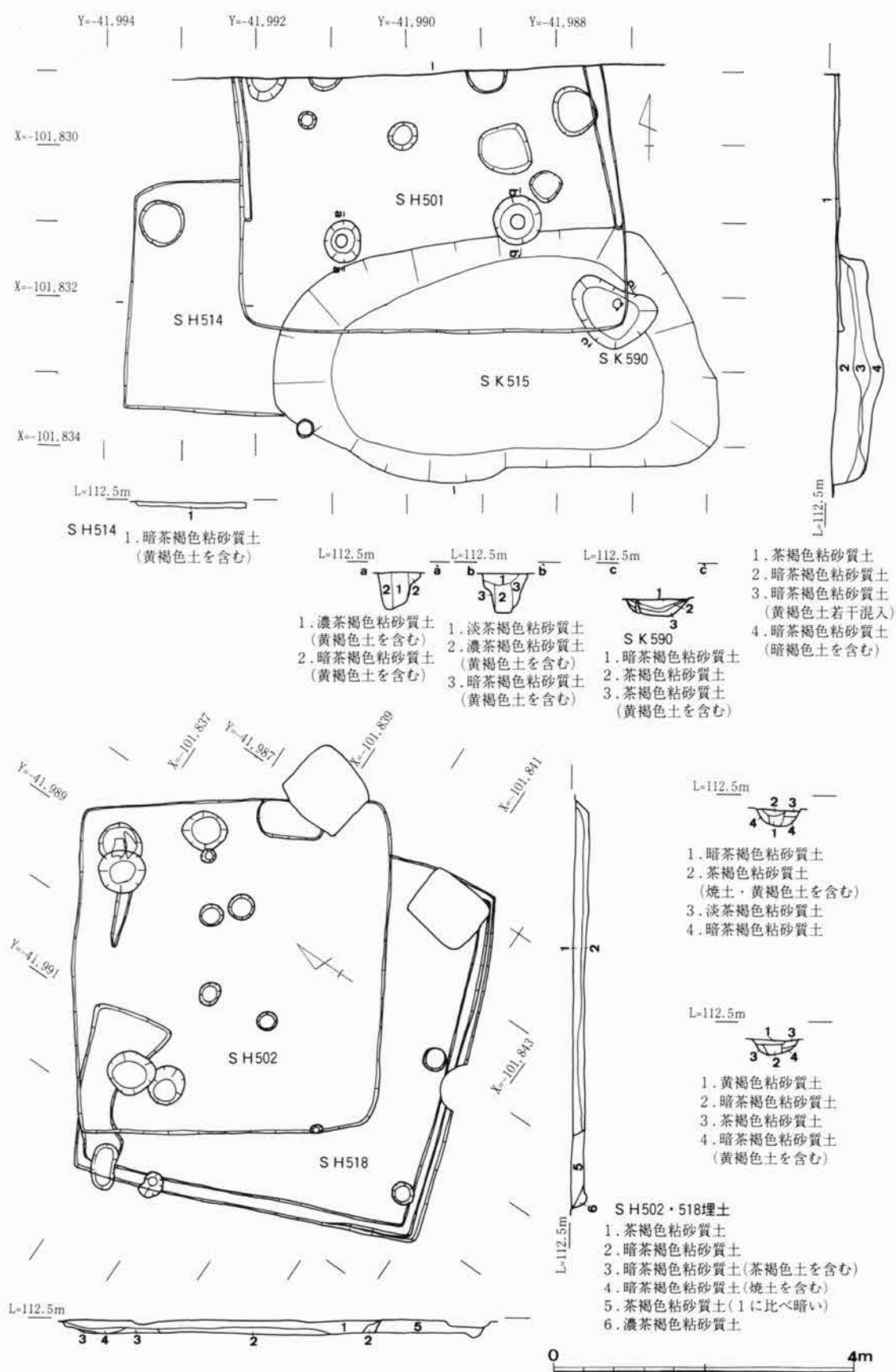
第48図 古墳時代掘立柱建物跡実測図(1)

竪穴式住居跡 S H514(第50図) S H501に切られる小型の竪穴式住居跡と考えられるが、支柱穴と考えられる柱穴は検出できなかった。埋土が非常に薄く S K515との関係ははっきりしないが、平面的には S K515に切られているように見えた。南北3.1m、東西の検出長2.1m、検出面からの深さ0.05mを測る。

竪穴式住居跡 S H502(第50図) 調査区内で4隅が確認できた竪穴式住居跡である。竈は確認できなかったが、床面から焼土が発見されている。S H518と床面の標高が同じであることからどちらに帰属するかは不明である。S H502の床面で検出した。西隅の土坑は S H518に帰属し、



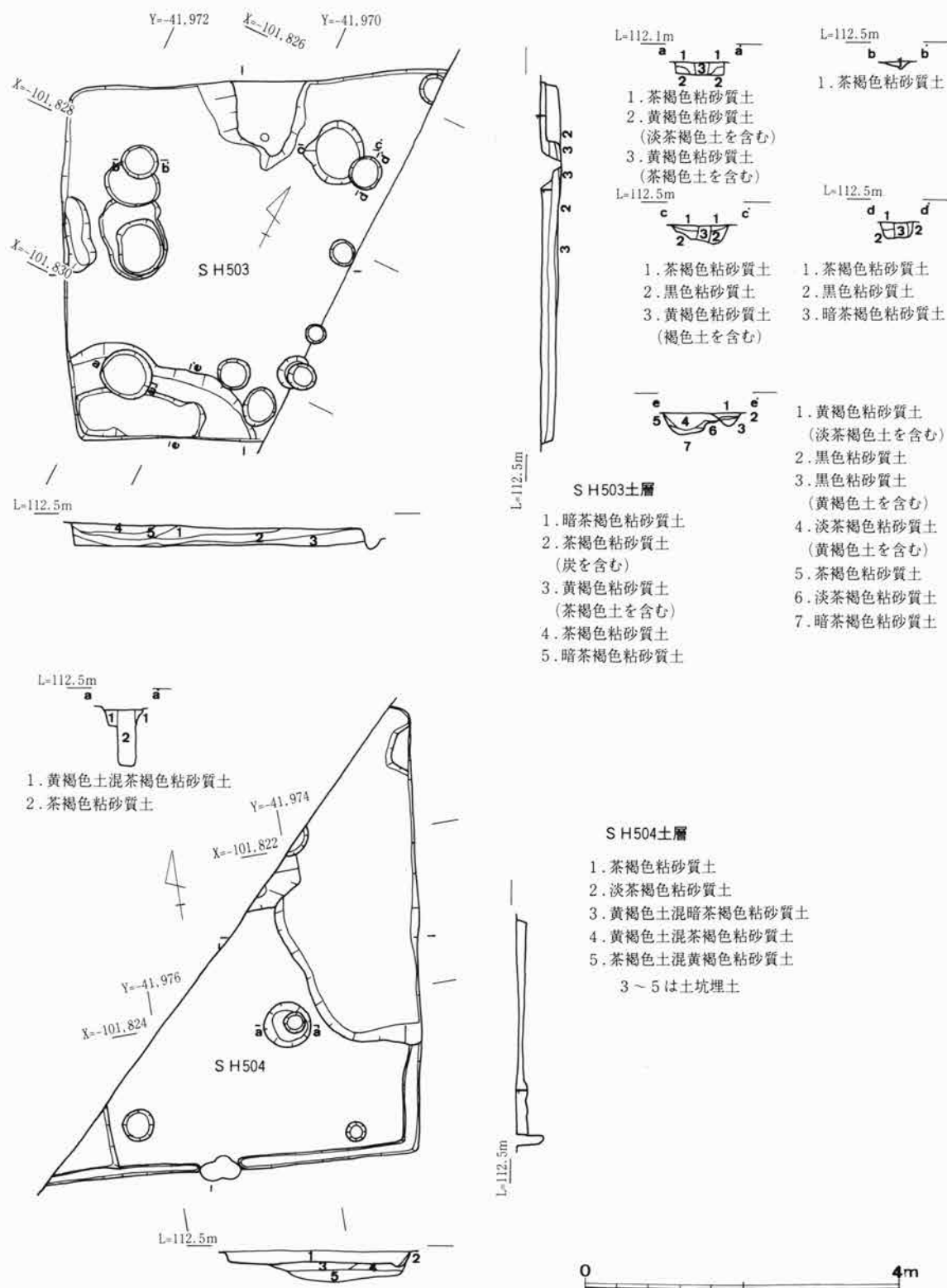
第49図 古墳時代掘立柱建物跡実測図(2)



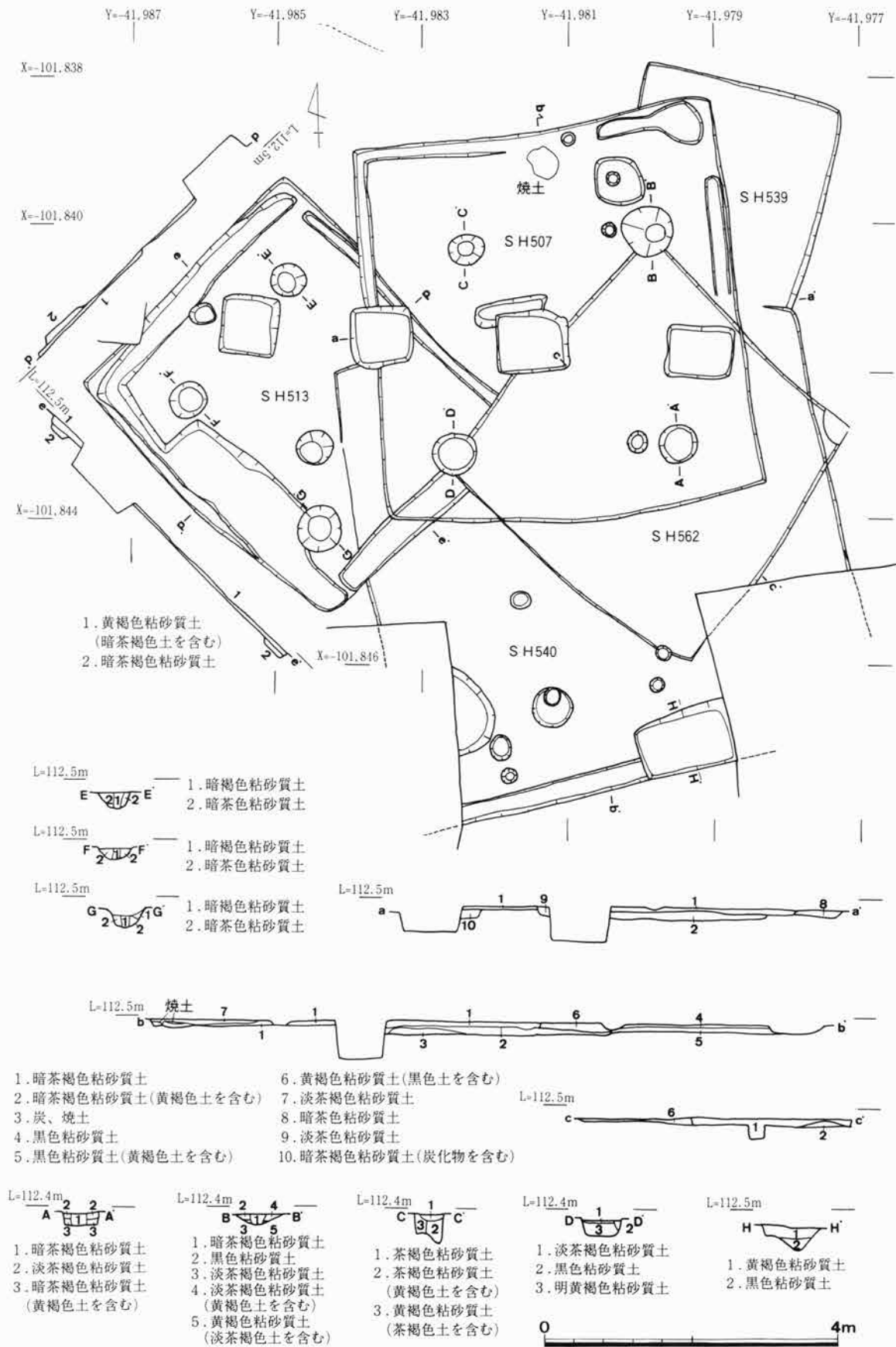
第50図 古墳時代竪穴式住居跡実測図(1)

北隅の土坑に取り付く溝はS H518の周壁溝の残欠と考えられる。長辺4.3m、短辺4 m、検出面からの深さ0.2mを測る。

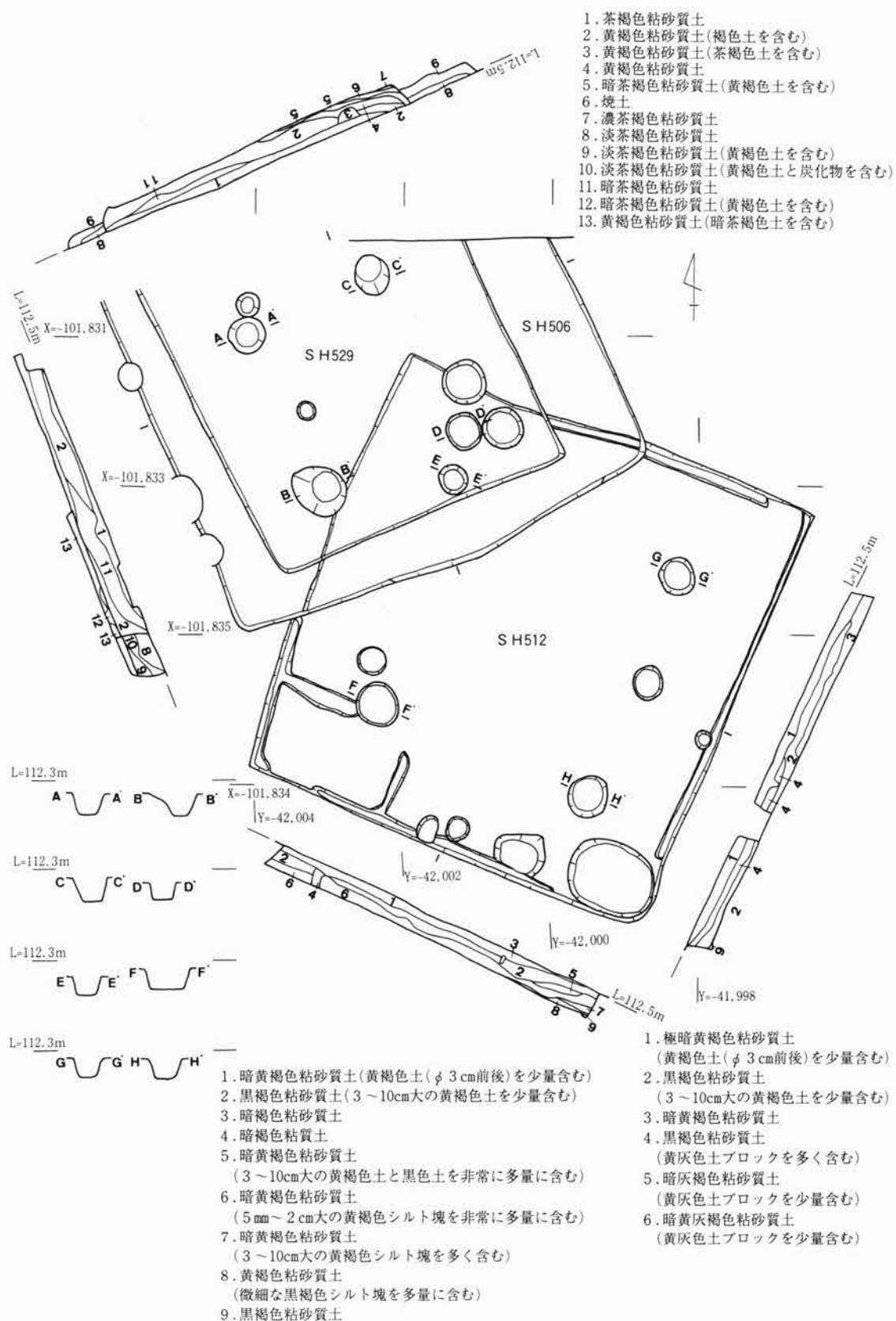
竪穴式住居跡S H518(第50図) S H502によって切られる竪穴式住居跡で周壁溝を持つ。明確な支柱穴は検出できなかった。南北方向4.7m、東西5 m、検出面からの深さ0.2mを測る。



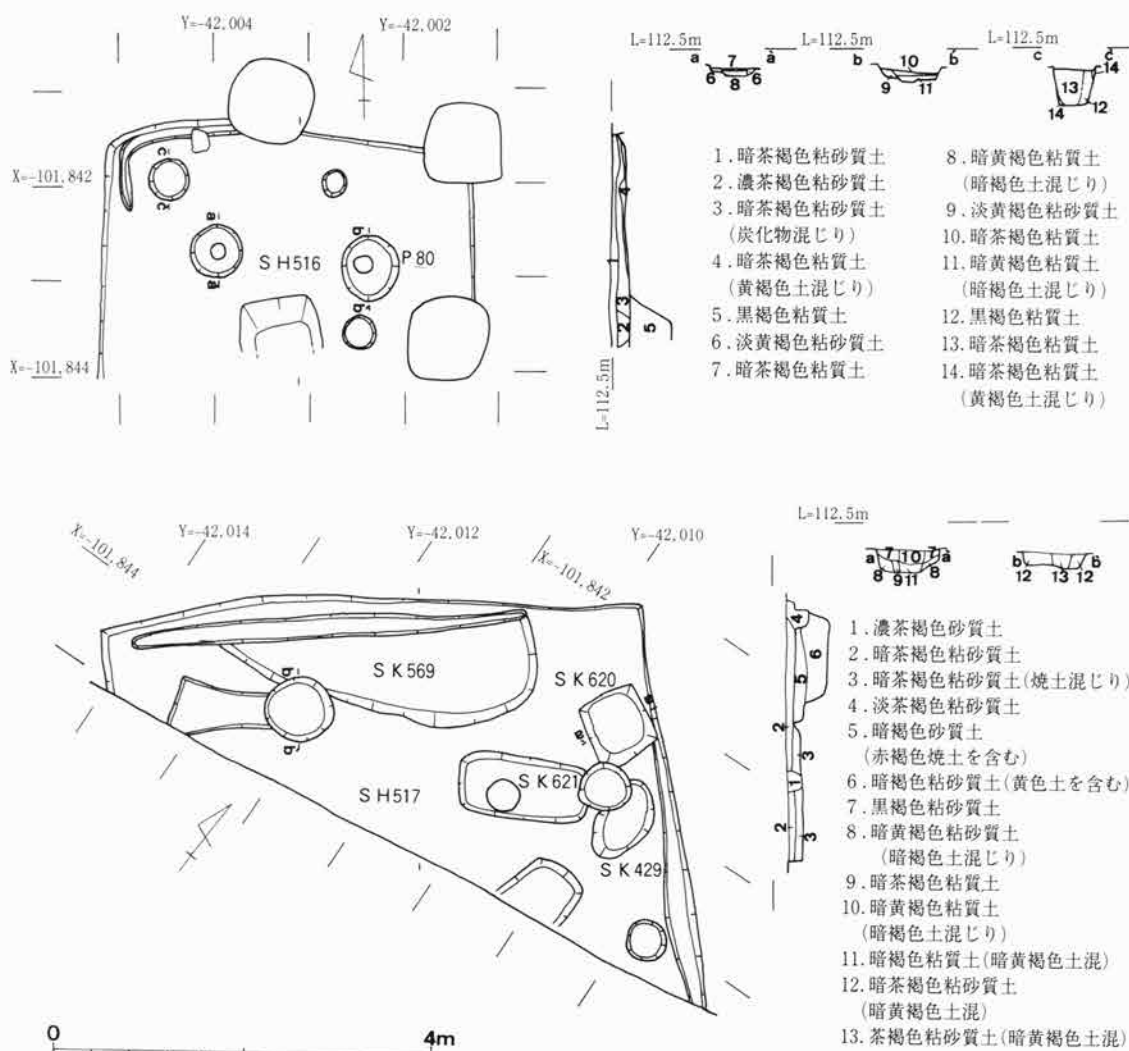
第51図 古墳時代竪穴式住居跡実測図(2)



第52図 古墳時代竪穴式住居跡実測図(3)



第53図 古墳時代竪穴式住居跡実測図(4)



第54図 古墳時代竪穴式住居跡実測図(5)

竪穴式住居跡 S H 503(第51図) 東側が調査区外となる竪穴式住居跡で、北西辺中央部分に竈が確認できた。竈は損傷が著しく構造などは不明であるが、中央部から土師器が出土している。支柱穴は4本あったと考えられ調査区内で3本を確認した。南西辺4.6m、北東辺が4.8m以上、検出面からの深さ0.3mを測る。

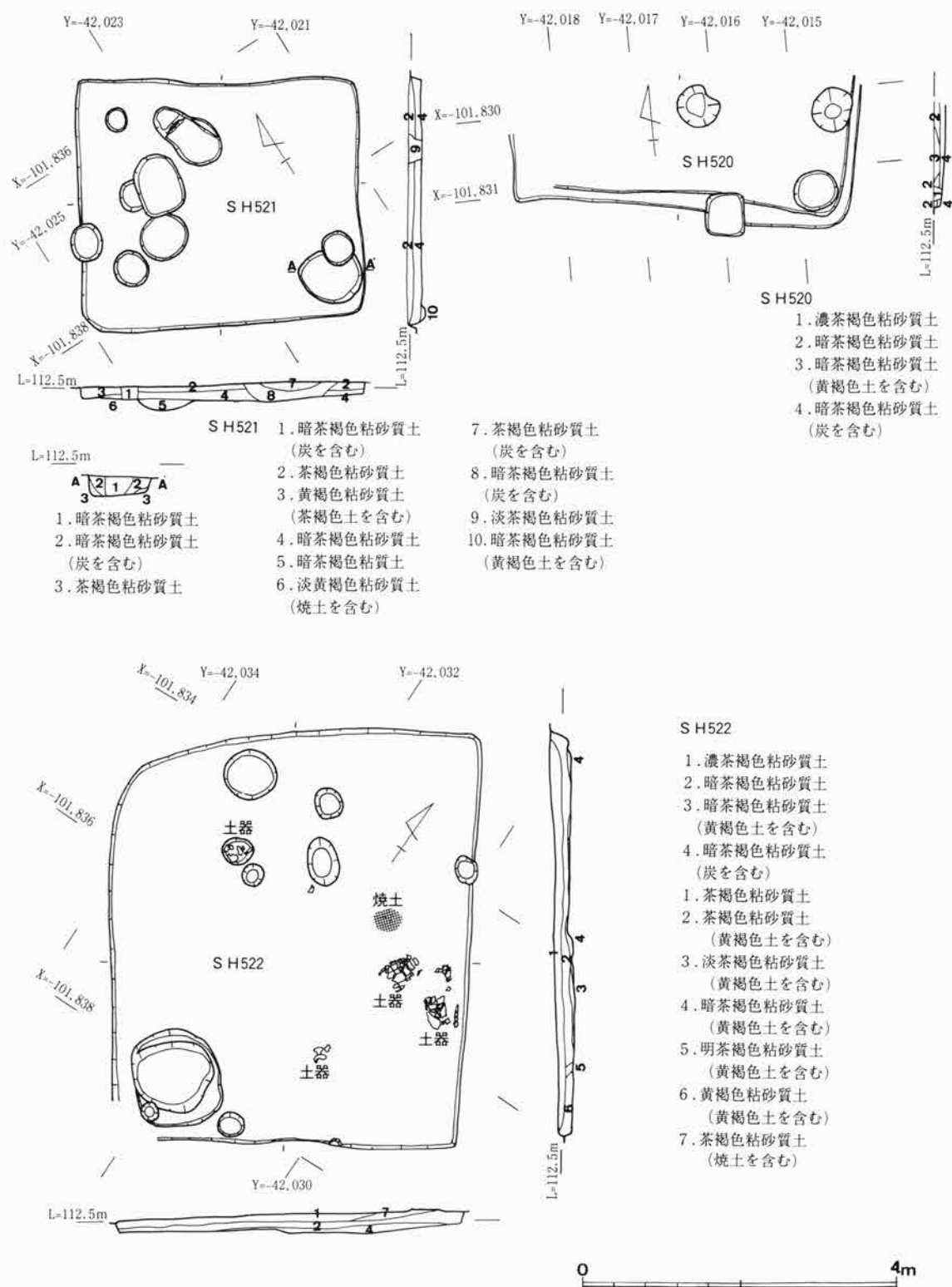
竪穴式住居跡 S H 504(第51図) 周壁溝を持つ方形の竪穴式住居跡である。支柱穴は4つあったと考えられる。そのうち2か所が調査区内で検出できた。また、床面で検出した土坑は住居の立ち上がりに沿っているため建物に伴うものと考えられる。南北5.7m、東西4.8m以上、検出面からの深さ0.15mを測る。

竪穴式住居跡 S H 507(第52図) この住居跡は5基の竪穴式住居跡では切り合い関係からもっとも新しいと考えられる方形の竪穴式住居跡である。切り合いが示す順番は S H 539→S H 560→S H 513→S H 562→S H 507である。支柱穴は4か所で、北辺中央に焼土がみられた。北半部では周壁溝がみられた、南半部にもあったと考えられるが、住居跡が複雑に切り合っているため平面で検出することはできなかった。南北5.1m、東西5.1m、検出面からの深さ0.1mを測る。

竪穴式住居跡 S H 513(第52図) 方形を呈し4辺に周壁溝が設けられた竪穴式住居跡である。

支柱穴は4本あったものと考えられるが、3か所しか検出できなかった。北東辺が4.8m、南西辺が4.4m、検出面からの深さ0.05mを測る。

竪穴式住居跡 S H 539(第52図) 小型の方形の竪穴式住居跡と考えられる支柱穴、周壁溝ともに検出できなかった。東西が2.8m、南北が2.8m以上、検出面からの深さ0.1mを測る。



第55図 古墳時代竪穴式住居跡実測図(6)

竪穴式住居跡 S H540(第52図) 重なり合う住居跡の中ではもっとも規模の大きな竪穴式住居跡で、南側で周壁溝と考えられる溝を検出している。東西が2.8m、南北が2.8m以上、検出面からの深さ0.1mを測る。

竪穴式住居跡 S H562(第52図) 方形の竪穴式住居跡であるが支柱穴、周壁溝ともに検出できなかった。北東辺が6.4m、南西辺が6.3m、検出面からの深さ0.1mを測る。

竪穴式住居跡 S H506(第53図) S H529によって切られる竪穴式住居跡であるが、支柱穴は特定できない。S H529床面で検出した4本の支柱穴は位置関係からS H529に伴うものと考えられる。重複する竪穴式住居跡はS H512→S H506→S H529の順に建てられた。南北方向の検出長5.7m、東西方向6m、検出面からの深さ0.35mを測る。

竪穴式住居跡 S H512(第53図) 4本の支柱穴を持ち、周壁溝が設けられた方形の竪穴式住居跡である。西隅には周壁溝に取り付く溝によって長方形に区画された部分が認められた。何らかの施設があったものと考えられる。また、南隅には土坑が穿たれている。竈は検出できなかった。埋土中から鉄滓と鉸具が出土している。北東辺5.7m、北西辺6m、検出面からの深さ0.4mを測る。

竪穴式住居跡 S H529(第53図) S H506と切り合い関係を持つ方形の竪穴式住居跡である。S H506とは建物の軸が同じで中に含まれるが、一般にみられる拡張ではなく内部のS H529が新しいことが、断面と平面の観察から明らかになった。支柱穴は4か所検出できたが、調査区内では竈は検出できなかった。南北方向の検出長4.5m、東西方向4.1m、検出面からの深さ0.4mを測る。

竪穴式住居跡 S H520(第55図) 調査区外に北側の大半があるが、方形プランを持つ竪穴式住居跡である。南辺に周壁溝の一部が認められた。南北方向の検出長2m、東西方向4.3m、検出面からの深さ0.15mを測る。

竪穴式住居跡 S H521(第55図) 床面では多くの柱穴、土坑が検出できたが、支柱穴と判断できるものは確認できなかった。竈や周壁溝も確認できなかった。北東辺3.6m、北西辺3.2m、検出面からの深さ0.2mを測る。

竪穴式住居跡 S H522(第55図) ほぼ方形の平面形を呈する竪穴式住居跡で、明確な支柱穴や周壁溝は検出できなかった。北東辺内側に焼土が認められた。出土遺物は比較的多く、完形の土師器甕・高杯・甑が出土している。出土遺物から5世紀代の竪穴式住居跡であることが判り、今回の調査区ではもっとも古い古墳時代の竪穴式住居跡である。北東辺5.2m、北西辺4.4m、検出面からの深さ0.25mを測る。

竪穴式住居跡 S H516(第54図) 調査区外に南側の大半があるが、方形プランを持つ竪穴式住居跡である。2か所の支柱穴と、北辺に周壁溝の一部が認められた。南北方向の検出長2.7m、東西方向4m、検出面からの深さ0.2mを測る。

竪穴式住居跡 S H517(第54図) 調査区外に南側の大半があるが、方形プランを持つ竪穴式住居跡である。北西・北東辺には周壁溝が認められる。支柱穴に適当な柱穴は検出できていない。北東辺5.8m、北西辺4.3m、検出面からの深さ0.2mを測る。

竪穴式住居跡 S H536(第28図) 調査区北東隅で検出した竪穴式住居跡であるが遺存状態が非

常に悪く南辺と東辺の土色の違いを確認するのみであった。S H504に切られているように平面では確認できたが、埋土が非常に薄く注意を要する。東辺の検出長3 m、南辺検出長2.6m、検出面からの深さ0.05mを測る。

土坑 S K 515(第50図) S H501に切られ、S H514を切る長楕円形の土坑である。切り合い関係から古墳時代の遺構と考えられる。出土遺物には切り合い関係と齟齬するものもあるため、未確認の柱穴などに切られているものと考えられる。長軸方向の長さ6 m、短軸3 m、深さ0.6mを測る。

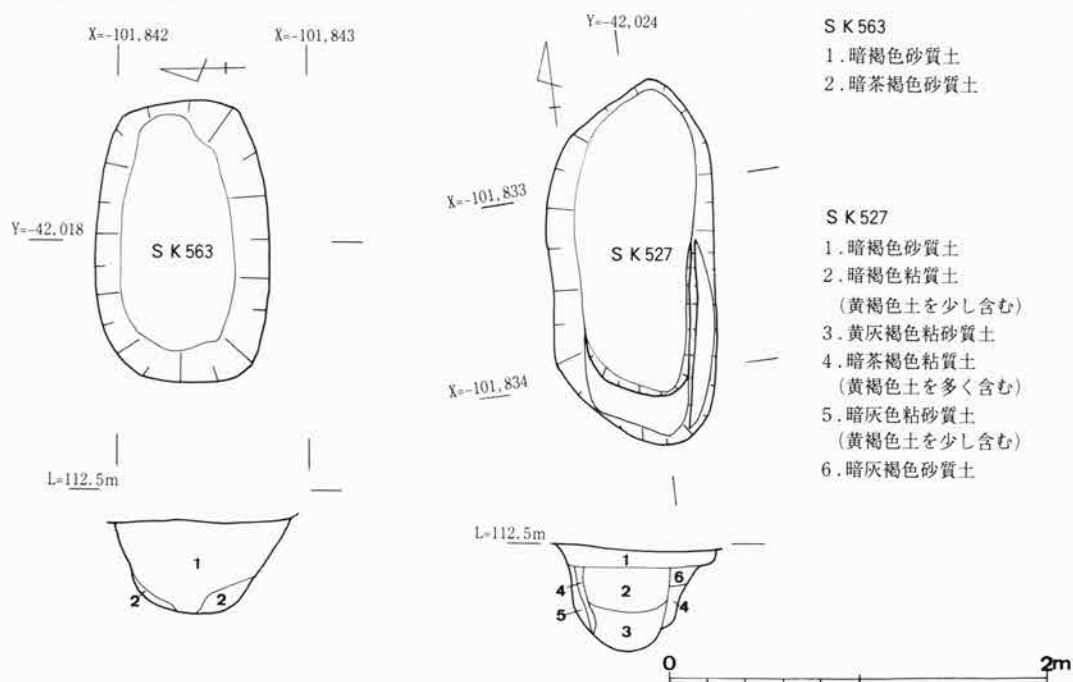
土坑 S K 590(第50図) S K515の底面で検出した土坑である。最も幅のあるところで1.2mを測る。大きな破片の土器が出土している。

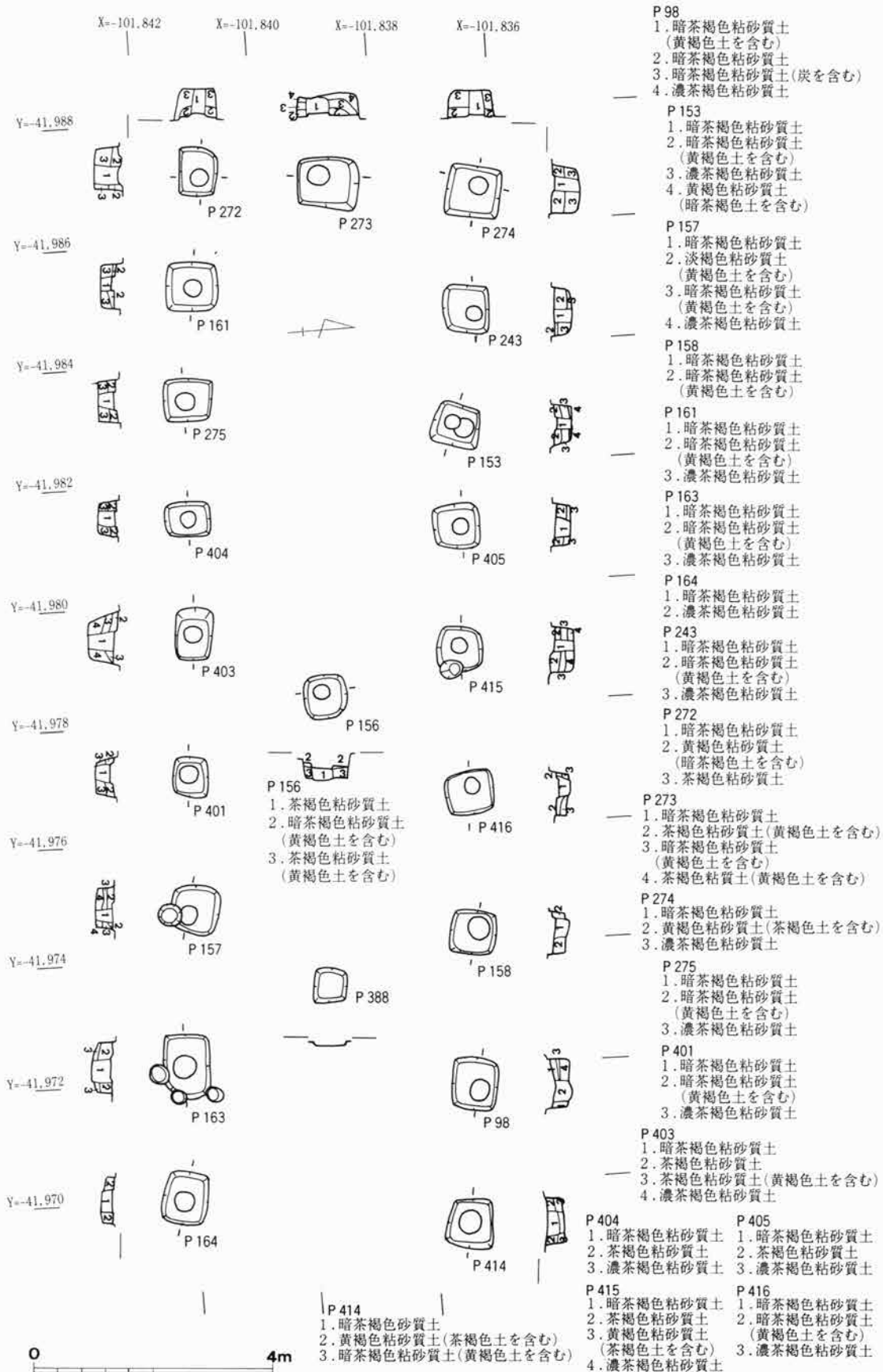
土坑 S K 527(第56図) S T707の墳丘部とS D564を切る長楕円形の土坑である。断面観察では埋葬主体部の可能性もあるが底面が平らでないため土坑と位置付けた。長軸1.9m、短軸0.85 m、検出面からの深さ0.5mを測る。

土坑 S K 570(第28・33図) S D545を切る古墳時代後期の楕円形の土坑である。長軸の検出長1.3m、短軸1.1m、検出面からの深さ0.6mを測る。

土坑 S K 563(第56図) S D549、S D546の接続部で検出した楕円形の土坑である。内部からは須恵質の陶棺片が出土している。古墳時代後期の年代が与えられる。長軸1.5m、短軸0.9m、検出面からの深さ0.5mを測る。

土坑 S K 535(第28図) 検出当初は竪穴式住居跡と考えていたが掘り進むにつれて、形状が不安定になり、底面が一定でなくなった。いくつかの土坑が切り合っているようであるが平面的には分離できなかった。出土遺物には5世紀後半から6世紀までの遺物が認められる。検出面からの深さ0.2mを測る。





土坑 S K 635(第28図) S K 535に隣接する土坑で古墳時代後期のものと考えられる。S K 644・648なども同様な浅い土坑と考えられる。検出面からの深さ約0.2mを測る。

(3) 奈良時代

奈良時代の遺構は、掘立柱建物跡・土坑がある。

掘立柱建物跡 S B 505(第57図) 東西9間以上×南北2間の東西棟で、西で約4°北に振る建物である。第5次調査7トレンチで柱穴が検出されていないことから、最長で10間までと考えられる。柱掘形は大きなもので1辺約0.8mである。建物内には柱穴が2か所(P 156・388)認められる。間仕切りや、棟を支える柱と考えられる。柱穴から奈良時代前半の土器が出土している。柱間は、東西はP 156より西が1.8m、東が2.4m、南北2.4mである。

掘立柱建物跡 S B 519(第28図) S B 505の北にある総柱の建物跡である。建物の方向はS B 505にほぼ一致するが、柱筋は一致しない。また、柱間も不揃いであることから古墳時代の倉庫の可能性も残る。柱掘形は約1辺0.5mの規模を持ち、柱間は東西2.2m、南北2.2mである。

土坑 S K 523(第28図) 調査区東北部で検出した土坑で、内部からは土師器・須恵器が多く出土している。

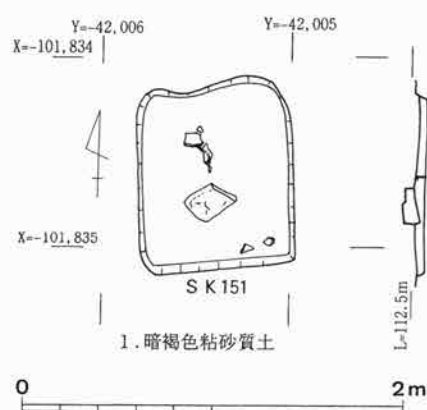
(4) 平安時代

掘立柱建物跡 S B 701(第28図) ほぼ真北方向に軸を持つ東西2間×南北2間以上の建物跡である。柱間は東西方向は約1.7m、南北方向は2.2mである。年代の根拠は埋土の状態や柱穴の直径、建物の向きから決定した。

掘立柱建物跡 S B 702(第28図) ほぼ真北方向に軸を持つ東西4間×南北2間の総柱の掘立柱建物跡である。柱間の東西方向は不等間で東から約1.8m、2.1m、1.8m、2.1m、南北方向も不等間で2.4mと2.7mである。出土遺物から11世紀前半と考えられる。

土坑 S K 151(第58図) 方形の平面形を持つ土坑で、上部を大きく削平されていた。中央部には四角く平な礫があり、瓦器碗、鉄器片が検出できた。遺物から11世紀後半のものと考えられる。南北1m、東西0.8m、検出面からの深さ0.05mを測る。

溝 S D 561 現在の用水路確保のため急遽拡張した南辺から検出した溝で、埋土は平安時代以降のものと似ている。出土遺物には磨滅を受けた律令期の須恵器と、切っている竪穴式住居跡の



第58図 平安時代土坑実測図

ものと考えられる須恵器があった。今回の調査区の南側には調査区に沿って用水が流れており、池上地区と刑部地区の地境となっている。検出できた溝は条里地割の痕跡である可能性が指摘できる。

溝 S D 730 南北方向に延びる溝で S D 561と埋土が似る。出土遺物は検出できなかった。

4. 出土遺物

(1) 縄文時代以前

石器(第82図1・15～19) 1は凹基の石鏃で弥生時代以前の鏃である可能性が高い。S D526から出土している。15・16・18・19はチャート製の石器である。15・16は縦に長い剥片である。15は包含層から出土している。16は背面の剥離痕観察から自然面を打面にし数回剥離が行われていることが窺える。S H512埋土から出土している。18・19は楔形石器である。18はS D526から、19はS H502埋土から出土している。17はサヌカイト製の2次加工のある剥片で風化が弥生時代のものに比べて深い。S D549から出土している。

(2) 弥生時代

① 土器

S K 522(第59図4・6) 4は壺の口縁部で、口縁部内縁には波状紋、その内側は2条の凸帯がめぐる。内外面の調整はナデである。6は壺の口縁部で垂下する口縁端部と口縁内縁部に櫛描きによる格子紋が施される。

S K 532(第59図2・3・11) 2・3は同一個体と考えられる無紋の壺である。体部内外面はハケ調整で、口縁部はナデである。11は内外面ハケ調整の底部である。

S K 547(第59図1) 1は無頸壺で、体部外面の下半部はナデ、上半部はハケ調整、内面はハケ調整である。

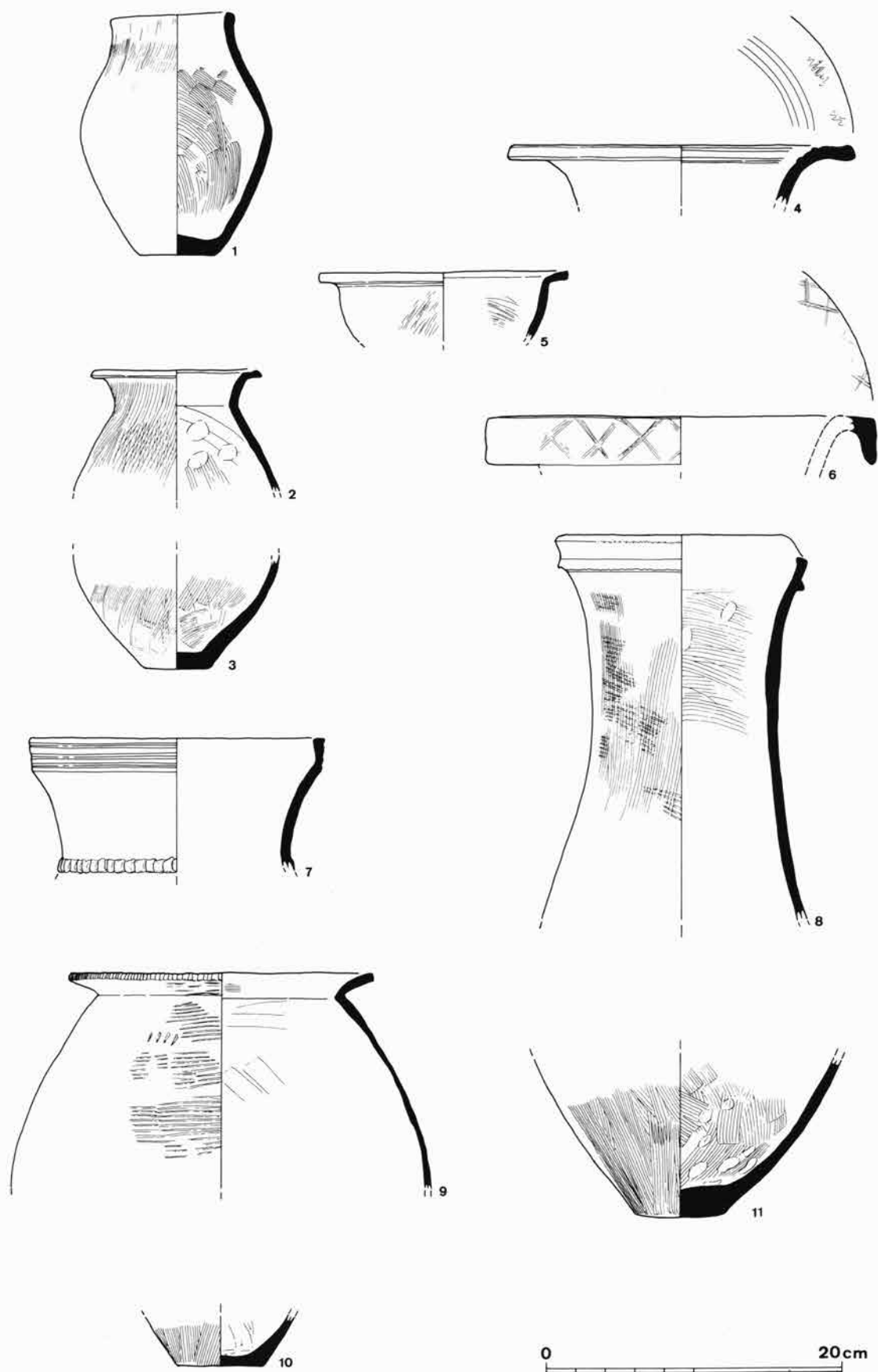
S K 552(第59図5) 5は内外面ハケ調整の鉢である。

S K 584(第59図9・10) 9・10は完形の状態で出土した甕である。体部下半部が細片に剥離しているため接合できなかった。体部に列点紋が施される。体部は底部付近がハケ、上部および口縁部外面はタタキ、口縁内面はヨコハケ、内面は不明であるが砂粒の横方向への動きが認められる。

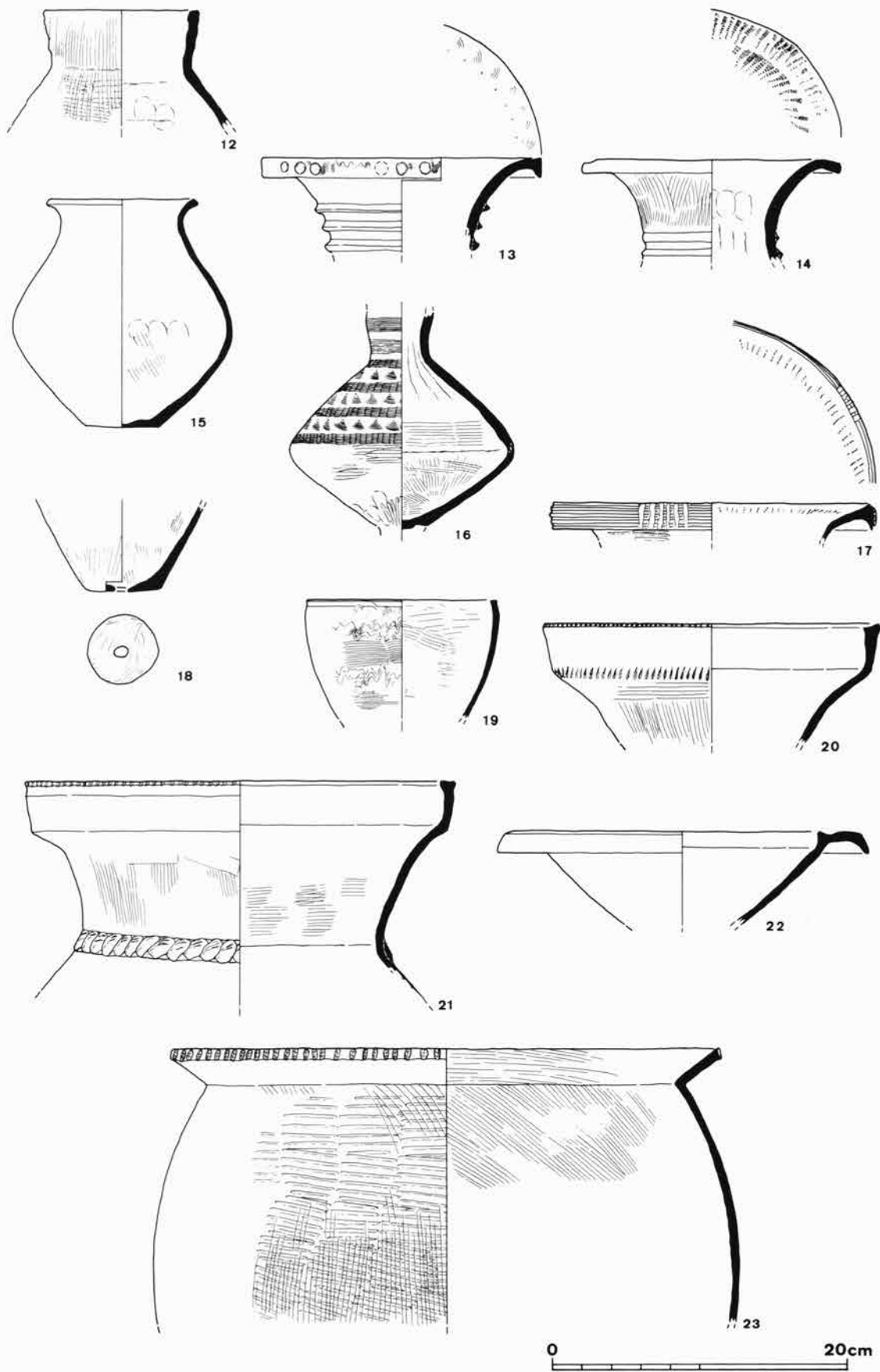
S K 665(第59図7) 有段口縁を持つ壺の口縁部片である。

P 405(第59図8) P 405は奈良時代のS B 505の柱穴であるが、埋土中から土器が出土した。S D01を掘削したときに混入したものと考えられる。器形が縦長の水差しである。口縁端部は刻まれ、刻んだ凸帯が1条めぐる。器表面はタタキ後ハケ、内面はハケ調整である。

S D01(第60図12～23) S D01からはその検出面(上層)で出土するものと、溝の中位以下(下層)で出土するものがある。上層出土遺物は、12・13・15・17～19・22である。12は直口壺で外面はタタキ後ハケ、内面はナデ調整である。13は口縁内縁、端面に波状紋、端面には円形浮紋、頸部は断面3角形の貼り付け凸帯が認められる。内外面ともナデ調整である。14は口縁内縁部に2条の列点紋が、頸部には貼り付け凸帯が2条施される。外面はハケ、内面はナデ、頸部内面にはシボリ痕がみられる。15は無紋の壺である。16は細頸壺で、直線・扇形・簾状の櫛描きによって施紋される。外面は上半部がナデ、下半部ミガキ、内面はハケ、上半部はナデで頸部にシボリ痕が認められる。17は壺の口縁部で、端面は凹線の後、棒状浮紋が施され、内縁部には列点紋が施される。外面はタタキ調整である。18は甕の底部で穿孔されている。19は器形が不明であるが、外面には彫りの浅い乱れた波状紋が施される。内外面ともハケ調整である。20・21は有段口縁の壺で、頸部には貼り付け凸帯が施される。20は口縁端部にキザミ、屈曲部には列点紋が施される。



第59図 弥生時代土器実測図(1)



第60図 弥生時代土器実測図(2)

口縁部下半はタタキ後ハケ、その他はナデ調整である。21は口縁端部のキザミが施される。内外面ハケである。22は水平口縁を持ち、端部が垂下する高杯の杯部である。23は口縁端が刻まれた甕である。キザミは板状工具の小口で施され、列点紋状に痕が残る。

S D 582(第61図24) 24は溝中埋葬 S K 724の東側で完形の状態で出土した甕である。溝底部に接し横たわった状態で出土した。口縁端部にはキザミが施され、体部には内外面ともハケ調整が、底部付近にはケズリがみられる。

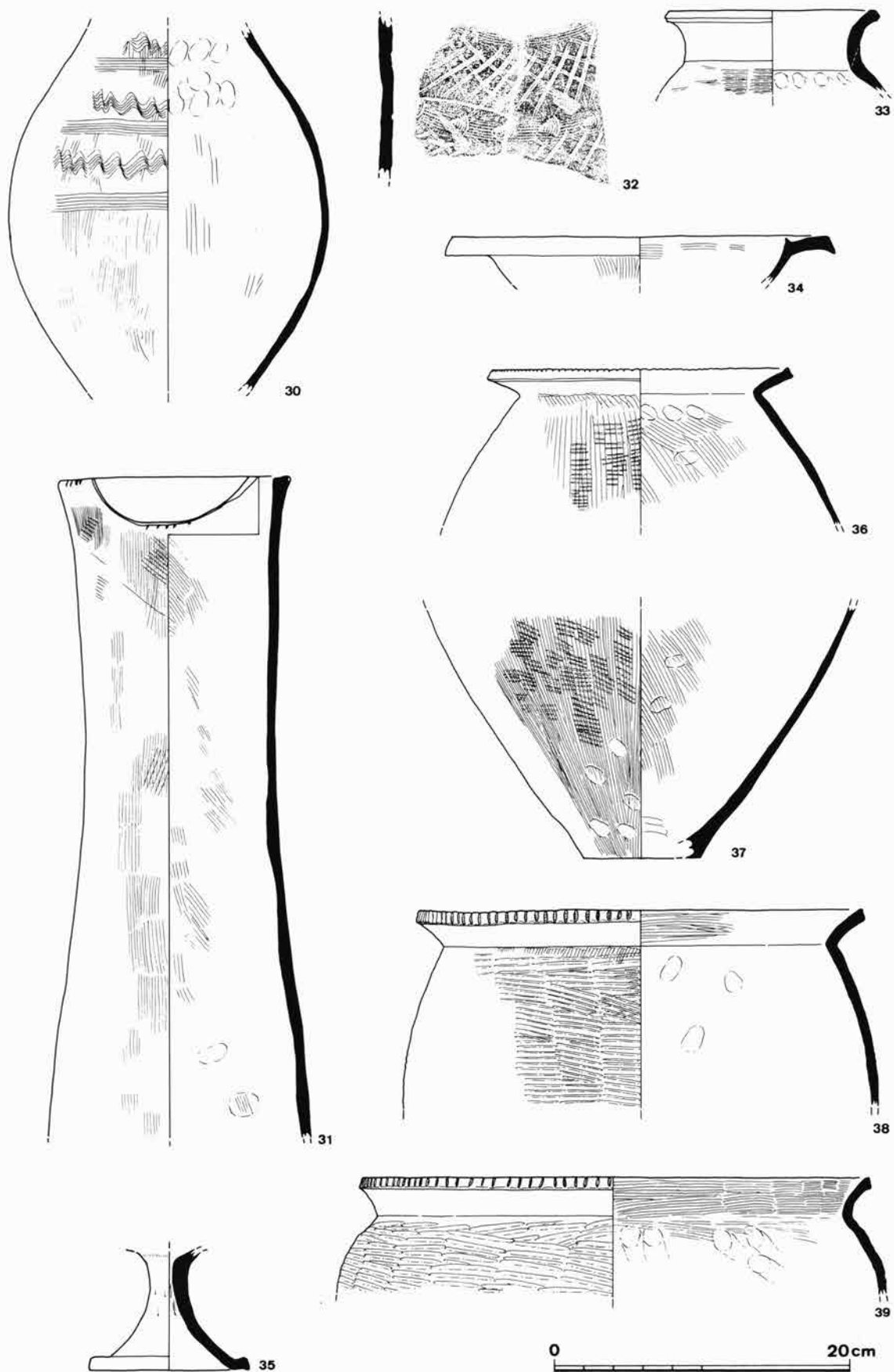
S D 553(第61図25～27) 25は完形の状態で出土した無紋の壺である。内外面ともにハケ調整で、底部もハケ調整である。26は25と同形状の壺と考えられるが、口縁端部にはキザミがみられる。27は完形の状態で出土した甕である。内外面ともにハケ調整で、底部はナデ調整である。

S D 549(第61～63図28～40) 比較的良好な土器が多く出土している。28は無紋の壺で頸部、体部はハケ調整である。29は直立した口縁部を持つ壺で、比較的太い櫛で直線紋、波状紋がハケ調整の後、施されている。体部内部には粘土紐の接合痕が残し、下から上に指ナデがみられる。胎土は細粒の砂でざらつき、遺跡出土の多くの土器と胎土が異なる。30は壺の体部である。体部外面はハケ調整の後、櫛描紋が施される。内面は剥離のため不明である。31は細身で長胴の水差しである。口縁端部にはキザミが施され、体部外面はタタキ後ハケ、内面はハケで調整されている。32は大型の壺の体部で各種の櫛描紋で施紋されている。33は体部外面がタタキ調整の短頸壺である。内面の調整は不明であるが、指頭圧痕は確認できる。34は水平口縁を持ち端部がわずかに垂下する高杯の杯部である。内外面ともハケ調整である。35は脚部で、外面はケズリ後ナデ、内面にはシボリ目がみられる。体部との接続部にハケの痕がみられることから体部にハケ調整が施されたものが残っていたものと考えられる。36・37は同一個体と考えられる甕の口縁部と底部である。口縁部はキザミが施され、体部表面はタタキ後ハケ、内面はハケ調整である。口縁部は内外ともナデ調整である。38は口縁端部にキザミが施され、体部外面はタタキ、内面はナデ、頸部にはハケが若干みられ、口縁部外面はナデ、内面は横方向のハケが認められる。39は口縁端部にキザミが施され、体部外面はタタキ、内面はナデ、口縁部外面はナデ、内面は横方向のハケが認められる。40は大型の有段口縁を持つ壺である。S D 549上方から出土している(第47図)。出土レベルは一定で、溝がある程度埋まってから検出時の場所に埋没したものと考えられる。口縁部は完形で出土しており、口縁端部外面、外面屈曲部にキザミが施される。体部外面はタタキ後ハケ、内面はハケ調整である。口縁部外面はハケ後ナデ、内面はナデ調整である。底部近くの破片は検出できていない。

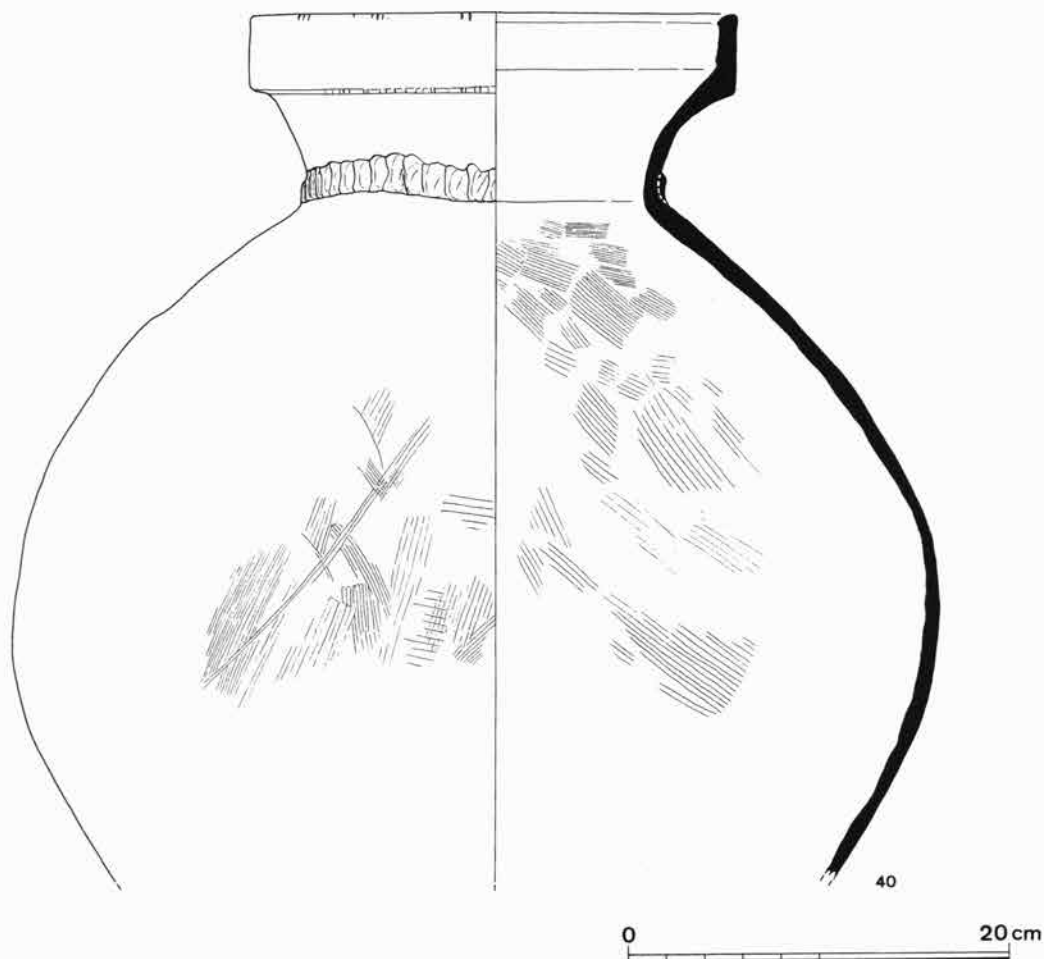
S D 567(第64・65図41～56) 41は口縁部が無紋の壺である。外面はハケ調整、内面は不明である。43は無頸壺である。内外面はハケ調整で、口縁付近は内外面ナデである。44は壺の口縁部で、太い櫛描きが施される。45は完形で出土した細頸壺である。乾燥のため破損し、内面観察を行える機会を得た。器表面は上半部ハケ調整の後、不定形な浅い櫛描紋と列点紋が施される。下半部は横方向のミガキである。内面は体部がハケ、頸部・口縁部はナデ調整である。47は壺で、外面は細かいハケ調整の後ナデ調整が、内面は粘土接合痕が残されているがハケ調整である。内



第61図 弥生時代土器実測図(3)



第62図 弥生時代土器実測図(4)

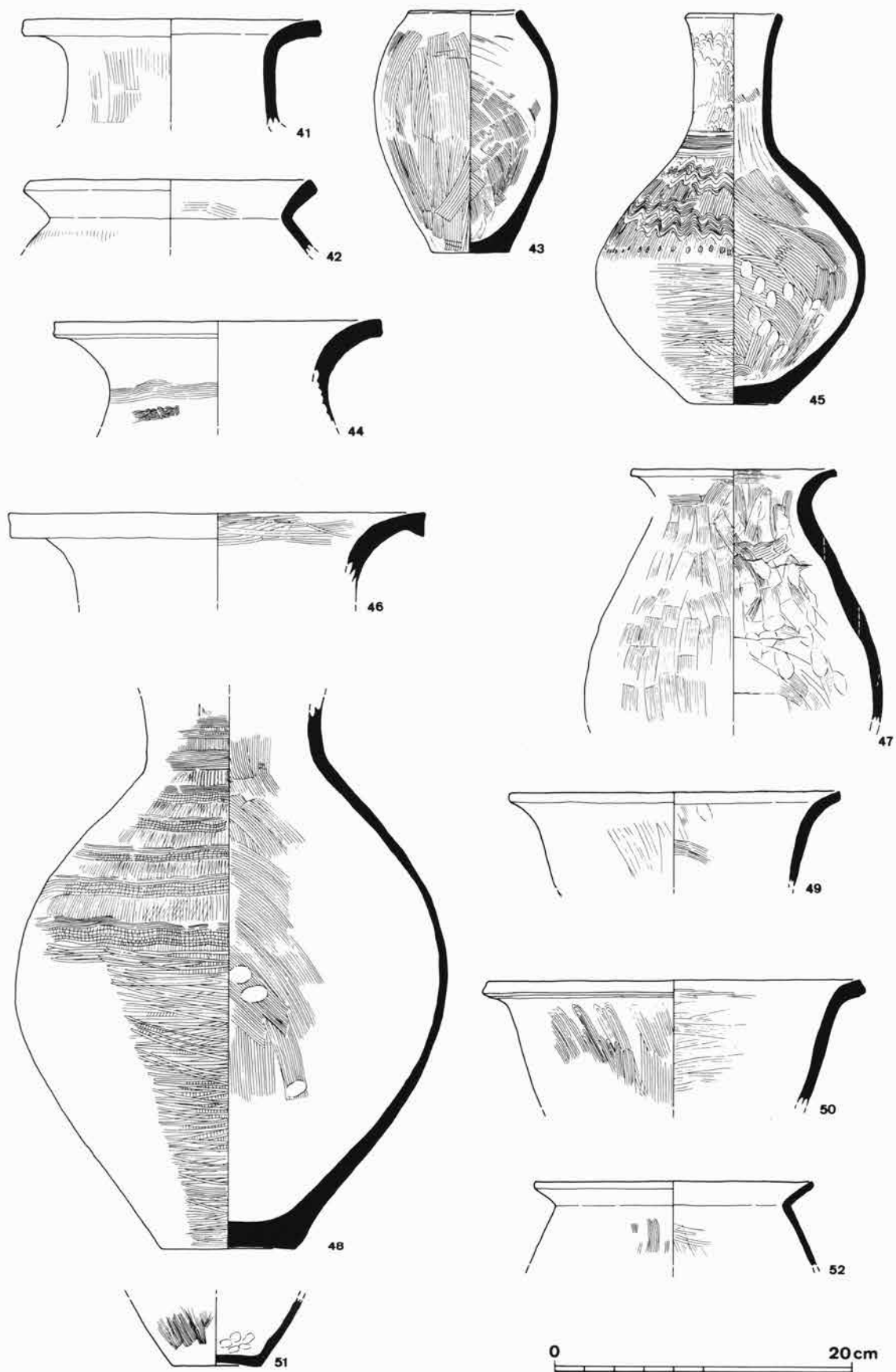


第63図 弥生時代土器実測図(5)

外面とも指頭圧痕が多く認められる。48は口縁部を欠く壺で、器表面上半部はハケ調整後櫛描紋が施紋され、下半部は横方向のミガキである。内面はハケ調整である。49・50は内外面ともハケ調整で、口縁部はナデである。50の外面のハケは力強く掻き取るようなハケである。51～56は甕である。51・52は小型の甕の底部と口縁部である。53は口縁端面にキザミが施され、体部外面は調整不明、内面はハケ調整である。54は体部表面はハケ、内面は調整不明である。55は口縁端面には列点紋が施され、口縁内外面はヨコハケ、体部外面はタテハケ、内面はナデである。56は口縁端面に波状紋が施された完形の甕である。調整は口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、内面は上方がヨコハケ、他の大部分がタテハケである。

S D 543(第66図57) 57は完形の状態で出土した。内外面にハケ調整された後、体部表面には櫛描紋が施され、頸部には断面三角形の貼り付け凸帯がめぐる。口縁端面には列点紋があり、内面には半円形紋が施される。

S D 545(第66図58～63) 58は壺の口縁部で内外面はナデ調整である。59は壺の口縁部で、口縁端部と内面に波状紋がみられる。口縁内面には2条の凸帯があり、上端は刻まれている。残存している部分で、1対の穿孔部が2か所確認できた。内外面ともにナデ調整である。60は壺の口縁部で、端面には波状紋が内面端には2条の扇形紋が施される。内外面ともナデ調整である。61

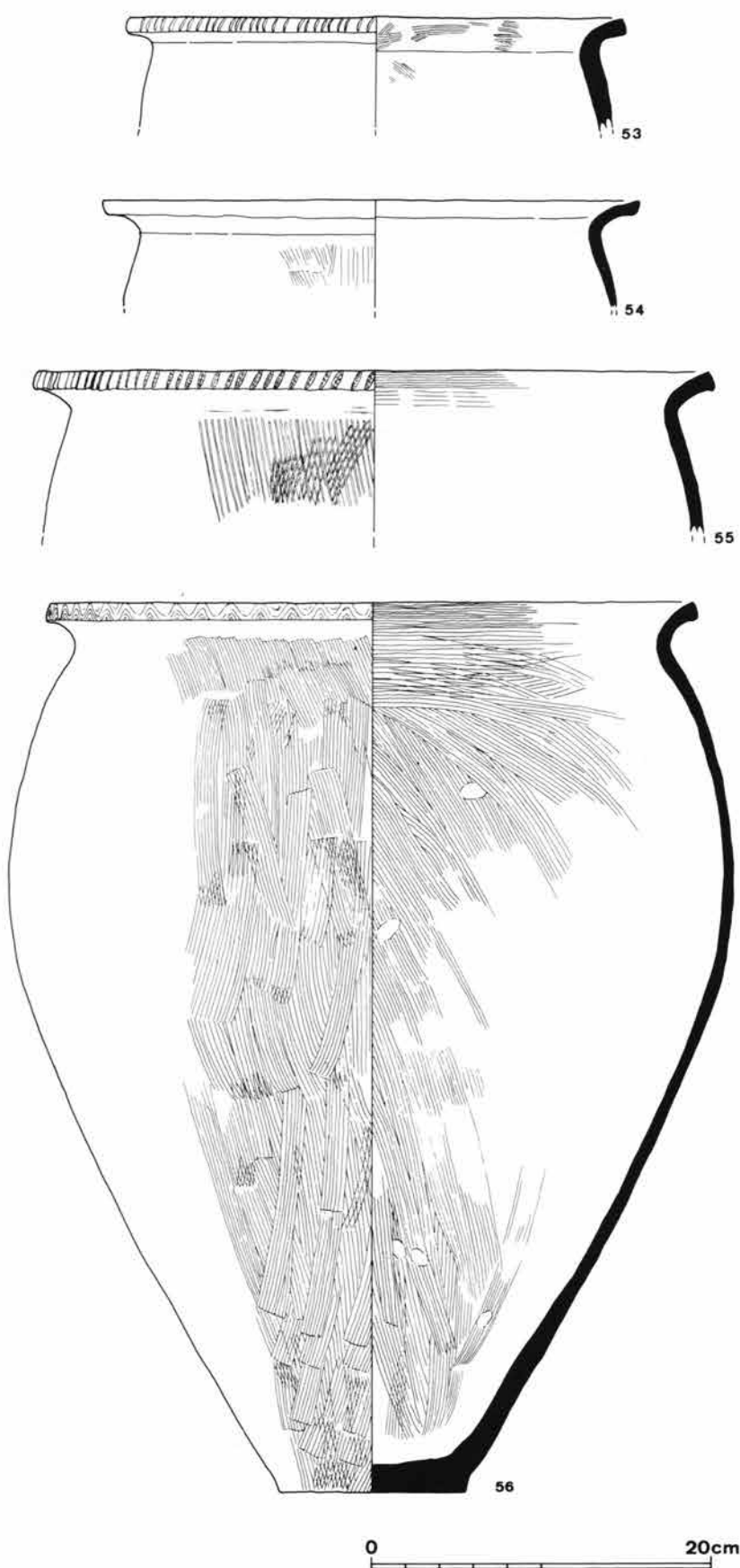


第64図 弥生時代土器実測図(6)

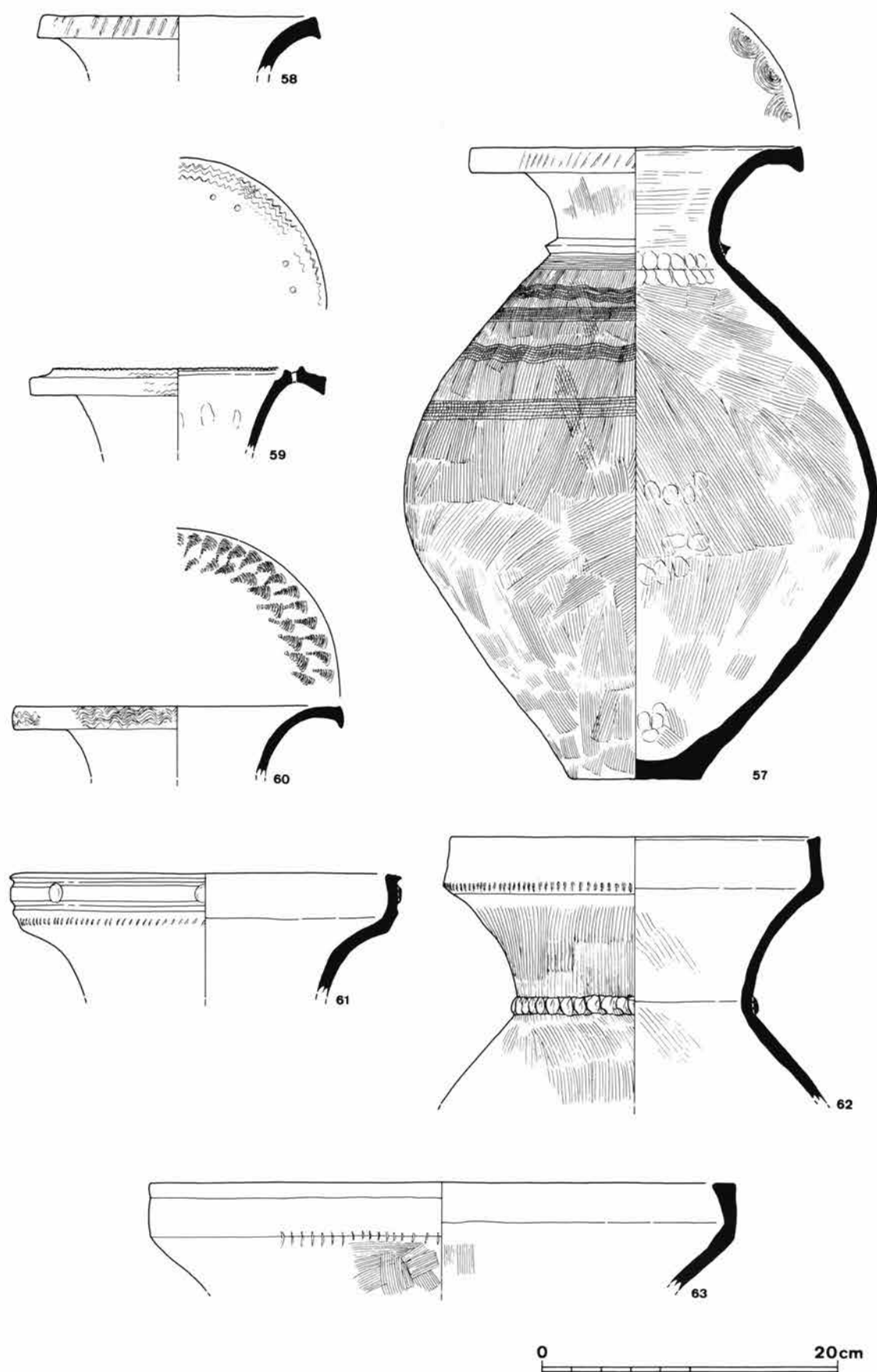
は有段口縁の壺の口縁部である。2条の凹線の中に円形浮紋がみられる。また屈曲部外面にはキザミが施される。口縁部上半はナデ調整で、下半は不明である。62は有段口縁の壺の口縁部である。屈曲部外面にはキザミ、頸部には指頭圧痕凸帯紋が施される。口縁部上半はナデ調整で、頸・体部はハケ調整である。63は大型の有段壺の口縁部である。屈曲部外面にはキザミが施される。口縁部上半はナデ調整で、下半はハケ調整である。

S D 579 (第67図64)
64は直口した口縁部を持つ短頸壺である。口縁端面はハケ、口縁部内外面ともハケ、体部は外面タタキ、底部近くはハケ、内面はハケ調整である。

S D 554 (第67図65～69)
65は甕の蓋である。外面はハケ調整で頂部付近はハケ後ナデ調整が施される。内面はナデ調整である。66は壺の口縁から体部の破片である。内外面ともハケ調整で、口縁端部には1条の凹線が、体部には櫛描紋が施



第65図 弥生時代土器実測図(7)



第66図 弥生時代土器実測図(8)

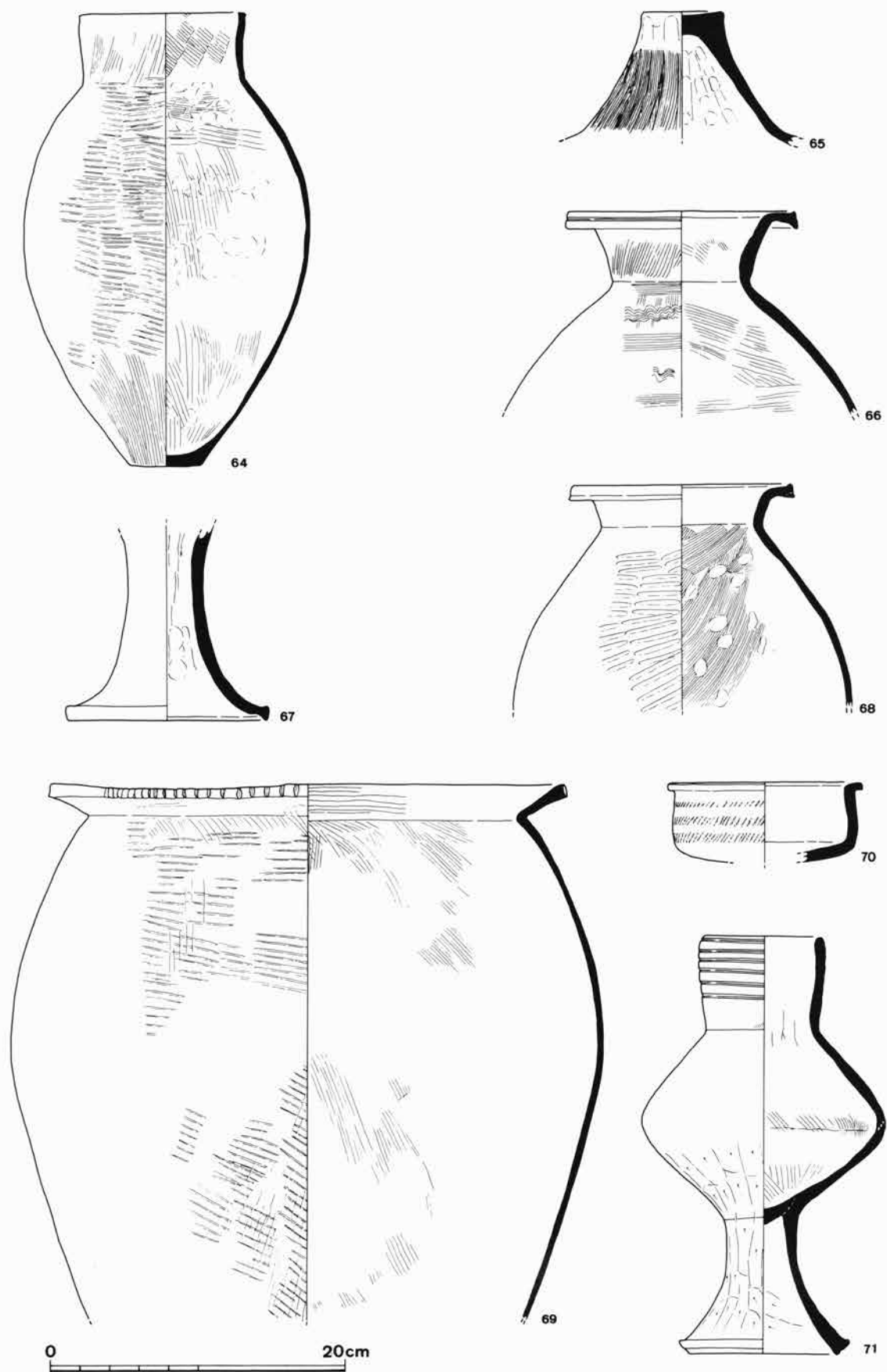
される。67は脚部である。内外面の調整は不明であるが、内面にはシボリ目がみられる。68は壺で、口縁内外面はナデ、体部表面はタタキ、内面はハケ調整である。69は大型の甕で、外面はタタキ後ハケの調整が施される。

S D 568(第67・68図70～74) 70は小型の鉢で脚が付いていたものと考えられる。内外面の調整は不明であるが、器表面には3条の列点紋が施される。71は脚付きの直口壺である。口縁部には6条の凹線紋がみられる。脚部と体部下半部外面はケズリ調整、体部外面はナデ、内面はハケ後ナデ調整である。72は有段口縁を持つ壺で、頸部には指頭圧痕凸帯紋が施される。口縁部外面はタタキ後ハケ、屈曲部から上はタタキ後ナデ、内面はハケ後ナデ、体部外面はタタキ、内面はていねいなナデ調整が施される。73は器表面の状態が悪く調整は不明であるが、櫛描紋によって施紋されている。脚部を持つ水差しである。74は壺の口縁部である。口縁端部には5条の凹線の後縦方向に広く刻まれている。外面の調整はハケ後ナデ、内面はナデである。

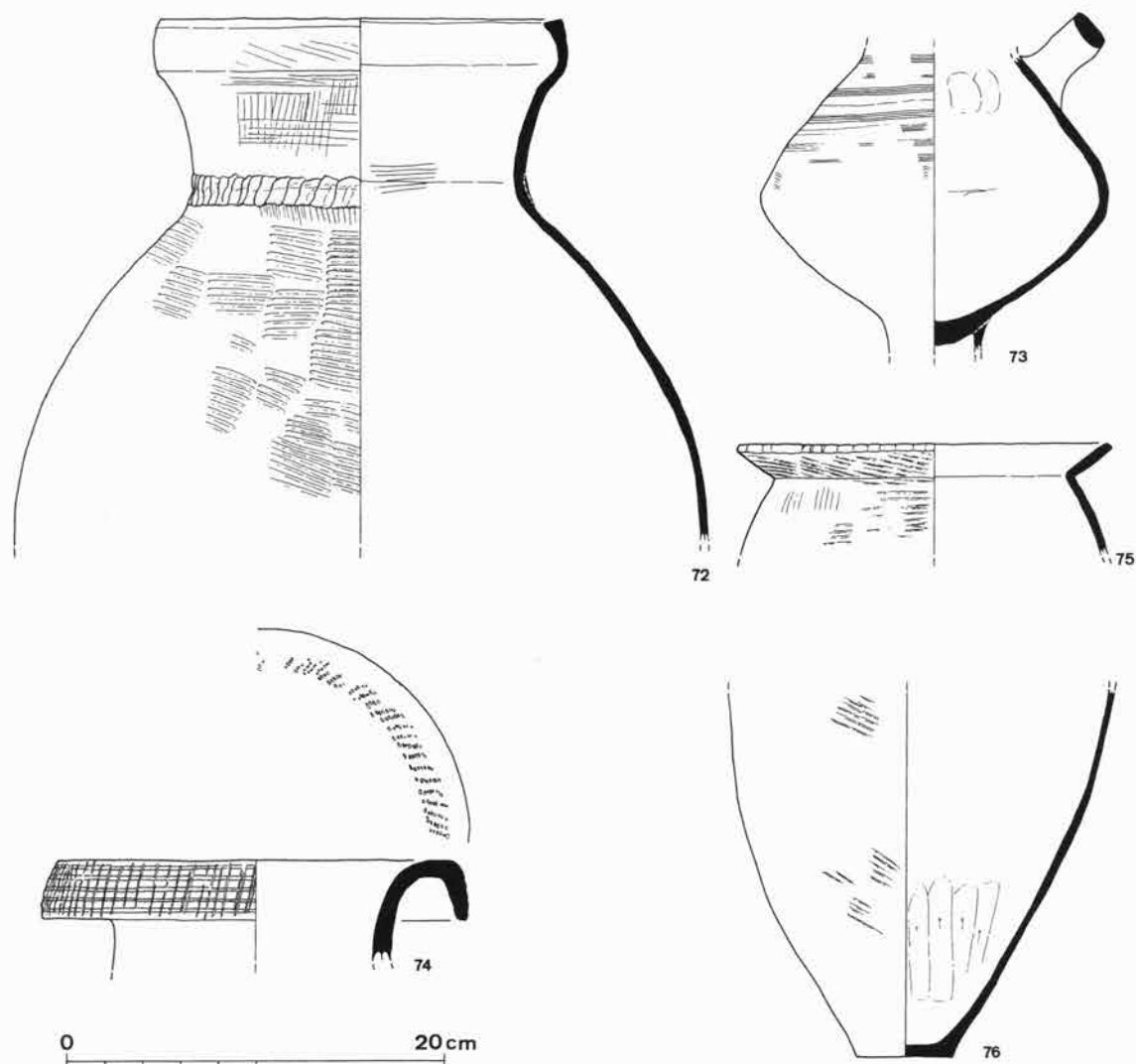
S D 525(第68図75・76) 75・76は完形の状態で検出した甕である。溝の中位から横倒しの状態で出土した。口縁端部にはキザミ、器表面にはタタキ、内面にはナデ調整がみられる。

S D 526(第69～81図77～217) S D 526は最も多く土器が出土した遺構である。前述したように当初、S D 01に平行する溝と認識していたため、一括して名称をつけていた。出土遺物は4つに地区割りして取り上げた。東地区、中1地区、中2地区、西地区である。西地区と中2地区はS T 715と716を区画する溝、東地区、中1地区はS T 717と718を区画する溝にあたる。S T 717と718を区画する部分にはS D 526は掘り直しが行われている。遺構はA・Bに分けたが調査中は分離できないで遺物を取り上げた。Bからの顕著な土器の出土はなかったが調査後分離することは困難である。S T 715と716を区画する部分とS T 717と718を区画する溝の西側で、底部からやや浮いた状態で多くの土器が出土している。完形率が高く一括の廃棄と考えられる。また、重機掘削時の上層で出土したもの、出土区がわかっているが出土レベルのわからないものについても以下の文で明示したい。東地区・中1地区で出土した遺物は85・86・89・96・97・113・116・126・130・143・162・170・183・194・195・198・207・210・215、西地区は171・177、精査時最上層は175・196・211、S D 526下層とのみ表示のあるものは199・200・202、S D 526とのみ表示のあるものは147・154・178・180・184・214である。103は中1地区、中2地区で接合関係が認められる。その他はS T 715と716を区画する部分とS T 717と718を区画する溝の西側からの出土であり、溝Bとは分離可能で、出土位置を押さえて取り上げた遺物である。

77～94は有段口縁を持つ壺である。口縁の施紋にはいくつかのパターンがある。口縁屈曲部より上の表面に凹線がめぐらないもの(77・82・84・85・87)、口縁端部近くに1条めぐるもの(79～81・86・89・90・93・94)、屈曲部に1条めぐるもの(92)、3条の凹線がめぐるもの(78・83・88)に分けられる。その他の施紋には、78の竹管による「C」字刺突、91の波状紋、85の円形浮紋がある。この口縁部を持つ壺は確認できるものすべてが頸部に貼り付け凸帯を持つ。94は2か所の相対する場所に把手が付けられる。調整は口縁部下半部は多くの個体でタタキ後ハケ調整であるが、ハケのていねいさによってタタキの残りが異なる。ハケには縦方向を主とするものと、



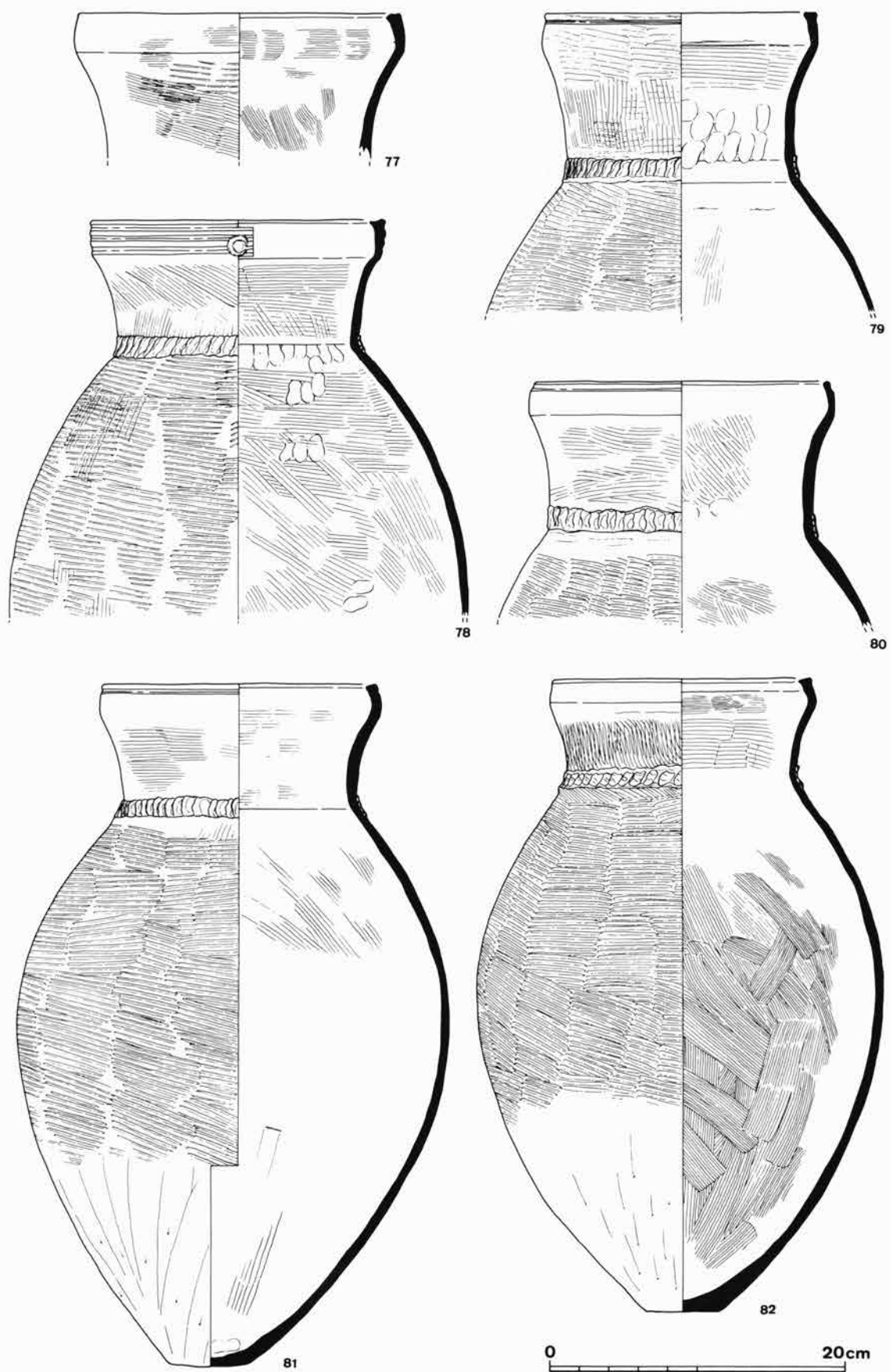
第67図 弥生時代土器実測図(9)



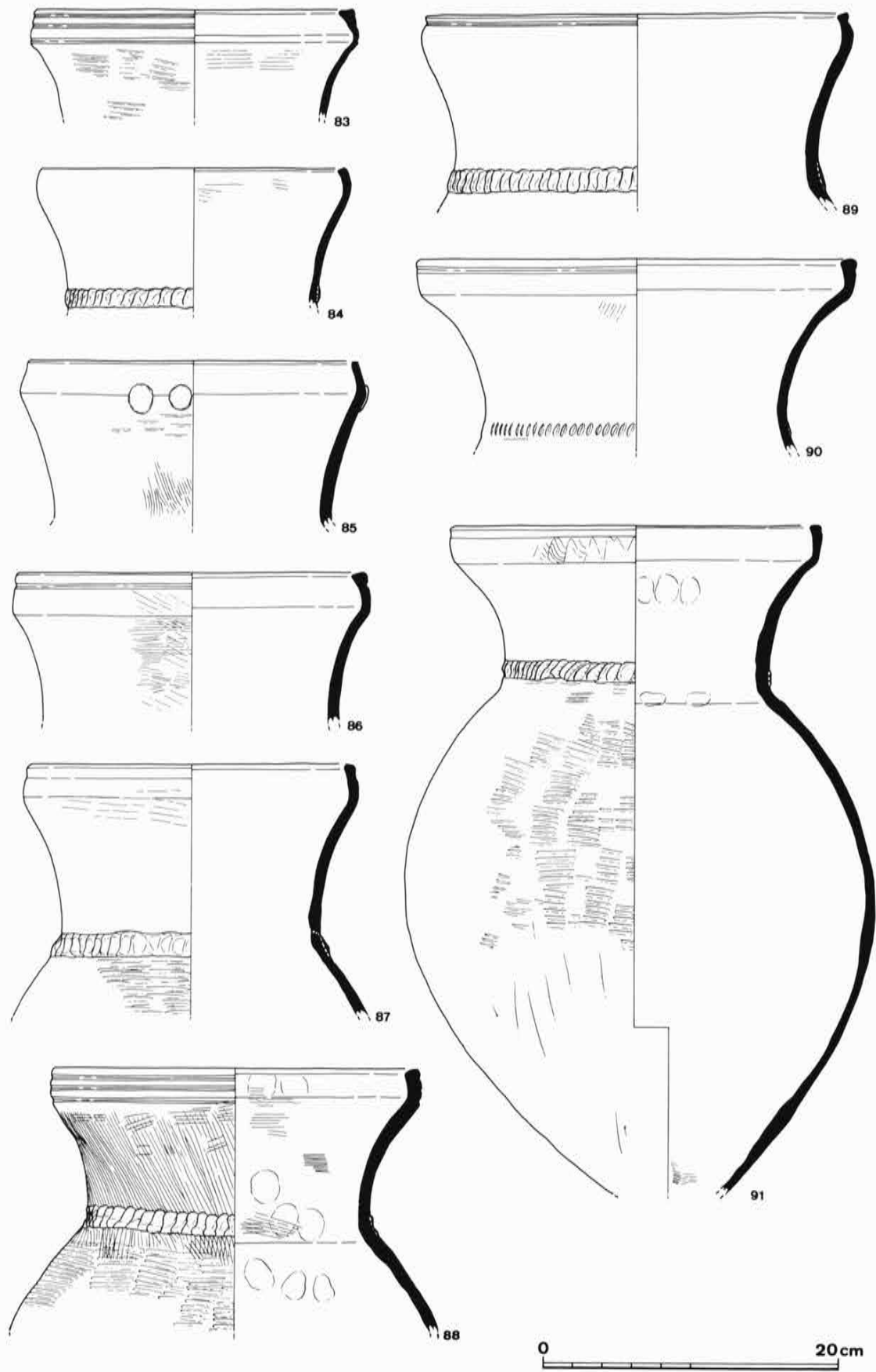
第68図 弥生時代土器実測図(10)

横方向を主とするものがある。体部外面は上半部がタタキ調整を主体とし、下半部がケズリである。口縁部内面は横方向のハケが施されるものが多い。体部内面はハケ調整である。

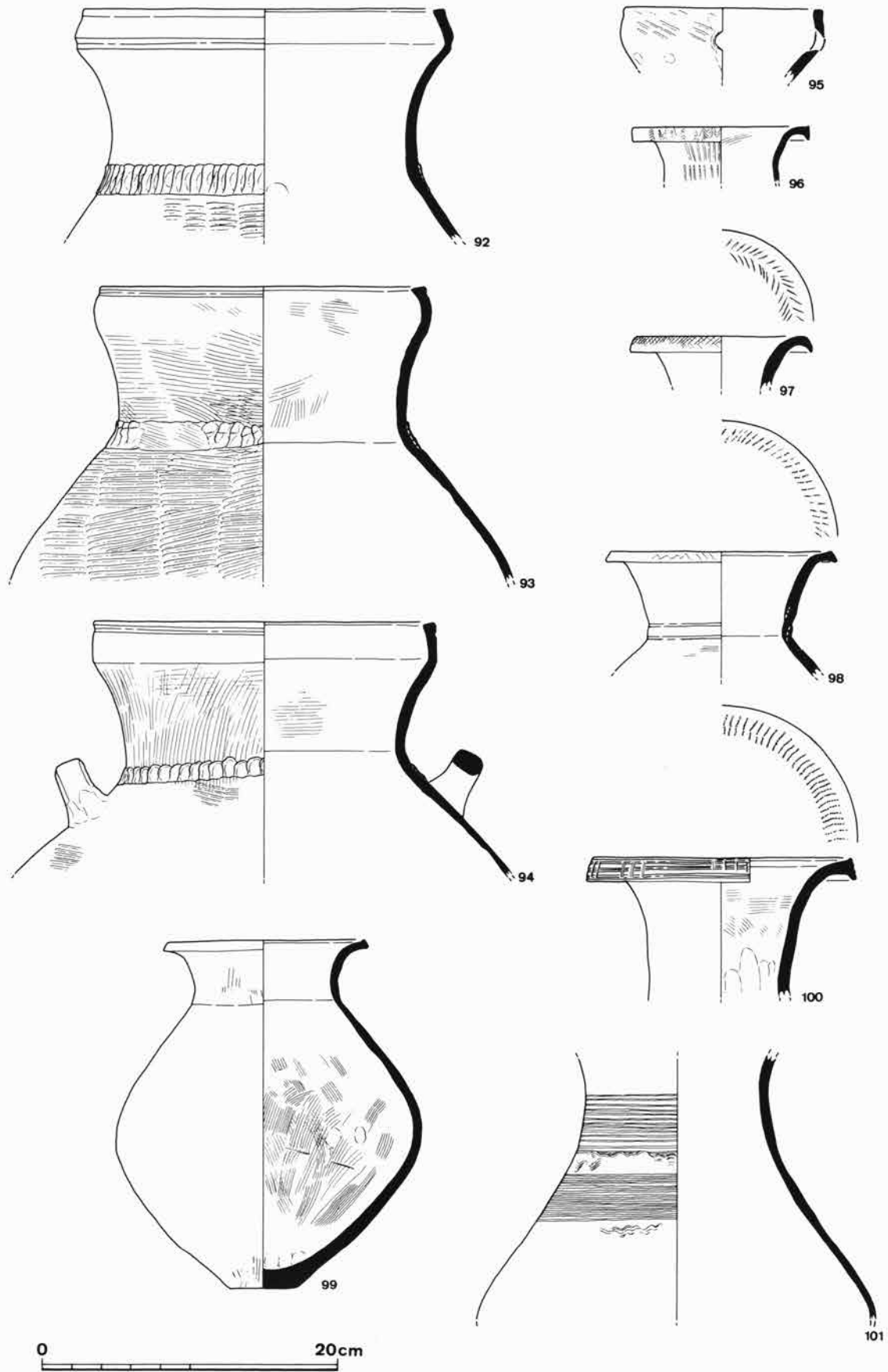
95は有段口縁を持つ壺の口縁部である。1か所内面から外側に穿孔が施され注口状を呈する。外面はタタキ後ナデ、内面はナデ調整である。96・97は中1地区の最下層で出土した壺の口縁部である。97の内縁部にはヘラによる羽状紋が施される。98は壺で、口縁部端面には波状紋、内縁には列点紋、頸部には凹線紋が施される。99は無紋の壺で、内外面はハケ調整である。100は壺の口縁部で端面には凹線の後、縦方向の櫛描きが施され、内面は列点紋によって加飾される。101は壺の頸部で、ヘラ描き沈線と櫛描波状紋によって施紋される。102は口縁部内縁は円形浮紋、端面と頸部は列点紋、胴部上半は列点紋、胴部屈曲部付近に円形浮紋が施された壺である。胴部下半部はミガキ、内面は上半部がナデ、下半部がハケ調整である。103は壺で中1区と中2区で接合が認められた。口縁部は端面に凹線紋が、内縁には波状紋が施される。頸部から胴部上半にかけては各種の櫛描紋で飾られるが、磨滅が著しく確認しづらい。胴部下半部の調整は砂粒の動きからケズリと考えられる。内面はハケ調整である。104は口縁端面に波状紋、内縁に列点文が



第69図 弥生時代土器実測図(11)



第70図 弥生時代土器実測図(12)

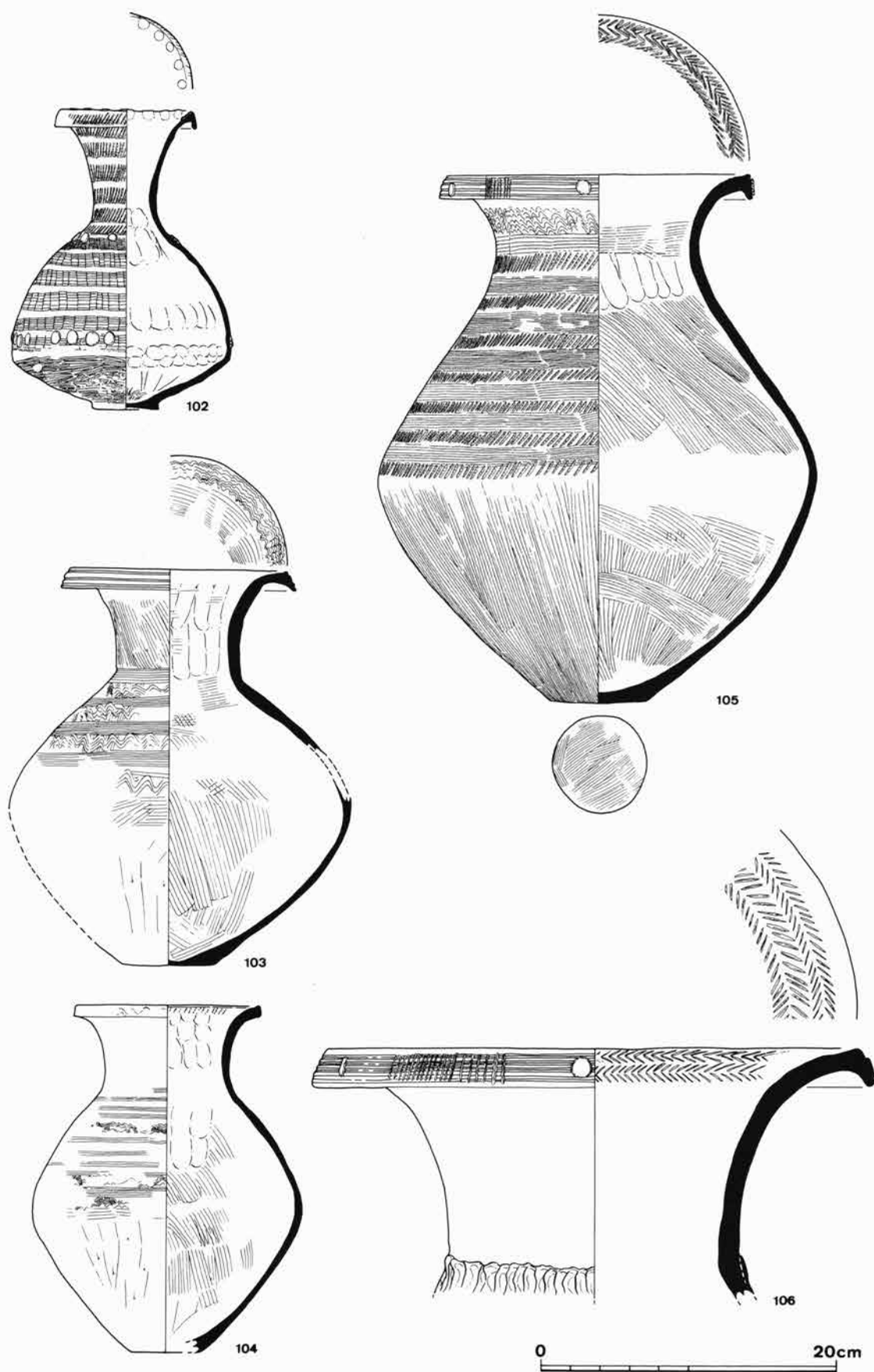


第71図 弥生時代土器実測図(13)

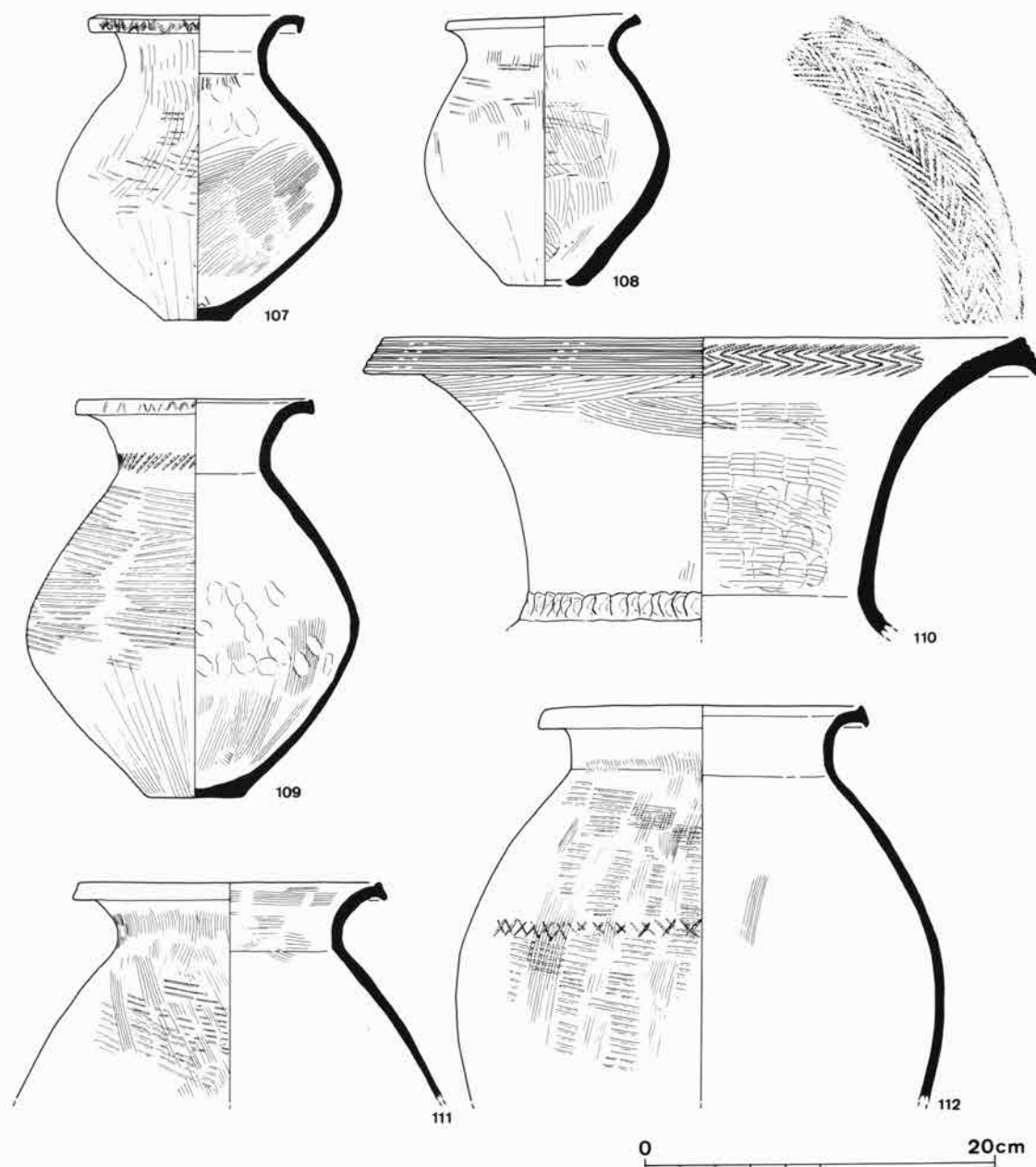
施されている。体部外面は櫛描紋がみられる。体部外面の上半部にはハケが残る部分があり、下半部はケズリ調整である。内面はハケ調整である。105は完形の状態で出土した広口壺である。口縁端は4条の凹線の後、部分的に縦方向にも施紋され、円形浮紋も施される。口縁内面には羽状紋がみられ頸部には波状紋の施された後、列点紋と櫛描直線紋が交互に施される。櫛描直線紋は浅く、胴部下半部のハケ調整に用いられた工具と同じものと考えられる。内面はハケ調整である。106は大型の壺の口縁部である。口縁端は4条の凹線の後、部分的に縦方向にも施紋され、円形浮紋も施される。口縁内面には羽状紋がみられる。頸部には貼り付け凸帯がめぐる。内外面の調整は剥離のため不明である。106は今回出土した遺物の中では112とならんで最も口縁径の大きな壺である。107は小型の壺で口縁端面には波状紋がみられるが胴部は無紋である。胴部上半部はタタキ後ハケ、下半部はケズリ、内面はハケ調整、上部はナデである。108は無紋の壺である。胴部上半部はタタキ後ハケ、下半部はケズリ、内面はハケ調整、上部はナデである。109は口縁端面に波状紋、頸部に列点紋が施された壺である。体部上半はタタキ、下半はハケ、内面はハケ調整で、上半部はナデである。110は大型の壺の口縁部である。口縁端は4条の凹線が施紋され、口縁内面には羽状紋がみられる。内外面の調整はハケである。111は無紋の壺である。外面はタタキ後ハケ、内面は口縁部がヨコハケ、胴部がナデ調整である。112は無紋の壺である。外面はヘラで格子状の紋様が胴部にめぐる。胴部表面はタタキ後ハケ、内面は口縁部がナデ、胴部がハケ調整である。113は無紋の直口壺で口縁外面は縦方向のハケ、胴部はタタキ後ハケ、内面はハケ調整である。114は口縁部に3条の凹線がめぐる壺である。全体に残りが悪いが体部の内外面はハケ調整である。162は大型の壺の体部である。上半部はさまざまな櫛描紋によって施紋される。底部近くはケズリがみられるがそれ以外はハケ調整である。

115は口径から壺と考えられる。117・119～123は、口径に対し口縁部の長さが、124以下に図示した池上遺跡出土の典型的な甕に比べ長い土器で、器種の認定が難しい。116は甕で口縁端部が上方に肥厚する。外面はハケ、内面はナデ調整である。118は口径が小さいが甕である。体部には2条の格子紋が施される。口縁端面には凹線があったと考えられる。体部はタタキ、内面はハケ後ナデである。121は口縁端面に2条の凹線が施され、頸部には貼り付け凸帯がめぐる。内外面の調整は不明である。122・123は同型式の土器で、122の体部外面はタタキ、内面は不明。123の体部外面はタタキ、内面はハケ後ナデ調整が施される。

124は全体的に器面の状態が悪いが、体部外面上半はタタキ、下半はケズリである。125は口縁端部にキザミ、体部に2列の刺突が施されている。口縁部外面はタタキ、内面はヨコハケ、体部外面上半部はタタキ後ハケ、下半部はタタキ後ケズリである。体部内面はハケ調整であるが、頸部にはシボリ痕と考えられる縦方向の皺が認められる。126は口縁端部をキザミ、口縁外面は工具痕が残る内面は横方向のハケである。体部外面はタタキ、内面はナデ調整である。127は口縁端部をキザミ、口縁外面はタタキ痕が残る内面は横方向のハケである。体部外面はタタキ後ハケ、内面はハケ調整である。128は口縁端部をキザミ、口縁外面はナデ、内面は横方向のハケである。体部外面はタタキ、内面はナデ調整である。129は口縁部にキザミ、外面はタタキ後ナデ、内面



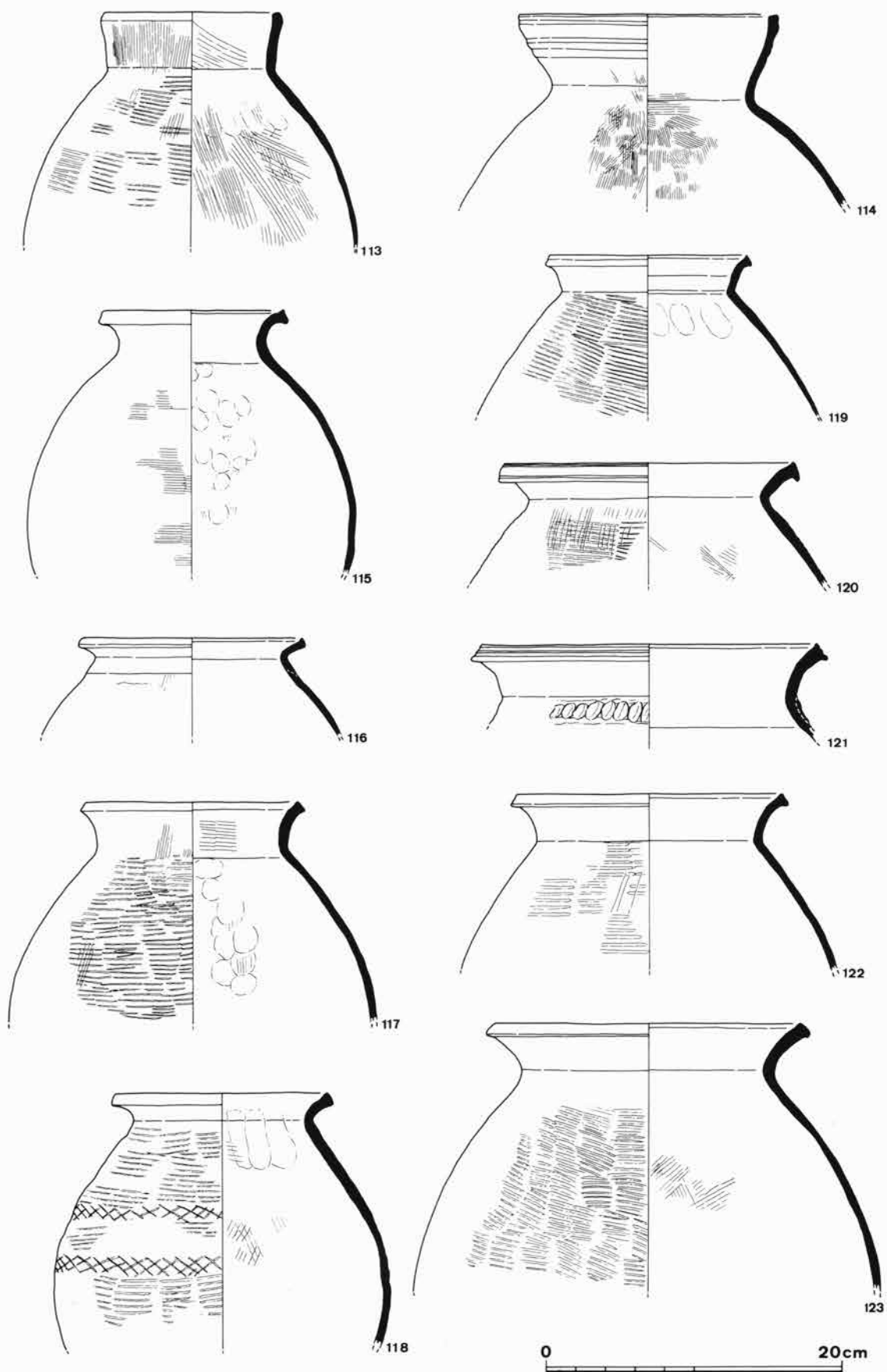
第72図 弥生時代土器実測図(14)



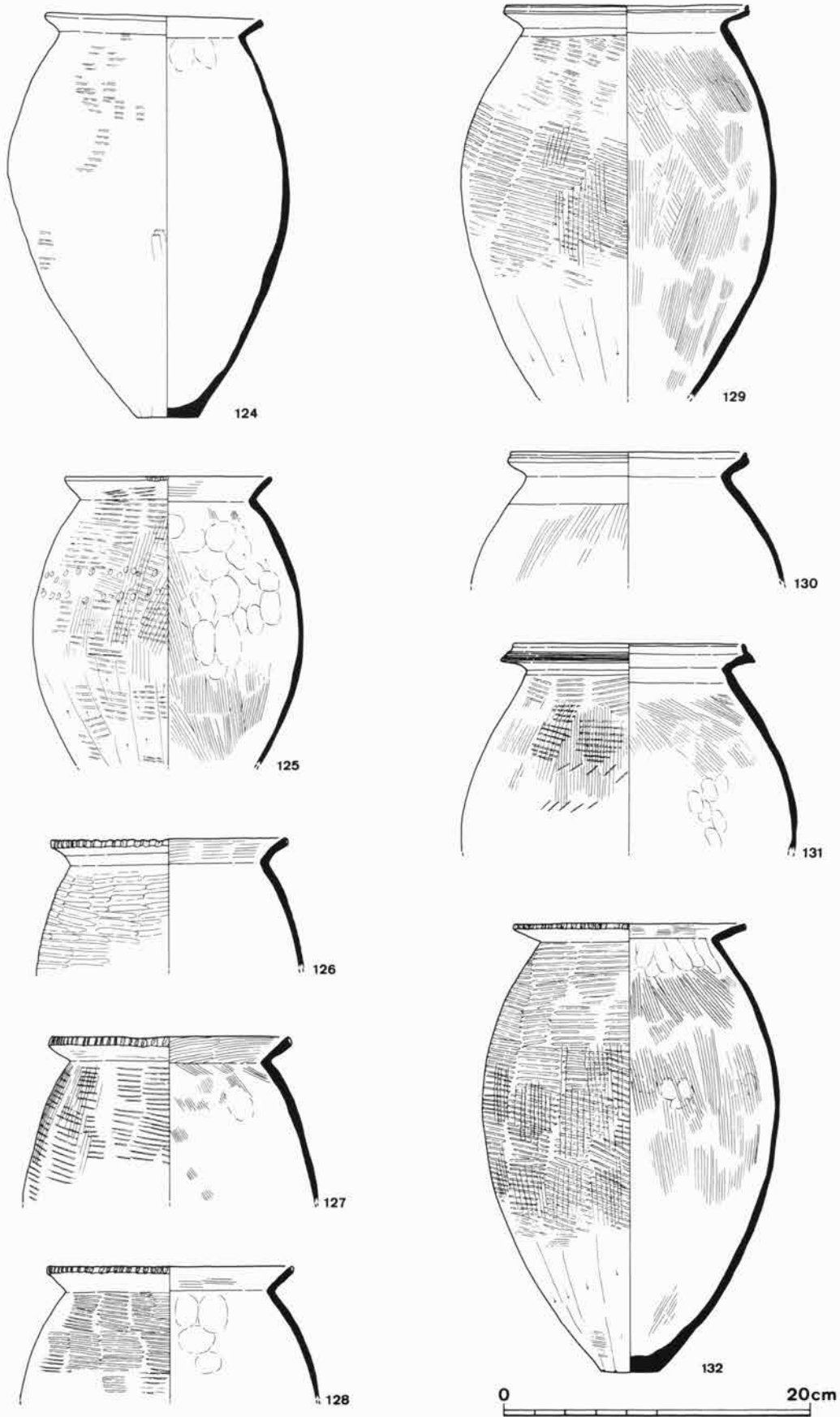
第73図 弥生時代土器実測図(15)

はヨコハケ。体部上半外面はタタキ、中位はタタキ後ナデ、下方はケズリである。内面はハケ後ナデである。130は口縁端部が上方に延び、端面には1条の凹線がめぐる。体部外面は粗いハケ調整で、その他はナデ調整である。131は口縁端部を上方に拡張し、広い端面を作りだしている。その面に凹線が施されている。体部には2条の列点紋がある。口縁部内外面はナデ、体部外面はタタキ後ハケ、内面はハケ後ナデ調整である。132は甕で、口縁部はキザミがみられ、外面はナデ、内面はハケ、体部上半はタタキ、中位はタタキ後ハケ、下半部はケズリ、内面はハケ調整である。

133は口縁端面に沈線が1条めぐる。口縁部内外面はナデ、体部内外面はハケである。134の口縁部内外面はナデ、体部外面はタタキ、内面はハケである。135は口縁端部をキザミ、口縁外面はナデ、内面は横方向のハケである。体部外面はタタキ後ハケ、内面はナデ調整である。136は



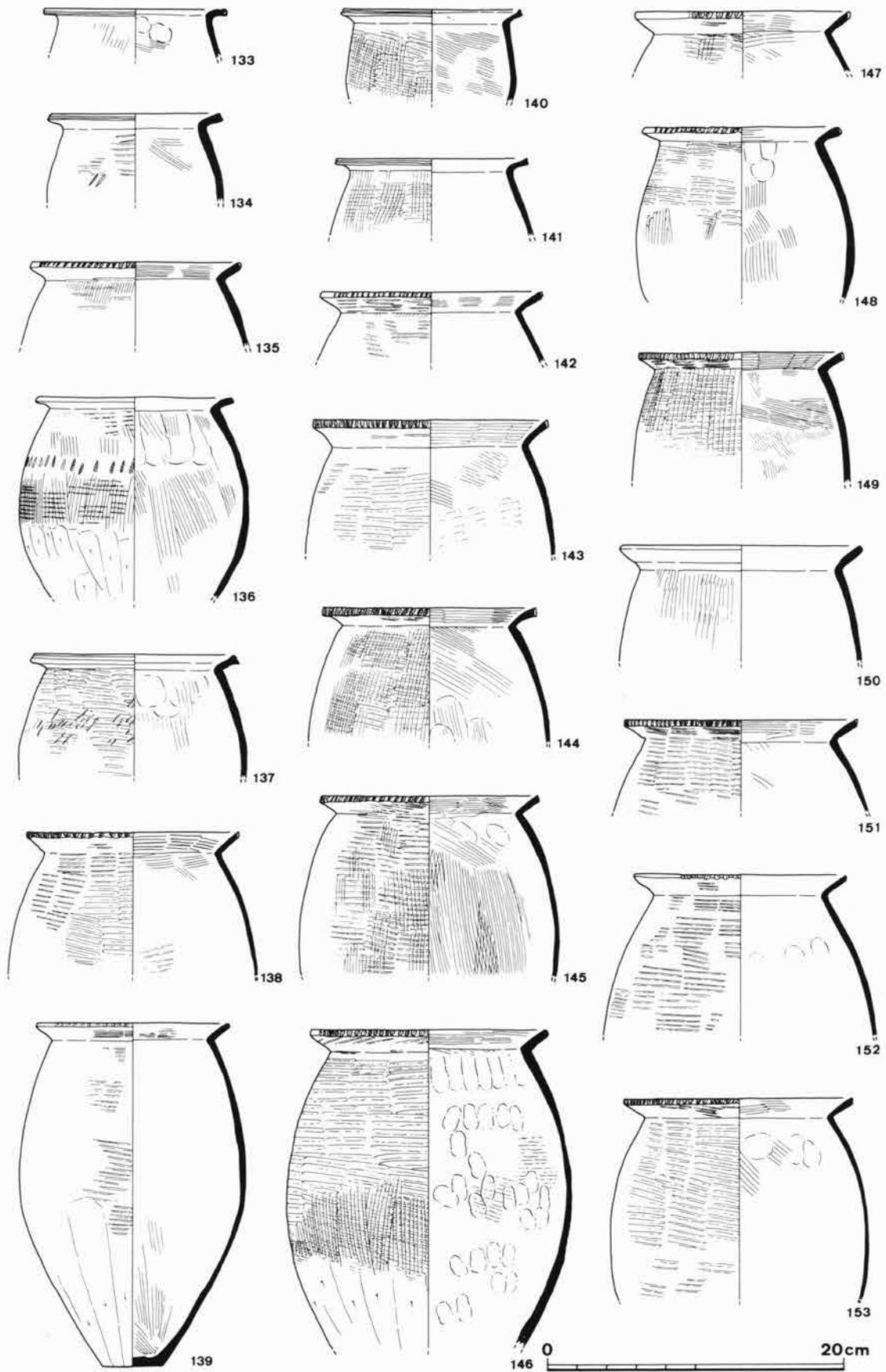
第74図 弥生時代土器実測図(16)



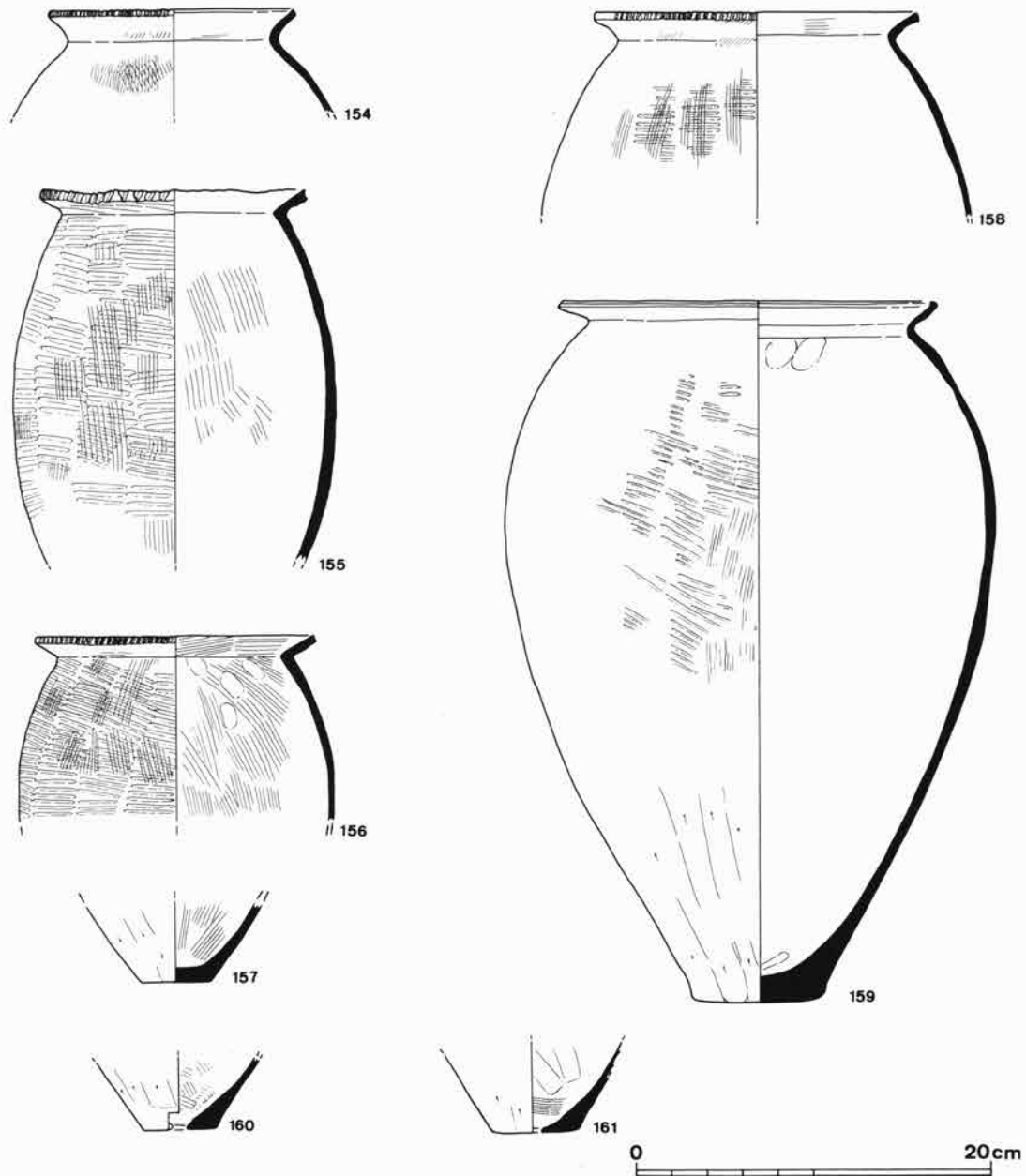
第75図 弥生時代土器実測図(17)

体部に列点紋が施された甕である。口縁部内外面はナデ、体部外面上半部はタタキ後ハケ、下半部はケズリである。内面はハケ調整である。137の口縁部内外面はナデ、体部外面はタタキ、内面はハケ調整である。138は口縁端部をキザミ、口縁外面はタタキ後ナデ、内面は横方向のハケである。体部外面はタタキ、内面はナデであるが器表面のタタキの凹凸が浮き出る。139は口縁端部をキザミ、口縁内外面は横方向のハケである。体部外面上部はタタキ、下部はケズリ、内面の上半部は不明であるが、下半部はハケ調整である。140は小型の甕で口縁部内外面はナデ、体部外面はタタキ後ハケ、内面はハケである。141の口縁部内外面はナデ、体部外面はタタキ後ハケ、内面はナデである。142は口縁端部をキザミ、口縁外面はタタキ、内面は横方向のハケである。体部外面はタタキ、内面はハケ調整である。143は口縁端部をキザミ、口縁外面はタタキ、内面は横方向のハケである。体部外面はタタキ、内面はナデ調整である。144は口縁端部をキザミ、口縁外面はタタキ、内面は横方向のハケである。体部外面はタタキ後ハケ、内面はハケ調整である。145は口縁端部をキザミ、口縁外面はタタキ、内面は横方向のハケである。体部外面はタタキ後ハケ、内面はハケ調整である。146の口縁部はキザミがみられ、外面はナデ、内面はハケ、体部上半はタタキ、中位はタタキ後ハケ、下半部はケズリ、内面はハケ後ナデ調整である。147口縁部はキザミがみられ、外面はタタキ、内面はハケ、体部外面はタタキ後ハケ、内面はハケ調整である。148は口縁部にキザミ、口縁外面はナデ、内面はヨコハケ、体部外面はタタキ、内面はハケ調整である。149は口縁端部をキザミ、口縁外面はタタキ、内面は横方向のハケである。体部外面はタタキ後ハケ、内面はハケ調整である。150の口縁外面はナデ、体部はハケ、内面の調整は不明である。151は口縁端部をキザミ、口縁外面はタタキ、内面は横方向のハケである。体部外面はタタキ、内面はナデ調整である。152は口縁端部をキザミ、器表面はタタキ、内面は明瞭でない。153は口縁端部をキザミ、口縁外面はタタキが残り内面は横方向のハケである。体部外面はタタキ、内面は粗いハケ後ナデ調整である。154は口縁部をキザミ、口縁外面はナデ、内面はヨコハケ、体部外面はハケ、内面はナデ調整である。155は口縁部をキザミ、口縁外面はタタキ、内面はナデ、体部外面はタタキ、内面はハケ調整である。156・157は同一個体と考えられる甕で、口縁部をキザミ、口縁外面はナデ、内面はヨコハケ、体部外面上半はタタキ後ハケ、下半はケズリ、内面はハケ調整である。158の口縁部外面はハケ、内面はヨコハケ、体部外面はタタキ後ハケ、内面は不明である。159は口縁部内外面ナデ、体部外面上半部はタタキ後ハケ、下半部はケズリ、内面は不明である。160・161は穿孔の施された甕の底部である。

162は大型の壺の体部である。外面上半部はハケ調整の後、櫛描紋で加飾される。底部近くはケズリ、内面はハケ調整である。163は台付鉢で、2個1対の穿孔が2か所ある。全体に器面の状態は悪いが、体部は不明、内面はハケ、脚部外面ミガキ内面はケズリとナデである。胴部上方に1か所円形の穴があげられる。器表面はハケ調整の後、櫛描紋で加飾され、内面はハケ調整である。底部は円盤状に分離している。165もまた胴部上方に1か所円形の穴があげられた台付鉢である。体部上半には櫛描きで施紋される。器表面の状態が悪く調整は部分的にしか確認できないが、内面はハケ、脚内面はケズリである。166は口縁部外面に6条の凹線がめぐる台付鉢で、



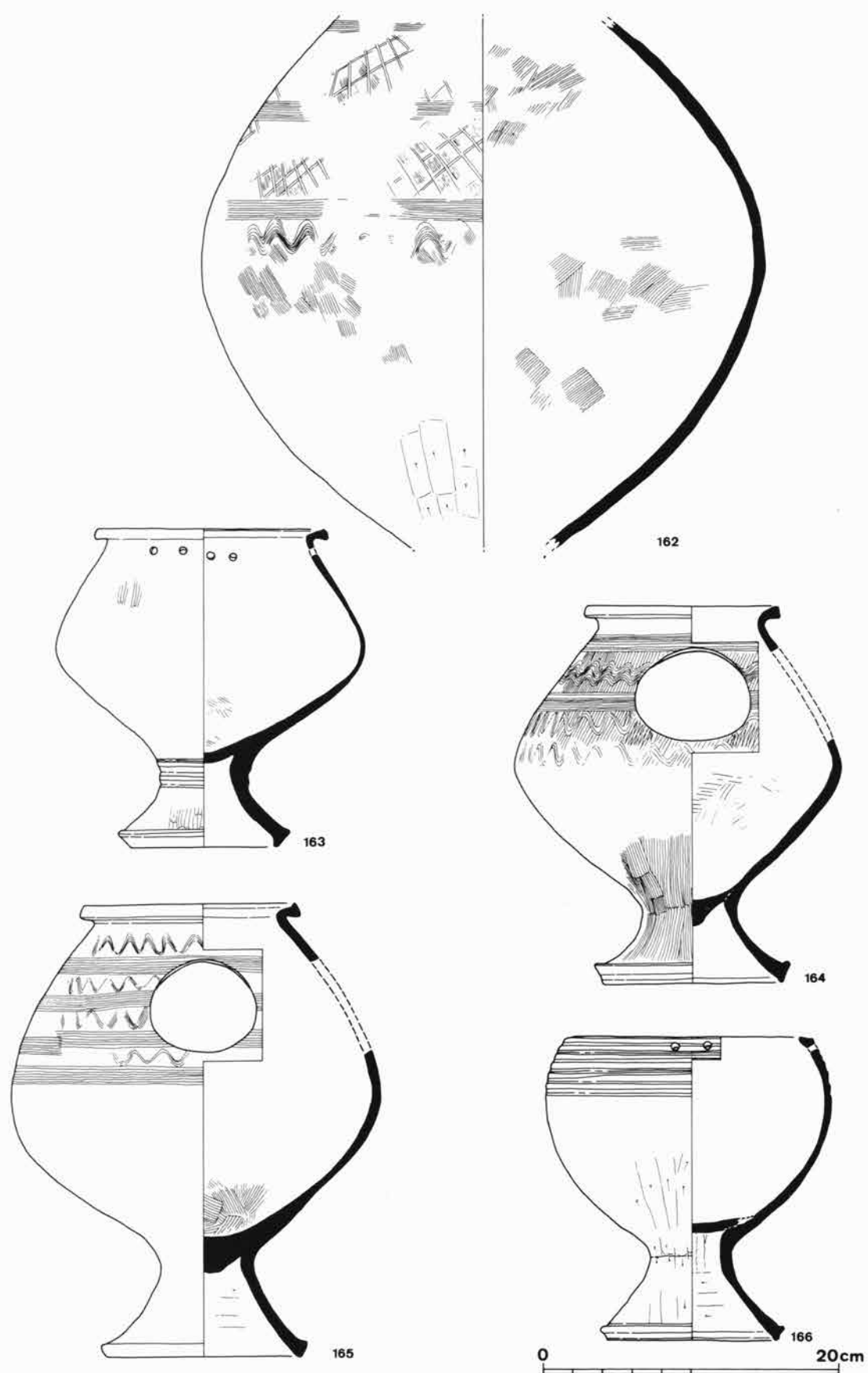
第76図 弥生時代土器実測図(18)



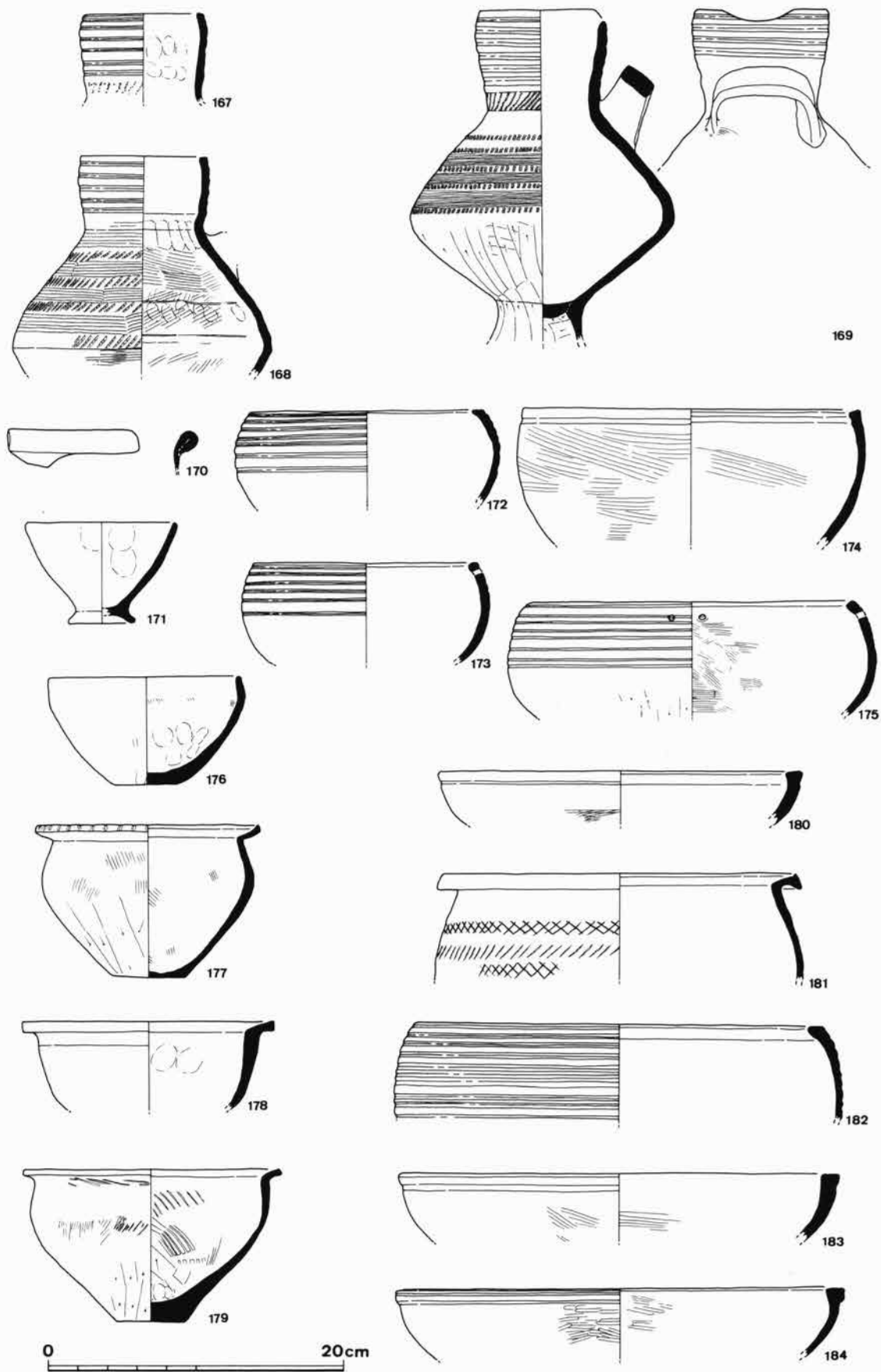
第77図 弥生時代土器実測図(19)

体部上半はナデ、下半はケズリ、内面はナデ、脚部内面はケズリである。底部は粘土の充填によって形成されたと考えられる。

167～169は口縁外面に凹線が施された水差しである。頸部から胴部には櫛による施紋が施される。170は鉢の口縁部片と考えられる資料である。口縁部は器面を折り返すことによって玉縁状に形成している。内外面の調整は不明である。171は脚付の小型の鉢である。内外面ともにナデ調整である。172・173・175は口縁部近くに多条の凹線がめぐる鉢である。172・173は調整不明であるが、173には紐穴が認められる。175は口縁部内外面がナデ、体部外面ケズリ、内面がハケ調整である。174は無紋の鉢で、口縁部内外面がナデ、体部内外面はハケ調整である。176は碗状の鉢で、口縁近くにはナデ、体部は内外面ともにハケ、外面底部近くはケズリである。178は小型の鉢であるが口縁部内外面がナデで、体部は不明である。179は口縁部をキザミ、口縁内外面



第78図 弥生時代土器実測図(20)



第79図 弥生時代土器実測図(21)

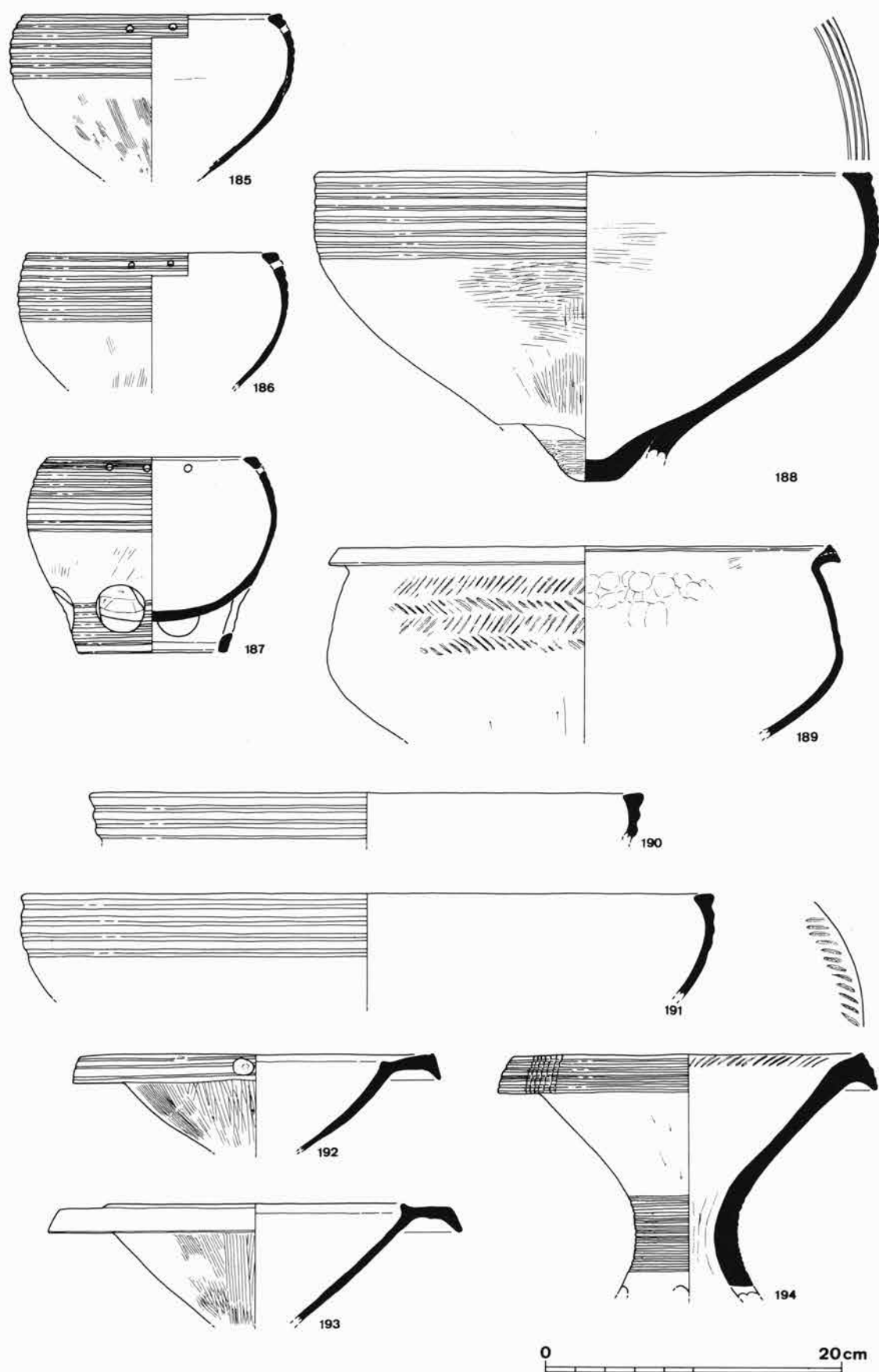
はナデ、体部外面上半はハケ、下半はケズリ、内面はハケ調整である。180は口縁部近くに凹線がめぐる鉢で、口縁部内外面がナデ、体部外面がハケ、内面はナデである。181は体部に櫛の原体による格子紋と列点紋が施される。内外面ともナデ調整である。182は残存している部分で10本の凹線が施された鉢である。調整は不明である。183は口縁部付近と端面にそれぞれ1条の凹線がめぐる鉢である。口縁部内外面がナデ、体部内外面ともにハケ調整である。184は口縁部が外に肥厚する鉢で、内外面ともにミガキ調整である。

185・186は口縁付近にそれぞれ7条の凹線がめぐる鉢である。185は2個1対の穴が1か所、186は2か所確認できた。185は内面底部付近に接合痕がみられることから、脚部が付き、内面から底部充填があったものと考えられる。体部の調整は上部がハケ後ナデ、下半がケズリ後ハケである。内面は不明である。186は体部の調整は、上部がハケ後ナデ、下半がケズリ後ハケで、内面はナデである。187は台付の鉢である。口縁付近には11条、脚部にも6条の凹線がめぐる。口縁部付近に2個1対の穴が2か所確認できた。脚部の透かしは6か所である。体部外面はハケ、底部はケズリ、内面はナデである。188は口縁端面に3条、口縁部付近に7条の凹線がめぐる台付の大型鉢である。脚部内面には充填部を作ったときのタタキ技法が残る底部が存在していた。あらかじめ、底の形状を作り、底部充填が行われたことがわかる。体部の調整は上部がハケ、下半がケズリ後ハケで、内面はハケである。189は残存状態が非常に悪く調整は判別できない。口縁端面には凹線がめぐっていた痕跡が認められる。体部上半には羽状紋が施されている。下半部はケズリによると考えられる砂粒の動きが認められる。190・191は大型の鉢の口縁部であるが細片のため径は参考値である。

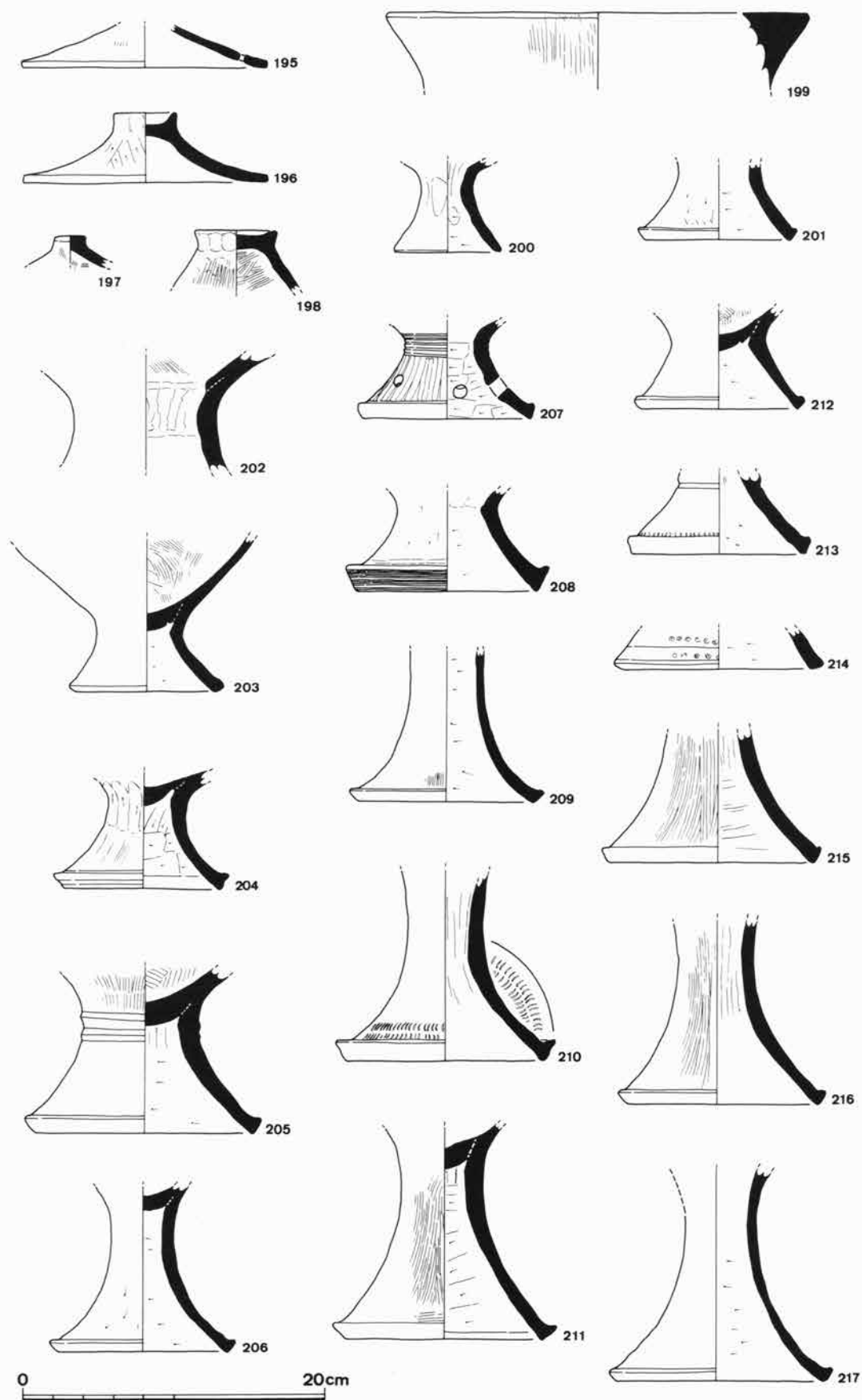
192は水平口縁を持つ高杯で口縁端面には3条の浅い凹線の後、円形浮紋が施される。口縁部内外面がナデ、杯部外面はハケ調整で、内面は不明である。193もまた水平口縁を持つ高杯で、調整は口縁部内外面がナデ、杯部外面はハケで、内面は不明である。194は4か所の透かし穴を持つ器台である。口縁端面は4条の凹線の後、直交するようにヘラ状工具によって直線紋が刻まれ、内縁には列点紋が施される。クビレ部には14条の凹線が認められる。外面はケズリ後ナデ、内面は不明であるがクビレ部内面にシボリ痕がある。

195～198は蓋である。195は上面がミガキ、縁部はナデ、下面はナデ調整である。196は頂部、縁部、下面がナデで、上面はケズリである。197は蓋の頂部で、頂部上面はナデ、その他はハケ調整である。198は蓋の頂部で、頂部は指によって摘み出されている。器面はハケ調整である。199は台形土器の一部で上面はナデ、外面は縦方向のハケ、内面は残存していない。

200～217は脚部である。200は脚の中でも作りが悪く、外面体部側にはケズリそれ以下はナデ、内面は横方向のケズリである。201は内外面ともにケズリで端面はナデ調整である。202は脚のクビレ部であるが、脚内外面の調整はケズリである。底部はハケ調整があったものと考えられる。203は外面の調整は不明、底部内面はハケ、脚部内面はケズリである。204の外面はケズリとハケ、内面はケズリである。205の底部内外面はハケ、脚部外面は不明、内面はケズリである。206は内外面ケズリである。207はクビレ部に5条の凹線が施された脚部である。外面はミガキ、内面は



第80図 弥生時代土器実測図(22)



第81図 弥生時代土器実測図(23)

ケズリである。208の端面には擬凹線状の浅い多くのくぼみがみられる。外面はケズリ、端部付近はナデ、内面はケズリ調整である。209の端部はナデ、外面はハケ、内面はケズリである。210は内外面の調整は不明であるが、脚端縁に2条の三日月状の刺突が施される。211は内外面がケズリ、外面端部がナデ調整である。212は外面の調整は不明で、底部内面はハケ、脚部はケズリである。213は脚端縁に刺突が1条めぐる脚部で、外面はナデ、内面はケズリ調整である。214は外面に2条の竹管刺突がみられる。外面はハケ後ナデ、内面はケズリである。215は外面がハケ、内面がケズリである。216は外面がハケ調整、内面が不明であるが縦方向のシボリ痕がみられる。217は長い脚部で外面の調整は不明、内面はケズリである。

②石製品(第82～89図)

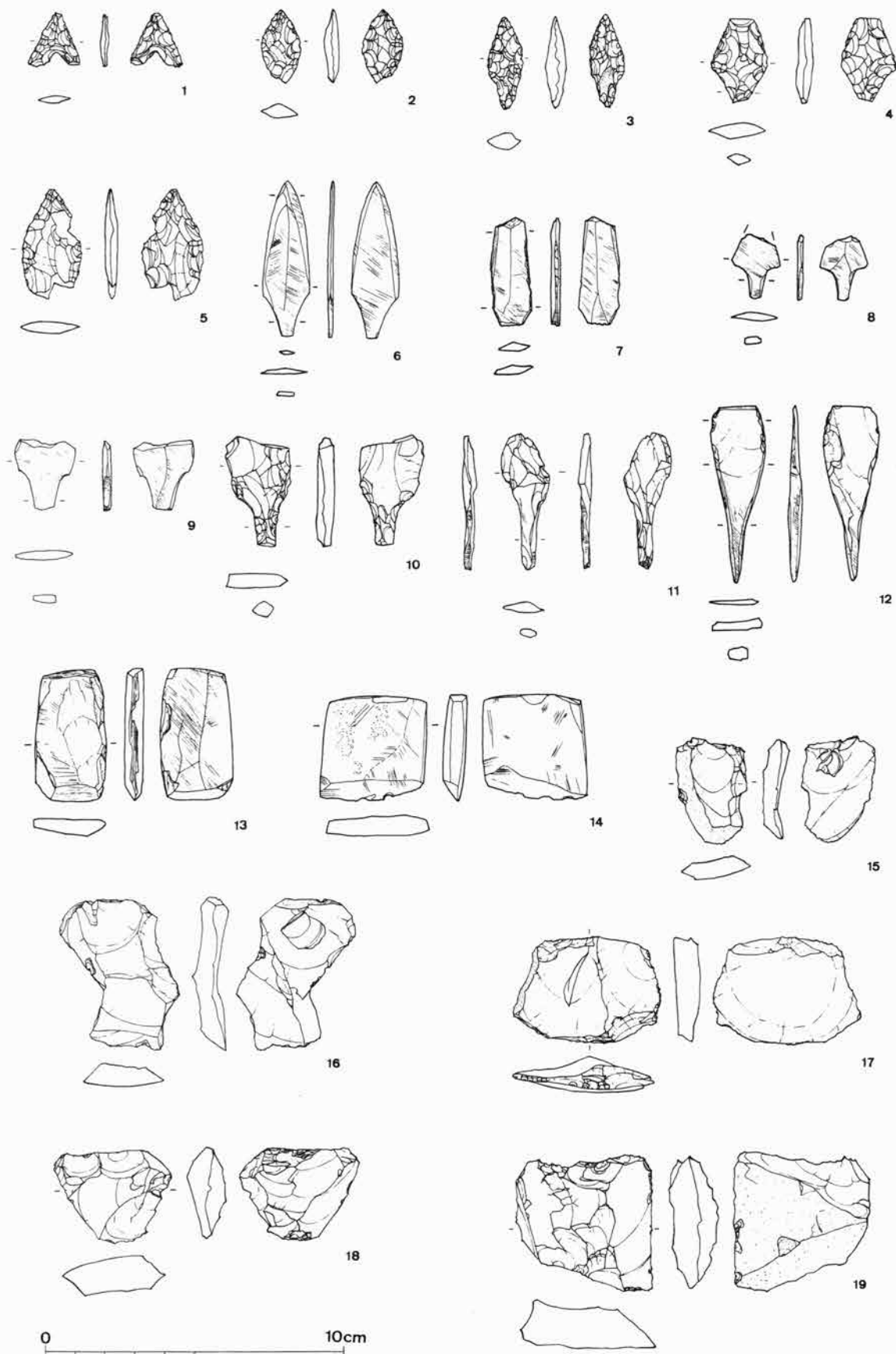
石製品は個体数が少ないため器種ごとに説明していきたい。

石鏃(2～9・12) 10点が出土しており、そのうち5点がサヌカイト製の打製石鏃、残り5点は粘板岩製の磨製石鏃である。2は基部が折れており、折れ面の風化は他の剥離面と変わらない。S H502埋土から出土している。3の石鏃は基部側の器表面の高い部分を磨いて厚みを取った形跡が認められる。矢の装着部の形状に合わせるための加工と考えられる。S H507埋土から出土している。4は基部、先端部ともに破損した状態で出土した。破損面は他の剥離面と変わらない。包含層から出土している。5は発掘時の破損によって欠けを生じた石鏃である。本来完形品であったかは不明である。S K537から出土している。6はS D526から出土している。7は先端部、基部の両方が欠損している石器で、法量から石鏃と認定した。包含層から出土している。8・9は先端部が欠損した状態で出土した。8はS H501埋土から、9はS D526から出土している。12は基部を錐状にしていねいに作られているが、先端部は直線状を呈し刃が付けられている。直摘鏃と考えられる。S D526から出土している。

石錐(10・11) 10はサヌカイト製の打製の石錐で先端部と基部が欠損している。P407から出土している。11は粘板岩製の打製の石錐で、機能部側面に使用痕と考えられる線状痕が認められる。S K551から出土している。

石戈(20・21) 20は関部分に両面から双孔が穿たれた石器で、関の位置がずれるため石戈とした。S D526から出土している。21は基部と考えられる部分の両側辺が加打による整形加工のみの石器である。刃部と考えられる両側を磨いた部分も刃は付けられていない。包含層から出土している。

石剣(22～28) 石剣は両側に刃が付くもの、中央に鑢を持つもの、両側が基部状に加工したもの、を器種の認定基準とした。石剣はすべて磨製で、粘板岩を素材としている。22は薄手の石剣の先端部である。中央の鑢はみられず、両側に刃が付く。S H513埋土から出土している。23は関から茎部分の破片である。茎を作り出す加工の観察から、機能再生のため茎を新たに設けたと考えられる。S H503埋土から出土している。24は剣身部の破片である。包含層から出土している。25は切先から剣身部の破片である。刃部の破損は調査時のものである。器面の両面に鑢が認められる。S D526から出土している。26は基部の破片である。包含層から出土している。27は基部



第82図 出土石器実測図(1)

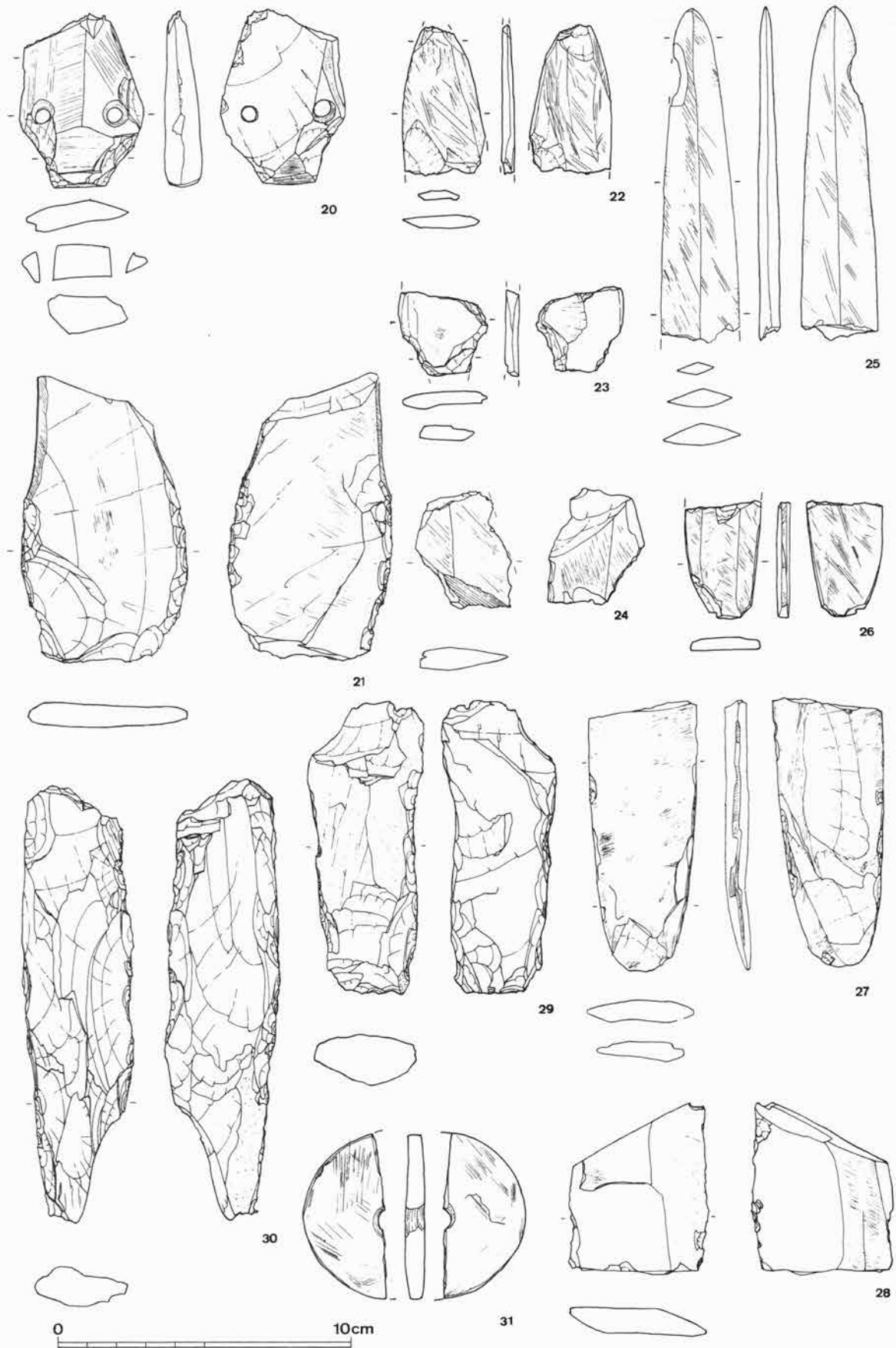
から刃部への変化点までの比較的大きな破片である。基部の法量から剣把を兼ねるタイプの磨製石剣と考えられる。S D01から出土している。28は剣身部の破片である。S K552から出土している。

石剣・石戈の未製品(29・30) 両端が折れているが両側辺を加撃によって整形加工が施されている。法量から石剣・石戈の未製品とした。29はS D641から、30はS H536埋土から出土している。写真に2点示した以外にも未製品と考えられるものが認められる。また、磨製石器の材料となった粘板岩剥片は大量に出土している。なかには長さが40cmを超すものも存在する。露頭またはその近くから採取したものと、河原礫と考えられる水磨したものの2種類がみられる。

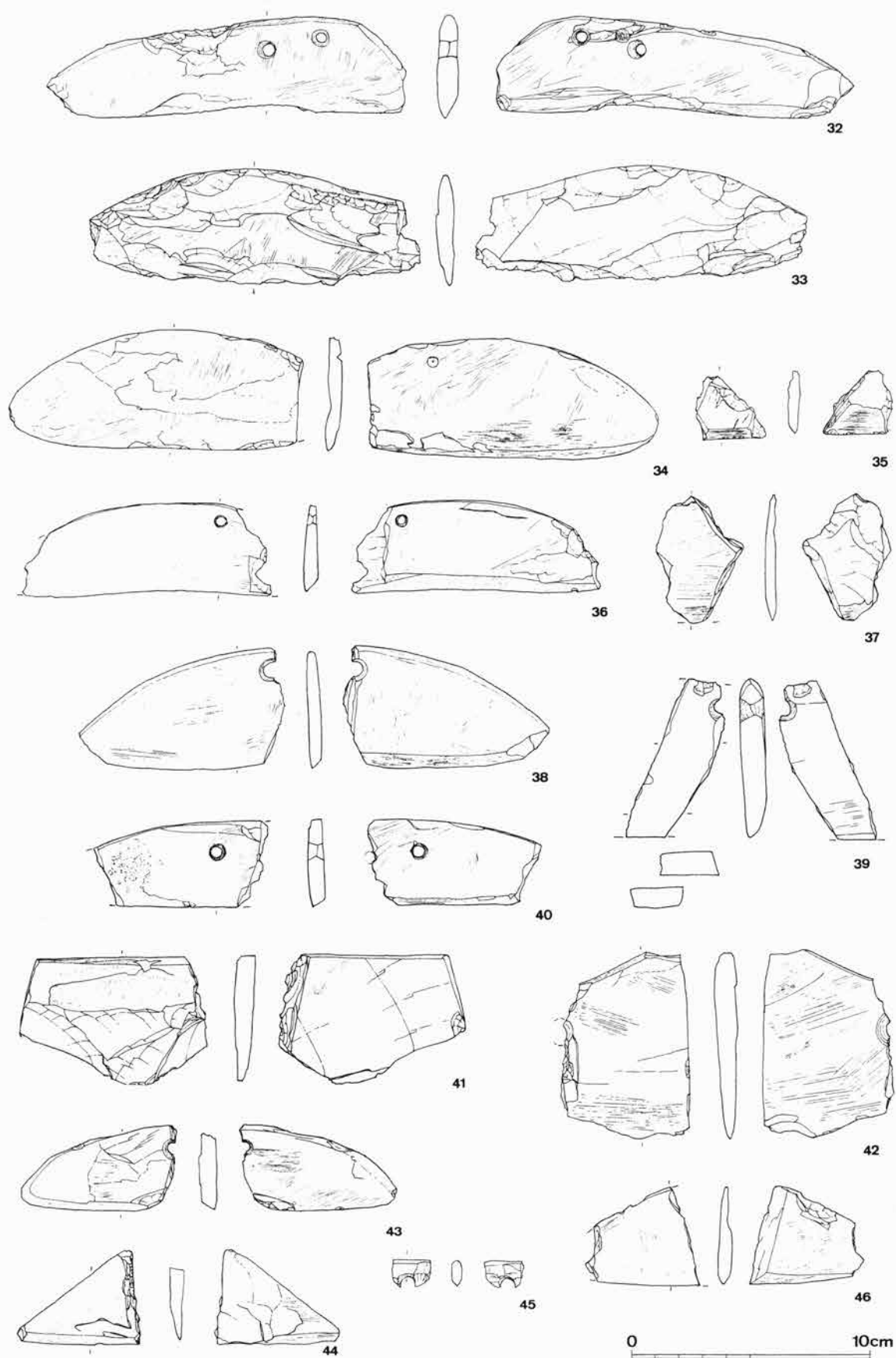
紡錘車(31) 黒色の粘板岩を円盤状に加工し、中央部に両面穿孔が施された紡錘車である。S D545から出土している。

石庖丁(32~69) 砂岩製の1点(39)を除きすべて粘板岩製の石器である。32はほぼ完形の石庖丁で、両面から2か所穿孔されている。図面向かって右面には、穿孔が試みられた形跡が認められる。S D01から出土している。33は片面のみ磨かれた石庖丁の未製品で穿孔されていない。包含層から出土している。34は図面向かって右面には、穿孔が試みられた形跡が認められる。S D01から出土している。35は刃部の破片で片側から刃が付けられている。S K548から出土している。36は両面から穿孔された紐穴を持つ石庖丁である。S K552から出土している。37は刃部の破片で両側から刃が付けられている。P 207から出土している。38は両面から穿孔された紐穴を持つ石庖丁である。S D545から出土している。39は砂岩製の石庖丁で両面がていねいに磨かれている。S D549から出土している。40は両面から穿孔された紐穴を持つ石庖丁である。S K631から出土している。41は両面を研磨し、背部に面取りを施した粘板岩製石器で、石庖丁の未製品と考えられる。包含層から出土している。42は両面から穿孔された紐穴を持つ大型の石庖丁である。包含層から出土している。43は両面から穿孔された紐穴を持つ石庖丁である。包含層から出土している。44はS H512埋土から出土している。45は両面穿孔を施された石庖丁の紐穴から背部にかけての細片である。S D526から出土している。46はS K525から出土している。47は平面形がやや歪な石庖丁で出土した部分には穿孔は認められない。S D568から出土している。48は両面穿孔による孔が2か所認められる石庖丁である。S D526から出土している。49~52は両面穿孔による孔が認められる石庖丁である。49はS D01、50はS K642、51はS D545、52はS D526から出土している。53・54は片側に刃があることから石庖丁としたが、両小口部分が直線状にそろえられているため、扁平片刃石斧の未製品の可能性もある。53はS H530埋土から、54はS D549から出土した。55・56・58は両面穿孔による孔が認められる石庖丁である。55はS D01、56は包含層、58はS H521埋土から出土している。57はS D524、59はP 356、60はS H502埋土、61はS D545、62・63はS D526、64はS H521埋土、65・66はS D01、67は包含層から出土している。

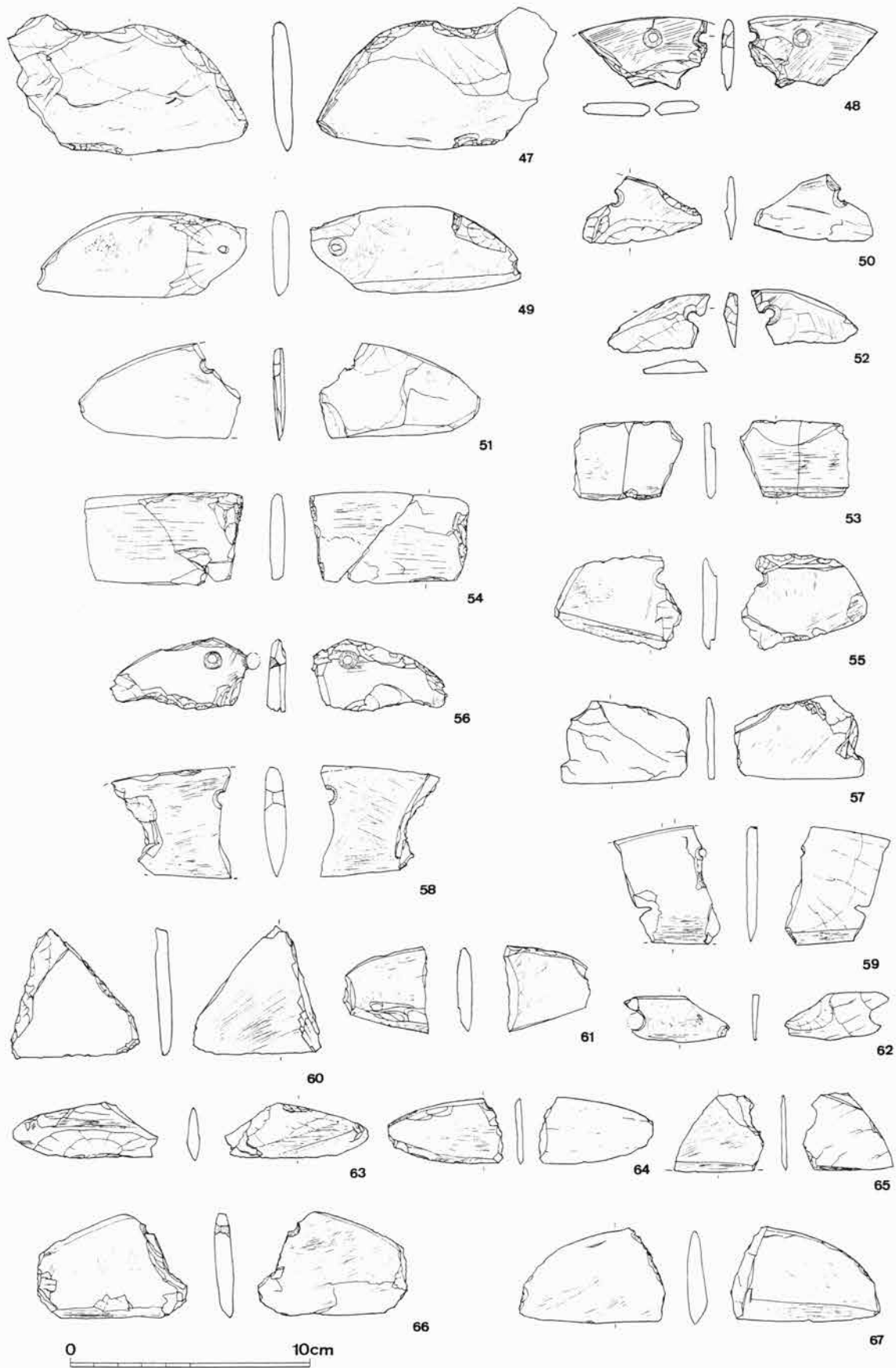
68・69は大型の石庖丁でS D525の上面で立った状態で重なって出土した。埋納行為があったと考えられる。68は頂部に穿孔のある石庖丁である。69は背部を発掘調査時の破損によって欠き、



第83図 出土石器実測図(2)



第84図 出土石器実測図(3)



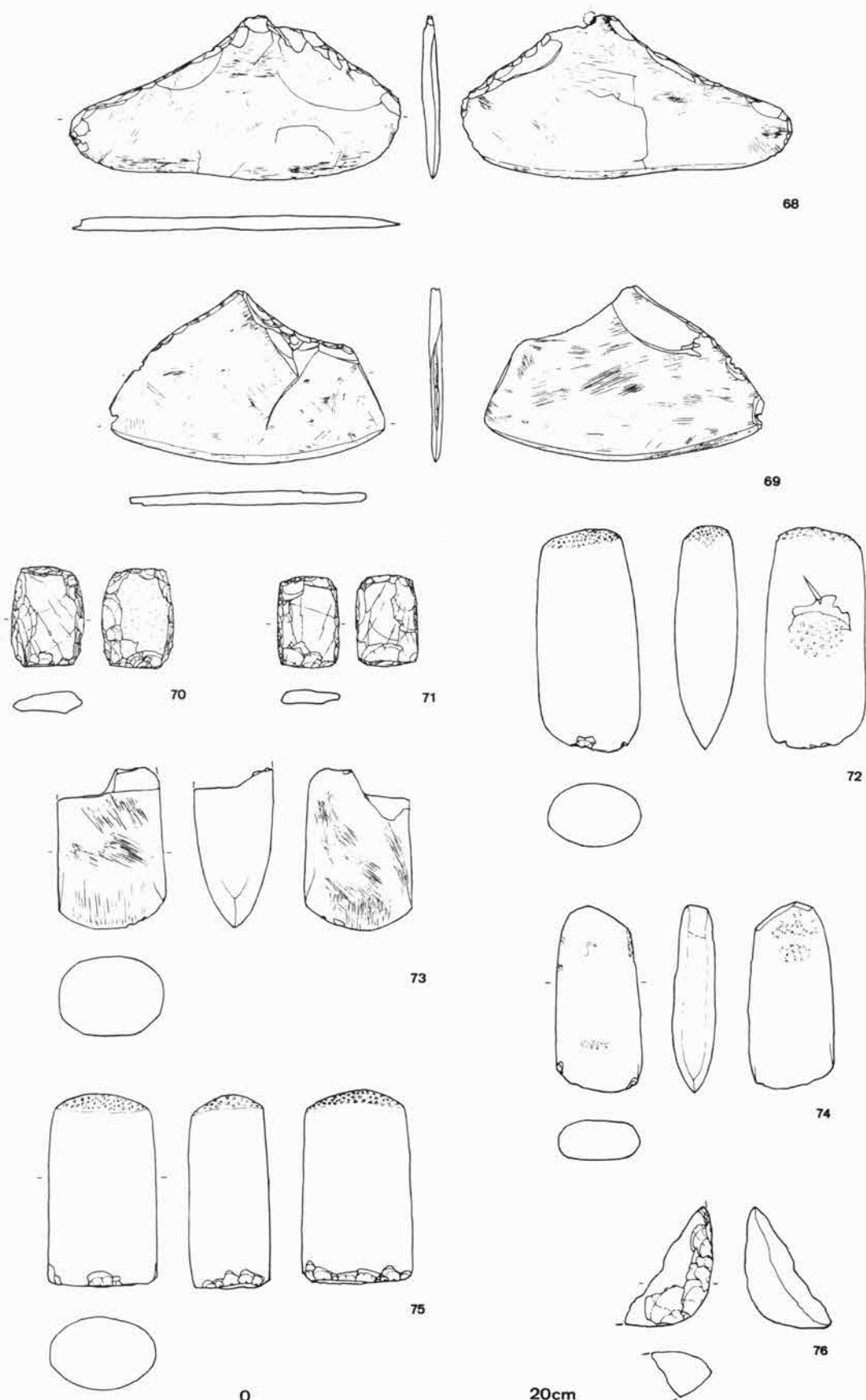
第85図 出土石器実測図(4)

法量が変わっている。

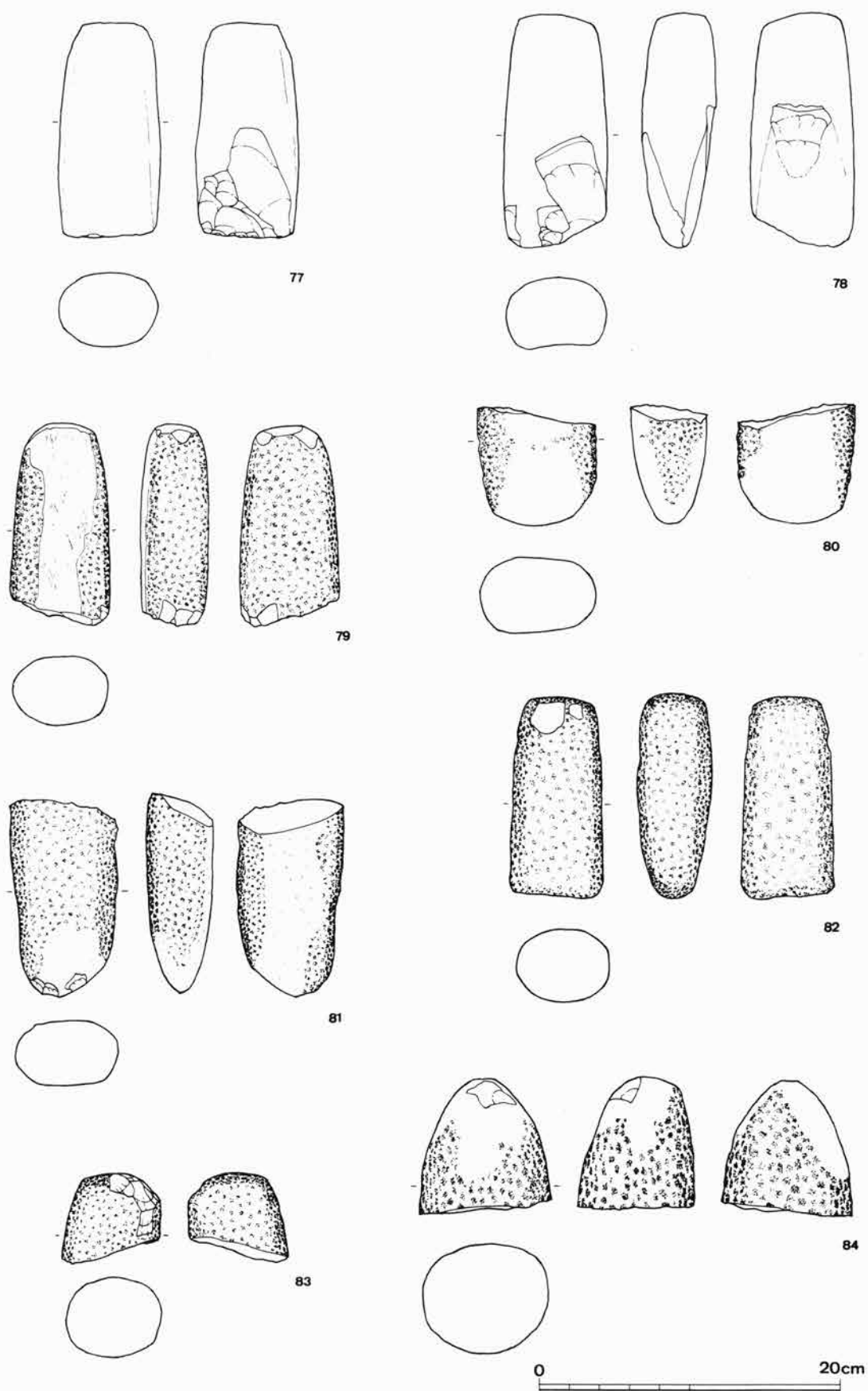
小型石斧関連遺物(13・14・70・71) 13は粘板岩製の小型の磨製石斧である。刃部は両面から形成されている。S D526から出土している。14は緑色の凝灰岩質の石材を用いた扁平片刃石斧である。丹波地域では緑色の岩石が石斧に多用されるが、凝灰岩質のようにきめの細かいものから、結晶を含むざらついたものまで漸移的に認められる。きめの細かいものは扁平片刃石斧に、粗いものは太型両刃石斧に用いられるようである。S H506埋土から出土している。70・71は粘板岩製で、周辺の整形加工によって長方形に仕上げられている。法量や形態から扁平片刃石斧と考えられる。70はS K552から、71は包含層から出土している。

太型両刃石斧関連遺物(72～91・93) 72～74・76は太型両刃石斧の完成品もしくはその破損品である。72は端面に敲打痕が残るが、その他は磨かれている。図面向かって右側は打撃による整形時の剥離が深かったため敲打痕とともに磨き残されている。S K515から出土している。73は全面がきれいに研磨されているが、中央部で破損している。S D568から出土している。74は端面に原礫時の自然面を持つ石斧で、河原礫から製作されたことがわかる。S D01から出土している。76は刃部の破片である。S K643から出土している。75は端部にのみ敲打痕が残る石器である。刃部側は平らに割れており、その面からの打撃痕が多く認められる。研磨工程の後、折れていることから、転用品として利用された可能性も指摘できる。包含層から出土している。77・78は全面研磨されているが、現状では刃はついていない。77はS D525から、78はS K569から出土している。79はほぼ全域に敲打痕が認められるが、図面向かって左側の中央部のみが研磨によって敲打痕が消されている。S D557から出土している。80は側面にのみ敲打痕が認められるもので、他の部分は原礫面である。石斧の法量と似た円礫を持ち込んで、部分的な加工を施して製品とする過程の石器と考えられる。S D02から出土している。81は側面と片面に敲打痕が認められるもので1方の片面は原礫面である。S D01から出土している。82は全面にわたり敲打痕が認められる石器で、通常刃部となる部分にも敲打痕が存在する。研磨工程に入る前の母型と考えられる。包含層から出土している。83は敲打痕の残る基部の破片である。S D526から出土している。84は原礫面と敲打痕が残る破片で、敲打痕のある部分に剥離面の痕跡が認められる。S D568から出土している。85は原礫面を持つ石器で、周辺に整形加工の剥離痕が認められる。この未製品は図面の上半部の観察から、整形加工の途中で大きく剥離が進行し廃棄されたと考えられる。包含層から出土している。86・89は両面に原礫面を持つ破片で、側面に剥離痕が認められる。石斧に都合の良い河原礫を加工したものと考えられる。86はS D553から、89はS K552から出土している。87は大型の河原礫を側縁から加工した未製品である。石斧の厚みや長さは原礫の法量を利用し、幅だけが整形されているようである。包含層から出土している。88・90・91は石斧原礫の整形加工時に生じた剥片である。いずれの剥片にも円礫面が付随している。88はS D568から、90はS K357から、91はS D553から出土している。93は敲打痕の残る未製品である。S D545から出土している。

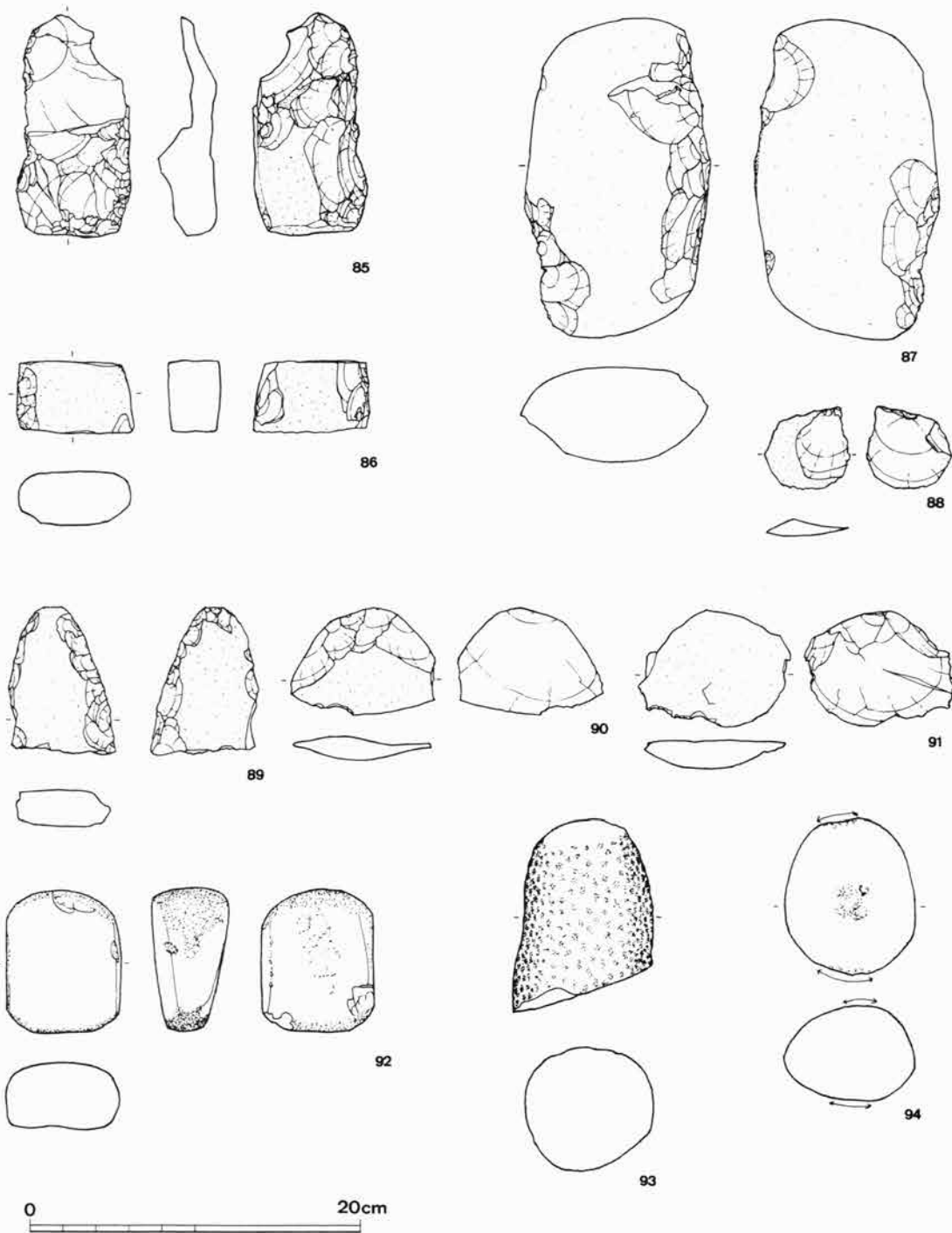
叩き石(92・94) 92は石斧を転用したと考えられる叩き石で両端に敲打した痕が認められる。



第86図 出土石器実測図(5)



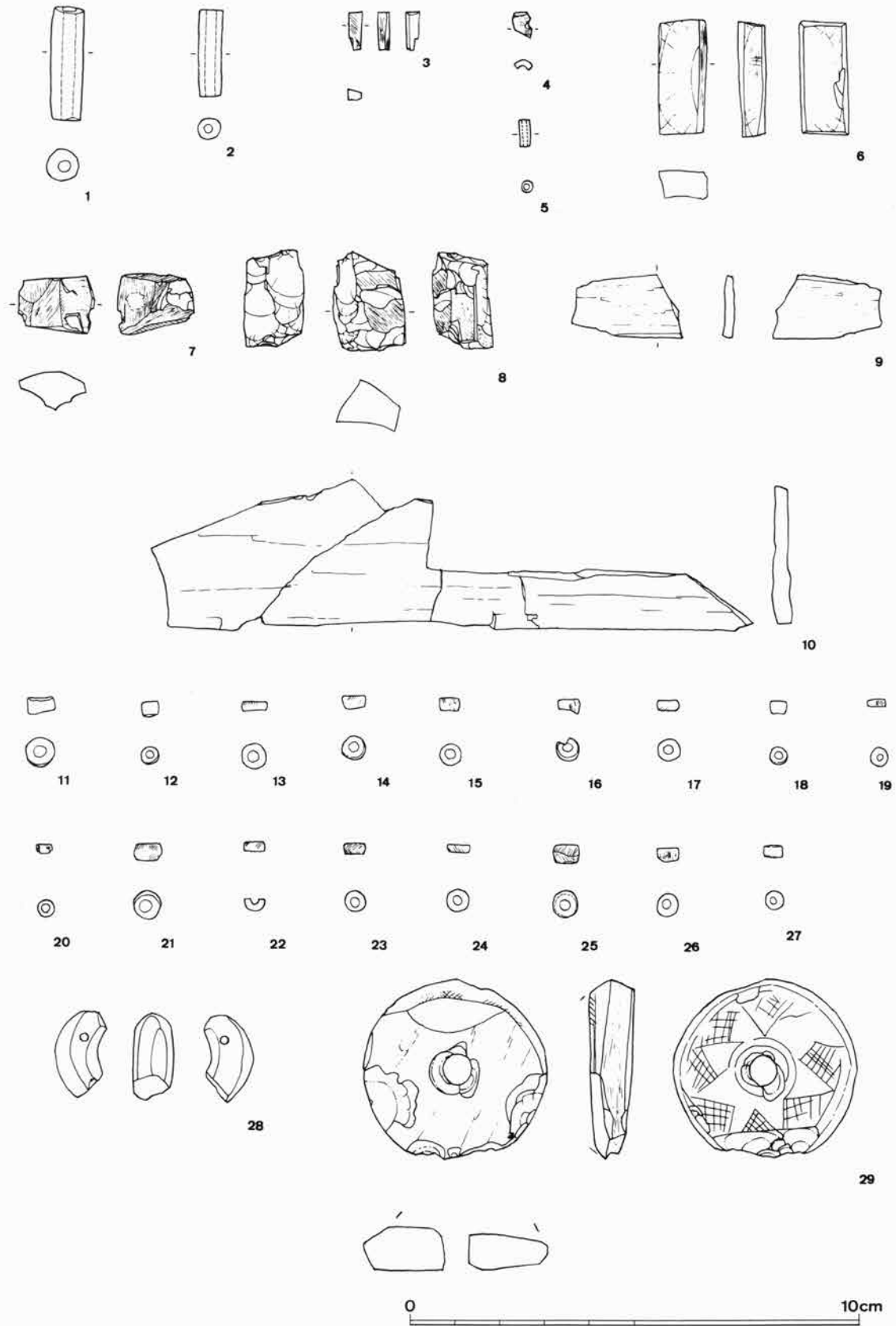
第87図 出土石器実測図(6)



第88図 出土石器実測図(7)

S H521から出土している。94は砂岩製の叩き石で両端と表裏中央部に使用によると考えられる
 敲打痕が認められる。S D526から出土している。

玉作り関連遺物(第89図2～10) 2は緑色凝灰岩製の管玉である。S K523上層から出土して
 いる。3は小型管玉用の緑色凝灰岩製の角柱状素材である。古墳時代の遺構S H506の埋土中か
 ら出土している。4は穿孔が施された緑色凝灰岩製管玉の破片である。柱穴P155から出土して
 いる。5は小型の緑色凝灰岩製管玉である。S H522埋土から出土している。6は緑色凝灰岩製
 の角柱状管玉素材である。一部に分割用の溝の痕がみられる。包含層から出土している。7は全



第89図 玉作り関連遺物および滑石製品実測図

面に研磨痕のある緑色凝灰岩である。S K 547の北側から出土した。8 は一部に分割用の溝の跡がみられる緑色凝灰岩である。S D 526から出土した。9・10は紅簾片岩の石鋸である。9 は包

含層から、10はS D01から出土している。

(3) 古墳時代

① 土器

S H521(第90図218～226) 218は小型の鉢で、内外面の調整はナデであるが体部には指頭圧痕が多くみられ、器壁は分厚い。219～223は土師器の甕である。221を除くと、口縁端部が内面に肥厚する布留式甕の特徴を持っている。223は受口状の口縁を持っている。224・225は土師器の高杯の脚部である。

S H522(第90・91図227～239) 227は土師器の小型の鉢で、口縁部および体部表面はナデ、内面はケズリ調整である。228～233は土師器の甕である。口縁端部は内面に肥厚するが、明確な段差を持つものは少ない。布留式甕の末葉に位置付けられる。234～238は土師器の高杯で、234～236にみられるように丸い杯部を持った小型のものと、237・238のような屈曲部を持つ大型の高杯がある。239は土師器の甕である。器表面は縦方向の縄蓆紋が施され、内面は広い板状のものでナデられている。把手は2か所あり端部下方にそれぞれ1か所の刺突がある。底面には中央に円形の穴1か所、周囲に楕円形の穴が5か所あけられている。

S H501(第93図275) 土師器の碗である。内外面の調整は不明である。T K209型式並行期と考えられる。

S H502(第92図245) 須恵器の高杯の脚部である。6世紀前半のものと考えられる。

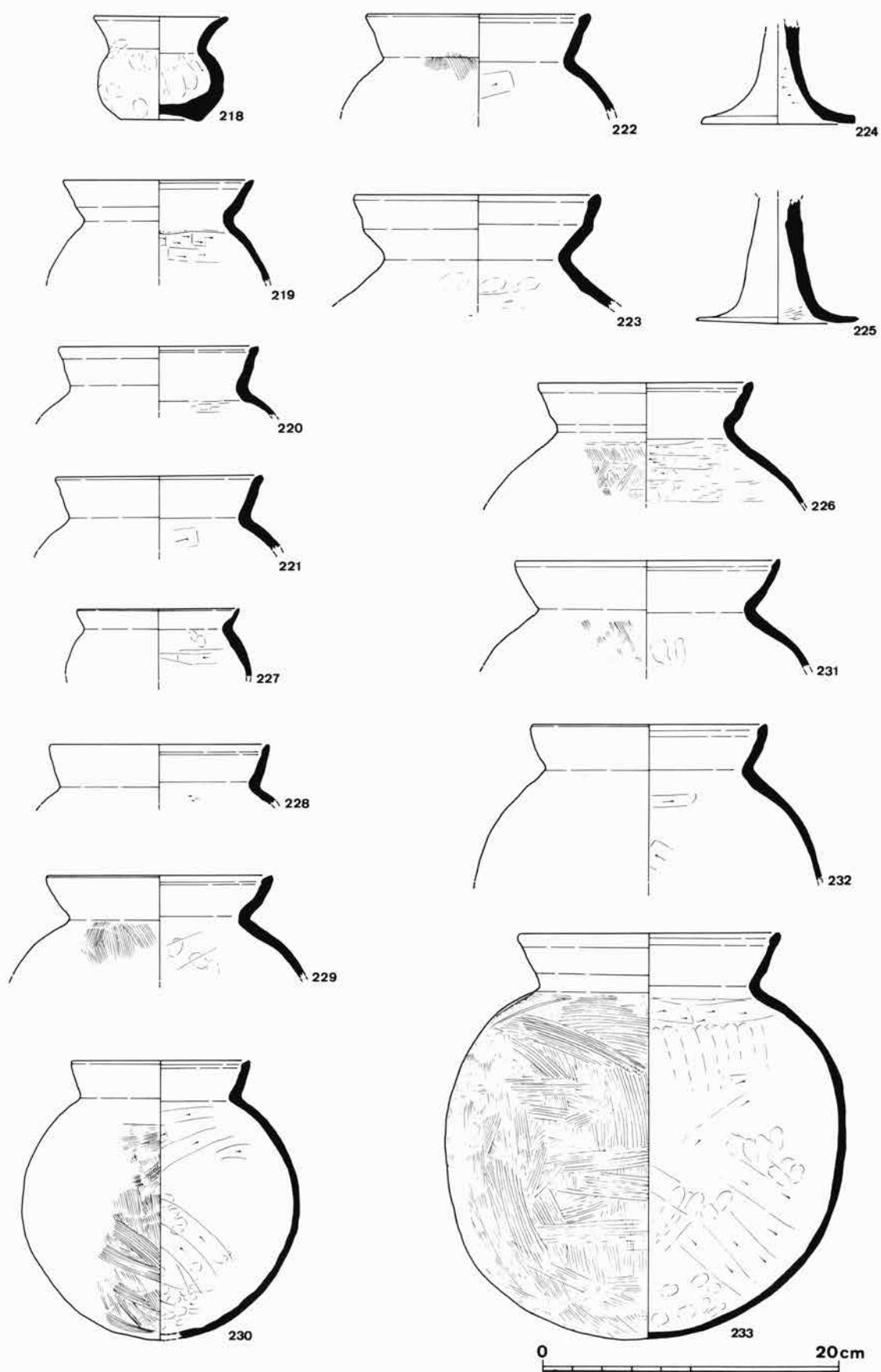
S H503(第92図240～244) 240は土師質の製塩土器であるが、内外面の調整は不明である。241・242は土師器である。243は須恵器の杯蓋である。T K23・47型式の時期と考えられる。244は無蓋高杯の杯部で焼成が悪く軟質である。240・243とは時期が合わず6世紀後半のものと考えられる。

S H504(第92図246～260) 246～248は須恵器の杯蓋で概ねM T15型式の時期であるが250のようにT K47型式に近いものも存在する。249は須恵器の杯蓋。252は須恵器の有蓋高杯の杯部。253は須恵器の高杯脚部である。254・260は土師器の甕、256・257は土師器の甕の把手と考えられる。257は把手端部側の下面に刺突痕がみられる。これは239の甕と同じで、他の須恵器とは時期が異なる可能性が指摘できる。258・259は同一個体と考えられる脚付きの須恵器の壺である。

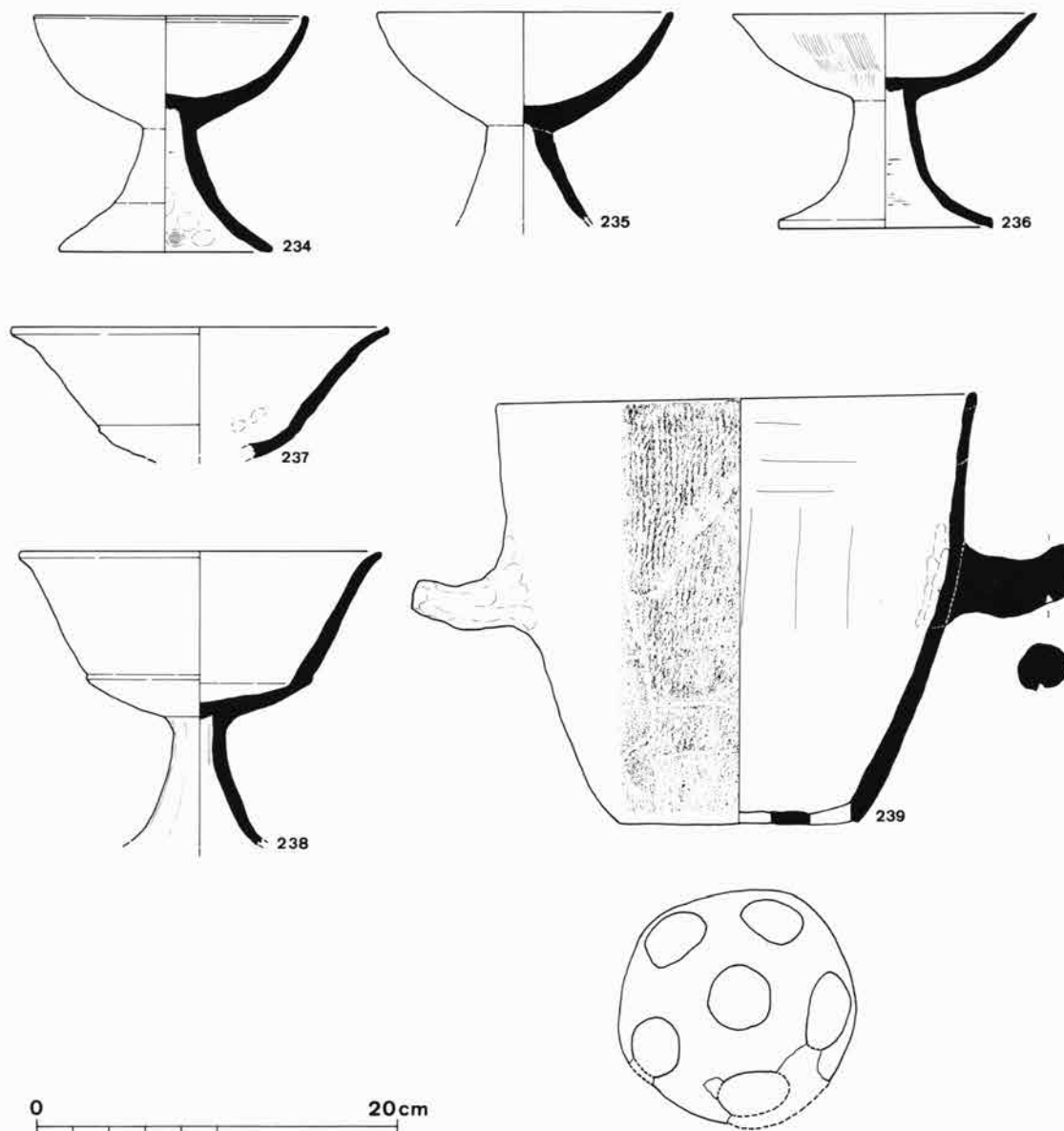
S H506(第93図261～265) 261・262は須恵器の樽型甕である。261は端面が平らで、貼り付け痕などはみられない。262は端面周囲に貼り付け突出部がめぐる。263は土師器の手づくねの鉢である。264・265は須恵器の杯部である。264はT K217型式、265はT K209型式の時期と考えられる。

S H507(第93図276) 276は須恵器の杯身でM T15型式の時期と考えられる。下層にS H562があるため混入の可能性もある。

S H540(第93図266～269) 266は須恵器の杯蓋、267は須恵器の杯身である。両者はT K47～M T15型式に属す。268は須恵器の杯身でT K209型式に属す。須恵器の年代は甕をきたすが、この住居跡に伴うと考えられるS D561からはM T15型式の須恵器が出土することから、268は混入と考えられる。269は土師器の甕である。



第90図 古墳時代土器実測図(1)



第91図 古墳時代土器実測図(2)

S H512(第93図281～283) 281～283は土師器の高杯である。281・282は完形の状態で床面から出土した。

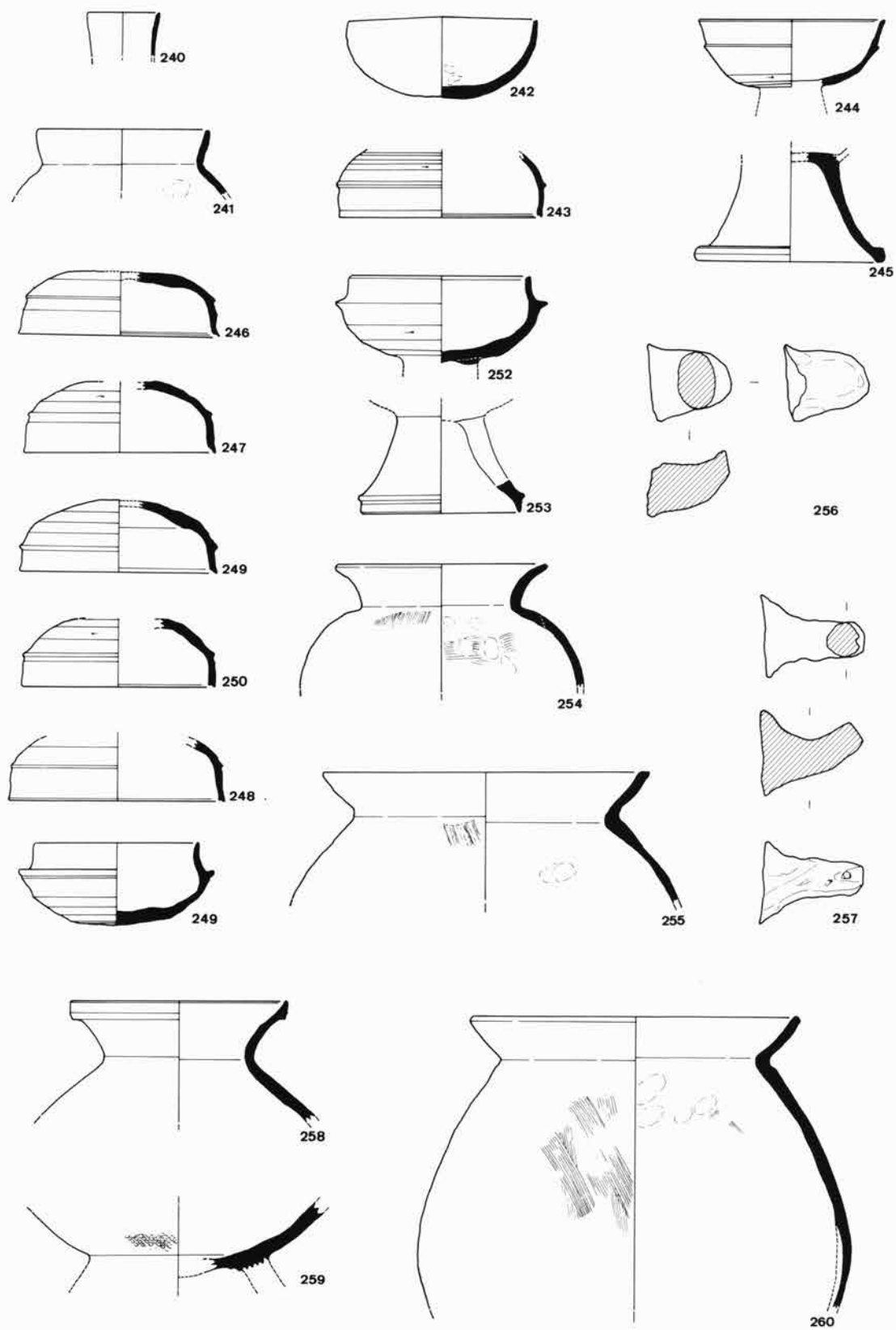
S H513(第93図270～274) 270は土師質の製塩土器である。271は土師器の椀、272は須恵器の杯蓋である。273は須恵器の杯身である。ともにT K217型式の時期と考えられる。274は須恵器の鉢である。270と274は床面出土であるが、271・272は細片である。S H507の切り合い関係と遺物の時期が齟齬をきたすがどちらかが未認識の柱穴などによる混入と考えられる。

S H514(第93図278) 土師器の甕である。古墳時代後期のものと考えられる。

S H517(第93図279・280) 279・280は土師器の高杯の杯部である。

S H562(第93図277) 277はM T15型式の須恵器の杯身である。

S K515(第94図302～306) S K515には2群の土器が認められる。302～304はT K217型式に属し、305は底部にカキメが残る須恵器の短頸壺でそれらよりも古い。S K515は出土遺物から見

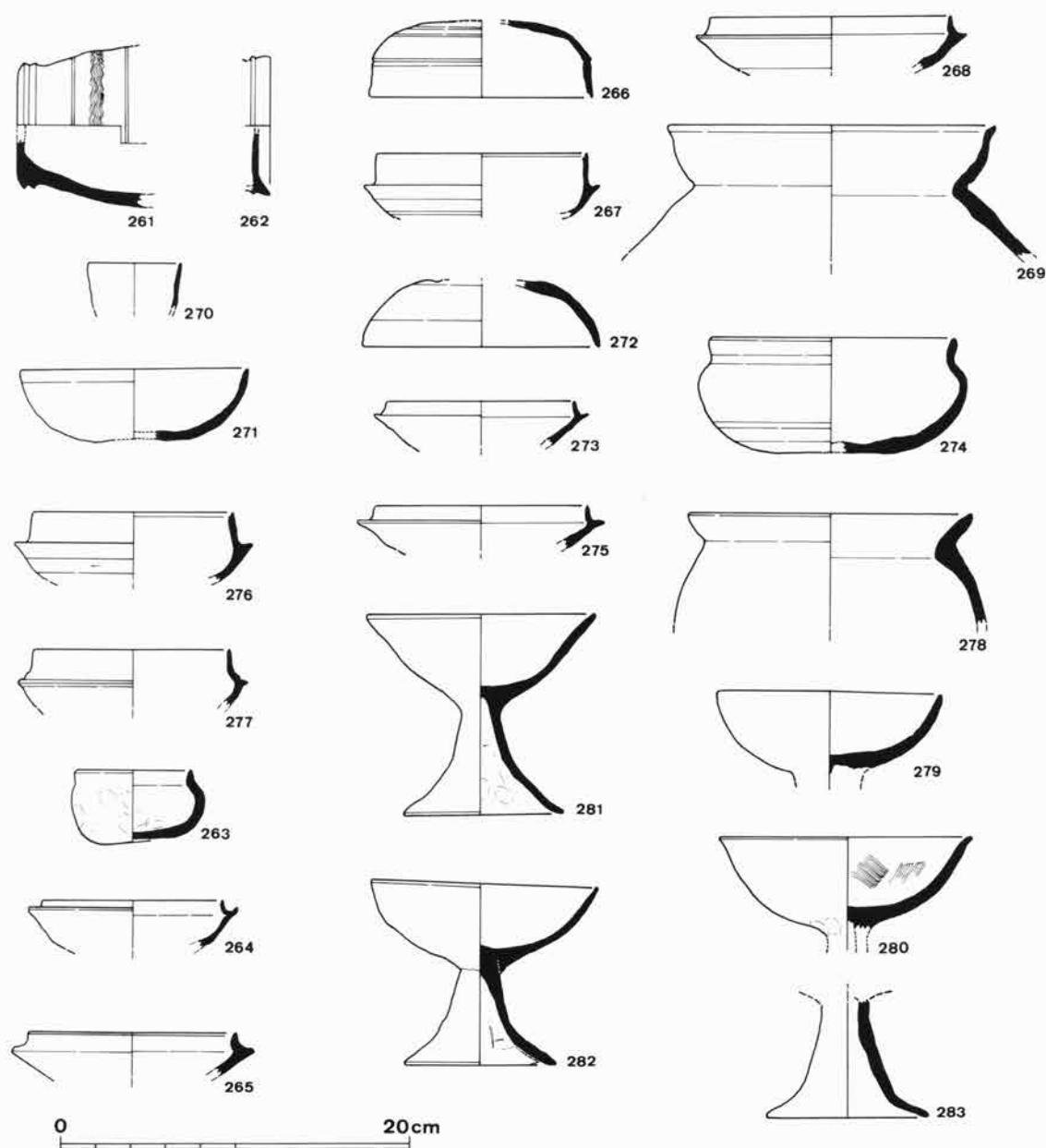


第92図 古墳時代土器実測図(3)

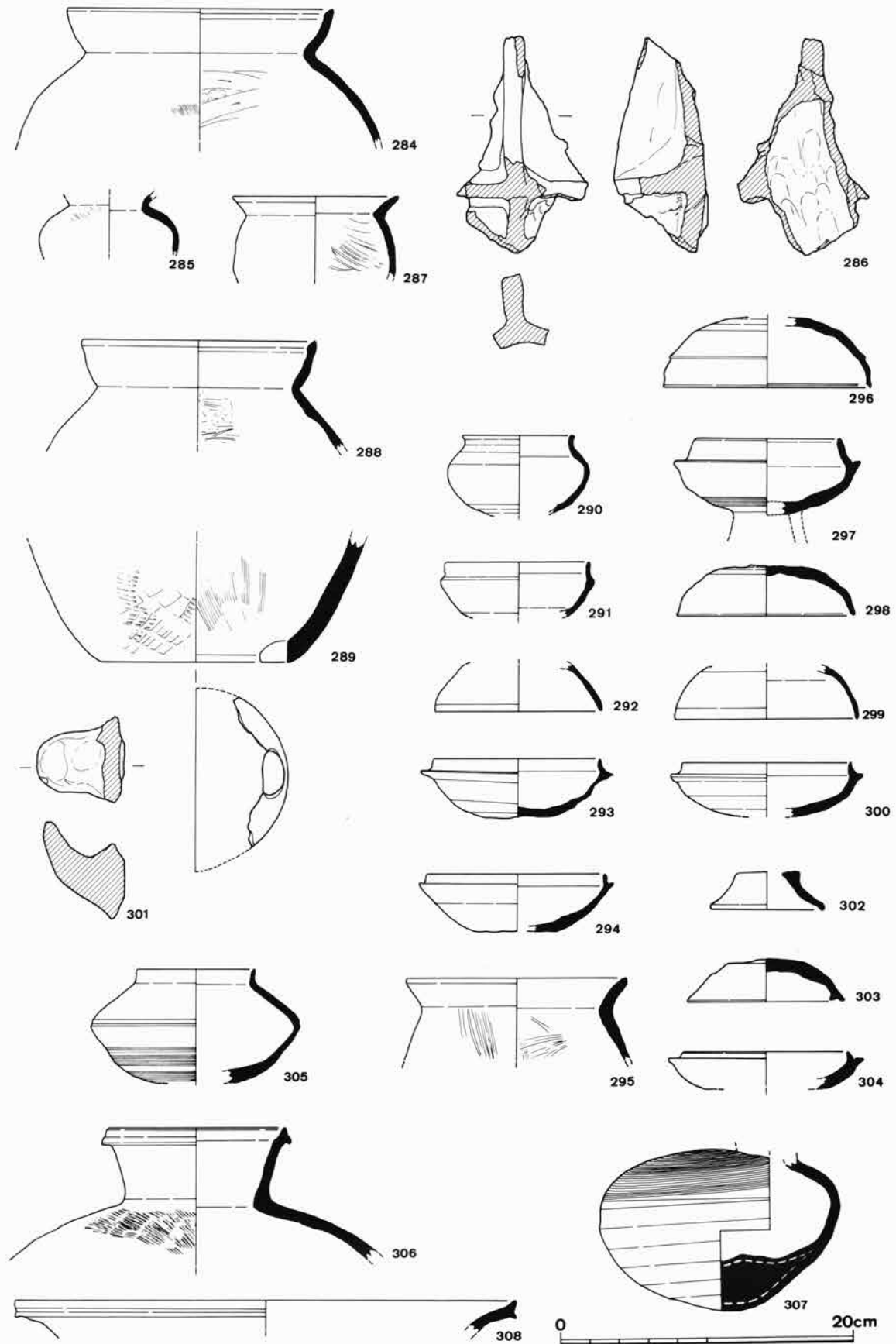
るとS H501との切り合い関係と年代が齟齬する。新しい遺物は土坑東部に出土することから未認識の柱穴などによる混入と考えられる。

S K 535(第94図287～295・298～301) S K 535出土の遺物は2群の時期に分かれる。1つは288・289にみられるS H522並行の時期のもの、一方は290～294・299・300のT K 209型式のものである。288は土師器の甕で布留式土器の系統を引くものである。289は土師器の甕で外面はタタキ調整後ケズリ、内面はハケ調整が施される。底部の穿孔は、周縁部に楕円形の穴がみられる。穴の形状から中央に1か所の穿孔があったものと想定できる。

S K 563(第94図286) 須恵質の亀甲型陶棺の破片である。内面が屈曲することから陶棺の隅部と考えられる。上面と考えられる貼り付け部はその貼り付け痕跡がきれいにナデられているが、下側と考えられる方にはナデが不十分で貼り付け痕が残る。内面は指ナデによって調整されている。



第93図 古墳時代土器実測図(4)



第94図 古墳時代土器実測図(5)

S K 570(第94図284・285) 284は土師器の甕である。口縁部はわずかに肥厚するが、顕著ではない。285は土師器の小型の壺と考えられる。口縁部は上部が不明である。

S K 590(第94図307) 上面に同心円状のカキメを持つ須恵器である。底部は焼成時の気泡の膨張によって大きく内面に膨れる。

S K 628(第94図298) 須恵器の杯蓋である。T K 209型式と考えられる。

S D 561(第94図296・297) 296は須恵器の杯蓋である。297は須恵器の有蓋高杯の杯部である。両者ともMT 15型式と考えられる。

P 405(第94図308) 308は須恵器甕の口縁部で、5世紀代のものと考えられる。

②鉄器(第95図1)

S H 512から出土した鉄製の鉸具輪金具である。断面は隅丸方形で、刺金を巻きつける軸部のみ径7mm前後の円形に近い。全長4.85cm、最大幅4.65cm前後である。

③土製品(第95図2～4)

2はS K 523出土の土師質の土錘である。3は土師質の土錘で、柱穴P 405から出土した。4は土師質の土錘で、P 40(S B 509柱穴)から出土した。

④石製品(第89図1・11～29)

1は滑石製の管玉である。11～27は滑石製の白玉である。11はS H 502、12・14はS H 517北東部、13・20はS K 523、15はS H 507、16・21・22・27は包含層、17・18はS H 507、19はP 42(S B 509柱穴)、23・24はS H 504、25はS H 506、26はS H 512出土である。28は滑石製の勾玉で包含層から出土している。白玉の多くは住居跡内出土で、P 42はS H 516を壊して穿たれている。

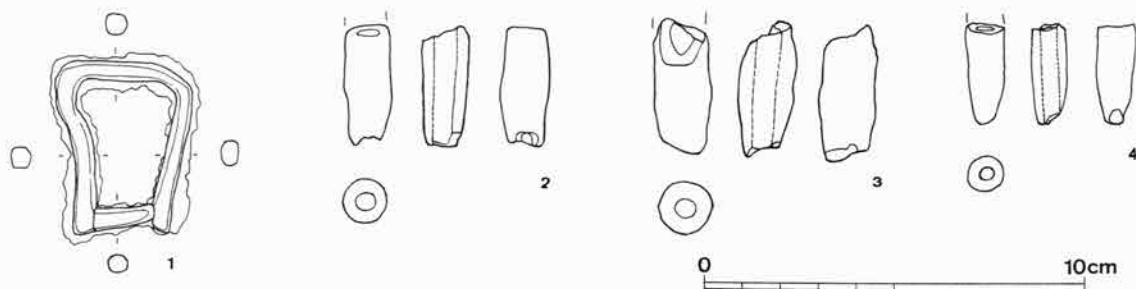
29は滑石製の片方がやや長い算盤玉状の形態を示す紡錘車で、長い部分が割れている。欠損していない面には外縁に円形の沈線を描き、その内側の頂点が中心に張り出した三角紋が描かれ内部は格子状に施紋されている。割れているが破損面外面にも同様な施紋があった痕跡が認められる。包含層から出土している。

(4)奈良時代

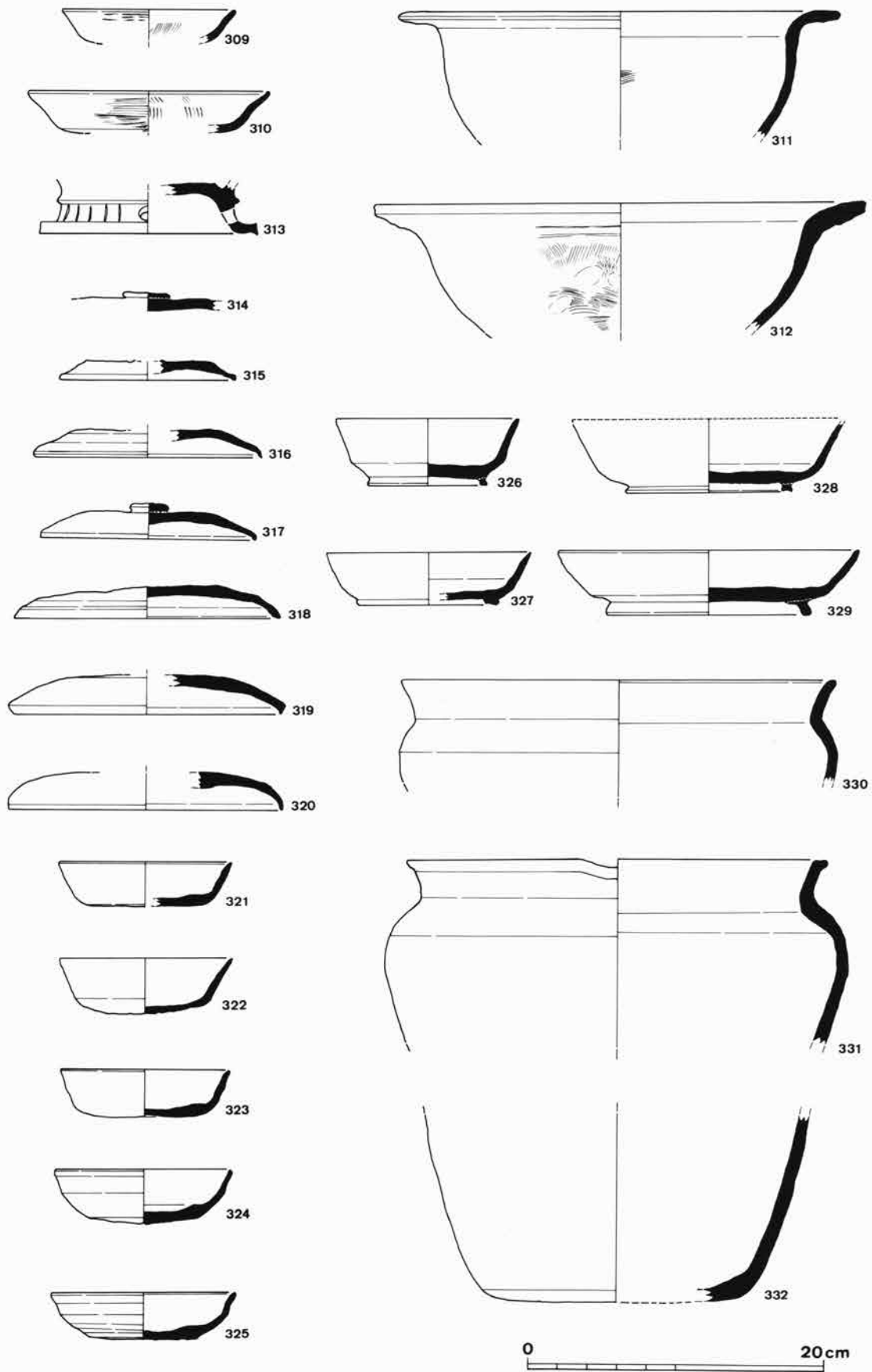
①土器

S B 505(P 161;第96図326) 326は須恵器の杯Bである。

S K 523(第96・97図309～312・316～323・325・327～335) 309・310は内面に放射状の暗紋がみられる土師器である。311・312は土師器の鉢である。胎土は砂粒が目立つ。316～320は須恵器



第95図 出土鉄器・土製品実測図



第96図 奈良時代土器実測図(1)

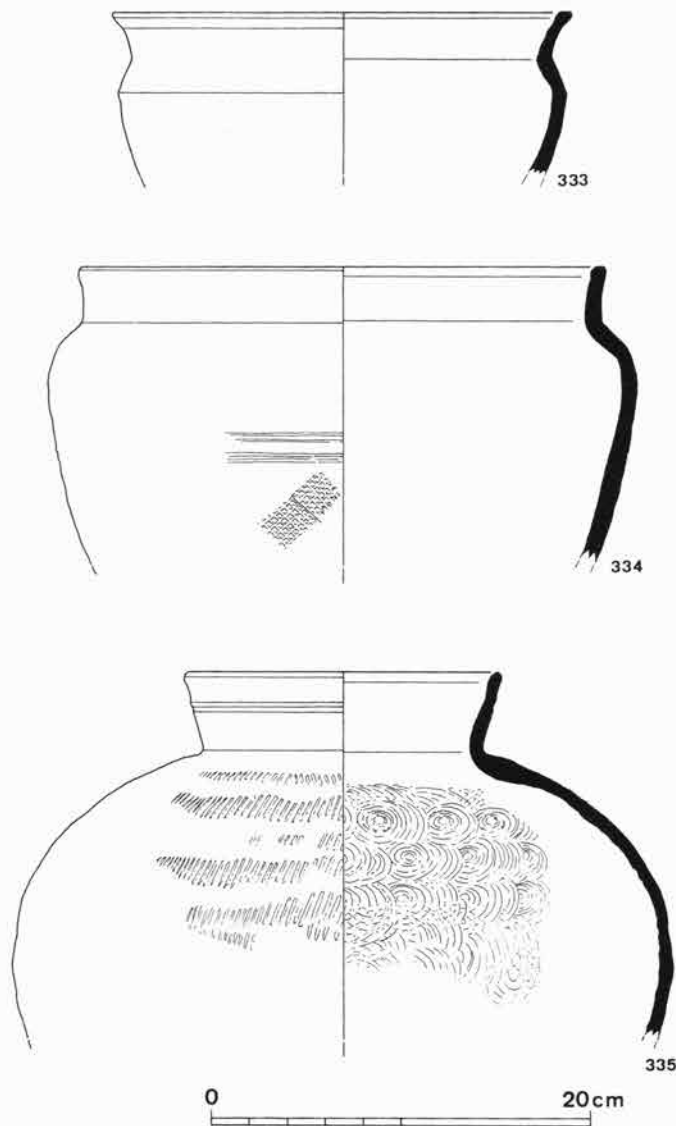
の杯蓋である。321～323・325は須恵器の杯Aである。325は口縁近くが強くナデられ、古墳時代の杯蓋に似る。327～329は須恵器の杯Bである。330～334は須恵器の甕である。331は片口の口縁部を持つ。焼成のあまいものが多い。

S K 646(第96図314) 314は須恵器の杯蓋のつまみ部分である。

P 243(第96図324) 324は須恵器の杯Aである。

P 445(第96図315) 315は須恵器の杯蓋である。

包含層(第96図313) 313は須恵器の円面硯である。脚部には円形の透かしのほかへうで縦方向に施紋される。包含層からはこのほかに一定量の須恵器杯A・B、土師器杯などが出土しているが割愛した。図化した土器の時代とずれる遺物は出土していない。



第97図 奈良時代土器実測図(2)

(5) 平安時代

① 土器

S K 151(第98図344・345) 両者ともに瓦器碗である。349は残存状態が良好とは言えないが、ミガキが器面の内外面全体に密にみられ、高台部外面にも施される。

S K 572(第98図347・348・351・352) 347・348・351は黒色土器の碗である。352は篠窯産と考えられる須恵器の鉢である。

S K 585(第98図349・350) 黒色土器の碗である。

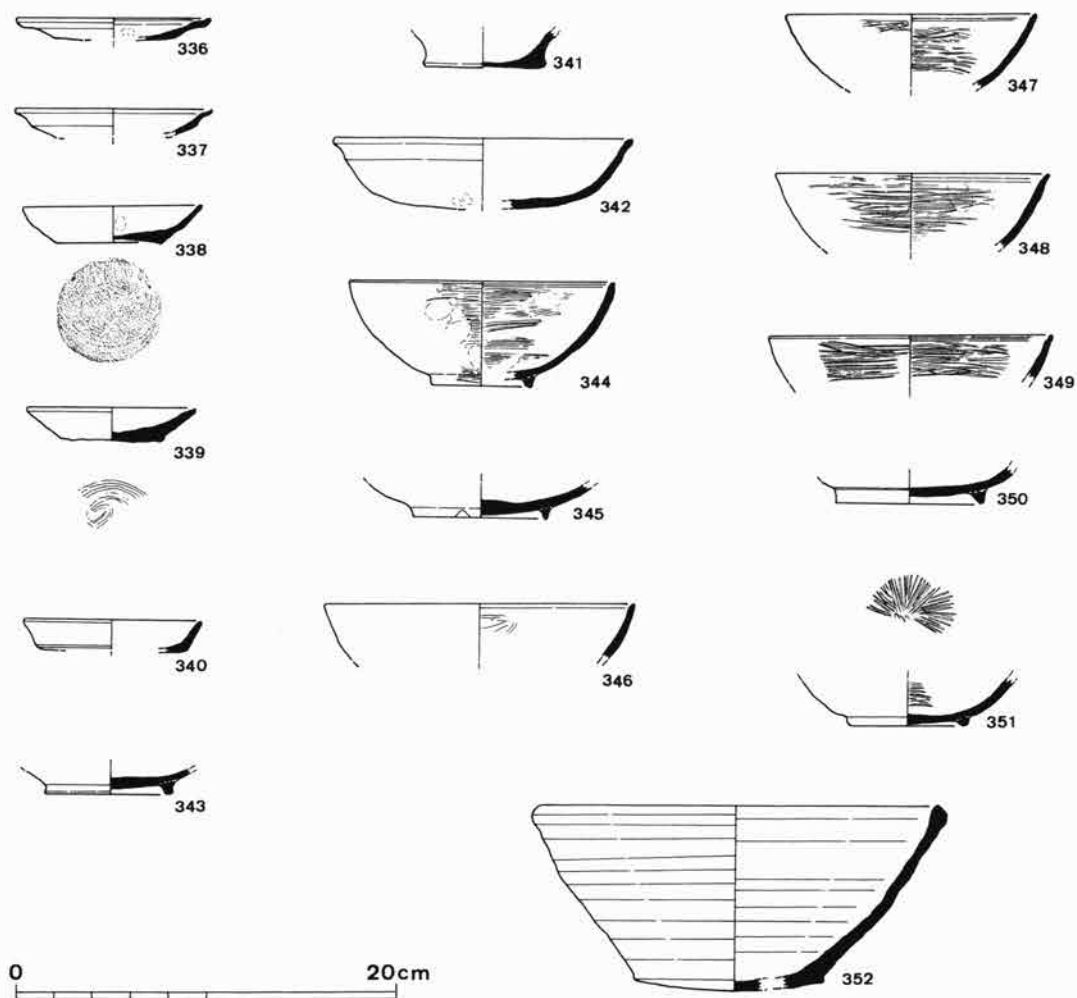
P 118(第98図336) 「て」字状口縁を持つ土師皿である。

P 132(第98図338) 回転台成形による土師皿で、底部は糸切り痕を残す。

P 142(第98図337) 「て」字状口縁を持つ土師皿である。

P 172(第98図341) 土師質の碗の底部である。P 172はS B 702の柱穴のひとつである。

P 315(第98図339・342) 339は回転台成形の土師皿で、底部は糸切り痕が残る。内面には相対する2か所に煤の付着がみられる。342は土師皿で、口縁部外面はナデ、底部は未調整、内面はナデ調整である。339・342は色調が淡茶色で、336が淡橙茶色であるのと明らかに色調が異なる。



第98図 平安時代土器実測図

P 420(第98図340・346) 340は土師器の皿である。内外面とも調整は不明である。346は黒色土器の椀の口縁部である。

4. ま と め

(1) 弥生時代

a. 亀岡盆地の弥生時代遺跡

弥生時代の亀岡盆地の遺跡は、第99図で示したように桂川(大堰川)を挟んで分布している。これまで亀岡盆地における弥生時代研究は桂川の西岸地域で主に進められていた。西岸地域は国道9号線を中心に市街化が進み、調査例が増加してきた。とりわけ国道9号バイパス建設は、大規模な発掘調査によってこの地域の弥生時代遺跡の印象を強く焼き付ける結果となった。西岸地域は標高441mの行者山の裾野に弥生時代の遺跡が集中する。前期・中期前葉の太田遺跡、中期前葉と後期の南金岐遺跡、縄文時代晩期と中期中葉・後葉の千代川遺跡など弥生時代全時期にわたって遺跡が営まれていた。東方遺跡にみられるように山における岩座信仰と捉えられる遺跡があることから、この山を中心とした弥生文化があったものと考えられる。

東岸は部分的な調査が多いが、池尻遺跡、河原尻遺跡、蔵垣内遺跡、大淵遺跡では前期の遺物

が出土している。中期前葉の遺跡は発見されていないが、中期中葉・後葉の遺跡は沢ノ谷遺跡、池上遺跡、池上古里遺跡、里遺跡、時塚遺跡がある。後期にもまた遺跡が散在している。様相が明らかになっていないが何か所かの遺跡が継続する地域が抽出できるものと考えられる。

池尻遺跡を中心とする地域と古川より南の蔵垣内遺跡を中心とする部分にわけられる。池上遺跡はこれらの地域には含まれないため遺跡のある小盆地内で1つの中心を作っていたものと考えられる。

b. 遺構変遷

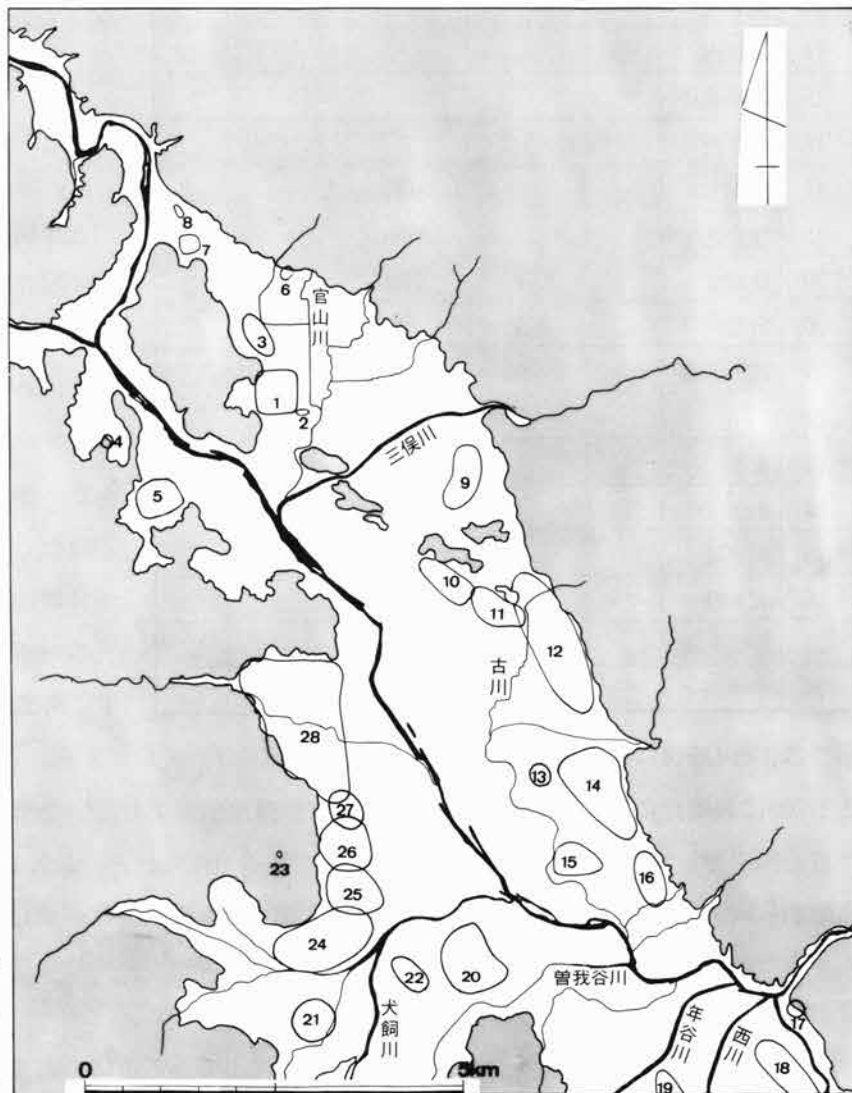
これまで池上遺跡では、弥生時代の遺構は弥生時代中期中葉から後葉にかけての時期に限られる。第12次調査での遺構の変遷は3つの時期に分けられる。

I期 S D01によって集落が画されている時期。

S D01は第4・5・8次調査でも検出されており環濠になるかは不明であるが、集落を画する溝と考えられる。当時の竪穴式住居跡が溝の南側にあったか、北側にあったかは不明である。これまで南側からの竪穴式住居跡検出例はS H538、第8次調査S H122・140である。北側には、まばらではあるが住居跡は点在している。発掘調査ではほとんどS D01の南側は調査されていない。竪穴式住居跡の検出例の多くが周壁溝と中央土坑のみの検出であることから、削平によって検出できないものも多く存在したと考えられる。

II期 区画の範囲を超えて竪穴式住居跡が作られる時期(集落拡張期)。

第5次調査では、S D01を切る竪穴式住居跡が検出されている。このことから溝が埋没し、あるいは埋めた後に集落がその範囲を超えて拡張したと考えら



第99図 亀岡盆地内の弥生時代遺跡分布図

付表2 亀岡盆地内の弥生時代遺跡の動態

番号	遺跡名	弥生時代				
		前期	中期前葉	中期中葉	中期後葉	後期
1	池上			○	○	○
2	池上古里			○	○	
3	野条遺跡					○
4	沢ノ谷				○	
5	八木嶋	不明				
6	諸畑	不明				
7	新庄	不明				
8	船枝	不明				
9	里				○	
10	池尻	○				
11	時塚				○	
12	出雲遺跡	不明				
13	河原尻	○				○
14	蔵垣内	○				
15	大淵遺跡	○				
16	安察使					○
17	山本	不明				
18	観音芝	不明				
19	浄法寺	不明				
20	余部	○	○	○	○	
21	穴川遺跡		○		○	○
22	天川			○		
23	東谷					○
24	太田	○	○			
25	南金岐					○
26	北金岐					○
27	馬場ヶ崎					○
28	千代川	○		○	○	○

部では、S D546に直交するように大型の墓壇S K547が検出できた。このことから解釈すると、S T709は旧墳丘には大規模な中央の主体部が遺構検出面より高い場所に営まれており、その高い墳丘部を持った周溝墓の南面の溝を埋め、拡張部が作られた。S K546は池上遺跡でも最も検出面からの深さが深い墓壇であることから、少なくとも拡張部は旧墳丘より低かったと考えられる。また、小さな主体部が多く残されているS T713・715などでは周溝がみられないものもあり、溝が浅く墳丘が低かったため主体部が残ったとも考えられる。

これらのことから、現在多くの場合同一平面で検出できる遺構であるが、築造当時は高低の差がみられ、造り出し状の拡張部などが存在し、平面の大きさだけではない視覚的な差もあったも

れる。調査地内では多くの磨製石器素材や磨製石器が検出できた。遺物は周溝墓の溝などからの出土であるが、第Ⅱ期のこの地域での人間活動を反映しているものと想定できる。

Ⅲ期 集落域が墓域になる時期

竪穴式住居跡の跡、S D01を周溝墓の溝が切っていることから周溝墓が最も後で造られたことがわかる。周溝墓は前述したように溝の再掘削はもとより、拡張などの改変が加えられている。また溝埋没後の溝中埋葬もみられることからある程度の年代幅を持って利用されていたと考えられる。

c. 池上遺跡の周溝墓

方形周溝墓はS T707・709のように墳丘の中央部分に主体部がみられない例がある。S T707はその溝のあり方から一定の存在感を持っていたと考えられる。このような主体部は構築されなかったのではなく、削平されたと考えるのが合理的である。S T709は第1次墳丘部には主体部が検出できず、南部が拡張された第2次墳丘

のと考えられる。

埋葬主体部については、S K547で完形の無頸壺が棺外から出土しており副葬品と考えられる。同様な事例は第4次調査のS X B05でもみられ、台付鉢が副葬されていた。この主体部では磨製石剣の切先が出土しており破片が墓域内で接合する。いわゆる戦死墓と言われるものである。S K547でも石鏃片と考えられる細片が出土しているが、切先ではなく第Ⅱ期以前のものが混入したとも考えられる。篩作業の結果、磨滅した細片の弥生土器なども出土している。

S K584のように棺上(直上かどうかは不明)に甕が置かれる場合がある。このような事例は第5次調査のS K544にもみられ、この事例では棺が朽ちた後、土器が落ち込んでいることが確認できた。

S K543のように墳丘上にある土器棺墓も検出されている。同様な例は第5次調査のS K492でも認められ、木棺墓と共存する。

溝中埋葬は、黒色系の埋土中では、下層の黄褐色土まで掘削が及び、その土が埋土に混ざらない場合検出が非常に困難であり、溝の壁面に残された角部によって確認することも多い。周溝内では完形の土器が発見されることが多いが、S D526以外では1、2個体出土することが一般的である。このような土器はコーナー部分ではなく直線部にすることが多い。

d. 石器製作

第12次調査では磨製石剣の材料である粘板岩が多く出土している。粘板岩には円礫素材のもの、露頭あるいはその近くから採取された大型のものがある。粘板岩からは石鏃・石錐・石庖丁・紡錘車・磨製石剣・石戈・石斧が作られている。それらの未製品もまた出土している。磨製石器は遺跡内で全器種が生産されていることがわかる。粘板岩は近畿地方では、丹波山塊を中心に分布する丹波帯中の中・古生界の地層、丹波層群で産出することが知られている。また粘板岩自身は、丹波山塊を源とする河川流域や大阪層群中に含まれているが、その粒径は移動距離と反比例するものと考えられる。池上遺跡は粘板岩が産出する丹波山塊に所在している。そのため粘板岩は近くの河原や露頭から採取することが可能である。大阪平野などではサヌカイトが石器素材として多用される。池上遺跡では出土数は少ないが、サヌカイトと粘板岩両方を用いて作られる石鏃や石剣の比率を見ると、それぞれ5個体出土しており、石剣についてはこれまでの調査でサヌカイト製の打製石剣は出土していない。このことから粘板岩産地に位置する石器の様相を示しているものと考えられる。

磨製石斧は緑色をした石で作られており、同種の石材は桂川の河原で採取することができる。出土遺物から石斧の製作工程が復原できる。その工程は、適当な長さや厚みを持つ円礫を河原で採集→直接打撃による整形加工→敲打によって形態を整える→研磨工程である。敲打によって整形される完成品にはすでに基部と刃部の差があり、刃部側はやや先端に向かって湾曲するが明確な刃はなく専ら研磨によって刃部が作られることが判る。この石器もまた素材獲得を遺跡近くで行い、遺跡内での石器製作の全工程が存在したことが復原できる。

e. 土器

今回の発掘調査によって何群かの丹波地域の基準資料となる土器群が出土している。

① S D 526の西地区・中2地区で出土した土器群。

② S D 567で出土した完形率の高い土器群。

③ S D 01で出土した土器群。

①は有段口縁を持つ壺を16個体図化しているが、有段口縁を持つ壺は、壺の中でも数が多く、この土器群の特徴となっている。甕は外面にタタキ調整が残されたままのものが多くを占める事例が丹波地方では多いとされているが、図化した土器の中でも外面にタタキ調整が残されたままの個体数は多い。しかし、外面のハケ調整によってタタキが消されている例も一定量存在する。本来は正確な比率を出し、この地域の土器様相を明かにするべきであるが、時間の都合上今回はできなかった。ただ、図示したものは土器群の様相をあらわすように抽出したものである。164・165は円窓付土器で京都府内では長刀鉾町遺跡(京都市)、長岡京跡左京第35次調査(長岡京市)で出土している(田代1985)。円窓付土器は尾張を中心とする伊勢湾周辺に多いとされている。また、甕の中には山陽地方の影響を受けたものもみられる。

②は図化した16個体が図化できる土器のすべてに近い。甕は体部外面はすべてハケ調整である。また45は橙色で在地と考えられる土器とは色調・胎土が異なることから、搬入土器と考えられる。壺の端部は無紋である。①とは様相を異にする。②の方が古い様相を示している。

③は切り合い関係と遺構の変遷案から考えると最も古い土器群となるが、最上層から出土した土器22(第60図)を見ると①と大きく年代差はないと考えられる。土器群を最上層とそれ以下と分離していないため資料価値としては低く、破片資料が多い。また、周溝墓の溝 S D 541・556と重なる部分では最上層で区別して認識していなかったため混入の可能性も指摘できる。次年度報告分にまとめた資料があり、その分析を待つて再検討したい。

(2) 古墳時代

古墳時代の遺構は今回の調査地を含め、堅穴式住居跡が100基以上検出されており、住居域として利用されていたことがわかった。古墳時代の検出遺構は主に堅穴式住居跡であるが、切り合い関係が複雑な住居跡では細片資料で年代を決定することが難しいが、出土遺物から3群の時期が抽出できる。

I 期 布留式甕末期の時期の堅穴式住居跡。今回の調査地では S H 521・522があげられる。S H 522では縄蓆紋を体部に持つ甕が出土していることから須恵器が導入されて以後の可能性が指摘できる。このような布留式甕は丹波地方では須恵器と共伴する。第4次調査の結果と考え合わせるとI期の住居跡は池上遺跡の範囲でも南側に多くみられることがわかる。

II 期 MT 15型式を中心とする時期で、堅穴式住居跡の規模が大きくなり、最も多く発見できる。竈に粘板岩製の骨材を用いたり、白玉などが出土する。鉄製の道具や鉄滓なども出土する。

III 期 T K 209・217型式を中心とする時期。遺跡全体ではT K 217型式の時期の住居は小型のことが多い。

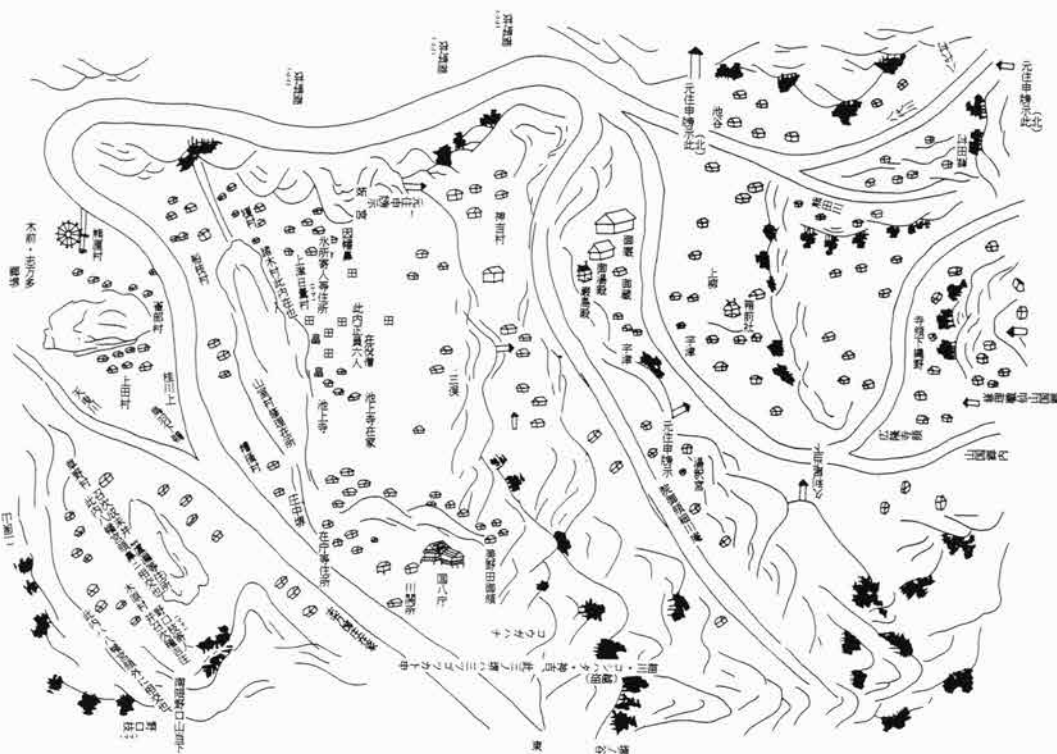
亀甲型の陶棺が出土していることから、近くにこの集落の墓域があるものと考えられる。現在削平された狐塚古墳群や筏森山斜面、丘陵上の古墳が候補として上げられる。近年の川東地区の開発の増加によって、以前から多くその存在が知られていた古墳群の母体となる大規模集落が明らかになりつつある。そしてそのことは亀岡盆地最大の古墳が川東地区に築造された背景と考えられる。

(3) 奈良時代

奈良時代の建物としてS B 505が注目できる。S B 505は南北2間×東西9間以上の建物で一般的な集落で見られるような2間×3間、2間×4間の建物とは明らかに規模が異なる東西棟の建物である。建物の年代は、柱穴と近くの土坑から出土した遺物から奈良時代前期のものと考えられる。包含層からであるが円面硯が出土している。このことは今回の建物には、文字を書ける人が住んでいた、あるいは、仕事をしていたと考えられる。建物の性格の候補として、公的な施設、寺院、在地の官人の住居などがあげられる。

奈良時代前半の遺構は、これまでの調査では今回の調査区がはじめての事例である。これまで調査していない部分に遺構が続いていくものと考えられる。S K 505は現在の刑部と池上の字境に平行して建てられている。この方位は現存する条里地割と方位を合わせている。

現在の池上は船井郡に属している。10世紀に成立した『和名類聚抄』には、船井郡の郷名に「刑部」の名があり八木町の刑部地区に比定されている。しかし、桑田郡の「池辺」に氷室があり、八木町の氷所に比定されているため、現在の郡境は古代においては違った様相をしていたようである。



第100図 吉富荘絵図トレース図(亀岡市文化資料館 1993)

奈良時代前半に起こった丹波地域の事件には、和銅6(713)年4月に、加佐郡を含む5郡が丹波から分かれて丹後国ができたことがあげられる。2つに別れる前の丹波の中心は丹波郡丹波郷(中郡峰山町丹波)と言われており、峰山町は現在の丹後地方にある。奈良時代前半にこのような大規模な建物の存在は、分国に伴う新国府の造営などの新たな事業の影響を受けたものとも考えられる。

(4) 平安時代

平安時代の遺物は、11世紀の前半から後半にかけての遺物に限られる。掘立柱建物跡の年代は出土遺物から11世紀前半に、土坑S X151は11世紀後半に位置付けられる。第100図は『吉富荘絵図』を書き取ったものであるが、池上遺跡のある一帯と考えられる部分には、「池上院」、「池上在家」と記載されている。前述したように池上院は皇慶によって11世紀前半に開かれた池上坊がその起源とされている。調査区は池上寺在家のあった地域であるが、検出した建物は皇慶の池上坊と同じ時期に建てられたものと考えられる。8世紀後半以降調査区付近では人が居住した痕跡が確認できないが、11世紀の変化は池上院成立とともにこの地域の集落の様相が変化したことを示している。11世紀後半の土坑は、墓壇の可能性が指摘できる。このような土坑は池上遺跡第4次調査C地区でも3か所発見されている。

(中川和哉)

調査参加者

調査補助員：天池佐栄子・山岡匠平・奥浩和・船築紀子・宅間のり子・森口亮・田村和成・望月誠子・羽生奈津子・中川佳子・大西瞳・丸吉繁一・市木尚利

整理員(平成13年度)：中川香世子・小寺明美・安田裕貴子・一森雄次・陸田初代・荻野富佐子・井上聡・藤井矢壽子・古賀友佳子・山岡匠平・奥浩和・柴田文恵・羽生奈津子・北森さやか・坂口美智代・川端美恵・中川佳子・大西瞳 (平成14年度)：寺尾貴美子・荻野富紗子・西村香代子・西村美智子・安田裕貴子・奥田久美子・船築紀子・春日満子・中川香世子・小寺明美・上前靖子・西村恵美

作業員：竹上てる・木村まさ江・平井房枝・三村保彦・大内ミユキ・松本孝子・西河美ゆき・麻田早苗・中川俊治・浅田昭二・西河みつ・笠浪恒正・麻田節子・浅田よし子・中西務・麻田昇司・吉田勇・奥村弘・奥村満洲子・関岡勉・谷美智子・麻田和美

参考文献

石井清司・田代弘『北金岐遺跡 京都府遺跡調査報告書』第5冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1985

上島亨「池上院と神護寺・丹波国府—新史料の紹介と皇慶の活動をめぐって」(『郷土誌八木』第10号 八木史談会) 2000

鶴島三壽「国道9号線バイパス関係遺跡平成2年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第46冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991

鶴島三壽『千代川遺跡 京都府遺跡調査報告書』第16冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1992

岸岡貴英「府営農業基盤整備事業関係遺跡平成13年度調査概要(1)池上遺跡第10次」(『埋蔵文化財

- 発掘調査概報2002』京都府教育委員会) 2002
- 岸岡貴英編『京都府遺跡地図(第3版)第2分冊』京都府教育委員会 2002
- 黒川孝宏『南北朝時代の丹波・亀岡』 亀岡市文化資料館 1993
- 柴暁彦「国道478号バイパス関係遺跡(2)沢ノ谷遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第62冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 柴暁彦・原田三壽「国道478号バイパス関係遺跡(1)八木嶋遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第62冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 田代弘「木津川河床遺跡出土の円窓付土器」(『京都府埋蔵文化財情報』第17号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
- 田代弘「亀岡市時塚遺跡採集の石製品類」(『京都府埋蔵文化財情報』第26号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 田代弘「池尻遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第48冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- 田代弘「池上遺跡第11次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第104冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2002
- 田代弘・岡崎研一・野島永「南丹区域農用地総合整備事業関係遺跡 池上遺跡第8次・池上古里遺跡第2次」(『京都府遺跡調査概報』第103冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2002
- 谷口悌『八木町遺跡地図―町内遺跡詳細分布調査報告書―』八木町教育委員会 1997
- 谷口悌『池上遺跡発掘調査概要―第2次調査―』八木町教育委員会 1998
- 谷口悌『町内遺跡発掘調査概要―野条・室橋・新庄・諸畑遺跡―』八木町教育委員会 1999
- 谷口悌ほか『池上遺跡発掘調査報告書―第3次・第4次調査―』八木町教育委員会 2000
- 谷口悌『町内遺跡発掘調査概要―第3次野条遺跡・第2次新庄遺跡―』八木町教育委員会 2000
- 谷口悌『新庄遺跡発掘調査概要―第3次調査―』八木町教育委員会 2001
- 谷口悌『町内遺跡発掘調査概要―池上遺跡(第9次調査)・木原遺跡―』八木町教育委員会 2002
- 戸原和人「国営農地再編整備事業『亀岡地区』関係遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第103冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2002
- 中川和哉ほか「池上遺跡第5次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第91冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000
- 中川和哉・檀原徹「東山遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第92冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000
- 中澤勝「天川遺跡発掘調査報告書」(『亀岡市文化財調査報告書』29 亀岡市教育委員会) 1993
- 中村研「丹波国吉富庄の古絵図について」(『史朋』2号 史朋同人) 1963
- 野々口陽子「余部遺跡第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第81冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998
- 野々口陽子「余部遺跡第5次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第88冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999
- 奈良康正「府営農業基盤整備事業関係遺跡平成11年度調査概要〔1〕池上遺跡」(『埋蔵文化財発掘調査概報2000』京都府教育委員会) 2000
- 奈良康正「国営農地再編整備事業『亀岡地区』関係遺跡平成13年度発掘調査概要〔1〕案察使遺跡第2・3次」(『埋蔵文化財発掘調査概報2002』京都府教育委員会) 2002

樋口隆久「御上人林遺跡第3次発掘調査報告」(『亀岡市文化財調査報告書』第6集 亀岡市教育委員会) 1978

樋口隆久・吉田野乃「千代川遺跡第11次発掘調査概要」(『亀岡市文化財調査報告書』第15集 亀岡市教育委員会) 1987

水谷寿克・村尾正人・引原茂治「国道9号線バイパス関係遺跡昭和56年度発掘調査概要(千代川遺跡・南金岐遺跡)」(『京都府遺跡調査概報』第1冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982

村田和弘「池上遺跡第7次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第98冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001

村尾正人・田代弘ほか『大田遺跡 京都府遺跡調査報告書』第6冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1986

吉水真彦「馬場ヶ崎遺跡発掘調査報告」(『亀岡市文化財調査報告書』第5集 亀岡市教育委員会) 1978

亀岡市史編さん委員会『新修亀岡市史』本文編第1巻 1995

亀岡市史編さん委員会『新修亀岡市史』資料編第1巻 2002

4. 国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡 平成13・14年度発掘調査概要

はじめに

国営農地再編整備事業「亀岡地区」は、亀岡市を貫流する大堰川(保津川)東岸の馬路町、千歳町、河原林町、保津町の未整備農地など635haを対象として、農家の経営規模の拡大と経営の合理化を図ることを目的として近畿農政局が区画整理と農地造成を行う事業である。

この地域の遺跡のうち、丹波国分寺(国史跡)、御上人林廃寺(国分尼寺推定地)、千歳車塚古墳(国史跡)など貴重な遺跡については、その周辺も含めて事業地区外とし、やむを得ず遺跡に影響を及ぼす地点については記録保存を前提とした発掘調査を実施することとなった。

調査は京都府教育委員会、亀岡市教育委員会が試掘調査を行い、遺構や遺物包含層が確認された地点を中心として、近畿農政局をはじめとする開発部局と十分な調整を行ったうえ調査範囲を確定し、近畿農政局の依頼を受けて当調査研究センターが実施することとなった。

今回報告する調査は、平成13年度の後半に実施した案察使遺跡第4次調査と、平成14年度の前半に実施した大淵遺跡第4次調査C・D地区の概要である。

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡の調査は平成13年度から開始しており、保津車塚古墳(案察使1号墳)周濠の調査は、昨年度にその概要を報告している。平成14年度の後半期に実施したBW・BE地区の調査成果については、現在、整理中である。その概要については、平成15年度に報告する予定である。

案察使遺跡第4次調査は、当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第1係長水谷壽克、主任調査員戸原和人、専門調査員石尾政信、調査員松尾史子・福島孝行・村田和弘が担当した。調査には、平成13年11月26日～平成14年3月7日までを要し、調査面積は約2,140㎡である。大淵遺跡第4次調査は、調査第2課調査第1係長石井清司、主任調査員戸原和人・田代弘、専門調査員石尾政信、調査員村田和弘が担当した。調査には平成14年7月2日～平成15年3月7日までを要し、調査面積は、C地区約200㎡、D地区約1,600㎡、BW地区約1,800㎡、BE地区約400㎡である。調査に係る経費については農林水産省近畿農政局が負担した。

調査にあたっては、本事業を計画された農林水産省近畿農政局亀岡農地整備事業建設所、京都府教育委員会、亀岡市教育委員会から数多くの御指導・助言を得ました。また現地作業では、保津町自治会、地権者、町民の方々の御理解と御支援をいただきました。厚く御礼申し上げます。

(戸原和人)

1. 船枝遺跡	2. 殿若遺跡	3. 野条遺跡	4. 池上遺跡	5. 沢ノ谷遺跡
6. 八木嶋遺跡	7. 里遺跡	8. 観音寺遺跡	9. 池尻遺跡	10. 時塚遺跡
11. 車塚遺跡	12. 出雲神社境内遺跡		13. 三日市遺跡	14. 千代川遺跡
15. 河原尻遺跡	16. 蔵垣内遺跡	17. 馬場ヶ崎遺跡	18. 東谷遺跡	19. 北金岐遺跡
20. 南金岐遺跡	21. 太田遺跡	22. 大淵遺跡	23. 案察使遺跡	24. 余部遺跡
25. 穴川遺跡				

(1) 案 察 使 遺 跡 第 4 次

1. 位 置 と 環 境

案察使遺跡は亀岡市保津町山田に所在し、愛宕山系の牛松山の西麓、河岸段丘の下部に広がる沖積地上に立地する。また、北側と南側に山塊から延びる低い丘陵が横たわり、大堰川が流れる西側にのみ開ける「コ」字形の地形の最奥部に位置する。

亀岡盆地における最古の人類の痕跡は、蔦田野町鹿谷の鹿谷遺跡で発見されたサヌカイト製の楔形石器である。これは旧石器時代に属すると見られる。

縄紋時代には千代川遺跡において草創期の有舌尖頭器、早期の押型紋土器、前期の玦状耳飾りなど、晩期まで断続的に遺物が見られるほか、飾南条遺跡、三日市遺跡、北金岐遺跡、太田遺跡、天川遺跡、鹿谷遺跡などで土器が見られる。

弥生時代においては(第101図)前期の遺跡として太田遺跡で環濠集落、池尻遺跡で土壙墓が検出されている。中期にはいると、墓地では南金岐遺跡、余部遺跡、千代川遺跡、天川遺跡、八木町池上遺跡で中期の方形周溝墓群が検出されている。集落遺跡では余部遺跡、八木町池上遺跡で中期の竪穴式住居跡が検出され、碧玉製の管玉が生産されていたことが知られている。また八木町沢ノ谷遺跡では丘陵上に円形の竪穴式住居跡が築かれる。後期に入ると千代川遺跡、北金岐遺跡、河原尻遺跡などで竪穴式住居跡が築かれる。

古墳時代において前期の集落は現在のところ千代川遺跡に限られる。前期古墳は老ノ坂峠に近い亀岡市篠町向山古墳と三ツ塚古墳群がある。向山古墳は箱形木棺に鼈龍鏡、石釧、車輪石、鉄剣、鉄刀、鉄鏃、銅鏃、鉄斧、鉄鑿を副葬していた。三ツ塚2号墳は竪穴式石室に画文帯環状乳神獣鏡と鉄刀、玉類を副葬していた。中期には余部遺跡と鹿谷遺跡で集落が確認されている。これらの集落は後期まで連続的に集落が営まれている。八木町池上遺跡でも中期後半から後期の集落が検出されている。中期古墳には浄法寺1号墳、保津山古墳、瀧ノ花塚古墳、榊塚古墳、池尻古墳群、保津車塚古墳、坊主塚古墳、穴太古墳群などがある。後期の集落は前述の中期の集落が継続して営まれるほか、大堰川右岸の河原尻遺跡で後期末の集落が営まれる。八木町八木嶋遺跡では古墳時代後期から飛鳥時代に続く大型掘立柱建物跡群が検出され、首長居館ではないかと推定されている。後期古墳は爆発的にその数を増やし、千歳車塚古墳のような2重周濠をもつ大型前方後円墳の他、北ノ庄古墳群、医王谷古墳群、拝田古墳群、小金岐古墳群など横穴式石室を内部主体に持つ群集墳が数多く築かれる。特に北ノ庄13・14号墳は北部九州系の石室を持つ初期横穴式石室であり、拝田16号墳は石棚を持つ横穴式石室を内部主体としている。

飛鳥時代においては桑寺廃寺、與能廃寺、観音芝廃寺、池尻廃寺といった白鳳寺院が検出されている。

奈良時代には丹波国分寺、国分尼寺が建立され、杉南遺跡では奈良～平安時代の官衙的な掘立柱建物跡群が検出されている。また池尻遺跡では漆工房関係遺跡が検出されている。

平安時代には丹波国府の候補地である千代川遺跡で緑釉陶器や瓦、木簡、石帯などが出土している。篠窯跡群では平安時代の須恵器、緑釉陶器、瓦などを大量に生産していた一大生産遺跡群であったことが判明している。

中世においては京都縦貫道関係の発掘調査などで集落遺跡が検出されている。また、数多くの山城が発見されており、案察使遺跡の周辺では保津谷川砦跡などがある。

近世には明智光秀が築城した亀山城があり、江戸時代には譜代大名が藩主となった。

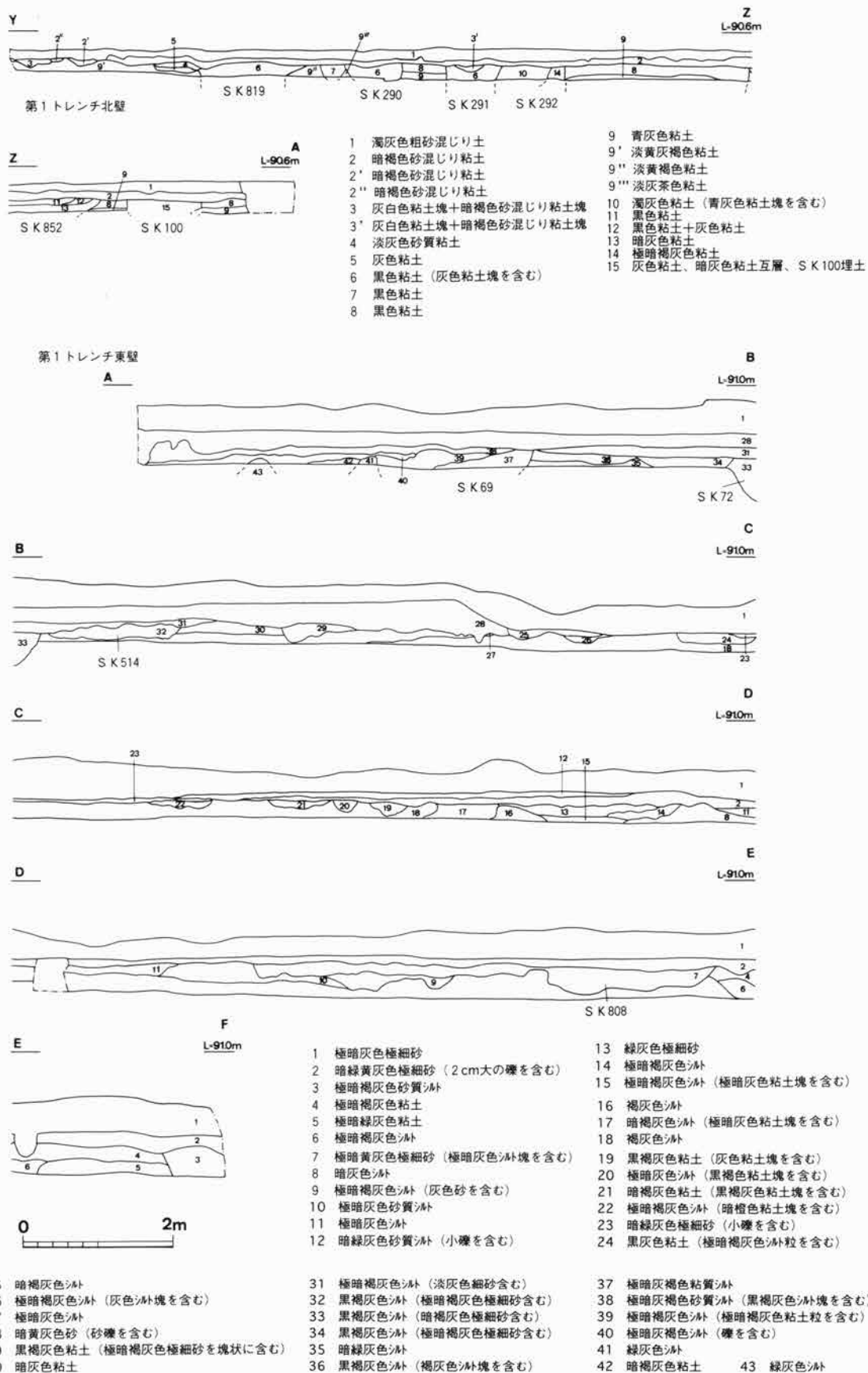
2. 調査の概要

調査は、京都府教育委員会が試掘調査によって遺物包含層を確認した北寄りの地点に、第1トレンチ約1,940㎡を設定し、石組み遺構と遺物を包含する層が確認された南寄りの地点に、第2トレンチ約200㎡を設定し、実施した。

(1)第1トレンチ



第102図 トレンチ配置図



第103図 第1トレンチ土層断面図(1)

1) 基本層序

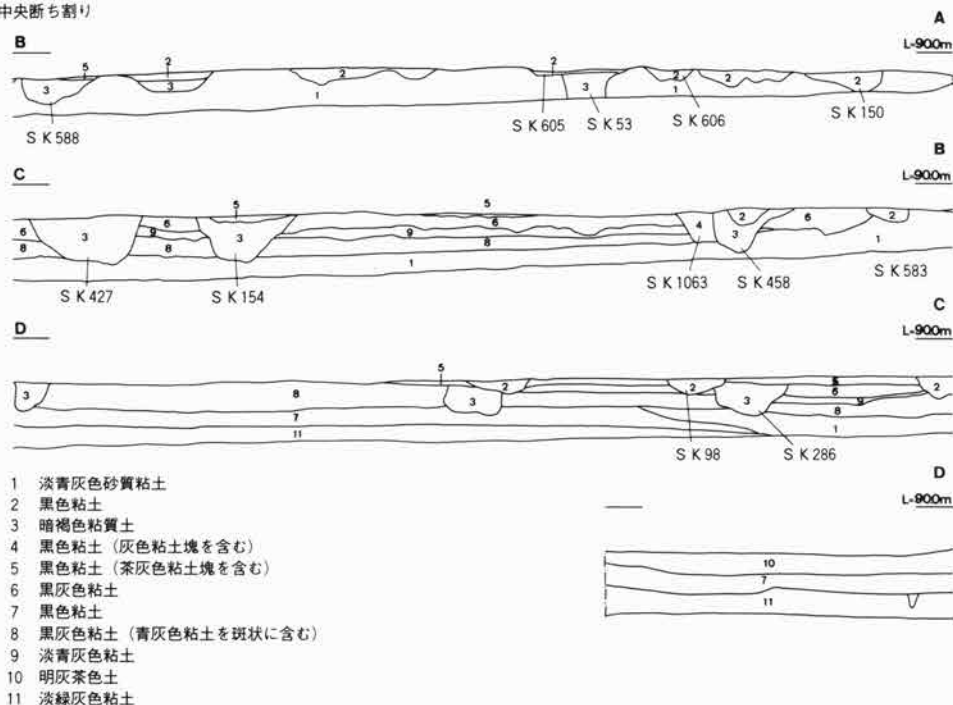
第1トレンチの基本層序は、極暗灰色極細砂～暗灰色粘質シルトの表土が30～40cmの厚さで堆積し、その下層に黄灰色シルト～砂が5～40cm堆積し、この下層に丹波黒ボク層の再堆積層と見られる黒灰色～極暗灰色のシルト～粘土層と水性堆積の青灰色～緑灰色のシルト～粘土層が互層を成して堆積している。遺構はこの互層の上面から切り込まれており、黒灰色～極暗灰色のシルト～粘土層は厚いところでは50cmにも及ぶ。

2) 検出遺構

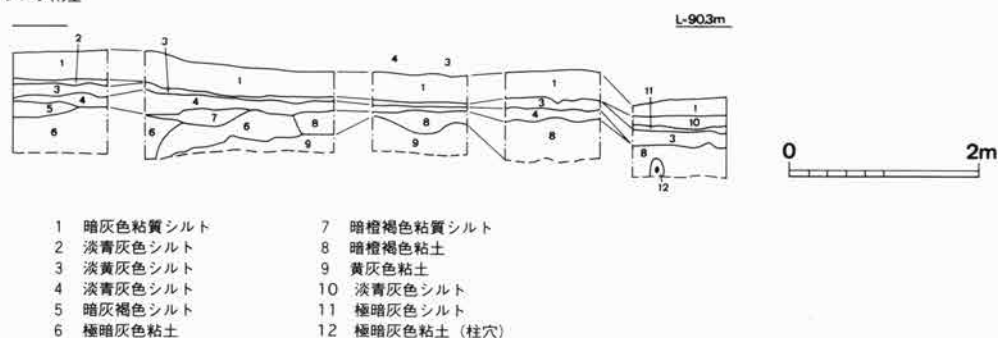
第1トレンチで検出した遺構は、楕円形や隅丸方形をした土坑や溝が大半である。中でも土坑が多く、総数1,000基以上を確認している。これらの土坑内からは、弥生時代後期から終末にかけての完形の壺や甕、木製の農耕具などが出土している。

S K 08(第106図) 隅丸長方形を呈する土坑で、規模は長軸118cm、短軸91cm、深さ9cmを測る。埋土は黄灰色シルト塊を含む灰色粘土の単層、埋土から板状木製品と弥生土器甕の下半部(第113

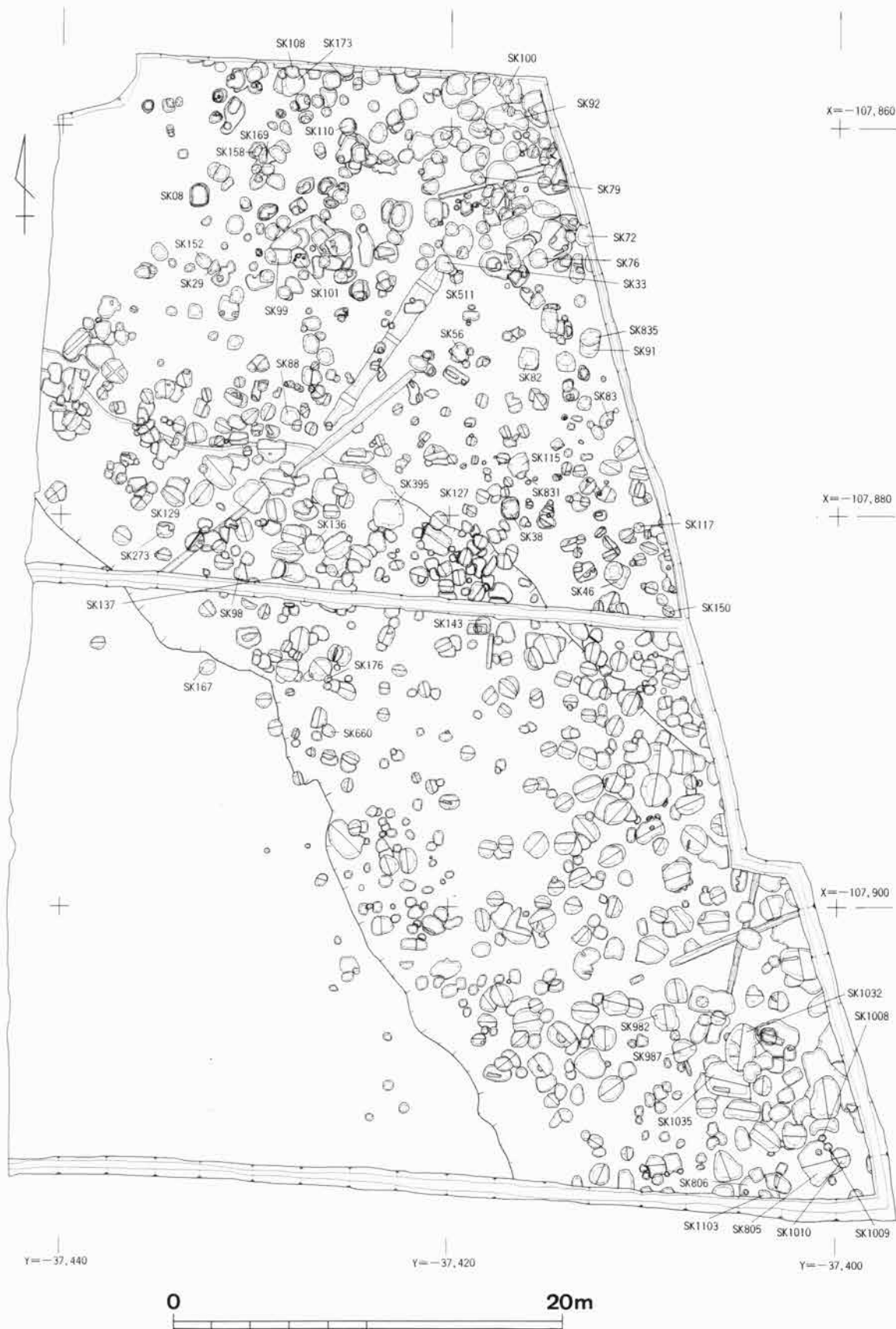
第1トレンチ中央断ち割り



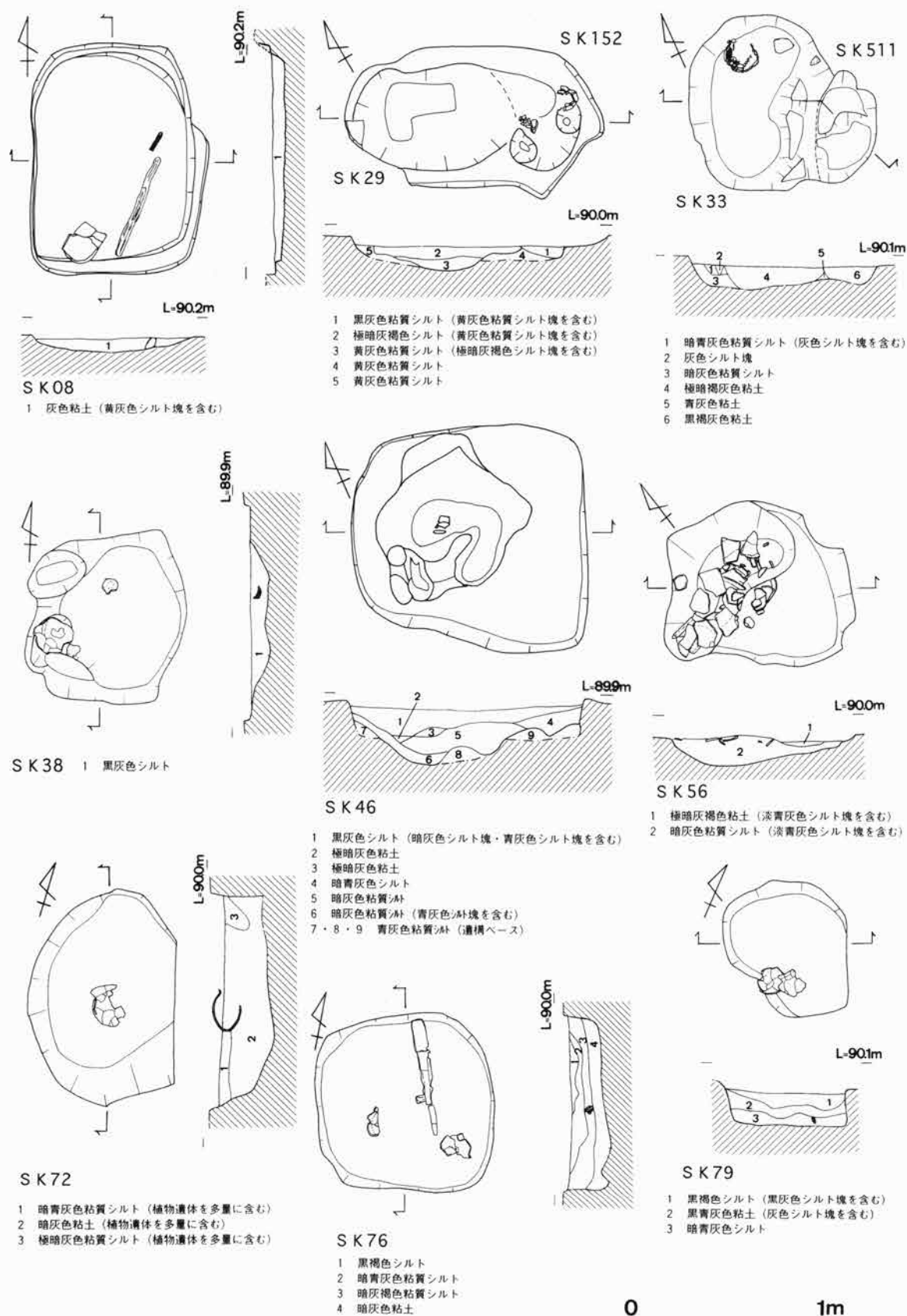
第1トレンチ南壁



第104図 第1トレンチ土層断面図(2)



第105図 第1トレンチ遺構配置図



第106図 第1トレンチ各遺構平・断面図(1)

図1)が出土した。

S K 29(第106図) S K 152に切られる不整形な土坑で、規模は短軸で60cm、深さ5cmを測る。埋土は黄灰色粘質シルト塊を含む黒灰色粘質シルトの単層で、埋土には弥生土器片を含む。

S K 33(第106図) S K 511に切られる不整楕円形の土坑で、規模は長軸100cm、深さ12cmを測る。埋土は上層から極暗褐色粘土層、灰色粘質シルト塊を含む暗青灰色粘質シルト層、暗灰色粘質シルト層で、極暗褐色粘土層が他の2層を切っているの、掘り返しが行われている可能性が高い。床面から弥生土器が出土した。

S K 38(第106図) 不整形な隅丸方形を呈する土坑で、規模は長軸86cm、短軸80cm、深さ9cmを測る。埋土は黒灰色シルトの単層で埋土および床面から弥生土器片が出土した。

S K 46(第106図) 隅丸台形を呈する土坑で、規模は長軸122cm、短軸117cm、深さ30cmを測る。土坑は中央部が掘鉢状に深くなっており、床面の凹凸が激しい。埋土上層に弥生土器片を含む。

S K 56(第106図) S K 523・524に切られる隅丸長方形を呈する土坑で、規模は長軸92cm、短軸82cm、深さ15cmを測る。埋土は上層に薄く淡青灰色シルト塊を含む極暗灰褐色粘土層があるほかは、大部分が淡青灰色シルト塊を含む暗灰色粘質シルト層である。埋土上層から口縁部3個体分、底部4個体分の破碎された弥生土器甕(第113図2～7)が出土した。

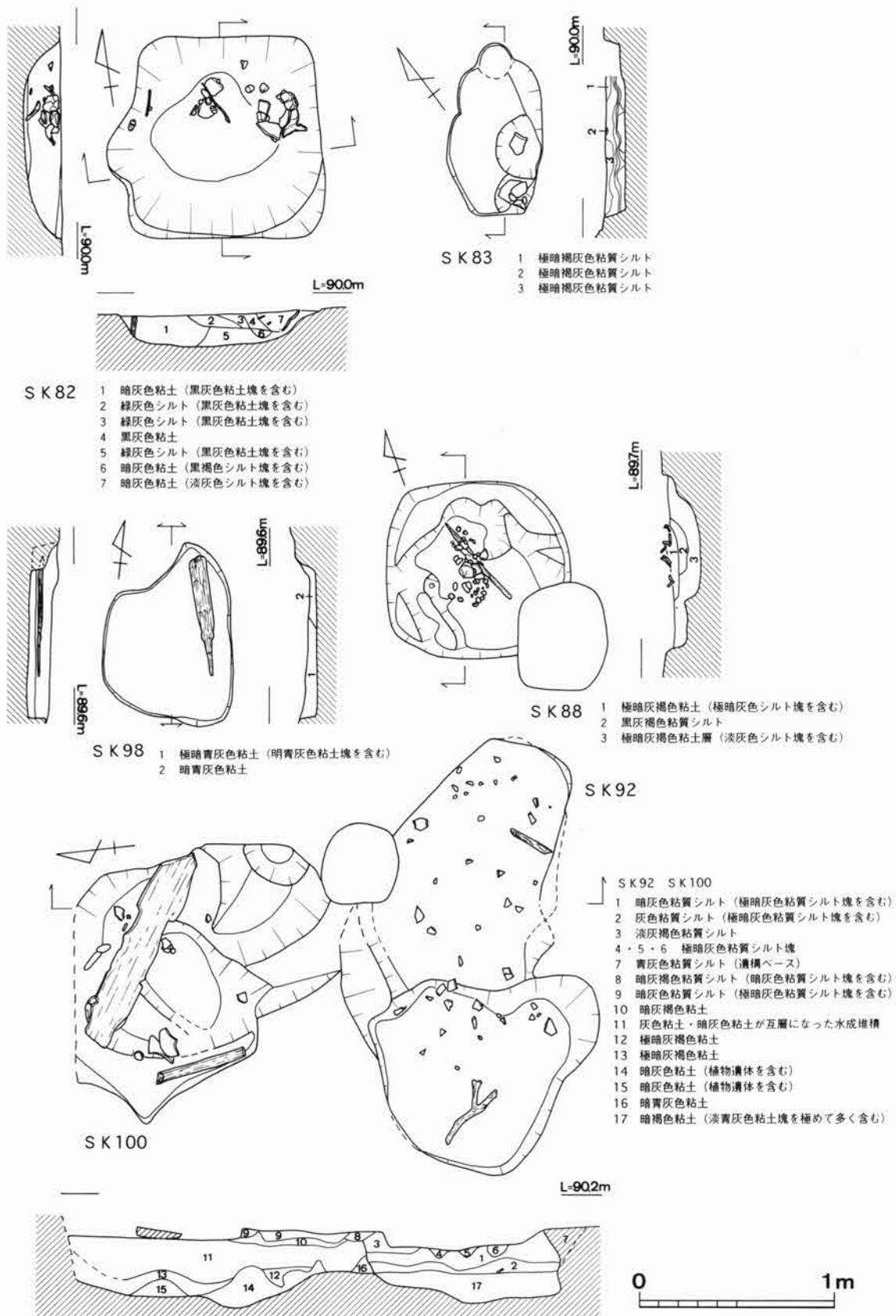
S K 72(第106図) 楕円形を呈する土坑で、規模は長軸112cm、深さ34cmを測る。埋土は上層が暗青灰色粘質シルト、下層が暗灰色粘土の2層で、2層とも植物遺体を多量に含んでおり、その堆積状況から、一定時間土坑が開口した状況におかれ、自然に堆積したものと考えられる。埋土上層から完形率の高い弥生土器甕が出土した。

S K 76(第106図) 隅丸方形を呈する土坑で、規模は長軸92cm、短軸91cm、深さ25cmを測る。埋土は上層から黒褐色シルト層、暗青灰色粘質シルト層、暗灰褐色粘質シルト層、暗灰色粘土層の4層からなり、埋土中から木製茄子形鋤・鋤先と弥生土器片が出土した。

S K 79(第106図) 隅丸鍵形を呈する土坑で、規模は南北70cm、東西64cm、深さ23cmを測る。埋土は上層から黒灰色シルト塊を含む黒褐色シルト層、灰色シルト塊を含む黒青灰色粘土層、暗青灰色シルト層の3層からなり、埋土上層に破碎された丹後・但馬系の弥生土器甕(第113図11)が出土した。

S K 82(第107図) 隅丸台形を呈する土坑で、規模は長軸120cm、短軸102cm、深さ15cmを測る。埋土は主に暗灰色粘土と緑灰色シルトからなり、ともに黒灰色粘土塊などを含む。埋土の堆積状況から、上層に再掘削された痕跡が見られ、弥生土器片がこの再掘削層(2～4・6・7層)から出土した。

S K 83(第107図) S K 534に切られる隅丸長方形を呈する土坑で、規模は長軸79cm、短軸49cm、深さ14cmを測る。埋土は上層が極暗褐色灰色粘質シルト層、中層が暗灰色シルト質粘土層、下層が暗青灰色シルト質粘土層などからなっている。床面から遺構検出面まで土器片が横断しており、人為的に埋め戻した際に混じるベース面の土塊などがなく、各層位が水平堆積していることからこの土坑は一定時間埋められずに、開口した状況におかれ、自然に堆積したものと考えられる。



第107図 第1トレンチ各遺構平・断面図(2)

S K 88(第107図) S K 378に切られる隅丸方形を呈する土坑で、規模は南北90cm、東西94cm、深さ20cmを測る。埋土は上層から極暗灰色シルト塊を含む極暗灰褐色粘土層、黒灰褐色粘質シルト層、淡灰色シルト塊を含む極暗灰褐色粘土層の3層からなる。埋土上層に細片化した弥生土器片(第113図13～15)が出土し、床面から木の枝が1点出土した。

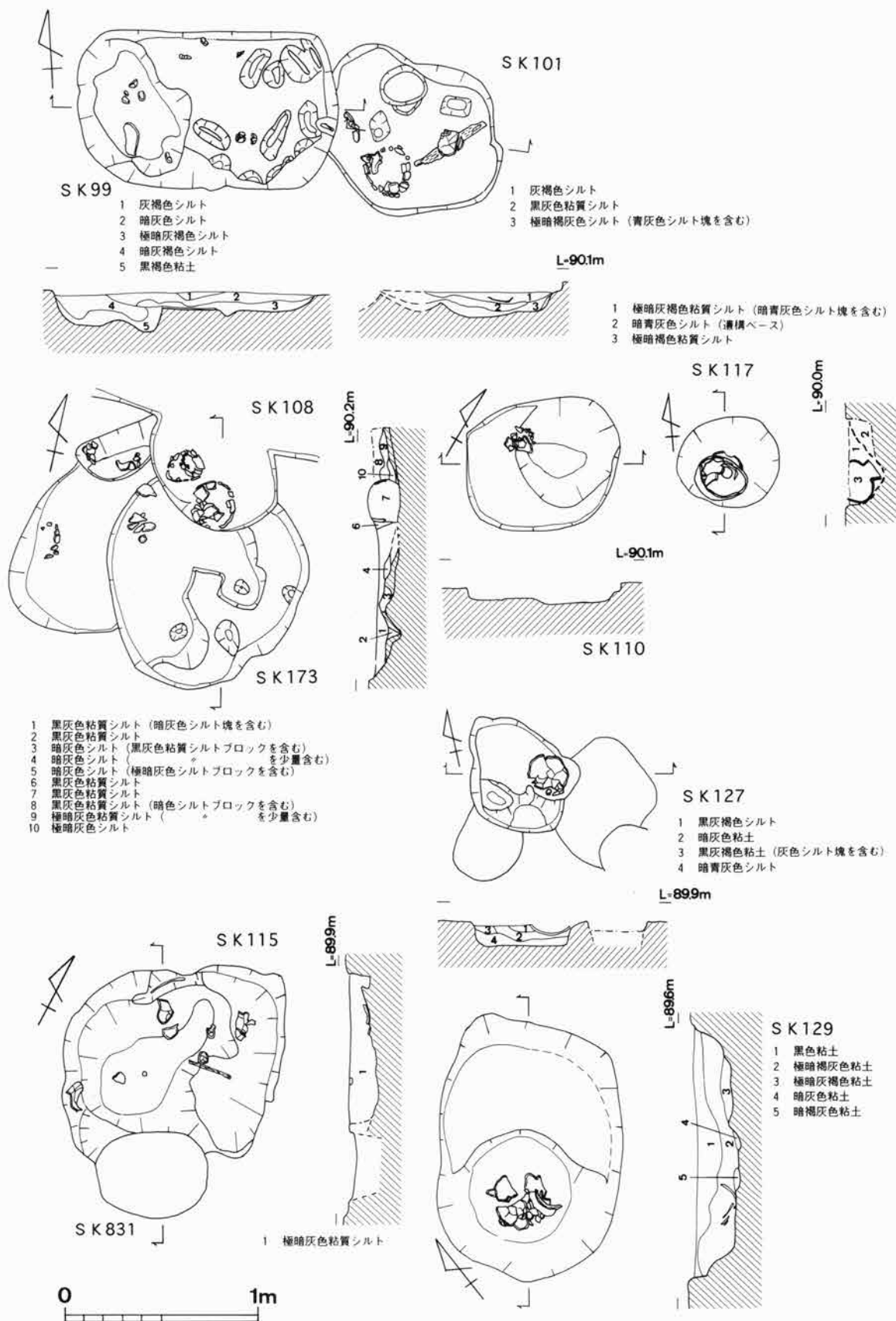
S K 92(第107図) 検出した時点では不整形な東西に長い土坑と思われたが、掘削を進めるにつれて東西2つの土坑であることが判明した。土器の出土状況が東から西へ向かってひとつの面をなして広がることから東側の土坑が後から掘削されたものと判断した。したがって、先行する西側の土坑をS K 92-A、東側をS K 92-Bとする。Aは隅丸三角形を呈する土坑で、規模は南北119cm、東西99cm、深さ41cmを測る。埋土は暗褐色粘土を主とする。底面に木の枝が突き刺さっていた。Bは不整形な長楕円形を呈する土坑で、規模は南北94cm、東西165cm、深さ39cmを測る。南側の壁は袋状に挟れている。埋土は上層から淡灰褐色粘質シルト層、極暗灰色粘質シルト塊を含む暗灰色粘質シルト層、極暗灰色粘質シルト塊を含む灰色粘質シルト層、淡青灰色粘土塊をきわめて多く含む暗褐色粘土層からなり、最上層と最下層を除く2層に弥生土器片が含まれていた。

S K 98(第107図) 不整形な鍵形を呈する土坑で、規模は南北93cm、東西67cm、深さ11.5cmを測る。埋土は明青灰色粘土塊を含む極暗青灰色粘土層と暗青灰色粘土層からなり、床面から2～4cmほど浮いて木製茄子形鋤・鍬先が出土した。

S K 99(第108図) 検出当初隅丸長方形に見えた土坑は土層断面観察の結果、不整形な土坑を隅丸長方形の土坑が切っていることが判明し、切られている方をS K 99-A、切っている方をS K 99-Bとする。S K 99-Aの規模は長軸80cm、短軸60cm、深さ21cmを測る。S K 99-Bの規模は長軸100cm、短軸82cm、深さ10cmを測り、A、Bともに床面に鋤の先が当たってできたと見られる長楕円形のくぼみが多数見られた。Aの埋土は上層が暗灰褐色シルト層、下層が黒褐色粘土層、Bの埋土は上層が灰褐色シルト層、中層が暗灰色シルト層、下層が極暗灰褐色シルト層からなる。埋土から弥生土器片が出土したが、そのすべてがBの中層から出土した。

S K 100(第107図) S K 92・469に切られる。この土坑は非常に不整形に掘り込まれた土坑で、規模は東西129cm、深さ42cmを測る。埋土は上層から極暗灰色粘質シルト塊を含む暗灰色シルト層、暗灰褐色粘土層、灰色粘土・暗灰色粘土が互層になった水成堆積層、極暗灰褐色粘土層、植物遺体を含む暗灰色粘土層からなる。上層の2層を除くと土坑のほとんどが水成堆積で埋まっており、上層の極暗灰色粘質シルト塊を含む層はS K 92などを掘削した際に出た排土が混入していると考えられる。灰色粘土・暗灰色粘土の互層の上面で木製品の未製品と、板状木製品を検出し、木製品の未製品の直下に弥生土器甕の完形品(第13図18)が上から押しつぶされた状態で出土した。

S K 101(第108図) S K 99に切られる隅丸五角形を呈する土坑で、規模は東西92cm以上、南北79cm、深さ18cmを測る。床面には凹凸が見られる。埋土は上層から灰褐色シルト層、黒灰色粘質シルト層、青灰色シルト塊を含む極暗褐色灰色シルト層からなる。土坑内からはほぼ床面に接して在地の弥生土器甕(第114図19)、上層から生駒山西麓産と見られる弥生土器甕(20・21)が出土した。



第108図 第1トレンチ各遺構平・断面図(3)

S K 108(第108図) S K 173～175を切る楕円形を呈する土坑で、長軸74cm、深さ17cmを測る。埋土は上層から暗灰色シルト塊を含む黒灰色粘質シルト層、暗灰色シルト塊を含む極暗灰色粘質シルト層、極暗灰色シルト層からなる。遺構底面に接して弥生土器壺(第114図23)、甕(22)各1点が出土した。

S K 110(第108図) 隅丸長方形を呈する土坑で、規模は長軸80cm、短軸67cm、深さ11cmを測る。埋土は灰色シルト塊を含む黒灰色シルトの単層である。遺構底からやや浮いた状態で弥生土器片が出土した。

S K 115(第108図) S K 831に切られる隅丸長方形を呈する土坑で、規模は長軸113cm、短軸100cm、深さ17cmを測る。埋土は極暗灰色粘質シルトの単層で、遺構底を中心に弥生土器片(第114図26)が出土した。

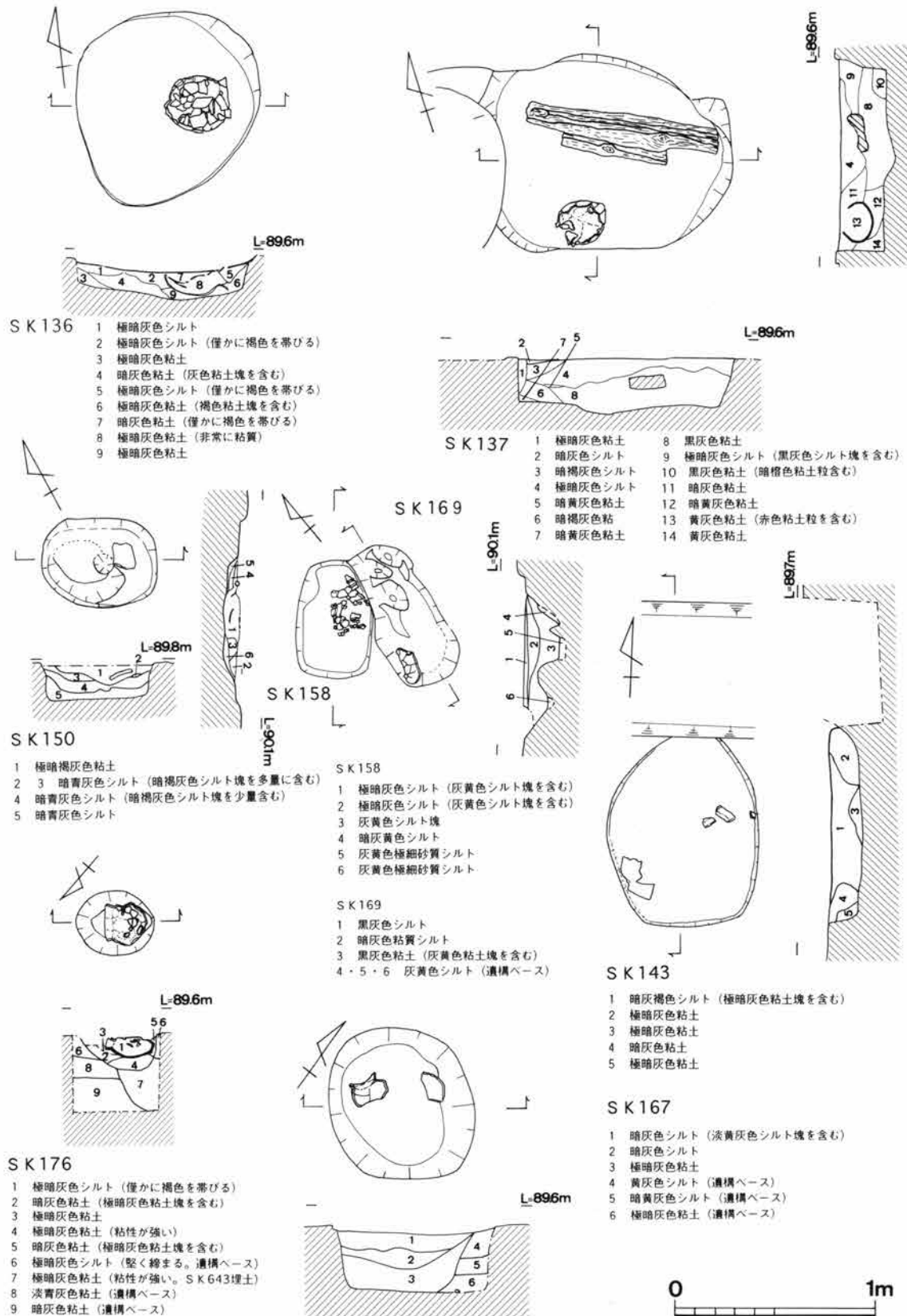
S K 117(第108図) 楕円形の土坑で、規模は長軸52cm、短軸46cm、深さ20cmを測る。埋土は暗青灰色シルト塊を含む極暗灰褐色粘質シルトの単層である。この底面に完形の弥生土器の広口壺(第114図27)が倒立斜位に据えられていた。口縁部を境に土色が異なるため、何らかの有機質の板で蓋がされていた可能性がある。以上の検出状況からこの土坑は土器棺墓である可能性が高い。

S K 127(第108図) S K 576・577を切る不整形な土坑で、規模は南北59cm、東西57cm、深さ12cmを測る。埋土は上層から黒灰褐色シルト層、暗灰色粘土層、灰色シルト塊を含む黒灰褐色粘土層、暗青灰色シルト層からなる。遺構底面には凹凸があり、底面から5cmほど浮いて弥生土器片が出土した。

S K 129(第108図) 隅丸方形を呈する土坑で、規模は長軸136cm、短軸94cm、深さ26cmを測る。この土坑は北東側にテラス面があり、南西側が円形に1段深くなっている。この深くなった側の底面に接して弥生土器甕(第114図28)が破碎された状態で出土した。この甕は接合すると、半完形になることが判明した。埋土は上層が黒色粘土層、下層が極暗褐色灰色粘土層である。

S K 136(第109図) 不正円形を呈する土坑で、規模は直径98cm、深さ22cmを測る。埋土は上層から極暗灰色シルト層、極暗灰色粘土層、暗灰色粘土層、極暗灰色粘土層からなる。遺構底部に接して完形の弥生土器甕(第115図32)が横位で出土した。埋土の観察から、土器は遺構を掘り直して据えている可能性が高く、甕の内部と土坑埋土とは異なる土質であるため、有機質の蓋がされていた可能性が高い。また、検出した時点では土器が完全な形で残っていたが、土器内部に空間が残っていたため重機の振動によって土器が内部に落下してしまった。こうした出土状況からS K 136の甕は土器棺である可能性がある。

S K 137(第110図) S K 425・426に切られ、S K 427を切る隅丸長方形を呈する土坑である。規模は長軸128cm、短軸98cm、深さ28cmを測る。埋土は上層が極暗灰色シルト層、下層が黒灰色粘土層で構成され、下層の上面に加工痕のある板材と完形の弥生土器甕(第115図33)が出土した。甕は横位で、検出した時点では完形を保っていたが中に空間が残っていたため、重機の振動で上部の破片が土器内に落下した。調査中の手違いで詳しい観察はできなかったが、横倒しで完全に埋没した土器の内側に空間が半分以上残っていたことから、周囲の埋土が安定するまでは有機質



第109図 第1トレンチ各遺構平・断面図(4)

の蓋が残っていたと考えることもできるため、この土器についても土器棺の可能性が指摘できる。

S K 143(第109図) 楕円形を呈する土坑で、規模は長軸100cm、短軸76cm、深さ17cmを測る。埋土は上層から極暗褐色粘土塊を含む暗褐色シルト層、極暗褐色粘土層からなる。遺構底に接して植物で編まれた編み籠(図版第91-(1)・(2))と土器片が出土した。

S K 150(第109図) 楕円形を呈する土坑で、規模は長軸57cm、短軸23cm、深さ19cmを測る。埋土は上層から極暗褐色粘土層、暗褐色シルト塊を含む暗青灰色シルト層、暗青灰色シルト層からなる。上層から弥生土器片(第115図35)が出土した。

S K 158(第109図) S K 169を切る隅丸長方形を呈する土坑で、規模は長軸59cm、短軸35cm、深さ9cmを測る。埋土は主として極暗褐色シルトで、灰黄色シルト塊を含む。遺構底からやや浮いた状態で、弥生土器甕1個体分の土器片が出土した。

S K 167(第109図) 隅丸方形を呈する土坑で、規模は長軸75cm、短軸73cm、深さ33cmを測る。埋土は上層から淡黄灰色シルト塊を含む暗褐色シルト層、暗褐色シルト層、極暗褐色粘土層の3層からなる。上層から弥生土器片、口縁部片が遺構底に接して出土した。遺構掘削時に遺構の東側の壁を大きく掘り過ぎてしまったが、この結果土坑が黄灰色シルト、暗黄灰色シルトの2層を掘り抜いて極暗褐色粘土層に到達していることが観察できた。

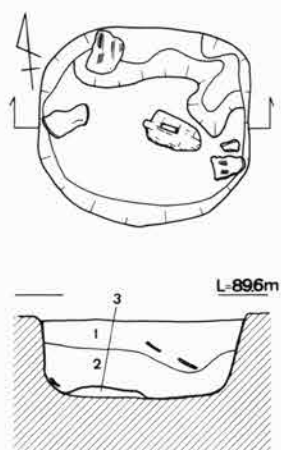
S K 169(第109図) S K 158に切られる隅丸長方形を呈する土坑で、規模は長軸78cm、短軸35cm、深さ21cmを測る。埋土は上層から黒灰色シルト層、暗褐色粘質シルト層、灰黄色粘土塊を含む黒灰色粘土層からなる。遺構底から9cmほど浮いた状態で弥生土器片が出土した。

S K 176(第109図) S K 640・644を切る楕円形を呈する土坑で、規模は長軸39cm、短軸34cm、深さ18cmを測る。土坑底から7cmほど浮いて半完形の弥生土器甕が横位で出土した。重機掘削および遺構検出の際に上半部を削り飛ばしてしまったようで、土器の半分は失われているが、埋設した時点で最上端であった部分は土器の中に落下した状態で出土した。埋土は土器の周囲が暗褐色粘土、土器の下部が極暗褐色粘土である。こうした出土状況、土器の状況からこの土坑は土器棺墓であると判断した。

S K 273(第110図) 隅丸方形を呈する土坑で、規模は長軸85cm、短軸80cm、深さ33cmを測る。埋土は上層が黒灰色粘質シルト層、下層が極暗褐色粘土層の2層からなる。北側の遺構底が1段下がり、この部分の遺構壁は大きく抉れている。弥生土器甕の胴部片が下層の下部から、木製鋤先を鋤先に転用したものが上層の下面付近から出土した。

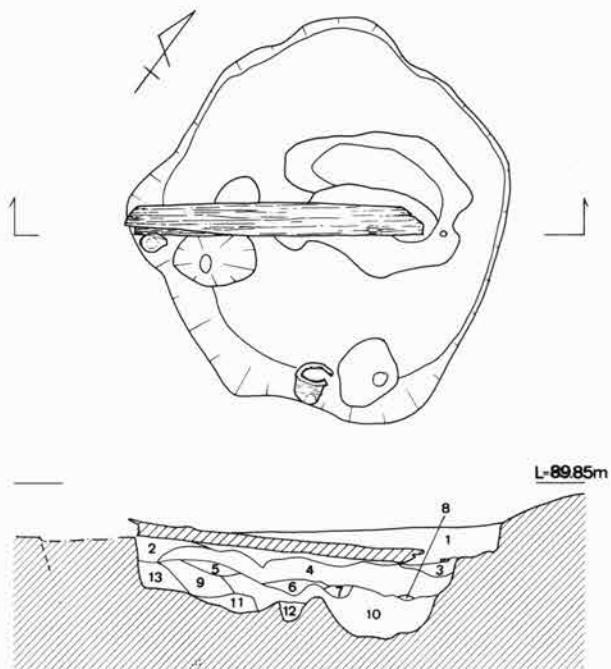
S K 395(第110図) S K 442～444を切る不整六角形を呈する土坑で、規模は長軸160cm、短軸153cm、深さ46cmを測る。埋土は主に上層から暗褐色シルト質粘土層、灰褐色シルト質粘土層、暗褐色粘質シルト層からなる。土坑中央の上層中から大型の板状木製品が出土した。また南東隅上層中から半完形の弥生土器甕が出土した。

S K 660(第110図) 不整楕円形を呈する土坑で、規模は東西70cmを測る。遺構底は西側が1段深くなっており、深さ29cmを測る。浅い側は深さ20cmを測る。埋土は上層から褐色シルト層、暗褐色シルト層、極暗褐色粘土層、暗緑褐色粘土層からなる。弥生土器甕が上層から倒立位で



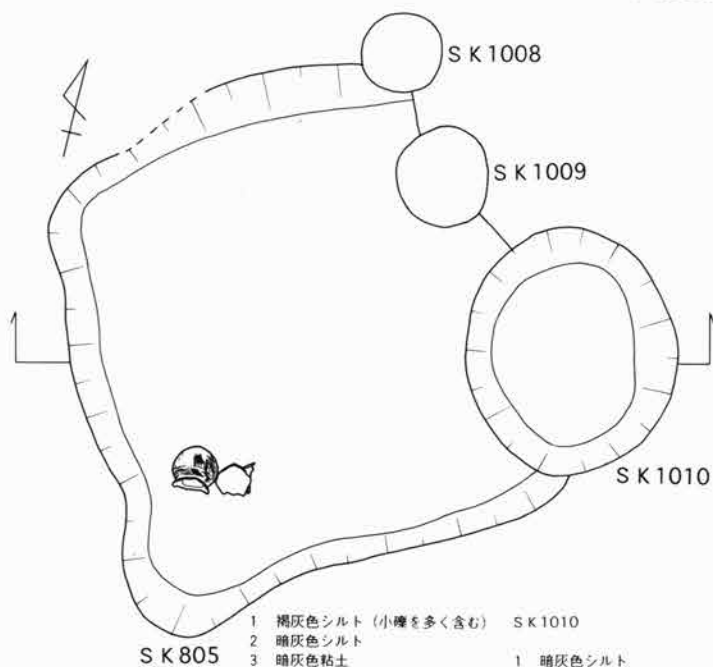
S K 273

- 1 黒灰色粘質シルト
- 2 極暗灰色粘土
- 3 暗灰色粘土 (遺構ベース)



S K 395

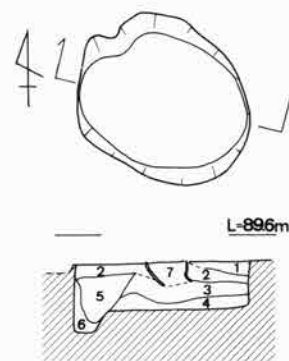
- | | |
|--------------|----------------|
| 1 暗灰色シルト質粘土 | 8 青灰色シルト塊 |
| 2 極暗灰褐色粘質シルト | 9 暗灰褐色シルト質粘土 |
| 3 暗灰褐色粘質シルト | 10 暗灰色粘質シルト |
| 4 灰褐色シルト質粘土 | 11 灰色シルト |
| 5 極暗灰色シルト質粘土 | 12 極暗灰褐色シルト質粘土 |
| 6 灰褐色シルト質粘土 | 13 暗灰色粘土 |
| 7 灰色粘質シルト | |



S K 805

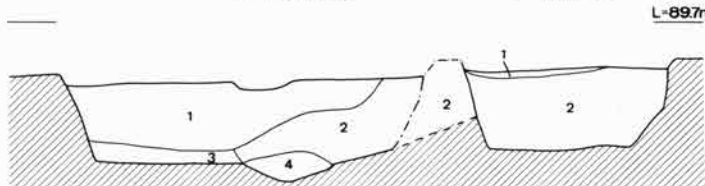
- 1 褐灰色シルト (小礫を多く含む)
- 2 暗灰色シルト
- 3 暗灰色粘土
- 4 褐灰色シルト

- 1 暗灰色シルト
- 2 極暗灰色粘土



S K 660

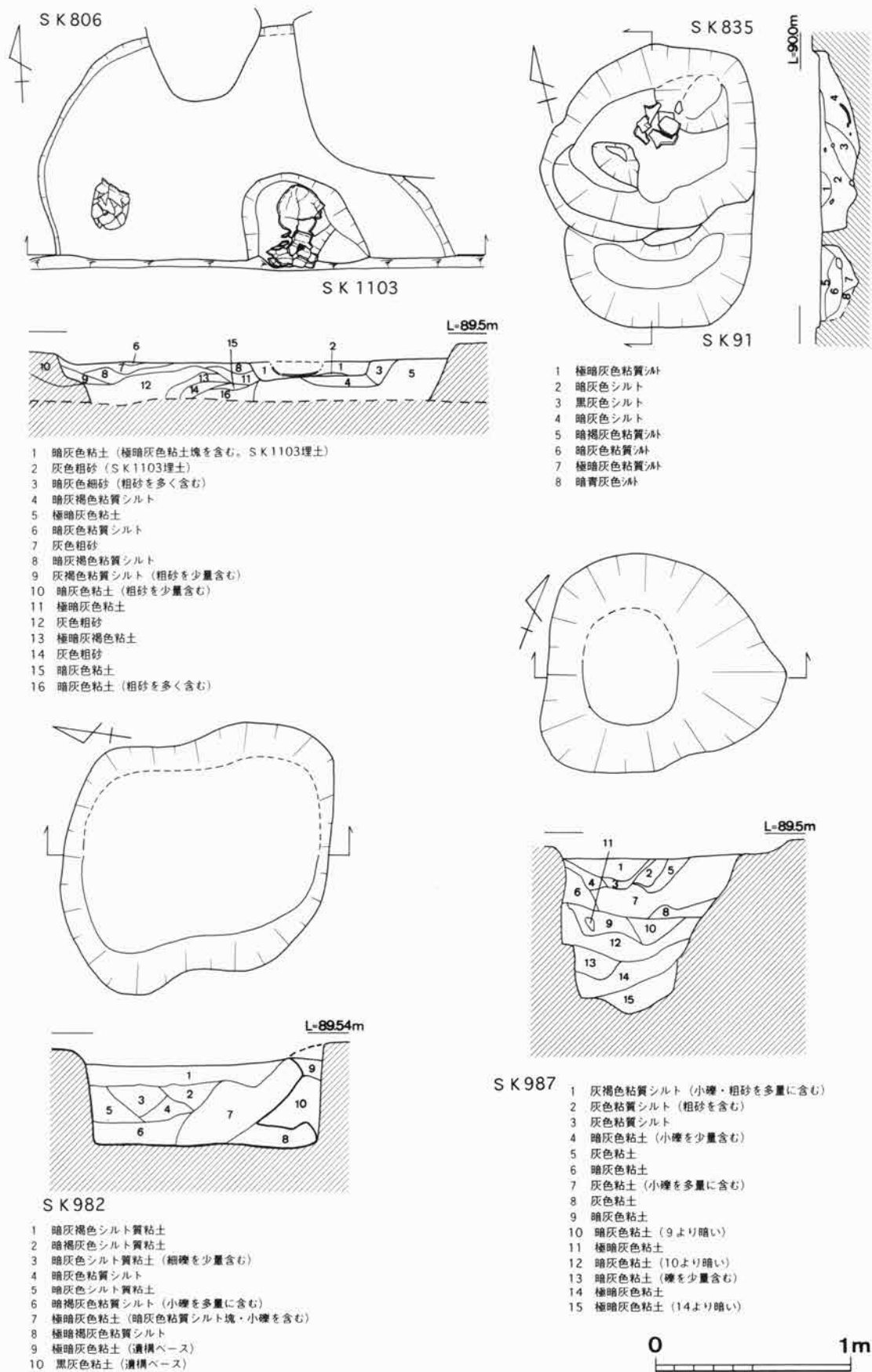
- 1 褐灰色シルト
- 2 暗褐灰色シルト
- 3 極暗灰色粘土
- 4 暗緑灰色粘土
- 5 極暗灰色粘土
- 6 暗灰色粘土
- 7 極暗褐灰色粘土



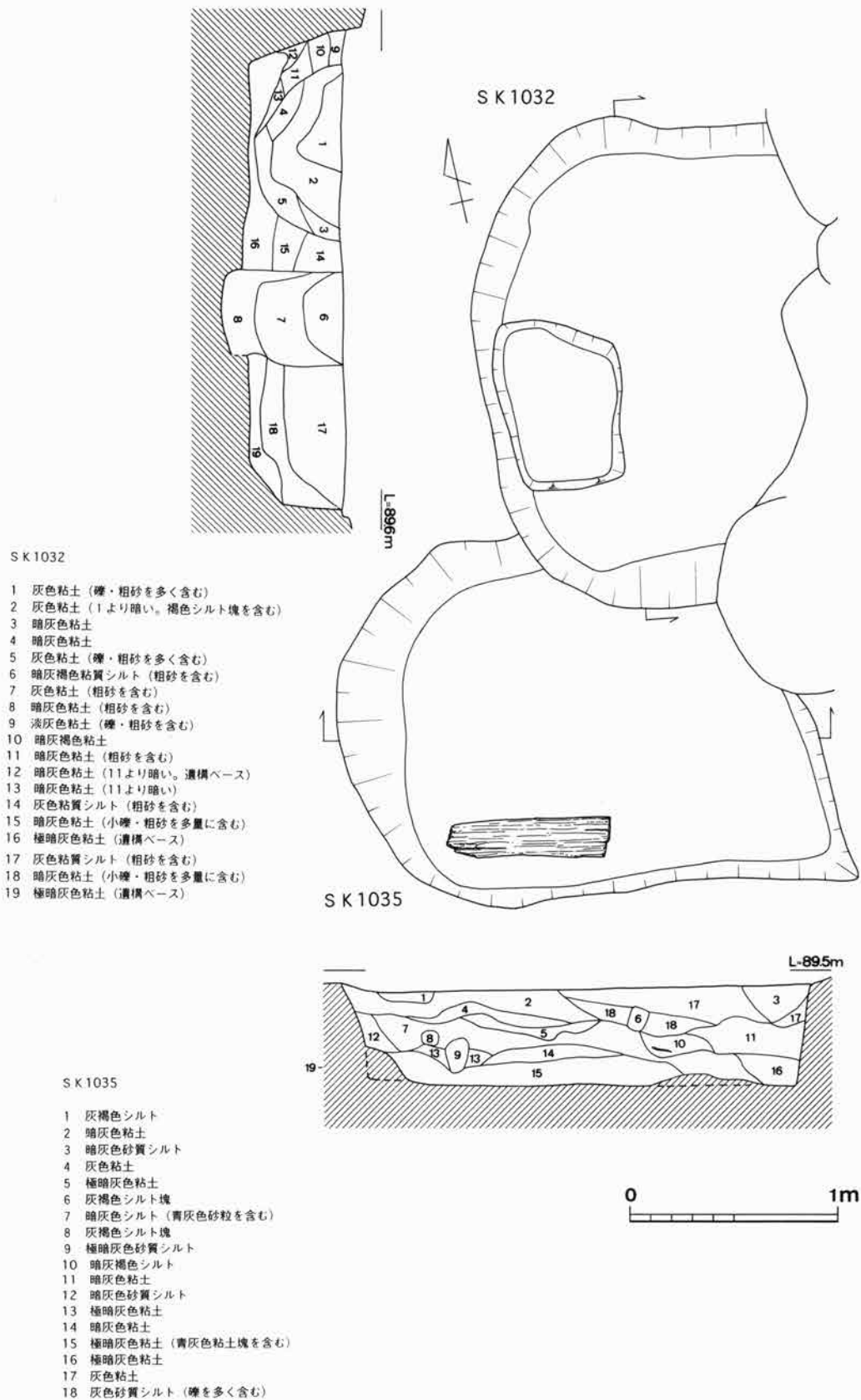
L-897m



第110図 第1トレンチ各遺構平・断面図(5)



第111図 第1トレンチ各遺構平・断面図(6)



第112図 第1トレンチ各遺構平・断面図(7)

出土した。埋土、遺構底の観察から下位2層が堆積した後、西側を再掘削した後埋め戻し、甕を遺棄したものと考えられる。

S K 805(第110図) S K 1007～1010に切られる隅丸方形を呈する土坑で、規模は長軸200cm、短軸180cm、深さ49cmを測る。埋土は上層が小礫を多く含む褐灰色シルト層、下層が暗灰色シルト～粘土層で、埋土から弥生土器が出土した。また南半部を掘削中、検出面から20cmほど掘り下げたところで完形の生駒山西麓産と大和産と見られる布留甕(第116図57・58)を検出した。この時点で再度精密に土器周辺の精査をしたところ、土器の周辺に土色の変化が見られたため、布留甕はS K 805がほぼ埋没した後に再掘削されて土器を埋設したと判断した。このため先行して掘削された土坑をS K 805-A、布留甕を埋設した土坑をS K 805-Bとすることとした。S K 805-Bは直径35cmほどの不整円形を呈する土坑である。

S K 806・1103(第111図) S K 1013・1014に切られる土坑で、南側半分は調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。規模は最大長200cmを測り、遺構埋土は完掘に至らなかったため、深さは不明である。遺構上層から横位の状態で弥生土器甕の完形品(第117図59)が出土した。また遺構検出中にS K 806内部に土坑を検出し、これをS K 1103とした。S K 1103も南半分が調査区外に延びる。埋土は極暗灰色粘土塊を含む暗灰色粘土の単層で、規模は東西63cm、深さ7cmを測る。遺構底から弥生土器の壺と甕(第117図67・68)が合せ口の状態で出土した。こうした状況からS K 1103は土器棺墓であることが判明した。

S K 835(第111図) S K 91を切る不整楕円形を呈する土坑で、規模は長軸80cm、短軸64cm、深さ24cmを測る。埋土は上層から暗灰色シルト層、黒灰色シルト層、暗灰色シルト層の3層からなり、下層から弥生土器片がまとまって出土した。

S K 982(第111図) 隅丸長方形を呈する土坑で、規模は南北129cm、深さ53cmを測る。埋土は上層から暗灰褐色シルト質粘土層、暗灰色シルト質粘土層、小礫を多量に含む暗褐色粘質シルト層、暗灰色粘質シルト塊・小礫を含む極暗灰色粘土層などからなる。サブトレンチの南壁で観察したところ、極暗灰色粘土層を掘り抜き、黒灰色粘土層に達している。また南壁の最下部から北へ向かって30cmも抉り取っていることが判明した。

S K 987(第111図) 不整楕円形を呈する土坑で、規模は東西95cm、深さ88cmを測る。埋土は土坑上半が小礫、粗砂を多量に含む灰色粘土を主とし、下半は暗灰色粘土を主とする。完掘した土坑の中では最も深いものの部類に属す。

S K 1032(第112図) S K 1035を切り、S K 792・793・1033・1034に切られる土坑で、土層の観察から更に2基の土坑に切られることが判明した。規模は長軸237cm、残存幅173cm、深さ51cmを測る。検出した土坑の中では後述するS K 1035と並んで最大級の土坑である。埋土は上層が灰色粘質シルト層、下層が小礫・粗砂を多量に含む暗灰色粘土層の2層からなる。サブトレンチの観察からこの土坑は暗灰色粘土層を掘り抜き、極暗灰色粘土層に達していることが判明した。

S K 1035(第112図) S K 1032・1034に切られる土坑で、規模は長軸232cm、短軸174cm、深さ51cmを測る。埋土は煩雑なため第112図に譲るが、最下層に青灰色粘土塊を含む極暗灰色粘土層

が堆積し、上層に礫を多く含む灰色砂質シルトが堆積している状況から、掘削後、ある程度西側から埋め戻したものの、東寄りの上半はくぼみとして残っており、そこへ小規模な土石流によって土砂が堆積したと考えられる。土坑の南半、埋土の中位から板状の木製品が出土した。

3) 出土遺物

① 土器

土坑群から出土した土器は、壺、甕、高杯の3種に限られ、甕の割合が最も高い。

壺形土器 壺形土器には口縁が短く外反する短頸壺(第115図44、第117図68)、口縁が直口気味に立ち上がるが、わずかに外反する直口壺(第116図54)、口縁が大きく外反する広口壺(第114図27など)の3種がある。短頸壺はS K 273とS K 1103から出土した。第117図68はS K 1103の土器棺身であるが、倒卵形の体部に外面にミガキ調整を施すほか、肩部に斜行するヘラ描き沈線紋、胴部最大径付近に大振りな鋸歯紋が描かれている。直口壺はS K 783から出土し、倒卵形の体部の外面をヘラケズリ後、ヘラミガキで調整している。広口壺はS K 117から出土している。第114図27は口縁端部を下方にわずかに拡張し、扁平な玉葱形の体部である。内外面調整は磨滅のため観察できない。なお、S K 1108からは、被籠土器(第117図70)が出土している。

甕形土器 甕形土器は複合口縁甕(第113図5・11など)、「く」字口縁甕(第113図18、第114図19・22・26・28・30、第115図32・33など)、外反口縁甕(第115図35・41など)の3種がある。複合口縁甕は口縁部外面に擬凹線紋を施して外面調整がハケメのもの(第113図11・13)、擬凹線紋を施さずに外面調整がタタキのもの(第113図5)がある。「く」字甕は体部は倒卵形で内面調整ハケメのV様式系のものと、口縁端部をわずかに内側に肥厚し、内面にヘラケズリ、外面にハケメ調整を施す布留甕とがある。V様式系の甕は基本的に分割成形技法を用い、底部輪台技法も用いる。いわゆる口縁部叩き出し技法も見られるが、数は少ない。外面は1次調整をタタキ、2次調整をハケメもしくはヘラミガキで行うが、ヘラミガキは分割成形による接合部を中心に行われる。外反口縁甕は内外面ともハケメ調整が施される。

高杯形土器 高杯形土器は小型高杯が1点のみ出土した。外反する脚裾部に3方向配置で円孔が穿たれている。

② 木器

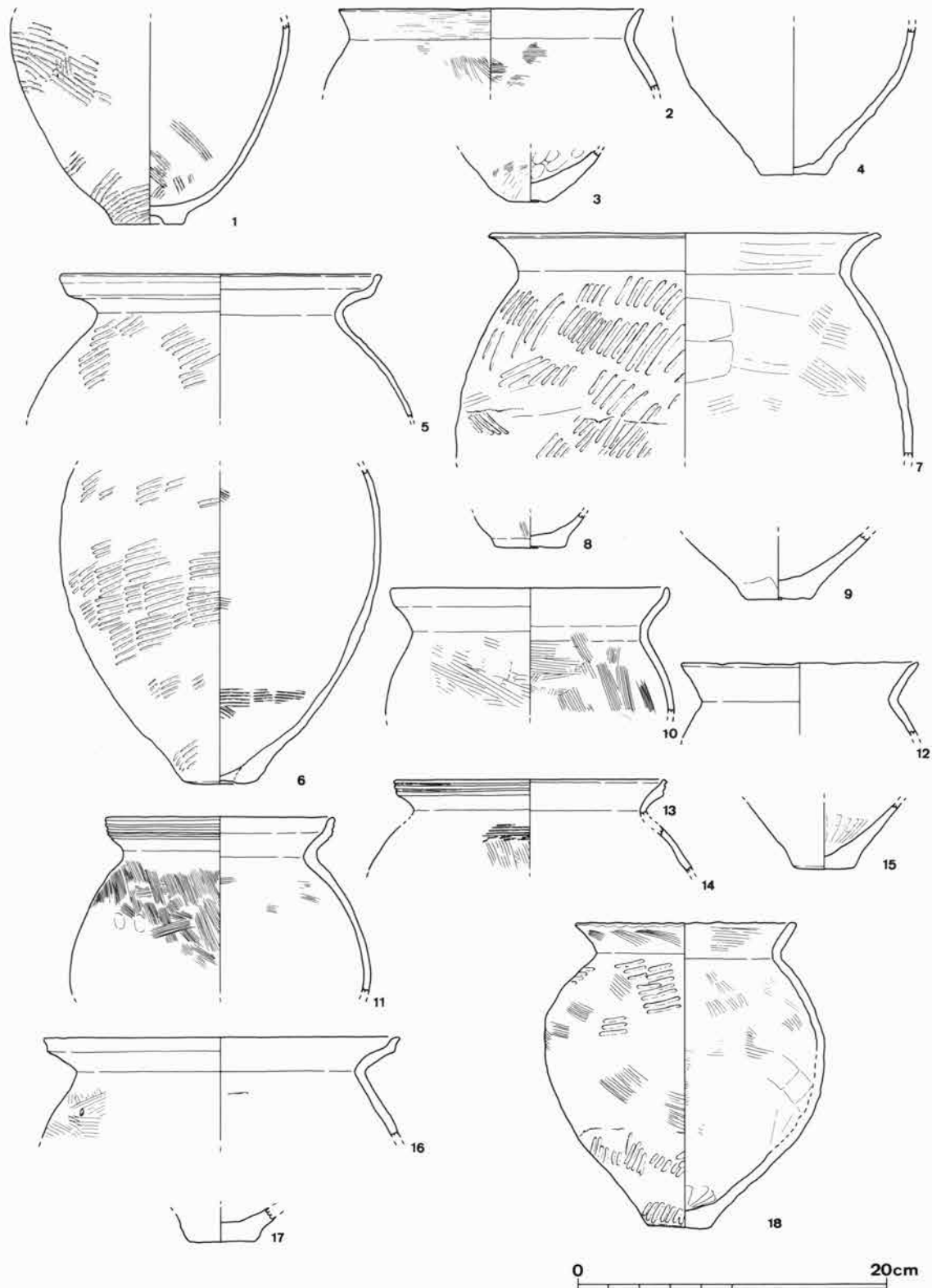
茄子形鋤・鋤先 S K 76(第118図71)とS K 98(第118図72)から出土した。71は長さ62.4cm、最大幅7.4cm、厚みは0.9cmを測る。72は長さ62.0cm、最大幅8.8cm、厚みは1.2cmを測る。両者ともほぼ同じ形態、法量を示し別作りの柄を装着するための突起を削り出している。71の先端には用途不明の穿孔がある。

鋤先 S K 273から出土した。刃部の長さ23.8cm、幅15.1cm、厚み1.0cmを測る。幅2.5cmの柄がわずかに残るが、破断している。刃部の中央に8.4×2.5cmの長方形の穴が穿たれている。

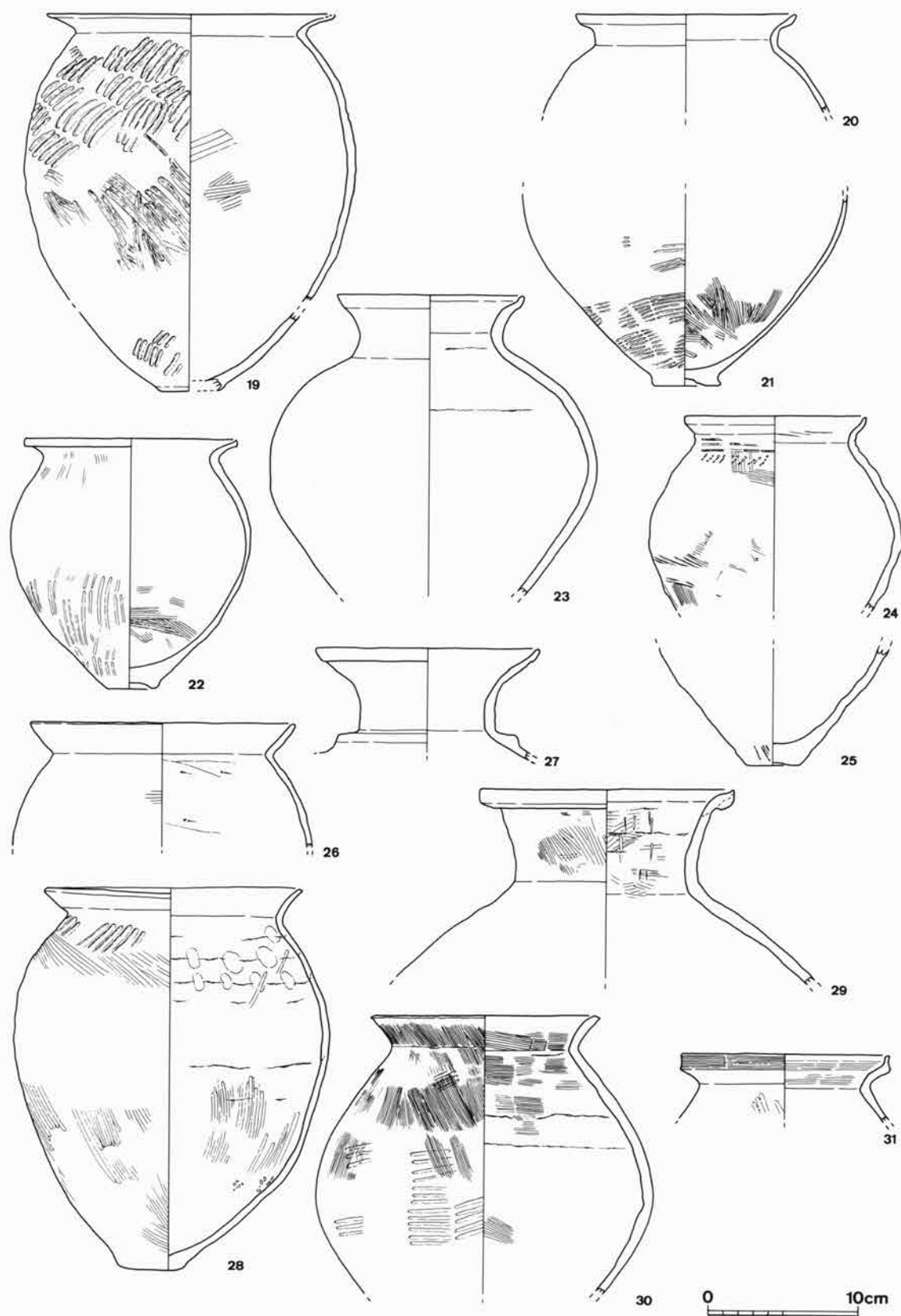
③ 第1トレンチ包含層出土の土器(第119図)

第1トレンチの北東付近を中心に古墳～平安時代の土器が出土している。その一部を記述する。1は須恵器杯身である。口径10.8cmを測る。2は須恵器蓋である。3は須恵器杯Aである。口径

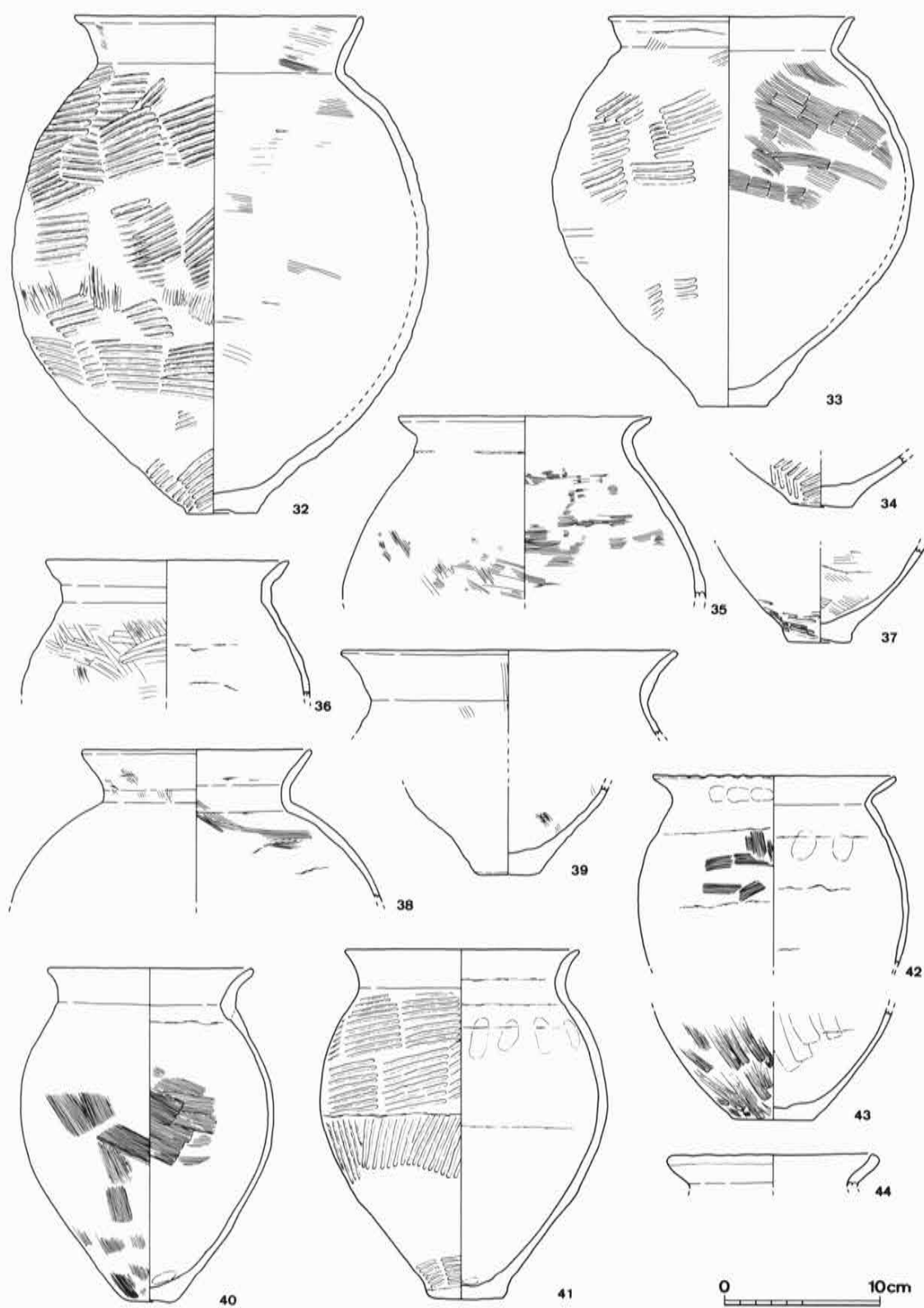
10.4cm、器高3.4cmを測る。4は須恵器杯Bである。高台径12.2cmを測る。5は提瓶の肩部である。6は緑釉皿である。低部以外に淡緑色の釉葉がかかる。底部外面に墨痕みられる。高台径6.8cmを測る。篠窯跡の製品と推定される。7は緑釉碗である。底部以外に淡黄緑色の釉葉がか



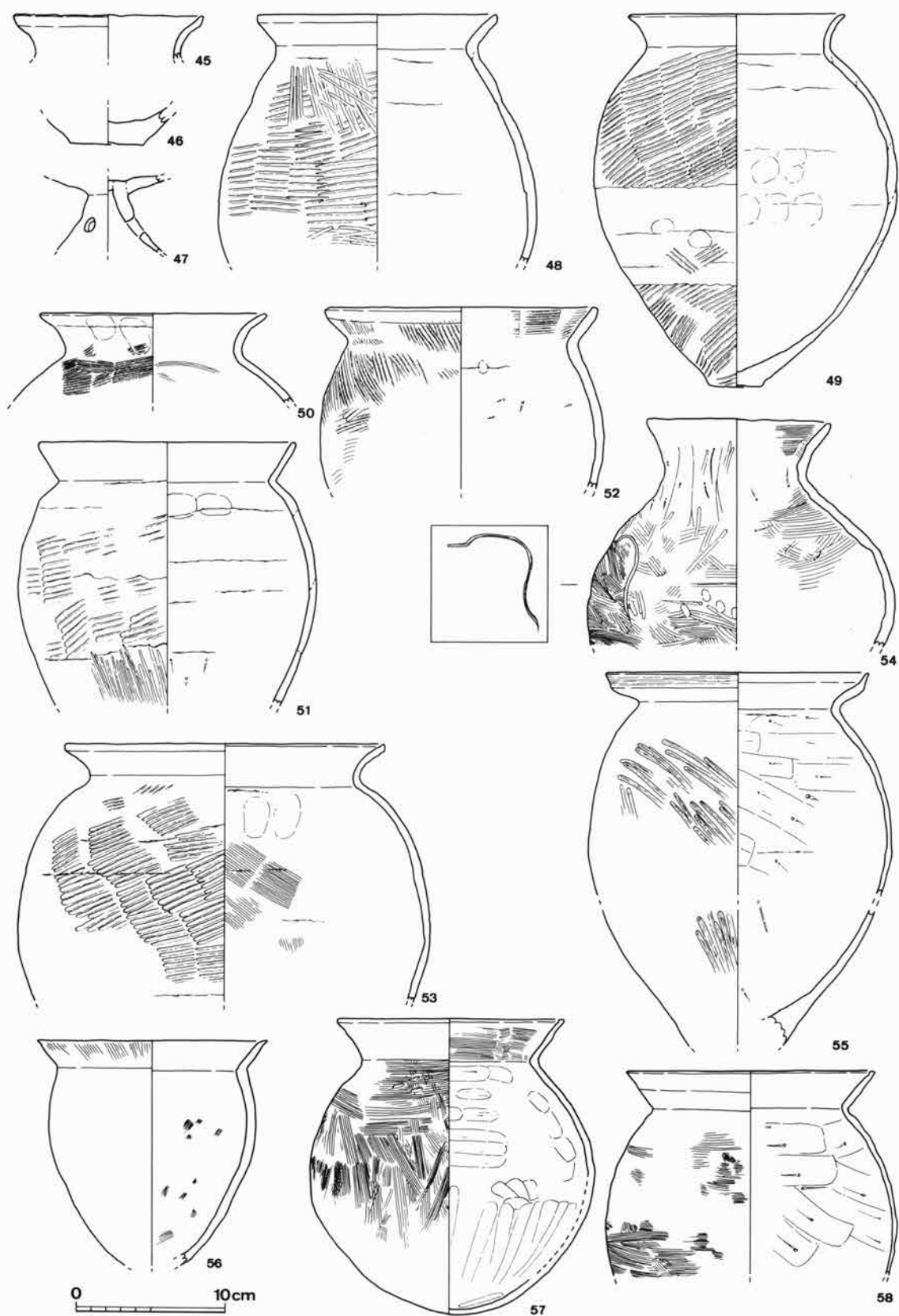
第113図 第1トレンチ出土遺物実測図(1)



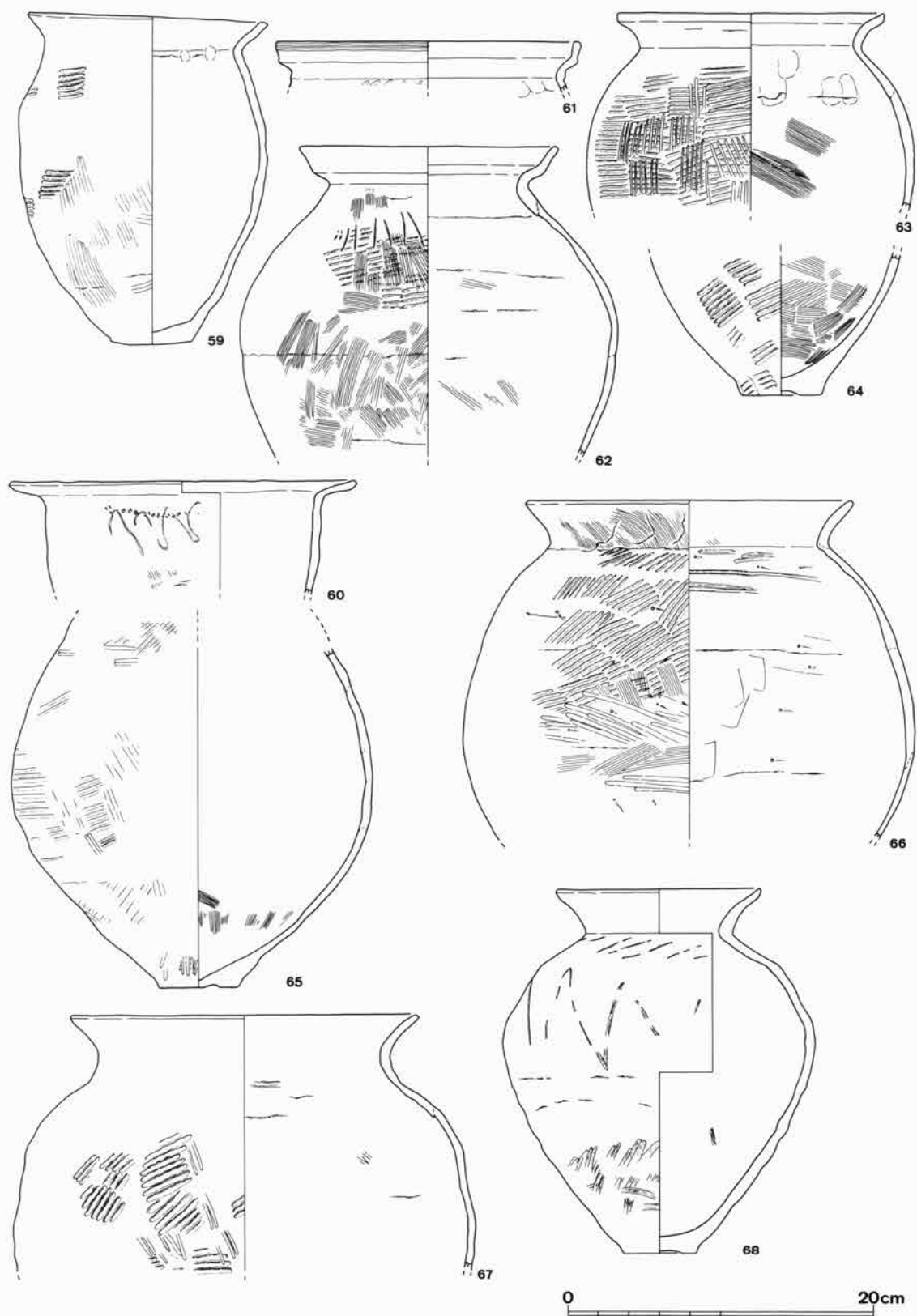
第114図 第1トレンチ出土遺物実測図(2)



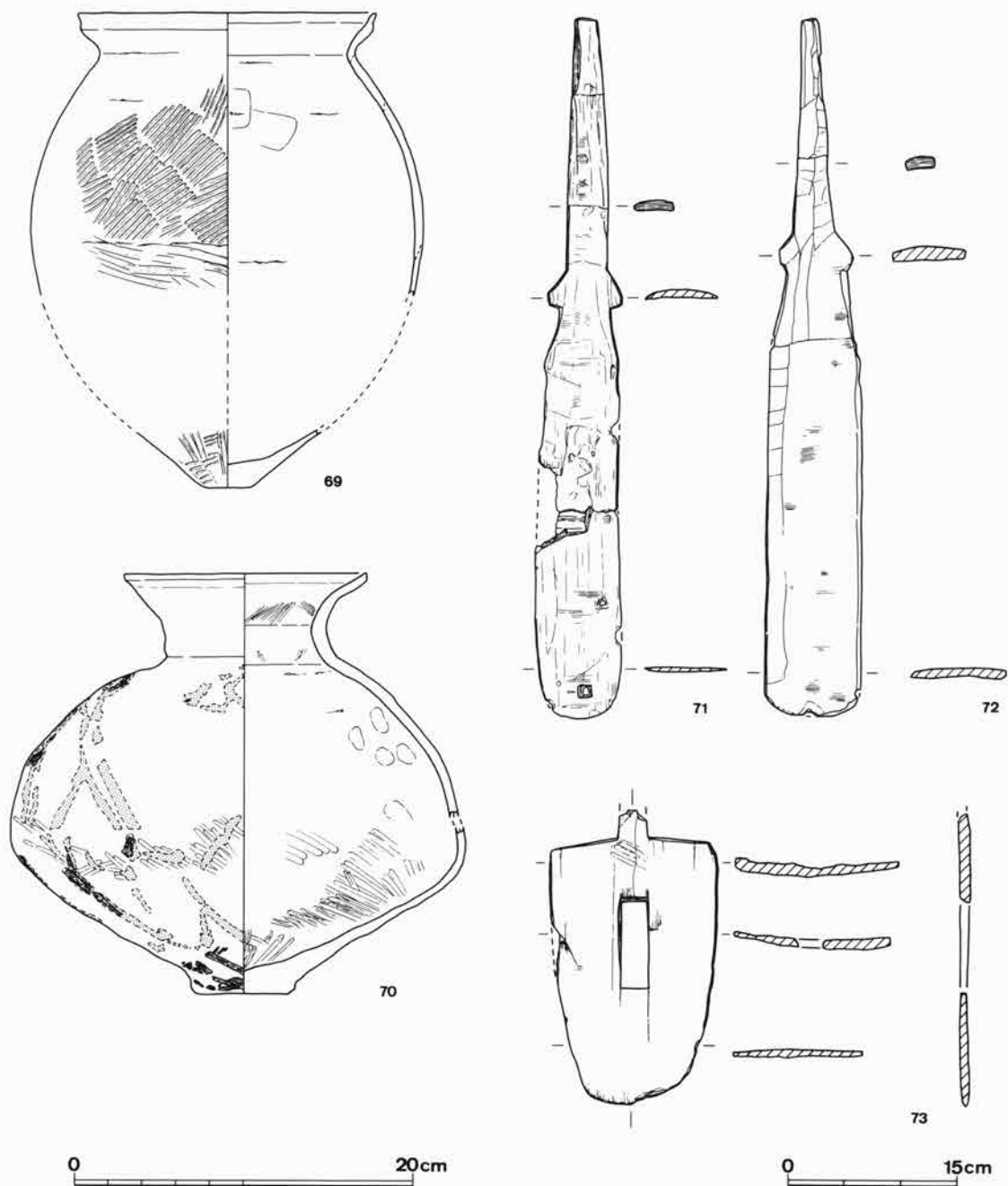
第115図 第1トレンチ出土遺物実測図(3)



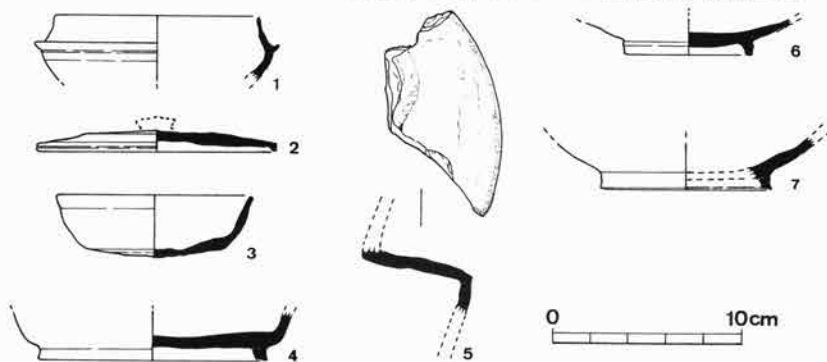
第116図 第1トレンチ出土遺物実測図(4)



第117図 第1トレンチ出土遺物実測図(5)



第118図 第1トレンチ出土遺物実測図(6)



第119図 第1トレンチ包含層出土遺物実測図

かる。高台径9.2cmを測る。

(福島孝行)

(2)第2トレンチ(第121図、図版第96)

第1トレンチの南で、京都府教育委員会の試掘調査で石敷きが検出され

た地点(No. 17)を中心にして、東西約10m、南北約20mのトレンチを設定した。

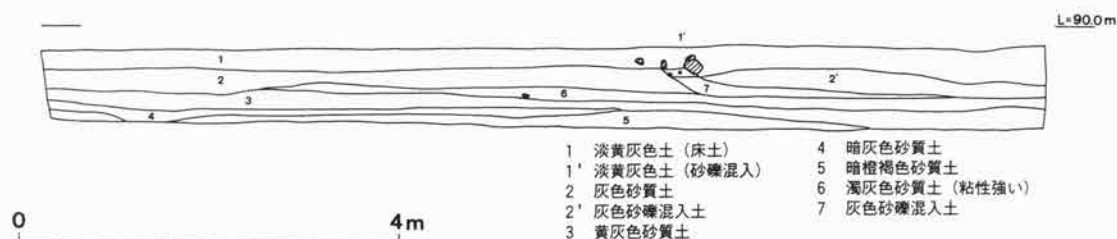
石列が検出された面を掘り広げ、石列の範囲を確認した。石列は調査地内で約17m北に延びて終結する。南にも延びて行くことを確認した。石列の両側とも、不揃いで、積み方も荒いものであった。また、石列の一部を断ち割ったところ、基礎部分が不安定であることが判明した。石列周辺から、青磁碗や土師器片とともに唐津焼碗が出土したので、石列は、近世初頭以降の水田に伴う石組(石垣)の最下層の可能性が高いと推定される。第120図のような石列断面であった。

第2トレンチの土層堆積状況は、耕作土の下が(1)淡黄灰色土・淡黄灰色土(砂礫混入)、(2)灰色砂質土・灰色砂質土(砂礫混入)、(3)黄灰色砂質土、(4)暗灰色砂質土、(5)暗橙褐色粘質土(地山)、(6)濁灰色砂質土、(7)灰色砂礫混入土である。

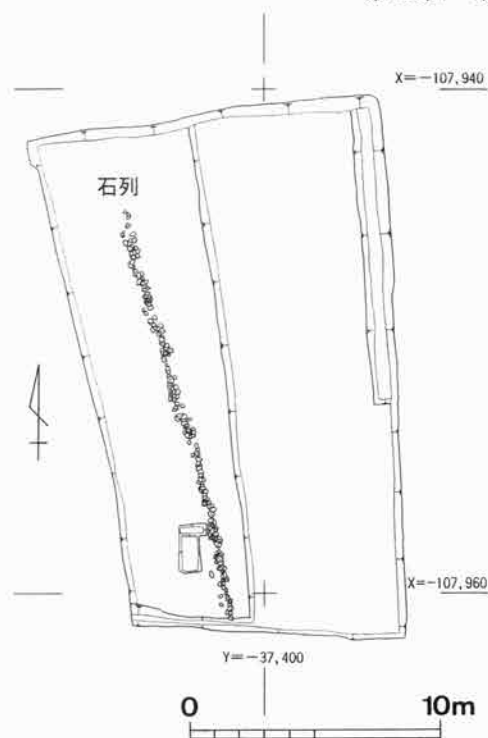
出土遺物(第122図)

出土遺物は、掘削中に出土したもので遺構に伴うものではない。

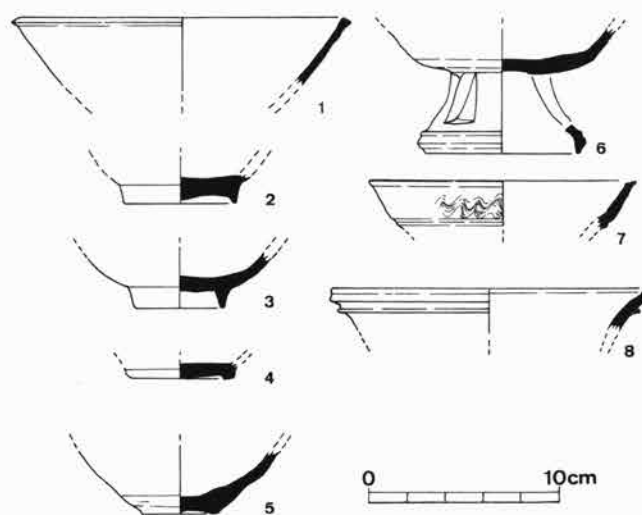
1～3は青磁碗である。4は瀬戸・美濃焼で内面にトチン跡がある。16世紀後半のものである。5は、唐津焼碗である。17世紀初期の所産であろう。6は、3方向に透しが付く須恵器高杯である。7は、須恵器甕または壺の口縁部である。8は、須恵器甕の口縁部である。6～8は須恵器



第120図 第2トレンチ南壁土層断面図



第121図 第2トレンチ遺構配置図



第122図 第2トレンチ出土遺物実測図

編年のTK23型式並行期のものである。6は暗橙褐色粘質土(地山)上面から出土した。それ以外は、灰色・黄灰色砂質土から出土した。

(石尾政信)

3. 考 察

(1) 案察使遺跡で検出した密集型土坑群の評価

1) はじめに

開発行為に伴う大型の発掘調査が増加する中で、一定の範囲に膨大な数の土坑が密集する遺跡の検出が相次ぎ、これに関する評価をめぐって論議が交わされている。今回亀岡市保津町の案察使遺跡第4次調査において検出した土坑群もこうした密集型土坑群であると考えられるため、調査中に得られた知見に基づき、検討を加えたいと思う。

2) 既往の研究の整理

1977年に原口正三氏によって高槻市狐塚遺跡が土壙墓群として紹介されて以来、各遺跡で土壙墓群としての位置付けが行われるようになった。^(注1) また1978年の藤井寺市青山遺跡・はさみ山遺跡、羽曳野市軽里遺跡、1979年の富田林市新家遺跡の報告などでは墓とする見方に加え、粘土採掘坑とする見方も提唱され、これ以降両者が併記されたり、一方に寄った研究がなされたりしてきた。

1989年に福永伸哉氏が発表した「古墳時代の共同墓地－密集型土壙群の評価について－」では、こうした遺跡を階層化の進展に伴い、首長が居館を営み、有力層が独自の集落を形成し、残された一般成員が残した墓地であると結論づけた。^(注2) 福永氏が密集型土坑群を墓とする根拠は以下の通りである。

(1) 土壙埋土が人為的に埋めたと解される堆積状況を示すものが多い。

(2) 空閑地を間にはさみながら何箇所かに特に集中するありかたを示す。極端な密集部分を除いては土壙どうしが乱雑に切り合うものは少なく、以前に掘削した土壙の位置をかなり正確に認識していることがうかがわれる。おそらく掘削地点を識別できる構造物が地上に設けられていたものとみられる。

(3) 土壙群を分割するように、あるいは土壙群全体の一辺を画するように流路が存在している。

(4) 土壙の平面形は整った形を指向している。底面は皿状のものや凹凸があるものが多く、平坦なものは少ない。土壙壁の立ち上がりはゆるやかな法面をもつものと、ほぼ直立するものがあるが、オーバーハングするものはほとんどない。土壙底面が粘土層をこえて下層の砂礫層まで掘り抜いていること、粘土層の存在しない地点にも土壙群が形成されているものがある。

(5) 土壙から出土する遺物は少なく、出土する土器もほとんど甕形土器に限られる。土壙内に甕を入れるという習俗が、時代を越えて受け継がれ、地域を越えて広がっている。

これに対し1991年、(財)大阪市文化財協会の京嶋覚氏は長原遺跡の詳細な検討と、関連遺跡の再検討により、粘土採掘坑であると断定した。^(注3) 京嶋氏はさらに1995年に「群集土壙の再評価」で福永氏の論拠について逐一検討し、粘土採掘坑であると結論付けている。^(注4) 以下に福永氏の論拠に対する反論を取り上げる。

(1)について (1)の根拠となっている長曾根遺跡^(注5)の例は(風)倒木痕の特徴を明瞭に示しており、人為的な遺構ではない。他の遺跡で人為的に埋め戻された資料があっても、掘削が陶土に適した粘土の採取を目的とする限り、不要な廃土が坑内に廃棄されるのは自然な行為であり、土壌が地山以外の旧表土や自然に堆積した土壌などを含む埋土で充填されていることは、必要な粘土部分のみが採取されたことを物語る。

(2)について 土壌群の分布状況の細分化以前に全体の分布範囲が何によって決定されているかを分析する必要がある。土壌群の分布は地形や地質に規制されたものであり、群内が細分化されとしてもそれは微地形や粘土層の分布を反映していると見ることで整合的に解釈できる。粘土採掘坑はどこにでも掘ってよいものではなく、個々の土器作りの集団によって伝統的に継承されてきた良質の粘土を出す採土場に存在するのであり、良質の粘土層の厚い部分では、頻繁に採掘され、薄い部分ではあまり採掘されない。

(3)について 土壌群が小河川などが流れる谷部や丘陵裾部に立地することは、そこに良質の粘土層の露頭が存在していたからに他ならない。

(4)について 土壌の形状が整った形を指向しているか否かは主観的な問題であり、現実の資料を見る限り、整った形状であるという観察結果を導き出すことは困難。また、土壌壁が袋状になることは粘土採掘坑ではしばしば見られるが、粘土の採掘形態は、粘土層の存在する深さや立地条件により自ずと異なる。したがって、袋状に掘削されていることは粘土採掘坑であることの十分条件ではあるが、必要条件ではない。また土壌が粘土層を掘り抜いているとした長曾根遺跡の例は、(風)倒木痕であるために、ここで参考にするべき資料ではない。

(5)について 弥生時代終末期前後の土壌群からの出土遺物に甕の占める割合が大きいことは事実だが、こうした傾向が後の古墳時代を通じて見られるとする点は資料に即した見解とはいえない。池田遺跡の古墳時代前期の土壌や川跡から出土した土器は杯、高杯が圧倒的に多いし、狐塚古墳群や万崎池遺跡や菱木下遺跡の土壌から出土した須恵器の甕は古式土師器や弥生土器の甕と同じではない。(筆者注：須恵器の「甕」は名称は甕であるが、実際は壺にあたる。)

福永氏は以上の京嶋氏の反論に対し、藤井寺市小山平塚遺跡で検出された弥生時代終末期の密集型土壌群の中にS K62という木棺の痕跡が認められる例を挙げ、「この種の遺構の中に埋葬施設、つまりお墓として造られた事例が一定程度は含まれている」と再反論している^(注6)。

3) 案察使遺跡の検討

2氏の議論の論点について、案察使遺跡での状況を再確認していくこととする。まず(1)について、検出した1063基の土坑の内、1段下げた時点で掘りきってしまった92基を除いて971基中、ブロック状の土塊を含む、即ち掘削した後すぐに埋め戻された可能性の高い土坑は180基存在し、18%を占める。逆に小規模な土石流により、上層が一気に埋まったと考えられる土坑が35基、水成堆積したと見られる土坑が少なくとも1基存在する。またシルトや砂、土塊などを全く含まない粘土のみで埋土が構成される土坑が214基存在する。これも自然堆積に含めれば、埋め戻され

ていない可能性がある土坑は合計250基に上り、土坑全体の約4分の1を占める。残りの5割程度はいずれとも判断できない。粘土採掘坑であれば埋め戻してもいいし、開口したままでも構わないが、埋め戻していない墓があるとは考えにくいので、全体の少なくとも4分の1は墓ではないことになる。

(2)について、案察使遺跡の地形は北西から南東に延びる2条の微高地があり、南西側の微高地上には粘土が分布する低地との境界線付近にわずかに20基分布するのみで南西側には全く分布しない。北東側の微高地では分布が散漫になり、北西隅では全く土坑が分布しない。これに対しトレンチ北東隅の低地部と中央の低地部には土坑の密集が見られる。土坑が散漫になる微高地上の土坑では切り合わない土坑も多いが、密集する低地部では切り合う土坑が多い。さらに、SK1032のように、大きな土坑の中を掘削して埋土の途中で止まっている例や、大きな土坑の底まで掘り抜く事例もある。空閑地をはさんで群集する状況は認められる。地表に設置するとされる施設については、大きな土坑の中を再掘削している事例から、存在していなかったと考えられる。

遺構が全く分布せず、土壙墓群を形成するならばより適した土地がトレンチ南西部に広がるにもかかわらず、土坑群はこれを避けた形で分布している。この事実はいかような遺構群が土壙墓であることに躊躇を覚えさせる。逆にこれを粘土採掘坑とした場合、北東側の粘土層が分布しない微高地上に分布する土坑について疑義が生じる。しかしこれは荒木幸治が指摘する「試し掘りの土坑」⁽¹¹⁷⁾と見ることもできるし、青灰色シルト層と粘土層が互層になることがある案察使遺跡の特殊性から起こった粘土採掘者の掘り間違いであるとも解釈できる。

(3)について、案察使遺跡は前述の通り2条の微高地と、2条の低地部からなり、低地部では最大75cmに及ぶ黒色～極暗灰色の粘土の堆積が認められる。したがって、常に流れる流路ではないが雨天の時には水が溜まり、粘土が堆積する状況であったと考えられる。案察使遺跡の場合、「土壙群を分割するように」とか、「土壙群全体の一辺を画するように」流路があるのではなく、流路状の低地部の中に分布する。また、そういった立地条件であり、編み籠や被籠土器が残存するにも関わらず、人骨や歯牙が残存していないことも土壙群説を退ける。

(4)について、案察使遺跡の土坑形状は、不整隅丸方形、不整隅丸長方形、不整隅丸台形、不整楕円形、不整円形などとなっており、たとえば南丹波における弥生後期の台状墓群である園部町狭間墳墓群で見られる主体部のように整然とした隅丸長方形とはほど遠い形状を示している。また土坑底は平坦なもの、椀状のもの、鋤先の痕跡が残る凹凸の激しいものなどがあるが、図示した50基のうち、平坦なものは18基、椀状のもの7基、凹凸の激しいもの11基、どちらともいえないもの14基となっている。土坑壁は垂直のものと法面をもつものが多いが、図示したものの内SK92・982のように抉り込んでオーバーハングしているものもある。SK982は北側の土坑壁が土坑最下部から北へ向かって約30cmも抉り込んでおり、これが土坑の崩落に伴うオーバーハングではないことを示している。また、図化できなかったが、SK900では土坑壁の中位、土坑底から約30cmほど上位の地点で、水平に幅15cmほどの溝状の抉り込みが奥行き20cmほど行われている。こうした事例は図化できなかったが他にも数基で確認している。また粘土層を掘り抜く事例があ

るが、案察使遺跡では陶土に採取されたと見られる黒色から極暗灰色粘土層が時に青灰色シルト層と互層になっており、青灰色シルト層の下部にある粘土層を期待して掘削したことが予想される。こうした土坑形状の検討からも密集型土坑群が粘土採掘坑であることへの蓋然性を高める。福永氏は土坑底が平坦でないことを土壙墓の根拠の一つにあげているが、少なくとも前述の狭間墳墓群で墓壙底が平坦でないものは存在しない。むしろ鍬や鋤で粘土を掘削する際に勢い余って深く掘り過ぎたために凹凸が生じるのは、粘土採掘坑に起こると考える方が自然であり、人体が直接墓壙底に触れる土壙墓の墓壙底であれば、平坦に加工すると考える方が自然であると思われる。

(5)について、案察使遺跡の土坑から出土した土器の器種は甕が中心であるが、壺が8点、高杯が1点出土している。また、土器の中には完形品が5点、削平を免れれば元は完形であったと推定されるものが7点あり、そのほかの土器も完形率は高い。一方S K 129やS K 88などのようにバラバラの破片を投棄している例も多い。また、板状木製品も散発的に出土し、茄子形鍬・鋤先や折損した鋤先など、土掘り具も出土する。さらに編み籠がS K 143から出土しており、何らかのものを運搬したことをうかがわせる。

そのほかの特徴として、合わせ口の土器棺を1基検出した。この他、単棺の土器棺の確実なもの1基、その可能性のあるもの3基を検出した。前述の完形土器の多くがこの土器棺の可能性のあるものである。単棺の土器棺として確実なS K 176は単独で土坑を掘削している、またその可能性があるS K 117も単独の土坑であるが、S K 136・137、合わせ口土器棺のS K 1103は土坑が埋没する途上のくぼみを利用したり、一度埋まった土坑の埋土を再掘削したりして、埋納されている。

4) 結語

以上の検討から案察使遺跡で検出した密集型土壙群の性格は京嶋氏の主張に沿う部分が多く、粘土採掘坑である可能性が高くなっている。また、今回の調査においても人骨、歯牙等は全く検出されず、土壙墓とする確証は得られなかった。また水成堆積や自然堆積を示す土坑も多くあった。埋め戻した土坑にしても上部がくぼんでおり、土石流によって埋まった状況を示すものがあることから、掘りきった排土の嵩が埋め戻した時に土坑の体積より減っている状況が見られる。土は本来掘削すると体積が増え、埋め戻せばその時点ではマウンド状にならざるを得ない。まして人体を葬ったのであればその体積は更に増える。その後、土は粒子同士の空間が締め、元の嵩に戻るが、土がよそへ流れない限り元の体積から減ることはない。しかし実際の土坑は大きくくぼんでおり、その上に土石流の堆積が溜まっていることから、土坑内の土の相当量が持ち去られているということを示している。土坑が掘られたのが粘土層であるのであれば、粘土を持ち去ったということになる。S K 143から出土した編み籠は、実際のところ籠なのか、箕なのかは不明であるが、いずれにせよ、こうして掘り出された粘土を運ぶために使用され、破損したために土坑にうち捨てられたと考えるのが妥当ではないだろうか。また板状木製品が出土することについて荒木幸治氏は板状木製品の出土について、「不安定な地面に置き、沈下等を防ぐための道具の可能性を指摘できる」としながらも、「使用直後の廃棄であれば、土坑底部で出土するものが

あってもいいはずである」^(註8)として慎重な姿勢を示している。ただし単純な板状の木製品の用途がこうした足場に限ることもなく、荒木氏が指摘する土坑脇に粘土を置いておくためなどにも当然使われたのであろう。

しかし、土器棺墓の存在は否定し得ない事実である。2基は確実に存在し、そのほかにいくつかの候補があるが、土器棺墓が密集型土坑群中に存在することが即ちそれ以外の土坑を土壙墓とする根拠にはならない。土器棺墓およびその候補の中には単独で土坑を穿つものもあるが、途中で埋まった、あるいは埋められた土坑の上部のくぼみを再利用したと考えられる事例(S K 136・137)、埋まりきった土坑の埋土を再掘削した事例(S K 806と1103の関係)などがあり、土坑群の転用、もしくは2次利用として土器棺墓群が形成されたとする方が蓋然性が高い。

以上の考察から案察使遺跡で検出された密集型土坑群は、第1義的には粘土採掘坑群であることができ、その2次的利用として土器棺墓群が形成されたと考えられる。

(福島孝行)

付表3 第1トレンチ土坑観察表(規模の単位はcm)

遺構 番号	地区	掘削 状況	長軸	短軸	深さ	第1層	第2層	第3層	出土 遺物	備考
1	B-2	完掘	108	86	10	極暗灰褐色シルト(3cm大の灰色シルト塊を多く含む)	—	—		
2	B-1	完掘	76	60	13	灰褐色シルト(3~10cm大の灰色シルト塊を多く含む)	—	—		
3	B-1	完掘	70	60	30		灰褐色シルト	—		
4	B-2	完掘	34	28	6	暗灰褐色粘土	—	—		
5	B-2	完掘	40	12	6	暗灰褐色粘土	—	—		
6	B-2	完掘	34	30	6	暗灰褐色粘土	—	—		
8	B-2	完掘	118	91	9	実測図を参照			土器 木器	図有
9	B-1	完掘	70	58	28	極暗灰色シルト	暗灰黄色極細砂	—		
10	B-1	完掘	60	30	4	極暗褐色シルト	—	—		
11	B-1	完掘	100	60	11	暗灰色シルト	—	—		
12	B-1	完掘	90	80	23	黒灰色シルト	—	—		
13	B-1	完掘	30	26	13	黒褐色シルト	—	—		
15	B-2	完掘	90	40	14	暗灰色シルト	暗灰色粘質シルト	—		
16	C-2	完掘	100	70	28	黒褐色シルト(黄灰色粘土塊を多く含む)	—	—		
17	C-2	完掘	100	74	17	黒褐色シルト	—	—	土器	
18	C-2	完掘	100	60	17	暗灰色シルト	黒褐色粘土	—		
20	C-1	完掘	82	68	18	黒灰色シルト(灰色シルト塊を含む)	—	—		
23	C-1	完掘	60	36	13	極暗褐色シルト	—	—		
24	C-1	完掘	80	60	8	黒灰褐色シルト	—	—		
25	C-2	完掘	90	50	10	極暗褐色粘質シルト	—	—		
29	B-2	完掘	88	60	13	実測図を参照	—	—	土器	図有
30	B-2	完掘	150	50	17	極暗褐色粘土(3cm大の灰色粘土塊を少量含む)	—	—		
32	C-2	完掘	16	115	52	極暗褐色粘質シルト(5~10cm大の灰色シルト塊を少量含む)	—	—		
33	C-2	完掘	92	70	12	実測図を参照			土器	図有
36	C-1	完掘	96	88	23	—	—	—		
37	C-2	完掘	60	35	10	—	—	—		
38	D-3	完掘	86	80	9	実測図を参照			土器	図有
39	D-3	完掘	70	60	22	暗灰褐色粘質シルト	—	—		
40	C-3	半掘	60	50	12	灰褐色シルト	—	—		
41	D-3	半掘	110	80	39	暗灰色粘土	極暗灰色粘土	暗灰色粘土(青灰色粘土塊含む)		
43	D-3	半掘	90	70	27	暗灰褐色粘土	—	—		
44	D-3	半掘	30	60	16	暗灰褐色粘質シルト	—	—		
45	D-4	半掘	50	50	3	暗褐色粘質シルト	—	—		
46	D-4	完掘	122	117	30	実測図を参照			土器	図有
47	D-3	一段	30	30	4	暗褐色粘土	—	—		
48	D-3	一段	167	140	32	極暗褐色粘土	—	—		
49	D-3	一段	70	50	26	暗褐色粘土	—	—		
50	D-3	完掘	120	100	31	暗褐色粘土	緑灰色粘質シルト	—		
51	E-4	一段	70	46	5	極暗褐色粘質シルト	—	—		
53	D-4	半掘	120	90	23	暗灰褐色粘質シルト	暗褐色シルト	—		
55	C-3	半掘	110	80	32	暗褐色粘質シルト	灰色粘土	極暗褐色粘土		
56	D-3	完掘	92	82	15	実測図を参照	—	—	土器	図有
57	D-2	完掘	90	60	4	淡灰褐色シルト	—	—		
58	C-2	完掘	130	70	45	極暗褐色シルト(2cm大の灰色シルト塊を多く含む)	—	—		
59	B-2	完掘	115	85	23	—	—	—		

遺構 番号	地区	掘削 状況	長軸	短軸	深さ	第1層	第2層	第3層	出土 遺物	備考
60	B-3	完掘	100	80	13	暗灰褐色粘質シルト	—	—		
61	B-3	完掘	70	55	8	極暗灰褐色粘質シルト	—	—		
62	D-2	完掘	80	60	12	暗褐色粘質シルト	暗灰色粘土	—		
63	D-2	完掘	90	50	17	暗灰褐色シルト	—	—		
64	D-4	半截	70	50	12	黒褐色粘土	暗灰色シルト	—		
65	D-2	完掘	90	60	13	極暗灰褐色粘土	—	—		
66	D-3	一段	70	60	5	暗灰色シルト	—	—		
67	C-4	検出	80	50	20	暗褐色粘土	—	—		
69	D-2	完掘	130	50	21	極暗灰褐色粘土	—	—		
70	C-2	完掘	40	35	12	—	—	—		
71	B-3	半截	220	120	3	極暗灰色粘質シルト	—	—		
72	D-2	完掘	112	75	34	実測図を参照			土器	図有
73	D-2	完掘	70	60	5	暗灰褐色粘土	—	—		
74	D-2	完掘	70	60	8	暗灰褐色シルト	—	—		
75	C-2	完掘	105	90	7	極暗褐色粘質シルト(灰色シルト塊を多く含む)	—	—		
76	D-2	完掘	92	91	25	実測図を参照			土器 木器	図有
77	D-2	完掘	60	58	24	灰色シルト	暗灰色シルト	—		
79	D-2	完掘	70	64	23	実測図を参照			土器	図有
80	D-3	半截	100	80	90	暗灰色粘土(淡青灰色粘土塊含む)	極暗灰色粘土	極暗灰色シルト		
81	D-3	半截	70	60	18	暗灰褐色粘質シルト	—	—		
82	D-3	完掘	120	102	15	実測図を参照	—	—	土器	図有
83	D-3	完掘	79	49	14	実測図を参照	—	—	土器	図有
84	C-3	半截	60	50	17	極暗灰褐色粘質シルト	—	—		
85	C-1	完掘	120	100	45	極暗褐色粘土(極暗灰色シルト塊を少量含む)	暗青灰色粘土	暗灰色粘土		
86	C-2	完掘	90	70	16	極暗灰色粘質シルト	—	—		
87	D-3	半截	74	50	4	灰色粘質シルト	—	—		
88	C-3	完掘	94	90	20	実測図を参照			土器 木器	図有
89	D-3	半截	70	50	40	暗灰褐色粘土(青灰色粘質シルト塊を含む)	—	—		
91	D-3	完掘	95	50	20	実測図を参照				図有
92-A	D-1	完掘	119	99	41	実測図を参照			土器	図有
92-B	D-1	完掘	165	94	39	実測図を参照				
93	D-1	完掘	110	80	17	—	—	—		
94	B-3	半截	50	46	22	極暗灰色粘土	—	—		
95	B-4	半截	120	90	38	極暗褐色粘質シルト	暗灰色粘土	暗褐色粘土		
96	B-3	半截	106	98	26	暗褐色粘質シルト(1cm大の青灰色粘質シルト塊少量含む)	—	—	土器	
98	B-4	完掘	93	67	12	実測図を参照			土器	図有
99-A	C-2	完掘	80	60	21	実測図を参照			土器	図有
99-B	C-2	完掘	100	82	10	実測図を参照			土器	図有
100	D-1	完掘	150 以上	129	42	実測図を参照			土器 木器	図有
101	C-2	完掘	92	79	18	実測図を参照			土器 木器	図有
102	C-2	完掘	170	90	38	極暗褐色シルト(3cm大の灰色シルト塊を多く含む)	—	—	土器	
103	C-2	完掘	110	40	46	極暗褐色シルト(3cm大の灰色シルト塊を少量含む)	—	—	土器	
104	C-2	完掘	130	130	25	極暗褐色粘質シルト(3cm大の灰色シルト塊を少量含む)	—	—	土器	

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成14年度発掘調査概要

105	C-2	完掘	230	50	26	極暗褐色粘質シルト	—	—	土器	
106	C-2	完掘	110	70	30	極暗褐色粘質シルト(2cm大の灰色シルト塊を少量含む)	—	—	土器	
107	B-3	一段	90	70	19	極暗褐色粘質シルト	—	—		
108	C-1	完掘	74	50以上	17	実測図を参照			土器	図有
109	C-1	完掘	72	40	3	—	—	—		
110	C-2	完掘	80	67	11	実測図を参照			土器	図有
111	D-2	完掘	110	70	21	暗灰色粘土	—	—		
112	D-2	完掘	55	46	38	黒灰褐色粘質シルト			土器	図有
113	C-3	完掘	50	40	8	—	—	—		
114	D-3	完掘	50	40	12	極暗褐色粘質シルト	—	—	土器	
115	D-3	完掘	113	100	17	実測図を参照	—	—	土器	図有
116	D-3	半載	90	80	30	暗灰色粘土	—	—		
117	D-4	完掘	52	46	20	実測図を参照			土器	図有
118	A-3	半載	94	62	30	暗灰色粘土	暗褐色粘土	—		
119	B-4	半載	114	90	29	極暗褐色粘土	—	—		
120	B-3	半載	60	90	20	暗灰色粘質シルト	—	—		
121	B-3	半載	88	66	18	暗灰色粘土	—	—		
122	B-4	半載	96	64	21	暗灰色粘土	—	—		
123	B-3	一段	46	46	7	極暗褐色粘質シルト	—	—		
124	B-3	半載	180	86	28	暗灰色粘土	—	—		
125	B-3	一段	140	100	6	極暗褐色粘土	—	—		
126	B-3	半載	45	30	25	極暗褐色粘土	—	—		
127	D-4	完掘	59	57	12	実測図を参照			土器	図有
128	C-3	半載	15	120	14	極暗褐色粘土	—	—		
129	B-3	完掘	136	94	26	実測図を参照			土器	図有
130	B-3	半載	130	90	22	極暗褐色粘土	—	—	土器	
131	B-3	半載	120	110	7	暗灰色粘土	—	—		
132	D-2	完掘	40	40	11	—	—	—		
133	D-2	完掘	150	80	34	暗灰色粘土	暗灰色粘土	—		
134	C-4	一段	45	30	3	極暗褐色粘土	—	—		
135	C-4	半載	100	84	7	暗灰色粘土	—	—		
136	C-4	完掘	98	98	22	実測図を参照			土器	図有
137	C-4	完掘	128	98	28	実測図を参照			土器 木器	図有
138	B~C -3	半載	184	136	5	暗灰色粘土	—	—		
139	C-3	半載	180	130	18	極暗褐色粘質シルト	—	—		
140	C-4	一段	75	50	6	極暗褐色粘質シルト	—	—		
141	C-5	半載	90	75	40	暗灰色粘土	—	—		
142	C-4	半載	65	50	21	極暗褐色粘質シルト(10cm大の青灰色粘質シルト塊を少量含む)	—	—		
143	D-4	完掘	100	76	17	実測図を参照			土器 網籠	図有
144	D-4	一段	110	70	7	極暗褐色粘質シルト	—	—		
145	D-4	半載	75	60	18	黒灰褐色粘質シルト	—	—		
146	D-4	半載	120	85	34	黒褐色粘質シルト	暗褐色粘質シルト	暗灰色粘土	土器	
147	E-4	一段	100	60	5	極暗褐色粘質シルト(20cm大の暗灰色シルト塊を少量含む)	—	—		
148	D-4	半載	100	90	18	暗青灰色粘質シルト	—	—		
149	D-4	半載	90	80	40	極暗褐色粘質シルト	暗灰色粘質シルト	—		
150	D-4	完掘	57	23	19	実測図を参照			土器	図有
151	E-4	半載	130	90	45	極暗褐色粘土	—	—		

152	D-4	一段	88	71	12	暗褐色粘質シルト	黒褐色粘土	—		
153	C-4	半截	80	70	30	暗灰褐色粘土	—	—		
154	D-4	一段	80	50	2	暗灰色粘質シルト	—	—		
155	D-4	一段	46	40	4	暗灰色粘土	—	—		
156	C-4	半截	50	40	21	極暗灰色粘土	—	—		
157	C-4	一段	50	40	14	暗灰褐色粘質シルト	—	—		
158	B-C -2	完掘	59	35	9	実測図を参照			土器	図有
159	B-4	完掘	80	40	15	—	—	—		
161	D-4	完掘	80	75	9	極暗灰褐色粘土	—	—		
162	D-4	半截	65	50	41	黒褐色粘質シルト	暗灰褐色粘土	—		
164	D-4	一段	55	45	4	極暗褐色粘質シルト	—	—		
165	E-4	一段	55	40	7	極暗灰褐色粘土(20cm大の極暗褐色シルト塊を少量含む)	—	—		
166	C-5	一段	35	30	3	極暗灰色粘土	—	—		
167	B-4	完掘	75	73	33	実測図を参照			土器	図有
168	D-5	完掘	40	30	14	—	—	—		
169	C-2	完掘	78	35	21	実測図を参照			土器	図有
170	D-4	半截	150	130	32	極暗褐色粘質シルト	—	—		
171	D-4	一段	80	50	7	黒灰褐色粘質シルト	—	—		
172	D-4	半截	90	70	17	極暗灰色粘質シルト	—	—		
173	C-1	完掘	103	85	12	実測図を参照			土器	図有
174	C-1	完掘	88	52	13	極暗褐色シルト	—	—	土器	
175	C-1	完掘	40	25	30	極暗褐色シルト	—	—	土器	
176	C-4	完掘	39	34	18	実測図を参照	—	—	土器	図有
177	C-4	一段	85	55	8	極暗灰色粘土	—	—		
178	D-5	半截	105	100	9	極暗褐色粘質シルト	極暗灰褐色粘土	暗灰褐色粘土		
179	D-5	半截	75	50	20	未記入	—	—		
180	D-5	一段	55	45	3	暗褐色粘質シルト	—	—	土器	
181	D-4	半截	80	60	10	極暗灰褐色粘質シルト(暗灰褐色シルト塊を含む)	—	—		
182	D-4	一段	60	30	5	暗灰色シルト(暗褐色粘土塊を含む)	—	—		
183	C-4	半截	160	110	31	極暗灰色粘質シルト	—	—		
184	B-1	一段	86	50	4	暗灰色粘質シルト	—	—		
185	B-1 -2	完掘	40	40	8	暗灰色粘質シルト(灰黄色シルト塊を含む)	—	—		
186	B-1	完掘	45	30	5	—	—	—		
187	B-1	完掘	80	70	5	—	—	—		
188	B-1	完掘	50	34	18	—	—	—		
189	B-1	完掘	70	60	3	—	—	—		
190	B-2	完掘	80	60	12	極暗灰褐色シルト(灰黄色シルト塊を少量含む)	—	—		
191	B-2	完掘	36	34	5	極暗灰褐色シルト(灰黄色シルト塊を少量含む)	—	—		
192	B-2	完掘	50	40	10	—	—	—		
193	B-2	完掘	50	40	4	—	—	—		
194	B-2	完掘	100	72	27	暗灰色粘土	暗灰色粘土(15cm大の灰黄色粘土塊を多く含む)	—		
195	B-2	完掘	114	82	49	暗灰色粘土	灰色粘土	極暗灰色粘土		
196	B-2	完掘	54	50	13	極暗灰色粘土(3～5cm大の暗灰色粘土塊を多く含む)	—	—		
197	B-2	完掘	90	70	12	極暗灰色粘土(10～15cm大の暗灰色粘土塊を多く含む)	—	—	土器	

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成14年度発掘調査概要

198	B-2	完掘	134	108	12	極暗灰色粘土(20~30cm大の灰色粘土塊を多く含む)	—	—		
199	B-2	完掘	88	60	36	極暗褐色粘土(3~5cm大の青灰色粘土塊を多く含む)	—	—		
200	B-3	完掘	50	46	7	—	—	—		
201	B-3	完掘	90	70	14	—	—	—		
202	B-3	完掘	34	30	5	—	—	—		
203	B-3	完掘	40	40	17	暗青灰色シルト	—	—		
204	B-3	完掘	44	40	15	極暗灰色粘土	—	—		
205	B-3	完掘	90	70	20	暗灰褐色粘質シルト	灰褐色粘質シルト	—		
206	B-3	一段	72	24	3	暗灰褐色粘質シルト	—	—		
207	B-3	一段	30	20	11	暗灰色粘質シルト	—	—		
208	B-3	一段	50	22	6	極暗褐色粘質シルト	—	—		
209	B-3	完掘	140	110	22	暗灰褐色粘質シルト	—	—		
210	B-3	半截	54	40	20	灰褐色粘質シルト	—	—		
211	B-3	半截	70	52	46	暗灰褐色粘質シルト	—	—		
212	B-3	完掘	30	26	16	—	—	—		
213	B-3	半截	60	52	37	暗灰色粘質シルト	—	—		
214	B-3	完掘	100	80	50	暗灰褐色粘質シルト	—	—		
215	B-3	一段	70	26	5	極暗灰色粘土	—	—		
216	B-3	半截	70	50	20	暗灰褐色粘質シルト	—	—		
217	B-3	半截	70	30	24	極暗灰褐色粘質シルト	—	—		
218	B-3	一段	90	45	4	極暗褐色シルト	—	—		
219	B-3	半截	82	70	30	暗灰色粘質シルト	—	—		
220	B-3	一段	80	20	3	極暗褐色粘質シルト	—	—		
221	B-3	一段	80	50	3	極暗褐色粘質シルト	—	—		
222	B-3	一段	40	38	4	極暗褐色粘質シルト	—	—		
223	B-3	一段	40	28	13	極暗褐色粘質シルト	—	—		
224	B-3	一段	130	26	19	極暗褐色粘質シルト	—	—		
225	B-3	一段	100	70	19	極暗褐色粘質シルト	—	—		
226	B-3	一段	50	20	3	極暗褐色粘質シルト	—	—		
227	B-3	一段	60	30	2	極暗褐色粘質シルト	—	—		
228	B-3	一段	68	30	10	極暗褐色粘質シルト	—	—		
229	B-3	一段	40	34	20	極暗褐色粘質シルト(5cm大の極暗灰褐色シルト塊を少量含む)	—	—		
230	B-3	一段	34	30	20	極暗褐色粘質シルト(5cm大の極暗灰褐色シルト塊を少量含む)	—	—		
231	B-3	半截	110	100	14	極暗灰色粘質シルト	—	—		
232	B-3	一段	45	40	20	極暗灰褐色粘土	—	—		
233	B-3	半截	80	50	20	極暗灰色粘質シルト	—	—		
234	B-3	一段	120	70	4	極暗褐色粘質シルト(10cm大の極暗灰褐色粘質シルト塊を少量含む)	—	—		
235	B-3	一段	52	30	4	極暗褐色粘質シルト(5cm大の極暗灰褐色粘質シルト塊を少量含む)	—	—		
236	B-3	一段	32	20	5	極暗褐色粘質シルト	—	—		
237	B-3	一段	68	60	5	極暗褐色粘質シルト	—	—		
238	B-3	半截	84	40	4	極暗褐色粘土	—	—		
239	B-3	半截	82	62	4	極暗褐色粘土	—	—		
240	B-3	一段	100	50	8	極暗褐色粘質シルト	—	—		
241	B-3	一段	40	38	4	極暗褐色粘質シルト	—	—		
242	B-3	一段	50	48	9	極暗褐色粘質シルト	—	—		
243	B-3	一段	32	30	5	極暗褐色粘土	—	—		
244	B-3	一段	42	20	8	極暗褐色粘土	—	—		
245	B-3	半截	74	50	5	極暗灰色粘土	—	—		

遺構 番号	地区	掘削 状況	長軸	短軸	深さ	第1層	第2層	第3層	出土 遺物	備考
246	B-3	一段	110	22	8	極暗褐色粘質シルト	—	—		
247	B-3	一段	56	34	8	極暗褐色粘質シルト	—	—		
248	A-3	一段	86	54	35	暗灰褐色粘土	極暗灰褐色粘土	—		
249	B-3	一段	100	42	20	極暗褐色粘質シルト	—	—	土器	
250	B-3	一段	86	60	17	極暗灰褐色粘土	暗灰褐色粘土	—		
251	B-5	半截	90	90	23	暗灰褐色粘土	—	—		
252	A-3	一段	100	48	6	極暗灰褐色粘土	—	—		
253	B-3	一段	40	18	3	暗灰褐色粘土	—	—		
254	A-3	一段	100	48	3	極暗灰褐色粘土	—	—		
255	B-3	一段	50	48	4	暗灰褐色粘土	—	—		
256	B-3	一段	70	20	5	極暗灰褐色粘土	—	—		
257	B-3	一段	58	38	5	暗灰褐色粘質シルト	—	—		
258	A-3	一段	110	100	11	極暗灰褐色粘質シルト	—	—		
259	A-3	一段	110	60	11	黒褐色粘質シルト	—	—		
260	B-3	半截	180	100	26	極暗灰褐色粘土	—	—	土器	
261	B-3	一段	54	46	3	極暗褐色粘土	—	—		
262	B-3	一段	68	30	4	極暗灰褐色粘質シルト	—	—		
263	B-3	一段	102	40	10	極暗褐色粘質シルト	—	—		
264	B-4	完掘	54	40	7	暗灰褐色粘質シルト	—	—		
265	C-3	半截	100	68	12	灰褐色粘質シルト	—	—		
266	C-3	一段	60	46	13	暗灰褐色粘質シルト	—	—		
267	B-C -3	検出	104	20	15	灰色粘質シルト	—	—		
268	B-C -3	半截	90	70	5	極暗灰褐色粘土	—	—		
269	B-C -3		30	10	3	—	—	—		
270	B-C -3	半截	46	58	15	暗灰褐色粘質シルト	—	—		
271	B-C -3	一段	60	46	1	極暗灰色シルト	—	—		
272	B-4	半截	100	94	34	極暗灰色粘質シルト	—	—	土器	
273	B-4	完掘	85	80	33	実測図を参照			土器 木器	図有
274	B-4	一段	80	40	4	極暗褐色粘質シルト	—	—		
275	B-4	一段	48	30	2	極暗褐色粘質シルト	—	—		
277	B-4	半截	30	20	20	極暗灰色粘土(淡青灰色粘土塊を多く含む)	—	—		
278	B-4	一段	90	40	11	極暗褐色粘質シルト	—	—		
279	B-4	一段	70	46	8	極暗褐色粘質シルト(3cm大の青灰色粘土塊を少量含む)	—	—	土器	
280	B-4	一段	50	48	8	極暗灰色粘質シルト(3cm大の青灰色粘質シルト塊を少量含む)	—	—		
281	B-4	一段	74	72	5	極暗褐色粘質シルト	—	—		
282	B-4	一段	44	40	45	極暗褐色粘質シルト(20~30cm大の暗灰色粘質シルト塊を少量含む)	—	—		
283	B-4	半截	100	52	2	極暗灰褐色粘土	—	—		
284	B-4	一段	45	6	3	極暗褐色粘質シルト	—	—		
285	B-4	一段	36	30	2	極暗褐色粘質シルト	—	—		
286	B-4	一段	65	20	6	極暗褐色粘質シルト	—	—		
287	B-4	一段	50	30	4	極暗褐色粘質シルト	—	—		
288	B-4	半截	90	80	29	暗灰褐色粘土	—	—	土器	
289	B-4	半截	125	100	37	極暗褐色粘質シルト	—	—		
290	C-1	完掘	90	80	32	極暗褐色粘質シルト(極暗灰褐色シルト塊を多く含む)	暗灰色粘土	—		

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成14年度発掘調査概要

291	C-1	完掘	80	30	20	極暗褐色粘土(極暗褐色シルト塊を少量含む)	—	—		
292	C-1	完掘	80	40	20	極暗褐色粘土(極暗褐色シルト塊と、暗灰色粘土塊を少量含む)	—	—		
293	C-1	完掘	80	60	15	実測図を参照			土器	図有
295	C-1	完掘	50	40	10	極暗褐色シルト(灰色シルト塊を含む)	—	—		
296	C-1	完掘	54	40	83	極暗褐色シルト(5cm大の灰色極細砂塊を多く含む)	—	—		
297	C-1	完掘	50	46	30	極暗褐色シルト	—	—		
298	C-1	完掘	60	58	31	暗灰色シルト(極暗褐色シルトを少量含む)	極暗褐色粘土			
299	C-1	完掘	100	90	17	極暗褐色シルト(10~20cm大の極暗褐色シルト塊を少量含む)	—	—		
300	C-1	一段	40	30	4	未記入	—	—		
301	C-2	完掘	80	40	35	極暗褐色粘質シルト(3~5cm大の灰色シルト塊を多く含む)	—	—		
302	C-2	完掘	50	40	40	暗灰色シルト(10~20cm大の灰色シルト塊を多く含む)	—	—		
303	C-2	完掘	70	60	21	極暗褐色粘質シルト	—	—		
304	C-2		110	80	15	—	—	—		
305	C-2		120	80	4	—	—	—		
306	C-2	完掘	90	70	4	極暗褐色シルト	—	—		
307	C-2	完掘	80	70	10	極暗褐色シルト(3~5cm大の灰色シルト塊を少量含む)	—	—		
308	C-2	完掘	50	40	15	極暗褐色シルト	—	—		
309	C-2	完掘	90	80	15	—	—	—		
310	C-2	完掘	110	90	18	暗灰色シルト	—	—		
311	C-2	完掘	150	60	4	極暗褐色粘質シルト(5cm大の極暗褐色シルト塊を少量含む)	—	—		
312	C-2	完掘	120	120	10	—	—	—		
313	C-2	完掘	50	46	16	極暗褐色粘質シルト(20cm大の灰色シルト塊を少量含む)	—	—		
314	C-2	完掘	110	36	20	極暗褐色粘質シルト(20cm大の灰色シルト塊を少量含む)	—	—	土器	
315	C-2	完掘	150	30	8	極暗褐色粘質シルト	—	—		
316	C-2	完掘	60	50	7	極暗褐色シルト	—	—		
317	C-2	完掘	80	70	8	極暗褐色シルト	—	—		
318	C-2	完掘	40	40	7	—	—	—		
319	C-2	完掘	220	60	1	—	—	—		
320	C-2	完掘	120	68	29	極暗褐色粘質シルト	—	—		
321	C-2	完掘	80	50	12	極暗褐色シルト	—	—		
322	C-2	完掘	90	70	14	極暗褐色粘質シルト	—	—		
323	C-2	完掘	80	60	6	極暗褐色粘質シルト(10~20cm大の灰色シルト塊を少量含む)	—	—		
324	C-2	完掘	80	50	16	極暗褐色粘質シルト	灰色極細砂	—		
325	C-2	完掘	40	30	11	極暗褐色粘質シルト(3cm大の灰色シルト塊を含む)	灰色シルト	—		
326	C-2	完掘	150	50	10	暗灰色粘質シルト(3cm大の灰色シルト塊を少量含む)	—	—		
327	C-2	完掘	70	32	8	極暗褐色粘質シルト(3cm大の灰色極細砂塊を少量含む)	—	—		
328	C-2	完掘	90	80	4	極暗褐色シルト	—	—		
329	C-2	完掘	90	25	3	極暗褐色粘質シルト	—	—		
332	C-2	完掘	90	40	13	極暗褐色粘質シルト(暗灰色シルト塊を少量含む)	—	—	土器	
333	C-2	半載	50	30	11	暗灰色粘質シルト	—	—		
334	C-2	完掘	70	56	4	極暗褐色粘質シルト(灰色シルト塊を多く含む)	—	—		
335	C-2	完掘	90	60	13	極暗褐色粘質シルト	—	—		

遺構 番号	地区	掘削 状況	長軸	短軸	深さ	第1層	第2層	第3層	出土 遺物	備考
336	C-2	一段	170	34	4	暗褐色粘質シルト	—	—		
337	C-2	完掘	75	30	3	—	—	—		
338	C-2	完掘	80	70	3	—	—	—		
339	C-2	完掘	150	110	100	極暗褐色粘土(暗褐色シルト塊・ 極暗褐色シルト塊を少量含む)	—	—	土器	
340	C-2	完掘	110	100	11	極暗褐色粘土(20cm大の極暗褐色 シルト塊を少量含む)	—	—	土器	
341	C-2	完掘	60	60	16	灰褐色粘質シルト	—	—		
342	C-2	完掘	30	20	14	—	—	—		
343	C-2	完掘	134	114	20	灰褐色シルト	暗灰褐色シルト	—		
344	C-2	完掘	100	70	15	極暗褐色シルト	—	—		
345	C-2	完掘	100	94	14	極暗褐色粘質シルト	—	—		
346	C-2	完掘	80	30	13	極暗褐色粘質シルト(極暗褐色 シルト塊を多く含む)	—	—		
347	C-2	完掘	24	22	20	極暗褐色粘質シルト	—	—		
348	C-2	完掘	50	40	26	極暗褐色粘質シルト	—	—		
349	C-2	完掘	130	50	13	極暗褐色粘質シルト(3~10cm大 の灰色シルト塊を少量含む)	—	—		
351	C-2	完掘	80	60	21	極暗褐色粘質シルト(2cm大の灰 色粘質シルト塊を少量含む)	—	—		
353	C-2	完掘	100	40	5	極暗褐色粘質シルト(2cm大の灰 色シルト塊を少量含む)	—	—		
355	C-2	完掘	60	60	8	極暗褐色シルト	—	—		
356	C-2	完掘	80	40	15	—	—	—		
357	C-2	完掘	100	95	13	極暗褐色粘質シルト	—	—		
358	C-2	完掘	27	28	16	暗灰褐色シルト	—	—		
359	C-2	完掘	110	50	29	極暗褐色粘質シルト	暗灰色シルト(青灰色 シルト塊を多く含む)	—		
360	C-2	完掘	30	24	1	極暗褐色シルト(2cm大の灰色シ ルト塊を少量含む)	—	—		
361	C-2	完掘	80	30	9	極暗褐色粘質シルト	—	—		
362	C-2	完掘	40	30	7	極暗褐色粘質シルト	—	—		
363	C-2	完掘	34	30	7	暗灰褐色シルト(灰色シルト塊を多 く含む)	—	—		
364	C-2	完掘	60	58	6	暗灰褐色シルト	—	—		
365	C-2	完掘	80	65		暗灰褐色シルト	—	—		
366	C-2	完掘	100	70	12	極暗褐色粘質シルト	—	—		
367	C-3	完掘	40	30	7	—	—	—		
368	C-2	完掘	100	80	7	暗灰色粘質シルト	—	—		
369	C-2	完掘	100	84	12	暗灰色粘質シルト	—	—		
370	C-3	完掘	130	40	7	—	—	—		
371	C-3	完掘	36	26	5	—	—	—		
372	C-3	一段	36	30	9	暗灰色粘質シルト	—	—		
373	C-3	半截	80	52	9	灰褐色粘質シルト	—	—		
374	C-3	半截	90	64	4	暗灰褐色粘質シルト	—	—		
375	C-3	完掘	40	20	8	—	—	—		
376	C-3	半截	62	50	8	極暗褐色粘質シルト	—	—		
377	C-3	半截	74	64	11	暗灰色粘質シルト	—	—		
378	C-3	半截	60	46	8	暗灰褐色粘質シルト	—	—		
379	C-3	半截	94	70	1	暗灰褐色粘質シルト	—	—		
380	C-3	半截	60	20	17	暗灰褐色粘質シルト	—	—		
381	C-3	半截	80	77	6	暗灰色粘質シルト	—	—		
382	C-3	一段	80	50	7	極暗褐色粘質シルト(3cm大の極 暗褐色粘質シルト塊を少量含む)	—	—		

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成14年度発掘調査概要

383	C-3	一段	80	50	5	極暗褐色粘質シルト(15cm大の暗灰色シルト塊を多く含む)	—	—		
384	C-3	一段	50	40	4	極暗褐色粘質シルト	—	—		
386	C-3 ~ 4		120	100	4	暗灰色粘土	—	—		
387	C-3	一段	100	54	22	極暗褐色粘質シルト	—	—		
388	C-3	一段	60	38	6	極暗褐色粘質シルト	—	—	土器	
389	C-3	半截	170	120	2	極暗褐色粘質シルト	—	—		
390	C-3	半截	74	70	4	極暗褐色粘質シルト	—	—		
391	C-3	半截	84	80	5	極暗褐色粘質シルト	—	—		
392	C-3	半截	70	50	28	極暗褐色粘質シルト	青灰色シルト	—		
393	C-3	半截	170	70	6	暗灰色粘質シルト	—	—		
394	C-3	半截	80	70	5	暗灰色粘質シルト	—	—		
395	C-3	完掘	160	153	46	実測図を参照	—	—	土器 木器	固有
396	C-3	半截	40	30	2	暗灰色粘質シルト	—	—		
397	C-3	半截	60	50	13	灰色粘質シルト	—	—		
398	C-3	完掘	50	30	5	—	—	—		
399	C-3	半截	90	52	33	極暗褐色粘質シルト	灰色粘質シルト	—		
400	C-3	半截	64	46	16	灰色粘質シルト	—	—		
401	C-3	一段	28	20	5	暗灰色シルト(暗灰色粘土塊を含む)	—	—		
402	C-3	一段	30	22	3	暗灰色シルト(5cm大の極暗褐色粘質シルトを少量含む)	—	—		
403	C-3	半截	46	34	7	暗灰色シルト	—	—		
404	C-3	完掘	60	20	4	極暗褐色粘質シルト(10cm大の灰色粘土塊を含む)	—	—		
405	C-3	半截	60	50	12	暗褐色粘質シルト	—	—		
406	C-3	半截	68	20	6	灰色粘質シルト	—	—		
407	C-3	完掘	20	18	3	—	—	—		
408	C-3	完掘	60	50	0	—	—	—		
409	C-3	完掘	42	38	0	暗褐色シルト	—	—		
410	C-3	完掘	36	28	0	極暗褐色シルト	—	—		
411	C-3	完掘	60	60	12	灰色粘土	—	—		
412	C-3	完掘	100	70	19	極暗褐色粘土	—	—		
413	C-3	半截	64	50	17	暗灰色粘質シルト	灰色粘質シルト	—		
414	C-3	一段	120	50	8	灰色粘質シルト	—	—		
415	C-3	完掘	74	50	5	—	—	—		
416	C-3	完掘	50	40	1	暗褐色粘質シルト	—	—		
417	C-3	半截	50	50	10	暗褐色粘質シルト	—	—		
418	C-3	半截	50	45	13	暗褐色粘質シルト	—	—		
419	D-3	完掘	140	70	8	暗灰色シルト	—	—		
420	D ~ C -4	一段	40	20	5	極暗褐色粘土	—	—		
421	C-4	一段	40	32	10	暗褐色粘土	—	—		
422	C-4	一段	102	70	2	極暗褐色粘質シルト	—	—		
423	B ~ C -4	完掘	124	30	3	極暗褐色粘質シルト	—	—		
424	C-4	検出	70	20	6	黒褐色粘質シルト	—	—		
425	C-4	半截	170	90	10	極暗褐色粘土	暗灰色粘土	—		
426	C-4	一段	100	60	3	黒褐色粘質シルト	—	—		
427	C-4	一段	300	50	3	黒褐色粘質シルト	—	—		
428	C-4	半截	80	60	34	暗灰色粘土	—	—		
429	C-4	一段	54	20	2	黒褐色粘質シルト	—	—		
430	D-3	半截	60	20	15	極暗褐色粘土	黄灰色シルト	—		

遺構 番号	地区	掘削 状況	長軸	短軸	深さ	第1層	第2層	第3層	出土 遺物	備考
431	C-4	一段	55	50	1	黒褐色粘質シルト	—	—		
432	C-4	一段	50	30	1	極暗灰色粘質シルト	—	—		
433	C-4	一段	55	50	4	黒褐色粘質シルト	—	—		
434	C-4	一段	100	14	1	極暗灰色粘質シルト	—	—		
435	C-4	一段	50	30	7	極暗褐色粘質シルト	—	—		
436	C-4	一段	50	24	8	極暗褐色粘質シルト	—	—		
437	C-4	一段	70	60	3	極暗褐色粘土	—	—		
439	C-4	一段	56	40	3	極暗灰褐色粘質シルト	—	—		
440	C-4	一段	130	86	22	極暗褐色粘土	—	—		
441	C-4	一段	55	45	5	極暗褐色粘土	—	—		
442	C-4	一段	60	30	2	黒褐色粘質シルト	—	—		
443	C-4	一段	40	30	5	極暗褐色粘質シルト	—	—		
444	C-4	一段	80	50	4	暗褐色粘質シルト	—	—		
445	C-4	一段	110	80	8	黒褐色粘質シルト	—	—		
446	C-4	半截	70	20	7	極暗灰色粘質シルト	—	—		
447	C-4	半截	140	80	59	暗灰色粘土	—	—		
448	C-4	一段	80	70	5	極暗灰褐色粘質シルト(30cm大の極暗褐色粘土塊を少量含む)	—	—		
449	C-4	一段	70	40	2	極暗灰褐色粘質シルト	—	—		
450	C-4	一段	40	34	2	極暗灰色粘質シルト	—	—		
451	C-4	半截	50	30	2	極暗灰色粘質シルト	—	—		
452	C-4	一段	22	20	7	極暗灰色粘質シルト	—	—		
453	C-4	一段	44	38	6	極暗灰色シルト	—	—		
454	C-4	半截	100	98	43	暗灰褐色粘土	暗褐色粘質シルト	暗灰褐色粘質シルト		
455	C-4	一段	70	40	4	極暗灰色粘質シルト	—	—		
456	C-4	一段	70	70	4	黒灰色粘質シルト	—	—		
457	C-4	半截	96	80	42	黒褐色粘土	暗灰色粘土	—		
458	D-3	一段	90	30	14	暗灰褐色粘土	—	—		
459	C-3~4	半截	92	80	7	暗褐色粘質シルト(淡灰色シルト塊が帯状に含まれる)	—	—		
460	C-4	一段	30	20	8	暗灰褐色粘土(暗褐色シルト塊を含む)	—	—		
461	C-4	一段	60	50	4	暗灰色粘質シルト	—	—		
462	C-4	一段	50	40	4	極暗灰色シルト	—	—		
463	C-4	一段	30	30	4	暗灰色粘質シルト	—	—		
464	C-4	半截	190	120	54	黒褐色粘土	暗灰色シルト	暗灰褐色粘質シルト(青灰色シルト塊含む)		
465	D-4	一段	34	30	2	極暗灰褐色粘土	—	—		
466	D-1	完掘	120	100	39	極暗灰褐色砂質シルト	緑灰色シルト	—		
467	D-1	完掘	190	110	14	極暗褐色粘土	暗灰褐色粘土	—		
468	C~D-2	完掘	95	30	7	極暗灰褐色シルト	暗灰色シルト	—		
469	D-1	半截	50	36	7	黒褐色粘質シルト	—	—		
471	D-2	完掘	100	80	13	黒褐色粘質シルト	暗灰褐色粘質シルト	—		
472	D-2	半截	30	30	7	暗褐色粘土	—	—		
473	D-2	完掘	80	62	5	黒褐色粘質シルト	—	—		
474	D-2	完掘	50	30	6	—	—	—		
475	D-2	完掘	30	30	10	暗褐色シルト	—	—		
476	D-2	完掘	60	60	13	暗褐色粘土	灰色シルト	—		
477	D-2	完掘	30	28	6	—	—	—		
478	D-2	完掘	100	90	40	暗灰褐色粘土	黒灰褐色砂質シルト	暗灰色シルト		

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成14年度発掘調査概要

479	D-2	完掘	54	40	12	暗褐色砂質シルト	極暗褐色砂質シルト	—		
480	D-2	完掘	40	30	3	—	—	—		
481	D-2	完掘	45	30	35	暗灰色砂質シルト	暗褐色シルト	暗灰褐色粘土		
483	D-2	完掘	50	50	11	黒灰褐色砂質シルト	暗褐色粘土	—		
484	D-2	完掘	80	40	18	黒灰褐色シルト	—	—		
485	D-2	完掘	46	36	10	極暗灰色シルト	暗灰色シルト	—		
486	D-2	完掘	50	36	10	—	—	—		
487	D-2	完掘	110	50	3	暗灰色シルト	—	—		
488	D-2	完掘	70	45	20	—	—	—		
489	D-2	完掘	45	40	5	暗灰褐色シルト	暗褐色粘土	—		
490	D-2	完掘	100	50	50	黒灰褐色粘土	暗灰色粘土	—		
491	D-2	完掘	80	70	58	極暗灰褐色粘土	暗褐色粘土	暗灰色粘土		
492	D-2	完掘	64	36	45	暗褐色砂質シルト	—	—		
493	D-2	完掘	130	100	25	黒灰褐色粘土(暗褐色砂質シルト塊含む)	暗褐色灰色粘土	—		
494	D-2	完掘	60	50	13	—	—	—		
495	D-2	検出	60	60	13	暗灰褐色粘土	—	—		
496	D-2	完掘	70	50	15	灰色シルト	暗灰色シルト	—		
497	D-2	完掘	70	30	24	黒褐色粘土	—	—		
498	D-2	半截	66	14	24	極暗灰褐色粘土(8cm大の灰色シルト塊を少量含む)	—	—		
499	D-2	完掘	120	90	24	黒色粘質シルト	暗灰色粘質シルト	—		
500	D-2	完掘	120	60	30	暗灰褐色シルト	暗灰色粘質シルト(淡青灰色シルト塊を多く含む)	—		
501	D-2	完掘	80	72	7	暗灰褐色シルト	—	—		
502	D-2	完掘	150	130	13	極暗灰褐色シルト	—	—		
503	D-2	完掘	35	30	5	—	—	—		
505	D-2	完掘	25	24	5	—	—	—		
506	D-2	完掘	110	80	5	極暗灰褐色粘質シルト	—	—		
507	D-2	完掘	110	50	5	極暗灰褐色シルト	—	—		
508	D-2	完掘	70	50	23	灰褐色粘質シルト	—	—		
510	D-2	完掘	90	80	32	暗灰褐色粘質シルト	—	—		
511	D-2	完掘	50	20	5	—	—	—		
512	D-2	完掘	180	160	50	暗灰色粘質シルト	暗青灰色粘質シルト	暗灰色シルト	土器	
513	D-2	完掘	80	70		暗灰色シルト	—	—	土器	
514	D-2	完掘	90	30	2	極暗灰褐色シルト	—	—		
515	D-2	完掘	40	20	6	暗灰色粘質シルト	—	—		
516	D-2	完掘	90	40	11	暗灰色粘質シルト	—	—		
517	D-3	半截	24	22	7	暗灰色粘質シルト	—	—		
518	D-2	完掘	80	24	23	暗灰色シルト	—	—		
519	D-2～3	完掘	120	80	36	灰褐色シルト	極暗灰褐色シルト	灰色粘質シルト	土器	
520	D-3	完掘	70	36	26	暗灰褐色粘質シルト	—	—	土器	
521	D-3	完掘	120	90	17	暗灰褐色シルト	—	—		
522	D-3	完掘	60	40	6	極暗灰色シルト	—	—		
523	D-3	完掘	40	30	8	極暗褐色粘土	—	—		
524	D-3	完掘	40	40	5	暗灰褐色粘質シルト	—	—		
525	D-3	完掘	80	64	4	暗灰色シルト	—	—		
526	D-3	一段				暗灰色粘質シルト	—	—		
527	D-3	完掘	80	60	8	極暗灰褐色粘質シルト	—	—		
529	D-3	一段	30	22	6	極暗褐色粘土	—	—		
530	D-3	半截	90	50	35	極暗灰褐色粘質シルト(淡青灰色粘質シルト塊を含む)	—	—		

遺構 番号	地区	掘削 状況	長軸	短軸	深さ	第1層	第2層	第3層	出土 遺物	備考
532	D-3	完掘	75	45	10	—	—	—		
533	D-3	完掘	80	70	17	極暗灰褐色粘質シルト	—	—		
534	D-3	完掘	25	22	30					図有
535	D-3	完掘	35	30	7	—	—	—		
536	D-3	完掘	60	30	7	—	—	—		
537	D-3	完掘	50	35	5	—	—	—		
538	D-3	完掘	80	50	18	暗灰褐色粘土(淡青灰色粘土塊を含む)	—	—		
539	D-3	半截	130	105	26	暗灰褐色粘質シルト	—	—		
540	D-3	半截	100	60	20	暗灰褐色粘質シルト	—	—		
541	D-3	完掘	25	23	9	—	—	—		
542	D-3 ~ 4	半截	70	60	14	青灰色粘質シルト(5cm大の極暗灰褐色粘質シルト塊を少量含む)	—	—		
543	D-3		60	50	1	極暗灰色粘質シルト	—	—		
544	D-4		40	38	14	暗灰色粘質シルト	—	—		
546	D-3	完掘	50	40	9	—	—	—		
547	D-3	一段	45	40	4	黄灰色粘質シルト(2cm大の極暗灰褐色粘質シルト塊を少量含む)	—	—		
548	D-3	半截	80	50	12	極暗灰色粘質シルト	—	—		
549	D-3	完掘	110	70	8	暗灰褐色シルト	—	—		
550	D-3	一段	60	50	9	極暗灰褐色粘質シルト	—	—		
551	D-3	半截				淡灰褐色シルト	—	—		
552	D-3	半截	74	50	11	極暗灰褐色粘質シルト(淡青灰色粘質シルト塊を少量含む)	—	—		
554	D-3	半截	36	34	3	極暗灰色粘質シルト	—	—		
555	D-3	半截	36	28	57	灰色粘質シルト	—	—		
557	D-3	一段	70	30	11	極暗暗灰色粘土(8cm大の灰色シルト塊を少量含む)	—	—		
558	D-3	完掘	62	50	4	—	—	—		
559	D-3	半截	70	64	20	暗灰色粘質シルト	灰色粘質シルト	—		
560	D-3	半截	60	50	17	暗褐色シルト	暗灰色粘土	—		
561	D-3	半截	30	24	3	暗灰色粘質シルト	—	—		
562	D-3	完掘	24	22	10	—	—	—		
563	D-3	半截	54	24	13	暗灰褐色粘質シルト	—	—		
565	D-3	一段	60	20	6	灰色粘質シルト	—	—		
566	D-3	半截	60	50	6	灰色粘質シルト	—	—		
567	D-3	完掘	35	25	5	—	—	—		
568	D-3	完掘	50	20	15	暗灰色粘質シルト	—	—		
569	D-4	完掘	20	18	10	—	—	—		
570	D-4	完掘	150	80	10	極暗灰色粘質シルト	—	—		
571	D-4	完掘	30	22	35	—	—	—		
572	D-4	完掘	50	30	2	—	—	—		
573	D-4	完掘	70	40	4	—	—	—		
574	D-4	完掘	60	30	3	—	—	—		
575	D-4	半截	90	60	14	暗灰褐色粘土	—	—		
576	D-4	一段	69	42	9	暗灰色シルト(5cm大の極暗暗灰色粘質シルトを少量含む)	—	—		
577	D-4	一段	36	32	7	極暗灰褐色粘質シルト	—	—		
578	D-4	一段	80	30	9	極暗暗灰色粘質シルト	—	—		
579	D-4	一段				極暗暗灰色粘質シルト	—	—		
580	D-4	一段	50	46	5	極暗灰褐色粘質シルト	—	—		
581	D-4	半截	80	70	24	黒灰褐色粘土	暗灰色シルト	—		

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成14年度発掘調査概要

582	D-4	一段	28	26	2	暗灰褐色粘土	—	—		
583	D-4	半載	100	70	32	極暗灰褐色粘土	暗褐色粘質シルト	暗灰褐色粘土		
584	D-4	一段	70	62	7	暗灰褐色粘質シルト	—	—		
585	D-4	一段	114	40	8	暗灰褐色粘土	—	—		
586	D-4	半載	100	70	13	黒灰褐色粘土	—	—		
587	D-4	半載	100	60	26	暗灰褐色粘質シルト	暗灰褐色粘土	—		
588	D-4	一段	100	20	10	暗灰褐色粘土	—	—		
589	D-4	一段	130	70	9	極暗灰褐色粘土	—	—		
590	D-4	検出				暗褐色粘質シルト	—	—		
591	D-4	一段	66	30	3	暗灰褐色粘土	—	—		
592	D-4	一段	40	38	3	極暗灰褐色粘土	—	—		
593	D-4	半載	90	66	18	暗灰褐色粘土	黒灰褐色粘土	—		
594	D-4	半載	50	48	8	黒褐色粘土	—	—		
596	D-4	一段	54	40	10	黒灰褐色粘土	—	—		
597	D-4	半載	114	60	18	黒灰褐色粘土	暗灰褐色シルト	—		
598	D-4	一段	70	40	5	暗灰褐色粘土	—	—		
599	D-4	完掘	80	50	7	暗灰色粘質シルト	—	—		
600	D-4	完掘	36	20	35	—	—	—		
601	D-4	一段	80	70	14	暗灰褐色粘質シルト(黄灰色シルト塊を多く含む)	暗灰色シルト	—		
602	D-4	一段	60	26	3	極暗灰褐色粘質シルト	—	—		
603	D-4	半載	60	52	4	極暗褐色粘質シルト	—	—		
604	D-4	完掘	30	30	10	暗灰褐色粘土(暗灰色砂質シルト塊を含む)	暗灰色砂質シルト	—		
605	D-4	半載	50	50	5	黒褐色粘土(黄灰色シルト塊を多く含む)	—	—		
606	D-4	半載	60	60	9	暗灰褐色粘質シルト	—	—		
607	E-4	一段	54	12		黒灰褐色粘土(1cm大の黄灰色シルト塊を含む)	—	—		
608	E-4	一段	70	50	5	極暗灰褐色粘土	—	—		
609	E-4	完掘	50	36	4	暗灰色粘質シルト	—	—		
611	E-4	半載	100	58	17	暗灰色砂質シルト	—	—		
612	E-4	一段	60	30	10	極暗灰褐色シルト	—	—		
613	E-4	一段	24	20	2	未記入	—	—		
614	E-4	一段	70	46		極暗褐色シルト	—	—		
615	E-4	完掘	32	30	9	—	—	—		
616	E-4	一段	210	40	2	極暗灰褐色粘質シルト	—	—		
617	D-4	一段	30	20	5	極暗褐色粘土	—	—		
618	E-4	半載	66	60	7	黒褐色粘土(黄褐色シルト塊を含む)	—	—		
619	D-4		62	53	36	—	—	—		
620	D-4	一段	115	80	1	極暗灰褐色粘質シルト(10~20cm大の青灰色シルト塊を少量含む)	—	—		
621	C-4	半載	140	90	19	極暗灰褐色粘質シルト	—	—		
622	E-4	一段	130	70	2	極暗灰褐色粘質シルト(20~30cm大の暗青灰色シルト塊を多く含む)	—	—		
623	E-4	一段	100	60	6	暗灰褐色粘質シルト(極暗灰褐色粘質シルト塊を少量含む)	—	—		
624	E-4	一段	110	70	2	極暗灰褐色粘土(30cm大の極暗褐色シルト塊を多く含む)	—	—		
625	C-4	一段	70	45	5	極暗褐色粘質シルト	—	—		
626	C-4	一段	100	50	4	極暗褐色粘質シルト(3cm大の青灰色シルト塊を少量含む)	—	—		
627	C-4	一段	50	30	6	極暗褐色粘質シルト	—	—		
628	C-4	一段	45	30	5	極暗褐色粘質シルト	—	—		
629	C-4	一段	60	40	6	暗灰色粘質シルト	—	—		

遺構 番号	地区	掘削 状況	長軸	短軸	深さ	第1層	第2層	第3層	出土 遺物	備考
630	C-4	半截	75	65	19	暗褐色粘土	—	—		
631	C-4	一段	60	25	5	極暗灰色粘質シルト	—	—		
632	C-4	半截	120	110	42	暗灰褐色粘質シルト	—	—		
633	C-4	一段	50	25		黒灰色粘土	—	—		
634	C-4	一段	55	30	9	極暗灰色粘土	—	—		
635	C-4	半截	80	75	29	暗灰褐色粘質シルト	—	—		
636	C-4	一段	45	40	2	極暗灰色粘質シルト	—	—		
637	C-4	半截	90	70	30	極暗灰褐色粘土	—	—		
638	C-4		100	50	33	—	—	—		
639	C-4	半截	35	30	4	極暗灰色粘土	—	—	木器	
640	C-4	半截	135	100	6	極暗灰褐色粘土	—	—		
641	C-4		70	50	53	—	—	—		
642	C-4	一段	40	35	4	極暗褐色粘質シルト	—	—		
643	C-4	一段	45	35	6	極暗灰色粘土	—	—		
644	C-4	一段	65	40	3	極暗灰褐色粘土	—	—		
645	C-4	半截	120	80	19	暗褐色粘質シルト	—	—		
646	C-4	一段	60	55	4	極暗褐色粘質シルト	—	—		
647	C-4	半截	100	75	31	暗灰色粘土	—	—		
648	C-4	一段	50	40	3	極暗褐色粘質シルト	—	—		
649	C-4	半截	80	60	25	暗灰褐色粘土	極暗灰色粘土(淡青灰色粘土塊を含む)	—		
650	C-4	半截	65	55	27	極暗灰色粘土	—	—		
651	C-4	一段	50	45	4	極暗褐色粘質シルト(5cm大の暗褐色粘質シルト塊を少量含む)	—	—		
652	C-4	一段	55	40	3	極暗褐色粘質シルト	—	—		
653	C-4	半截	90	65	28	暗灰褐色粘土	極暗灰色粘土(淡青灰色粘土塊を含む)	—		
654	C-4	半截	60	60	4	極暗褐色粘質シルト	—	—		
655	C-4	半截	90	65	20	極暗灰褐色粘土	極暗灰色粘土	—		
656	C-4	一段	85	35	3	極暗褐色粘質シルト	—	—		
657	D-4	一段	85	55	6	極暗灰褐色粘質シルト(5cm大の極暗褐色粘質シルト塊を少量含む)	—	—		
658	C-5	半截	70	60	27	極暗灰色粘土	—	—		
659	C-5	半截	110	70	15	極暗灰色粘土	—	—		
660	C-5	完掘	70	60	29	実測図を参照			土器	図有
661	C-5	半截	50	35	25	極暗灰褐色粘質シルト	—	—		
662	C-5	一段	50	40	4	暗灰褐色粘質シルト	—	—		
663	C-5	一段	60	50	2	黒褐色粘土	—	—		
664	C-5	半截	60	45	20	極暗褐色粘土	—	—		
665	C-5	半截	70	50	24	極暗灰褐色粘土	—	—	土器	
666	C-5	一段	90	25	4	黒灰色粘土	—	—		
667	C-5	半截	70	50	33	暗灰褐色粘土	—	—		
668	C-5	半截	90	60	37	暗灰褐色粘土	—	—		
669	C-5	一段	90	50	4	極暗灰色粘土	—	—		
670	C-5	一段	65	45	2	極暗灰色粘土	—	—		
671	C-5	一段	45	35	4	極暗灰色粘質シルト(暗褐色シルト塊を含む)	—	—		
672	C-5	完掘	70	45	11	—	—	—		
673	C-5	半截	60	45	25	極暗灰褐色粘土	—	—		
674	C-5	半截	75	55	26	極暗灰褐色粘土	—	—		
675	C-5	一段	45	35	9	極暗灰色粘土	—	—		
676	C-5	一段	60	50	2	黒灰色粘土(褐色シルト塊を含む)	—	—		

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成14年度発掘調査概要

677	C-D -5	半截	100	70	24	暗灰褐色粘土	黒褐色粘土	-		
678	C-5	半截	210	110	30	極暗灰褐色粘土	-	-		
679	C-5	半截	85	70	29	極暗灰褐色粘土	-	-		
680	C-5	一段	60	35	3	極暗灰褐色粘質シルト	-	-		
681	C-5	半截	80	60	24	極暗灰色粘質シルト(褐色シルト塊を含む)	-	-		
682	C-5	一段	45	45	7	極暗灰色粘質シルト(褐色シルト塊を含む)	-	-		
683	C-5	一段	50	30	3	暗灰色粘質シルト	-	-		
685	C-5	一段	75	60	2	暗灰色粘質シルト	-	-		
686	C-5	一段	80	55	4	灰色シルト(暗灰色粘土塊を含む)	-	-		
687	C-5	一段	60	40	2	暗褐色粘質シルト	-	-		
688	C-5	一段	60	45	2	極暗灰褐色粘土	-	-		
689	C-6	一段	30	25	5	暗褐色粘土	-	-		
690	C-6	一段	65	45	7	極暗褐色粘土	-	-		
691	C-5	一段	35	30	7	暗褐色粘土(淡灰色シルト塊が帯状に含まれる)	-	-		
692	C-6	一段	65	40	14	極暗灰褐色粘土	-	-		
693	C-5	一段	45	35	2	灰色シルト(暗褐色粘土塊含む)	-	-		
694	C-6	一段	90	65	2	暗褐色粘土	-	-		
695	C-6	一段	50	40	3	極暗褐色粘土	-	-		
696	C-6	一段	115	90	12	暗灰褐色粘土	-	-		
697	C-6		130	90	5	-	-	-		
698	C-6	一段	40	25		極暗灰色粘土	-	-		
699	C-6	一段	55	50	3	極暗灰褐色シルト(極暗灰色粘土塊を少量含む)	-	-		
700	C-6	一段	45	30	6	極暗褐色粘土(極暗灰色粘土塊を少量含む)	-	-		
701	C-6	一段	90	60	9	極暗褐色粘土	-	-		
702	C-6	一段	75	50		極暗褐色粘土	-	-		
703	D-6	一段	105	45	5	極暗灰色粘土	-	-		
704	D-4	一段	50	45	1	極暗灰褐色粘質シルト	-	-		
705	D-4	一段	55	40	5	極暗褐色粘質シルト(暗褐色シルト塊を少量含む)	-	-	土器	
706	D-4	半截	120	80	29	極暗褐色粘質シルト	暗灰褐色粘土	-		
707	D-4	半截	80	60	29	極暗灰褐色粘土	黒褐色粘質シルト	-		
708	D-4	一段	65	45	1	極暗褐色粘土	-	-		
709	D-4	一段	110	45	5	極暗褐色粘質シルト(10~20cm大の暗灰褐色粘土塊を少量含む)	-	-		
710	D-4	半截	165	110	45	暗灰褐色粘土	暗褐色粘質シルト(暗灰褐色シルト塊を含む)	暗褐色粘土		
711	D-4	一段	75	30	7	極暗褐色粘質シルト	-	-		
712	D-4	半截	90	80	45	暗褐色粘質シルト	暗灰褐色粘土	-		
713	D-4	半截	75	50	31	暗褐色粘土	-	-		
714	D-4	一段	35	25	5	極暗褐色粘土	-	-		
715	D-4	一段	80	20	5	暗褐色シルト(15cm大の極暗灰褐色粘質シルト塊を少量含む)	-	-		
716	D-4	半截	110	80	48	暗褐色粘質シルト	暗灰褐色粘質シルト	-		
717	D-4	一段	80	40	6	極暗褐色粘質シルト	-	-		
718	D-4	検出				極暗灰褐色シルト	-	-		
719	D-4	一段	50	40	8	極暗褐色粘質シルト(3~5cm大の暗青灰色シルト塊を少量含む)	-	-		
720	D-4	一段	50	40	6	黒灰褐色粘土	-	-		
721	D-4	一段	40	35	2	極暗褐色粘質シルト(5cm大の極暗灰褐色粘質シルト塊を少量含む)	-	-		

遺構 番号	地区	掘削 状況	長軸	短軸	深さ	第1層	第2層	第3層	出土 遺物	備考
722	D-5	一段	55	30	1	極暗灰褐色粘質シルト	—	—		
723	D-5	半截	75	75	43	暗灰褐色粘土	極暗灰色粘土	—		
724	D-5	一段	60	50	1	暗灰褐色シルト	—	—		
725	D-5	半截	80	70	50	暗灰褐色粘土(20cm大の極暗灰色粘土塊を少量含む)	—	—		
726	D-5	半截	100	90	35	暗灰色粘土	極暗灰色粘土	暗青灰色粘土		
727	D-5	一段	75	50		暗灰褐色粘質シルト(極暗褐色粘質シルト塊を少量含む)	—	—		
728	D-5	一段	60	50	8	暗灰褐色粘質シルト	—	—		
729	D-5	一段	65	40	3	暗灰褐色粘質シルト	—	—		
730	D-5	一段	50	20	3	暗灰褐色粘質シルト	—	—		
731	D-5	一段	100	70	4	暗灰褐色粘質シルト	—	—		
732	D-5	半截	80	70	40	極暗灰色粘土	暗褐色粘土	—	土器	
733	D-5	半截	100	80	29	極暗灰色粘土	暗灰褐色粘土	—		
734	D-5	半截	160	110	47	極暗灰色粘土	極暗灰褐色粘土	極暗灰色粘土	土器	
735	D-5	一段	50	45	4	暗灰色粘土(15cm大の暗灰褐色粘質シルト塊を少量含む)	—	—		
736	D-5	半截	160	90	9	極暗灰色粘土(1mm大の極細砂、極暗灰褐色粘土塊を含む)	—	—	土器	
737	D-5	一段	90	50	8	暗灰褐色シルト(5cm大の極暗褐色粘質シルト塊を少量含む)	—	—		
738	D-5	一段	100	45	10	暗灰褐色シルト(5cm大の極暗褐色粘質シルト塊を少量含む)	—	—		
739	D-5	一段	55	45	10	暗灰褐色シルト(5cm大の極暗褐色粘質シルト塊を少量含む)	—	—		
740	D-5	半截	140	110	50	極暗灰色粘質シルト	極暗灰褐色粘質シルト	極暗灰褐色粘質シルト(1~5mm大の粗砂を含む)		
741	D-5	半截	130	110	25	暗灰褐色粘質シルト	極暗褐色粘質シルト	—		
742	D-5	一段	65	50	11	極暗灰褐色シルト(1mm大の粗砂を多く、5~10cm大の極暗褐色粘質シルト塊を少量含む)	—	—		
743	D-5	半截	130	80	45	極暗褐色粘質シルト	極暗褐色粘質シルト	—	土器	
744	D-5	一段	110	70	6	極暗褐色粘質シルト(10cm大の灰色シルト塊と1mm大の粗砂を多く含む)	—	—		
745	D-5	一段	50	45	7	極暗褐色粘質シルト(10cm大の灰色シルト塊を多く含む)	—	—		
746	D-5	一段	80	75	9	極暗褐色粘質シルト(20cm大の極暗褐色シルト塊を少量含む)	—	—		
747	D-5	一段	30	30	6	極暗褐色粘質シルト(5cm大の暗灰褐色粘質シルト塊を少量含む)	—	—		
748	D-5	半截	90	60	2	極暗褐色粘質粘土(10cm大の暗灰色シルト塊を少量含む)	—	—		
749	D-5	半截	90	60	33	極暗褐色粘質粘土(5cm大の暗灰褐色シルト塊を少量含む)	—	—		
750	D-6	半截	150	120	23	極暗灰色粘質シルト	極暗灰褐色粘質シルト			
751	D-5	半截	100	85	50	淡灰色シルト	極暗灰色粘質シルト	極暗灰褐色粘質シルト		
752	D-5	一段	50	45	7	黒灰色粘質シルト(10~15cm大の暗灰色シルト塊を多く含む)	—	—		
753	D-6	半截	110	70	38	極暗褐色粘質粘土	—	—		
754	D-6	一段	40	30	1	黒灰色粘質シルト(5~10cm大の極暗灰褐色シルト塊を少量含む)	—	—		
755	D-6	一段	70	60	9	極暗灰褐色シルト(黒灰色粘質シルト塊を少量含む)	—	—		
756	D-6	一段	80	70	8	極暗灰褐色シルト	—	—	土器	
757	D-6	半截	110	80	3	暗灰色粘質シルト	—	—		

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成14年度発掘調査概要

758	E-4	一段				極暗灰褐色粘土	—	—		
759	E-4	半截	90	80	3	極暗褐色粘質シルト	—	—		
760	E-4	一段	110	40	7	極暗灰褐色粘土(10cm大の極暗褐色シルト塊を少量含む)	—	—		
761	E-4	半截	90	70	15	極暗灰褐色粘土(3cm大の暗青灰色粘土塊を少量含む)	—	—		
762	E-4	一段	60	50	4	極暗灰褐色粘土(10cm大の暗青灰色粘質シルト塊を少量含む)	—	—		
763	E-4	一段	30	25		極暗灰色粘質シルト	—	—		
764	E-4	半截	85	70	23	極暗褐色粘土(暗褐色粘質シルト塊を少量含む)	青灰色粘質シルト	—		
765	E-4	一段	90	80	6	極暗褐色粘土(5cm大の暗褐色粘質シルト塊・20cm大の青灰色シルト塊を少量含む)	—	—		
766	E-4	一段	30	15	5	極暗褐色粘質シルト(3cm大の暗灰色シルト塊を多く含む)	—	—		
767	E-4	一段	110	30	11	極暗褐色粘質シルト(暗褐色シルト塊を少量含む)	—	—		
768	E-5	一段	90	40	6	極暗褐色粘質シルト(極暗褐色粘質シルト塊・暗灰色シルト塊を少量含む)	—	—		
769	E-5	一段	75	60	8	極暗褐色粘質シルト(10cm大の暗灰色粘質シルト塊を少量含む)	—	—		
770	E-5	一段	85	55	3	極暗褐色粘質シルト(極暗褐色粘質シルト塊・暗灰色シルト塊を少量含む)	—	—		
771	E-5	半截	90	70	11	極暗褐色粘土	暗灰褐色粘質シルト	—		
772	E-5	一段	40	30	3	極暗褐色粘質シルト(5cm大の暗灰色シルト塊を少量含む)	—	—		
773	E-5	一段	90	40	4	極暗褐色粘質シルト	—	—		
774	E-5	半截	160	100	51	極暗褐色粘質シルト	極暗灰褐色粘土	暗灰褐色粘土		
776	E-5	半截	110	80	49	暗灰色粘土	暗灰褐色シルト質粘土	—		
777	E-5	半截	160	130	37	暗褐色粘質シルト	極暗灰褐色粘土	暗灰褐色粘土	土器	
778	E-5	半截	90	70	45	極暗褐色粘土	極暗灰褐色粘土	暗灰褐色粘質シルト		
779	E-5	半截	190	90	20	極暗褐色粘土	—	—		
780	E-5	半截	80	80	34	暗褐色粘質シルト(1cm大の礫を多数含む)	暗灰褐色粘土	—		
781	E-5	半截	125	80	2	暗灰褐色粘土	—	—		
782	E-5	一段	40	30	4	黒灰色粘質シルト	—	—		
783	E-6	半截	95	85	29	極暗褐色粘土(5cm大の暗灰色粘土塊を少量含む)	—	—		
784	E-6	半截	110	80	40	暗灰褐色粘土	—	—		
785	E-6	一段	95	75	9	極暗灰褐色粘質シルト(1～5mm大の小礫を含む)	—	—		
786	E-6	半截	130	110	48	極暗灰色粘土(2～5mm大の小礫を含む)	暗灰褐色粘土	—		
787	E-6	半截	115	90	14	極暗灰色粘土(5mm大の小礫を多く含む)	—	—		
788	E-6	半截	110	90	21	極暗灰色粘土(2mm大の小礫を少量含む)	—	—	土器	
789	E-6	一段	140	100	4	極暗灰色粘土	—	—		
790	E-6	一段	230	150	8	極暗灰色粘土	—	—		
791	E-6	半截	80	70	56	極暗褐色粘土	極暗灰色粘土	—		
792	E-6	半截	120	80	48	極暗灰色粘土(2～5mm大の小礫を多く含む)	—	—		
793	E-6	一段	110	80	6	極暗灰色粘質シルト	—	—		
794	E-6	半截	80	60	6	極暗灰色粘質シルト	—	—	土器	
795	E-6	一段	90	55	7	極暗灰色粘質シルト(3mm～5cm大の礫を含む)	—	—	土器	
796	E-6	一段	100	70	5	極暗灰色粘質シルト(2～8mm大の小礫を多く含む)	—	—		

遺構 番号	地区	掘削 状況	長軸	短軸	深さ	第1層	第2層	第3層	出土 遺物	備考
797	E-6	一段	210	30	30	極暗灰色粘質シルト	—	—		
798	E-6	半截	90	70	10	極暗灰色粘質シルト(3mm~5cm大の礫を含む)	—	—		
799	E-7	一段	75	55	8	極暗灰色粘土(5mm~2cm大の小礫を多く含む)	—	—	土器	
800	E-7	半截	170	130	34	暗褐色粘質シルト	黄灰色シルト	極暗灰色粘土	土器	
801	E-7	一段	110	60	14	極暗褐色シルト(礫を多く含む)	—	—		
802	E-7	一段	70	40	3	極暗灰色粘土	—	—		
803	E-7	一段	130	35	4	黒灰色粘土(礫を多く含む)	—	—		
804	E-7	一段	100	20	5	極暗灰色粘土	—	—		
805	E-7	完掘	200	180	49	実測図を参照			土器	図有
806	E-7	完掘	200	120 以上	—	実測図を参照			土器	図有
807	E-7	半截	175	100	50	黒褐色粘質シルト(礫を多く含む)	極暗灰褐色粘質シルト	極暗灰色粘土		
808	E-5	一段	120	45	6	極暗褐色粘質シルト	—	—		
809	E-5	半截	155	90	38	暗褐色粘質シルト	極暗褐色粘質シルト(暗灰褐色粘土塊含む)	暗灰褐色粘土(暗灰褐色粘質シルト塊含む)		
810	D-4	一段	75	60	6	極暗褐色粘質シルト(10~20cm大の暗青灰色シルト塊を少量含む)	—	—		
811	B-4	半截	80	65	26	未記入	—	—		
812	D-7	半截	85	60	5	極暗灰色粘土(黒褐色シルト塊含む)	—	—		
814	C-5	一段	55	45	3	極暗灰褐色粘質シルト	—	—		
815	C-1	半截	50	40	3	極暗褐色シルト(暗灰色シルト塊を少量含む)	—	—	土器	
816	C-1	完掘	60	40	10	—	—	—		
817	C-1	完掘	50	22	5	—	—	—		
819	C-1	完掘	130	60	30	—	—	—		
820	C-1	一段	60	20	6	極暗褐色粘質シルト	—	—		
821	C-1	完掘	90	60	10	—	—	—		
822	C-1	一段	70	56	10	極暗灰褐色粘質シルト	—	—		
824	B-1	完掘	36	22	9	—	—	—		
825	C-3	半截	45	25	15	青灰色シルト	—	—		
826	C-3	半截	50	32	9	青灰色シルト	—	—		
827	C-3	一段	35	30	2	極暗灰色粘質シルト(2cm大の青灰色シルト塊を少量含む)	—	—		
828	C-3	一段	85	30	5	青灰色シルト	—	—	土器	
829	C-3	半截	60	50	29	極暗灰色粘質シルト	青灰色シルト	—		
830	D-3	一段	60	40		暗褐色粘土	—	—		
831	D-3	一段	58	46	10	暗褐色粘土	—	—		
832	D-3	一段	54	50	7	暗灰褐色粘質シルト	—	—		
833	D-3	一段	40	20		暗灰色シルト	—	—		
834	D-3	一段	40	36	9	暗灰褐色粘質シルト	—	—		
835	D-3	完掘	80	64	24	実測図を参照			土器	図有
836	D-3	一段	28	20	6	極暗褐色粘土	—	—		
837	D-3	一段	40	30	5	暗褐色粘土	—	—		
838	D-2	一段	45	30	5	暗灰褐色粘土	—	—		
839	D-2	半截	130	70	46	極暗褐色粘土	暗褐色粘土	—		
840	D-2	半截	220	190	12	暗褐色粘質シルト	暗灰褐色粘土	—		
841	D-2	完掘	30	30		暗灰褐色粘土	—	—		
842	D-2	一段	68	50	21	暗灰褐色粘土	—	—		
843	D-2	完掘	100	60	39	暗褐色粘土	暗灰褐色粘土	—		

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成14年度発掘調査概要

844	D-2	半截	150	80	33	暗灰褐色粘土(黄灰色シルトを斑状に含む)	—	—		
845	D-2	半截	45	30	33	黒褐色シルト	暗灰褐色粘土	—		
846	D-2	半截	70	50	29	極暗灰褐色粘土	—	—		
847	D-2	一段	65	50	10	極暗褐色粘質シルト(極暗褐色粘質シルト塊を少量含む)	—	—		
848	D-2	半截	58	38	10	暗灰色粘土	灰色粘土	—		
850	D-1	一段	80	40	11	黒灰色粘質シルト	—	—		
851	D-1	半截	100	60	22	極暗灰色粘土	—	—		
852	D-1	半截	70	28	13	極暗灰色粘土	—	—		
853	D-2	半截				黒灰色粘土	—	—		
854	D-3	半截	80	60	23	暗灰色シルト	—	—	土器	
855	D-3	半截	55	43	23	暗灰色粘土	—	—		
856	C-5	半截	70	60	34	極暗灰褐色粘土	—	—		
857	C-5	一段	65	50	1	黒灰色粘土(黄灰色シルト塊を多く含む)	—	—		
858	C-5	一段	45	20	2	極暗灰色粘土(黄灰色シルト塊を含む)	—	—		
859	C-5	一段	50	45	4	極暗灰色粘土(暗褐色粘質シルト塊を含む)	—	—		
860	C-5	一段	40	35	7	黒灰色粘土	—	—		
861	C-5	一段	50	40	3	暗褐色粘質シルト	—	—		
862	C-5	一段	50	35	7	極暗灰色粘土	—	—		
863	C-5	一段	55	40	8	極暗灰色粘土	—	—		
864	C-5	一段	30	25	5	暗褐色灰色粘土	—	—		
865	C-5	一段	80	60	0	黒灰色粘土	—	—		
866	C-5	一段	70	20	2	黒灰色粘土	—	—		
867	C-5	半截	110	95	9	極暗灰色粘土	暗灰褐色粘土	—		
868	C-5	半截	130	80	60	黒色粘土	灰色粘土(淡青灰色粘土塊を含む)	暗灰褐色粘土		
869	C-5	一段	45	40	4	極暗灰色粘土	—	—		
870	C-5	一段	45	30	5	黒灰色粘土	—	—		
871	C-5	一段	30	25	6	極暗褐色灰色粘土	—	—		
872	C-5	一段	30	25	6	極暗褐色灰色粘土	—	—		
873	C-5	一段	30	25	3	極暗灰色粘土	—	—		
874	C-6	一段	45	30	2	極暗褐色灰色シルト	—	—		
875	C-6	一段	50	30	1	暗褐色粘質シルト	—	—		
876	C-6	一段	60	50	1	黒灰色粘土	—	—		
877	C-6	一段	40	30	1	極暗灰褐色粘質シルト	—	—		
878	C-6	一段	50	40	7	暗褐色粘質シルト	—	—		
879	C-6	一段	55	53	6	褐色シルト	—	—		
880	C-6	半截	80	65	4	極暗灰色粘土	—	—		
881	C-6	一段	65	45	3	極暗灰褐色粘土	—	—		
882	C-D-6	一段	90	65	3	極暗灰褐色粘土	—	—		
883	C-7	一段	40	40	5	黄褐色シルト(極暗灰褐色粘質シルト塊を少量含む)	—	—		
884	C-7	一段	55	50	6	黄褐色シルト	—	—		
885	D-5	半截	75	65	30	暗灰色粘土	極暗灰色粘土	—		
886	D-5	一段	70	55	4	極暗褐色粘質シルト(10~20cm大の暗褐色粘土塊を少量含む)	—	—		
887	D-5	一段	60	45	2	暗褐色粘土(極暗褐色粘質シルト塊を少量含む)	—	—		
888	D-5	半截	110	85	29	暗褐色粘質シルト(5cm大の極暗灰色粘質シルト塊を少量含む)	—	—		

遺構 番号	地区	掘削 状況	長軸	短軸	深さ	第1層	第2層	第3層	出土 遺物	備考
889	D-5	一段	40	40	11	極暗褐色粘質シルト(1~2mm大の粗砂・5cm大の暗褐色粘質シルト塊を少量含む)	—	—		
890	D-5	一段	40	30	11	極暗褐色粘質シルト(1~2mm大の粗砂・6cm大の暗褐色粘質シルト塊を少量含む)	—	—		
891	D-5	一段	70	60	9	極暗褐色粘土(1~2mm大の粗砂・6cm大の暗褐色粘質シルト塊を少量含む)	—	—		
892	D-5	一段	150	80	8	暗褐色粘質シルト(20cm大の極暗褐色粘質シルト塊を少量含む)	—	—		
893	D-5	一段	90	80	22	極暗褐色粘質シルト(10cm大の暗褐色粘質シルト塊を少量含む)	—	—		
894	D-5	半截	110	100	45	暗灰色粘土	極暗褐色粘土	暗褐色粘土		
895	D-5	半截	160	120	40	極暗褐色粘土	暗褐色粘土	—	土器	
896	D-5	一段	80	60	3	極暗褐色粘質シルト(5cm大の暗褐色粘質シルト塊を少量含む)	—	—		
897	E-5	半截	190	40	45	極暗褐色粘土	極暗褐色粘質シルト	極暗褐色粘土		
898	E-5	半截	150	105	22	極暗褐色粘土(10cm大の極暗褐色粘質シルト塊を多く含む)	—	—		
899	E-5	一段	90	60	6	暗褐色シルト3cm大の極暗褐色粘質シルト塊を多く含む)	—	—		
900	E-5	半截	170	140	51	極暗褐色粘土(極暗褐色シルト塊を多く含む)	極暗褐色粘土	—		
901	E-5	一段	90	60	6	極暗褐色粘質シルト(暗褐色シルト塊を少量含む)	—	—		
902	D-4	一段	90	30	20	極暗褐色粘質シルト	—	—		
903	D-5	一段	140	50	3	暗褐色シルト(極暗褐色粘土塊)	—	—		
904	D-5	一段	75	50	8	極暗褐色粘質シルト(15cm大の極暗褐色粘質シルト塊を少量含む)	—	—		
905	E-5	半截	140	110	60	極暗褐色粘質シルト	極暗褐色粘質シルト	極暗褐色粘土	土器	
906	D-5	一段	90	80	45	極暗褐色粘質シルト(暗褐色粘質シルト塊を少量含む)	極暗褐色粘質シルト	極暗褐色粘質シルト	土器	
907	D-5	一段	90	30	8	黒灰色粘質シルト(5~10cm大の極暗褐色粘質シルト塊を多く含む)	—	—		
908	D-5	半截	105	80	23	極暗褐色粘質シルト(2cm大の暗褐色粘質シルト塊を少量含む)	—	—		
909	D-5	半截	85	75	29	黒灰色粘質シルト	—	—		
910	D-5	一段	45	35	4	極暗褐色粘土	—	—		
911	D-6	一段	120	40	3	極暗褐色粘質シルト	—	—		
912	D-6	一段	65	50	5	極暗褐色粘土(灰色シルト塊・黒褐色シルト塊を含む)	—	—		
913	D-6	一段	50	50	2	極暗褐色粘土(暗褐色粘質シルト塊・小礫を含む)	—	—		
914	D-6	一段	65	40	9	極暗褐色粘土	—	—		
915	D-6	一段	50	40	7	極暗褐色粘質シルト(1~3mm大の粗砂を多く含む)	—	—		
916	D-6	一段	50	40	5	極暗褐色粘質シルト(1mm大の粗砂を多く含む)	—	—		
917	D-6	半截	130	110	17	極暗褐色粘質シルト(礫を含む)	—	—		
918	D-6	一段	130	50	21	暗褐色粘土(1mm大の粗砂・礫を多く含む)	—	—		
919	D-6	一段	60	50	10	暗褐色粘土(褐色シルト塊が斑状に含まれる)	—	—		
920	D-6	一段	80	60	6	黒褐色粘土(礫を多く含む)	—	—		
921	D-6	一段	23	20	6	黒灰色粘土(礫を多く含む)	—	—		
922	D-6	一段	150	50	5	黒灰色粘土(礫を多く含む)	—	—		
923	D-6	半截	80	80	25	黒褐色粘土(礫を多く含む)	—	—		
924	D-6	一段	80	60	8	黒褐色粘土(礫を多く含む)	—	—		

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成14年度発掘調査概要

925	D-6	半截	160	155	20	極暗灰色粘土(礫を多く含む)	暗灰色粘土	—		
926	D-6	半截	110	90	48	暗灰色粘質シルト	暗褐色粘土	暗灰色粘土		
927	D-6	一段	80	65	6	黒灰色粘土(1cm大の礫を多く含む)	—	—		
928	D-6	半截	100	60	22	暗灰色粘土(1mm大の粗砂を多く含む)	—	—		
929	D-6	一段	50	40	8	極暗褐色粘質シルト(1mm大の粗砂を多く含む)	—	—		
930	D-6	一段	40	40	10	極暗褐色粘質シルト(2mm大の粗砂を多く含む)	—	—		
931	D-6	半截	75	65	19	極暗灰色粘質シルト(2mm大の粗砂を多く含む)	—	—	土器	
932	D-6	一段	110	40	45	極暗灰色粘質シルト	暗灰色粘質シルト	—		
933	D-6	半截	100	85	18	暗灰色粘質シルト	—	—		
934	D-6	一段	195	70	20	極暗褐色粘質シルト	—	—	土器 木器	
935	D-6	一段	60	55	7	暗灰色粘質シルト(極暗褐色シルト塊を含む)	—	—		
936	D-6	半截	125	115	19	黒褐色粘土	—	—		
937	D-6	半截	110	70	7	黒灰色粘土(極暗褐色シルト塊を含む)	—	—		
938	D-6	一段	85	75	10	黒褐色粘土(淡灰色シルト塊・礫を多く含む)	—	—		
939	D-6	一段	80	55	10	黒灰色粘土(黄灰色シルト塊・礫を多く含む)	—	—		
940	D-6	半截	80	70	12	黒灰色粘土(礫を多く含む)	—	—		
941	D-6	半截	150	120	22	極暗褐色粘土	—	—		
942	D-6	一段	100	45	20	黒褐色粘土(灰色粘質粘質シルト塊を含む)	—	—		
943	D-6	一段	70	50	11	黒灰色粘土(礫を多く含む)	—	—		
944	D-6	半截	140	110	43	極暗灰色粘土	暗褐色粘質シルト	黒灰色粘土		
945	D-6	一段	70	50	2	黒灰色粘土(礫を多く含む)	—	—		
946	D-6	一段	60	50	2	黒灰色粘質シルト(礫を多く含む)	—	—		
947	D-6	半截	130	120	35	極暗褐色粘土	—	—		
948	D-6	一段	160	130	3	黒灰色粘質シルト	—	—		
949	D-6	一段	30	30	1	極暗褐色粘質シルト	—	—		
950	D-6	一段	70	50	1	極暗褐色粘土(暗灰色粘土塊含む)	—	—		
951	D-6	一段	55	35	1	極暗褐色粘質シルト(極暗褐色粘土塊を含む)	—	—		
952	D-6	半截	145	110	25	黒灰色粘土	—	—		
953	D-7	一段	110	70	5	極暗褐色粘土(暗褐色シルト塊を含む)	—	—		
954	D-7	一段	90	65	6	黒灰色粘土(礫を多く含む)	—	—		
955	D-6	半截	80	70	27	暗灰色粘質シルト(1mm大の粗砂・礫を多く含む)	—	—		
956	D-6	一段	95	50	4	黒褐色シルト(5cm大の礫を多く含む)	—	—		
957	D-7	一段	55	45	1	極暗褐色粘土	—	—		
958	D-7	半截	80	70	28	極暗褐色粘土	暗灰色粘土	—		
959	D-7	一段	70	60	2	極暗褐色粘土(暗褐色粘質シルト塊を含む)	—	—		
960	D-7	半截	70	65	33	極暗褐色粘質シルト	—	—		
961	D-7	一段	60	50	8	極暗褐色粘質シルト	—	—		
962	D-7	一段	115	100	17	暗灰色粘質シルト(礫を多く含む)	—	—		
963	D-7	一段	110	80	9	極暗褐色粘質シルト(褐色シルト塊を含む)	—	—		
964	E-5	一段	35	20	6	黒灰色粘質シルト	—	—		
965	E-5	一段	75	65	13	黒褐色粘土	—	—		
966	E-5	一段	60	30	3	黒褐色粘質シルト	—	—		

遺構 番号	地区	掘削 状況	長軸	短軸	深さ	第1層	第2層	第3層	出土 遺物	備考
967	E-5	一段	80	50	8	極暗褐色粘質シルト	—	—		
968	E-5	一段	45	10	6	極暗褐色粘質シルト	—	—		
969	E-5	一段	30	20	4	極暗褐色粘質シルト	—	—		
970	E-5	一段	40	10	4	極暗褐色粘質シルト	—	—		
971	E-5	一段	140	80	8	黒褐色粘質シルト	—	—		
972	E-5	一段	50	30		暗灰色粘質シルト	—	—		
973	E-5	一段	110	40	4	極暗褐色粘土	—	—		
974	E-5	半截	150	110	41	黒灰色粘土	暗褐色シルト	極暗褐色粘土		
975	E-5	検出	110	70	5	極暗褐色粘質シルト	—	—		
976	E-6	一段	110	90	39	極暗褐色粘質シルト	—	—		
977	E-6	半截	165	115	45	暗灰色シルト質粘土	暗灰色シルト	極暗褐色粘土		
978	E-6	一段	90	50	44	黒褐色粘土	—	—		
979	E-6	半截	180	150	28	暗褐色粘土	極暗褐色粘土	—		
980	E-6	一段	90	60	8	極暗褐色粘質シルト	—	—		
981	E-6	一段	130	100	8	極暗褐色粘質シルト	—	—	土器	
982	E-6	半截	129	125	53	実測図を参照			土器	図有
983	E-6	一段	240	110	13	暗灰色シルト(10cm大の暗褐色シルト塊を含む)	—	—	土器	
984	E-6	一段	70	60	4	暗褐色粘質シルト	—	—		
985	E-6	一段	110	80	7	暗褐色粘土	—	—		
986	E-6	一段	170	70	5	極暗褐色粘質シルト	—	—		
987	E-6	半截	120	110	88	実測図を参照				図有
988	E-6	完掘	50	50	14	—	—	—		
989	E-6	完掘	60	45	27	—	—	—		
990	E-6	一段	55	40	6	極暗褐色粘質シルト	—	—		
991	D~E -6	完掘	70	50	8	—	—	—		
992	E-7	一段	70	30	7	暗灰色粘質シルト	—	—		
993	E-7	一段	50	35	7	極暗褐色粘質シルト	—	—		
994	E-7	一段	40	35	7	暗灰色粘質シルト	—	—		
995	E-7	一段	60	55	6	暗灰色粘土	—	—		
996	E-7	一段	30	25	5	暗灰色粘質シルト	—	—		
997	E-7	一段	30	25	4	極暗褐色粘土	—	—		
998	E-7	半截	120	90	34	暗灰色粘土	—	—		
999	E-7	一段	110	85	4	極暗褐色粘質シルト	—	—		
1000	E-6	一段	170	60	4	暗灰色シルト	—	—	土器	
1001	E-7	一段	115	80	6	黒褐色シルト(礫を多く含む)	—	—		
1002	E-7	一段	105	30	7	極暗褐色粘土	—	—		
1003	E-7	一段	70	50	9	極暗褐色粘土	—	—		
1004	E-7	一段	120	75	4	極暗褐色粘質シルト	—	—		
1005	E-7	一段	40	20	5	極暗褐色シルト	—	—		
1006	E-7	一段	70	10	6	極暗褐色粘質シルト	—	—		
1007	E-7	半截	150	120	48	未記入	—	—		
1008	E-7	一段	40	35	5	暗灰色粘土	—	—		
1009	E-7	一段	45	40	6	暗褐色粘土	—	—		
1010	E-7	半截	110	95	38	黒灰色粘土	極暗褐色粘質シルト	極暗褐色粘質シルト		
1011	E-7	一段	50	35	9	極暗褐色粘質シルト	—	—		
1012	E-7	一段	80	50	25	—	—	—		
1013	E-7	一段	150	80	12	—	—	—		

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成14年度発掘調査概要

1014	E-7	一段	80	70	22	—	—	—		
1015	E-7	一段	75	40	12	極暗褐色粘質シルト	—	—		
1016	E-7	一段	80	40	7	—	—	—		
1017	B-2	完掘	50	44	6	—	—	—		
1018	B-2	完掘	90	68	6	—	—	—		
1019	B-3	一段	50	45	5	未記入	—	—		
1020	C-3	一段	40	30	14	極暗褐色粘質シルト	—	—		
1021	D-3	完掘	20	18	15	—	—	—		
1022	B-5	一段	50	40	1	黒灰色粘質シルト	—	—		
1023	C-5	一段	20	10	6	暗褐色シルト(褐色シルト塊を含む)	—	—		
1024	C-5	一段	85	60	5	暗褐色粘土	—	—		
1025	C-5	一段	55	50	7	暗褐色粘質シルト	—	—		
1026	C-5	一段	80	50	5	極暗褐色粘質シルト	—	—		
1027	D-6	半截	140	110	34	暗褐色粘質シルト	暗灰色粘土	—		
1028	D-6	半截	105	70	10	暗褐色粘質シルト	暗灰色粘土	—		
1029	D-6	完掘	45	40	7	—	—	—		
1030	D-6	一段	125	95	4	極暗灰褐色シルト(20cm大の黒灰色粘質シルト塊を多く含む)	—	—		
1031	E-7	半截	110	105	30	暗灰色粘土(0.5～1cm大の礫を含む)	極暗灰色粘土	—		
1032	E-6	半截	237	173	51	実測図を参照				図有
1033	E-6	半截	230	170	41	極暗褐色粘質シルト	暗灰色シルト	極暗灰色粘土		
1034	E-6	一段	105	170	17	未記入	—	—		
1035	E-6	半截	232	174	51	実測図を参照			木器	図有
1036	E-7	半截	180	100	12	暗灰色シルト	極暗灰色粘土			
1037	E-6	半截	100	90	53	極暗褐色粘質シルト	暗褐色シルト(礫を多く含む)	暗灰色粘質シルト		
1038	E-7	一段	70	50	1	暗灰色粘質シルト(2～5cm大の礫を含む)	—	—	土器	
1039	E-7	一段	160	90	12	黒灰色粘質シルト(礫を多く含む)	—	—		
1040	E-7	一段	150	50	6	黒灰色粘質シルト	—	—		
1041	E-6	一段	210	120	2	暗褐色粘質シルト(1～3cm大の礫を含む)	—	—		
1042	E-6	半截	190	100	38	暗灰色粘土	—	—	土器	
1043	E-6	一段	100	50	1	暗灰色粘質シルト	—	—		
1044	E-6	一段	120	70	1	暗灰色粘質シルト	—	—		
1045	E-6	一段	60	55	1	極暗褐色粘質シルト	—	—		
1046	E-6	一段	65	50	1	暗灰色粘質シルト	—	—		
1047	E-6	一段	50	30	2	暗灰色粘質シルト	—	—		
1048	E-6	一段	50	35	2	極暗褐色粘質シルト	—	—		
1049	E-6	一段	80	60	5	極暗褐色粘土	—	—		
1050	E-6	一段	80	50	5	暗灰色粘土(1～2cm大の礫を含む)	—	—		
1051	D-6	一段	100	80	5	極暗褐色粘質シルト	—	—		
1052	D-7	一段	60	45	3	極暗灰色粘土(1cm大の礫を多く含む)	—	—		
1053	D-7	一段	40	35	3	極暗灰色粘土	—	—		
1054	C-5	一段	55	35	3	黒灰色粘土	—	—		
1055	D-6	半截	120	70	7	極暗灰褐色シルト質粘土(5cm大の極暗褐色粘土塊を少量含む)	—	—		
1056	D-6	半截	150	90	33	黒灰色粘土(極暗灰褐色粘質シルト塊を少量含む)	—	—		
1057	E-7	一段	60	50	4	極暗褐色粘質シルト	—	—		
1058	E-7	一段	40	25	4	極暗褐色粘質シルト	—	—		

遺構 番号	地区	掘削 状況	長軸	短軸	深さ	第1層	第2層	第3層	出土 遺物	備考
1059	D-6	一段	100	80	4	極暗灰褐色粘土(10cm大の極暗褐色粘土塊を多く含む)	—	—		
1060	D-6	一段	70	60	4	極暗灰褐色粘質シルト(20cm大の黒灰色粘質シルト塊を多く含む)	—	—		
1061	D-5	一段	45	20	3	極暗灰褐色シルト(10cm大の黒灰色粘質シルト塊を少量含む)	—	—		
1062	C-5	一段	35	25	4	極暗褐色粘質シルト	—	—		
1063	C-4	一段	45	35	4	極暗褐色粘質シルト	—	—		
1064	D-6	一段	160	60	6	極暗灰褐色シルト	—	—		
1065	C-6	一段	70	40	10	黒灰色粘土(礫を多く含む)	—	—		
1066	C-6	半截	160	90	8	極暗褐色粘土(礫を多く含む)	—	—		
1067	D-5	一段	75	45	2	極暗褐色粘質シルト(3cm大の極暗褐色シルト塊を少量含む)	—	—		
1068	D-4	一段	50	40	2	極暗褐色粘質シルト(5~8cm大の暗褐色粘質シルト塊を少量含む)	—	—		
1069	D-4	一段	100	50	4	極暗褐色粘質シルト(5~9cm大の暗褐色粘質シルト塊を少量含む)	—	—	木器	
1070	D-4	一段	110	55	10	極暗褐色粘質シルト(3cm大の暗褐色粘質シルト塊を多く含む)	—	—		
1071	D-4	半截	65	60	34	暗青灰色粘土	—	—		
1072	D-4	一段	110	70	7	極暗褐色粘質シルト(3cm大の青灰色シルト塊を少量含む)	—	—		
1073	D-4	一段	70	40	6	極暗褐色粘質シルト	—	—	土器	
1074	D-4	一段	100	40	3	暗褐色粘質シルト	—	—		
1075	D-4	一段	45	40	5	暗褐色粘土	—	—		
1076	B-2	完掘	60	35	2	—	—	—		
1077	C-2	完掘	36	36	2	—	—	—		
1078	C-6	一段	110	75	1	暗灰色粘質シルト(赤褐色シルト塊を含む)	—	—		
1079	C-3	完掘	45	30	5	—	—	—		
1080	C-3	完掘	40	30	8	—	—	—		
1081	C-3	完掘	46	30	11	—	—	—		
1082	C-3	完掘	30	20	7	—	—	—		
1083	C-3	一段	60	20	5	暗灰色砂質シルト	—	—		
1084	A~B -3	一段	50	42	5	極暗褐色粘質シルト	—	—		
1085	D-3	半截	50	42	13	暗褐色粘質シルト	暗灰色粘土	—		
1086	B-1	一段	70	20	2	暗褐色粘質シルト	—	—		
1087	D-2	完掘	90	50	20	—	—	—		
1088	D-2	完掘	74	46	4	—	—	—		
1089	D-2	完掘	45	30	5	—	—	—		
1090	C-2	完掘	36	30	18	—	—	—		
1091	D-2	完掘	26	22	13	—	—	—		
1092	D-2	完掘	28	24	13	—	—	—		
1093	D-2	完掘	80	60	7	—	—	—		
1094	D-2	完掘	40	30	9	—	—	—		
1095	D-2	一段	70	34	10	極暗褐色粘質シルト	—	—		
1096	C~D -1	完掘	170	120	12	—	—	—		
1097	B-3	一段	100	60	5	黒褐色粘質シルト	—	—		
1098	B-3	半截	94	68	32	極暗褐色粘質シルト	—	—		
1099			100	70	22	—	—	—		
1100	B-3	完掘	24	22	17	—	—	—		
1101	B-3	一段	110	54	1	極暗褐色粘質シルト	—	—		

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成14年度発掘調査概要

1102	E-7	一段	80	30	5	極暗灰色粘質シルト	—	—		
1103	E-7	完掘	63	(48) 以上	7	実測図を参照			土器	固有
1104	B-1	完掘	30	20	5	—	—	—		
1105	B-1	一段	20	15	5	黄褐灰色シルト	—	—		
1106	B~C -1	一段	230	90	5	黄灰色砂質シルト(極暗灰色シルト塊を含む)	—	—		
1107	C-3	一段	65	33	5	極暗褐灰色粘質シルト(10cm大の暗灰色シルト塊を少量含む)	—	—		
1108	D-5	半截	(100)	(80)	(25)	極暗褐灰色粘質シルト	—	—	被籠 土器	

(2) ^{おおぶち}大淵遺跡 第4次

はじめに

この調査は、国営農地再編整備事業に伴う事前調査で、平成14年度前半に調査した。

調査を行った大淵遺跡は、亀岡市保津町から河原林町にまたがる弥生～古墳時代にかけての遺物包蔵地として周知された遺跡である。今回の調査地点は、案察使遺跡の西方約500mに位置し、亀岡市保津町ホクソ田・堂ノ前にあたる。

調査は、京都府教育委員会が試掘調査によって遺物包含層を確認した2地点に、C地区約200m²、D地区約1,600m²の調査トレンチを設定し、実施した。

1. 検出遺構

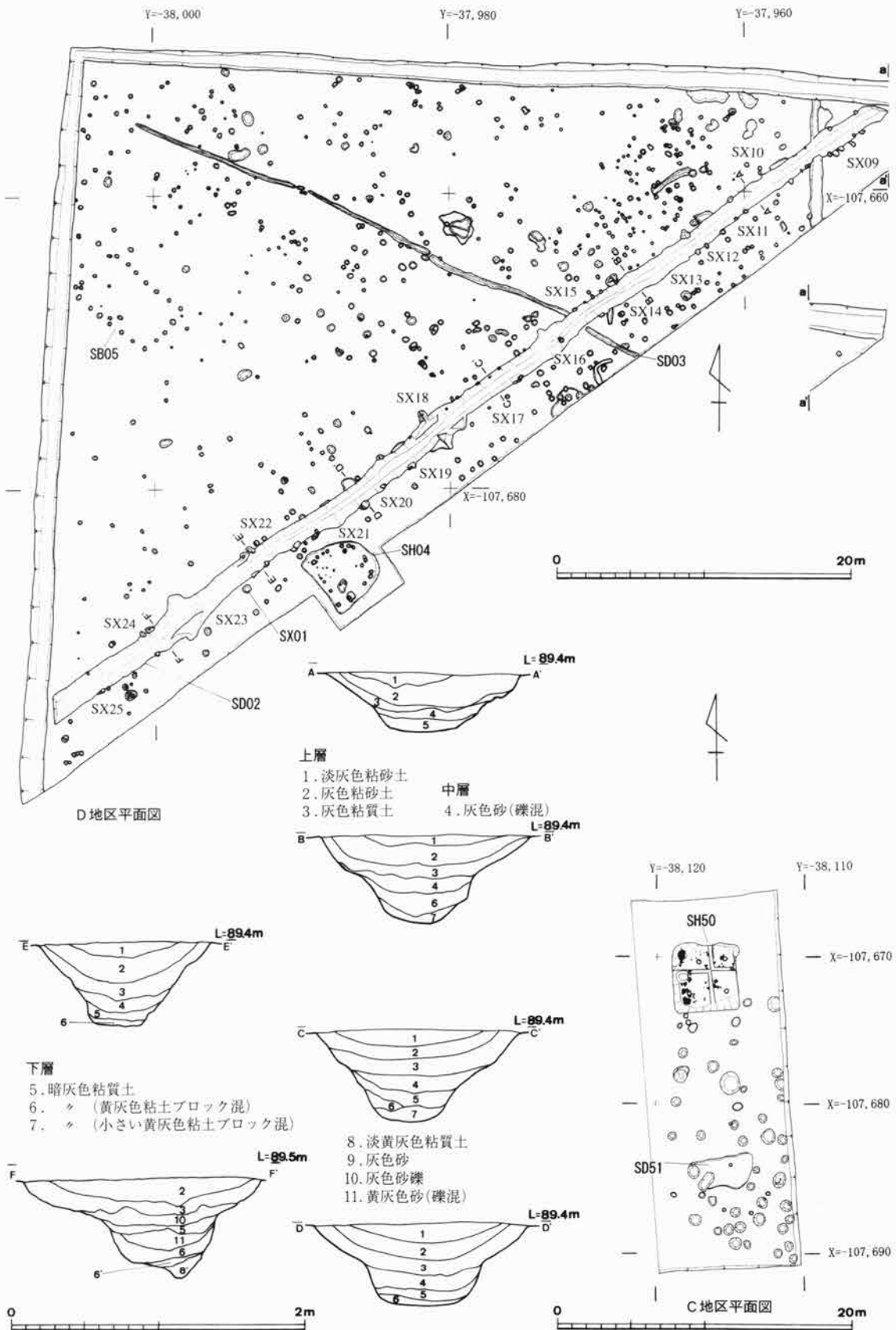
調査によって検出した遺構は縄文時代から鎌倉・室町時代にかけてのもので、その概要は以下のとおりである。

C地区は、標高約90.5mを測る水田地である。基本的な層序は、現耕作土、床土の直下で、七谷川水系の河川性堆積によると考えられる礫層をベースとし、その上面で中世の溝や土坑、古墳時代の住居跡などを検出した。

溝S D51(第124図、図版第102) 調査地の南寄りで見出した検出長約4.5m、幅約1.8mの東西



第123図 トレンチ配置図



第124図 C・D地区検出遺構実測図

溝で、深さ約5cmを測る。溝の埋土は青灰色の粘質土で小礫が混じる土中からは瓦器碗、瓦質羽釜の破片などが出土した。

同時期の遺構としては、調査地のほぼ全域にわたり土坑がある。土坑の大きさはさまざまで、小さいものでは径約20cmのものから、大きいものでは径が80cmを超えるものまである。いずれの遺構内からも瓦器碗や土師器皿などを出土した。

竪穴式住居跡 S H50(第125図、図版第102・103) 調査地の北寄りで検出した東西約3.8m、南北約3.0m、深さ約0.3mを測る古墳時代後期に比定される住居跡である。この住居跡は、炭化木材や焼土などの検出状況から焼失住居と考えられる。住居の西辺中央部には、幅約0.6m、奥行き約0.8mの竈が築かれている。また、四隅に近い場所には、直径約30cmの柱穴が穿たれている。住居の中からは、四隅に近い場所から須恵器・土師器の壺や甕などが、竈の北寄りからは、鉄製の鋤先が出土した。

D地区は、C地区の西約200mに位置する標高約89.6mを測る水田地である。この地区の基本層序は、現耕作土、床土の直下で、黄褐色の粘質土が10～40cm堆積し、この下層に丹波黒ボク層の再堆積層と見られる黒灰色～極暗灰色のシルト～粘土層が堆積している。遺構は黄褐色の粘質土の上面から切り込まれており、縄文時代から中世の各時代の遺構を検出した。

溝 S D02(第124図、図版第102・104・105) 調査地の南辺で検出した北東から南西に水の流れる、直線に掘られた溝である。幅約1.5～2.0m、深さ約0.4～0.7mの規模が残っており、検出した長さは約69mを測る。溝の最下層からは飛鳥時代の須恵器杯蓋・身が出土しており、中層からは奈良時代の須恵器杯B・蓋が出土した。

上記の溝 S D02では、溝の肩部で1段掘り下げた遺構と、対になるピットを検出した。

S X09(第124図、図版第106－(1)) S D02の東端で検出した。以下、検出した順に西に向かって遺構番号を付した。溝の両岸で、幅約1.5mの範囲に掘られた6基の対になるピットで構成される。径約10cmで、南岸では20～40cm、北岸では10～20cm掘られている。

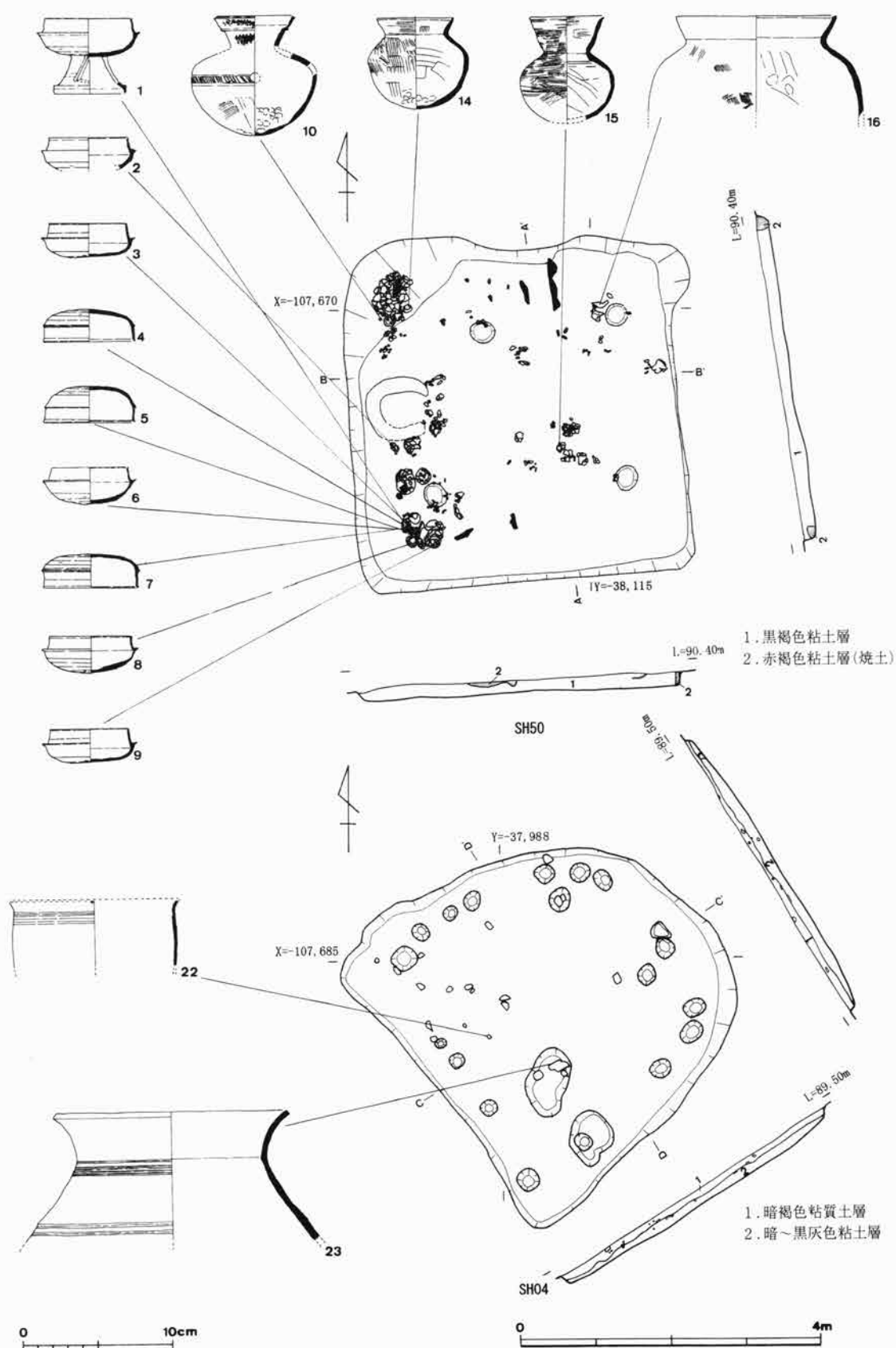
S X10(第124図、図版第106－(2)) 南岸では2基のピットが径約10cmで、ほぼ水平に15～20cm掘られており、北岸では対応する場所に1段掘り下げた跡が認められる。

S X11(第124図、図版第106－(3)) 南岸では3基のピットが径約11～17cmで、水平面に対し10～20°の角度で20～30cm掘られており、北岸では、対応する場所に1段掘り下げた跡が認められる。

S X12(第124図、図版第107－(1)) 南岸では4基のピットが径約11～20cmで、水平面に対し32～45°の角度で30～45cm掘られており、北岸では対応する場所に1段掘り下げた跡が認められるが、ピットが1基、径約20cm、水平面に対し25°の角度で45cm掘られている。

S X13(第124図、図版第107－(2)) 南岸では2基のピットが径約13～18cmで、水平面に対し35°の角度で16～25cm掘られており、北岸では、対応する場所に1段掘り下げた跡が認められる。

S X14(第124図、図版第107－(3)) 6基の対になるピットで構成される。南岸では1基のピットが径約24cmで、水平面に対しほぼ平行に55cm掘られており、他の箇所では1段掘り下げた跡



第125図 竪穴式住居跡 S H50・04実測図

が認められる。北岸では、南岸のピットと同規模のものが3基掘られている。

S X 15(第124図、図版第108-(1)) S D 03の東で検出した6基の対になるピットで構成される遺構である。北岸では3基のピットが径約24cmで、水平面に対し20°の角度で55cm掘られており、南岸では1か所のピットが径約24cmで、水平に55cm掘られており、他の箇所では1段掘り下げた跡が認められる。

S X 16(第124図、図版第108-(2)) S D 03の東で検出した幅約2.0mの両岸を掘り込んだ遺構である。上流にあたる東側には、両岸に1対のピットが径約20cmで、水平に20~55cm掘られている。

S X 17(第124図、図版第108-(3)) 両岸に1段掘り下げた跡が認められ、径約10cm程度のピットが掘られている。

S X 18(第124図、図版第109-(1)) 幅約2.0mの両岸を掘り込んだ遺構である。

S X 19(第124図、図版第109-(2)) 両岸で6基のピットが対になり、径約10cmで、ほぼ水平に15~20cm掘られている。

S X 20(第124図、図版第109-(3)) 両岸で6基のピットが対になり、径約10cmで、ほぼ水平に30~40cm掘られており、南岸では1段掘り下げた跡が認められる。

S X 21(第124図、図版第110-(1)) S H 04の北で検出した。南岸では2基のピットが径約20cmで、1基のピットが径約20cmで、水平面に対し45°の角度で20cm掘られている。北岸では、対応する場所に1段掘り下げた跡が認められる。

S X 22(第124図、図版第110-(2)) 6基の対になるピットで構成される。北岸では1基のピットが径約20cmで、水平面に対し45°の角度で40cm掘られており、他の箇所では1段掘り下げた跡が認められる。南岸では、1基のピットが径約12cmで、水平面に対し15°の角度で40cm掘られている。

S X 23(第124図、図版第110-(3)) 幅約2.0mの両岸を掘り込んだ遺構である。上流にあたる東側には、両岸に1対のピットが径約20cmで、水平に20cm掘られている。

S X 24(第124図、図版第111-(1)) 両岸で6基のピットが対になり、北岸では1基のピットが径約20cmで、水平面に対し45°の角度で40cm掘られている。

S X 25(第124図、図版第111-(2)) 両岸で6基のピットが対になり、径約10cmで、ほぼ水平に15~20cm掘られている。

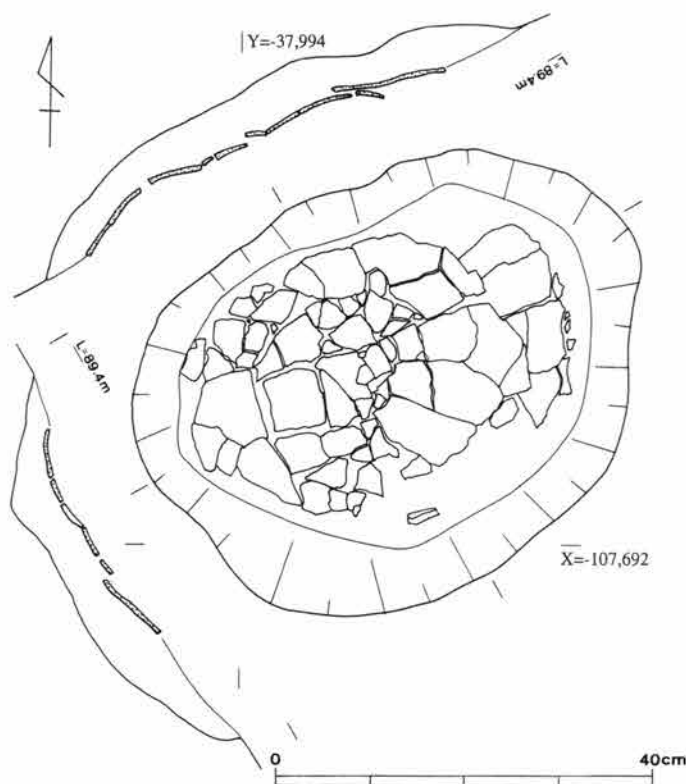
掘立柱建物跡 S B 05(第124図、図版第110-(3)) 調査地の西寄りで検出した短辺(梁行)約3.6m、長辺(桁行)約6.0mの掘立柱建物跡である。時期の決め手となる土器が出土していないため正確な時代は分からないが、埋土の状況などから飛鳥時代以前で弥生時代以降と考えられる。この建物の床面積は約21.6㎡(約6.5坪)である。調査地内では、この建物の他にも数多くの柱穴を検出しており、小型の建物が建っていたと考えられる。

竪穴式住居跡 S H 04(第124・125図、図版第112) 調査地の南寄りで検出した長軸約4.6m、短軸約4.0mを測る平面半円形の竪穴式住居跡である。竪穴式住居跡からは、弥生時代前期の壺・甕とともに石器を製作した時のものと考えられる剥片が住居の西北辺付近から出土した。また、

同場所には約50cmの範囲に焼土の分布が認められ、炉の跡と考えられる。

溝跡 S D 03(第124図、図版第113-(1)) 調査地内の中央で検出した、北西から南東方向に水の流れる溝である。検出した幅約0.1~0.3m、深さ約5~10cm、断面「U」字形をしており、長さ約37.5mを検出した。溝の中からは、弥生土器、凹基式打製石鏃などが出土した。

土器棺 S X 01(第124・126図、図版第113-(2)・(3)) 調査地の南西で検出した長軸約0.8m、短軸約0.4m、深さ約0.1mの縄文土器の甕を2個使用した墓である。大半が削られており詳しい時期は不明であるが概ね縄文時代晩期のものと考えられる。



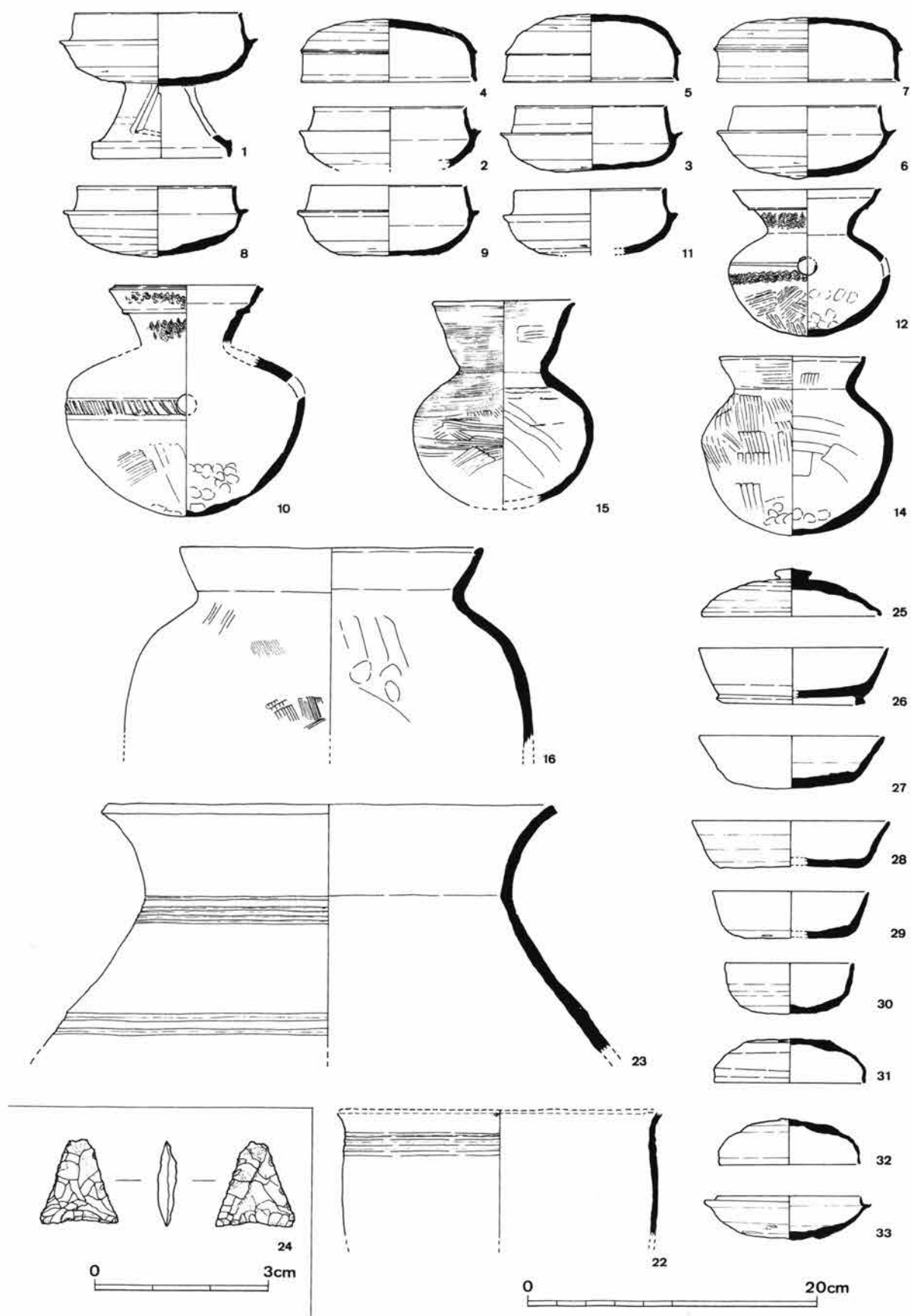
第126図 甕棺墓 S X 01実測図

2. 出土遺物(第127図、図版第114・115)

今回の調査で出土した遺物は、縄文時代、弥生時代、古墳時代、飛鳥・奈良時代、鎌倉・室町時代の各時代のものがある。

C地区では、溝 S D 51やその周辺で検出した土坑内から、瓦器椀、土師器皿、瓦質羽釜、白磁片などが出土した。古墳時代の竪穴式住居跡 S H 50からは、須恵器有蓋高杯(第127図1)・杯蓋(第127図4・5・7、図版第114)・杯身(第127図2・3・6・8・9・11、図版第114)・甕(第127図10・12、図版第114-10・115-13)、土師器壺(第127図15、図版第114)や甕(第127図14・16、図版第114・115)などがまとめて出土した。

D地区では、溝 S D 02の第3層から奈良時代の須恵器杯身・杯蓋(第127図25~30、図版第115)が、第5層から飛鳥時代の須恵器杯身・杯蓋(第127図31~33、図版第115)が出土した。竪穴式住居跡 S H 04からは、弥生時代前期の壺、甕(第127図22・23、図版第116)とともにサヌカイトの剥片が出土した。同時代と考えられる溝 S D 03からは、弥生土器片とともに凹基式打製石鏃1点(第127図24)が出土している。さらに、土器棺 S X 01内からは、2個体の晩期と考えられる縄文土器(図版第116-(2))が出土した。



第127図 出土遺物実測図

3. ま と め

今回の調査では、縄文～奈良時代、中世にかけての各時代の遺構を検出した。縄文時代ではD地区で墓跡を検出し、弥生時代では、同じくD地区で溝と住居跡を検出した。当地の周辺には、弥生時代の集落が広がっている可能性が指摘できる。続く古墳時代には、C地区で検出した竪穴式住居跡は、調査地周辺では初めての住居跡の検出となる。出土した土器群はTK23型式並行期の様相を呈しており、5世紀の中葉と考えられる。前時代に引き続き調査地の周辺には集落が営まれていたと考えられる。飛鳥・奈良時代では、D地区で1条の溝と、溝に附随する1段掘り下げと対になるピットを検出した。この溝は、調査地の南西方向にこの溝の延長と考えられる畦畔の乱れが認められる(第123図)ことから、大規模な灌漑用の水路と考えられ、当地域の生産基盤が整備されてきたことを示す資料と言える。また、溝の肩部に掘られた16か所の掘り込みは基本的に3種類に分類される。すなわち、2～3対のピットで構成されるA1タイプ(SX09・12・14・19・22・24・25)、ピットと1段の掘り込みによって構成されるA2タイプ(SX10・11・13・15・17・20・21)、広い範囲の掘り込み地業と、その上流側で1対のピットで構成されるBタイプ(SX16・18・23)である。A1・A2のタイプは、柱や板などを渡し、簡単な橋がかけられて、兩岸の行き来に使用されていたと考えられる。また、Bタイプでは、溝を塞ぎ止めて水を周辺で利用するための堰があったことなどが考えられる。

(戸原和人)

調査参加者

案察使遺跡

調査補助員 青木政幸・浅田育裕・大月直子・緒方信幸・川口庸央・草薨大蔵・黒田道崇・小山亜美・佐藤純一・清水邦彦・杉原実・杉山拓己・西田大樹・西村治郎・橋本敬博・藤田勇貴・本間賢司・前川聡・三坂一徳・三好玄・山内彩子・山口卓也・山口由希子・山本茜

整理員 柿谷悦子・神谷昭子・後藤朋子・牧澤敏子・俣野明子・関口睦美・高田眞由美・田中美恵子・永田啓子・松元順代・丸谷はま子・村上典子・山本弥生

作業員 栗路大樹・石川禧子・伊津フサ江・伊豆田佐知枝・井本典子・岩本勝美・大倉弘・大西市三郎・大西和子・大西道德・大西啓之・桂正・桂孝子・岸谷一平・木村敦・草薨和美・栗林笑子・小林 聡・小林勝・酒井輝美・酒井宏充・島田栄・関口トシ子・田中千代子・西田千代和・西田百合子・藤野文子・古谷すが・前川百合子・松本栄子・村上福治・山口アキヨ・脇上妙子

大淵遺跡

調査補助員 浅田育裕・麻田智也・桂昌裕・川村耕司・草薨大蔵・高橋拓馬・田中洸太郎・本間賢司・前川聡・松田純・峯山博明・三原理・山口卓也

整理員 柿谷悦子・牧澤敏子・俣野明子・関口睦美・高田眞由美・原桂・藤井矢壽子・丸谷はま子・山本弥生

作業員 伊津フサ江・井本典子・大西市三郎・大西梅野・大西和子・大西道德・大西啓之・岡本ユカ・桂孝子・桂智春・木村宏昭・草薨和美・栗林昭弘・酒井美也子・関口澄子・関口トシ子・田中千代子・中村恒義・西田千代和・春木宗夫・早田金三・古谷すが・前川百合子・前田純一・村上福治・山口アキヨ・山本君代・脇上妙子

- 注1 原口正三「考古学からみた原始古代の高槻」(『高槻市史』1-1 高槻市) 1977
久米雅雄・佐久間貴士・村上富喜子「菱木下遺跡」(『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書』(財)大阪文化財センター) 1984
橋本高明・中井貞夫・福田英人ほか「万崎池遺跡」(『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書』(財)大阪文化財センター) 1984
川口宏海・稲垣正宏・上野俊雄『堺市文化財調査報告』第27集 堺市教育委員会 1986など
- 注2 福永伸哉「古墳時代の共同墓地—密集型土壌群の評価について—」(『待兼山論叢』23号 大阪大学文学部) 1989
- 注3 京嶋覚「群集土壌の性格と意義」(『長原遺跡発掘調査報告』Ⅳ (財)大阪市文化財協会) 1991
- 注4 京嶋覚「群集土壌の再評価」(『大阪府文化財協会研究紀要』3 (財)大阪府埋蔵文化財協会) 1995
- 注5 川口宏海・稲垣正宏・上野俊雄『堺市文化財調査報告』第27集 堺市教育委員会 1986
- 注6 福永伸哉「葬制からみた変革期」(『シンポジウム記録2 国家形成過程の諸変革』考古学研究会例会委員会編) 2000
- 注7 荒木幸治「古墳時代初頭における粘土採掘坑とそれに伴う具体的活動」(『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』創刊号 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所) 2001
- 注8 注7文献

大淵遺跡調査一覧

- 第1次調査 平成8年度 範囲確認調査 亀岡市教育委員会
第2次調査 平成13年度 範囲確認調査 京都府教育委員会
第3次調査 平成14年度 C地区本調査(千歳町) 京都府教育委員会
第4次調査 平成14年度 C・D地区本調査(保津町) (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

参考文献

- 「市内遺跡発掘調査報告書—千代川遺跡第9次発掘調査 保津地区府営圃場整備に伴う発掘調査—」(『亀岡市文化財調査報告書』第33集 亀岡市教育委員会) 1995
「市内遺跡発掘調査報告書 国営農地再編整備事業関連遺跡発掘調査—保津車塚古墳・出雲遺跡—」(『亀岡市文化財調査報告書』第45集 亀岡市教育委員会) 1998
「国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成12年度発掘調査概要 [1] 案察使遺跡」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会) 2001
「国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成13年度発掘調査概要 保津車塚古墳(案察使1号墳)第2次」(『京都府遺跡調査概報』第103冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2002

圖

版

図版第1 木橋北城跡



(1)調査前風景(南から)



(2)調査地遠景(南西から)
(木橋城跡から木橋北城跡を
望む)



(3)3トレンチ全景(西から)



(1) 1 トレンチ調査前(北西から)



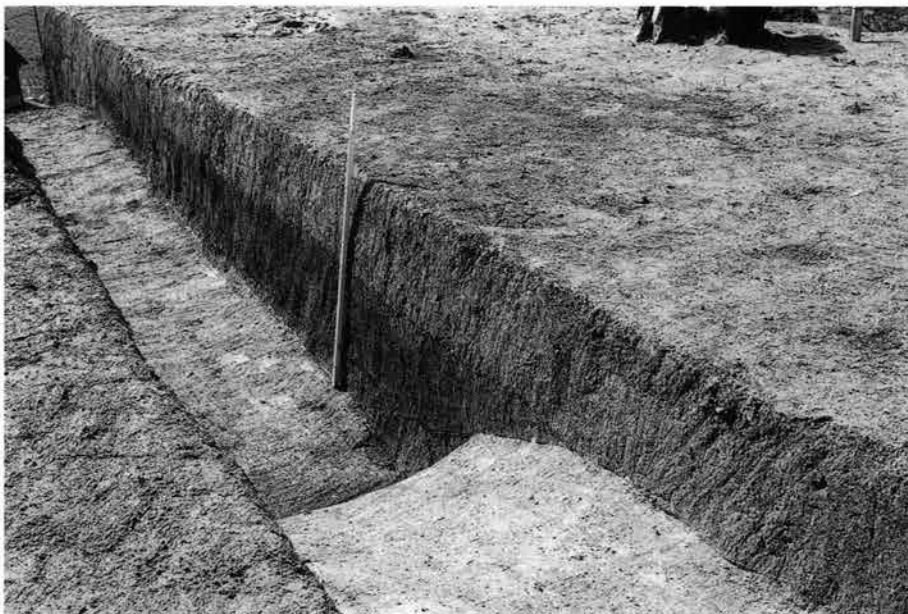
(2) 1 トレンチ全景(北西から)



(3) 掘立柱建物跡 S B 02(南から)



(1) 2 トレンチ調査前(北西から)



(2) 2 トレンチ南北断ち割り
西壁断面(北東から)



(3) 2 トレンチ南北断ち割り
西壁断面(東から)



(1) 2 トレンチ全景(北西から)



(2) 竪穴式住居跡 S H01(北から)



(3) 竪穴式住居跡 S H01(東から)

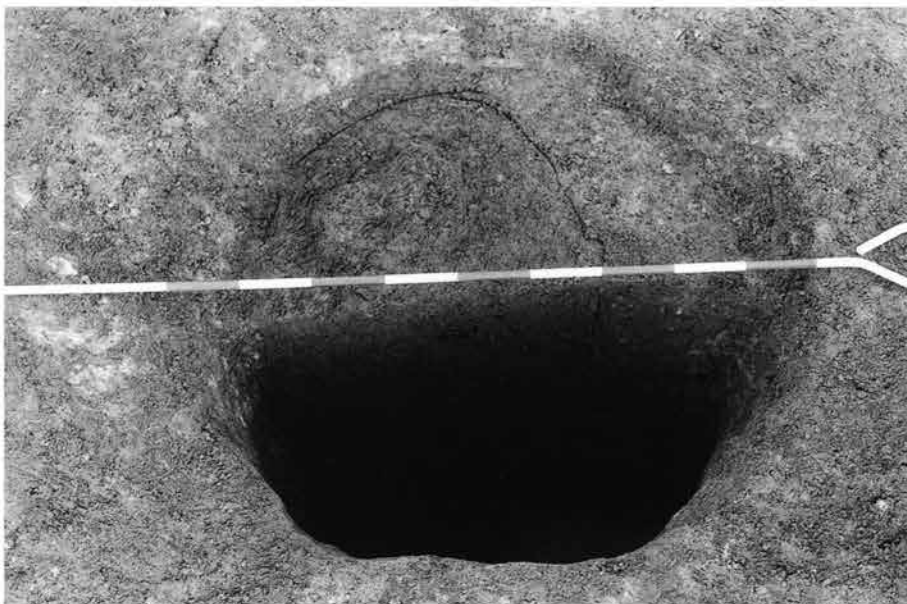
(1) 竪穴式住居跡 S H01
西側周壁溝断面(南から)



(2) 竪穴式住居跡 S H01
東側周壁溝断面(南から)



(3) 竪穴式住居跡 S H01
柱穴1 半割状況(南から)





1



8



2



9



4



12



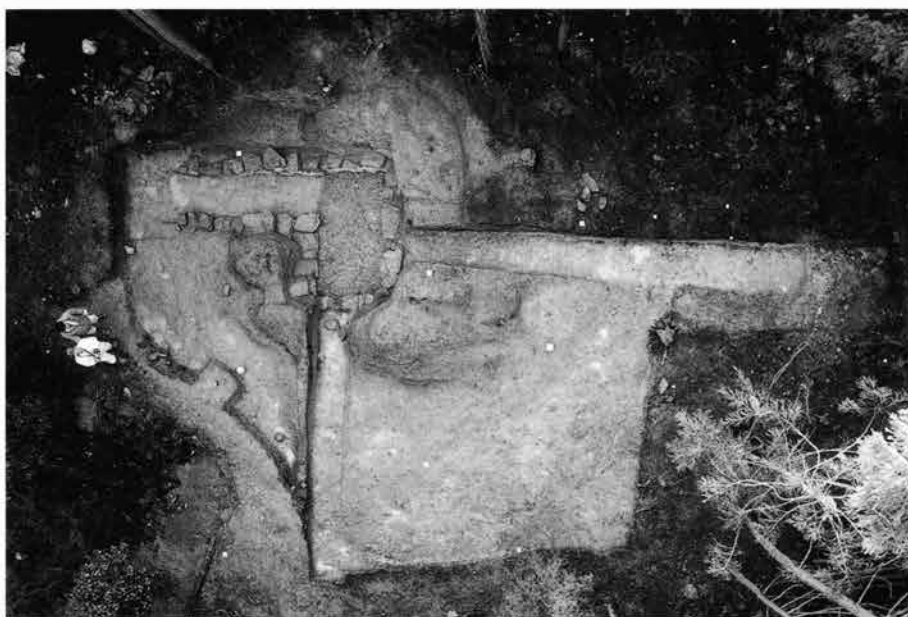
14



13



(1)新堂池古墳群所在丘陵(東から)



(2)1号墳全景(右下が北)



(3)1号墳墳丘全景(北東から)



(1) 1号墳石室全景(右下が北)



(2) 1号墳玄室追葬面全景
(北西から)



(3) 1号墳玄室追葬面土器群
(南西から)

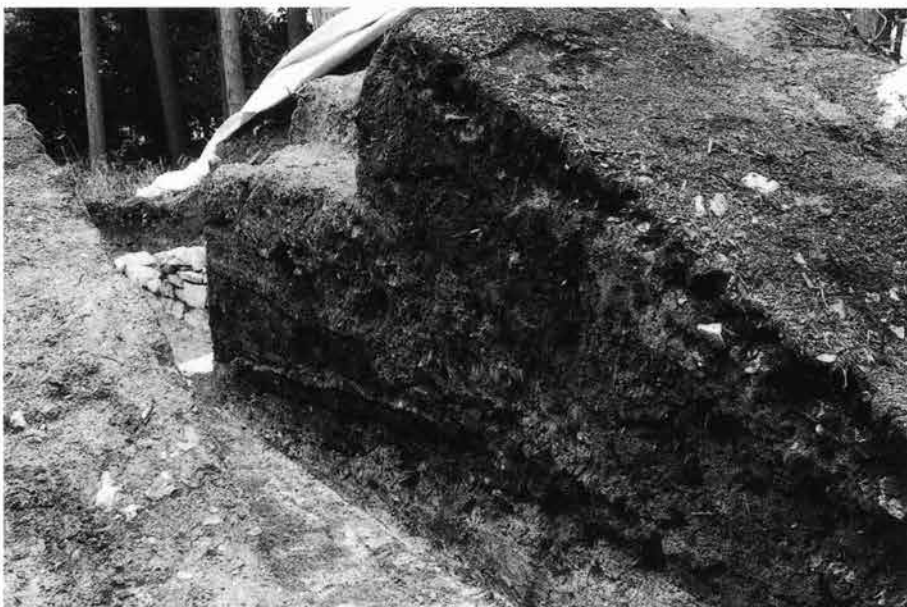
(1) 1号墳初葬面全景(北西から)



(2) 1号墳玄門右片袖部(北東から)



(3) 1号墳墳丘北東部断面(北から)

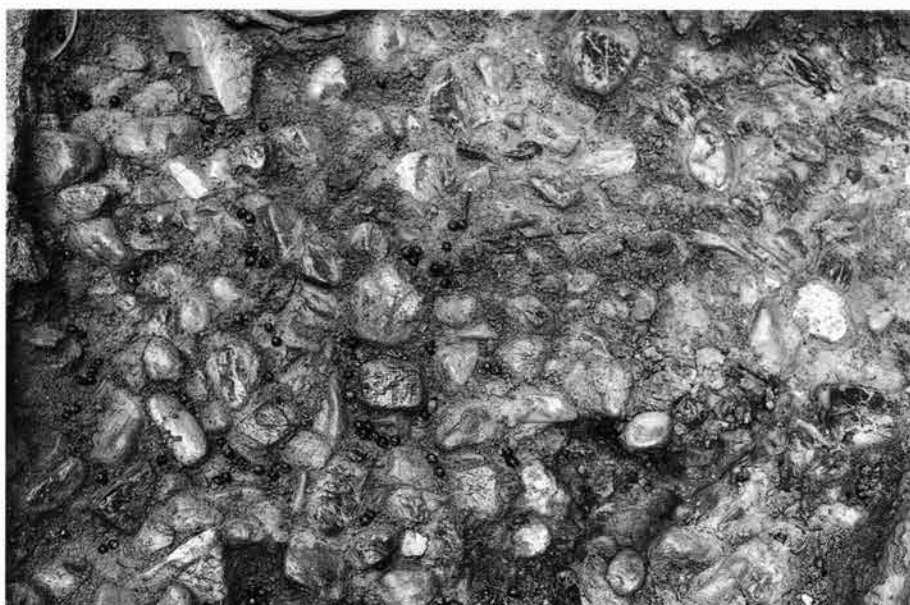




(1) 1号墳玄室左袖部初葬面土器群
(北西から)



(2) 1号墳玄室西隅初葬面鉄鏃群
(南東から)



(3) 1号墳玄室初葬面練り玉



(1) 2号墳全景(右下が北)



(2) 2号墳玄室追葬面全景
(南西から)



(3) 2号墳玄室追葬面土器転用枕
(南西から)



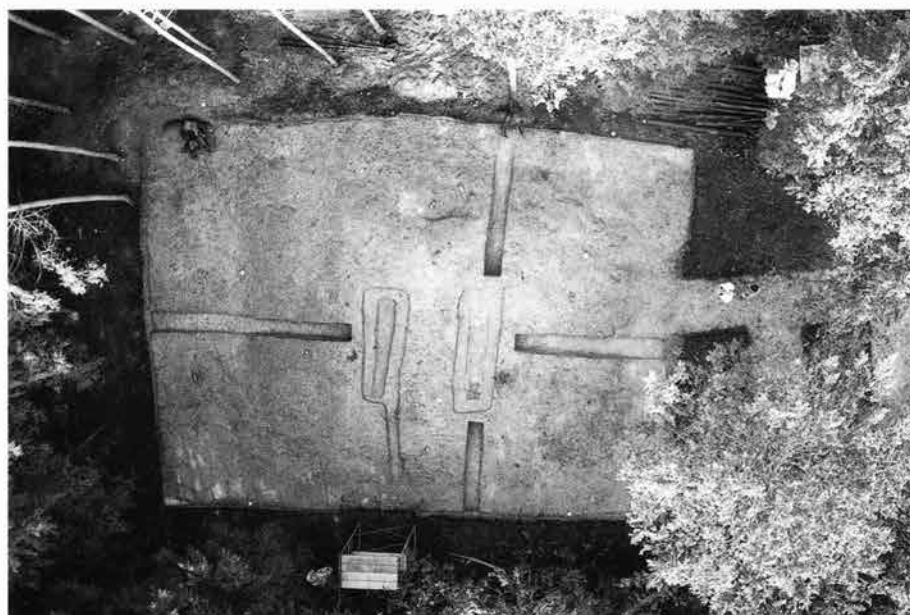
(1) 2号墳石室初葬面全景
(右下が北)



(2) 2号墳玄室初葬面全景
(南西から)



(3) 2号墳玄室右袖土器群
(南西から)



(1) 3号墳全景(左上が北)



(2) 3号墳全景(北西から)



(3) 3号墳第1主体部(左)・
第2主体部(南西から)



(1) 3号墳第1主体部(北西から)



(2) 3号墳第1主体部(北東から)



(3) 3号墳第1主体部棺掘形断面
(北東から)



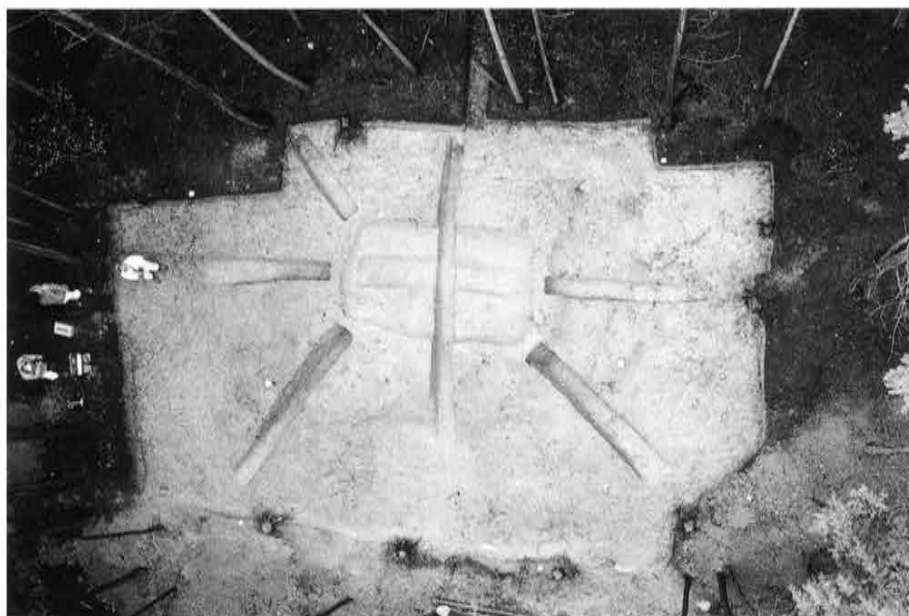
(1) 3号墳第2主体部(北西から)



(2) 3号墳第2主体部北東小口部
鉄鍬群(南東から)



(3) 3号墳第2主体部南西小口部
鉄器群(南東から)



(1) 6号墳全景(右下が北)



(2) 6号墳主体部(北西から)



(3) 6号墳主体部東部鉄製品
出土状況(北西から)



24-2



15-6



24-4



15-19



20-6



15-1



20-8



15-5



20-3





(1)調査地遠景(東から)



(2)調査地全景(上が西)



(1)調査区全景(西から)



(2)調査区全景(東から)



(1)方形周溝墓 S T 704(南から)



(2)方形周溝墓 S T 704(北から)



(1)溝 S D647(西から)



(2)方形周溝墓 S T705(南西から)



(1)方形周溝墓 S T 705(南から)



(2)方形周溝墓 S T 705(南西から)



(1)土壇 S K 587(南から)



(2)土壇 S K 662・663(南西から)



(1) 溝 S D640、土壇 S K642・656・657 (南西から)



(2) 方形周溝墓 S T707 (南西から)



(1) 方形周溝墓 S T 707 (南東から)



(2) 方形周溝墓 S T 707・708 (南東から)



(1)土壇 S K 551・552・624・625(南東から)



(2)土壇 S K 625(北東から)



(1)方形周溝墓 S T 709調査風景(南東から)



(2)方形周溝墓 S T 709(南東から)



(1)土壙 S K 547(北東から)



(2)土壙 S K 547完掘状況(北東から)



(1)土壇 S K617(北西から)



(2)土壇 S K584(北から)



(1)土坑 S K 548(北西から)



(2)土坑 S K 576(北東から)



(1)土壙 S K 544・616(北西から)



(2)土壙 S K 544・621・616(南東から)



(1)土壙 S K615(北東から)



(2)土壙 S K414(東から)



(1)土壙 S K 413(東から)



(2)土壙 S K 599・600・608(北西から)



(1) 方形周溝墓 S T713 (西から)



(2) 土壇 S K599 (北西から)



(1)土壇 S K 607(北東から)



(2)土壇 S K 698(西から)



(1)土壇 S K 595 (西から)



(2)土壇 S K 597 (南西から)



(1)土坑 S K603(北から)



(2)土坑 S K604(西から)



(1) 方形周溝墓 S T 715 (南西から)



(2) 土壇 S K 531 (東から)



(1)土壙 S K 560(南東から)



(2)土壙 S K 559(北東から)



(1)土坑 S K 639断面(南から)



(2)土坑 S K 589(東から)



(1)溝 S D01・526(南西から)



(2)溝 S D526遺物出土状況(南から)

(1)溝 S D 526遺物出土状況
(西から)



(2)土壙 S K 665(南東から)



(3)溝 S D 567遺物出土状況
(南東から)

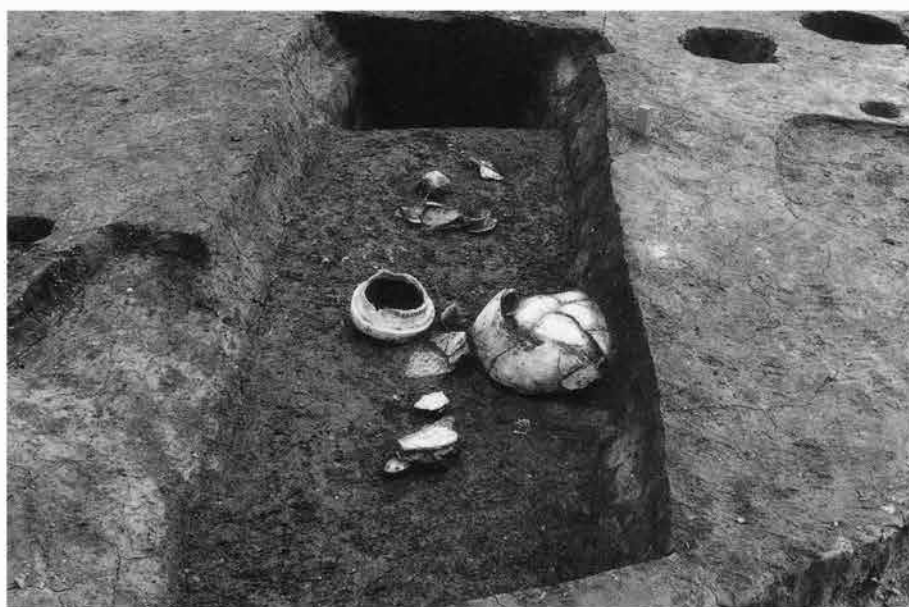




(1) 溝 S D553 遺物出土状況
(西から)



(2) 溝 S D553 遺物出土状況
(北東から)

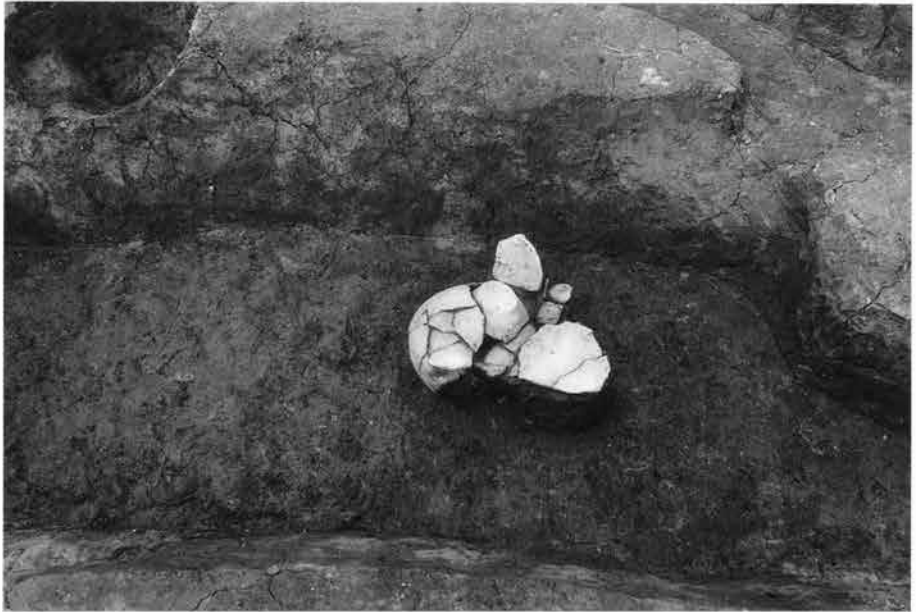


(3) 溝 S D549 遺物出土状況
(北西から)

(1)溝 S D525遺物出土状況
(東から)



(2)溝 S D543遺物出土状況
(南東から)



(3)溝 S D525上面遺物出土状況
(北から)





(1)溝 S D 635断面(南から)



(2)溝 S D 649断面(西から)



(3)溝 S D 640断面(北から)

(1)溝 S D 640断面(北から)



(2)溝 S D 564断面(北東から)



(3)溝 S D 564断面(南西から)





(1)溝 S D 553断面(北西から)



(2)溝 S D 543断面(北東から)



(3)溝 S D 553断面(北西から)



(1) 溝 S D579 断面 (南西から)



(2) 溝 S D545 断面 (南東から)



(3) 溝 S D545 断面 (北西から)



(1)溝 S D01(東から)



(2)溝 S D01・541断面(北東から)



(3)溝 S D526 A・B 断面(北西から)



(1)掘立柱建物跡 S B 508(南から)



(2)掘立柱建物跡 S B 512(南東から)



(1)掘立柱建物跡 S B 511 (北西から)



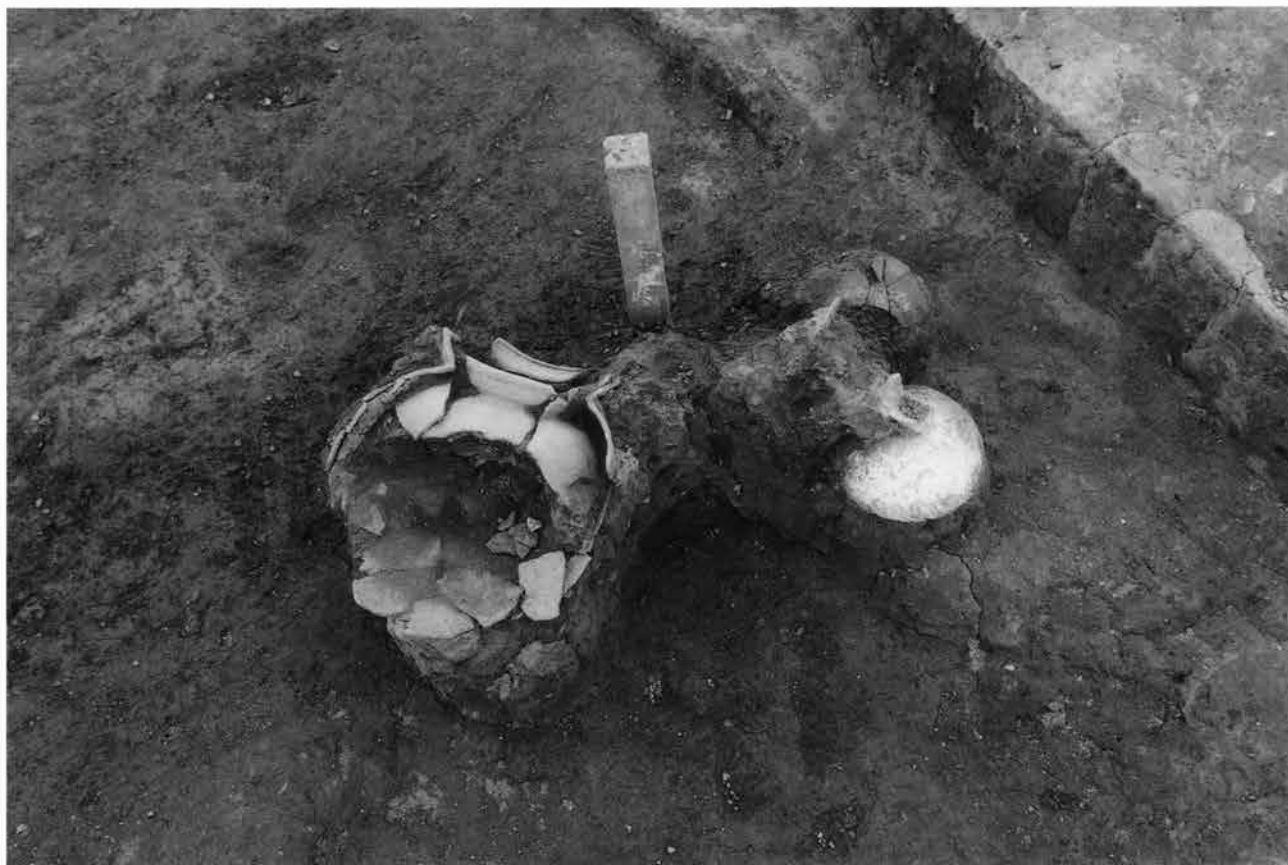
(2)掘立柱建物跡 S B 509 (東から)



(1) 竪穴式住居跡 S H522 (北東から)



(2) 竪穴式住居跡 S H522 遺物出土状況 (南から)



(1) 竪穴式住居跡 S H522 遺物出土状況 (南から)



(2) 竪穴式住居跡 S H521 (北東から)



(1) 竪穴式住居跡 S H517 (北西から)



(2) 竪穴式住居跡 S H516 (北から)



(1) 竪穴式住居跡 S H506・512・529(南から)



(2) 竪穴式住居跡 S H501(南から)



(1) 竪穴式住居跡 S H502・518(南西から)



(2) 竪穴式住居跡 S H502・518(北東から)



(1) 竪穴式住居跡 S H507・513・539・540・562(東から)



(2) 竪穴式住居跡 S H513(南西から)



(1)拡張区検出遺構竪穴式住居跡 S H540(西から)



(2)竪穴式住居跡 S H504(東から)



(1) 竪穴式住居跡 S H504 内土坑遺物出土状況 (南から)



(2) 調査区北東部 (南東から)



(1) 竪穴式住居跡 S H503 (南西から)



(2) 竪穴式住居跡 S H503 竈 (南東から)



(1)土坑 S K563(西から)



(2)土坑 S K527(西から)



(3)土坑 S K515(西から)



(1)土坑 S K515断面(東から)



(2)土坑 S K590(西から)



(3)土坑 S K726(北西から)



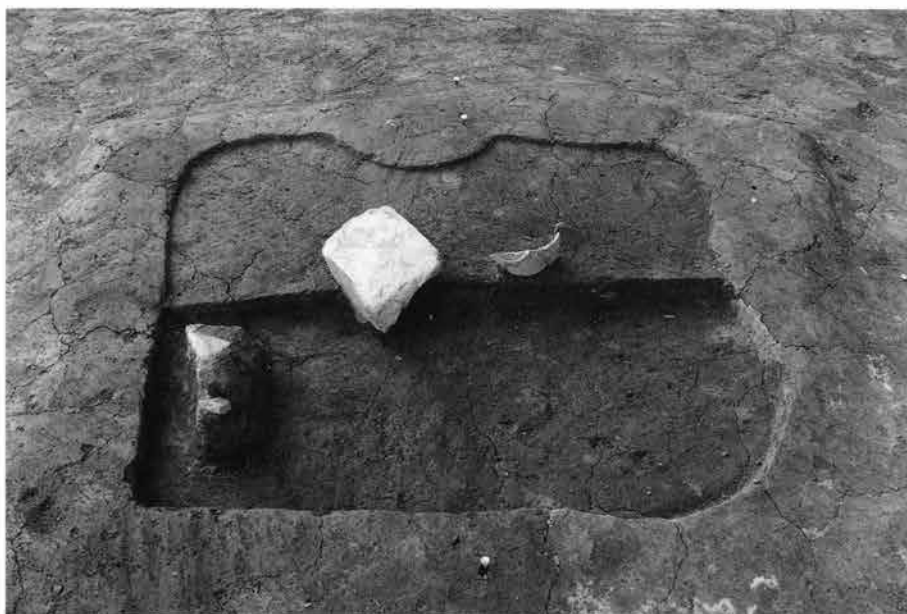
(1)土坑 S K 535(西から)



(2)掘立柱建物跡 S B 505(西から)



(1)土坑 S K 572・585(東から)



(2)土坑 S K 151(東から)



(3)調査風景(西から)



1



45



25



57



48



162



81



82



78



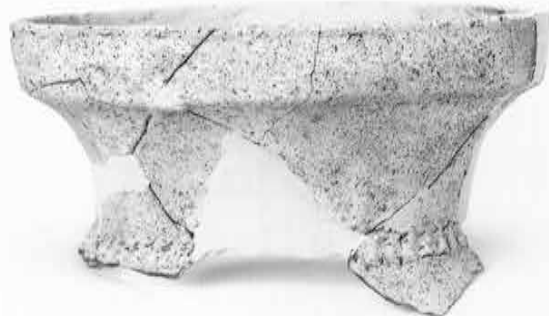
91



88



94



21



79



40



105



102



109



99



103



104



108



109



113



16



164



163



166



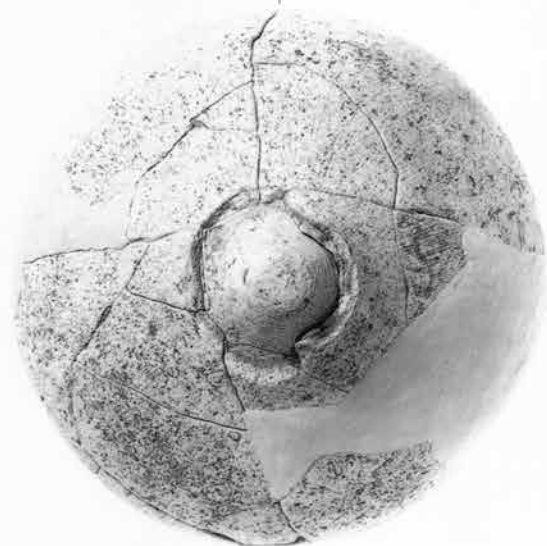
165



169



71



180



179



177



187



176



192



27



56



129



124



159



S D01



131

146



118



239



233



234



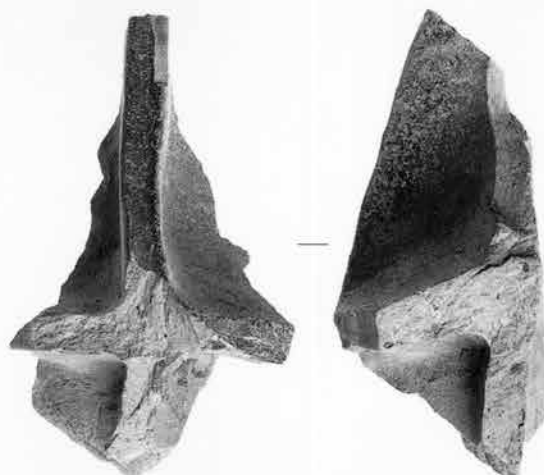
282



281



263



286



218



242



249



266



252



274



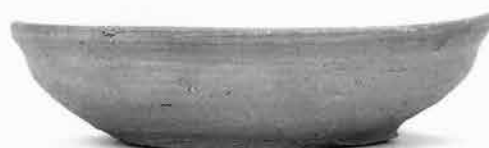
322



244



323



325



294



327



307



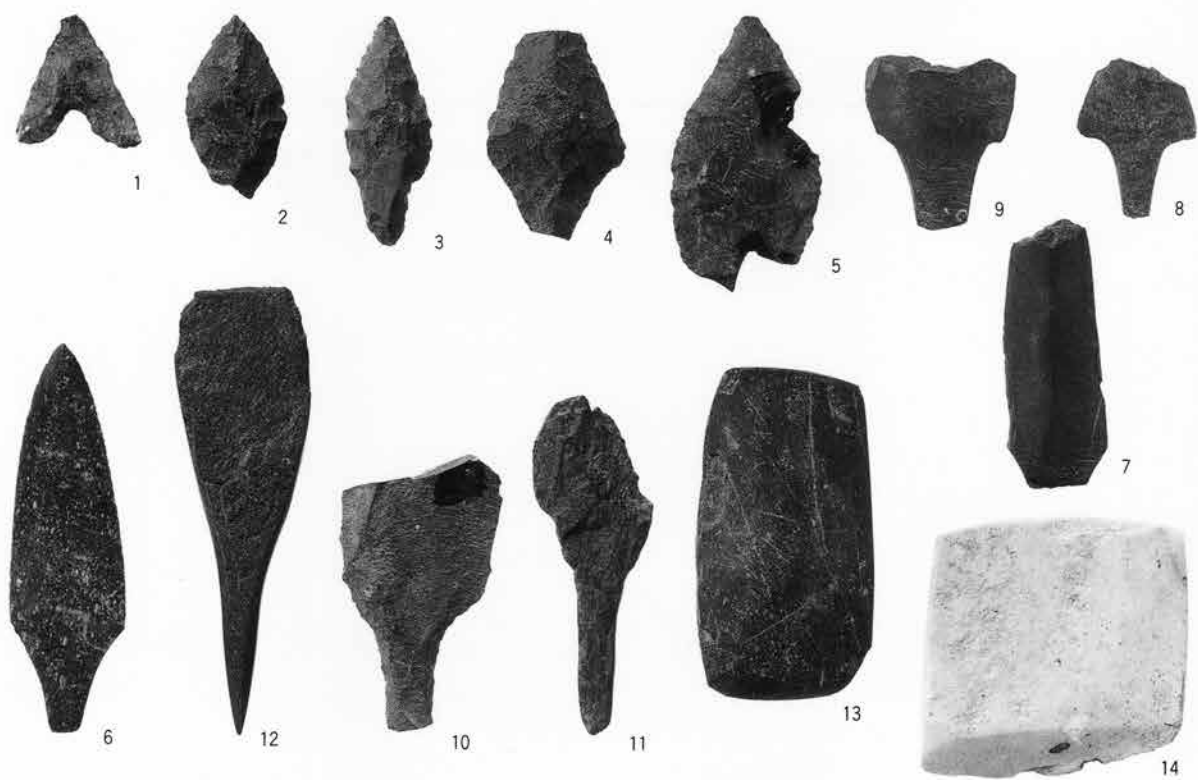
326



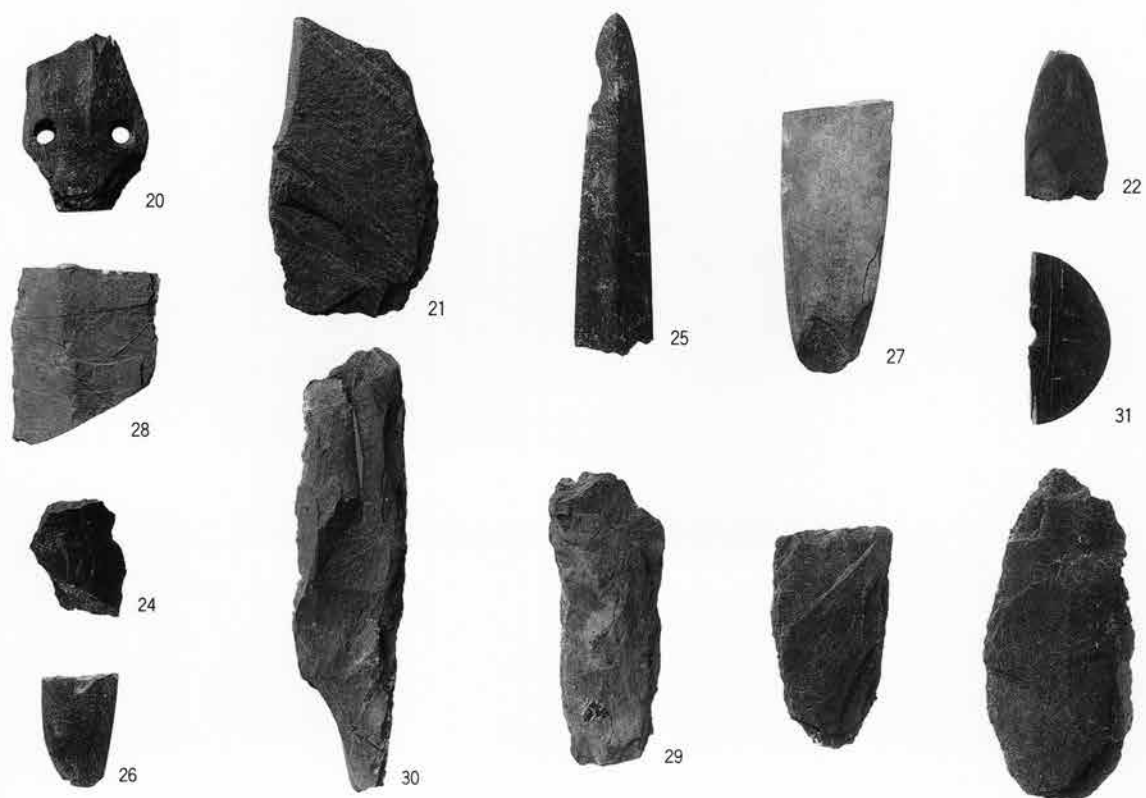
329



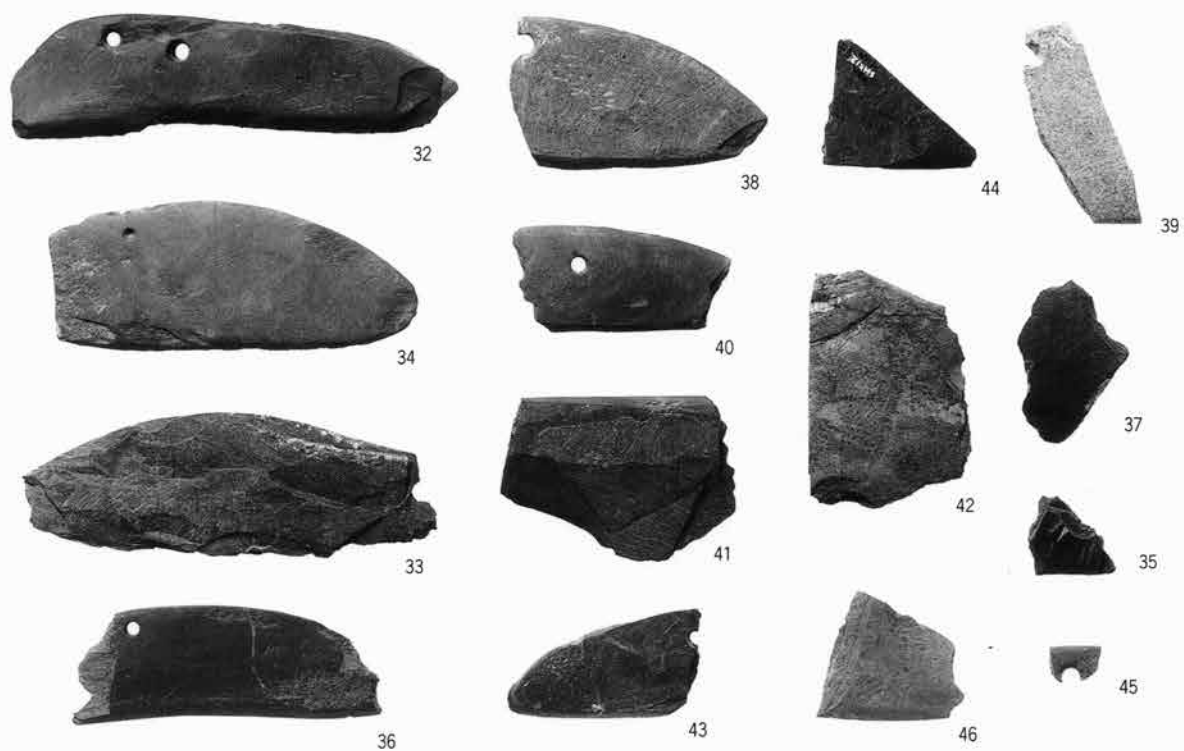
352



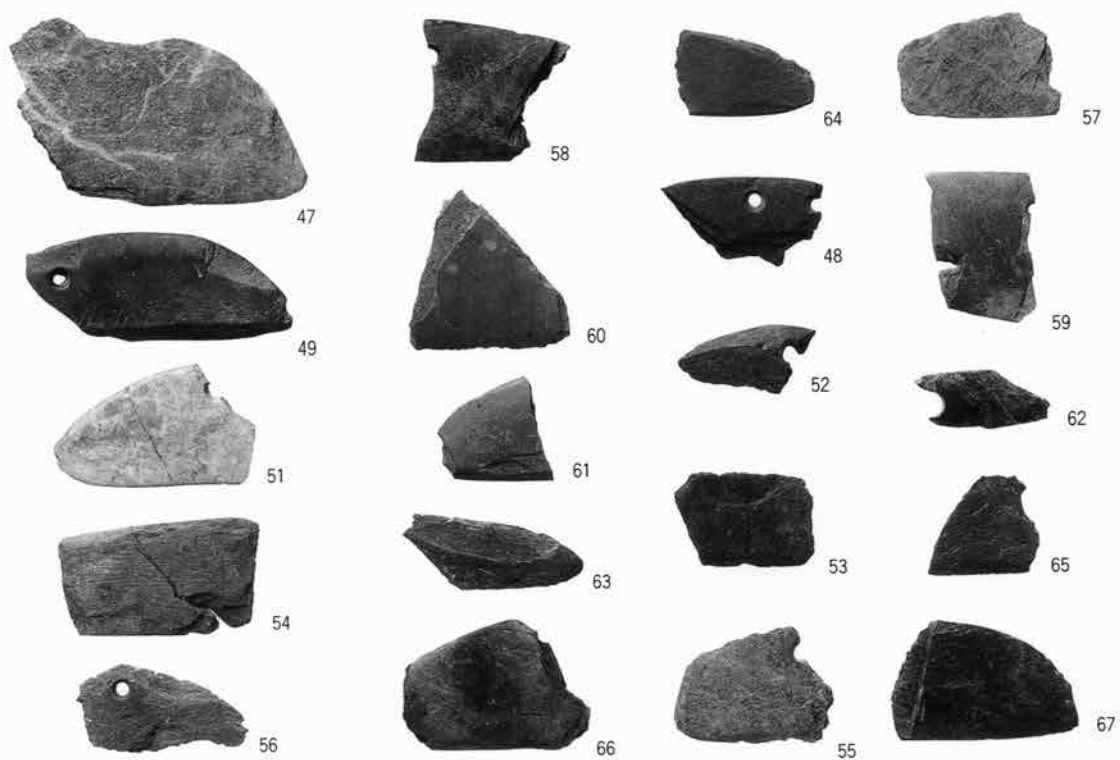
(1)出土石器(1)



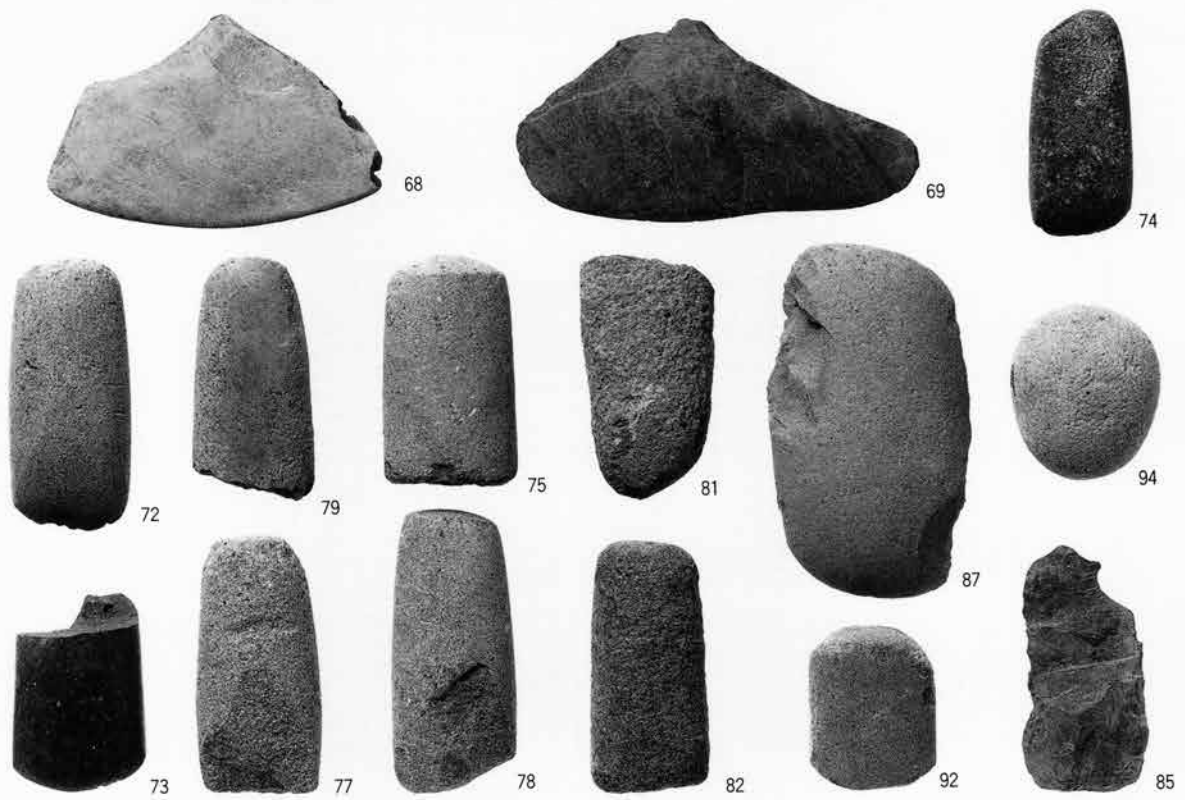
(2)出土石器(2)



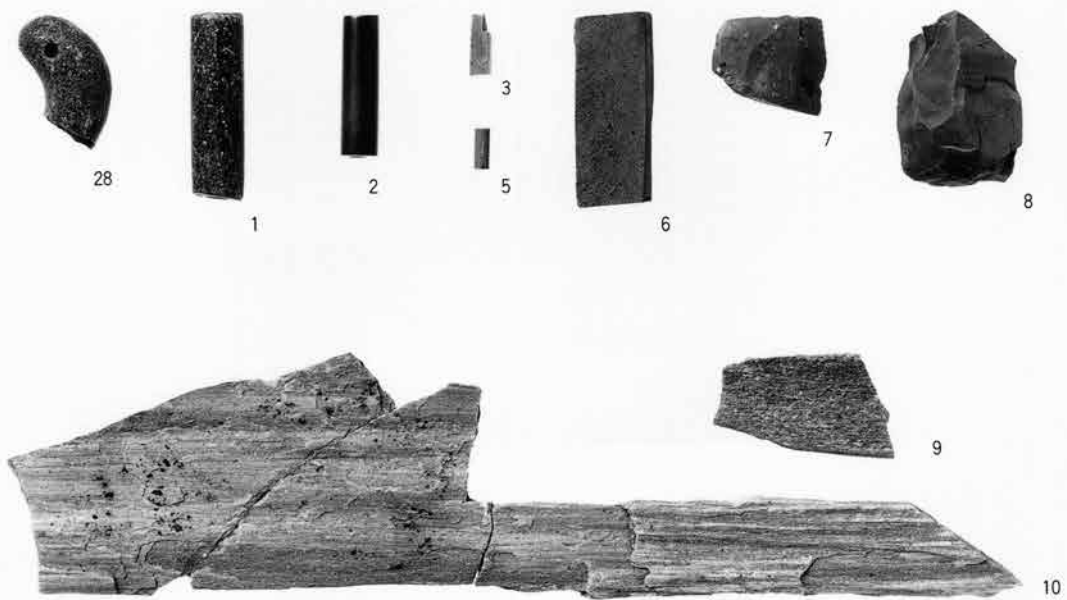
(1)出土石器(3)



(2)出土石器(4)



(1)出土石器(5)



(2)出土石器(6)



(1)調査地全景(西から)



(2)調査地全景(北から)



(3)第1トレンチ全景(上が北)



(1)第1トレンチ北半遺構検出状況
(東から)



(2)土坑 S K33(南から)



(3)土坑 S K38-1(東から)



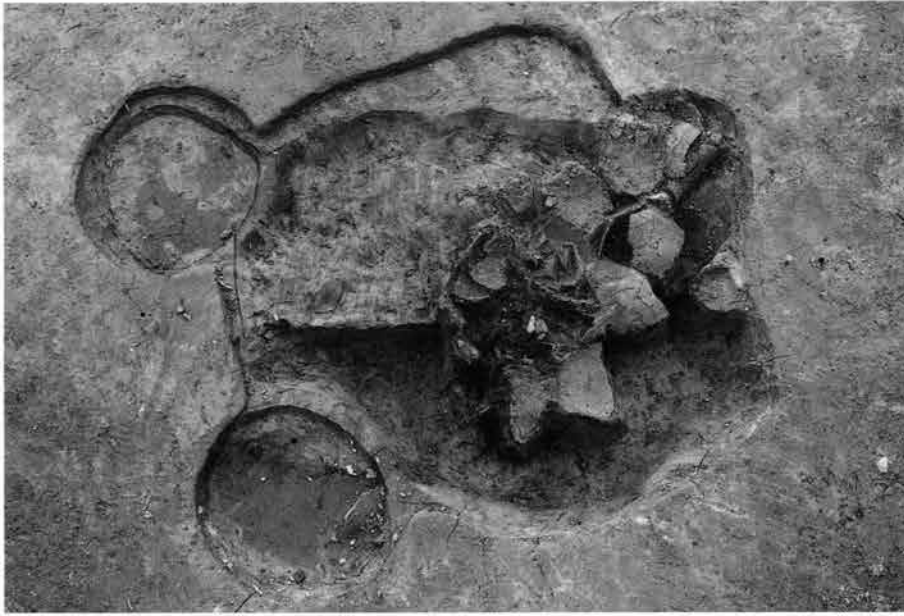
(1)土坑 S K38-2(東から)



(2)土坑 S K46-1(北東から)



(3)土坑 S K46-2(北東から)



(1)土坑 S K56(北東から)



(2)土坑 S K72(西から)



(3)土坑 S K76-1(東から)

(1)土坑S K76-2(西から)



(2)土坑S K76下層(南から)

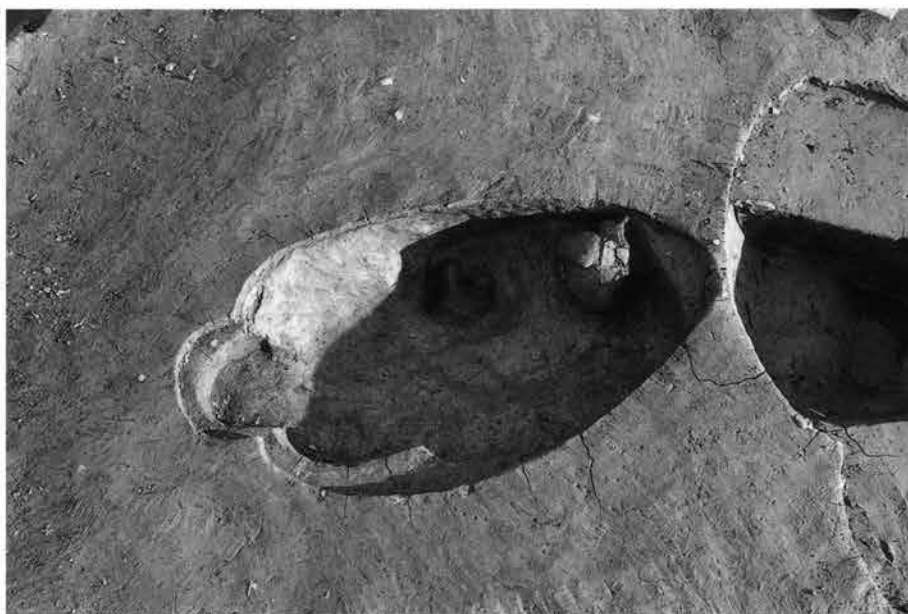


(3)土坑S K79(南から)





(1)土坑 S K82(北西から)

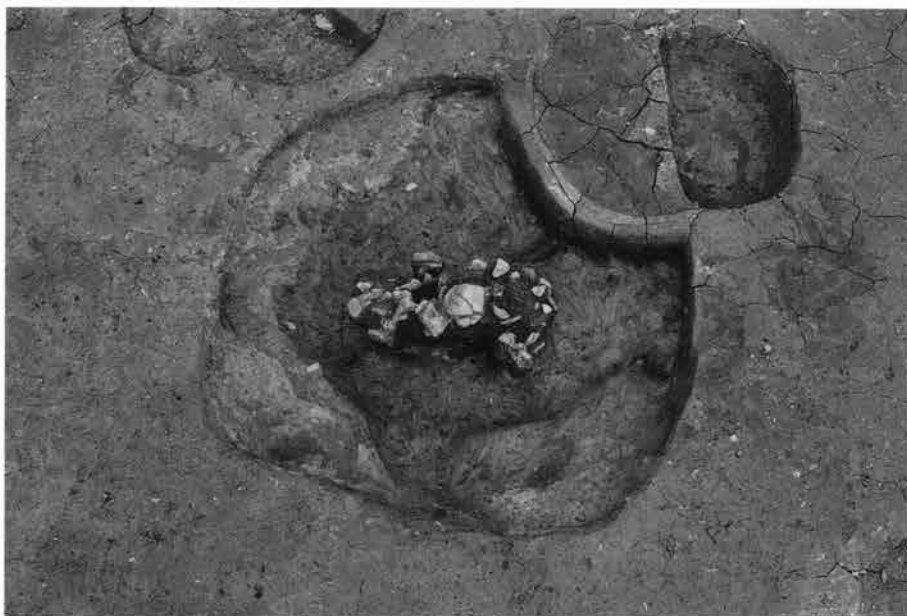


(2)土坑 S K83-1(北西から)



(3)土坑 S K83-2(北西から)

(1)土坑 S K88-1(西から)



(2)土坑 S K88-2(西から)



(3)土坑 S K92(南西から)





(1)土坑 S K98-1(上が西)



(2)土坑 S K98-2(東から)



(3)土坑 S K99-1(南から)

(1)土坑 S K99-2(南から)



(2)土坑 S K100-1(南西から)



(3)土坑 S K100-2(南西から)





(1)土坑 S K100(上)・92(下)
(南から)



(2)土坑 S K101(南から)



(3)土坑 S K108(東から)



(1)土坑 S K115(北東から)



(2)土坑 S K127(北東から)



(3)土坑 S K129(東から)



(1)土坑 S K136-1(南から)



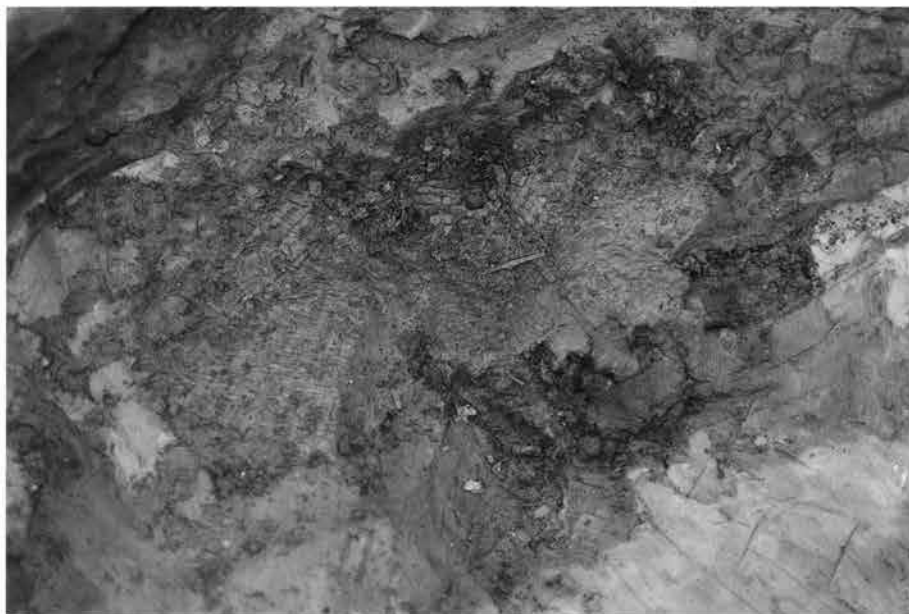
(2)土坑 S K136-2(西から)



(3)土坑 S K137(南から)



(1)土坑 S K143(東から)



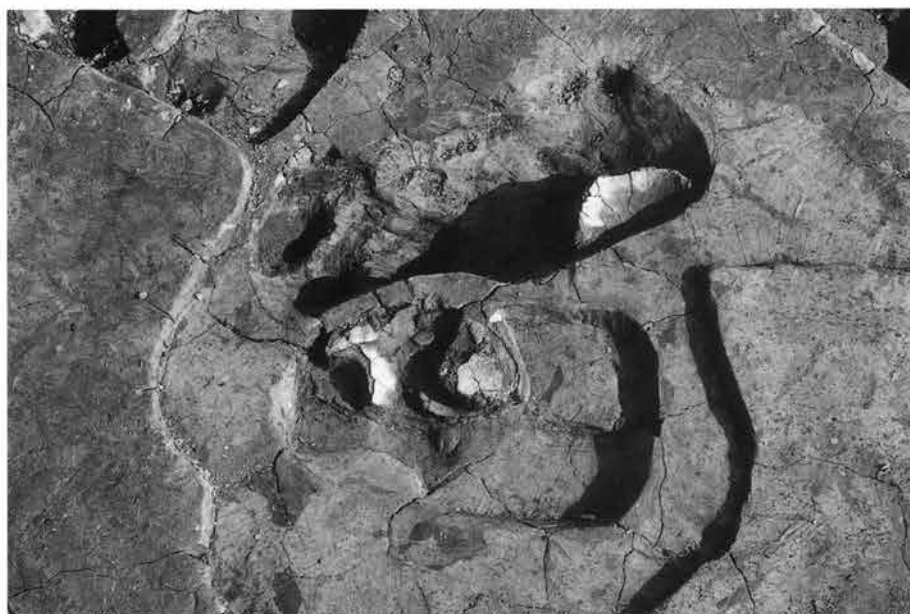
(2)土坑 S K143編み籠出土状況
(東から)



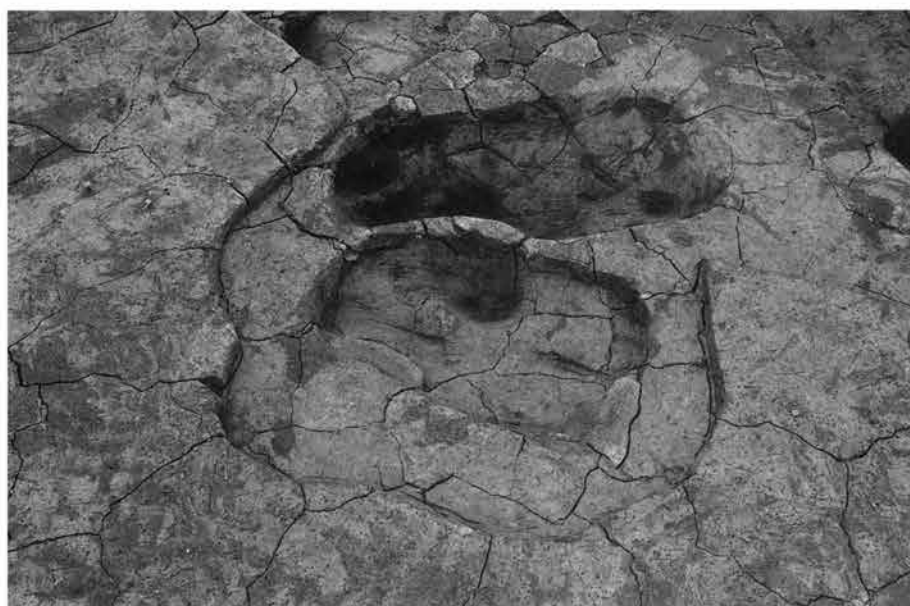
(3)土坑 S K150-1(南西から)



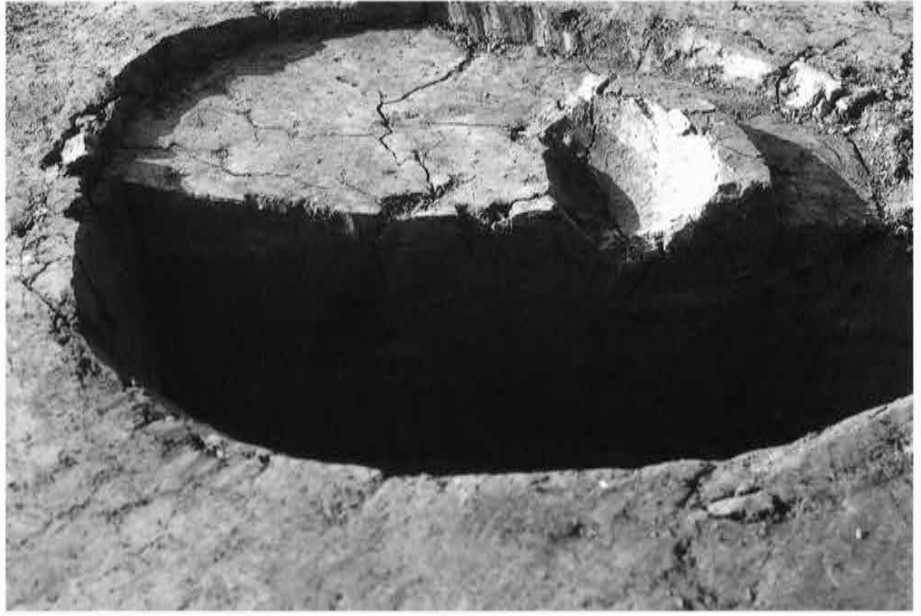
(1)土坑 S K150-2(北東から)



(2)土坑 S K158(上)・169(下)
(西から)



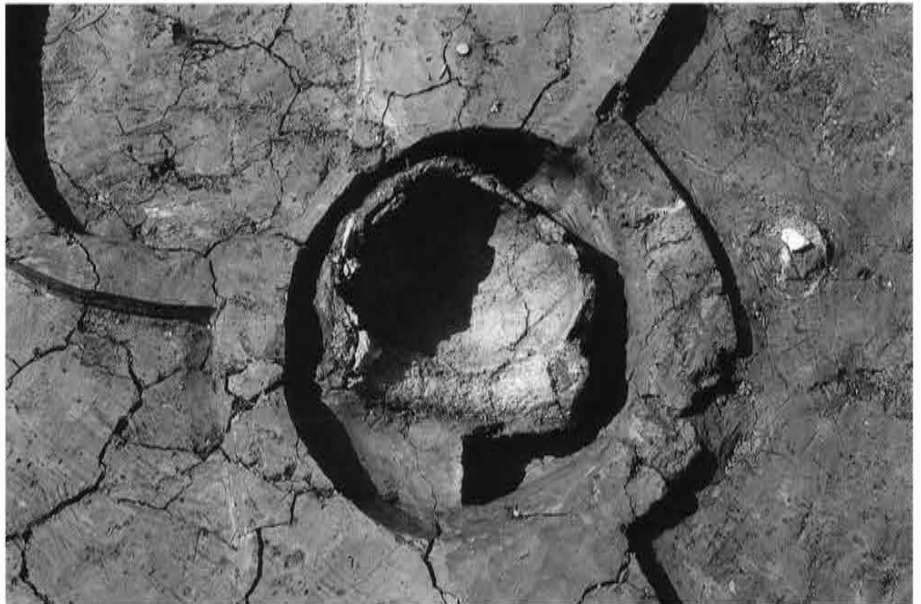
(3)土坑 S K158(上)・169(下)
(西から)



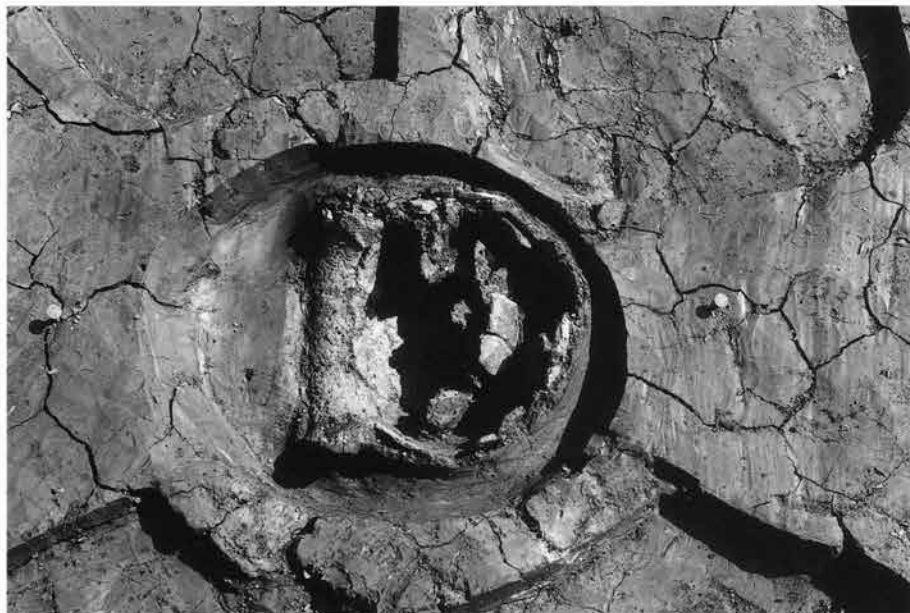
(1)土坑 S K167(南西から)



(2)土坑 S K176-1(南西から)



(3)土坑 S K176-2(北東から)



(1)土坑 S K176-3(北西から)



(2)土坑 S K273(南から)



(3)土坑 S K395(南東から)



(1)土坑 S K805(西から)



(2)土坑 S K806(西から)



(3)土坑 S K835(東から)



(1)第2トレンチ全景(北から)



(2)第2トレンチ全景(西から)



(3)第2トレンチ石列(西から)



7



11



18



23



28



29



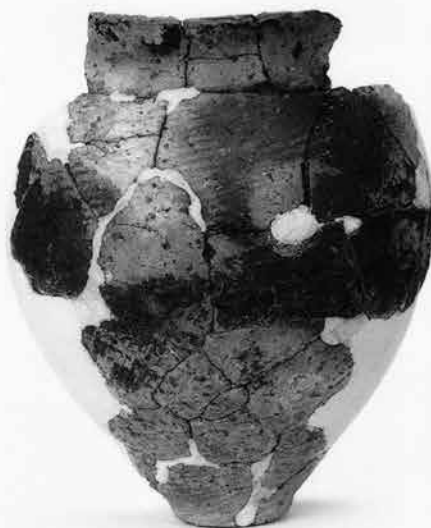
32



33



40



41



42



48



51



49



52



54



53



55



57



59



65



66



68



69



70



71



72



73



(1)調査地全景(東から)
C地区(上)・D地区(下)



(2)C地区全景(南から)
京都府教育委員会調査地(上)
当調査研究センター調査地(下)



(3)C地区 竪穴式住居跡SH50
(西から)

(1) 竪穴式住居跡 S H50 北西部
(東から)



(2) 竪穴式住居跡 S H50 南西部
(北から)



(3) 竪穴式住居跡 S H50
鉄器出土状況 (上が北)





(1)D地区全景(上が北)



(2)溝 S D02断面(北東から)



(3)溝 S D02土器出土状況(1)
(南東から)

(1)溝 S D02土器出土状況(2)
(南東から)



(2)溝 S D02土器出土状況(3)
(東から)



(3)溝 S D02土器出土状況(4)
(北東から)

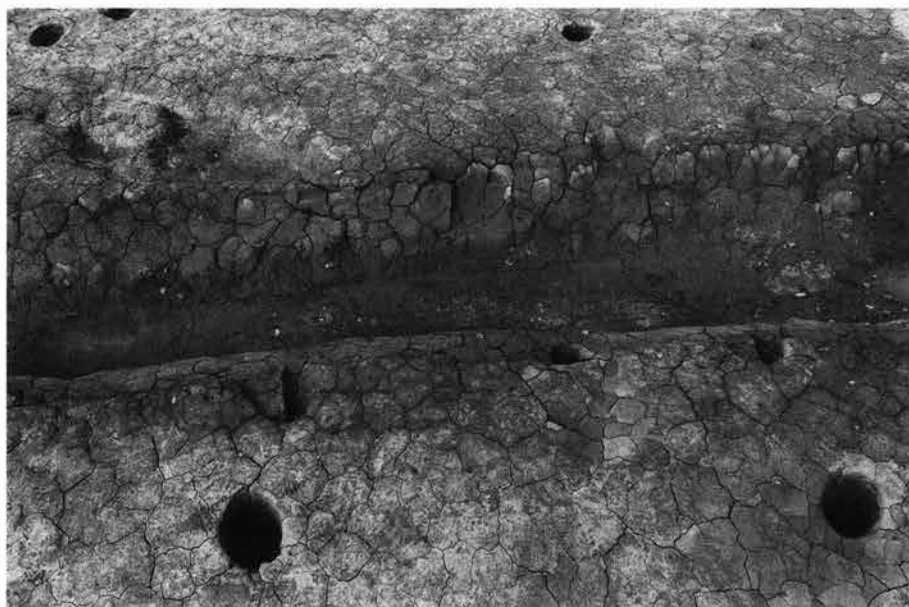




(1)橋状遺構 S X09(南東から)

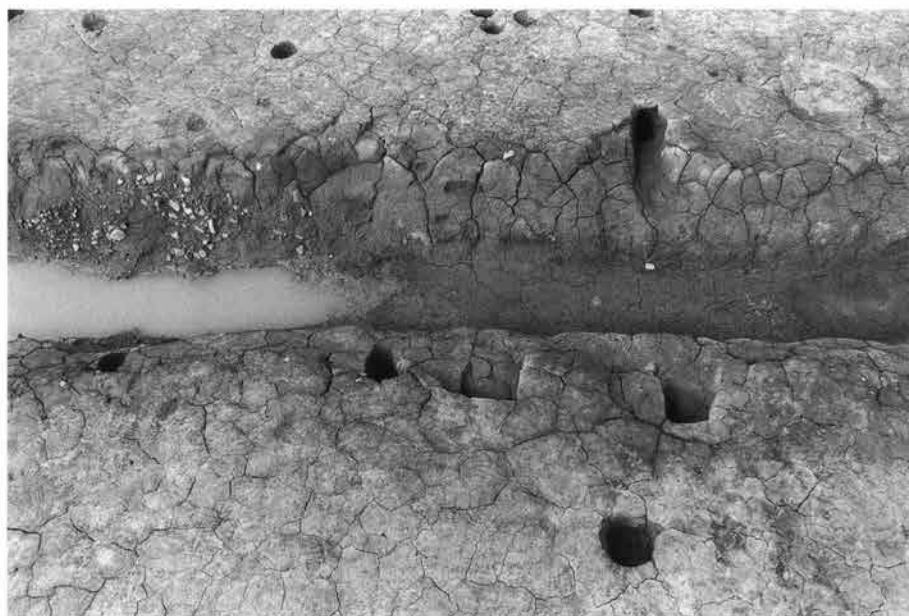


(2)橋状遺構 S X10(南東から)

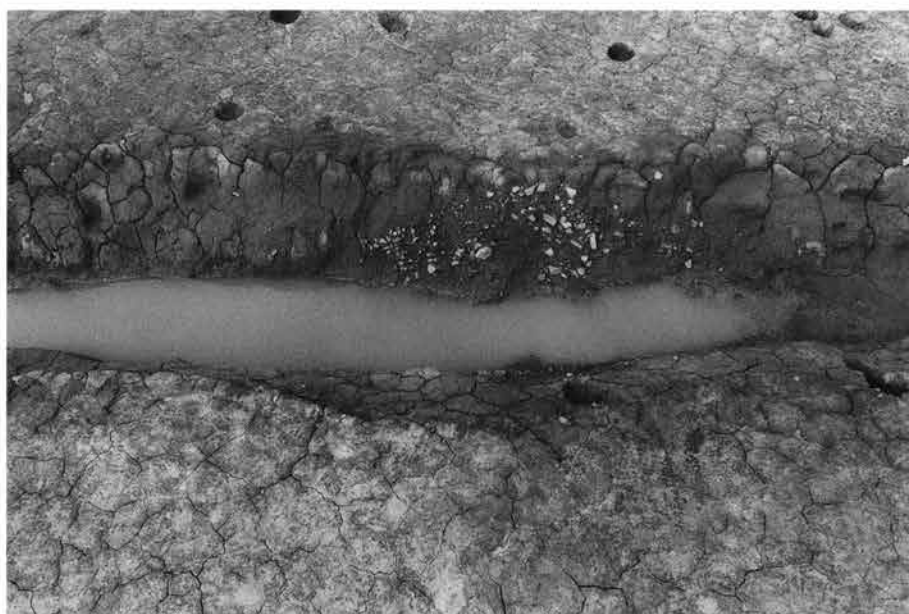


(3)橋状遺構 S X11(南東から)

(1)橋状遺構 S X12(南東から)



(2)橋状遺構 S X13(南東から)

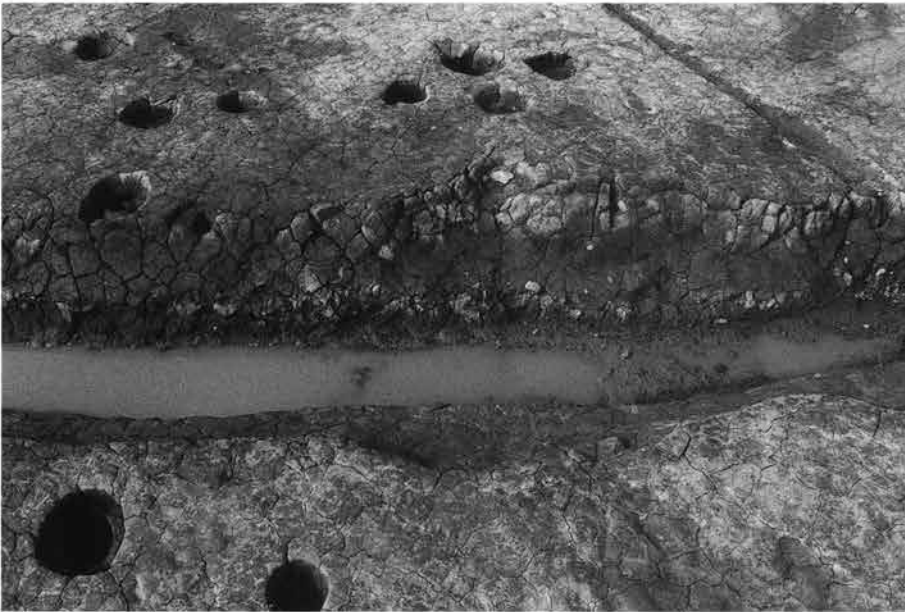


(3)橋状遺構 S X14(南東から)

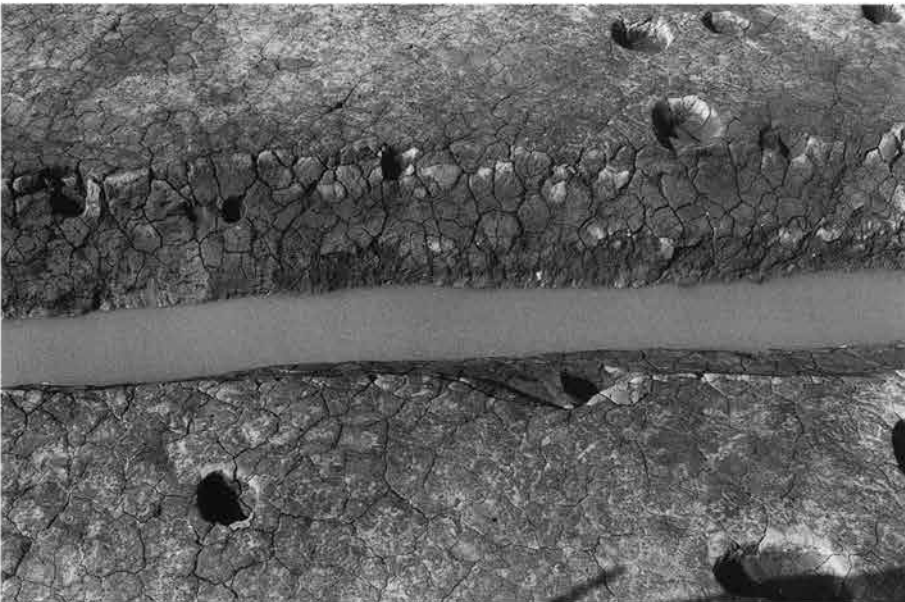




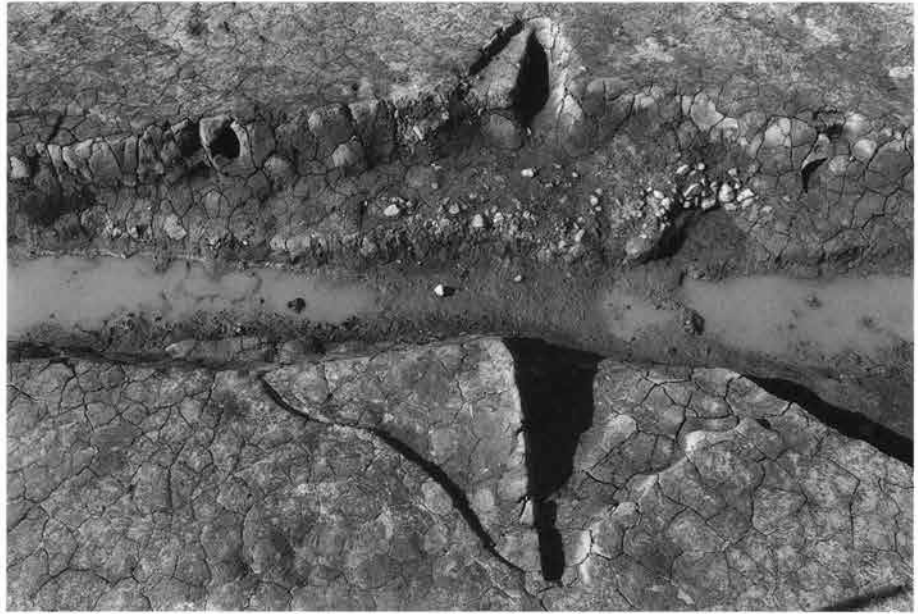
(1) 橋状遺構 S X 15 (南東から)



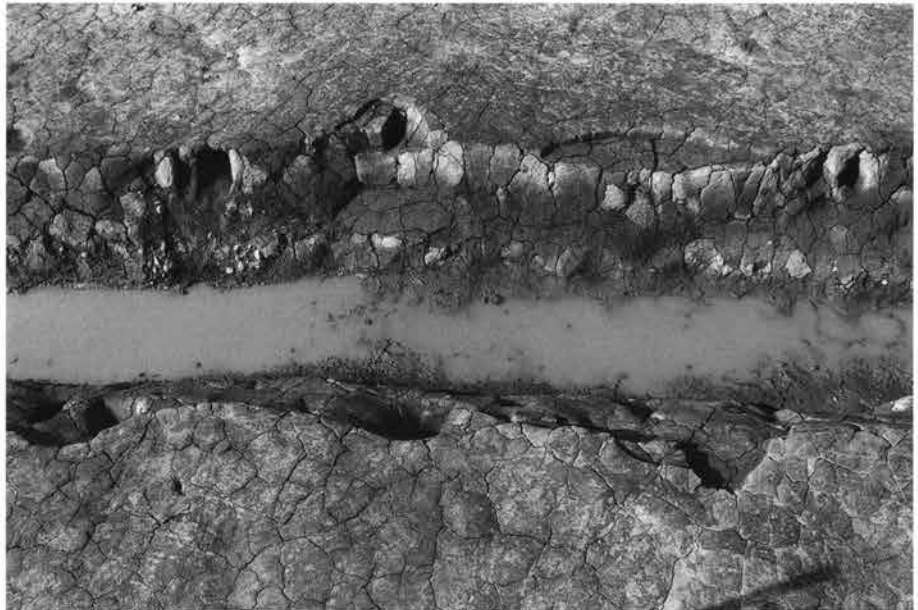
(2) 橋状遺構 S X 16 (南東から)



(3) 橋状遺構 S X 17 (南東から)



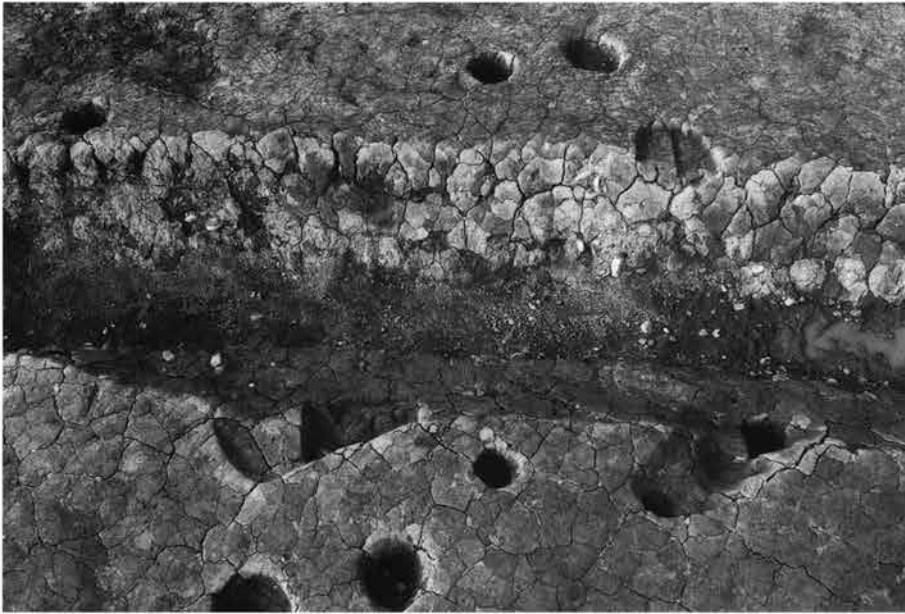
(1)橋状遺構 S X18(南東から)



(2)橋状遺構 S X19(南東から)



(3)橋状遺構 S X20(南東から)



(1)橋状遺構 S X21(南東から)



(2)橋状遺構 S X22(南東から)



(3)橋状遺構 S X23(南東から)

(1)橋状遺構 S X24(南東から)



(2)橋状遺構 S X25(南東から)



(3)掘立柱建物跡 S B05(上が北)





(1) 竪穴式住居跡 S H04(1)
(上が北西)



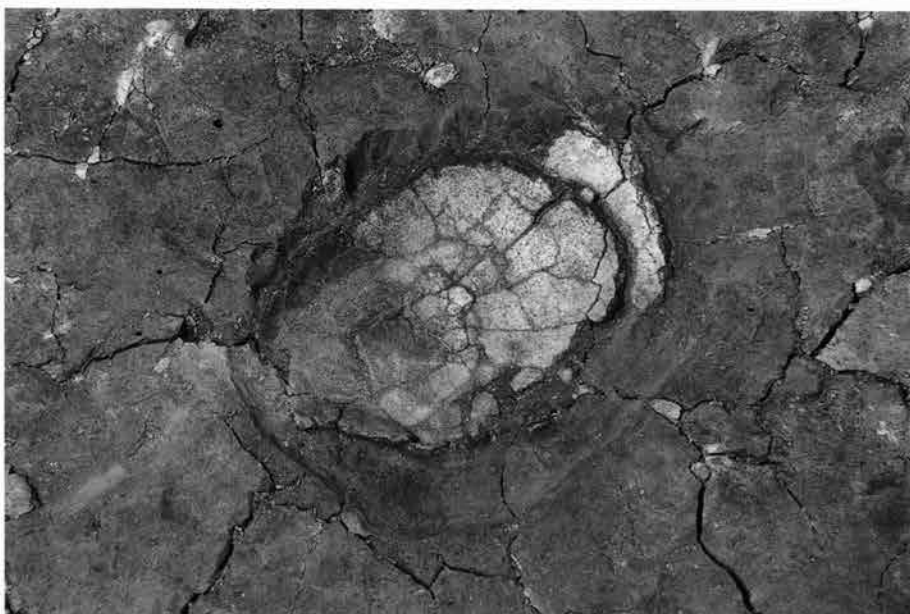
(2) 竪穴式住居跡 S H04(2)
(北東から)



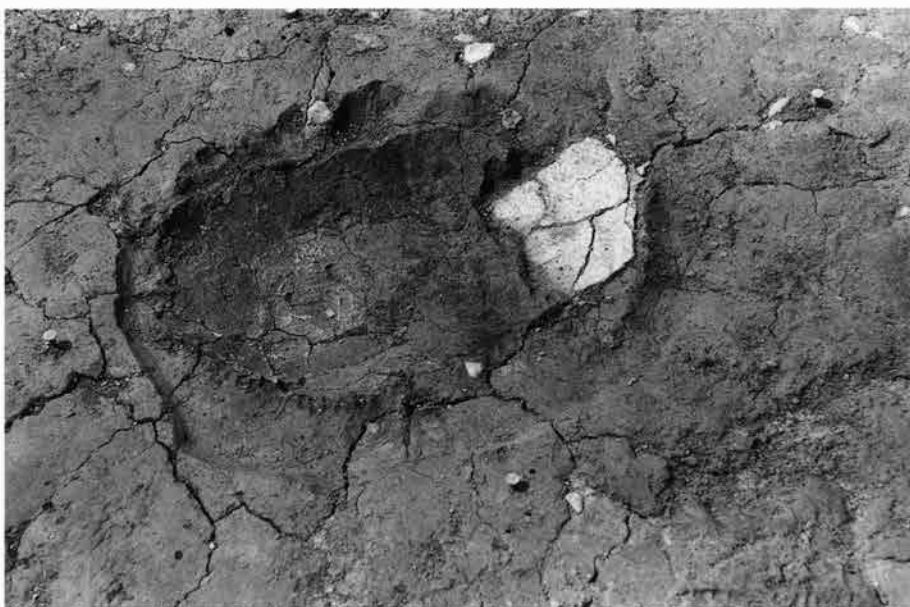
(3) 竪穴式住居跡 S H04(3)
(北東から)



(1)溝 S D03(北西から)



(2)甕棺墓 S X01(1)(南から)



(3)甕棺墓 S X01(2)(南から)



4



5



7



10



14



2



3



6



8



9



15



16



13



18



17



25



27



26



28



30



32



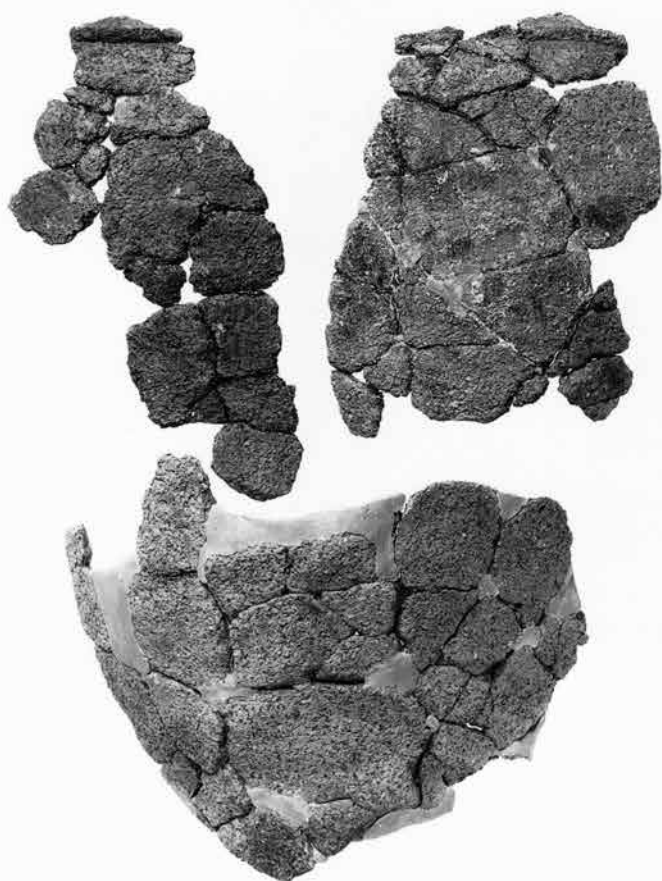
31



33



(1)出土遺物(3) 竪穴式住居跡S H04出土弥生土器 (番号は実測図番号に対応)



(2)出土遺物(4) 甕棺墓S X01出土縄文土器

報告書抄録

ふりがな								
書 名								
副書名								
巻 次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	第108冊							
編著者名								
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3				Phone 075(933)3877			
発行年月日	西暦 2003 年 3 月 28 日							
ふりがな	ふりがな	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積 m	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
きばしきたし ろあと	たけのぐんやさか ちようおおあざきば しこあざちはらざき	503	44	35° 40' 8"	135° 4' 46"	20020912 ～ 20021121	400	道路建設
木橋北城跡	竹野郡弥栄町大字 木橋小字千原崎							
しんどういけ こふんぐんだ いにじ	ふないぐんそのべ ちようおおあざしん どうこあざあまの	401	2	35° 7' 37"	135° 28' 38"	20020819 ～ 20030130	1,000	道路建設
新堂池古墳 群第2次	船井郡園部町大字 新堂小字天野							
いけがみいせ きだいじゅう にじ	ふないぐんやぎちよ ういけがみ	402	58	35° 4' 52"	135° 32' 22"	20011024 ～ 20020227	1,300	道路建設
池上遺跡第 12次	船井郡八木町池上							
あぜちいせき だいよんじ	かめおかしほづちよ うやまだ	206	41	35° 1' 36"	135° 35' 24"	20011126 ～ 20020307	2,140	ほ場整備
案察使遺跡 第4次	亀岡市保津町山田							
おおぶちいせ きだいよんじ	かめおかしほづちよ うほくそだ・どうの まえ	206	206	35° 1' 43"	135° 35' 1"	20020702 ～ 20030307	4,000	ほ場整備
大淵遺跡第 4次	亀岡市保津町ホク ソ田・堂ノ前							

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
木橋北城跡	集落 山城	弥生後期 中世	竪穴式住居跡 掘立柱建物跡	弥生土器	
新堂池古墳 群第2次	古墳	古墳前・中期	横穴式石室・木棺直葬墓	須恵器・土師器・鉄 器・土玉	T字形石室
池上遺跡第 12次	集落・墓地	弥生中期	方形周溝墓・竪穴式住居跡・ 溝・土壇・土坑	弥生土器・石器	円窓付土器
	集落	古墳中・後期	竪穴式住居跡・土坑・溝・掘 立柱建物跡	土師器・須恵器・鉄 器	
	集落	奈良・平安	掘立柱建物跡・土坑	土師器・須恵器・黒 色土器・瓦器	円面硯
案察使遺跡 第4次	生産遺跡	弥生後期	粘土採掘坑・土壇墓	弥生土器・木製農耕 具	
大淵遺跡第 4次	墓	縄文晩期	甕棺墓	縄文土器	
	集落	弥生前期	竪穴式住居跡・溝	弥生土器・石鏃	
	集落	古墳中期	竪穴式住居跡	須恵器・土師器・鉄 器	
	生産遺跡	飛鳥・奈良	用水路	須恵器	

京都府遺跡調査概報 第108冊

平成15年3月28日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Phone (075)256-0961 (代)